PL Sanari, Kentaro
765 Yokyoku taikan
S2
Suppl.

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/suykyokutaikanbe00sana

文學士佐成謙太郎著

謠曲大觀

別卷

東京 明治書院

LIBRARY
AUG 14 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
765
S2
Suppl.

例言

「謠曲大觀」末尾のこの卷には、關曲曲舞集と謠曲語句總覽とを收めました。その中、關曲曲舞は、大體第一卷乃至第五卷の完曲と同樣な方式に從ひましたし、なほその他必要な事項は、その解說に於て申し述べることとしましたから、こゝでは一切省略して、謠曲語句總覽の記載法に就てのみ申し述べることとします。

イ　採集語句

謠曲語句として採取しましたものは、

(一)曲柄に關する事項

曲名、その異稱、シテ・ツレ等の人名、主演場所。

(二)術語に關する事項

次第・道行・一聲・上歌・クセ・待謠・ワカの初句、舞の種類。

以上二項に關するものは、頁數の上、曲名の下に、シテ・次第などと標示しました。

(三)謠曲文中の固有名詞

人名・地名・神佛・社寺名等。

人名は姓・名・通稱・官名などすべてを擧げましたが、就中名乘を中心としました。同一の姓又は名で異人の竝ぶ場合には、その下に括弧をして、その名又は姓を記して、兩者を辨別しました。なほ同一名で數種の讀み方、同一人で數種の名のある場合には、「アマテルオホンガミ」の條に「テンセウダイジンをも見よ」、「義經」の條に「牛若・沙那王・判官・九郎參照」などと記して參照の便を考へて置きました。地名のうち、國名は省略しましたが、その他はすべてこれを擧げ、且その下に括弧をして府縣名を記し、他の語句と識別し易くしました。

(四)引用句

和歌・漢詩文・古典文・格言・古諺等。

すべて謠曲作者が意識的に引用したと思はれる語句は、これを摘出しました。就中和歌は上句・下句、漢詩は每句、いづれからでも引けるやうにしました。

(五)謠曲慣用語句・特殊文法

謠曲に特殊な慣用語句・語法は成るべく漏らさないやうに採集しました。尤

も同一語句・同一語法で、必ずしもすべてを擧げる必要がないと認めたものは、一二例を示すに留めたものがあります。「いひもあへねば……」「近頃……候」の如きが、その例であります。

（六）狂言詞

狂言詞は、首卷以下の例言に申し述べましたやうに、傳本によつて可なり著しい異同がありますが、本書に採用しました狂言詞で、謠曲研究の參考となるものは、やはりこれを摘出しました。但しこれらには、頁數の上に△印を施して、他の語句と辨別しました。

（七）その他

以上擧げましたものの外、凡そ謠曲語句として著しいもの、近世文藝に引かれてゐるもの、謠曲思想を研究する資料となるべきものは、なるべく漏らさないやうに努めました。

以上の語句で、同一曲に同一語句の二個所以上ある場合は、その最初の頁のものを擧げました。從つて和歌などは、總覽に擧げました頁以降で、なほ一度ぐらゐ出てくることがあります。殊に人名は、それがシテ・ツレなどである場合には、再

三出て來ます。しかし同一曲に數回出て來ましても、その前後の語句に何等か特殊の內容を持つてゐる場合には、幾度も繰り返して摘出して置きました。

ロ　採集語句の樣式

採取語句はすべて一語句一行に收められるやうに、一句十五字を限度として、その範圍內で出來るだけ內容を豐かにし、なるべくそれだけで獨立の價値・興味を持つやうに心掛けました。

なほ採取語句は、原形のまゝ揭げる外に、人名・地名・天文・動植物名・德目その他、一句の中の主要語からならば、どの語からでも引けるやうにして、檢索を容易にするなど、謠曲作者の道德觀・宗敎觀・自然觀又は歌枕などを一瞥し易いやうに注意しました。

そして、これらの語句には頁數の上に曲名の頭字を記して、必ずしも一一本文に當らなくても、その出所が識別せられるやうにしました。――萬一頁數に誤植があつた場合にも、その曲名によつて比較的容易に出所を探し得ることが出來ようと思ひます。――勿論曲名の頭字が同一である場合には、二字又は三字ま

で掲げました。その略語解は別に卷末「謠曲大觀總目錄」に附載することとします。

ハ　語句配列の順序

すべて第一字から末字までの嚴密な五十音順によつて配列しました。同じ五十音順と申しても、第一字又は第一二字の同一であるものは、これを一所に集めた方が便利のやうに思はれますが、實際は、漢字・假名の入り交つた、しかも語句の數の夥しいこの種のものでは、却つて混亂を來す恐れが多いので、さうした樣式を避けました。

假名遣もすべて歴史的假名遣・字音假名遣に從ひました。第一巻以下の本文では、謠曲特殊の發聲法を示す爲に、「鴛(ゑん)鴦(ノう)」「母(はワ)」「謠(うト)ふ」「榮(さコ)うる」などと記しましたが、それらは普通の通り「鴛(ゑん)鴦(アう)」「母(はハ)」「謠(うタ)ふ」「榮(さカ)うる」などとして配列しました。

それから、謠曲の讀み方と普通の讀み方と距りのある場合には、大體謠曲の讀み方に從つて、「高良の神」は「カハラノシン」、「金銀」は「コンゴン」、「眠藏」は「メンザウ」などに掲げて、念のために、「カウラノシン」に「カハラノシンを見よ」、「キンギン」に「コンゴンを

見よ」、「ミンザウ」に「メンザウを見よ」などと注意し、また檢索の便を考へて、「二月」を「ニグワツ」、「二星」を「ニセイ」、「百王」を「ヒヤクワウ」などに掲げた場合には、「ジゲツ」に「ニグワツを見よ」、「ジセイ」に「ニセイを見よ」、「ハクワウ」に「ヒヤクワウを見よ」などと記し、「萬歳樂」などの如く讀み方の兩樣に分れてゐる場合には、「バンザイラク」に「バンゼイラク・マンザイラクを見よ」、「バンゼイラク」に「マンザイラクをも見よ」、「マンザイラク」に「バンゼイラクをも見よ」などと記しました。かうして謠曲特殊の讀み方・普通の讀み方、いづれからでも見出されるやうにし、且類語には、人名の場合と同樣、「生死の海」（シヤウジノウミをも見よ）、「紅葉」（モミヂをも見よ）、「神職」（神主、社人參照）、「山伏」（客僧をも見よ）などと記して、相互參照の便に供へて置きました。

謠曲大觀 別卷 目次

例言
蘭曲曲舞集……一―四九
解說……三
阿古屋松……八
飛鳥川……九
淡路……一〇
近江八景……一一
隱岐院……一二
笠取……一六
香椎……一七
蛙……一九
賀茂物狂……二一
起請文……二二
徑山寺……二三
俱利伽羅落……二四
願書……二六
勸進帳……二九
現在經政……三〇
五輪碎……三二
西國下……三三
寶方……三六
更科……三九
四季……四一

島廻……四二
上宮太子……四四
卒都婆流……四六
當願暮當……四九
巨島……五〇
玉取……五二
土車……五三
鼓の瀧……五四
妻戸……五六
鶴龜……五八
徒然……五九
定家一字題……六二
東国下……六五
內府……六六
西濱八景……六九
博多物狂……七二
初瀬六代……七三
花筐……七七
反魂香……七八
美人揃……八〇
母衣……八一
松浦物狂……八三
弓矢立合……八五
由良物狂……八六
横山……九〇
和國……九五
謡曲語句總覽……一一八〇

閑曲曲舞集

解説

闌曲の名義

曲舞

謠曲にはシテ・ワキ等によつて演奏せられる戯曲的な完曲の外に、その一部分又は特別な歌詞を撰んで、謠ひ物とし、これを「闌曲(らんぎよく)」又は「曲舞(くせまひ)」と呼んで、特殊な取扱をしてゐるものがある。闌曲とは、從來の謠本には大抵亂曲と書き、又蘭曲とも記してゐるが、實は、世阿彌が五音（祝言・幽曲・戀慕・哀傷・闌曲）の一として擧げてゐる闌曲の意である。卽ち五音曲條々に、

闌曲者、高上の音聲なり。萬曲の習道をつくして、以上して、是非を一音にこんして、るいしてひとしからぬ聲をなす位也。歌道にも、十體のなかに、つよき位を云に、鬼をとりひしくたと申は、此位にてやあるべき。是は向去却來して、彌闌(いやたけ)てうたふ位曲也。此性位に至る、堪能にあらずはかなふべからず。其人に相應してしるべし。

又

凡闌曲に同音の共行はあるべからず、自他別にして、又知音の道あり。抑ゝ闌曲に共行あるべからざる曲道大事あり。其故は、安位座段して、なにとも卽座の氣轉によりて出來る曲たれば、同音の連聲、曲の道にあるべからず。

といつてゐる所のもので、祝言・幽曲・戀慕・哀傷等の上にある、最も美妙な、闌(た)けたる曲節をいふのである。一番の謠曲中で、最も曲節の勝れて豐かな、そして獨立性を多分に持つてゐるのはクセである。そこで、闌曲として、多くの場合クセが擇ばれる。闌曲を下懸諸流で曲舞といつてゐるのは、かうした事情から來て

ゐると思ふ。しかし闌曲又は曲舞として特殊の取扱をしてゐるものが、すべてクセであるとは限らない。三讀物や「弓矢立合」などはクセではない。大部分はクセであるが、しかし首卷の謠曲細說に述べたやうに、クリ・サシ・クセ・クセ上の四要素を具備したものには限らない。クリ・サシのないものも少くない。

闌曲又は曲舞は、古く光悅曲舞集以下、貞享・元祿・明和等、屢〻版行せられ、現在も五流ともにこれを行つてゐるのであるが、現行諸本にこれを版行してゐるのは、觀世・寶生・喜多の三流で、金春・金剛の二流には收めてゐない。乃ち本書でも現行諸本に版行してゐるものに就て、これを語釋・本文・口語譯の三段對照にして收めることとした。――闌曲・曲舞は謠ひ物として取扱つてゐるのであるから、型附はない。――

こゝに本書に收めたもの、即ち觀・寶・喜三流現行のものを表解すれば、左の通りである。――流名の項に◎印を施したのは、その流に現行のもの。完曲の名稱に括弧を施したのは、現存しないもの――

現行闌曲

	曲名	觀世	寶生	喜多	完曲	作者
あ	阿古屋松	◎	ナシ	ナシ	「阿古屋松」	
	飛鳥川	◎	◎	◎	飛鳥川	世阿彌
	淡路	ナシ	ナシ	◎	淡路	觀阿（三）
	近江八景	◎	◎八景	ナシ		
い	一字題	「定家一字題」を見よ				
を	隱岐院（一）	（◎鳥羽殿トモ）	ナシ	◎	隱岐院	

	曲名				別名	作者
か	隱岐院(二)	◎	ナシ	◎	同右	
	笠取	◎	ナシ	ナシ		
	香椎	◎	ナシ	◎	香椎	彌次郎(能)
	蛙	◎	ナシ	ナシ	蛙	
	賀茂物狂	◎	ナシ	◎	賀茂物狂	
き	起請文	◎	◎	ナシ	正尊	彌次郎
	徑山寺	◎	ナシ	◎	(徑山寺)	
く	倶利伽羅落	◎	ナシ	◎太刀掘	(太刀掘)	
	願書	◎	◎	ナシ	木曾	
	勸進帳	◎	◎	ナシ	安宅	小次郎(二)
け	現在經政	ナシ	ナシ	◎	御室經政	
こ	五輪碎	◎	ナシ	ナシ	(五輪碎)	
さ	西國下	◎	ナシ	◎		王林
	賣方	◎	◎	◎六元	賣方	世阿(能)
	小夜中山	「由良物狂」を見よ				
し	更科	◎	ナシ	ナシ	(更科)	
	四季	◎	◎雪月花	◎雪月花	雪翁	
	島廻	◎	◎	◎	島廻	

	上宮太子	◎	◎	◎	上宮太子	
せ	雪月花	「四季」を見よ				
そ	卒都婆流	ナシ	◎	◎蘇武	（卒都婆流）	
	蘇武	「卒都婆流」を見よ				
た	當願暮當	ナシ	ナシ	◎	（當願暮當）	
	太刀掘	「倶利伽羅落」を見よ				
	玉島	ナシ	◎	ナシ		
	正取	◎	◎	正執	王執	
つ	土車（一）	ナシ	◎	ナシ	土車	世阿
	土車（二）	ナシ	ナシ	◎	同右	
	鼓の瀧	◎	ナシ	ナシ	鼓瀧	世阿（能）
	妻戸	◎舞車トモ	ナシ	◎舞車	舞車	宮增（能）
	鶴龜	ナシ	◎	ナシ	巴園	小次郎（能）
	徒然	ナシ	ナシ	◎		兼好
て	定家一字題	◎	◎一字題	ナシ		
と	東國下	◎	ナシ	◎		玉林
	鳥羽殿	「隱岐院」を見よ				
な	內府	◎	ナシ	ナシ	內府	

に	西濱八景	ナシ	◎	ナシ		
は	博多物狂	○	ナシ	ナシ		
	八景	「近江八景」を見よ				
	初瀬六代	◎	ナシ	◎		
	花筐	ナシ	ナシ	○	花筐	世阿（能） 觀阿（二）
	反魂香	◎	ナシ	ナシ	あはでの森	世阿（能）
ひ	美人揃	◎舞車トモ	ナシ	ナシ	舞車	宮增（能）
ほ	母衣	ナシ	ナシ	○		
ま	松浦物狂	◎	◎	◎	松浦物狂	福來（二）
	舞車（一）	「美人揃」を見よ				
	舞車（二）	「妻戸」を見よ				
ゆ	弓矢立合	ナシ	ナシ	◎		
	由良湊	次項を見よ				
	由良物狂（一）	◎由良湊トモ	ナシ	◎	（由良物狂）	
	由良物狂（二）	○小夜中山トモ	ナシ	○	同右	
よ	横山	◎	◎	◎	（横山）	
り	六元	「寶方」を見よ				
わ	和國	○	ナシ	ナシ	和國	

解說

七

阿古屋松

觀

阿古屋の松は羽前國山形市の東南約一里の千歳山にあつた名松で、夫木抄卷二十九に「陸奥の阿古屋の松に木隱れて出づべき月の出でもやらぬか」(讀人知らず)、平家物語卷二にも見えてゐる。また申樂談儀に「西行、あこやの松、大かた似たる能なり」とあり、二百十番謠目錄に世阿彌の作としてある完曲「阿古屋松」のクセであるが、原曲は廢曲にしまつた。明和改正本に「阿古屋松」がある。

クセ『げにや雪降りて。年の暮れぬる時までも。終に朽ちせぬ松が枝の。老木になれども年々に。又若緑立枝の幾春の恵みなるらん。秦の始皇の御爵に。あづかるほどの木なりとて。異國にも本朝にも。今以て、この木を賞翫す

上千年まで。限れる松も今日よりは。君に引かれて萬代までの春秋を。送り迎へて御蔭山。高砂住の江、幸崎や。都の富士も東ぞと。三保の松

ほんとに、雪が降つて年の暮になつても、いつまでも葉の枯れない松は、老木になつても、年々歳々また若緑の生ひ立つた枝が張つて、實に永い「年」の恵みを受けてゐることだ。そして秦始皇から五大夫の御位を賜はるほどの名木であるから、外國でもわが國でも、昔はいふまでもなく、今日でもこの木を厚く賞翫してゐるのだ。

昔から「松は千年」といはれてゐるが、今後はわが大君にあやかつて、さうした制限をはなれ、萬々年までも年月を送り迎へて、大君の御恩惠に浴しよう。松の名木には、高砂・住吉の相生の松、幸崎

○立枝|高く生ひ立つた枝若緑立つといひかけた。
○始皇の御爵に|秦始皇が泰山で俄か雨に出遭つた時、松が枝をさしのべて雨を防いだ功により、五大夫に叙したとの故事。〔老松〕〔高砂〕參照。
○千年まで限れる松も今日よりは|拾遺集大中臣能宣の歌。下句―君にひかれて萬代や經ん―。
○御蔭山|山城國愛宕郡修學院村の東北隅。
○高砂住の江|高砂は播磨國加古郡、住の江は攝津國今の大阪市住吉の古名。「兩所の松を相生の松といふ。〔高砂〕參照。
○幸崎|近江國滋賀郡。そ

原栗原や。あねはの松の人ならば、都のつとに誘ひなん。あはれ阿古屋の松かげの名高きや、類ひなかるらん

○の一つ松は近江八景の一。○都の富士―近江富士の三上山ではなく、比叡山を指したのであらう。「竹生島」參照。○三保の松原―駿河國安倍郡。「羽衣」參照。○栗原やあねはの松の人ならば―伊勢物語の歌。下句「都のつとにいざといはましを」

の一つ松、それから都の富士も東の方であるか、更に東に進んでは、三保の松原、栗原のあねはの松。――あのあねはの松が人であつたならば、都への土産に誘つて行きたいものだが――さうした名木の中でも、阿古屋の松は殊に名高いものの一つであらう。

飛鳥川

觀（寶喜）

〔飛鳥川〕の一節（第一卷七一――七三頁）であるから、語釋、口語譯は省略す。

サシ「五月雨に物思ひ居れば時鳥。夜深く鳴きていづち行くらんと。詠みし心も今更に。身に白絲の夜ともなく。晝ともわかであだし世の。いつまでとてかながらへん。思へばあはれ胡蝶の夢に。遊ぶぞ今日の。現なる

クセ「御田屋守。今日は五月になりにけり。急げや早苗。老いもこそすれ。げにや五月雨の。晴れぬ日數もふり行くに。明日とないひそ飛鳥川の。水田の深緑たち連れいざや植ゑうよ。抑もいくばくの。田を作ればか時鳥。四手の田長を。朝な朝な呼ぶと。詠ぜしも眞なり。死出の山田の時過ぎて。

◎國々浦々わたる日の」金剛流完曲には「國々浦々廻る日の」とある。

この土に来り聲立てて。ほとゝぎす過ぐる世の中の。数々を知る故に時の鳥とは申すなり。上「五月山。猶々高く時鳥。鳴く音を添ふる戀もする。われも戀しき妹子の。行方も知らで足引の山路に迷ひ里に出でて。國々浦々わたる日の。積る三年の春過ぎて。夏もはや五月雨の。振分髪の玉葛。かかる業はいつか身に。なれ衣袖ひぢていざいざ早苗取らうよ

〔考　異〕

サシ「五月雨に物思ひ居れば……遊ぶぞ今日の現なる（喜ナシ）……上「五月山……國々浦々わた（喜めぐ）る日の

淡路（あはぢ）

喜

〔淡路〕の一節（第一巻一四七――一四八頁）であるから、語釋・口語譯は省略す。

（サシ）『然れば天に五行の神（しん）まします。木火土金水これなり。既に陰陽相分れて。木火土の精伊弉諾となり。金水の精凝り固まつて伊弉冊と顯る。然れども未だ世界ともならざりし前（さき）を伊弉諾といひ。國土治まり萬物出生する所を伊弉冊と申す。即ちこの淡路の國を。始めとせり。

（クセ）『さればにや二柱の御神の。おのごろ島と申すもこの一島の事かとよ。凡そこの島始めて。大八洲の國を作り。紀の國伊勢志摩日向並に。四つの海岸を作り出だし。日神月神蛭子素盞嗚と申す

は。地神五代の始めにて皆この島に御出現。中にも皇孫は日向の國に。天降り給ひて。地神第四の火々出見の御子を御出生げにありがたき世々とかや

〈上〉『天下を保ち給ふ事。すべて八十三萬。六千八百餘歳なり。かかるめでたき皇子達に。御代を。讓葉の權現と現れおはします。伊弉諾伊弉冊の神代も唯今の國土なるべし

近江八景

觀（寳）

寳生では單に「八景」と題す。近江八景はもと支那の瀟湘八景「平沙落雁、遠浦歸帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、遠寺晩鐘、漁村夕照」に擬へて、京都に近い西近江の八佳景を擇んだもので、古く光悦曲舞にもこの詞章を收めてゐるが、完曲はなかつたらしい。

サシテあれに見えたる比良の山。小松が原に吹く嵐は。山市の晴嵐もかくやらんと思はれ。眞野の入江の洲崎の眞砂は。雪かと見えて江天の暮雪に異ならず。あら面白やと見るほどに。いとど心の澄みわたる

向ふに見えるのが比良山で、その麓の小松が原に吹き渡る嵐は、かの瀟湘八景の山市の晴嵐かこのやうであらうかと思はれ、眞野の入江の洲崎の砂は雪のやうに白くて、江天の暮雪と變りがたく、あゝ面白いと見てゐると、實に心が晴々と澄み渡ることだ。

○比良の山—滋賀郡にある高山。
○小松が原—滋賀郡。比良山の麓の濱地。高島郡に隣接す。
○眞野の入江—滋賀郡眞野村、眞野川の川尻。古く萬葉集にも詠まれてゐる。

〔一〕堅田―滋賀郡、琵琶湖西岸の突出した所で、湖中に浮御堂がある。
〔二〕比叡山―山城と近江二國に跨り、山上に傳教大師の建立した延暦寺がある。
〔三〕辛崎―滋賀村、一つ松がある。
〔四〕鏡の山―蒲生郡の鏡山。

〔一〕堅田の浦の釣舟の。沖より家路に急ぐをば、遠浦の歸帆かとうち眺め雲の一むら殘れるは夜の雨の名殘か

上さて〔二〕比叡山の鐘の聲を。遠寺の晩鐘かとうち聞きそれ〔三〕辛崎の洲崎に。翅を垂るる沙鷗平沙の落雁にこれをなぞらへ。さて洞庭の月には。〔四〕鏡の山を喩へたり。誰を漁村の夕照に釣垂るる者とは。思ふべし釣垂るる者と思ふべき

堅田の浦の釣舟が沖からわが家の方へ歸つてくる様は、遠浦の歸帆のやうであり、空に雲の一かたまり消え殘つてゐる様は夜雨の名殘のやうに思はれる。

さて、比叡山の鐘の聲は、遠寺の晩鐘のやうに聞きなされ、辛崎の洲崎に翼を休めてゐる鷗は、平沙の落雁に似てゐる。それから、洞庭の秋月には鏡山の月を以てこれに擬へることが出來るが、殘る一つ漁村の夕照は夕日をうけて釣を垂れてゐる者を、それと思ふべきであらうか。

〔考異〕
上さて比叡山……漁村の夕照に釣垂るる者とは（寶や）思ふべし（寶き）釣垂るる……

隱岐院（一）　觀（喜）

「鳥羽殿」とも題す。「母には死別し、父には生別した女が、人商人に捉はれて、心も亂れ、隱岐島後鳥羽院の

御廟前で曲舞を舞つてゐると、父が行脚してこの所に來合はせ、父子再會したといふ〔隠岐院〕（能本作者註文に作者不明としてゐる）の一節で、觀世流ではこれを二つの闌曲に分けてゐるが、喜多流では分けてゐない。

サシ「承久三年七月八日の日。時氏鳥羽殿に參じて申しけるは。世はかうにて渡らせ給ひ候なり。御出家なくては叶ふまじと。情なく申し上ぐれば

クセ「力及ばせ給はずして。やがて御髪をおろされたり。綺羅の御姿を引きかへて。衲衣を御身に奉り御似せ繪をかかせ給ひて。七條の女院に參らせらる。女院。御覽じあへずして。修明門院と。御同車あつて鳥羽殿に。御幸ならせ給ひて。庭上に御車を。立てられければ一院も。御簾をかかげて。御顔ばかりさし出だして。ただとくとく御歸りあれとばかりにて。やがて御簾をおろされけり

上「ほどなき一日の御契り。御身も心も燃え焦が

承久三年七月八日、北條時氏が後鳥羽上皇の御所鳥羽殿に參つて、「御時勢はこのやうに變つてしまつたのでございますから、御出家遊ばさなくてはなりませぬ」と、情なくも、かう申し上げたので、上皇は御致し方もあらせられず、やがて御剃髪遊ばされた。これまでの御立派な御姿とはうつて變つて、墨染の僧衣をお召しになり、御肖像をお描かせになつて、御母七條女院にお上げになつた。女院はよくもこれを御覽遊ばしかねて、直さま、中宮修明門院と御同車で、鳥羽殿へ御幸遊ばされ、御庭に御車を御留めになると、上皇は御簾をおあげになつて、御顔だけお出しになつて、たゞ「早くお歸りになるやうに」とばかり仰せになつて、そのまゝ御簾をお下し遊ばされた。誠に僅かな御對面、ほんの一日ばかりの

○時氏—北條泰時の長子。
○鳥羽殿—後鳥羽上皇の御所。
○衲衣—僧の衣。
○七條の女院—後鳥羽上皇の御母、藤原殖子。
○修明門院—後鳥羽上皇の中宮、藤原重子。
○一院—後鳥羽上皇。後に御讓位遊ばされた土御門上皇を中院、順徳上皇を新院と申し奉るに對し、第一番目の院との意で申し奉る。
○ほどなき—短い時間の。

○煙のうちの苦しみ―焦熱地獄の苦しみ。

○新島守―增鏡卷二、後鳥羽上皇の御製「われこそは新島守よ隱岐の海の荒き波風心して吹け」

○前蹕の―前驅御警衛の。刊行會本には―前後の―とある。

れ煙のうちの苦しみも、かくやと思ひ知られたり。さらでだに、悲しかるべき。初秋の夕暮に、あはれすすむる。折節もあり。秋の山風吹き落ちて。御身にこそは泌み渡れと隱岐の海の荒磯の新島守は誰やらん

御對面、御別れの御悲しみに御心は燃え焦かれ、焦熱地獄の苦しみもこのやうであらうかと、お察し申し上げられるのであつた。時は初秋の夕暮、何がなくても悲しい感じを催させる季節で、さぞ秋の山風が、御身に泌み渡れと吹き落ちることであらう。あゝ波風の荒い隱岐島の新しい島守とおなり遊ばされたのは、どなたであらう。

「考異」

クセ二力及ばせ給はず……御歸りあれとばかりにてやがて（喜ナシ）御涙を……上ほどなき一日の御契り（喜名殘）……あはれすすむる折節もあり（喜れ）

隱岐院（二）

上御出家の後は、かくても鳥羽殿に、渡らせ給ふべきやらんと御心安く、思し召さるる處に、時氏又參じて。隱岐の國へ。流し奉る。

クセ二御供には男女以上五人なり。前蹕の。警衛もなく、百官の。扈從するもなし。庶人の旅に異な

後鳥羽上皇は御出家遊ばした後は、このやうた御姿とおたりになつたとは申せ、とにかく鳥羽殿にこのまゝおいて遊ばすことが出來ようと、お氣易く思し召したところ、時氏がまた參つて、隱岐國へお流し申し上げた。

その御供と申せば、男女合はせてたゞ五人だけで、この外には御遷幸の御前驅御警衛を申し上げるものもなく、役人達の

○蟠洞紫山——上皇・法皇の御所仙洞御所を喩へた語。

○風もたまらねば——風もさゝへられないので。

○拜所——伺候所。

○波ただここもとに——源氏物語須磨卷に「四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して」

○須磨の浦の昔——光源氏の故事を指す。「須磨源氏」參照。

らず。道すがらの御有樣誠にあはれなりけり。さてもこの島に。渡らせ給ひて。海士の郡刈田の鄕といふ所に。御座を構へたりければ。ただ海士人の住所に異ならず。昔は蟠洞。紫山のうちにして春秋を送り迎へて樂しみ盡くる事なし

上。今は苫屋の庇蘆垣の月洩り風もたまらねば。晝もつらし夜も憂し。女御更衣のその拜所もなく。月卿雲客の。拜趨もなし。ただ懷舊の御涙にまどろませ給ふ夜半もなければこの。波ただここもとに。立ちくる心地して。須磨の浦の昔まで。思し召し出ださる

供奉するものもない、たゞの平民の旅と變りのないものであつた。御道中の御有樣、拜察し奉るもあはれの限りであつた。さてこの隱岐島にお渡り遊ばされて、海士郡刈田鄕といふ所に御座所を設けたので、漁夫の住家と何の變りもないものであつた。昔は華やかな仙洞御所で年月をお過し遊ばして、御樂しみの盡きることもなかつたものが、今は苫屋の庇に蘆垣、月も家の內に洩れ入り、風もさゝへられないので、晝も夜も辛い御思ひの絶える時はない。女御や更衣の御伺候所もなく、上達部、殿上人の參內することもない。たゞ御思出の御涙にくれさせ給ひ、ろくろく御寢になる夜もないので、かの須磨浦のやうに、波がすぐこゝまで寄せてくる心地がして、須磨浦に謫流せられた光源氏の故事をお思ひ出しになるのであつた。

〔考異〕

上 御出家の後は（喜ナシ）かくこも鳥羽殿（喜この御所）に……思し召さるべき（喜す）處に……クセ

「御供には……御座（喜所）を構へたりければ……

笠　取

観

山城國宇治郡醍醐の笠取山を主題とし笠を緣とした曲で、貞享以降の曲舞集に收められてゐるが、これを採り入れた謡曲の完曲は見當らない。

サシ「即ち一花開けぬれば。天下は皆春なりしに。梅花雪を帶びて。白砂まじる青柳の。梢に遊ぶ花鳥の。翅にかける花の粧ひ。鶯の笠に似たればとて。梅の花笠とは。名づけ給ふ

クセ「御詠に青柳を片絲によりて鶯の。縫ふてふ梅の花笠との。叡感普き御神詠。末の世までも匂ひ久しき山高み。花の香久に殘ればとて。天の香久山と今に名高き山とかや。かやうに叡感普き花の姿をも。笠に似たりと詔ひ。妙なる梅

○一花開けぬれば—大集經に「一葉落天下秋知、塵起大地收、一華開天下春」

○梅花雪を帶びて—和漢朗詠集草春標の詩句に「梅花帶レ雪飛二琴上一、柳色和レ煙入二酒中一」

○青柳を片絲によりて鶯の—古今集、神遊の歌。下句「縫ふてふ笠は梅の花笠」。

○御神詠—神遊の歌であるからかういつた。

○花の香久に殘ればとて—附會說である。

○天の香久山—大和國磯城郡。〔三山〕參照。

「一つの花が咲けば、やがて天下すべてが春になる」といはれた梅の花は宛も雪のやうで、その花が散りかゝつてゐる雪白色のまじつてゐる青柳の枝に飛び遊ぶ鳥の翅に、この花の散りかゝつた様子が、鶯の笠に似てゐるといふので、「梅の花笠」とお名づけになつた。そして御詠に『青柳を片絲によりて鶯の、縫ふてふ笠は梅の花笠』と叡感遊ばされた。その御神詠の通りに、今日末の世までも梅花は久しい香を留めてゐて、殊に天の香久山では、この花の香が久しく殘つてゐるので、天の香久山と名づけられ、今に至るまで名高い山となつてゐるのである。このやうに叡感に預かつた花の姿を笠に似てゐると仰せになつたのは、梅の花の顔かたちが實に美

○御侍御笠と申せ宮城野の—古今集東歌。下句「木の下露は雨にまされり」
○三笠の山—奈良、春日神社鎭座の山。
○衣笠山—山城國葛野郡。
○しぐるともよも濡れじ—古今集在原元方の歌—雨降れど露も洩らじを笠取の山はいかでか紅葉そめけん—
○木の間の雨—木葉の散るのを雨に見立てたのである

花の顔ばせ色美しき粧ひまで。濃染の氣色匂ひ添ふ。柳の眉の飾りまでも。花笠の縫ふてふいとも畏き御詠なり

上「御侍。御笠と申せ宮城野の。木の下露は。雨にまさりて夕日影さすや三笠の山高み。ここにも薄青の。衣笠山も近かりき。所からこの山陰の秋の暮。しぐるともよも濡れじ。笠取山のもみぢ葉は。行きかふ人の袖のみぞ。照るや木の間の雨ならば拂はずと袖やほさまし

しくて、色までが紅の濃染に匂ひ滿ち、それに柳眉の粧ひを添へてゐるので、それで、「花笠を縫ふ」といふありがたい御詠を賜はつたのである。それから又—
『御侍御笠と申せ宮城野の、木の下露は雨にまされり』
と詠まれたその雨よりも盛んに夕日影のさす三笠山は高い山であるが、この山城國ではまだ紅葉の青い衣笠山も近くにある。わけても笠取山では笠をさしてゐるのであるから、この山陰の秋の暮に時雨が降つても、よもや濡れることはあるまい。それで、この山のもみぢ葉は、あたりを往き來する人の袖を照らすばかりで、散る木葉の音は雨のやうに聞えようとも、それを拂はないでも、袖の濡れることはあるまい。

香椎

觀（喜）

「藤原興範が勅命を奉じて九州香椎の濱に下り、浦人から、昔神功皇后がこの浦から三韓征伐に御出發になつた次第を聞く。やがて海部礒の童と川上明神豐姫が現れて、昔の神功皇后海上の舞歌の曲を奏す」といふ「香椎」

○皇后—神功皇后。
○龍女—龍宮の姫君。勅使が龍宮へ行つたのである。
○干珠滿珠—潮干珠と潮滿珠。
○豐姫—豐玉姫。神名帳注に風土記曰、人皇卅代欽明廿五年甲申、肥前國佐嘉郡、與止姫神在鎭座、一名豐姫、一名淀姫、乾元二年記云、淀姫大明神者、八幡宗廟之叔母、神功皇后之妹也、三韓征伐之昔者、得干滿兩顆而沒異敵之凶徒於海底」
○川上の明神—淀姫神社。佐賀市の北二里にある。
○阿度部の磯良—神功皇后の仰せにより、龍宮に使したと太平記卷三十九に見ゆ。
○志賀の島の明神—志賀海神社。筑前國粕屋郡志賀島にあり、磯良を祀る。
○鹿島の大明神—建御雷神を祀る。春日四座の一。
○かすひ—和名抄に「糟屋郡香椎郷、訓加須比」

（能本作者註文に觀世彌次郎作）の一節。光悦曲舞以下各種の曲舞に見ゆ。

サシ「皇后の宣旨の趣。審かに申しければ。日本は神國なり賢王たり。いかで宣旨を背くべき。しかも龍女の身として。人皇の后に立たん事。且は面目たるべしとて。この二つの珠を奉りけり

クセ「干珠といふは白き珠。滿珠といふは青き珠。豐姫と右大臣に。持たせ參らせて。三日と申すに龍宮を出で。皇后に參らせさせ給ひけりかの豐姫と申すは。川上の明神の御事。阿度部の磯良と申すは。筑前の國にては。志賀の島の明神。常陸の國にては。鹿島の大明神。大和の國にては。春日の大明神。一體分身同體異名顯れて御代を守り給へり。その後皇后は。仲哀天皇の御笏を。忝くも取り出だし。かすひの濱にある椎の木の三枝に。置き奉り給ひしに

（勅使阿度部磯良が龍宮に行つて、神功皇后の仰付の御宣旨を委しく申すと、日本は神國であり、その大君は賢王であらせられるのであるから、どうして仰せに背きませう。殊に龍女の身であり乍ら、天皇の后に立つのは名譽なことでございます といつて、この二つの珠を奉つた。その潮干珠といふのは白い珠であり、潮滿珠といふのは青い珠で、これを豐姫と右大臣とに持たせて、三日に龍宮を出て、神功皇后にお上げになつた。この豐姫と申すのは、川上明神の御事であり、阿度部磯良と申すのは、筑前國では志賀島明神と祀られた人で、常陸國に於ける鹿島大明神、大和國に於ける春日大明神と申すのも、これと同じ神で、一つの神が身を分け名を異にして所々に御出現になつて、わが大御代をお守りになるのである。

さてその後、皇后は畏くも仲哀天皇の御笏をお取り出しになつて、かすひの濱にある椎の木の三枝にお置きになつたところ、この椎の木の香りが諸方に薫り滿ちて、逆風の時でも風上へも薫り渡る樣は、

○香椎—粕屋郡にあり、その神功皇后を祀つた香椎宮は今官幣大社に列す。

上この香椎の香しきこと。諸方に充ち滿ちて。逆風にも薰ずなる。圓生樹にも異ならず、さてこそこの浦もとはかすひといひけるを。香しき椎の字に。書き改めて今までも。香椎の浦風の治まる。御代となるとかや

かの極樂の圓生樹と同じやうであつた。それで、この浦はもとかすひといつたのを、香しい椎といふ文字に書き改めて、今でも香椎といつて、吹く浦風ものどかに泰平の御代となつたのである。

〔考異〕

サシ「皇后の宣旨の趣密かに申し（喜仰せ上げられ）ければ日本は神國な（喜た）り……二の珠を奉り（喜捧げ）けり……クセ干珠といふは……三枚に置き奉り給ひしに（喜て。異國の合戰の守りの神とならせ給へと。口說き申させ給ひければ守り給ふべき由御返事あるぞありがたき）。上この香椎の……諸方に充ち滿ちて」（喜ナシ）……治まる御代となるとかや（喜ぞ久しき）

蛙

觀

「都人が住吉明神に參詣すると、蛙の精が現れ出で、歌物語をする」といふ〔蛙〕（作者未詳）の一節で、光悅曲舞以下諸本に見ゆ。

○壹岐の守―古今祕書に紀良貞のこととして、この傳を掲ぐ。
○あからさまなる―假初の一寸した。
○この宮路―住吉明神。
○苫屋の板庇―苫で屋根を葺き、板で庇を作つた粗末な家。‥庇‥久と同じ音を重ねた。
○思ひの妻―思ひの種（つま）を妻にいひかけた。
○きぬぎぬ―男女の朝の別れ。
○白波の―行方も知らずといひかけ、波の縁語泡をあはれといひかけた。
○ありし言の葉―古今祕書に「住吉の濱のみるめも忘れねばかなりし人に訪はれぬる」の歌を掲ぐ。
○閨曲―「和國」―參照。
○心を知れば―歌の意味が分れば。
○涙ながらも―疑ひも無しといひかけた。
○うろくづ―魚類。
○うたかた―泡沫。
○江による―江を縁にいひかけたのであらう。
○六趣―天・人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄の六道。
○四生―卵生・胎生・濕生・化生。
○花に鳴く鶯も―古今集序の「花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」に據つた。

サシ 昔壹岐の守何某と申しし雲の上人。あからさまなるこの宮路に。行き留まりし海士少女の。假の苫屋の板庇。久にもあらぬ一夜の契り。思ひの妻となりたるなり

クセ そのままきぬぎぬの。袖の名殘も引き留むる。心ならずも歸るさに。年月積る心地して。又この浦にたち歸り。問へば行方も白波の。あはれはかなき契りゆゑ。面影殘る海際に。立ち出でし夕まぐれ。濱の眞砂を踏み渡る。蛙の道の跡見れば。ありし言の葉あらはるる。心を知れば疑ひも

上 涙ながらもつくづくと。思へばよしな人界も。水の底なるうろくづや。藻に栖む蛙うたかたの。あはれ江による心なれば。六趣四生に廻り廻る。車の輪の如く。鳥の翅や花に鳴く鶯も同じ御法なる。言の葉を囀る蛙こそためしなりけれ

昔、壹岐守何某といつた殿上人が、一寸した縁で、この住吉明神に參詣して、泊まつた濱邊の粗末な家の海士少女と、永くもない、ほんの一夜の契を結んだのが、後々までの思ひの種となつた。そして、そのまゝ朝の別れを歎き、名殘を惜しんで引き留められたが、心ならずも振りきつて歸つたものの、別れた後の戀しさ、僅かな時間も、長い年月を經た心地がして、またこの住吉の浦にたち歸り、海士少女を訪ねたところ、その行方が分らない。あまりにも果敢ない契りであつたと、女の面影が眼に殘つて、夕暮、海際に出て見ると、濱の砂を踏んで行つた蛙の足跡があつて、それを見ると、先程の女の歌が現れてゐる。

その歌の意味が分れば、今更疑ふ餘地もなく、涙ながらにつくづくと考へて見れば、一體に人間界といふものがつまらないもので、水の底に栖む魚類、藻に栖む蛙と何の變りもないのだ。すべて果敢ない因緣で生まれ出たもので、卵生、胎生、樣々な方法で生まれ出た生類が六道を廻り廻るのは、車の輪が廻るやうなもので、翅のある鳥、花の枝にとまつて鳴く鶯も、同じやうに佛法の言葉を（法華經と）囀るのであつて、蛙がその同じ例に入るのである。

賀茂物狂

觀（喜）

［賀茂物狂］（第二卷七五四——七五五頁）の一節であるから、語釋・口語譯は省略す。

サシ　げにや　そのかみに祈りし事は忘れじを。あはれはかけよ賀茂の川波。立ち歸り來て行末の。誓ひを頼む逢瀬の末。あはれみ垂れて。玉鉾。かかる氣色を。守り給へ

クセ　われもその。幣に涙ぞかかりにき。又いつかもと。思ひ出でしままに。涙ながらに立ち別れて。都にも心とめじ。東路の末遠く。聞けばその名もなつかしみ。思ひ亂れし信夫摺。誰ゆゑぞ如何にとかこたんとする人もなし。都の長路におちぶれて。尋ぬるかひも泣く泣く。その面影の見えざれば。なほその方の覺束なく。三河に渡す八橋の。蜘蛛手に物を思ふ身は　いつくをそこと知らねども。岸邊に波を掛川。小夜の中山なかなかに。命のうちは白雲の又越ゆべしと思ひきや

上『花紫の藤枝の。幾春かけて匂ふらん馴れにし旅の友だにも。心岡部の宿とかや。蔦の細道分け過ぎて。着馴れ衣を。宇津の山現や夢になりぬらん。見聞くにつけて憂き思ひ。なほ懲りずまの心とて。又歸り來る都路の思ひの色や春の日の。雲居の影は一入の

上『柳櫻をこきまぜて。錦をさらす經緯の。霞の衣のにほやかに立ち舞ふ袖も梅が香の。花やかなりし春過ぎて。夏もはや北祭。今日又花の都人。行きかふ袖の色々に。貴賤群集の粧ひも。靡く袂なり

◎行末の―寶生流本では、「年月の」

◎かかりにき―刊行會本には「かかりにし」とある。

◎末遠く―刊行會本には「末ときく」とある。

◎三河に渡す―刊行會本には「三河にかゝる」とある。

◎雲居の影は―寶生流本では「光の影も」

○袂なりけり―刊行會本には「袂なるらん」とある。

けり

〔考異〕〔一〕さしげにやそのかみに……かかる氣色を守り給へ（喜ナシ）。〔クセ〕かれもその　思ひ出でしままに（喜に）……關の長路におちぶれ（喜ところ〳〵）て　三河に渡す（喜かかる）八橋の……上花皐の……蒼鬢お衣を（喜ナシ）……雲居（喜光）の影は一入の。上柳髮を……錦をさらす……の（喜に）……數十歳なりけり（喜るらん）

起請文（きしやうもん）

觀（寶）

觀世流では『正書』『勸進帳』とともに特に讀物と稱して『三讀物』の一節（第二卷一三六三—一三六四頁）であるから、語釋・口語譯は省略す。

下に敬つて白す起請文の事。上は梵天帝釋、四大天王、閻魔法王五道の冥官泰山府君。下界の地には、伊勢天照大神を始め奉り伊豆箱根、富士淺間、熊野三所、金峯山、王城の鎭守稻荷祇園賀茂貴船、八幡三所、松の尾平野。總じて日本國中の大小の神祇冥道請じ驚かし奉る。殊には氏の神、全く正尊討手に罷り上る事なし。この事僞りこれあらば、この誓言の御罰を蒙り、來世は阿鼻に墮罪せられんものなり。仍つて起請文かくの如し。文治元年九月日正尊と。讀み上げたり

〔考　異〕
敬つて白す……讀み上げたり（賣るは。身の毛もよだちて聞きたりけり）

徑山寺

觀（喜）

元文二年松岡友素寫本によれば、徑山寺僧無準の夢に菅丞相の靈が現れて、參禪の望を遂げたと語り、後に始皇帝の爵を蒙つた老松の精靈が丞相に從つて現れ出て、舞を奏する、といふ「徑山寺」の一節のやうであるが、（古今謠曲解題）、今は完曲は滅びて傳らない。闌曲は光悅曲舞以下諸本に傳はつてゐる。

上ゲ 涙を流す志。誠知られて早蕨の。手を合はせ禮拜し御僧の前に跪く。げにや昔も小林の。邊に立ちし雪の中の。芭蕉の僞りは。あらじと見えてあはれなり

クセ 然るに。宗門と申すは。一超直入如來地。その故を如何なれば。十界は悉くただ一心の上にあり。一念不生の直路には。佛も衆生もいづく

○早蕨の―蕨の嫩葉は手のやうな形をしてゐるから、手を合はせの序とした。○御僧―徑山寺の僧無準を指したのであらう。○小林―楚國小水の邊の林○雪の中の芭蕉―この故事「芭蕉」に作らる。○一超直入如來地―一足飛びに、直に如來の境地に入るとの意。○十界―十方世界。○一念不生―心中に一の妄念をも生じない境地。華嚴經要略に「一念不生、即名爲レ佛」

涙を流してゐる樣子、よく誠の志が現れ、手を合はせて禮拜し、お僧の前に跪いてゐる樣子、實に眞劒たもので、かの昔小水の林の邊に於ける雪中の芭蕉のやうにうそ僞りはあるまいと思はれて、まことにあはれである。

さて、この宗門といふのは、一足飛びに、直に如來の境地に入る敎へで、それはどうして出來るかといふに、一體この廣い十方世界も實はすべてわが心一つにあるもので、わが心中に一つの妄念をも起さなければ、一切無差別で、佛、衆生といふ差別はどこにもあらう筈がないのであ

にかさてあるべき。これぞ誠の空界。邪念妄に起るとも。それをも敢て拂はじ

上絲を亂せる柳は綠なる色をそのままに。錦を織るてふ花は又紅の色の外ぞなき。かやうに悟ればただ未悟の時に違はず。この未悟に至るをこそ如來地とは申すなれ

る。これぞ誠の空寂の世界であつて、かう考へて見れば、たとへ邪念妄念が起らうとも、敢て拂ひ退ける必要もないのである。

かの絲を亂したやうな柳の枝は、その綠の色のまゝ、錦を織つたやうな花は、その紅の色のまゝに、すべてであるがまゝに、差別即無差別と觀ずるのである。このやうに悟れば、結局、未だ悟らなかつた時と違ひがないのであつて、この未だ悟らない時と同じ心地に達するのが、如來の境地といふのである。

○柳は綠なる――禪家の常套語「柳綠花紅眞面目」に據つた。

○錦を織る――古今集素性法師の歌「見渡せばなぎ柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」に據つた。

〔考異〕

上「涙を流す志……小林の邊」（喜ちまた）に立ちし……クセ「然るに……その故を」（喜ナシ）如何なれば（喜凡そ）十界は……これぞ誠の空界」（喜ナシ）邪念妄に……それをも敢て」（喜も亦）拂はじ（喜な）。上「絲を亂せる……錦を織るてふ」（喜かざれる）花は……如來地とは申すなれ」（喜り）

倶利伽羅落

觀（喜）

喜多流では「太刀掘」といふ。古今謡曲解題によれば、元文二年松岡友長寫本に「越中の蓮沼何某が礪波山で畑を開かせてゐると、或日見事な太刀を掘り出した者がある。喜んで家の寶としようとしたところ、あこねの前

◎さてもわが主—以下「禮拜を奉る」まで觀世流にはない。
○木曾殿—義仲。この時の事、源平盛衰記卷廿九「新八幡願書事」「礪並山合戰事」に委しく見ゆ。
○礪波山—越中加賀の國境にある。
○帝釋修羅の思ひ—修羅王が帝釋天と戰つて日月を取らうとした佛說、太平記卷十二に見ゆ(「第六天」參照)。
○五月半ば—五月十一日の出來事である。
○かたそぎ造り—社殿の棟に組交へた千木の片端を削いだのをいふ。

が俄かに狂氣になつて、葵御前の靈がのりうつり、義仲が倶利伽羅落しの昔を語る」といふ〔太刀揃〕の完曲〔能本作者註文に作者不明〕があつたが、關東大震火災に燒失して、この闘曲との關係を明かにし難い。觀世流では前半を省略してゐるから、喜多流のものをも本文に併せ掲げる。

上さてもわが主木曾殿は。五萬餘騎を引率し。この礪波山の北の林に陣を取る。平家もその勢十萬餘騎。雲霞の如くたなびけり。ここには源氏かしこには平家。兩陣相さへ龍虎の威を揮ひ。獅子象の勢ひ。帝釋修羅の思ひをなし。月日を取るべき勢ひたり。まづ味方よりの謀には。軍は明日と觸れければ。敵は眞と心得て。その夜はともに陣を取る

クセ「さる程に味方には、無勢にて多勢を亡ぼすべきその謀をめぐらすに、木曾殿の御陣より。東の方を見渡せば。頃は壽永二年。五月半ばの事なるに。夏山の茂き青葉の蔭よりも。朱の玉垣ほの見えて。かたそぎ造りの社壇あり。問へ

さてわが主君木曾義仲殿は五萬餘騎を引き連れて、この礪波山の北の林に陣を取つた。一方平家の方でも、軍勢十萬餘騎が雲か霞のやうに寄り集まつた。こちらの方は源氏、あちらの方は平家と、兩軍が相對して、たとへば龍と虎か、獅子と象か、或は帝釋天と修羅王と闘つて日月を奪ひ合ふやうな、盛んた恐ろしい勢ひであつた。わけてもわが味方源氏側の謀としては、「戰ひは明日の事にしよう」といひ觸れさせたので、敵の方では、これをほんとと思つて、その夜は兩方とも陣を取つた。

その間に、味方では、少い軍勢を以て多勢の敵を亡ぼすべき謀を考へたが、木曾殿の御陣から東の方を見渡すと、丁度その頃は壽永二年五月中旬のことで、夏山の生ひ茂つた青葉の木の間から、朱色の玉垣がほのかに見えて、かたそぎ造りの社殿がある。「あれは何社か」と尋ねると「源氏の御氏神の八幡大菩薩、埴生の宮です」と答へる。木曾殿はこれを聞い

○八幡大菩薩―源氏の守護神。
○埴生の宮―礪波郡埴生村の護國八幡宮。
○覺明―義仲の祐筆。
○高紐―鎧の引合せの紐。
○引合せ―鎧の胴前後を引締め合はす所。
○疊紙―ふところ紙。
○矢立―矢立硯、箙の中に入れて置く小さな硯箱。
○願書―その文「願書」に見ゆ。
○もとは南都の住侶―盛衰記に「此僧は本は勸學院の文章博士、進士藏人通廣といひける者也、出家して西乘坊信救と名をつきて、南都に便宜の物書して居たり」
○上矢―上差の矢。普通の征矢の外に、箙の表に指し添へる鏑矢。
◎さる程に―以下觀世流にあり、本文もこれに據る。

ば當家の御氏神。八幡大菩薩埴生の宮と申すなり。木曾殿頼もしく思し召し。さてはこの軍に。勝たんことは決定なり。急ぎ社壇に參りて。願書をこめんと宣ひ。覺明とこそ召されけれ。覺明仰せに從ひ。兜を脱ぎ高紐にかけ。鎧の引合せより疊紙を取り出だし。箙なる矢立の筆を墨にそめ。願書を書いて讀み上ぐる

上抑もこの覺明は。もとは南都の住侶にて。法相儒學その外和漢の才覺ありしかば水を流す如くに。願書を書いて讀み上ぐる。木曾殿悦びおはしまし。御鏑矢を寶前に。參らせさせ給へば。御供の兵どもも上矢の鏑を一つづつ。かの寶前に捧げて。南無歸命頂禮八幡大菩薩とて皆禮拜を奉る

(クセ)さる程に夜に入れば。敵に大勢と見えん

て頼もしく思はれ、それではこの戰ひは勝つに違ひない、急いでお社に參つて、願書を奉らう」と仰せられ「覺明」とお召しになつた。覺明は仰せに從つて、兜を脱いでこれを鎧の高紐にかけ、鎧の引合から懷紙を取り出し、箙の矢立硯を出して、筆を墨にそめ、願書を書いて讀み上げた。

一體この覺明といふのは、もとは奈良の僧で、法相宗の佛學、儒學は勿論のこと、その外和漢の學問に通じてゐたから、立板に水を流すがやうに、わけもなく願書を書いて讀み上げたのである。木曾殿はお悦びになつて、御鏑矢を神前に供へられると、お供の武士も、上差の鏑矢を一つづつ神前に捧げて、「謹んで八幡大菩薩を禮拜し奉る」と、皆禮拜した。

やがて夜になると、敵に多勢と見せかけ

○今井の四郎―兼平。義仲の乳母子。〔兼平〕參照。

○倶利伽羅が谷　礪波山中にある。

ために千頭の牛を集めて皆角の先に火をともし。追つ拂ひ給へば、光虚空に充ち滿ちて。五月闇。覺束なくも暗き夜も暗からぬ星を集むれば敵大勢と心得。左右なうかかり得ざりしを。今井の四郎六千餘騎上大手より鬨をつくれば、後の林の五萬餘騎。一度に鬨を。どつと合はすれば敵取るものも取りあへず倶利伽羅が谷にばつと落つ馬には人。人には馬。落ち重なり落ち重なり。七萬餘騎は倶利伽羅が。谷の深きをも。淺くなる程埋めたりけり

るために、千頭の牛を集めて、その角の先に火をともし、これを追ひ放たれると、その火の光が空中に充ち滿ちて、今は五月闇の、もののあやめも見分け難い暗い夜であるに、明るい星を集めたやうに照り渡つたので、敵は大勢だと思つて、容易には討つてかゝらなかつた。

その中を、今井四郎が六千餘騎を率ゐて、正面から鬨を作つて攻め入り、後の林にゐる五萬餘騎がこれに合はせて、一度にどつと鬨を作つたので、敵は取るものも取り敢へず、倶利伽羅が谷にばつと落ちた。馬の上に人、人の上に馬と、幾重にも重なり合つて、七萬餘騎が落ちたので、さしもの深い倶利伽羅が谷も淺くなるほど埋まつた。

〔考異〕

クセ、さる程に夜に入れば（喜く）……暗き夜も（喜に）暗からぬ……敵大勢と心得（喜こ）左右なうかかり得ざりしを（喜に）

願書

觀（寶）

觀世流では、「勸進帳」「起請文」とともに讀物と稱す。〔木曾〕の一節（第二卷八二一―八二二頁）であるから、語釋・口語譯は省略す。

上『何々歸命頂禮八幡大菩薩は。日域朝廷の本主。累世明君の曩祖たり。寶祚を守らんが爲。蒼生を利せんが爲に。三身の。金容を顯して。三所の權扉を。押し開き給へり。ここに頻りの年よりこの方。平相國といふ者あつて。四海を掌にし。萬民を。惱亂せしむこれ。佛法の仇。王法の敵なり抑も。曾祖父前の陸奥の守。名を宗廟の。氏族に歸附す。義仲苟も。その後胤として。この大功を起すこと。たとへば嬰兒の蠡を以て。巨海を測り。蟷螂が斧を取つて。隆車に向ふ如くなり。然れども君のため國の爲にこれを起すのみなり。伏して願はくは。神明納受垂れ給ひ。勝つことを究めつつ。仇を四方に退け給へ。壽永二年五月日と。高らかに讀み上げたり

上『義仲願書に鏑矢を神前に捧げ申せば。御供の兵ども。上矢の鏑を一つづつ。かの寶前に捧げて。南無歸命頂禮。八幡大菩薩とて皆禮拜を參らする

◎義仲願書に―以下〔木曾〕にはない。但し前掲「俱利伽羅落」に同文がある。

〔考異〕

觀寶・全く同じである。

(う)闇の人々――以下刊行會本にはない。

勸進帳

觀（寶）

觀世流には「願書」「起請文」とともに讀物と稱す。〔安宅〕の一節（第一卷九二―九三頁）であるから、語釋・口語譯は省略す。

詞「もとより勸進帳はあらばこそ。笈の中より往來の卷物一卷取り出だし。勸進帳と名づけつゝ。高らかにこそ讀み上げけれ。それつらつら。惟んみれば大恩教主の秋の月は。涅槃の雲に隱れ。生死長夜の長き夢。驚かすべき人もなし。こゝに中頃帝おはします。御名をば。聖武皇帝と。名づけ奉り最愛の。夫人に別れ。戀慕やみがたく。涕泣眼に荒く。涙玉を貫く思ひを。善途に翻して盧遮那佛を建立す。かほどの靈場の。絶えなん事を悲しみて。俊乘坊重源。諸國を勸進す。一紙半錢の。奉財の輩は。この世にては無比の樂に誇り。當來にては。數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首。敬つて白すと天も。響けと讀み上げたり

上闇の。人々肝を消し。恐れをなして通しけり恐れをなして通しけり

〔考異〕

詞もとより勸進帳は……勸進帳と名づけつつ（寶ナシ）高らかにこそ…… 上闇の人々肝を消し…… 通しけり（寶ナシ）

現在經政

喜

平家都落の時、平經政が御室御所に參つて、青山の琵琶を返して、桂川に泊つてゐると、行慶が訪れて來て惜別の宴を催す、といふ完曲（御室經政）（別名「現在經政」）の一節。

○前途程遠し—和漢朗詠集後江相公の句「前途程遠、馳二思於雁山之暮雲一」を引いた。
○せんやう—分らない。
○北野の神の正體—北野天神が未だ人間であつた時。
○家を離れて—菅家後集「離レ家三四月、落涙百千行、萬事皆如レ夢、時々仰二彼蒼一」を引いた。
○淺茅が原の—平家物語「實定の今樣—古き都を來て見れば、淺茅が原とぞ荒れにける、月の光は隈なくて、秋風のみぞ身にはしむ」を引いた。

サシ 前途程遠し。思ひを雁山の夕の雲に馳つす—魂を。せんやう別離のうちに傷ましむ

クセ 心づくしの旅行の道。これやこの北野の神の正體の。そのかみや家を離れて三四月

上 落つる涙は百千行。萬事は皆夢と覺むる夜の月の都。古里は淺茅が原の。秋風のみながら草や枯れて絶えなん

これから先、道のりの遠いことで、行く先々の事が思ひやられ、別れの悲しみを—思へば、魂も消え入るばかりである。何かにつけて心を傷ましめる旅の道、かの北野天神が御存生のその昔、お詠みになつたやうに、わが家を離れて三四月も過ぎれば、望郷の悲しみに、涙は止め度もなく流れ落ちて、世の中のことはすべて夢だと感じさせるのだ。しかもその故鄉、月の都は淺茅が原のやうに荒れ果てて、秋風が吹き渡るばかりで、その淺茅の草までが枯れ絶えてしまふことだらう。

五輪碎

観

「ほのぼのと明石の浦の」の和歌を、地水火風空の五大五輪に附會して説いたもので、關東大震火災に燒失した元文二年寫本「五輪碎」はこれの完曲であつた。貞享曲舞以下の曲舞本に傳はつてゐる。

○ほのぼのと―古今集人丸の詠。善本「ほのぼのと明石の浦の」に「初生娑婆世界」、「島隠れ」に「四魔滅れ」の字を充つ。

○三世不可得―過現未の三世を通じて容易に得られない。

○阿字門―阿は梵語四十二字の第一で、最貴との意。以下胎内十月を南無阿彌陀佛に割り充ててゐる。

○八葉の月―八葉は蓮華の花辦の數。

（サシ）ほのぼのと明石の浦の朝霧に。島隠れ行く舟をしぞ思ふ。舟をしぞ思ふと詠まれたるは。これ三世不可得の道理なり。ほのは白しぼのは赤し。白骨は父の恩。赤肉は母の恩。赤白二體なり

（上）阿字門は即ち父母の恩徳なり。さればほのぼのと和合して。母の胎内に宿り始むる。月の間を南無といふ

（クセ）二月に八葉の月。かの胎内に。人身きたる所。無明。闇夜のうちに。光明幽かなるが如し。

「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島隠れ行く舟をしぞ思ふ」と詠まれた歌は、過去現在未來の三世を通じて容易に得られない貴い道理を示したものである。即ち「ほの」とは白、「ぼの」とは赤、白い骨は父の恩、赤い肉は母の恩によつて出來るもので、「ほのぼの」は赤と白、父と母の二體を示したものである。

月十箇の中に最も貴いものの阿字門は即ち父母の恩徳である。そこで、「ほのぼの」と父母和合して、母の胎内に宿り始めてから、生まれるまでの十月を南無といふ。まづ初め二月と、あとの蓮華八葉に擬ふべき八月、この間胎内にあつて、人のからだが出來るのであるが、その間無明で闇夜のやうに光明が幽かとない。二月に

三月にりやうてんごす來る所。三鈷の體。彌の字の形なるをば朝霧とは詠まれたり。四月に成就すれば地水火風の四大。有相。臨終をつかさどつて。陀の字の形をば島隱れ行くと詠まれたり。五月に人形すれば無作。三身の法佛は卽ち法の如くなり。有相無觀。三昧なるをば舟をしぞ思ふと詠まれたり

上されば身體五臟六腑を父母に受け。敢て毀ひ傷らざりせば。三十二相八十種好の佛。南無阿彌陀佛これなり。諸身は。己心の彌陀唯心の。淨土とも觀じたり。又。天台伽訶羅縛に。表德して信心妙法蓮華經とも釋したり。佛未出世。父母未生以前。本來の面目もこの歌の心なり。さてこそ。佛法和歌の道。神慮に叶ふと詠まれたり

なつて「りやうてんごす」の出來るのは、三鈷、菩提心の姿で、彌の字に相當するのを、「朝霧」と詠まれたのである。四月になると、地水火風の四大が調ふのであるが、これがやがて形象の成立と形象の破滅とを掌るもので、陀の字に相當するのを、「島隱れ行く」と詠まれたのである。五月になつて人の形が整へば、無念無想、法報應の佛身がかたの如く出來上る。この一切の現象に對して無念無想悟入の境地にあるを、「舟をしぞ思ふ」と詠まれたのである。

かくの如くして出來た身體、五臟六腑を少しも毀傷しなければ、三十二相八十種好を具備した佛で、卽ち「南無阿彌陀佛」である。これを、すべて彌陀も淨土もわが心の中にあると說かれ、又天台伽訶羅縛にこれを表德して、信心妙法蓮華經とも解されたのである。佛の未だ世に出ない前、父母の未だ生まれない前、萬物本來の姿もこの歌に表れてゐるのである。それでこそ、佛法や和歌の道が神の御心に叶ふといはれてゐるのである。

○りやうてんごす—未詳。
○三鈷—三叉の金剛杵。煩惱を破る菩提心の表象。
◎無作—刊行會本には「無相」
○三身—法・報・應の三種の佛身。
◎有相無觀—刊行會本には「無相無觀」
○敢て毀ひ傷らざりせば—孝經にこれを孝の始めとす
○三十二相—佛に具つた善い人相の數。八十種好は更にこれを細かく分けたもの〔海士〕參照。
○己心の彌陀—この類句〔柏崎〕〔誓願寺〕にある。

西國下

觀（喜）

現在闇曲中最も古いものの一で、觀世流では、特に「初瀬六代」「東國下」とともに三曲と稱す。世子六十以後申樂談儀に「西國下の曲舞に、『蘆の葉分の月の影、隱れてすめる昆陽の池』、『隱れて』と、句をもつ心根にうたひしを、南阿『曲舞ふしならば、なほひんなまらかせ』と申されける程に、それより今のふし也。……西國下の曲舞を、道の物とりて舞ひし也、其時は『隱れてすめる』と謠りける也。西國下面白き曲舞也。『墓松桂の枝に鳴き』なと面白き所也。……西國下は觀阿ふしをつく、皆作者は玉林也」とあり、もともと曲舞として作つたもので、完曲はない。

サシ 壽永二年の秋の頃。平家西海に赴き給ふ。城南の離宮に至り都を隔つる山崎や。關戸の院に玉の御輿をかきすゑて。八幡の方を伏し拜み。南無や八幡大菩薩。人皇始まり給ひて十六代の尊主たり。御裳濯川の底清く。末を受け繼ぐ御惠み。などか。捨てさせ給ふべき

クセ 他の人よりもわが人と。誓はせ給ふなるも

壽永二年秋の頃、平家は西海の方へお出でになつた。まづ鳥羽の離宮へ行き、京都との國境である山崎を過ぎ、關戸の院で天子の御輿をお置きして、男山八幡宮の方を伏し拜み、「どうか八幡大菩薩様。御神體は人皇十六代の天皇に渡らせられるのでございます。だから、天照大神の皇統をお受け繼ぎ遊ばした今の大君をお見捨て遊ばす筈はないと存じます。殊に『外國の者よりもわが國の人を助ける』と御誓約遊ばしたことでございますから、今一度西海へ落ち行きましても、二度京

○城南の離宮―京都の南、紀伊郡鳥羽にあつた離宮。
○山崎―乙訓郡、攝津との國境にある。
○關戸の院―山崎の西南、關所の官舍。
○八幡―男山八幡宮。
○十六代の尊主―應神天皇（神功皇后を御一代に數へた）
○御裳濯川の―伊勢、天照大神の皇統を喩へ奉つた。
○他の人よりも―宇佐八幡宮御託宣（「放生川」參照）。

○水無瀨川｜攝津國三島郡―新古今集後鳥羽上皇御製に「見渡せば山本霞む水無瀨川夕は秋となに思ひけん」
○芥川｜同三島郡。伊勢物語に昔男がこの所で、連れ出した女を鬼一口に食はれたといふ。弓胡籙もその條の文に據つて出した。
○猪名｜攝津國川邊郡。笹の名所。
○昆陽の池｜同郡。小屋をいひかけた。
○生田の小野｜今の神戸市三宮町の東方。鳥を射た故事、「求塚」に作らる。
○布引の瀧｜神戸市にある
○五手船｜十挺艪の船。一手は二挺。又は伊豆國から造り出した船ともいふ。

のを西海の波の立ち歸り。二度帝都の雲を踏み九重の月を眺めんと。深く祈誓申せども。惡逆無道のその積り。神明佛陀加護もなく。貴賤上下に捨てられ帝城の外に赴く。何となり行く水無瀨川。山本遠くめぐり來て。昔男の音に泣きし。鬼一口の芥川。弓胡籙を携へて駒に任せてうち渡す

上 馴れし都を立ち出でていづくに猪名の小笹原。一夜假寢の宿はなし。蘆の葉分の月の影。隱れてすめる昆陽の池。生田の小野のおのづからこの川波に浮寢せし。鳥は射ねども如何なれば。身を限りとや歎くらん千山の雨に水まさり。濁れる時は名のみして。晒すかひなき布引の。瀧つ白波音立てて雲のいづこに流るらん。五手船の名殘に。五百艘の舟を造りて。御調を絕えず

都に立ち歸り、「二度九重の月をお眺めになることが出來ませう」と、深く祈願を籠めたが、平家はこれまで惡逆無道の所行を重ねたので、神佛の御加護もなく、貴賤上下一般の人からも見捨てられて、帝都の外に落ち行くこととなつたのである、今後どう成行くことやら、果敢ないことである。かくて山本の遠き水無瀨川を過ぎ、昔男業平が連れ出した女を鬼一口に喰はれたと泣いた芥川を、弓・胡籙を持ち馬に乘つてうち渡つた。

かうして、住み馴れた都を出でてよりこの方、どこに落ちつく見込もなく、猪名の小笹原へ來ても、たゞの一夜の假寢をする宿もなく、蘆の葉の間を透して月影の映つてゐる昆陽の池を過ぎ、生田の小野へ來ては、菟名日處女の物語のやうに、この川波に浮かぶ水鳥を射たわけではないが、やはり自分達も身を投げて死ぬことならうかと歎かれる。名は布引の瀧といつても、大雨に水嵩が增して濁つてゐる時には、布を晒すわけにはいかない。その昔五手船五百艘を造つて、絕えず御調を運んだ港もこの武庫の浦であつた。

○武庫の浦—攝津國武庫郡
○福原—同郡。平家が一時都を遷した地。
○梟松桂の—白氏文集凶宅の詩「梟鳴二松桂枝一、狐藏二蘭菊叢一」を引いた。
○荒磯館—荒磯邊にある家
○海士の子の—新古今集讀人不知の歌「白波の寄する渚に世をつくす海士の子なれば宿も定めず」に據つた。
○相國—太政大臣平清盛。
○花の顏—花の長枝といひかけた。
○一居の島を築き—平家物語卷六「築の島の事」に委しく見ゆ。
○世を浮波の—世を憂きといひかけた。
○主上—安德天皇。

運びしも武庫の浦こそ泊りなれ福原の。故郷に着きしかば、人々の家々も。年の三年に荒れ果てて

上梟松桂の枝に鳴き。狐蘭菊の。叢に隠れ住む。馴れし名殘も波風の荒磯館住み捨てただ海士の子の住み所宿も定めぬ假寢かな相國の作り置かれし。所々も荒れ果てて。古宮の軒端月漏り金玉を交へし粧ひ。花の顏を集めしも唯今のやうに思はれて昔ぞ戀しかりける

上釋迦一代の藏經五千餘卷を石に書き蒼海の底に沈めて。一居の島を築きしかば。數千艘の船を留め風波の難を助けしは。ありがたかりし形見なり世を浮波の寄るべなき身の行く末ぞ悲しき

サシかくて主上を始め奉り。皆御船に召されけ

やがて舊都福原に着いたが、平家の人達が住んだ家々も、僅か三年の間にすつかり荒れ果てて、梟が松や桂の枝に鳴き、狐が蘭や菊の草叢に隠れ住んでゐるといふ物凄い所となつてゐた。見馴れたもとの名殘は何一つなく、磯邊の館々は波風に荒らされて、宿をも定めぬ海士の子の住家となつてゐた。太政大臣平清盛の作つて置かれた所々も荒れ果てて、古い御殿の軒端には月が洩れ入り、その昔金玉を交へた美しい粧ひ、花のやうな顏を集めた榮華の有樣が、唯今のやうに思ひ出されて、昔が戀しいのである。

その當時、釋迦一代の說法一切經五千餘卷を石に書いて海底に沈め、一つの島を築いたので、風波の難を避け、數千艘の船を留めることが出來るやうになつたのは、ありがたい昔の形見である。それにしても、今世に捨てられて、賴る所もなくなつてしまつたのは悲しいことである。

かうして、安德天皇を始め奉り、一同皆

り。習はぬ旅の浮枕。思ひやるこそ悲しけれ

上〽南殿の池の龍頭鷁首の御船ぞと。思ひながらも寒江に。釣の翁の棹の歌まだ聞き馴れぬ聲々に。沖なる鷗磯千鳥友呼び連れて立ち騷ぐ。風帆波に溯り。艪聲は月を動かす。和田の岬をめぐれば。海岸遠き松原や。海の緣に續くらん。須磨の浦にもなりしかば。四方の嵐も烈しくて。關吹き越ゆる音ながら。後の山の夕煙。柴といふものふすぶるも見馴れぬかたのあはれなり

上〽琴の音に。引き留めらると詠じけん。五節の君のこの浦に。心をとめて筑紫舟。昔は上り今下る波路の末ぞはかなき。傾く月の明石潟。六十餘りの年を經て。問はず語りの古を思ひやるこそゆかしけれ。船より車に乘り移り。暫しこゝにと思へども。須磨や明石の浦傳ひ。源氏の

○龍頭鷁首―船首に龍又は鷁の彫物をつけた、貴顯の御座船。又船中で舞樂を奏す。

○棹の歌―船歌。

○和田の岬―攝津國武庫郡

○須磨の浦―攝津國。源氏物語の主人公光源氏の謫所以下數行須磨卷の文に據つた。

○琴の音に―源氏物語須磨卷五節の君の歌「琴の音に引き留めらるゝ綱手繩たゆたふ心君知るらめや」

○五節の君―太宰大貳の女光源氏須磨謫居の時父と共に筑紫から上り、源氏と契りを結んだ。

○六十餘りの―明石卷に六十歲餘の明石入道が源氏にわが女の事を獨言のやうに語つた故事を指す。

御船にお乘りになつた。これから後の、馴れない船の旅路、思ひやられて悲しいことである。今のこの御船を、南殿の御池に浮かべた龍頭鷁首の御船に擬へて見ても、聞えてくるものは、管絃の妙音ではなくて、まだ聞き馴れない、淋しい浦に對する漁翁の棹歌か、沖の鷗や濱千鳥が友呼び連れて騷ぐ音ばかりである。艪は波を溯り、艪の聲は月を動かすやうである。やがて和田の岬を廻ると、海岸に遠く松原が續いて、海の線と相接してゐるやうである。既に須磨の浦に着くと、關の向ふから吹いてくるのではあるが、四方の嵐の音が烈しくて、後の山に立つ夕煙は柴といふものをふすぶるのだと聞くにつけて、見馴れぬ目にはあはれに感じられる。

『琴の音に引き留めらるゝ綱手繩』と詠んだ五節君はこの浦に心を留めたが、その筑紫舟は西から上つて來たのに反し、今のこの御船が西へ下つて行くのは果敢ないことである、明石潟に來ては、六十餘歲の明石入道が問はず語りの物語をした故事が思ひ出されてなつかしい。こゝで船から車に乘り移り、暫くこゝに落ちつきたいと思つたが、須磨や明石の浦のあたりは、光源氏の通つた道であるから

○高砂や尾上の松―播磨國加古郡。〔高砂〕參照。
○室―同國揖保郡。遊女の多くゐた所。〔室君〕參照。
○牛窓―備前國邑久郡の水驛。旅は憂しといひかけた。
○鞆の浦―備後國沼隈郡。弓の鞆といひかけた。
○竈の關―周防國熊毛郡。釜戶とも書き、今上之關村といふ。
○月落ち鳥鳴いて―唐詩選張繼の詩「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對二愁眠一、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船一」

通ひし道なれば平家の陣には。いかがとて又この浦を漕ぎ出だす。汐瀬は波も高砂や尾上の松の夕嵐。船をいづくに誘ふらん。室の泊りの苫館。かげは隙もる夕月夜。遊女の謠ふ歌の道。浮世を渡る一節も誠にあはれなりけり。習はぬ旅は牛窓の。瀬戸の落汐心せよ。げにあらけなき武士の。梓の弓の鞆の浦。賑ふ民の竈の關夢路を誘ふ波の音

上。月落ち鳥鳴いて。霜天に滿ちてすさまじく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響は。客の船にや。通ふらん。蓬窓雨しただりて知らぬ汐路の楫枕。片敷く袖やしをるらん荒磯波の夜の月沈みし影は歸らず

平家の陣にはどうであらうかと、又この浦を漕ぎ出した。汐瀬の波が高くて、それに高砂の尾上の松の夕嵐が吹き添ふので、船をどこへ吹き流すことかと心細く思はれる。室の津では苫で屋根を葺いた家へ夕月が漏れこんで、遊女の浮世渡りに謠ふ船歌の聞えてくるのが誠にあはれである。馴れない旅を續けて牛窓なら過ぎれば、瀬戸の引汐に氣の揉めることであつた。それでも勇ましい武士として弓矢を携へて鞆の浦を過ぎ、「民の竈の賑ふ」といふ御製の思ひ出される竈の關を夢うつつに過ぎると、月は西に傾き、鳥が鳴いて、霜が天に滿ち、まことにもの淋しい氣色で、濱邊の漁火がほのかに輝き、夜半の鐘が旅船に響いて來るやうだ。苫屋形の窓に雨がしただり落ちて、行方も知らぬ船路の旅寢を悲しませ、涙で袖を濡らすことであらう。あゝ夜の月は荒磯波に沈んで、月影は二度と見えない、平家の人達も二度都へ歸ることが出來ない。

〔考異〕
十三　壽永二年……城南の離宮に至り（喜赴き）……上馴れし都を……瀧つ白波（喜の）音立てて……五百艘の舟を造り（喜集め）て御調を絕えず（喜ナシ）運びしも（喜給ひしは）……福原の故郷に着きしが

ば（喜歸ればゝ）……上皇松桂の枝に鳴き　ありがたかりし夜見なれ（喜ゝゝな）　上青陵の池の
思ひながら（喜せゞ）も　風帆波に渕り（喜ゝる）　須磨の浦にもなれ　（喜ゝゝ）しかば　園吹き舞
ゆる音ながら（喜るに）……上呉の音に　波路の末ではかなく（喜ゝゝ）るけれ　瀬戸の潮音も　浮心さよ

實方

觀（寶生）

「眞方」とも書き、喜多流では「六元」と題す。「西行法師が陸奥に行脚して、藤原實方の舊跡を弔ひ、一首の和歌を手向けると、この地に流謫せられた實方の亡靈が現れて、懺物語をする」といふ〔實方〕（能本作者註文に世阿彌作、飯尾宅御成記に寛正七年二月廿五日演能の事見ゆ）の一節である。禪竹の五音三曲集に闘曲の本文を引く。光悦曲舞以下の諸本に見ゆ。

○心を種として｜古今集序に「大和歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」

○紀の貫之｜古今集の撰者その序文の筆者。「蟻通」參照。

○在原の業平は｜古今集序に「在原業平はその心餘りて言葉足らず、いはば萎める花の色なくて、匂ひ殘れるが如し。……宇治山の喜撰は言葉幽かにして始め終り確かならず、いはば秋の月を見るに、曉の雲にあへ

サシ　されば心を種として。花も栄ゆく言葉の林。紀の貫之も書きたるなり

クセ　在原の業平は。その心あまりて。言葉は足らず喩へば。萎める花の色なうて。匂ひ殘るに異ならず。宇治山の喜撰が歌は。その言葉かすかにて秋の月の雲に入る。小野の小町は妙なる

それで、紀貫之も「人の心を種として、美しい和歌の林が繁つて行く」と書いたのである。

在原業平は歌の内容が豐かであつて、これを表現する言葉が足りない。喩へば萎んだ花の、既に色は無くて匂ひだけ殘つてゐるやうなものである。宇治山の喜撰の歌は、その言葉が朧で、秋の月が雲に隱れたやうである。小野小町は美しい花のやうな風雅な詠み振りで、その歌調さ

花の色好み。歌の樣さへ女にてただ弱々と詠むとかや

上ゲ大伴の黑主は、薪を負へる山人の花の蔭に休みて徒らに日をや送るらん。これらは和歌の言葉にて。心の花をあらはす。千種を植うる吉野山。落花は道を埋めども、去年の枝折ぞしるべなる

へ女らしく弱々としてゐるといはれてゐる。

大伴黑主の歌は下品で、薪を負つた樵夫が花の蔭に休んで苦しく時を過してゐるやうである。いづれにしても、これらは皆和歌で心の花を現したものである。喩へば色々の花を植ゑた吉野山に落花で道が埋まつても、去年の枝折が今年の道しるべとなるやうに、古歌が今の人の手本となるのである。

るが如し。……小野小町はあはれなるやうにて強からず、いはばよき女の惱めるところあるに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし。大伴黑主は心をかしくてその樣賤し。いはば薪負へる山人の、花の蔭に休めるが如し。」業平の事〔杜若〕〔雲林院〕、喜撰の事〔頼政〕、小町の事〔關寺小町〕〔卒都婆小町〕、黑主の事〔志賀〕參照。

○吉野山　新古今集、西行法師の歌「吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん」

〔考　異〕

上ゲ大伴の黑主は……日をや送る「暮らす」らん

五音三曲集……サシ　さればか心を……言葉の林（五はし）……クセ　在原の業平は……色なう（五ハ）……その言葉（五は）かすかにて……上ゲ大伴の黑主は……去年の枝折ぞしるべなる（五リ）

更科

觀

この完曲と思はれるものに、元文二年松岡友秉寫本「更科何某は妻子を捨てて瀬空上人の弟子となつた由、藤

所たへ故郷を見ようと信濃に下り、善光寺に來て、説法をすると、その聽衆の中に狂人となつた妻がゐた
といふ（更科）があつたが、關東大震災に燒けた。貞享四年以下の諸本に見ゆ

クセ悲しきかなや悪業は、山よりも高く、善根は塵ほども貯へず、かく三途の故郷に歸つて。本願の臺に到らざらんは、歎きの中の歎き悲しみの中の悲しみたり。草露悉く、春を迎へては。花葉ともに綻び、松風に先だつ山櫻は早く無明の夢覺め。月に落ちくる曉は。別離の雲にや沈むらん

上花橘の香をとめて昔の人を尋ぬれば親疎幾ばくか去りぬ。かかる思ひの深見草、妹とわが寢る常夏の花一時の夢の世と。知らでや人の迷ふらん

○三途の故郷―衆生が前世にあた冥途。三途は冥途。
○本願の臺―佛衆生の本願とする極樂世界の蓮華臺。
○花橘の―古今集讀人知らずの歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」
○深見草―牡丹の異名。思ひの深きといひかけた。
○妹とわが寢る―古今集躬恒の歌「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寢る常夏の花」

誠に悲しいことである。惡い果報を受くべき惡行ならば山よりも高く積み重ねて、善い果報を受くべき善行は塵ほども貯へない。その結果、もとの冥途に歸つて、極樂の蓮華臺に生まれることの出來ないのは、何よりの歎き、何よりの悲しみである。春になれば、すべての草木が葉も廣がり花も開くが、それも暫くの間で、松風も吹かない前に山櫻は散り去つて、迷ひの夢を覺まさせ、月の西に傾く曉には別離の悲しみを知らせるのである。花橘の香をかいて、昔の人を思ひ出せば、その頃の人は親しきも疎きも多勢この世から去つてゐるのである。かうして、深い思ひをかはし、「妹とわが寢る常夏の花」などと、花に喩へて妻をいとしがつても、それは花一時の夢に過ぎないのに、そのやうな夢の世であることに氣づかないて、人は迷つてゐるのである。

四季

観（寳喜）

寳生・喜多流では「雪月花」と題す。「嵯峨に庵を結んでゐた寂蓮が、雪を拂はうと庭に出ると、雪女の精が現れ出て言葉を交はす」といふ〔雪翁〕の一節。禪竹の五音三曲集に闌曲の全文を引いてゐる。寛文曲舞以下の諸本に見ゆ。

クセ 抑も天の潤ひに。雨露霜雪の四つを見せ。同じく雪月花の三の徳を分つにも。雪こそ殊に勝れたれ。まづ春は梅櫻。咲くより散るまでの。雪を忘るる色はなし。夏は五月雨の。古屋の軒端。暮れながら。庭は曇らぬ卯の花の。垣根や雪にまがふらん

上 夜寒忘れて待つ月の。山の端白き影までも。降らぬ雪かと疑はれ。冬野に殘る菊までもすは初雪と面白さに。山路の憂きや忘るらん

さて、天の潤ひによつて降り下るものに、雨・露・霜・雪の四種があり、それらによつて、雪・月・花の三種の美しい趣を見せるが、その中でも、殊に雪が勝れてゐる。まづ春には、梅・櫻様々の花が咲き散るが、どの花を見ても、雪を想はせないものはない。夏には五月雨の降る古家の軒端は既にくらくなつてゐるのに、庭では花の光に明るく見える垣根の卯の花が雪に似てゐる。秋には夜寒を忘れて待つてゐると、やがて山の端から現れ出る月の白い光までが天にあるまゝで下へは降らない雪のやうに思はれ、冬には野に散り殘る白菊までが、「そら初雪が降つたぞ」と間違はれる面白さに、山路の旅の辛さをも忘れさせることであらう。

○雪を忘るる色はなし―どの花を見ても白くて、雪を聯想させる。
○古屋―五月雨の降るといひかけた。

考異

クセ「抑も天の潤ひ……三の徳を分つ」（寶喜響むる）にも……散るまでの（寶も、喜に）……上「夜寒忘れて……山の端白き」（喜出でし）影までも……初雪と」（喜の）面白さに……

五音三曲集……クセ「抑も天の……四つを見せ（左へに）同じく雪月花の三の徳を分つ（左へ[illegible]）にも……散るまでの（左も）雪を忘るる色は（左も）なし　雪にまがふらん（左あらはれ

島廻

觀（寶喜）

この曲舞を主材とした完曲に、「江州膳所の者が人商人に捉れた少人を買ひ取つて養育し、今日も辛崎へ連れて行くと、わが子の行方を尋ねて狂亂した母が来合はせて、めでたく母子再會する」といふ〔島廻〕（禪鳳習道目錄・蓮歩色葉集に曲名見ゆ）がある。光悦曲舞以下の諸本に收む。

○この島—近江國琵琶湖中にある竹生島。

○白波の—知らずといひかけた。

○歸る山—越前國南條郡。歸るといひかけた。

サシ「この島の四方を遥かに見渡せば、漫々とある海上の。水の煙は霞にて。里はそことも白波の。汀の松は麓に見えて。山は高きより まづ近し

この竹生島の四方を遥かに見渡すと、廣廣とした海上は、水煙で霞み渡つて、湖畔の村里か何處にあるやら分らず、汀の松は山の麓にあるやうに見え、山は高いものの方がはつきりと近くに見える。

クセ「北に向へば雁がねの。雲路を分けて歸る山。

北の方に向くと、雁が大空遠く歸つて行く北越の歸山や有乳山が見え渡り、木目

○有乳の山―近江國高島郡と越前國敦賀郡との間にある。「あらたま」と同音を重ねた。
○木の目山―敦賀郡木目峠。
○伊吹―近江國坂田郡。
○余呉の湖―同伊香郡。
○三上―同野洲郡の山。
○犬上―同犬上郡。
○鏡山―同蒲生郡。
○雛籠の山―犬上郡、今の正法寺山。古今集、天の帝御製に「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へよわが名洩らすな」
○守山―野洲郡。
○志賀―滋賀郡。志賀の都があつたから古里といふ。
○花園―天智天皇御遊覽の御園であつた。
○比叡山―山城・近江の國境。山上に延暦寺がある。
○横川―比叡三塔の一。
○比良の湊―滋賀郡、比良山の麓で湖畔にある。
○流れ松―小松原の異稱か。
○白髭―比良、今の小松村にある。「白髭」參照。
○高島やゆるぎの森―高島郡萬木、今の安曇村にある。古今六帖の歌に「高島やゆるぎの森の鷺すらも獨りは寢じと爭ふものを」

有乳の山のあらたまの。年の始めの頃なれば、待ちし花かと疑ふは消え殘る雪の木の目山。東は、伊吹おろしの烈しきに霞まぬ月の余呉の湖。南を遙かに見渡せば、三上犬上鏡山。見馴れし夢の雛籠の山、いざと答へて包めども契りはよそに守山。なほもそなたのなつかしく、忍ぶ思ひを、志賀の古里、花園の花や散るらんと、思ひながらの旅に立つ心や物に狂ふらん。比叡山と申すは、あまり名高き山なれば、言葉も及び難し。かの山につづいて、次第に末を見渡せば、上、横川の水の末かとよ。比良の湊の河音は、嵐やともに流れ松、岩越す波のうちおろし、神といはふも白髭の沖なる松の高島やゆるぎの森の鷺すらも、わが如くひとりは音をよも鳴かじ。かれよりもこれよりも。ただこの島ぞありがた

山の殘雪は丁度年始めの頃のことであるから、待ちかねてゐた花のやうに見える。それから東の方を見れば、伊吹颪が烈しく吹いて霞を拂ふので、月影の澄み渡る余呉湖がある。また南の方を遙かに見渡すと、三上山・犬上山・鏡山や、見馴れた夢の床といひたい雛籠の山や、どうだか分らないと答へて隱してゐても、忍ぶ思ひの外に洩るといひたい守山――それにつけても彼方がなつかしくて忍ぶ思ひがせられ、志賀の舊都花園の花が散るだらうかと思ひながら、旅に出ると、心が狂ひさうである。それから比叡山、これは餘りに有名な靈地で、言葉にもいひ得ない。

さて、この比叡山に續いて次第に遠くを見渡すと、横川の水の末流かと思はれる比良の湊の河音が、嵐の音とともに流れて、流れ松のあたり岩越す波とうち寄せる。神を祀つた白鬚の沖のかなた高島のゆるぎの森では、鷺でさへも自分のやうに獨り鳴きはしまい。が、それよりもこれよりも、ただこの竹生島がありがたい靈地である。

き。童男化女が舟のうち見ずは歸らじと誓ひけん。蓬萊宮と申すともこれにはよも勝らじ。汀の清水。巖にかかる青苔青山雲にかかつていづれもともに青き海上。綠樹影沈んでは。魚も梢にのぼり。月海上に浮かんでは兎も波を走れり。すべて耳に觸れ。目に見ることのいづれかは、大慈大悲の誓願に洩るる事やある

○童男化女が―源平盛衰記巻廿八經正竹生島詣に「昔秦皇漢武の不死の薬を採らんとて、方士を使に遣して蓬萊を求めしに、蓬萊を見ずばいなや歸らじといひけるに童女卯女、徒らに舟の中にや老いにけん」。この原據白樂天の新樂府海漫々にある。

○綠樹影沈んでは―建長寺自休蔵主が竹生島に詣でた時の詩「綠樹影沈魚上レ木、淸波月落兎奔レ浪、靈灯靈地無二今古一、不レ斷神風濟度舟」

昔支那で童男化女が若し行き着くことが出來なければ、舟から出ないと誓つた仙郷蓬萊宮も、よもやこれほど結構な所ではあるまい。汀の清水は巖にかゝつて青苔を作り、高い青山は雲にかゝつて、上も下も皆青々としてゐる。

それで綠の木影が水に映つては魚が梢に上つてゐるやうであり、月が湖上に映つては、月世界の兎が波を走つてゐるやうである。かうして、すべて耳に觸れるもの、目に見るもの、何一つとして大慈大悲の御利益に洩れるものはないのである。

〔考　異〕

サシ「この島の……汀の松は麓に見えて（寶喜ナシ）……クセ北に向へば……いざ（寶喜と）と答へて……

青苔青山雲に（寶喜覆ひ）かかつて

上宮太子

觀（寶　喜）

「當今に仕へ奉る臣下が天王寺に參詣して、老人にこの寺を御建立になつた上宮太子の御事を尋ねる。やがて太

子の靈が出現して奇特を示し給ふ」といふ「上宮太子」（五音曲條々に曲名見ゆ）の一節で、光悦曲舞以下の諸本に見ゆ。

サシ「欽明天皇三十二年。睦月一日の夜半に。御夢想の告あり。金色の僧來り給ひ。后に告げて宣はく。われに救世の願あり。則ち后の御胎内に。宿るべしとありしかば

クセ「后答へて宣はく。妾が胎内は垢穢なり。いかで貴き御體をやどし給はんとありしかば。僧重ねて宣はく。われは垢穢を厭はずただ望むらくは人間に。着到せんが爲なり。后辭するに所なし。ともかくもとありしかば。この僧大きに悦んで。后の御口に。飛び入り給ふと御覽じて曉月軒に輝き松風夢を破つて五更の天も明けにけり帝この由聞し召し悦びの色をなし給ふ。后必ずしやうらんを産み給ふべしとありしかば

○欽明天皇三十二年―聖徳太子は用明天皇の第一皇子。御母は穴穂部間人皇后。敏達天皇二年御誕生。本曲の所説はもとより妄誕である。

◎われに―刊行會本には「われら」

○五更―今の午前四時頃。

○しやうらん―喜多には「聖卵」の字を充つ。

欽明天皇三十二年正月一日の夜半に、夢の御告があつた。それは、金色の僧がお出でになつて、皇后に向つて、「自分には世を救はうと思ふ誓願がある。それで皇后の御胎内に宿りたい」と仰せられるのである。

皇后が答へて仰せになるには、「私の胎内は穢うございます。どうして貴い御體をお宿しすることが出來ませう」と。僧が重ねて仰せになるには、「自分は穢いのは構はない、どうか是非とも人間になりたいと思ふのです」と。皇后もこれにはお斷りになるすべがなく、「では、どうなりとも」と仰せになると、この僧が大に悦んで、皇后の御口に飛び入られると思ふと、明方の月が軒に輝き、松風が吹いて來て、皇后の御夢がお覺めになり、早朝の天も明けた。天皇、この御事をお聞し召しになつて、お悦び遊ばされ、皇后はきつと立派な人をお生みになるだらう」と仰せになつた。

○隙行く駒—時の早く過ぎ行く事へ。
○大跋提河—釋尊入滅の地
○上宮太子—宮南の上殿におはしたので、上宮廏戸豊聰耳皇子、上宮太子と申す。

上歌 隙行く駒を繋がねば。大跋提河の池の水澄まで濁れる如くにて。十二月と申すには。南殿の御廏にて。御産平安皇子御誕生なる廏戸の皇子と申すも上宮太子の御事

やがて、隙行く駒の足早く、大跋提河の水の濁るかやうに、時は過ぎて行つて、十二月に、南殿の御廏で御安産遊ばされた。廏戸の皇子と申し上げるのも、この上宮（聖徳）太子の御事である。

〔考異〕
サシ「欽明天皇三十二年（寶喜ナシ）……救世の願あり則ち（喜必ず）后の……　クセ「后答へて……貴き御靈をやどし給は（喜申さ）んと……ともかくもありしかばこの僧大きに悦んで（寶喜ナシ）……上隙行く駒を……上宮太子の御事（喜なり）」

卒都婆流

寶（喜）

喜多流では「蘇武」と題す。この完曲かと思はれるものに元文二年松岡友素寫本〔卒都婆流〕があり、康頼・成經が鬼界島で三熊野を勧請し、卒都婆を流して歸洛を祈つた事を脚色してゐるが、原本は燒滅した。闌曲は光悦曲舞以下の諸本にある。

○胡國の軍強うして—漢武帝の時、胡國匈奴と戰つた。
○蘇武—源平盛衰記卷八「漢朝蘇武事」に委しく見ゆ。その原據は前漢書列傳廿四にある。

サシ 然るに胡國の軍強うして。或は討たれ或は生捕られぬ。中にも蘇武はかひなき一命殘りあ

さて、胡國の軍が強くて、漢軍は或は討たれ或は生捕られた。その中でも蘇武は生き甲斐のない命を助かり、形ばかりの

るも假なる小田に出でて。落穂を拾ひて身命を繼ぐ。田面の雁も人馴れて。人近をも去らざれば、指を切り玉柏に書き、翼につけて放ちけるに
クセ「かひがひしくも田面の雁。秋は必ず南國に。通ふや天つ雲の上に。折節帝は南殿の御遊ありしに。行く雁がねの數一つ。半ばの雲に飛び下り。翼につけし玉柏を庭上に落し飛び去りぬ。奇異の思ひをなし。鳥の跡を見給へば。古の。蘇武が譽れの跡なれや。昔は岩窟の。うちに籠められ今は又。一足を切り。廣き野中に放さるたとひ草露に朽つるとも。魂は立ち歸つて。君邊に仕へん。子卿が狀と書き留む
上「無慙やな今までも。蘇武はこの世にありやとて。この度は蘇武が子に。楊李といへる大將に。百萬騎相添へ胡國に攻め遣はさる。この度は引

○昔は岩窟のうちに――盛衰記に、蘇武の狀として――「昔籠二巖穴之洞一、徒送二三春之愁歎一、今放二曠田之畝一、空同二胡敵之一足一、設身留二永朽於胡國一、必神還再仕二于漢君一」

○子卿――蘇武の字名。

○無慙――罪を犯して恥ぢないこと、轉じて氣の毒なこと。

○楊李といへる大將――史記匈奴傳には廣利とある。「千手」には「やうりが謀にて敵を亡ぼし」とある。

田に出て、落穂を拾つて命をつないでゐた。このあたりでは田の雁も人馴れて、人のそば近くを逃げないので、蘇武は指を切つて玉柏に文を書き、これを雁の翼につけて放つた。

都合のよいことに、雁は秋には必ず南國へ行くのであるが、その雁が空を通る折から、帝は南殿に御遊を遊ばしていらつしやつたが、多くの雁が列を連ねて行く中で、その一羽が中空に飛び下つて、翼につけてゐた玉柏を御庭に落して飛び去つた。帝が不思議に思し召し、その跡を御覽遊ばすと、昔の蘇武の名譽を留めたことには、それに、昔は岩穴の中に閉ぢ籠められ、今又一足を切られて、廣い野原に放されました。かうして、たとひこの草原に朽ち果ててしまひましても、魂は國に立ち歸つて、大君のおそばにお仕へ申し上げます、子卿」と書いてあつた。

「あゝ可哀想なことに、蘇武は今までもこの世に生きながらへてゐたのか」と、今度は蘇武の子の楊李といふ大將に百萬騎の軍兵を添へて、胡國へ攻めに遣はされた。すると、今度は以前とはちがつて、

きかへて、胡國の軍破れつつ、廣野に住めるわが父を、伴ひ歸りける事、翼につけし文の德。それより文を雁書といひ、使を雁使と名づけたり。されば唐土の、蘇武は旅雁に文をつけ、本朝の康頼は、汐路の波に歌を寄す

上「それは漢朝の古、これは本朝、今の代、かれは雲路の上の空、これは汐路の海の面。たとへを知るも今更に、古事のみの忍ばれてなほも乾されぬ袂かな

胡國の軍が破れて、廣野に住んで居た父を連れて歸つた、これも雁の翼につけた文の德で、この故事から、文を雁書といひ、使を雁使と名づけた。かうして、支那の蘇武は旅雁に文をつけたが、わが國の康頼は海の波に歌を寄せた。

彼は支那の昔、此は日本の現代、彼は高い大空、これは下の海。このやうな故事を知るにつけて、今更昔の事が思ひ出されて、やはり涙に袂の乾く間がないのである。

「考異」

（キ三）然るに胡國の……或は生捕られぬ（喜ナシ）中にも蘇武はかひなき一命を（喜助かり）ふるも假なる（喜あられぬ）小田に……田面の雁も（喜は）……タヒかひがひしくも……天つ雲の上に折節（喜或時）……行（喜鳴）く雁がねの……昔（喜古）は岩窟の……上無實さな……胡國の軍破れつつ（喜けり）……伴ひ歸りける事（喜は）……上それは漢朝の……たとへを知る（喜知り）も今更に（喜ナシ）古事のみの忍ば（喜思は）れて

當願暮當

喜

完曲〔當願暮當〕の一節で、それは元文二年燕岡友之寫本によれば「當願、暮當」兄弟といふ兄弟の當願が、山へ行く途中忘喫寺で法華供養があると聞き、弟の暮當は參詣しようといひ、兄はこれに反對して、終に途を別れた。ところが、暮當は供養の場に臨んで前業を悔い、忽ち毒蛇となつた。當願は山から歸つて、これを悲しみ、上人に回向を乞ふと、暮當はその功德によつて天女となつた」といふのである（古今謠曲解題）。

サシ「然れば妙なる法の教へ。ただこれ佛果の直道なれば。六種震動して心を動かし。四華降つて眼を驚かす。信心今に。目前たり

クセ「誰か知る照東方。萬八千土の世界を知るも遠からず。眉間の白毫の相光さし顯せるその教へ。迷はじな曇りなき誓ひに洩るる方もなし。諸法實相なる時は。方便も十法一理なるとかや

上「凡そ妙法の首題にて。本釋始終の經卷色心の二字に極まりて。迷ふ時は三界。火宅のうちと

○六種震動―大地が動・起・涌・震・吼・撃の六種に震動すること。

○四華―大小紅白の蓮華。

○白毫―佛三十二相の一つ、佛の兩眉の間に白玉の毫毛のあるをいふ。

○諸法實相―萬有のありのまゝの姿には相對と絕對の二面あること。

○本釋―本跡の借字であらう。法華經の前十四品を跡門、後十四品を本門、合せて本跡二門といふ。

○三界火宅―法華經譬喩品

さて、ありがたい妙法蓮華經の御教へは解脫成佛の一筋道であるから、この御教へによれば、大地は六種に震動し、天からは大小紅白の蓮華が降り下つて、人の心を動かし眼を驚かして、信心の效驗が目前に現れるのである。

容易に到り難い、一萬八千世界のかなた、東方を照らす佛國世界も、遠くはなく、眉間に白毫相を具へた佛の御光に御會ひすることが出來るのである。この御教へによつて迷はなければ、誰も洩れなくありがたい御誓約に惠まれるのである。すべての現象が相對即絕對のものであると悟れば、色々の方便も結局一つの理に歸着するのである。凡そ妙法蓮華經の御題目は、本門・跡門二十八品の卷々に分れてゐても、歸着する所は、色（現象）と心の二つで、心が迷

に「三界猶如火宅」
○大白牛車—同品に火宅を免れ出る佛道の悟りを喩へた語。
○眞如—諸法の實體實相。
○信解—教を信じて了解すること。

思へども悟る時は。大白牛車に乘じて。眞如の境に遊ぶこと。一念信解のたゞこの經ぞありがたき

へば、欲・色・無色の三界が火に燒けてゐる家のやうであるが、悟れば大白牛車に乘つて眞實不變の境地に達するのであつて、たゞ一念信解の心によつて成佛の出來るこの經はありがたいものである。

玉島

寶

題名の玉島は、恐らく神功皇后三韓征伐の御時、鮎をお釣り遊ばした肥前國松浦玉島川で、従つてこの闌曲は神功皇后の御事を記し奉つた謠曲の一節であらうと想像せられるが、完曲は傳つてゐない。闌曲は元祿のものがある。

○周の帝—武王。この事、太平記巻十七「金崎船遊事附白魚入ν船事」に見ゆ。
○殷の代—紂王。

クセ「周の帝のその昔。殷の代をとらんとて。孟津を渡ししに。八百の諸侯は。樂をなして舞ひ遊ぶ。波の浮藻に栖む魚の。躍りて船に入りしかば。帝叡覽ましまして蒼天に祭り給ひしかば。そ

その昔、周の武王が殷の紂王を滅さうとして、孟津を渡つた時、八百の諸侯が船中で音樂を奏して舞ひ遊んだ。すると海の浮藻に栖む魚が躍つて船の中に飛び入つたのを、帝が叡覽遊ばして、天をお祭りになつたので、この戰ひに周が勝つた。まことに朝廷への御調物が幾千萬年も絕

の戰ひにうち勝ちぬ。天つ日嗣の御調物。幾萬代となる事も。一葉の舟の德。誰かは仰がざるべき。

えることのないのは、これを運ぶ船の德で、誰もありがたく思はないものはない。

玉取

觀（寶 喜）

「珠取」とも書く。「京都珠取長者に引取られた貧女が、長者の從者に伴はれて、住吉明神に參詣すると、惡業の深い汝は神前へも參つてはならないといはれ、更に安倍淸明に占卜を乞ふと、神佛を禮拜せず、父母に回向しない報いであるといはれた。それで、淸明に祈禱を乞ひ、父母の回向をすると、やがて富貴榮達の身となつた」といふ〔珠取〕の一節。光悦曲舞以下諸本に收む。

サシ『邪見偸盗は貧困の因緣。慈悲惻隱は富貴榮花の基とかや

間違つた考へ方や盗みは貧困に陥るもとであり、慈悲や思ひやりは富貴榮花を得る基である。

クセ『世に四恩あり。天地の恩國王の恩。衆生の恩父母の恩。中にも重きはこれ父母の恩とかや。重華はかたくななる。父に仕へしその故に。虞

凡そ世の中には四つの大恩がある。天地の恩、國王の恩、衆生の恩、父母の恩がそれで、その中でも、最も重いのが父母の恩であるといはれてゐる。かの重華は頑固な父によく仕へた孝行の德によつ

○四恩—天地・國王・衆生・父母の四とするのは、平家物語卷二「教訓の事」に據つた。
○重華—堯の後を繼いだ支那の聖天子。虞はその國名、舜はその謚。

舜の君といつかれ、郭巨は母を養ひ孝行の心深き故。金釜を掘りし例あり。西夢父を討ち、天雷終に身を裂き、斑婦は母を亡しつつ。靈蛇命を奪へり

上無上世尊もその昔。阿難に對しおはしまし。恩重經を說き給ひ。忉利天に昇りては。安居の法を說き給ふも。御母摩耶夫人の。孝養の爲なり。君子の五常。釋門の五戒までも。ただ孝行の。心ぞ基なりける

て、虞舜の君として崇められ、郭巨は母を養つて孝行の志が深かつたので、金の釜を掘り當てた。これに反して、西夢はわが父を討つた不孝の罪の報いで、雷に當つて身を裂かれ、斑婦は母を殺した爲に、蛇にその命を奪はれてしまつた。

その昔、釋尊も阿難に對して恩重經をお說きになり、更に忉利天にお上りになつて、安居の法をお說きになつたのも、御母摩耶夫人に對する御孝養の爲であつた。孔孟の敎へである五常、佛道の敎へである五戒、いづれも孝行の心がその基となるのである。

○郭巨—後漢の人。家貧しく、老母を養ふ爲に、妻と共に子を埋めようとすると、坑から金の釜が出た。

○無上世尊—釋迦。

○阿難—釋迦の從弟で、多聞第一と稱せられた。

○恩重經—父母恩重經。父母の恩德の重いことを說いた僞經。

○安居の法—夏九十日間の說法。この事〔百萬〕にも見ゆ。

○五常—仁義禮智信。

○五戒—不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不飮酒。

〔考異〕

上無上世尊も……安居の法を說き〔寶音のべ〕給ふも

土車（一）

寶

この歌詞はその(一)(二)ともに、完曲〔土車〕の一節(一)は第三卷二〇七五—二〇七六頁、(二)は二〇七八——二〇

七九頁）であるから、語釋・口語譯は省略する。

上ゲ 土も木も。わが大君の國なれば。いづくか鬼の宿と定めん。この歌のことわりに。この歌のことわりに。鬼も愛でゝ去りぬれば。千方も亡び候ひて。一天四海波なく。うち治め給へば國も動かぬあらがねの。土の車のわれ等まで。道せばからぬ大君の。御影の國なるならば獨りせかせ給ふか

シテ 殊更當國信濃路や

地 木曾の棧道かけてげに。頼みも危からぬ。法の聲立ててなほ。諸人の憐み他の力洩らさじものを彌陀佛の。御影も普く憐ませ給へ人々。憐みの中にもこのお佛ぞ上なき。佛は衆生を一子と思しめさるれば。殊更われ等が影頼み頼む中にも彌陀は母にてましませば。父にも逢はせて。たばせ給へなまみだ

シテ 阿彌陀佛

地 阿彌陀佛。歌舞の菩薩聲々に。花のふり鼓。篳篥笙の笛和琴。聲を上げて叫べども。父とも答へずあはれとだにも知らざれば。よしそれまでぞ。さゝらも八撥をも。うち捨てて狂はじ皆うち捨てて狂はじ

土車（二）　喜

サシ おのれと心意迷ひて流轉無窮にして車の庭に廻るが如く。生身不定にしては鳥の林に遊ぶに異ならず。悲しきかなやわれ等今。人界に生を受くるとはいひながら。見佛聞法の結縁をもたざされ

◎心意迷うて—「心に迷うて」の誤りであらう。◎廻るが如く—観世の完曲には「廻るが如し」◎生身不定—昇沈不定の誤。◎人界に生を受くる—観世では一人界に生を受く—

ば。本來の樂しみも。いかがと思ひ。知られたり
クセ『凡そ彌陀の悲願には。破戒闡提をも洩らさず。一念十念の間に彼の國に迎へ取るべしとなり果惟の本願たり
上『さればにやその心。極重惡人無他方便唯稱彌陀。得生極樂と說かせ給へる。この理に任せて、われ等を助けおはしませわれ等を助けおはしませ

○本願たり―觀世では「本願なり」。

鼓の瀧

觀

「春の花盛りに、當今に仕へ奉る臣下が勅命を奉じて攝津國鼓の瀧へ赴くと、山神が現れて舞樂を奏し給ふ」といふ完曲〔鼓瀧〕（能本作者註文に世阿彌作）の一節。光悅曲舞以下諸本に收む。

サシ『抑も春の夜の一時。花に清香月に陰。惜しまるべしや時もげに。及ぶかたなき上旬の空。色ものどけき春の日の流にひかる盃の。手まづ遮る。心かな
クセ『花前に酒を酌んで。紅色を飲むとかや。げに

○春の夜の一時―蘇東坡の詩に「春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰」
○流にひかる盃―和漢朗詠集菅原雅規の曲水宴の詩に「廢レ石遲來心竊待、牽レ流遄過手先遮」

まことに春の夜は、花には清らかな匂ひ、月には美しい光があり、一時をも無駄にするのが惜しいものだ。殊に今は春の中でも最もよい三月上旬で、空景色、日の光もあるとかで、流れに浮かぶ盃を手にとって詩を詠む曲水宴が催はれる趣だ。花の前で酒を酌めば、その紅色が映って、紅い酒を飲むやうだ。實に面白いこ

面白や盃の。光も廻る春の夜の。有明櫻照りまさり。天花に醉へりや。流水も雪なり。げにあくがるる春なれや。われと心に誘はれて。都は遙遙の跡に霞の薄衣。日も夕暮は過ぐれども。そのままに長居して花に名殘は有馬山。鼓の瀧に時移り宿を花にかるもかく。猪名野も近かりき床は露の笹枕

上深山隱れの曉に。遠寺の鐘もかすかにて。深洞に風すぼく。老檜悲しむ聲も袂を潤すや。猿子を抱いて淸嶂のかげに歸りぬ。鳥花を啣んで碧巖の前に落つなるも。今更思ひ知られたり。花見ずはいかでかこの山に一夜明かさん

とだ。春の夜の更けて行くのも知らないで、盃を重ねて居れば、有明櫻は愈〻照りまさり、天も紅くなつて、花に醉つてゐるやうだ。そして下の流水は落花を浮かべて、雪を流してゐるやうだ。實に心の浮き立つ春景色だ。われながら心が浮かれて來て、かうした都を遠く離れた所で、日も既に夕暮過ぎたのに、つい〳〵長居をして、花に名殘を惜しみ、この有馬山鼓の瀧で時を移して花に宿を借りることとなつた。こゝは猪名野に近い所だから、露の宿つた笹を枕として寢ませう。しかし、山深い所のこととて、曉になれば、遠くの寺の鐘が幽かに聞えて來、深い岩洞には風が窄く吹き入り、老檜の枝に吹き渡つては悲しい聲を立てて、人の袂を潤すことだ。猿は子を抱いて嶮しい山陰へ歸つて行く、鳥が花をくはへて碧い巖の前へ飛び下りるといつた趣が、よく味はれることだ。花がなければ、とてもこのやうな物凄い山中で一夜を過すことは出來ないのだ。

○天花に醉へり―和漢朗詠集、菅公の花時天似醉序に―春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也―

○都は遙々の―刊行會本には―都は遙々と―

○日も夕暮―衣の縁語紐といひかけた。

○有馬山―攝津國有馬郡。

○鼓の瀧―同郡湯山の南八町。有馬溫泉第一の勝景と稱せらる。

○かるもかく―宿を借るを刈藻にいひかけた。

○猪名野―攝津國河邊郡、笹の名所。

妻戸

觀（一喜一）

「舞車」ともいふ。完曲〔舞車〕（「美人揃」參照）の一節で、完曲には、「美人揃」の次に、ワキ「近頃見事にて候。さらば東方の舞を御始めあらうずるにて候。シテ「畏つて候。シテクリ「漢皇三尺の劍、居ながら秦の亂を鎮めたり
といふ詞があつて、この「妻戸」が續いてゐる。

サシ「比叡山延暦寺の座主。法性坊の僧正とて。貴き人おはします。この人は三伏の夏の夜。五更も未だ明けざるに。九識の窓の前。十乘の床のほとりに。瑜伽の法水を湛へて。三密の月を澄まし見るに

クセ「妻戸をほとほとと。敲く聲すなり。誰なるらんと思し召し戸を開き見給へば過ぎにし二月や。後の五日に世を早うすと聞えし菅丞相にておはします。不思議やと思し召し請じ入れ奉り。

比叡山延暦寺の座主法性坊の僧正といつて、貴い方が居られる。この人が極暑の夏の夜、早朝まだ夜の明けない時に、靈窓で諸法識別の思ひを凝らし、十乘の觀法を行ひ、心身を清淨にして行ひ澄まして居られると、開き戸をことことと敲く音がする。「誰であらう」とお思ひになつて、戸を開いて御覧になると、去る二月廿五日この世を去られたといふことであつた菅原道眞公が立つて居られるのであつた。「これは不思議なことだ」とお思ひになつて、室の内へお招き入れになつて、「この夜更けに御出で遊ばしたのは、どうした御用なのでございます」とお尋ねになると、道眞公がお答へになるには、

○法性坊―名は尊意。延暦寺十三代の座主。天慶三年七十歳で寂す。この曲舞の事件「雷電」に作らる。
○五更―今の午前四時頃。
○九識の窓―九識は一切のものを識別する心、十乘は涅槃に入る十種の法、瑜伽はものの相應する意。委しくは「葵上」の語釋（一一六四頁）にいふ。
○三密の月―三密は身・口・意で、その清淨明白なことを月に喩へた語。
○妻戸―兩開きの戸。
○後の五日―二十五日。菅公は延喜三年二月廿五日薨じた。
○菅丞相―右大臣菅原道眞丞相は大臣の唐名。

○善臣―刊行會本には「全身」と書く。
○めでたう―刊行會本には「めでたく」
○普天の下―詩經小雅に「普天之下莫レ非二王土一、率土之濱莫レ非二王臣一」
○灑水の印―水を注いで火を消す意味の行法、印は手指で種々の形を造る行法。
○鑁字の明―大日如來に歸依する眞言。鑁は大日如來、明は眞言の意。手で印を結び口に眞言を唱へる行法。

深夜の御光臨何事にかはとありしかば。菅相答へて宣はく。濁れる世に生まれて無實の讒言力なし讒臣の仇を報ぜん爲。雷とならん時。善臣ばかりこそ。威光めでたう候へ。如何なる勅使なりとも。內裏に參り給はずは。生々世々にこの恩を。などかは報ぜざるべき。この御歎きは申しても餘りあるべし。如何なる勅使なりとても。二度までは參るまじ。勅使三度に及ばば。普天の下。率土のうち王土にあらずといふ事なし。殊さのみはいかがと宣へば。菅丞相の御色は。殊の外に變りつつ。折節御前に。柘榴を置かれたりしを。おつ取り口に含んで。はらはらと嚙み碎き妻戸にくわつと。吐きかくる。赤き柘榴は忽ちに。火焰となつて妻戸に。二尺ばかり燃えあがる。僧正見給ひ灑水の印を結んで。鑁字の

「自分は人の心の濁つた末世に生れたので、無實の讒言に遭つて、どうすることも出來なかつたのです。それて、讒臣の仇を討つ爲に、雷にならうと思ふのですが、その時、善い心掛の人は威光があつて、禍を受けないのです。たゞその時、どのやうな勅使が下つても、宮中へ參內なさらず、私のこの仇討の妨げをなさらなければ、後々の世までも必ず御恩報じを致しますこと」と、僧正これに答へて、「そのお歎きは申し上げるまでもない御尤もなことで、どのやうな勅使が下つても、二度までは參內しますまい。しかし三度まで勅使が下つた場合は、凡そこの世の中はすべて天子の御領地で、我々は皆その御恩澤に浴してゐるのですから、苟もこの國土に生まれた者が、それ以上王命に背くことは出來ません」と、かう仰しやると、道眞公の御樣子は非常に變つて、丁度その時、御前に柘榴が置かれてあつたのを、ひつたくつて、口に入れ、はらはらと嚙み碎いて、開き戸にくわつと吐きかけられた。すると、赤い柘榴が忽ちに火焰となつて、開き戸に二尺ばかり燃え上つた。僧正はこれを御覽になつて、水を注ぐ印形を結び、大日如來に歸する呪文

明を誦せしかば。火焰は消えにけりやなその妻戸は。山上の本坊に。今もありと聞ゆる

を唱へられると、火焰は消えてしまつたのであつた。その開き戸が今でも山上の本坊に殘つてゐるといふことである。

〔考　異〕

觀・喜全く同じ

鶴龜

寶

「漢の皇帝が巴園に不思議な橘實が實のつた由を聞し召し、臣下を遣はし給ふと、その園を守る老翁がめでたい瑞相を語り、仙童とともに舞樂を奏する」といふ〔巴園〕（能本作者註文に小次郎作）の一節で、古今謡曲解題に〔鶴龜〕の一節といつてゐるのは誤りである。

サシ「然るに千年丹頂の鶴。萬歳緑毛の龜までも地「今この御代に出現して。齢を授け奉ることこそ。げにありがたき。恵みなれ

さて、千年を經た丹頂の鶴や、萬年を經た緑毛の龜までが、今この聖代に現れ出て、めでたい長壽をわが大君に捧げ奉るのは、實にありがたいことである。

クセ「こゝは巴園の橘の。昔も今もためしなき。常

こゝ巴園の橘は、昔も今もその例を聞いたことのないめでたいもので、かの仙郷

○千年丹頂の鶴―淮南子に「鶴千歳極二其游一」、廣五行記補に「龜齢經二萬歳一」、緑毛は龜甲の毛、千年を經れば生ずといふ。

○巴園―支那、橘の名產地。

徒然

喜

兼好法師徒然草第七段の文をそのまゝ謡ひ物にしたものである。これを主材とした完曲は見當らない。

○常世の花―橘の花、常世は仙郷で、垂仁紀に―天皇命二田道間守一、遣二常世國一、令レ求二非時香菓一、今謂レ橘是也」

○松の花までも―新撰朗詠集、大江朝綱の詩句に「椿葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻、童蒙抄に二松花は千年に一度咲くとあり、百年を十度繰返すを十かへりといふ。

○くたかけ―未考。完曲貞享本にはーひやうにはくこけん仙の水―とある、

○火の沙―火舍又は火蛇で香爐の意か。

世の花の色變へぬ。げにや所から。年經る松の花までも。幾十かへりの色ならん。鶴も巣かくる枝垂れて。巖の苔に流れける。水にすむ龜までも綠毛の色ぞ年を經る

シテ『かかる住家もここなれや

地『磐石翠蘿ただこれ家。瓢にはくたかけ泉の水。又鼎には芙蓉ふく。火の沙を煉る住居や目のあたり。見る目に。餘る橘の仙郷に到る心地して。歸るさも思はれず。眺めに飽かぬ心かな

―常世の國の橘のやうに、いつまでも色が變らない。かうしためでたい所なので、一―年を經た松までが千年に一度咲く花を開き、鶴の巣をかけた枝は長く垂れて、巖の苔に接して居り、その巖の下水に住む龜までが、長壽をして甲に綠毛を生じてゐる―といふ、瑞相めでたい住家もこの所に外ならないのである。

―大きな巖に綠の蔦かづらのかゝつてゐるのが卽ちその住家、瓢には泉の水を湛へ、鼎には芙蓉を煮、薰りの高い香を煉る住居が目のあたりに見られて、譬へやうもない結構な橘の仙郷へ來た心地がして、歸ることもうち忘れ、いつまで眺めてゐても見飽かぬ景色である。

○あだし野―山城國嵯峨野の奥愛宕山麓の墓地。
○鳥部山―京都東山、六波羅蜜寺の南東にある火葬場。
○もののあはれ―情趣、情味、風雅な心。
○いみじ―甚だよい。
○かげろふの―淮南子說林訓に「蜉蝣朝生而夕死、而盡二其樂一」
○夏の蟬の―莊子逍遙遊に「蟪蛄不レ知二春秋一、此小年也」
○こよなう―この上もなく
○命長ければ―莊子天地篇に「多二男子一則多レ懼、富則多レ事、壽則多レ辱、是三者非三所二以養一レ德也」
○夕の陽に―白氏文集二、秦中吟不致仕に「朝露貪二名利一、夕陽憂二子孫一」

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにもののあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち。夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を。暮らすほどだにもこよなうのどけしや。飽かず惜しと。思はば千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世に見にくき姿を待ち得て何かはせん。

命長ければ。恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば。容を恥づる心もなく。人に出で交らはんことを思ひ。夕の陽に子孫を愛して。

もし人の命が不變で、あだし野に置かれる露の消える時もなく、鳥部山に火葬の煙も立ち去ることもなく、いつまでもこの世に住みおほすものであつたならば、さぞかし情趣、情味のない、殺風景なものであらう。この世の中は無常なので、大層結構なことなのだ。

一體、生命のあるものを見るのに、人間ほど長生きするものはない。生類の中には、かげろふのやうに朝生まれてその夕暮には死に、蟬のやうに夏だけの命で春秋を知らないものもあるのだ。ゆつたり寛いで暮らせば、一年を過すだけでも、この上もなくいとゆかた気持のするものだ。これに反して、いつまでも時を足りないと不足に思へば、千年生きてゐても、一夜の夢ほど短く感じることであらう。結局、いつかは死ぬ世の中だから、少しばかり長生きをして、見にくい姿を保つたところで、何の値打があらう。

長生きをすれば、とかく恥を多く見るものだ。どんなに長生きするとしても、四十にならない前に死ぬのが見よい。四十も過ぎると、とかく厚かましくなつて、人の前に出しやばりたがり、自分の見にくい姿を恥ぢる心もなく、いつ知れぬ危い命でありながら、子孫を愛して、その

榮ゆく末を見んまでの命をあらましひたすら。世を貪る心のみ深く。もののあはれも知らずなり行くなんあさましき

榮えて行く將來を見届けるまで命をほしがり、世を貪る心ばかり深くなつて、情趣・情味といふことをも知らないやうになつてしまふのは、あさましいことである。

定家一字題

觀（寶）

單に「一字題」とも題す。これを主材とした完曲は見當らない。此曲は光悦曲舞以下諸本に收む。

クセ〽抑も定家の、一字の題に春はまづ。霞鶯梅柳。蕨櫻桃梨雉や雲雀鳴く、蛙。菫山吹躑躅藤。夏にもなれば葵草。時鳥五月雨たたく水雞に橘に。螢や蟬に扇蓮。泉や秋は又 上〽荻萩露の薄蘭。雁鹿蟲に霧の月。鶉や鴫に菊。蔦。紅葉や 冬は又時雨降り置く霜氷。霰霙に雪

さて、定家が一文字の歌題として撰ばれたものには、まづ春の季節では、霞・鶯・梅・柳・蕨・櫻・桃・梨・雉、それから雲雀、水に鳴く蛙、菫・山吹・躑躅・藤、夏の季節に入つては、葵草・時鳥・五月雨、鳴く音が戸を敲くやうだといはれてゐる水雞、橘、それから螢や蟬に扇・蓮・泉、秋の季節では、荻・萩・露のかゝる薄・蘭・雁・鹿・蟲・霧・月、鶉や鴫・菊・紅葉、冬の季節では、時雨・霜・氷・霰・霙・雪・鴨・

○定家—藤原俊成の子、新古今集、新勅撰集の撰者。〔「定家」參照〕

○雲雀—山吹・躑躅など、一文字でないものが混つてゐる。

○時雨降り置く—時雨、時雨降り置く、置く霜といひ續けたのであらう。

鴨鷹。衾椎と書かれたり

「考異」

ク、抑も定家の……雲雀鳴く野　青野なく……たたく水雞　青水雞の鳥」に橋……上　荻花霜の……時雨

降り置く霜「霜の霜の薄」氷……

鴨・衾・椎、から書いて居られるのである、

東國下

観（喜）

「西國下」とともに現存闌曲中の最も古いもので、觀世流では「初瀬六代」「西國下」とともに三曲と稱して特別に扱つてゐる。世子六十以後申樂談儀に「東國下の曲舞「蓬萊宮は名のみして、刑戮に近き」、この段名誉の所也。「南無や三島の明神」より面白き所也。節は南無阿彌陀佛つく。西國下は觀阿節をつく。昔作者は玉林也。鹿苑院の御意に違ひて、東國に下りて、程經てこの曲舞を書きて、世子藤若と申しける時、謠はせられけるに、將軍家作者を御尋ねありて、召し出されける也」とある。曲舞としてのみ謠はれたもので、これを主材とした完曲はない。

○盛久―主馬盛國の末子。源氏に生捕られて鎌倉由比濱で斬られようとしたが、觀音の靈驗によつて救はれたといふ。「盛久」參照。

○鎌倉殿―鎌倉將軍頼朝。

クリ、抑もこの盛久と申すは。平家譜代の侍。武略の達者たりしかば。鎌倉殿まで知ろしめしたる。

さて、この盛久といふ人は、平家の家附の武士で、武勇兵略に勝れてゐたので、頼朝將軍まで御存知の勇者であつた。

◎これにて計らひ難しとて關東へ渡し遣はさる―刊行會本に據つた。榛本にはない。
○賀茂川―京都市東部を流る。鴨といひかけた。
○白河―洛東白川村を流れて賀茂川に入る。
○粟田口・松坂・四の宮河原・四つの辻―京都から近江へ出る道筋。この一節〔蟬丸〕に採る。
○知るも知らぬも―後撰集蟬丸の歌に「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」
○松本　今大津市の一部。
○打出の濱―大津の濱。
○范蠡―越王勾踐の重臣。主を助けて吳王を破つた後、功成名遂身退天道といつて湖を漫つて郷國に歸つた。五湖、ここ七七頁語釋參照。
○昔ながらの―天智天皇の舊都長等にいひかけた。
○石山寺―近江國滋賀郡。如意輪觀音を安置す。
○勢田の長橋―琵琶湖尻にかゝる。
○秋草の―世の中を飽くといひかけた。
○野路篠原―栗太郡、瀬田

つはものなり

サシ『これにて計らひ難しとて、關東へ渡し遣はさる。花の都を出でしより。音に鳴きそめし賀茂川や。末白河をうち渡り。粟田口にも着きしかば。今は誰をか松坂や。四の宮河原四つの辻

ヲセ　關の山路の村時雨。いとど袂や濡らすらん。知るも知らぬも逢坂の。嵐の風の音寒き松本の宿に打出の濱。湖水に月の影見えて。氷に波やたたむらん。越を辭せし范蠡が扁舟に棹を移すなる。五湖の煙の波の上。かくやと思ひ知られたり。昔ながらの。山里も都の名をや殘すらん。石山寺を拜めば。これ又救世の悲願の。世に超え給ふ御誓ひ。賴もしくぞや思ゆる。勢田の長橋影見えて。長虹波に連なれり。憂き世の中を秋草の。野路篠原の朝露。おき別れ行く旅の道

それで、このまゝ京都に勝手に取計らふことは出來ないといふので、關東へ遣られることとなつた。かくて、花の都を出發してより、悲しみの涙ながら賀茂川や白河を渡り、粟田口まで來ると、もはや都外れで、誰一人待つてくれる者もなく、松坂・四の宮河原・四の辻を過ぎ、逢坂關の山路にかゝると、村時雨が降りかゝつて、涙に濡れた袂を一層濡らすことであろ。知つた人、知らない人、多くの旅人の往來するこの逢坂山の嵐は音さへ寒い。やがて松本の宿に出て、打出の濱から琵琶湖を見渡すと、月影が波に映つて、波を疊み重ねたやうで、かの越王勾踐にお暇乞した范蠡が小さな舟に棹さして出て行つたといふ五湖の湖上の實景色も、このやうであつたであらうと想像せられるのである。舊都であつた長等は山里ながらも都の名を殘してゐることだ。石山寺を拜すると、この御本尊も觀世音であるから、一切衆生を救はうとの世に勝れたありがたい御誓願が賴もしく思はれる。勢田の長橋が水に映つた樣は、長い虹が水に連なつてゐるやうである。辛いこの世が飽き果てたから、野路・篠原と朝露に濡れて、次々の宿を別れて行くこ

の東北。
〇おき別れ—露の置きを起きにいひかけた。
〇露も時雨も—古今集紀貫之の歌「白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり」を引いた。守山は野洲郡の宿驛。
〇鏡山—蒲生郡。
〇武佐—同郡。
〇小野—犬上郡、今鳥居本村に屬す。斧と同音を重ねた。
〇磨針—坂田郡の峠。山上が番場驛。
〇醒が井—同郡。夢も醒め、醒が井の水、みづから、水掬ぶ、結ぶ草枕といひかけた。
〇柏原—同郡醒井の東。宿を貸すといひかけた。
〇山中—美濃國不破郡。
〇不破の關—同所。有名な關があつた。
〇垂井・青野が原・青墓・杭瀬川—皆不破郡。次第に東に進む。憂き世に逢ふを青墓にいひかけ、捨てぬ心を悔いを杭瀬川にいひかけた。
〇洲の俣—安八郡。今墨俣と書く。
〇海馬—羽島郡。今の足近川。
〇下津—尾張國中島郡。
〇萱津—同海東郡。

幾夜なを重ぬらん
上露も時雨も守山は、下葉残らぬもみぢ葉の。夕日に色やまさるらん。いにしへ今を鏡山形を誰か忘るべき。いさむ心はなけれどもその名ばかりは武佐の宿。まだ通ひ路も淺茅生の小野の宿より見渡せば。斧を磨きし磨針や。番場と音の聞えしは。この山松の夕嵐。旅寝の夢も醒が井の。みづから結ぶ草枕。誰か宿をも柏原。月も稀なる山中に、不破の關屋の板庇。久しくならぬ旅にだに都の方ぞ戀しき。垂井の宿を過ぎ行けば、青野が原は名のみして、皆夕霜の白妙、枯葉に洩るる草もなし。かかる憂き世に青墓や。捨てぬ心を杭瀬川。洲の俣海馬の渡りして。下津萱津うち過ぎて。熱田の宮に參れば
上蓬萊宮は名のみして刑戮に近きこの身の不

とであるが、かうした旅の夜を今後幾夜重ねることであらう。
露や時雨のかゝり易い守山では、下葉まで殘らず紅葉して、紅い夕日に映えて一層色を濃く染めることであらう。昔の事今の事の思ひやられる鏡山、誰とてもわが身上を顧みない者はなからう。囚人の身とて心の勇み立つ筈はないが、通つて行く宿驛の名だけは勇ましい武佐の宿。まだ旅馴れない間に淺茅の茂つた小野の宿まで來て、向ふを見渡せば、斧を磨いた磨針峠・番場といふ有名な所。この山松に吹き渡る夕嵐は殊に音が高くて、麓の醒が井に宿をとつても、旅寢の夢も醒まされてしまふ。次の宿は名も柏原といへば、誰にでも宿を貸すことであらう。洩れ入る月影も少い山中、荒れ果てた不破の關屋の板庇、かうした淋しい景色を見ては、まだ幾程にもならない旅の日數であつても、都の方が戀しい。垂井の宿を過ぎて行くと、次の宿は名ばかりは青野が原といつても、皆夕霜に眞白になつて、一本の草も殘らず枯れてゐる。あゝこのやうな辛い世に逢つたことだ、それでも心が捨てきれないのかと悔いながら、青墓や杭瀬川、洲の俣・海馬を通り

死の藥やなかるらん。蘆間の風の鳴海潟干汐につるる捨小舟ささで沖にや出でぬらん

サシ ささがにの蜘蛛手にかかる八橋や。澤邊に匂ふ杜若。在原の中將の。はるばる來ぬと詠ぜしも。今身の上に。知られたり

クセ なほ行く末は白眞弓。矢矧の宿赤坂。松にかかれる藤が枝の。梢の花を宮路山。渡津。今橋うち渡り。雲と煙の二村山は高師の名のみして野里に道や續くらん

上 波の滿干の汐見坂。蒼海天に連なりて。雲に漕ぎ入る沖つ舟。呉楚東南に分れて乾坤日夜浮かめり。歸らんことを白須賀に暫しおりゐる水鳥の下安からぬ心かな。夕汐のぼる橋本の。濱松が枝の年々に。幾春秋を送りけん。山は後の前澤。夜は明方の遠山に。はや横雲の引馬より

○熱田の宮―今名古屋市に入る。熱田を仙郷蓬萊山といふこと〔草薙〕（八八四頁）參照。
○鳴海潟―愛知郡。
○ささで―刊行會本には「さして」。
○ささがにの―伊勢物語の文に據つて八橋の序とした〔杜若〕參照。
○八橋―三河國碧海郡。知立町の東。
○在原の中將―左近衞中將在原業平の歌―唐衣きつつ馴れにし妻しあれば遙々きぬる旅をしぞ思ふ（伊勢物語・古今集）を指す。
○矢矧―碧海郡。弓矢といひかけた。
○赤坂・宮路山―寶飯郡。花を見を宮にいひかけた。
○渡津―同郡、今の下地町邊。
○今橋―今の豐橋市。
○二村山―三河國額田郡。
○高師―遠江國、濱名郡。
○汐見坂―同郡。白須賀の坂路。
○橋本―同郡新居町。濱名湖の橋が架つてゐる。
○濱松―同國濱松市。
○前澤―舞澤と同所。橋本附近であるが、今はない。
○引馬―濱名郡。雲の引くといひかけた。

過ぎ下津・萱野を過ぎ、やがて熱田の宮に參れば、こゝは名は蓬萊宮と呼ばれてゐるが、やがて斬罪に處せられるべき身には不死の藥もあるまい。蘆間に風の吹き鳴く鳴海潟では、引汐につれて、捨小舟が沖の方へ引かれて行くことであらう。橋が蜘蛛手のやうに架つてゐる八橋、澤邊に杜若の匂つてゐるこの所へ來ては、在原業平が「はるばる來ぬる旅をしぞ思ふ」と詠んだ心持が、今のわが身の上からよく察せられることだ。

なほも進んで行く先は果てしもなく、矢矧の宿・赤坂、松の枝に藤のかゝつてゐるのを見ては元木の花かと疑はれる宮路山、それから渡津・今橋を渡れば、雲煙のかゝつてゐる二村山、名は高師といつても、道は低い野里に續いてゐることであらう。

波のさし引の見える汐見坂、こゝから見渡せば、青海と天とが續いて、沖の舟は雲の中に漕ぎ入るやうであり、遠い國々が東に南に見渡されて、天地日月が波に浮かんでゐるやうだ。この旅に出た上は、二度都に歸れないと思へば、白須賀に暫く休んでも、水鳥のやうに心の休まる時とてはない。夕汐の溯る橋本、濱松の古

○池田・鷺坂・見附―みな磐田郡。國府は國司の廳のある所。
○掛川―小笠郡。波を掛けといひかけた。
○小夜の中山―同郡。新古今集西行法師の歌に「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」
○菊川―榛原郡。聞くといひかけた。
○藤枝―駿河國志太郡。
○岡部―同郡、藤枝の北。心置かるといひかけた。
○蔦の細道―宇津山を叙した伊勢物語の文に據つた。
○宇津の山―安倍郡。伊勢物語に「駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人の逢はぬなりけり」
○駿河の國府―今の靜岡市
○清見が關・薩埵山―庵原郡。
○三保が崎―安倍郡。「羽衣」參照。
○由比・蒲原―庵原郡。

天龍川も見えたり。衰へ果つる姿の。池田の宿鷺坂。旅寢にだにも馴れぬれば。夢も見附の國府とかや。岸邊に波を掛川。小夜の中山なかなかに。命のうちは白雲の又越ゆべしと思ひきや。憂き事をのみ菊川や。旅の疲れの駒場が原。變る淵瀬の大井川。川邊の松に言問はん

上 花紫の藤枝の。幾春かけて匂ふらん馴れにし旅の友だにも。心岡部の宿とかや。蔦の細道分け過ぎて。着馴衣を宇津の山うつつや夢になりぬらん。湊に近く引く網の。手越の川の朝夕に。思ひを駿河の國府を過ぎ清見が關のなかなかにとまらぬ旅や憂かるらん。薩埵山より見渡せば。遠く出でたる三保が崎。海岸そことも白波の。松原越しに眺むれば。梢に寄する海士小舟。あまりに袖や濡らすらん。由比蒲原をも過ぎしか

[illegible]は長い年月を過したことであらう。山は後にあつても行けば前途、夜も明け方になれば、もはや横雲のたなびく頃。このあたりまで來れば、天龍川も見える。衰へ果てた姿をして、池田の宿・鷺坂を過ぎ、かうして漸く旅寢にも馴れれば、夜の夢をも結ぶやうになつて見附の國府に着き、それから岸邊に波のかゝる掛川を過ぎ、小夜の中山へ來たが、存命の間に二度越えられようとは思はれない。辛い事ばかり聞く菊川、馬も旅に疲れる駒場が原、淵と瀬の變り易い大井川、――この川邊の松に昔の事を尋ねたいものだ。藤枝といへば、美しい紫の花が幾春咲き匂ふことであらう。馴れた旅の友にも氣兼ねのせられるのは岡部の宿だとか。やがて蔦の細道を分けて宇津山を越えれば、すべてが夢うつつのやうに思はれる。湊近くで網を引いてゐる手越川では朝夕に物思ひをすることであらう。駿河の國府（靜岡）を過ぎ、清見が關へ來たが、關といつても旅を留められないのが却つて辛い。薩埵山から見渡すと、遠くに突出してゐる三保が崎。どこが海岸とも分らない白波のうち寄せてゐるのを、松原越しに眺めると、海士小舟が梢に寄せて

ば。田子の浦わも近くなる
上西天唐土扶桑國。竝ぶ山なき富士の根や萬天の雲を重ぬらん浮島が原を過ぎしかば。左は湖水波寄せて。蘆葉淺水の浮鳥の。上毛の霜をうち拂ふ。右は蒼海遙かにて漁村の孤帆幽かなり。羊車鹿車大牛の車返しはこれかとよ
上伊豆の國府にも着きしかば。南無や三島の明神。本地大通智勝佛過去塵點の如くにて。黄泉中有の旅の空。長闇冥の巷までもわれ等を照らし給へと。深くぞ祈誓申しける雪の古枝の枯れてだに二度花や咲きぬらん

〔考異〕
クセ　關の山路の……湖水に月の影見え（喜落ちて）……上　露も時雨も……斧（喜父斤）を磨き（喜とぎ）し磨針や……垂井の宿を過ぎ行け（喜ぐれ）ば……捨てぬ心を杭瀬（喜救世）川……下津萱（喜貝）津うち過

○田子の浦―今蒲原町の内
○扶桑國―扶桑のある仙郷。日本の異稱。
○浮島が原―駿東郡。
○頓教智解―頓教は階段を經ないで直に大乘を頓悟する教法。智解は事理を了解すること。
○火宅の門―法華經譬喩品に、苦惱の多いこの世を火宅に、佛道に入る方便を羊鹿牛の三車に譬へた語。（葵上）參照。
○伊豆の國府―三島。
○南無や三島の明神以下の語「春榮」に採る。同曲の語釋一四一五頁參照。

くるやうで、あたりの絶景に袖を濡らすことだ。由比・蒲原も過ぎると、田子の浦も近くなる。印度・支那・日本の三國かけて、これに竝ぶもののない富士山は高い天の雲を重ねてゐることであらう。浮島が原を通ると、左は湖水の波がうち寄せて、蘆の葉の生えた水の淺い所で水鳥が上毛の霜を拂つて居り、右の方は廣々とした青海で、漁村の船が幽かに見える。法華經に衆生が火宅の門を出かねた時の方便とせられた羊車・鹿車・大牛車に緣のある車返しはこの所だといふ。
伊豆の國府（三島）に着いたので「どうか三島明神樣、明神の御本地大通智勝佛が久遠劫の昔世界を明らかにお照らしになつたやうに、冥途の闇路、永へにくらやみの世界に迷ふ私どもを、どうかお照らし下さい」と、深くお祈りした。定めし枯れた古枝に二度花の咲くやうな奇蹟があることであらう。

きて……刑戮に近きこの（喜わが）身の……くさなほ行く末は……松にかかれる藤浪（喜波）の……二村山は（喜ナシ）高師の……上波の滿干の汐見坂砦（喜遠）海……幾年秋を送りけ（喜ら）ん……憂き事をのみ（喜のみを）菊川や……上西天唐土扶桑國……蘆葉（喜淩波）淺水の……火宅の門を出でかね（喜そめ）し

内府

觀

〔平清盛が後白河法皇を北殿に遷し奉らうとするのを聞いて、重盛が馳せ參じて、これを諫止する〕といふ〔内府〕の一節で、平家物語巻二「教訓の事」に據つた。直幸曲舞以下諸本に收む。

サシ　されば穎川の水にて耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命は背かず、その上心地觀經の文を見るに、世に四恩候。天地の恩國王の恩。父母の恩衆生の恩その中に、最も重きは朝恩なり。普天の下王土にあらずと。いふことなし

かの穎川の水で俗事を聞いた耳の汚れを洗つた許由、新主の粟は食はないと首陽山に隠れて蕨を食つた伯夷・叔齊の如き賢人も、勅命には背かなかつたのです。殊に心地觀經の文を見ますと『世の中に四の恩がある。天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩である』とあります。この四恩の中でも最も重いのは國王の恩であります。凡そこの國土はすべて國王の御支配遊ばさない所はありません。それで、十善萬乘の天子の御位は、多く

○穎川の水にて―帝堯が許由といふ隠士に天下を讓らうとすると、許由はそのやうな俗事は聞いただけでも耳が汚れたと、穎川の水で洗つたといふ故事。○首陽山に―周武王が殷を討つたのを、伯夷叔齊の兄弟が諫止したが、聽かれず、終に殷を亡したので、兄弟は周の粟を食ふのを恥ぢ、首陽山に隠れ、蕨を食つて餓死した。○四恩―心地觀經には、父

、母恩・國王恩・衆生恩・三寶恩とある。
○普天の下―詩經小雅に「普天之下莫レ非ニ王土一。率土之濱莫レ非ニ王臣一」
○十善萬乘―佛の十戒を保つて、兵車萬輛を出す君主と生まれた方。天子。
○結番―神々が順番を定めて王位を守護し給ふこと。

ウセ」さればにや十善萬乘の御位は。もろもろの神達結番し守り給ふとか。神だにも遁れ得ぬ。王位を犯し給はんは、神罰も恐ろしや、この上は事の由を、伺ひ給はば、など聞し召し直されで。嵐の山松の幾久しさも限らじな

上　その上これにより。君と臣とを比ぶるに。親疎を分くことなく。君につき奉るこそ忠臣の法と聞くものを。道理と僻事をならぶるにいかで。道理につかざらんと。涙を流して宣へば。わが子に諫められ。心ならずもとまりけり

の神々が順番を定めて御守護になるとの事であります。神でさへも天子をおろそかになさることは出來ないのです。まして人臣の身を以て天子の御位を犯さうとなさるのは、どのやうな神罰があらうかと、恐ろしく思はれます。この上は、事の次第をよく奏聞なされたならば、必ず御聞届け遊ばして、嵐山の松のやうに幾千代かけて限りなく御榮えになることと存じます。

ただ今申し上げましたやうな次第で君と臣との關係を比べますと、君臣と父子といづれが親しいにしても、そのやうな事に關係なく、たゞひたすら君につき奉るのが忠臣の道であると思はれます。それに、道理と不道理とを比べれば、どうしても道理の方につかなければなりません」と、涙を流していはれると、清盛もわが子に諫められて、心ならずも思ひ留まつた。

西濱八景

寶

一 瀟湘八景、近江八景などに擬へて、和田浦附近の八景を選んだもの。定曲・古本とも見當らない。

見渡せば四方の眺めも數々の。中に名に負ふ吹上の。風も靜かに夜の雨

昔はまがはぬ折節に。誰を松江の秋の月。影もさやかに隈もなき。空に落ちくる雁の聲。蘆邊をさして幾列も。かた葉の蘆に落ちくるや。峯高く。雲も嵐に吹き落ちて。この金城の粧ひは。幾萬代も限らじな。葛城山の。雲の暮に。沖の小舟も帆を引きて。水門に歸る追風と。紀の川面に架け渡す。橋に夕日の。照り添ひて暮やや近くなりぬれば。愛宕の山に。入相の。鐘も響きて。面白き。眺め盡きせぬ景色かな

○吹上—和歌山市の西南部から海草郡雜賀村に至る海濱。

○松江—海草郡。古の紀伊濱の一部。

○かた葉の蘆—葉が對生でなく互生になつてゐる蘆。和歌浦の名物。

○葛城山—大和葛城山の峯續きの雄之山であらう。

○水門—雄之水門。

○紀の川—大和吉野川の下流で、和歌山市の東部を流る。

見渡すと、四方の景色がいろ〳〵面白い中にも、有名な吹上濱の西風が靜かで、夜の雨のしと〳〵と降つてゐるのも面白い。昔の、眞の景色の美と見違へるやうな皆もないのに、誰かに呼ばれたやうに、人待も顔に照つてゐる松江の秋の月、その光の鮮やかに映る隈もなく照り渡つてゐる空から飛び下りてくる雁の聲、その雁も幾列も濱の蘆邊をさして、かた葉の蘆へ飛び下りてくることだ。山の峯高く聳え、雲も嵐に拂はれて、堂堂たる樣を示してゐるのは、幾萬年の後までも變へることのないやうに思ひやられる。葛城山に雲のかゝつてゐる夕暮、沖の小舟が帆を引いて、追風に吹かれながら雄之水門へ歸つてくると、紀の川に架けた橋に夕日が照り添ひ、やがて夕暮近くなると、愛宕の山から入相の鐘が響いて來て、何處を見ても眺め飽きない面白い景色である。

博多物狂

觀

光悦本曲舞以下諸本に收めてゐるが、完曲は見當らない。恐らく〔柏崎〕などの如く、わが子の行方を失つた狂女が阿彌陀如來の尊前に參つて、母子の對面を祈るといふ曲の一節であらう。

○生死の海　衆生の生死流轉する苦惱の多い世を海に喩へた語。
○眞如の月　眞如は不變不易の實體、悟り。これを月に喩へた。
○涼しき道　極樂淨土。
○□得んとせり―刊行會本には「得んとなり」
○南無歸命―南無は梵語、歸命はその漢譯。佛に身命を歸投する意。

クセ「つらつら浮世の有様は。夢に住んで現とす。人界を案ずるに。水の上の泡雪海上に殘る捨小舟の。波に日を送りて風に迷ふ如くなり

上「漸く生死の海の面。煩惱の波しげく。罪障の雲霧に眞如の月は隱るとも。一念稱名の力にて涼しき道に到りなば。これやこの極樂の。彌陀光明を身に受け得脱を正に得んとせり。南無歸命彌陀尊願を叶へ給へや

つく〴〵と考へるのに、この浮世の有様は夢のやうなものであるのに、その中に住んでゐながら現のつもりでゐるのである。人間の命は考へて見れば、水の上の泡か雪のやうに消え易く、海上に捨てられた小舟が一日中波にゆられ風に迷つてゐるやうな、果敢ないものである。かうした、生きては死に死んでは生まれる娑婆世界は煩惱が多く罪障を積み重ねて、容易に悟りを開くことが出來にくいが、たゞひたすら南無阿彌陀佛と稱名を力にして、極樂淨土に行けば、極樂世界の教主阿彌陀如來の光明をわが身に受けて、確かに成佛することが出來るとの事である。どうか阿彌陀如來樣、私のお願ひをお叶へ下さいませ。

初瀬六代

觀　（喜一）

「泊瀬六代」とも書く。觀世流では「東國下」「西國下」とともに特に三曲と稱す、作者は傳はらないが、此曲
曲舞以下古本に收む。平家物語卷十二「長谷六代の事」源平盛衰記卷四十七「六代蒙免上洛附長谷觀音靈詣
文佛師事」などを骨子としたものである。

サシ『それ世間の無常は旅泊の夕に現れ、有爲の轉變は草露の風に滅するが如し
「われ一所不住の沙門として、緣に任せて諸國を廻る。「名所舊跡おのづから、捨てて交はる塵の世の。夢も現も隔てなく。好去却來の境界に至る。
「ここに大和の國初瀨の觀世音は、靈驗殊勝の御事なれば。暫く參籠し山寺の致景を見るに
下歌『山聳え谷廻りて人家雲に連なり晩鐘雨に

この世の中の無常なことは旅の宿て夕を迎へるやうなもので、この世のすべての現象が移り變つて行く樣は、恰も草の露が風で消え失せるやうなものです。
自分は所定めず修行して步いてゐる僧として、佛緣に任せて諸國を遊歷してゐると、所々の名所舊跡を見るにつけても、俗世間を捨てた身には、夢現の差別がなく、たゞ心のまゝにわが好む所に往來してゐるのです。
さてこゝ大和國初瀨の觀世音は靈驗の殊にあらたかな御佛ですから、暫くお籠りして、この山寺の景色を眺めると、山は高く聳え、谷がとりまいて、人家がずつとうち續き、入相の鐘が雨の中に響き渡り、

(一)有爲—因緣によつて生じた諸現象。

(二)沙門—沙門那の略。僧。

(三)初瀨の觀世音—大和國磯城郡初瀨村。長谷寺。本尊十一面觀音。

響きぬ。上歌「川隈も。なほ暮れかかる雲の波。なほ暮れかかる雲の波。さながら海の如くにて。補陀落も隠口の初瀬の寺はありがたや。げにや海士小舟。はつせの山に降る雪と。詠みしもさぞなかく川の浦の名もある景色かな浦の名もある景色かな

「ここにあはれなる事の候。御堂の西のつまに。局しつらひて女性の籠りけるが。身に思ひありしと見えて。忍びかねたる言の葉の。色に出で音に立てても。唯泣くのみなる有様なり

「或時。女房達と思しき人。御堂の四面をまはり。千度の歩みを運ぶと見えしが。未だ數も終らざるに。あわたたしく局に走り入り。唯今あさましき事をこそ聞きて候へ。駿河の國の千本の松原にて。平家の棟梁六代御前の斬られさせ給ふ

そして初瀬川の川隈に夕暮の雲のかゝつてゐる様は、宛ら海のやうで、觀世音菩薩の住み給ふといふ補陀落もこの所であらうかと想はれて、初瀬寺は誠にありがたいことです。古歌に「海士小舟はつせの山」と詠まれたのも、いかにも尤もだと思はれて、そのかく川の浦景色も有名な結構なものです。

ところが、こゝにあはれた事があるのです。それに、御堂の西の軒端に部屋を造つて、女がお籠りしてゐますが、何か心配事があると見えて、包み隠しかねて、言葉に出て、顔色に現れ、たゞ聲を立てて泣いてばかりゐる様子です。

或時、侍女達と思はれる人が、御堂の周圍をまはつて、お千度詣りをしてゐるやうでしたが、まだその數も終らないうちに、あわてて部屋に走り歸り、唯今あさましい事を聞きました。駿河國千本松原で、平家の總大將六代御前がお斬られになるのを見たと申す者がございました」といひも終らず、伏し倒れて泣きました。

○補陀落―補陀落迦、觀世音菩薩の住む海島。
○隠口の―初瀬の枕詞。補陀落もかくあらんといひかけた。
○海士小舟はつせの山に―萬葉集巻十一「海士小舟泊瀬の山に降る雪のけながく戀しし君が音ぞする」を指す。
○かく川―初瀬川の一部か。この句「玉葛」にもある。
○つま―端、
○局―部屋、
○身に思ひありし―刊行會本には「身に思ひあり」
○千度の歩みを―御堂のまはりを千度歩くこと。お百度詣りのこと。
○千本の松原―駿東郡、沼津の海邊、
○六代御前―平維盛の長子。源氏に捕はれ斬られようとしたが、文覺の歎願によつて赦された。時に年十二。

しかし三十歳の時終に斬られた。

◎思ひしに—刊行會本には「思ひつるに」

○孔子—支那の聖人。姓は孔、名は丘、字は仲尼。

○鯉魚—孔子の子。名は鯉、字は伯魚、鯉魚とはその名と字とを混同したのである。

○白居易—字は樂天。唐代の著名な詩人、この人のこと「白樂天」に作る。

○枕に殘る藥—白氏文集十四、「病中哭金鑾子」の詩に「豈料吾方病、翻悲汝不レ全、臥驚從ニ枕上一、扶哭就ニ燈前一、有レ女誠爲レ累、無レ兒豈免レ憐、病來纔十日、養得已三年、慈淚隨レ聲迸、悲傷遇レ物牽、故衣猶架上、殘藥尚頭邊。」

○仁義禮智信の祖師—孔子を指す。

○文道の大祖—白居易を指す。

○上人—文覺を指す。

を。「見て候」と申す者の候と申しもあへず伏しまろびたり。その時主の女房、さりともとこそ思ひしに。さてははや斬られけるかと、聲も惜しまず伏し沈み給ふ。さては六代の母にてましましけるよと。その時こそ人も思ひけれ

クリ「傳へ聞く孔子は鯉魚に別れて、思ひの火を胸にたき、白居易は子を先だてて、枕に殘る藥を恨む

下「これ皆仁義禮智信の祖師、文道の大祖たり。況んや末世の衆生といひ、しかも女人の身として。恩愛の別れを悲しむこと、げにもまことに理なれども。その理も過ぐるばかり、よその袂もうるほへり、ややあつて母御前、淚をおさへてのたまふやう。さるにてもわが子をば。上人の御助けをこそ頼みつるに。その御かひもな

その時主人の女が「もしかとすると、助からうかと思つてゐたのに」と、聲も惜しまず伏し倒れてお泣きになつた。「さてはあの方は六代御前の母君でいらつしやるのであつた」と、その時始めて人も氣づいたのでした。

昔の話に、孔子はわが子鯉魚に死別して悲歎の淚にくれ、白居易はわが子を先に死なせて、枕許に飲み殘した藥を恨んだといふことです。

この方々は仁義禮智信の道德を開かれた方、文學の道を開かれた御祖先です。そのやうな偉い方でもわが子の死別はお歎きになるのですから、まして末世澆季の、德の足りない衆生で、殊に女の身として、恩愛の別れを悲しむのは、いかにも尤もな事と思はれたが、それにしても餘りにも並外れた歎き方に、はたの見る目も氣の毒で、思はず貰ひ泣きに袂を濕すのでありました。暫くして、その母君が淚を留めていはれるには、「それにしても、わが子をば文覺上人がお助け下さることと

○齋藤五齋藤六―齋藤別當實盛の遺子で、維盛に侍從した。

○まさり草―菊の異名。心も増さるといひかけ、種を呼び出す料とした。

○つくづく―鐘を撞くといひかけだ。

○かけまくも―頼みをかけるといひかけた。

きやらん。もしは眞に斬られなば。齋藤五齋藤六。走りも來りて申すべきに。ただよそ人のつてにだに。早くも聞ゆるほどなるに。何とて彼等は遲きやらんと。聲も惜しまぬ言の葉の。色も心もまさり草。何をか種と。思ひ子の。憂き世に殘る。身ぞつらき

クセ二 初瀬の鐘の聲。つくづく思へ世の中は。諸行無常の理。假に見ゆる親子の。夢まぼろしの時の間と。かねてはかくと思へどもまこと別れになる時は。思ひし心もうち失せて唯くれくれと堪へかぬる。胸の火は焦がれて身は消ゆる心のみなり。さるにてもわが子の失はれんとしけるとは。知れどもなほ やさりともの。頼みをかけまくも。かたじけなくもただ頼め。南無や大悲の觀世音。願はくはもとよりの御誓願に任せ

頼みにしてゐたのに、上人の御盡力も效がなかつたのであらうか。若しほんとに斬られたのであれば、側についてゐる齋藤五・齋藤六が走つて來て知らせさうなものだのに、全くの他人でさへ人傳てに早くも聞いてゐるのに、何故齋藤五等の歸りが遲いのであらう」と、聲も惜しまずかき口說いて、嘆きの色は愈〻濃く、「ああこの後は何を慰みとして過さう。可愛い子の亡くなつた後、この憂き世に生き殘つてゐる身がつらい。」

あの初瀬の鐘の聲の聞えて來るにつけてよくよく考へるがよい。あの鐘の音によつて、この世の中のものはすべて無常であるといふ道理が知られるのであつて、一世限りの親子の緣を結ぶのも、夢まぼろしのやうな、ほんの僅かの間である。といふ理窟は以前から知つてゐるものの、愈〻親子の別れに出會ふ時は、以前に考へてゐた心もどこへやら行つてしまつて、たゞ悲しみに堪へられなくて、胸の中は火のやうに燃え、からだは今にも消えてしまひさうだ。それにしても、わが子が斬られるらしいといふことは前から知つてはゐたが、それでも、萬一にもと心頼みにして、勿體ないことながら

〔念彼觀音力〕―法華經觀世音菩薩普門品に「或遭ニ王難苦一臨レ刑欲ニ壽終一念ニ彼觀音力一刀尋段々壞」

〔御教書〕―將軍の命令書。

つつ
上。念彼。觀音力刀尋。段々の功力げに。僞らせ給はずば。劒をも折らせてわが子を助け給へや
上。かかりける處に。男一人來りつつ。齋藤五參りたりと申せば御母も。いかにいかにとのたまへば。御悦びになりたり。駿河の千本にて既に。斬られさせ給ひしを。上人その時に。駒を早めて走り下り。悦びの御教書にて。助からせ給ふ由。申せば御母も。餘りの事の心にや嬉しきとだにも辨へず。ただ茫然とあきれつつ。ありがたのことやと手を合はせ給ふ袂にも。覺えず落つる涙の。嬉しき袖をだに乾さぬや涙なるらん

ありがたい大慈大悲の觀世音樣、どうか昔からの御誓願の通り、「彼の觀音力を念ずれば、刀段々に壞れん」といふ御利益にうそ僞りがないならば、どうかわが子を斬らうとする劒をも折つて、わが子をお助け下さい（と、祈つてゐました）そこへ、一人の男が來て「齋藤五が參りました」といふと、母君も「どうであつた〳〵」とお尋ねになると「お嬉しい事になりました。駿河の千本で將に斬られようと遊ばしたところへ、文覺上人が馬を馳せてお出でになり、馬から急ぎお下りになつて、嬉しい御教書をお示しになつてお助かりになりました」といふと、母君も餘り意外なことなので「嬉しい」とさへおいひにならず、たゞぼんやりと呆れて居られたが、暫くして「あゝありがたいことだ」と、手をお合はせになつたその袂にも思はず涙が落ちました。まことに涙といふものは、悲しい時ばかりに限らず、嬉しい時でも袖も乾かないばかり流れ落ちるものと見えます。

〔考異〕

サシ「それ世間の……緣に任せて諸國を廻る（喜國土を廻れば）……好去（喜馬故）郤來の境界に至る……暫く參籠（喜申）し……」ここにあはれなる事の候御堂の西のつまに……唯泣くのみなる有樣なり（喜ナシ）或時女房達……數も終らざる（喜數）に……あわたたしく局に（喜ナシ）走り入（喜歸）り……駿河の國の

（喜ナシ）千本の松原（喜とかや）にて……六代御前の（喜ナシ）斬られさせ給ふを見て候ヒ……命も惜しまず（喜とて）人の多く集まりたるを見て參り侍ふと申しさむらふとて、涙に咽びて、伏し沈み給ふ……下とれ皆仁義禮智信……涙をおさへ（喜にむせび）てのたまふやう……もし（喜さ）は眞に斬られなば……言の葉の色も心もまさり草……憂き世に殘る（喜何をか種に老の身の）跡に殘れる身ぞつらきクセ初瀬の……かたじけなくも（喜ぞ）ただ頼め　上かかりける處に……御母も（喜は）いかに……御母も（喜は）餘りの事の心にや嬉しきとだにも辨へ（喜いひあへ）ず

花筐（はながたみ）

喜

〔花筐〕の一節（第四卷二五九二―二五九三頁）であるから、語釋・口語譯は省略す。

クセ「帝深く。歎かせ給ひて。その御形を甘泉殿の壁に寫し われも畫圖に立ち添ひて明暮歎き給ひけり。されどもなかなか。御思ひは增されども。物いひ交はす事なきを。深く歎き給へば。李少と申す太子の。いとけなくましますが父帝に奏し給ふやう

上「李夫人はもとはこれ。上界の嬖妾。くわすゐこくの仙女たり。一旦人間に。生まるるとは申せども終に本の仙宮に歸りぬ。泰山府君に申さく。李夫人の面影を。暫くここに招くべしとて。九華帳の内にして反魂香をたき給ふ。夜更け人靜まり。風すさまじく。月秋なるに それかと思ふ面影の。あるかなきかにかげろへば。猶いやましの思ひ草葉末に結ぶ白露の。手にもたまらで程もなく唯徒ら

「歎かせ給ひて」完曲觀世流には「歎かせ給ひつつ」

「仙女たり」觀世流では「仙女なり」

□あまりに―觀世流では「あまりに」

に消えぬれば。漂渺悠揚としては又、尋ぬべきかたなし。悲しさのあまりにや。李夫人の住み馴れし甘泉殿を立ち去らず。空しき床をうち拂ひ。古き衾古き枕ひとり袂をかたしく、

反魂香

觀

「藤谷但江が谷の女が、都に上つた父の歸りを待ちわびて尋ね上つたところ、その途中で死んでしまつた。折しも父が同じ宿に泊り合はせてこれを知り、情ある僧の好意によつて、反魂香を焚いて亡き女の姿を見たが、眞の身には終に逢ふことが出來なかつたので、その所の森を不逢森と名づけた」といふ「あはでの森」謠本作者註文に「世阿彌作」の一節で、禪竹の五音三曲集にこの クセ 以下の文を擧げてゐる。光悅百番以下諸本に收む。

上歌 立ち去りて跡もなく。形も消えて跡はただ、煙ばかりぞ反魂の。孝行の子ならばなどや暫しも留まらぬ

クセ 傳へ聞く漢王は。李夫人の別れゆゑ甘泉殿の床の上に古き衾の恨みを添へ。九華帳の内に

―わが子は死んでしまつて跡かたもなく、形は消えてしまつて、跡に殘るものといへば、ただ煙ばかりだ。孝行の子であるならば、たとへ反魂香によつて移つて、暫くでも姿を留めてくれないのだ。話に聞けば、昔漢武帝は李夫人に死別した悲しみに、甘泉殿の床の上に殘つた元のまゝの衾を見ては、愈々嘆きを加へ、

○反魂―返魂とも書く。漢武內傳に「西海聚窟洲、有ニ返魂樹一、狀如ニ楓柏一、花葉香聞ニ百里一、采ニ其根一、於ニ釜中一水煮、取レ汁錬レ之如レ漆、及香成也、其名有レ六、曰ニ返魂・驚精・回生・振靈・馬精・却死一、凡有ニ疫死者一、燒ニ豆許一薰レ之再活、故曰ニ返魂一」。
○漢王は李夫人の別れ―白氏文集に「漢武帝初喪ニ李夫

てはこの香の煙を立て。月の夜更け行く鐘の聲艶容便々とけしきだつ。玉殿にうつろひて。李夫人の御姿。ほのかに見え給へり

上三五夜中の新月の。夜半の空隈なくて。長安雲上の粧ひ氣色に至る心地して。皆感涙をうるほせば。君も龍顔に御袖をおしあてゝ。反魂の煙の中に立ち寄らせ給へば。又李夫人は消え消えと。時雨もまじる有明の。見えつ隠れつ陽炎の。あるかなきかの御姿。かくやと思ひ知られたり

人ニ夫人病時不レ肯レ別、死後留ニ生前恩ニ君恩不レ盡思未レ已、甘泉殿裏令レ寫レ眞、丹青寫出竟何益、不レ言不レ笑愁ニ殺人ニ、亦令ニ方士合ニ靈藥ニ、玉釜煎練金爐焚、九華帳深夜悄々、反魂香降ニ夫人魂ニ、夫人之魂有ニ何許ニ、香煙引到ニ焚レ香處ニ、既來何若不ニ須臾ニ、縹緲悠揚還滅去—

○三五夜中の—和漢朗詠集白樂天の詩句—三五夜中新月色、二千里外故人心—

○長安　漢の都の地。

花模様の繡をした美しい九重の戸ばりの中で、この反魂香をお焚きになると、月の夜が更けて行つて、鐘の聲の寂しく聞えてくる折から、美しい姿がほんやりと現れて來て、御殿に映つて李夫人の御姿がほんのりとお見えになつた。

時は八月十五夜、鮮かな月が夜半の空に隈なく照り渡つて、長安の都御所の様子が如何にも李夫人の御在世のやうな感じがして、臣下の者も皆感涙を催すと、武帝も御顏に御袖をおあてになつて、反魂香の煙の中にお立ち寄りになると、李夫人は又消え消えになつて、時雨の降りまじる明方の空に、見えつ隠れつして、陽炎のやうに、あるかなきかの御姿に消えて行かれたといふのも、このやうであらうかと思ひ知られた。

〔考　異〕（五音三曲集）

クセ「傳へ聞く……　月の夜更け行く鐘」（五風）の音……　李夫人の御姿（五かたち）

「舞車」といふ。「近江國見附では祇園祭に東西二つの舞車を作り、前年この宿に泊つた旅人に車上で音を競はせる風習があつた。偶に中を裂かれた男女が図らずこの祭に来合はせ、同じく舞車に出て廻り合つたといふ「舞車」（謡本作者註文に宮増作）の一節で、この「美人揃」はその西方の舞（女）の詞として、これに續く「妻戸」は東方の舞（男）の詞として作られたものである。光悦謡本以下諸本に收む。

美人揃

觀

○伊勢物語―業平の自叙傳の如くにいひ傳へられた平安初期の歌物語。

○以上十二人―合計十二人。以下その名を擧げてゐるが、俗說に據つたのであつて、伊勢物語の本文に出てゐるのではない。この曲の出所は未だ詳かにしないが、冷泉流伊勢物語註には「八橋とは八人をいづれも捨てず思ひ渡す心なり。八人といふは、三條の町、有常の娘、貞文の妹、伊勢、小町、常純の妹、染殿内侍、初草女なり」とある。この中、有常の娘のことは「井筒」に、染殿の后のことは「小鹽」に作られてゐる。

◎增尾の卿―刊行會本には「增尾卿」

○住吉の社―大阪市住吉にある和歌の守護神。

サシ「凡そ伊勢物語に見えたるは以上十二人なり。第一は紀の有常が娘。第二には忠仁公の御息女。清和天皇の后宮に。染殿の后これなり

クセ『第五には。長柄の卿の御娘。第六は。筑紫の染川の里の女なりけり第十は。增尾の卿の妹に戀死の女これなり。十一は周防の守。在原の仲平が娘なりけり十二には。大和の守繼景が息女に。今の伊勢にてありしが。その名の所を書きかへて。后宮の上童に猿子の前とぞ召されける住吉

（業平が契りを結んだ女性の中で）、伊勢物語に記されてゐるのは、合計十二人である。その第一は紀有常の娘、第二は忠仁公（良房）の御息女で、清和天皇の皇后（實は文德天皇の皇后で清和天皇の御母）であらせられる染殿の后である。第五には長柄の卿の御娘、第六には筑紫の染川（藍染川）の里の女であり、第十は增尾卿の妹で「戀死の女」と呼ばれた人、第十一は周防守在原仲平の女であつた。第十二は大和守繼景の息女で、今の伊勢であつたが、その名を書きかへて、后宮の殿上童の猿子の前と呼ばれてゐた（かういふ祕事を知りたいと思つて）自分は住吉明神に參詣し、長い日數お祈

〇かけまくも—頼みをかけといひかけた。
◎尋ぬるに—刊行會本には「尋ぬれば」
〇奥儀—祕事祕傳。前揭十二人の女の名が即ちその一である。〔雲林院〕にも伊勢物語祕事を記してゐる。
〇聊爾—輕卒な、粗忽なこと。刊行會本には「率爾」
〇左右なう—簡單に、容易に。

の社に參りて。日數を送り祈念する。懇請しきりに隙なくは。感應いかでなからんと。頼みを深くかけまくも。畏き神の御前にて靜かに法施を參らせ宮人とおぼしき老體に。この物語を尋ぬるに

上「いさとよ對面のはじめに伊勢物語の奥儀を。くれくれと語らんは。且はそら恐ろし且は道の聊爾なりとて左右なう物をもいはざりけり。美人の中にとりてはいづれか劣り勝らん

りして、このやうに絶え間なく一生懸命にお願ひ申し上げたならば、きつと靈驗があるに違ひないと、頼みをかけて、神前で靜かにお供物を奉り、神主らしい老人に、この物語の祕事を尋ねると、その老人は「いや〳〵、始めて對面したものに伊勢物語の祕事奥儀を委しく話して聞かせるのは、一つには勿體ないことであり、又一つには歌道を粗末にすることになる」といつて、容易に物もいはなかつた。成程いづれも優り劣りのない美人であるから、答へたいのも尤もなことである。

母衣

喜

貞享曲舞以下諸本に收めてゐるが、完曲は傳はらない。

○張良—韓の人。劉邦を扶けて支那の天下を統一せしめた。黄石公から兵法を授かつた事「張良」に作らる。
○項羽—秦を亡ぼして劉邦と天下を爭つたが、終に敗死した。「項羽」參照。
○高祖—漢の第一世。名は劉邦。
○箙—矢を入れて背に負ふもの。

上 昔漢の張良と聞えしは、黄石公が兵術を傳へ、高祖皇帝の師範たり

サシ その後項羽高祖の戰ひ七十餘度に及ぶといへども、謀を帷幄の中にめぐらし。勝つことを千里の外にあらはしぬ。これ張良が智謀にあらずや

クセ 或時張良。母に向ひて申すやう。われ戰場に臨みつつ。謀をなす隙に、後につづく味方の勢。箙にさせる矢を拔きて敵を射ることあり。いかがはせんと申ししに。母これを聞きつけ。上衣を脱いで縫ひつづけ、箙の矢に懸けしかば、八百萬の軍神、母衣の縫目にうつりて。將帥の名をかかやかす。それよりほろとは晃衣と書きたり、さて又母の衣と書きしも今の謂れなり

上 かくて度々の戰ひに。その名をあげて漢の御

昔漢の張良といつた人は、黄石公から兵法の術を授かつて、高祖皇帝の師範役となつた。

その後、項羽と高祖とは七十餘度も戰つたのであるが、陣屋の幕の内で謀をめぐらして、千里も距たつた所から軍隊を指揮して勝利を博した。これは全く張良の賢い謀によるのであつた。

或時張良が母に向つて「私が戰場に臨んで謀をめぐらしてゐる間に、後の方にゐる味方の軍勢が箙にさした矢を拔いて敵を射ることがあります。その時は前にゐる者は甚だ危險なのですが、どうすればよいでせう」といふと、母はこれを聞いて、上衣を脱いで縫ひつゞけて、張良の箙の矢に懸けてやると、八百萬の軍神がこの母衣の縫目にのりうつつて、大將軍としての名聲を輝かせた。それ以來「ほろ」を晃衣と書くやうになつた。又これを「母の衣」と書いたのも、今いつたやうな謂れによるのである。

かうして、張良は度々の戰爭に、その名をあげて、漢の御代八百年の基を築かし

○麒麟閣 漢武帝の建てた宮殿。漢書蘇武傳に「上思股肱之美、迺圖畫其人於麒麟閣。凡十一人」

代八百年の皇基を保たせ給ひ。その身も。麒麟閣に名を留めし。二十八將のその中の。第一將の功たり。ただこれ母衣の故なれや。その如くわれも又。一天に名を輝かし。忠孝第一の兵といざやいはれん

め、自分自身も麒麟閣に名を書き留められた二十八將の、その中でも第一將として功を積まれた。これも全く母衣のお蔭である。そのやうに自分も又、さあ、天下に名を輝かして、忠孝第一の武士といはれよう。

松浦物狂

觀（寶 喜）

○松浦 肥前國松浦郡。

「九州松浦の俊貞が讒言によつて都に召捕られたので、故郷の妻は狂亂して都に尋ね上つた。折節俊貞は罪を免されて出家し、故郷に歸る途中で、須磨浦で再會した」といふ『松浦物狂』（二百十番謠目録に世阿彌作）の一節。

サシ「生國は筑紫肥前の者。在所は松浦わざと名字をば申さぬなり

上「或人の妻にて候ひしが。夫は讒臣の申し事に

私の生國は九州肥前の者で、在所は松浦でございますが、名字はわざと申しません。

或人の妻であつたのでございますが、その夫が讒臣の讒言によつて、無實の罪を

（一）玉島　松浦郡。
（二）船に乗り移り」刊行會本には「船に乗り移る」
（三）關守る所」刊行會本には「關守る跡」

より、無實の科を蒙り、都へ上り給ひしが。かつて音づれ聞かざれば、死生をだにも辨へず
クセ　あまり別れの悲しさに。ある夕暮にわれら。ただ二人玉島や松浦の浦に立ち出づる。都の方へ行く船の便りを待つべき處に男一人來りてわれこの船の船頭なり御姿を。見奉るに。世の常ならぬ人なれば痛はしく思ひ申すなり。とくとく船に召さるべし。都までは送り屆け申さんと。懇に語れば。眞ぞと心得て。手を合はせ禮拜す
上　急ぎ船に乗り移り。その時水主楫取ども順風に帆を揚げて海路を走り行くほどに。程なく津の國須磨の浦に着く。波の關守る所なれば。この浦に船をさし留む

〔考異〕

受け、都にお上りになりました。そしてそれ以來一度もお便りがありませんので、生きて居られるやら死なれたやら、まるで分らないのでございます。かうして共に別れたのが餘りに悲しいので、或夕暮、私ども侍女と二人、玉島川尻松浦の浦に出まして、都の方へ行く船の便りを待つてゐますと、一人の男が來て「私はこの船の船頭ですが、お姿をお見上げするに、並々の方ではないので、お氣の毒に思ふのです。早く船にお乗りなさいませ。都までお送り致しませう」と親切にいふので、ほんとだと思つて、手を合はせて船頭に禮拜しました。

それから急いで船に乗り移りますと、水主・楫取どもが順風に帆をあげて、海を走つて行きますうちに、間もなく攝津國の須磨の浦に着きました。こゝは海の關といはれた所でありますから、この浦に船を留めました。

上 或人の妻にて……音づれ聞かざれ｜(喜りけれ)ば……クセ あまり別れ(喜揺)の悲しさに……男一人來りて｜(喜つつ)……上 急ぎ船に乗り移り｜(寶喜る)……

弓矢立合

喜

世子六十以後申樂談儀に「弓矢の立合、をかしき立合也」「桑の弓蓬の矢」と謡ひ出す、この謡は祝言に外れたり、やうあり、かくなりなと申せと、たまじいに立合節をためたる者の書きたる也」とある。現行版本に收めてゐるのは喜多流だけであるが、事實、他流でも番外目錄として演奏することがある。

下 桑の弓蓬の矢の政事。誠にめでたかりける。ありありがたや。あらありがたや。いざやさらばわれ等も羿養が射術を傳へては。弓張月のやさしくも雲の上まで。名をあぐる。弓矢の家を守らん弓矢の家を守らん

上 武士の。八十氏川の流れまで。水上清しや弦

桑で作つた弓、蓬で作つた矢、このやうな弓矢を以て、外敵の侮りを受けない政治の行はれるのは、誠にめでたい、ありがたいことである、さあ、それでは自分達もあの支那古代の名人羿養の射術を傳へ學び、「弓張月のいるにまかせて」といふやうな高雅な名譽を雲井の上まで揚げた古人に倣つて、武士の家を守らう。

武士の家といへば、末の末の末流まで、清らかな水上に倣つて、あつぱれな功名

○桑の弓―禮記射義に「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射天地四方」

○羿養―支那古代の弓の名人。

○弓張月の―弓の縁語矢をやさしくにいひかけ、平家物語―鵺の事―の連歌―時鳥名をも雲居にあぐるかな弓張月のいるに任せて」を引いた。「やさしくも」は風雅にもの意。

○武士の八十氏川の―物部の八十氏を宇治川にいひかけて、萬葉集以來歌詞として熟して用ゐてゐる。
○あつぱれ―月の緣語天を天晴にいひかけた。
○三毒―善根を害毒する貪・瞋・癡。
○五大明王―不動尊を中央とした明王・夜叉で、文殊はその中に入らない。
○やうゆふ―養由であらう養由は支那春秋時代の弓の名人。
○らゐ―未詳。
○あいぜん―愛染（明王）であらう。
○八幡大菩薩―應神天皇の菩薩號。［放生川］參照。
○石清水―山城國綴喜郡の男山八幡宮。

の月。あつぱれめでたかりける。治まれる御代の時とかや

上　釋尊は釋尊は。大悲の弓に。智慧の矢をつまよつて。三毒の眠りを驚かし。愛染明王は弓矢を以て。陰陽の姿を顯せり。されば五大明王の文殊は。やうゆふと現じて。らゐを取つて弓を作り。あいぜんの顯して矢となせり。又わが朝の神功皇后は西土の逆臣を退け民堯舜の榮えたり。應神天皇八幡大菩薩。水上清き石清水。流れの末こそ久しけれ

を立てる、まことにめでたい、天下泰平の大御代である。

かの釋迦如來は大悲の弓に智慧の矢を番つて、衆生の[illegible]を[illegible]、愛染明王は弓矢を以て日月[illegible]示された。かくして、五大明王の一である文殊菩薩は養由と化現して、らゐを取つて弓を作り、愛染明王と顯れて矢を作られた。又わが日本では神功皇后が弓矢を以て西國の逆賊を討滅して、國民をして支那の聖代堯舜の時のやうに榮えしめ給うた。そして御子應神天皇は八幡大菩薩として、名も清らかな石清水に鎭座し給ひ、その御後が幾久しく榮え給ふのである。

由良物狂（一）

観（喜）

「由良湊」ともいふ。世子六十以後申樂談儀に「由良の湊の曲舞・山姥・百萬、是等は皆名譽の曲舞共也」とあ

り、古くから行はれてゐたものである。これを主材とした完曲に「由良の人祐兼の妻が、夫のあだし心を恨んで家を逃れ出て狂亂の姿となつて、さ迷ひ歩くうちに、妻の心を憐んで出家し諸國を尋ね廻る夫に、掛川の宿で廻り會ふ」といふ〔由良物狂〕（元文二年松岡友素寫本）があつた。

（サシ二）いにしへ人に逢ひ馴れて。偕老同穴淺からず。同じ契りと思ひしに。人の心の花かとよ。葛城山の峯の雲。よそに通ふと聞きしより。ひとり心は住吉の。ねたくも人に待つといはれじと思ひしに

（上二）又男山の女郎花の。くねる心にあくがれ出でて。涙の雨の古里を。足に任せて立ち出づる

（クセ二）由良の湊の泊り舟。和泉の國に着きしかば。信太の森の葛の葉の。暫し待たんと思へども。われには人の歸らず。問はれしほどは待ち馴れし。夕のさかひの鐘を聞き難波の寺に參れば。彼の國に。生まるる心地して。西を遙かに伏し拜み。入江の蘆の假の世に。いつまで物を思ふ

もとの夫と逢ひ馴れてよりこの方、友白髮、死なば諸共にと、深く契りかはし、その契りはいつまでも變るまいと思つてゐましたのに、人の心といふものは花のやうに移り變り易いものと見えて、夫が外のあだし女の許へ通ふと聞きましたが、自分獨りで心を落ちつけて、嫉妬して人に辛く當るなどといはれたくないと思つてゐましたが、やはり女心のすねた心持から、つい〳〵浮かれ出で、涙ながらにわが故郷を足のまに〳〵出て行きました。

かうして由良の湊の泊り舟に乘つて、和泉の方へ旅立ち、やがて信太の森に着きました。信太の森といへば、葛の葉のうら返るやうに、夫のまた歸ることもあらうと、暫く待つて見ようとは思ひましたが、いや〳〵私の所へは夫は歸つて來はしないのだ、これまで夕暮毎にどんなに夫を待ち通したことであらうと、あきらめて、堺の入相の鐘を聞くにつけて、直に名高い天王寺へ向ひ、こゝに參れば、極樂淨土に生まれるやうな心地がして、遙かに

○いにしへ人―もと夫又は妻であつた人。
○偕老同穴―生死を共にする夫婦の契り。保元物語に「偕老同穴の御契り淺からざりし法皇も」
○人の心の花―變り易い人心を花に喩へた語。
○葛城山の峯の雲―新古今集讀人知らずの歌「よそにの見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲」に據つた。葛城山は大和の國。
○男山の女郎花―古今集序に「男山の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞ慰めける」
○涙の雨の古里―雨の降るといひかけた。
○由良の湊―淡路國津名郡
○和泉の國―出づといひかけた。
○信太の森―和泉の國泉北郡。新古今集「うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風」など、葛の名所として知られてゐる。
○夕のさかひ―夕と夜の堺を和泉國の堺市にいひかけた。

○難波の寺—大阪市の天王寺。
○彼の岸—極樂淨土。
○假の世—この世。蘆の刈りといひかけた。
○誠の道—佛道。
○思ひながらの—難波の長柄の橋にいひかけた。
○清水寺—京都東山、本尊觀世音菩薩（「田村」參照）
○地主の櫻—清水寺境内、地主權現の櫻。
○音羽山—清水寺のある山。松には風の音がするといひかけた。

べき、濃き墨染に樣變へ。誠の道に入らばやと、思ひながらの橋柱、千度まで悔しきは捨てざりし身の古、過ぎにし方の旅衣。春も半ばになりしかば。花の都に上りて清水寺に參れば

上大慈大悲の日の光、艶々とある地主の櫻、誠に權現の誓ひかや。花のあたりは心して松には風の音羽山、音に聞きしよりもなほまさり。貴さ面白さに下向の道もおぼえず

西方淨土を拜み、あゝこのやうな嬉しい事はない。いつまでも物思ひをしてゐても、仕方のないことだ。墨染の衣に身を窶し出家し、佛道に入らうと思ひました。それにつけても、これまで出家を思ひ立たなかつたことを幾度も／＼も後悔せられました。かうして旅を續けてゐるうちに、春の半ばの時となつたので、花の都に上り、清水寺に參ると、大慈大悲の觀世音の御光によつて、地主の櫻が色美しく咲き匂ひ、その上、權現の御利益によるものか、花のあたりには氣をつけて風が吹かず、そして松風は音高く響いて、この音羽山のあたりが噂に聞いたよりも、なほ一層貴く面白いので、つい歸ることも忘れてしまひました。

〔考異〕いにしへ人に……人に（喜を）待つといはれじと思ひ（喜つかへ）しに……今も由良の湊の……鐘を聞き（喜く）難波の……西を遙かに伏し拜み（喜うち眺め）……春も半ばになりしか（喜なれ）ば……

由良物狂（三）

觀（喜）

「小夜中山」ともいふ。前揭「由良湊」の續きである。（喜多流では一曲として分割してゐない）

○まどろむ―うたゝ寢する
○身を浮草の―古今集小野小町の歌―わびぬれば身を浮草の根を絕えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ―を借りた。
○志賀の浦―近江國滋賀郡
○矢橋の浦―同郡。
○白波―盜人の異名。知らずといひかけた。
○うかれ行く―刊行會本には―うられ行く―
○行末も―刊行會本には―行末は―
○掛川―遠江國小笠郡。

下かくて夜に入れど。まどろむ隙もなくして。御名を稱へてゐたりしに。同じ樣に通夜して。近く寄り添ふ男あり。語らひよりて申すやう。痛はしや御身は。思ひありと見えたり。思し召す事あらば。心の中を語りて。御慰みもあれかしと。懇に申せば。賴もしく思ひて。立ち寄る蔭もなき身なり。樣變へたきと申せば。痛はしき事かな。わが住む里に暫く。足を休め給ひて。眞に樣を變へ給はば。然るべき尼寺に引きつけ奉るべし。とくとくと誘はれて。身を浮草の根を絕えて。淸水寺を立ち出でて。なほも思ひを志賀の浦大津とかやに下りぬ

〽矢橋の浦の渡守。さしてそことは白波を。盜人とは思はで東路さしてうかれ行く。過ぎにし方もおぼえず行く末も。なほ遠江の掛川の宿に

かうして夜になりましたが、なほうたゝ寢もしないで、佛の御名を稱へてゐますと、同じやうに通夜をしてゐた男が寄り添うて來ました。そして私に申すことには、「お氣の毒なことだ。御心配事がおありなさるやうにお見受けしますが、何か御心配がおありならば、お話しになつて、お心をお慰めなさいませ」と、かう親切にいふので、賴もしく思つて、「私は賴りにする所もない身上です、出家したいと思つてゐます」と申しますと、「お氣の毒なことだ。私の在所で暫くお休みになつて、その上で、ほんとに出家なされゝば、然るべき尼寺へお世話申し上げませう、さあ早くいらつしやい」と、いはれるがまゝに、賴るべのない身上は、この男に誘はれて淸水寺を出て、なほも辛い思ひをしながら、志賀浦大津とかいふ所へ下りました。

それから矢橋の浦の渡舟に乘つて、湖を渡り、まさかこの男が盜人であらうとは氣もつかないで、東國の方へさ迷つて行きました。もう昔のことも、また將來のことも、全く夢現で、遠江國の掛川の宿に年を過すこととなりましたが、今の

年たけて又越ゆべしと思ひきや、命なりけり、小夜の中山なかなかに殘る身ぞつらき

身には、年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山、と詠まれた、その命が却つて恨めしく思はれるのです。

○年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山—新古今集西行の歌。中山は遠江國日坂と金谷との間。

〔考異〕
かくて夜に入れど……近く寄り添ふ男（喜無し）あり……痛はしや御身（喜無し）は……上矢橋の浦の……白波を（喜無し）……うか（喜無し）れ行く……行く末も（喜は）なほ……

横山　　觀（寶・喜）

能本作者註文に世阿彌作とし、看聞御記に永享四年三月十四日、粟田口猿樂記に永正四年四月十四日演じたとある〔横山〕の一節であらうか、今完曲は傳はらない。闕曲は光悦謡抜以下諸本に收む。

サシ『その頃未だ荒鷹の、夜末の月の山に入り、野に出づる日の暮るるをも、白斑の鷹を失ひて、鳥の落草かき分けて、尋ぬる鷹を翁や知りてはんべると、下す宣旨も、重き鷹を、通決鏡にあら

その頃まだ飼ひ馴らしてゐない鷹を使つて、夜明け方月が山に入つて、日が野に出るや否や、その日の暮れるのも知らないで、一日中狩り暮らしてゐたところ、その白斑の鷹が見えなくなつたので、鷹の鳥を追ひ落した草原をかき分けて探した末、野守の翁に「鷹がどこへ行つたか

○荒鷹—まだ飼ひ馴らされてゐない鷹。○白斑の鷹—腹部に赤白の斑のある鷹。はし鷹。知らずといひかけた。○鳥の落草—鷹の、鳥を追ひ落した草原。○翁—野守の老人を指す。〔野守〕參照。

○野守の鏡―この故事「野守」に作る。
○在原の中將―左近衞中將業平。
○二條の后―藤原高子。文德天皇の皇后、
○つげの小櫛―告げを黃楊にいひかけ、櫛の緣で、さしたると續けた。
○入間の郡―武藏國。三芳野は同郡川越の邊。昔男がこの地に下つて、女と契りを結んだこと、伊勢物語第十段に見ゆ。
○儲の君―こゝでは「まうけ（饗應）の君」で、大切な客人との意であらうか。
○やもめ男―妻のない男、
○宵々毎に―伊勢物語の歌「人知れぬわが通ひ路の關守は宵々毎にうちも寢ななん」に據つた。
○妻しあり―伊勢物語の歌「唐衣きつつ馴れにし妻しあれば遙々來ぬる旅をしぞ思ふ」に據つた。
○きぬぎぬ―衣を後朝にいひかけた、後朝は男女の朝の別れ。
◎戀しくて―刊行會本には「悲しくて」
○三芳野の田のむの雁もひたぶるに君が方にぞよると

はしたり。これぞ野守の鏡なる

クセ「又わが朝のその昔。在原の中將。二條の后に參りしを。如何なる人か大君に。つげの小櫛の鬢の髪。さしたる科に伏せられ。遠流の身と業平は。當國に下りて入間の郡三芳野や。今の川越の。山家の鄕にありしに。里の長の一人姫。儲の君ともてなせば。鄙人なりといへども。その貌らうたけて心に情有明の月にかかる小夜時雨。やもめ男のあくがれて。宵々毎に通ひ路の關守に妻を見えじと狩衣の袖をうち被き指貫のそばを高く取り足早に歩み行きつつ

上君が闇漏る窓の隙。垣間見ぬれば妻しありはるばる來ぬるきぬぎぬの。別れとなれば戀しくて三芳野の田のむの雁もひたぶるに君が方にぞ。よると鳴くなるそれは秋狩る鹿の聲妻戀の

知つてゐるか―と、重い宣旨を下されると、翁はこれを通決鏡に顯して出した。これが野守の鏡である。

さて又わが日本の昔話に、在原中將業平が二條の后に思ひを寄せ奉つたのを、どういふ人が大君に奏聞したものか、忍戀の罪に處せられて、遠くへ流されの身となり、武藏國に下り、入間郡三芳野、今の川越の山家の鄕にゐたところ、その里の長の一人姫が大切な客人として厚くもてなしたので、業平も、この姫が田舍の者とはいひながら顏かたちが上品にかわいらしく情の心が深かつたので、獨り者のこととて、心が浮かれ出て、宵々毎に姫の許へ通ふのに、人にわが姿を見られまいと、狩衣の袖をかつき、指貫の裾を高く引上げて、足早に歩いて行つて、姫の部屋の窓の隙間から覗き見をすれば、果して姫がゐる。かうして苦勞して通ふにつけて、朝の別れとなれば一層戀しく思ふのであつた。その時の歌――

「三芳野の田のむの雁もひたぶるに、君が方にぞよると鳴くなる」

（この三芳野の田におりてゐる雁も、ひたすらに君の方へ行きたいといつて鳴く）

これは秋の鹿が鳴くのと同じ妻を戀ふ心

鳴くなる—伊勢物語、三芳野で女の母藤原氏が昔男に贈つた歌。
○玉江の蘆—「あし」の音を重ねて「惡しく」の序とした。

○蛙の道の跡—古今秘書に一紀良貞といふ人、住吉に詣でて忘草を尋ねありきけるに、よき女に逢ひけり。

歌の心なり。又夏刈の玉江の蘆。あしく語りなば、當座の恥、家の恥。よしよしいはじ唯酒飲うで遊ばん

を現した歌である。それから又玉江の蘆の—……いやこのやうなことをまづく話せば、その場の恥であるばかりでなく、家の恥ともなろう。まあまあ、何ともいはないで、たゞ酒を飲んで遊ばう

〔考異〕

〃せ又わが宿の……山家の郷「吉庄」にありしに（喜時）……上借家間掃る……垣間見ぬれば[illegible]あり（寶・喜る）

和國

觀

貴道に執心の餘り慢心を生じて現し心がなくなり、異名を和國と呼ばれた京都一條桃園の男が、丹後から出た旅僧と右近馬場で歌物語をする—といふ「和國」の一篇。貞享四年以下諸本に收む。

〃せ、さればにや畜類も、歌を詠ずる例あり。濱の眞砂を歩み行く。蛙の道の跡見れば、住吉の海士のみるめにあらねども。かりにぞ人に。又と—

かうして、畜類でも歌を詠んだ例があるのである。又住吉の濱の砂を歩いて行く—蛙の足跡を見ると、「住吉の海士のみるめにあらねども、かりにぞ人に又訪はれぬる」と、歌の文字になつてゐた。このや

さて別れに及んで女の曰く「われ戀しくはこの住吉の濱へ重ねて來れ」といひけり。後に行きて見れば、女はなくて、蛙の出でて這ひ渡る。不思議に思ひて見れば、這ひける跡に文字あり。よみて見れば歌なり「住吉の濱のみるめも忘れねば、かりにも人に訪はれぬるかな」とある。
○みるめ―海松藻、
○亂舞―雜舞の總稱、

はれぬると。水にすめる蛙まで。和國の風俗神の御代より始まれり

上さればにや唐土に。詩を作る諸人は三界をながむるに。花鳥風月。松風の私語。鼓は波の音。笛は龍の吟を以て。舞樂をも作れり。ただ人は。亂舞歌道に交はりて。心をのぶるこそ萬年の齡なりけれ

うに水にすむ蛙まで和歌を詠むのが、わが國の風俗で、この事は遠く神代から始まつてゐるのである。

それで、支那でも、詩を作る人々はこの世の事物すべてを見渡して、花鳥風月又は松風の音、すべてを詩の材料とするのであつて、鼓は波の音、笛は龍の嘯く聲に擬へて造り、これによつて舞樂をも作つたのである。だから、人は誰でも舞を舞ひ歌を詠む道に心掛けて、これによつて心を慰めるのが、萬年の長壽を得る道である。

謠曲語句總覽

曲名の略符號解及び字音假名遣一覽表
は卷尾の謠曲大觀總目錄に併載す。

あ

ああ降つたる雪かな　鉢二五五〇
愛執
　恩愛——の涙は四大海より深し　身二九五三
　扉を開き——の心いと深き　江口四八五
愛染は方便の弓に矢を矧げ　熊坂九三七
愛染明王は定の弓慧の矢にて　寝三三九九
愛染明王も神通の弓を張り　放下二四四五
愛着慈悲心は達多が五逆に勝れ　熊坂九三七
愛着の心を捨て給へ　梅枝四四六
愛別離苦の思ひ深く　天二一三八
愛別離苦の理免れがたき道　源氏一〇三八
哀愍納受垂れ給ひ　谷一九五一
愛欲とのいちつうげん道場　清八五四
哀憐
　赤子の身より——の情によりて　内三七六
哀猿
　五夜の——月に叫ぶ　張二〇四九
哀猿雲に叫んでは腸を斷つ　鞍九五五
奥儀
　琵琶の——を極めつつ　絃一〇五五
　兵法の——を傳へ　鞍九六一
鶯宿梅
　梅の名は好文木又は——などと　東北二一九三
鶯宿梅の木のもとに　[illegible]五二四
鶯舌の囀りは　卒一七一〇
鸚鵡
　曲水に浮かむ——は石にさはり　[illegible]三一三五
　孔雀——の同じく囀る鳥の　[illegible]三四八三
鸚鵡返しといふ事は　[illegible]二一
〔鸚鵡小町〕　一三
鸚鵡の盃
　親子——の幾久しさの　仲二三三一
　今宵——の　錦木二三五八
鸚鵡の袖
　親子——ふれて　生二七一
　親子に——を振り切りがたき　水無瀬二九一四
　わが子に——なれや　百二六七六
鸚鵡の玉
　御代に——鬘かかる時しも　岩二八八
鸚鵡の鳥　[illegible]二三
阿吽
　出て入る息に——の二字を稱へ　安宅九一
あかがち
　眼はさながら——の　大蛇三五一三
銅の爪を磨ぎ立て　[illegible]三九三
銅の柱三十六丈　咸七九三
足搔き
　高嘶きし——して　[illegible]四三
赤き鬼となつて　鐵七一一
赤木の數珠の刺高　[illegible]一六六
赤きは酒の科ぞ　大江五六四
赤き旗を四流白き旗を四流　弓△二三三
赤坂（岐阜）　熊坂九三一・烏所三四一三
赤坂の里も暮れ行く　熊坂九三[illegible]
赤坂の宿　烏三四二六
赤澤山（静岡）
　河津殿は——の狩くらにて　[illegible]
赤澤山の狩くらにて父も失せ　小袖一二三六
赤澤山の狩くらにて尾越の矢に　夜△三三七〇
明石（兵庫）
　淡路繪島須磨——　[illegible]六
　須磨——のとかく三年の程もなく　安宅九九
　左は須磨右は——の　[illegible]五二三
明石潟島隱れ　[illegible]二五三六
明石潟月待つ方に行く舟の　住一[illegible]一五四四
明石上　住シテ一五三七
明石の浦（兵庫）
　思ひ——千鳥　安達一一三
　四智圓明の——に澪標　源氏一〇[illegible]
　須磨や——の樣鹽燒く海士の　[illegible]一〇四八

何と――に住む海士の子なれば　謡一一四六
播磨の――傳ひ　須一四九七
ほのぼのと――の朝霧に　草子一一八七
ほのぼのと――わの舟をし思ひの　住一五四八
明石の浦の朝霧と詠みしも　俊成一四四四
赤地の錦の直垂に　八島三一五一
赤地の錦の直垂を　實二三六〇
曉かけて霜は置けども　高砂一八六六
曉毎に忍び車の榻に行けば　通小七六九
曉ごとの閼伽の水　井ノ筒三四〇二
曉淵水を汲んで楚竹を燒く　八島三二四七
曉の雲
四諦の――を引く　金一三九〇
曉の榻のはしがき百夜まで　卒一七二九
曉は數々多き思ひかな　通小七七一
曉梁王の園に入らざれども　竹雪一八八四
曉梁王の園に入れば雪群山に滿てり　山三八七
俤かぬは人の心かな　小督一一〇一
俤かぬ別れの鳥はものかは　三井三〇〇二
あかねさす日も紅の　小鹽三四六〇
茜さす紫野北野　松尾二八四七
茜さす紫野行き標野行き　右三四六
閼伽の水
曉ごとの――　井三四〇二
樒――を汲みて　三輪二九七七
閼伽の水を汲みて來り　檜二六三五
赤旗
陸には――いくらも立て並べ　實五一三
赤人
人丸――の御影を掛け　草子一一八六
赤間(山口)
門司――や波風の早鞆　實二五一
あからさま
昨日――に申しつる出家の御暇　千一七〇五
あからさまなる都人の　六浦二〇一六
明り障子に飛びつき　檀二〇二一
あがりららりとう　翁六
秋
風一聲の――の空　天二二四三
淵底の松の風一聲の――を催し　東北二一〇〇
淵底の松の風一聲の――を催す　西行一一七一
五蘊滅色の――たれや　俊寛一四二七
すむ水の春にも――や通ふらし　誓一五五九
目に見ぬ――を風に聞き　放下二四四九
秋風
稻葉もそよぐ――に　鳥三九六
音づれの稀なる中の――に　砧八三二
心づくしの――に海は少し　松風二八二六
心づくしの――に木の間の　閑二九
名もことわりや――の　猩一三五一
夕されば野邊の――身に沁みて　謠二二二六
夜寒を告ぐる――　成八〇一
世を――のうち嘆き　謠一四五二
秋風の音に白河の關路より　謠二六〇〇
秋風の聲吹き添へて西川や松の尾の　大江一〇五五
秋風の便りならではゆかりを　住吉一三六四
秋風の吹くにつけてもあなめあなめ　謠二六〇二
秋來ぬと目にはさやかに見えずとも　東下一七六六
秋來ぬと目にはさやかに見えねとも　星六四五
秋來ぬと目に見ぬ空は　東方十歎一六〇
秋霧
誰か織の錦たればか――の　佐一七七
秋草
露刈りこめて――の　東九九一
秋草の花葉の野を分け　夕三三〇
秋來る風の音づれは庭の萩原まづ　芭二五四一
秋毎に野分を掃の追風にて　旭一等五八〇
秋衣
うつを限りの――　元一〇七七
秋寒き窓の内　三輪上歎二九七九
秋篠や外山の紅葉名に残る　謠田一九三
秋立つ桐の木　金八七三
秋津國
數への道も――數ある法を納めん　謠田一九三

秋津島根の朝ぼらけ　善界一五九八
秋津島根や天ざかる　養三一二九
秋津洲
　關の戸さゝで――や　代一四七八
　日の本の國豐かなる――の　岩二八七
　伏見とはこの――の名なるべし　金八七四
秋津洲に地を占めて御代を守りの　竜田一九三一
秋津洲の主　佐一二七三
秋津洲のうちに於て　和三〇三一
秋津洲の神の御稜威は異國に仰ぎ　内三七四
秋津洲の君の御影　淡一四八
秋津洲の國々廻る法の道　遊行道行三一九三
秋津洲の波靜かなる島廻り　藤戸道行二七四〇
秋津洲の波も音なき　老五二四
聰
　隆準の鼻胡拵の――　江島四九八
秋長(羽田)　笛ワキ二五二一
秋長(望月)　望ワキ三〇三九
秋長
　羽田の十郎――　笛二五二[illegible]
　望月の――にあへなく討たれ　望三〇四一
秋に後るる老葉は風なきに散り易く　雷三三六
秋の扇
　班女が閨の中には――の色　班二六〇五
秋の恨みの小夜衣　雨三三四

秋の風暖め酒の身を知れば　松蟲二八五七
秋の風松を拂つて疎韻落つ　[illegible]一六八二・[illegible]二〇九二
安藝の守清盛が子ども　[illegible]九五四・[illegible]一六三六
秋の暮
　弱り果てぬる――かな　清八五一
秋の聲
　風枝篇颯として――よりすさまし　[illegible]三三六九
秋の霜
　淺茅生や袖に朽ちにし――　小督一一〇七・[illegible]三九六
秋の調めや殘るらん　猩一三五二
秋の蟬の吟の聲　蟬三三一
安藝の太郎同じき次郎　[illegible]二五五
安藝の太郎兄弟　大[illegible]五四九
秋の契りとはなさざりし　夕三二一四
秋の月
　三十三身の――五濁の水に影清し　田一九八九
　眞如の――　砧八三七
　白毫の――を禮す　舍一三九〇
秋の月下化冥闇の水に宿る　西行[illegible]七一
秋の月の水底に沈むは下化衆生の　敦一三五
秋の月の水底に沈むも　千一七〇二
秋の泊り
　湊や――なる　龍田一九一二
秋の七日
　天の川瀨に流しは――の衣　草子一一九四

秋の涙
　暮れて行く――か村時雨　[illegible]九九九
秋の野に人松蟲の聲すなり　松蟲二八六[illegible]
秋の日易く暮れ果てて　夕三二一五
秋の淵
　落葉の――にひとり沈める月影も　[illegible]三一一八
秋の水漲り落ちて去る舟の　江口四八[illegible]
秋の蟲の北露に鳴くも　高砂一八六六
秋の最中
　今宵ぞ――なる　[illegible]三二三
秋の山(京[illegible])
　鳥羽の[illegible]――　仕一五四〇・辛一七二一
秋の山草
　頃しも――桔梗刈萱[illegible]　大江[illegible]
秋の夜長し夜長けれとも　[illegible]三二一
秋の夜猶長し
　弊屋に燈火消えて――　雲雀二六四〇
秋の夜の盃　猩一三五三
秋の夜の千夜を一夜に重ねても　六浦[illegible]一七
秋の夜の月毛の駒よ心して　小督一一〇[illegible]
秋は來にけり昨日たに訪はんと　[illegible]二六七
秋萩のもとの契り　[illegible]
秋は冀冬は火　[illegible]一〇[illegible]
秋は時雨の紅葉狩　[illegible]
秋は立田姫冬は[illegible]　仕[illegible]一二七五

秋果てぬれば訪ふ人もなし　三寫三九七九
商人の主從となるぞ悲しき　烏四一七
秋待つ蟲は鳴く見るらん　巴一四八
秋も憂からぬ古里に　鳥羽三三九四
秋もなかばの暮待ちて　三井寺三九九三
秋も最中夜もなかば　三井三九九七
秋や恨むる鹿や憂き　小督一〇二一
秋より後は如何ならん　野宮二四〇八
あくがれ出づる都の空　右三四二

惡鬼
　邪婬の——は身を責めて　女五〇一
惡鬼心を和らげ　葵一六七・鵜飼三〇九・通盛一九〇九
惡鬼の神通通力自在の勢ひ絶えて　鐵七一四
惡鬼の靦れ恐れ去つて　鐘一四五七
惡鬼にこれを見るよりも　皇上歎九九七
惡鬼外になし　鵜飼三〇九
惡逆無道のその積り　船辨一七八一
惡魚毒蛇となつて　阿一九
惡魚鰐の口逃れ難しや　海一八〇
惡鬼を亡ぼし國土を守らん　鐘一四五一
惡源太義平は石山寺に籠りしを　朝三二七〇

惡虎
　母を——にとられ　放下二四三八

惡口
　妄語綺語——兩舌は口にて作る罪　東岸二一七三

惡業の衆生の苦患を助け　是二二一
惡虎を取らんと飛んでかかり　龍虎三二七〇
惡事千里を行けども　藤戸一七四五
惡七兵衛景清　景六三・大佛一七四五
惡七兵衛景清と名乗り　八島二一五二

惡蛇
　鱷魚が躍る——となつて　羅一九九

惡趣
　一切有情殺害三界不障——　項五九七・藤戸一七四八
　三途八難の——に墮し　江口四八四
　種々諸——地獄鬼畜生　求三〇七一・成三一〇一
　長く——に墮しけるよ　梅枝四四五
　諸々の——をも三惡道は逃る　儒一〇一
惡趣の嶮路　羊何三八一

惡心
　女人の——煩惱の　富士太二七〇七
惡心外道の變化となつて　碇三三九〇
惡心は起さじと思へども　是六一〇
惡神は萬里の禍を拂ふ　江島四九七
惡心また狂亂の心つきて　卒一七二七
惡神を懲らしめ　綸三四五一
惡心を翻す一念　鐘一四五七

芥
　散りぬれば後は——となる花を　櫻一三三七
芥川(大阪)

　木の葉も積る——　鳥四一五
　塵の浮世の——　關寺二一〇六・雲雀三三四九
　花の散り積る——　雪枝四四八
　拂は塵の——　生一四〇
惡といふも善なり　卒一七一四

惡黨
　このあたりの——とも聞きつけ　小三四三八

惡人
　二重闇提——女人おしなめて　現一〇二五
惡人の友を振り捨てて善人の敵を招け　敦一一四

惡念
　餘りの——は却つて善心となる　巷一六四一
　一首を詠すればよろづの——を　寫一八二九
惡念の猶もあらはす　是一六六八
惡風を吹きかけ　船辨一七八四

惡魔
　さす腕には——を拂ひ　高砂一八七三
　鈴鹿の——を鎮め　田一九九八
　煩惱の——陰魔死魔　第一七七四
惡魔降伏の御誓ひ　輪三二一八
惡魔降伏の青蓮のまなじり　嵐三二一
惡魔降伏の眞如の觀弓　金八七六
惡魔降伏の劍　禪一六九六
惡魔もいかで恐れざる　鵜四五一
惡魔も恐るる聲なれや　與九八七

悪魔を降伏し衆生を守る　三六八
悪魔を従へ
　愛染明王は定の弓慧の矢にて――　實三元九
悪魔を退け豐葦原の國治まりて　三三三
悪魔を拂ひ國土を守る火の御子　富士山三六四
悪魔を拂ふ雲水の　東北三三〇
悪霊恨みをなすとも　二七八三
悪霊次第に拂てかれば　二七八五
悪龍の氣色に變り　二七六六
悪龍の水神となつて　二七五一
悪龍の業と見えて　海一八一
明くるわびしき葛城の神　島六九七
悪を去る
　善を賞し　寄濟なる御代の　二四五七
明け〳〵れに面影ばかり　四四七
明け〳〵れの空かけて　夕三二九
あけて悔しき浦島が　海一八二
明けぬとて野邊より山に入る鹿の　紅一聲三〇八二
朱の玉垣かかやき渡る　白鬚一四七三
朱の玉垣神さびて　六六
朱の玉垣ほの見えて　八二〇
朱の玉垣御戸代の露　二四九四
明けば又秋の半にも過ぎぬべし　鏡三四八〇
揚巻
　鎧の胸板押しつけ――　箙一六六二
揚巻の大君　浮△三三一
總角やとんどや　翁七
上路越は如来の踏み分け給ふ道　山△三一六九
上路山(越中)　山姥三一六五
〔阿漕〕　二七
阿漕(海士)　阿シテ二七
阿漕が浮名もらす身の　阿二四
阿漕浦(三重)　阿漕二七
阿漕が浦
　逢ふことも――に引く網も　阿三一
　伊勢島や――の汐をに度重ねて　一〇四九
　伊勢の海――に引く網も　阿三一
　賤が塵木を運びしは――に引く汐　松風六二八
阿漕が浦と申すいはれ　阿三三
阿漕といふ海士人　阿三三
網子ととのふる海士の呼聲　五三三
あこねの浦(三重)　八七三
あこその前　四一五
安居院法印　源氏クキ一〇二五
阿含
　五時といつば華嚴――方等　大會一七七九
あざあざしくは申さねども　賀七三六
朝寝の床も起き憂からす　三一三三
淺香潟(大和)
　殘んの雪の――　一八七一
淺香潟玉藻刈るたる海士人の　九七七
淺香の沼(福島)
　陸奥の――の花かつみ　花筐二五九〇
朝顔　熊野ツレ三三三七
朝顔
　軒には蔦――這ひかかり　大原五四一
朝顔の露霜妻の影いつれか　源氏一〇四〇
朝顔の花の上なる露　鐘一四五三
朝顔の日影待つ間　一六一
朝顔の光積まれす　源氏一〇三九
淺香山(福島)
　難波津――の道　蘆五八
淺香山影さへ見ゆる山の井の　采四〇八
淺香山手習ふ事もなかりしかに　仲三三一〇
淺香山の麓に王の御心を和らげし　関寺一六一四
淺香山の影見えし山の井の　一三九八
淺香山の言の葉　七
淺香山の言葉は采女の土器とりとり　二三三
麻衣(アサゴロモをも見よ)
　木曾の――の袖を解きて　三八九
　袖も今は――のあさましや　関寺一六二〇
　一重なる――のしをるるを　一四二五
朝清め落葉を拂ふ程ならし　源太一聲一〇六四
朝霧
　明石の浦の――と詠みしも　一四四四

ほのぼのと明石の浦の――に　草子一一八七
淺くは人を思ふかの　菜四〇八
朝霧や潮干の石とあらはれしも　御二九七一
朝倉や木の丸殿にあらばこそ　八島三一五三
朝けの風　安達一〇九
麻衣（アサギヌをも見よ）
親子の契り――　百三六七四
麻衣木曾の棧道谷深み　鶯三六二四
麻衣短き袖を返し得ぬ　檜二六三四
朝じめり
花色の――して　吉天三三九一
朝立つや客行く雲の美保の關　金道行一三八五
朝立つや旅の衣の遙々と　大社道行五七五
淺茅色づく有乳山　安宅八三
淺茅が原
しるしばかりの――となる　關一五三四
淺茅が原もうら枯れの　野宮二四一一
淺茅原
さながら秋の――　朝三六三
淺茅生
あだなる露の――や　小督一一〇七
いとどしく蟲の音しげき――の　須一四九七
淺茅生の霜に朽ちにし名ばかりは　定三一一〇
淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜　小督一一〇七・遊三一九六
朝づく日
浮かむ雲間の――　木曾三一〇六
朝妻舟とやらんは　室三〇三三
朝なぎ
波は音なき――に　羽一四八七
淺野（長野）
淡雪の――といふは　内六五八
麻の衣を御身にまとひ　東岸八七
朝日さす高嶺の深雪空晴れて　富士山二六八七
朝日寺（京都）
影も匂ふや――の　右三四三
朝日待ちゐて汲まうよ　賀七三九
朝日山（京都）
名にも似ず月こそ出づれ――　賴三三〇二
麻生津（福井）
河瀬の水の――や　安宅八三
麻生の松若　熊坂九四二
朝ぼらけ野田の川霧絶え絶えに　雲雀一八九
あさま
忍ぶ姿も顯れて――になりぬ　玉井一九七六
數千の魔神を――になせば　大會一七八六
淺間
天王寺に――といひし伶人　梅枝四三九
天王寺より――と申す樂人　富士太二六九九
朝政神さびて　花筐二五九一
朝政は怠り給ひぬ　楊三一一九
朝政も絶え絶えに　皇九九四
あさまにもなりぬべし　半二五〇六・松蟲二八六六
あさまにやなりなん　千一七一三・錦木二三五八
淺間の煙あさましの身や　[illegible]一二六四
淺間の煙立ち添ふ　[illegible]三四一
淺間の嶽（長野）
信濃なる――に立つ煙遠近人　杜若六六・[illegible]四八
信濃なる――も燃ゆるといへば　富士太二六九九
淺間の夕煙の立ちかへり　花筐一六四一
淺間山（長野）
身の古も――にかれ沈みし　[illegible]
あさ丸をするりと拔き持ち　[illegible]
淺絲絲よりかけて繋ぐ駒は　錦三四四八
麻襖よい木曾路の旅に　巴三三六
麻襖よい紀の關越えて　高野上敎三三八・[illegible]
麻襖よい紀の關守が手束弓　[illegible]
葦
一葉の――に凝り固まつて　白鬚一四六八
鵜殿の――のほの見えし　江口四七四
碧玉の寒き――雜襲に脫す　梅枝四四四
簀
臂に懸けたる――には　卒一七三七
あし垣
御覺え――の隔てあるこそ　小督一一一一
蘆垣の間近きほどか　田一九九四

蘆垣のまめなる所とて　[illegible]八六五
あじかの大明神
第一は――と現れ給ふ　大社五七八
悪しからじ善からんとてぞ別れにし　蘆五七
足柄箱根うち過ぎて　千一七一〇
足柄箱根玉津島　班二六〇三
足柄や遠かりし　夜三三六〇
足柄山を分け過ぎて　調二一二一
〔蘆刈〕　四一
蘆刈人　蘆四九
悪しかれと思はぬ山の峯にだに　鐵上歌七一三
悪しき友あらば祓ひ除けて交へじ　水無月二九四三
あしき道橋　景六四六
悪しきを平らげ善きを助くる　調二一二八
悪しくは兎も角も別當が計らひ　元一〇八四
蘆毛の駒に手綱ゆりかけ　葵一五八
足すさまじく肝消え　石一三七九
足駄
履いたる――を踏ん脱いで　花一〇〇四
愛鷹の神前　富士山二六九二
愛鷹山とて富士に竝べる高山　富士山二六九二
愛鷹山富士の高嶺　羽二四九五
あしたづの雲居のよそに眺め　蘆四九
朝に一鉢を得ざれども求むるに　岡寺一六一三
朝に紅顔あつて世路に樂しむ　檜二六三〇
朝に紅顔あつて世路に誇る　朝三七〇
朝に榮え夕に衰へ　草薙八八一
朝に増じ夕に滅ず　鐘一四五三
朝には雲としぐれ夕には雨と　[illegible]二六一七
朝に落花を踏んで相伴つて　西行一七七・松蟲二八六四
朝の嵐夕の雨　放下上歌二四四三
朝の雲夕の雨と古事も　定二一一四
あしたの原(奈良)
思ひ立つ――も遥々と　大蛇三五〇五
草茫々たる――に　松蟲二八六六
春立ちて――の雪見れば　求三〇六七
あしたの原は昨日より色深き　紅三〇八一
朝は秋の光夕には影もなし　源氏一〇四〇
足疾き鬼
足疾鬼とは――なれば　舍一三九二
脚摩乳　大蛇ツレ三五〇三
脚摩乳
妻の名は――と申す　大蛇三五〇八
手摩乳――　源太一〇六九
足に刀山踏む時は劍樹共に解す　歎三六五
蘆の枯葉に風渡る　蘆六一
蘆の葉の島となりし中つ國　白髭一四六九
蘆の葉の笛を吹き　[illegible]一三五一
蘆の葉分の風の音　忠度一九〇六・[illegible]上歌二一四九
蘆の屋
月こそさはれ　松風二八二九
身を知るや住む――の窓の雨　富士山二六八七
蘆の屋の灘の鹽焼き暇なみ　[illegible]二六八三
蘆の若葉のなごはしみ　梅上歌四一五
蘆の若葉を越ゆる白波　[illegible]六一
蘆原
この湖の七度まで――になりし　白髭一四六九
蘆原の國
今更に見えて榮うる――　[illegible]四五三
葦原の國つ神世々に普き誓ひ　佐一二七三
蘆原の國富み民も豐かに　[illegible]一五二
葦原の國も動かじ萬代までに　白樂二四七八
蘆原の中つ國
天照大神皇孫を――の御主と　水無月二九四三
地神の位に皇孫を――に降し　御二九六六
葦原をなぎ拂ひ引き捨て　[illegible]一三一三
蘆火
漁する業は――と思ひしに　[illegible]二九〇〇
難波人――焚く屋も市館も　松蟲二八六三
足引の山といひ　[illegible]一三一一
足引の大和の國に　三輪二九八五
足引の山より歸る折ごとに　忠度一九〇八
蘆火焚く屋は煤たれて　[illegible]五七
蘆火にあたりてお泊まりあれ　松風二八三一
蘆火の影ほの見えそむる　八島二一四七

足拍子
　手の舞――を揃へ　右三五〇
足踏はとうとう　東六七
蘆邊の田鶴こそは立ち騒げ　松風二八八
蘆邊をさして田鶴鳴き渡る　鵜二四
蘆邊をさして行く田鶴の　知三三四
蘆間の蔭に狙ひより　鵜一三二〇
足もたまらず　石一三七七・張二〇五一
足もためず苗を揃へば　橋三五一八
足もためず薙ぎ伏せ　土蜘二〇六一
足もとは泥々泥々と　三笑一三八八
足もとはよろよろと　大江五六五・猩一三五二
阿字門に入つて阿字門を出づる　弱三三三五
蘆屋(福岡)　砧所八二五
蘆屋(兵庫)　藤榮所二二四七・砧所二三七七
阿闍世太子は頻婆娑羅を害せずや　仲三三一三
蘆屋何某　砧ワキ八二五
蘆屋何某妻　砧シテ八二五
蘆屋の先地頭藤左衛門　藤榮二一五一
蘆屋の里に公光と申す者　雲林四五九
蘆屋の藤左衛門尉家俊　藤榮二一五二
あしやよしや
　難波江の――も辨へて　梅四二八
阿闍梨
　今熊野梛の木の坊に帥の――　谷一九三九・檀二〇〇六

東光坊の――菊慶　安達一〇七
阿修羅王
　婆稚――　春日六七八
　羅睺――　春日六七八
足弱草
　先へは進まぬ――の　鉢二五六五
　盲目の――の片輪ながら　弱三三三〇
　よろよろと――の　宝二一一六
足弱車忍び路を　蟬一六七四
足弱車のすごすごと　清八五一
足弱車の力なき　熊野三三四六
足弱車の力も盡き　舍一三九六
足弱車の廻るもただよふ　一角一六八二
網代
　宇治川の――の波　頼三一〇七
網代の下簾　野宮二四一七
飛鳥風
　手弱女の袖吹き返す――　飛鳥七四
〔飛鳥川〕　六五
飛鳥川(奈良)　飛鳥所六五
飛鳥川
　明日とないひそ――　飛鳥七三
　波も淵瀬の名にし負ふ――　飛鳥六七
　世の中は何か常なる――　飛鳥七一
飛鳥川岸田の早苗とりどりの　飛鳥一〇六七

明日とないひそ飛鳥川　[illegible]七一
明日の命を助けんと　[illegible]一七[illegible]六
明日をも知らぬこの身　大[illegible]五四[illegible]
阿蘇の宮の神主友成　高砂一八九
遊び戯れ舞ひ謠ふ　[illegible]
〔安宅〕　七七
安宅(石川)　[illegible]七七
安宅の松の夕煙　山[illegible]六七
安宅の湊(石川)　[illegible]八[illegible]
愛宕高雄の初櫻　鞍九五五
愛宕の地藏に得たるまじ　大會一七八四
愛宕の峯(京都)
　人は――に住むな　車九六六
愛宕の山の太郎坊　花一〇〇八
愛宕山(京都)　[illegible]一五九五
愛宕山
　人の爲には――　鞍九五九
愛宕山樒が原に雪積り　車九六九
愛宕山樒が原をよそに見て　春日道行六六九
愛宕山大天狗　大會シテ一七七七
あだ櫻
　浮世の春の――風吹かぬ間も　[illegible]一五〇九
あだし言葉の人心　班二六〇六
あだし身
　色に染み花に馴れ行く――は　[illegible]一一四七

百千鳥花に馴れ行く――は 古三四五・櫻一三三七
あだし世の夢待つ春のうた寝に 胡待篇一二五〇
暖め酒
今は秋の風――の身を知れば 松蟲三八五七
暖め酒と菊月の 大瓶一七六三
〔安達原〕 一〇五
安達が原(福島) 安達所一〇五
安達が原
陸奥の――にあらねども 羅三三五一
陸奥の――の黒塚に鬼こもれり 安達一一八
陸奥の――の黒塚や 現一〇一七
安達が原の黒塚に籠れる鬼の住家 安達一一七
安達が原の塚にこそ鬼籠れりと 大江五六三
婀娜とたをやかにして 卒一七二〇
あだ波
かけし頼みは――の 砧八六八
あだたりと名にこそ立てれ櫻花 井三四一〇
あだなる色に迷ひそめけん 幕三七三〇
あだたる露の淺茅生や 小督一一〇七
あだに契りし恩愛の 善知三八六
あだになさじと水をせき 櫻一三三七
あだ人
二道かくる――は頼まじ 鐵七〇五
夕顏の折過さじと――の 夕三一四
あだ夢のさむる枕に鐘遠き 幕二一四九

あたら櫻のとがにはありける 西行一一七四
あたら櫻のとがは散るぞ恨みなる 櫻一三三八
當らずしかも外さざりけり 放下三四四六
あたりを拂つて立つたり 碇三五五
仇をば恩にて法事の 敦一三八
仇をば恩にて報す 藤榮二一六二
味眞野(福井) 花筐所三五七九
味眞野の皇子
武烈天皇の御代を――に御讓り 花筐三五八〇
扱ひ草
人の――も繁きもの 藤戸二七四二
梓
生靈死靈の間を――にかけ 葵一五七
梓の上手 葵一五七
梓の眞弓春來れば 雲雀上歌二六四一
梓の弓の末筈に言葉をかはす 砧八三六
梓の弓の末筈に立ち寄り 葵一五九
梓弓
それとは見えじ―― 小袖一二三九
力なく捨てし――昔に歸る 景六四〇
人心引けば引かるる―― 歌五五六
梓弓春の山邊を越えくれば 志一三〇四
梓弓引きはかへさじ 羅三三五二
梓弓やがていつしかひきかへて 竹生一八八〇
梓弓やたけ心の一つなる 羅三三四九

熱田(愛知)
神樂の役々は住吉鹿島諏訪―― 大社五八四
鹿島三島諏訪―― 白樂二四八〇
熱田神宮(愛知) 草薙所八七九・源太所一〇六一
熱田にて遊女と相馴れ 景六三六
熱田に參り 草薙八八〇
熱田の浦の夕汐の 盛三〇九七
熱田の神劍をも下し奉り 草薙八八七
熱田の明神は雲神にて 源太一〇六二
熱田の宮に參らん 源太一〇六三
あつぱれ器量の人體かな 正一三六九
あつぱれ御器量や 烏三四二一
あつぱれこれより御返しあれ 船辨二七七一
あつぱれとう斬られればや 檀二〇二一・盛三〇九八
東遊の數々に 羽二四九四
東遊の駿河舞この時や始め 羽次第二四九二
東歌
聞くも妙なり――謠添へて 羽二四九三
東からげの汐衣 融二三三〇
東路とても東山せめてそなたの 熊野三四七
東路の佐野の船橋とりはなし 船橋二七五七
東路の秩父の山の松の葉の 春榮一四一八
東路もそなたの空に行く雲の 江島道行四九一
東のはてしなの人の心や 小鹽三四六七
東のはてしまで人の心の奧深き 千一七〇五

東の花
　馴れし—も散るらん　熊野三五二
東屋
　官位を—の內に籠めて　源氏一〇五九
　これや—なるらん　千一七〇二
　富士の嶺の煙見えたる—に　禪一六九一
東屋の主はいさ知らず　小督一一〇四
東屋の母屋の妻戸　葵一六〇
東男に身をやつし　烏三四一八
〔敦盛〕　一三三
敦盛　敦シテ一三三・生シテ二六三
敦盛の御子　生二六五
敦盛の遺子　生子方二六三
敦盛を手に懸け　敦一二五
跡白波とぞなりにける　船辨三七八五
跡取つたほどに　道成△一七九七
跡のしるべの燈火は眞如の秋の　砧八三七
あとの大夫殿　翁△九
跡はここにぞ在原なる　賀茂物七五六
跡吹き迯る風の音に　紅三〇八二
跡を垂れ
　玉垣の內の國に—　雨三三七
跡をつけぬ庭の雪　仲三三一〇
あなたの玉章こなたの文　卒一七三八
あなたへざらりこなたへざらり　蘆五四

阿那婆達多龍王　春日六七八
あため
　秋風の吹くにつけても—　通小七六六
阿難
　迦葉—の大聲聞　大會一七八五
兄と思ふな弟とも見る書吏に　關口三三六七
姉和の平次光景　正一二六九
姉和光景　正ツレ一三五五
阿耨多羅三藐三菩提の佛たち　大江五六一
安濃の郡(三重)　阿二九
安濃の松原むら立ち來つて　田二〇〇〇
粟
　花の色は蒸せる—の如し　女三四九〇
粟飯かしく程ぞかし　鉢一五五五
粟飯の一炊の間　邯七八八
阿房宮(支那)　天所二一三一
阿房宮
　帝の御殿は—　咸七九三
阿房殿
　雲龍閣や—　邯七八二
阿房殿雲龍閣にする置かれ　天二一三三
阿房羅刹
　獄卒—苔の數　砧八三七
　冥途のぜつ鬼—　錢一九八
粟田口(京都)　蟬一六八一

粟田口鍛冶　小一三七
〔淡路〕　一一七
淡路
　日の本の始めなる—　淡一七
淡路潟(兵庫)　玉四八・淡一四
淡路潟
　磯廣盧島や—　淡一九
　波もて結へる—　高砂四四六
淡路潟あは海の潮ぞ出づる　忠二四八
淡路潟通ふ千鳥の聲聞きて　淡一九
淡路潟通ふ千鳥の聲聞けば　淡一三一
淡路潟繪島が磯はたためにて　當一九二
淡路島(兵庫)
　住吉の浦より遠の—　住一五四
　月落ちかかる—山　弱三三三
　波もて結へる—　淡一五一
　まづ—紀の國伊勢志摩筑紫　曾一二三
淡路の神代　淡一四一
淡路の繪島國なれや　葛子一八七
淡路山を浮橋にて天の戸を渡り　淡一四九
淡路よと見つけし　淡一五二
淡路繪島須磨明石　弱三三六
粟津が原(滋賀)　兼平七一五・巴三三七五
粟津が原
　木曾殿は江州—にて果て　兼七一六

栗津が原の神の御名を　巴二二七九
淡津三郎　清ワキ八四一
栗津野(滋賀)
　雲雀落ち來る——の　繪三四四三
栗津の原の松蔭に神を齋ふや　巴二二七七
栗津の森(滋賀)
　波も——見えて　三井二九九七
　湖の——も見え渡る　熊坂九三三
栗津の森は近くなりて　兼七二一
栗津の森やかげろふの　田一九九八
遭はでぞ還る本の栖に　白樂二四七七
逢はでぞ戀は添ふものを　班二六〇八
逢はぬ君
　ありとは見えて——かな　木賊二三〇九
逢はぬは不得心なる者　藍二三八
栗の飯　鉢二五五四
阿波内侍　大原ツレ五三五
阿波の内侍
　信西が女——　大原五四三
蚫貝の盃　玉井△一九八一
あはれいづれの日まで歎かん　關寺一六一八
あはれ古を思ひ出づれば　松風クセ二八三五
あはれ知れ霜より霜に　定クセ二一〇九
あはれてふ言だになくば何をさて　戀二一六〇
あはれなるやうにて强からず　關寺一六一九
あはれはかけよ賀茂の川波　賀茂物七五四
あはれは誰も變らざりけり　清八五四
あはれむ歌にて强からねば　草子一一九〇
あはれむべき親もなし　花一〇〇一・卒一七一九
あはれをかけよ撫子の花　半二五〇三
栗を以て身命をつぎ　鉢二五五五
阿鼻
　來世は——に墮罪せられん　正一三六四
相植の松　高砂△一八六九
〔相生〕　高砂異稱一八五七
相生
　高砂住の江の松に——の名あり　高砂一八六二
相生の夫婦　高砂一八六三
〔相生松〕　高砂異稱一八五七
相生の松　高砂一八六二
相生の松風颯々の聲ぞ樂しむ　高砂一八七三
相生の松の精夫婦と現じ　高砂一八六七
逢ひ難き縁に向つて　源氏一〇三七
逢ひ難き縁によりて妙なる一乘　錦木二三五六
逢ひ難き誓ひの春に又逢ふ　藍二四五
逢ひ難き如來の教法に逢ふ　高野六〇四
逢ひ難き如來の佛教に逢ひ　卒一七一九
逢ひ難き法に逢ひ受け難き身の　芭二五三六
逢ひ難き法の値遇　錦木二三五二
逢ひ難きは友　西行一一七八
逢ひ難き御法を受け　實一三五七・殺一六四五
逢ひ難き御法を得　芭二五三二
相曲舞　風八六二
合竹
　如何なる敵に——の　朝二三七二
　親子に——の　竹雪一八八八・木賊三三一七
　亡き世の人に——の　[illegible]二三八七
　御法に——の　通三三〇〇
相鎚　小鍛一一一四
阿鼻の苦しみ終に法儀の臺に變ず　身二九五三
相引きに引く汐の　八島三一五三
相宿り
　知るも知らぬも花の蔭に——して　[illegible]四五
　吉天三三九三
相宿りする蛙の聲　放下二四四九
阿毘羅吽欠　安宅九二・安達二一九・飛雲三六三〇
阿毘羅吽欠につなぬかれ　雷六九七
扇
　かたみの——手にふれて　東二六〇五
　白き——のつまいたう焦がし　半二五〇四
　月を出だせる——の繪の　東二六一〇
　月を隱して懷に持ちたる——　東二六〇八
　夏果つる——と秋の白露と　東二六〇五
　閨の——の色ことに　[illegible]二一四
　班女が閨の中には秋の——の色　[illegible]二六〇五

班女の――　班二六〇五
扇づかひ
つき出だしたる――　門三二三
扇とる間も惜しき　笙二六〇九
扇の芝　賴三一〇三
扇の骨
節の竹には――　自一二四三
扇より綺羅表あるものは人心　笙二六〇八
扇をあげてこれを喩へ
月重山に隱れぬれば――　班二六〇五
扇を映せば扇の影　松山鏡一六八七
扇を敷きて自害し果て給ひぬ　賴三三〇三
逢ふこそ別れなりけれ　楊三一二四
逢ふこと難き優曇華の花待ち得たり　身二九五四
逢ふ事稀なる優曇華の花待ち得たる　芭二五三九
逢ふことも阿漕が浦に引く網も　阿三一
逢坂(滋賀)
これぞこの行くも歸るも――の　第一七六九
蟬丸は――や藁屋にて琵琶を　紋一〇五一
逢坂の知るも知らぬもこれ見よや　蟬一六七八
逢坂の關(滋賀)
音羽山音に聞きつつ――の　融三三一七
知るも知らぬも――守も　盛三〇九七
木綿附の鳥も音を鳴く――あへぬ　蟬一六八四
逢坂の關路の駒の後に立ち　鳥三四一七
逢坂の關のこなたにと詠みたれば　融三三一七
逢坂の關の淸水に影見えて　蟬一六八一
逢坂の關の淸水に影見ゆる　蟻三二一
逢坂の關の杉ならぬ過ぎがてに　六浦遊行二〇〇九
逢坂の關の杉村過ぎ行けば　蟬一六八六
逢坂の關の東の國遠き　鳥一五三三
逢坂の關の宮居を伏し拜み　竹生一〇三
逢坂の山(滋賀)
知るも知らぬも――隱す　束寺八三
關の戸ささで――を都の　源太一〇六三
逢坂の山風の是生滅法の理をも　關寺一六一九
逢坂の山を越ゆれば　田一九九八
逢坂の木綿附鳥か別れの聲　鳥三二一〇
逢坂山(滋賀)　經所一六七一
逢坂山に捨て置き申し　蟬一六七四
逢坂山の關の戸ざしの藁屋の　蟬一六七七
逢坂山も程近う　融三三一七
あふさきるさの事もなく　守三一三
逢瀨
同じ世の――とこれを思はめや　雷三三三六
河島の行末は――の道になり　賀茂物七五七
川舟をとめて――の波枕　江口四八一
終に――は程あらじ　小督一一〇八
逢瀨かひなき浮舟の　砧八三三
逢瀨の向ひの岸に見えたる　船橋二七六五
逢ふ時だにも恨みある　[illegible]三三六
あふ時も鳴く音こそ嬉しき　櫻一三四〇
あふの松原(三重)　盛五八
あふの松原の盡きぬ逢瀨　[illegible]七四
逢ふは別れたるべし　[illegible]六七
葵
今日かざす――の露の上宿　賀茂物七五[illegible]
二葉の――　大原御幸九四四
忘れめや――を草に引き結び　賀茂物七五一
葵草
神山の――かけて頼むや　賀茂物七四九
〔葵上〕　[illegible]一五五
葵上
左大臣の御息女――　葵一五七
葵の上の御車とて　野宮一四一七
葵の二葉より　代一四八四
近江路や勢田の長橋うち渡り　自然居士三五七
鐙は沈んで下り立たん便りもなく　巴三八五
鐙ふんばり鞍笠につつ立ち上り　八島三二五一
鐙を越して下り立たんと　朝一二七
あへたき死骸ばかりたり　女三四九九
あへなく富士を討つ　富士太三六九九
阿倍野(大阪)　松蟲所二八五三
安倍の貞任
八幡太郎義家――宗任を御追罰　鳥一四一〇

安倍の貞任勅使として　鵜祭四二〇
阿倍野の市に出てて　松蟲二八五三
安倍の泰成占つて　殺一六四〇
阿保親王の五男　雲林△四六五
阿保親王の末の御子　井△三四〇九
〔海士〕　一六九
海士　海シテ一六九
尼が崎(兵庫)
　津の國——へと急ぎ候　船辨二七六九
　松蔭に煙をかづく——　雲林四五九
尼が上りし山なる故尼上の嶽と　當一八四九
雨皮肩箱とりつけて　安宅八八
天ぎる雪のなべて降るこれ等は　給三四四六
天ぎる雪のなべて世に　東北二一九四
天ぎる雪の古枝をも　老五二五
天降ります事ならば　善鳥六八
天下るあら人神の相生を　高砂△一八六九
天國ひつきの子孫に傳へ　小鍛一一三一
天雲の稲荷の社伏し拜み　鞍道行三三九九
天雲の大井の入江霧こめて　松尾二八四二
雨雲のたち重なれる夜半なれば　蟻二一九
雨雲迷ふ鳴神のとどろとどろ　自一三四四・藤榮二二六一
海士衣
　心なき——さらでも濡らす　海一七八
　波ならで乾す隙もなき　同三〇

天衣撫づとも盡きぬ巖ならなん　衣四〇九
あまざかる鄙に殘りて　殺一六三八
天ざかる鄙の國　善鳥六八・道明一八三二
天ざかる鄙の住居の　生二七一
天ざかる鄙人なれば　求三〇六三
天ざかる日のたてぬきに　大江五六一
餘すな洩らすな　大江五六九・巴二三八六
尼前　大原五四二
天路
　雁がねの歸り行く——を聞けば　羽二四九〇
天つ風雲の通ひ路心せよ　西王一五七四
天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ　奉一七三六・寢二四〇一 羽衣二四九三
天つ風雲の通ひ路吹き閉づるや　吉天三三九五
天つ神
　月日曇らぬ——地神二代を　九世九二三
天つ雁歸る越路の　白鬚一四六九
天つ空音の時鳥一聲鳴くも　御二九六七
天つ空音の萬代までに　采四〇九
天つ楮領巾
　天つ少女の——　梅四三三
天つ羽衣立ち重ね　奉一七二八
天つ日嗣の御調物　業二三二九
天津日嗣の代々ふりて　給上歌三四四五
天津太玉神　金シテ八六九
天津太玉の神

伊勢大神宮の御つかはしめ——　金八七四
天つ星合の　關寺一六二〇
天つ少女
　久方の——のまのあたり　西王一五七三
天つ少女の天つ楮領巾　梅四三二
天つ少女の返す袖　園九〇五
天つ少女の衣笠　蘆五四
天つ少女の雲の袖　和三〇三四
天つ少女の雲の羽袖　九世九二八
天つ少女の調めかな　草五九七
天つ少女の羽衣なれや　芭二五四三
天つ少女の羽衣の花の蔦の　奉一七四〇
天つ少女の羽衣よ　翁七
天つ少女の羽袖を返し　吉天三三九五
天照らす神の榊のもみぢ葉の　佛二七八九
天照らす氷の物　東二六九九
天照大神(テンセウダイジンをも見よ)　給シテ三四四一
天照大神
　地神五代の祖——　給三四五一
天照大神皇孫を葦原の中つ國の　水無月二九四二
天照大神に御暇申させ給ひ　大原五五〇
天照大神の御兒　俊成一四四四
天照大神の神孫なれど　花筐二五八二
天照る神にては櫻の宮と現れ　右三四七
天照る神の惠みを受けて　右二四九

海士の磯屋
　げに面白き——とや　紋一〇四八
　須磨の浦——に宿りして　智三三四四
あまの命を助けたによつて　橋△三五一三
あまの命を拾うたによつて　夜△三一七二
天の磐座
　伊弉諾伊弉冊の尊——にして　鏡七一〇
天の磐座の苔筵　金八七四
天の岩戸に閉ぢ籠りて　繪三四五一
天の岩戸の神遊び　道明一八三五・弓三三三九
天の岩戸を押し開き　内三七五
天の岩戸を引き立てて　三輪ワカ二九八七
天の岩船雲の波に　岩二九二
天の浮橋　石一三七八
天の浮橋
　伊弉諾伊弉冊の——踏み渡り　小鍛一一三
天の浮橋に二神佇み給ひて　逆一二〇七
天の浮橋のいにしへを現し　淡一四八
天の香久山(奈良)(カクヤマをも見よ)
　久方の——いつしかに　三山二九一六
天の香久山も向ひに見え　葛七〇二
天の川(大阪)
　交野の御野禁野につづく——　雲雀二六四一
天の川
　年に一夜妻逢ひもやすると——　鳥三三九七

天の川瀬に洗ひしは秋の七日の衣　草子一一九四
天の河たた渡りして七夕の　項九九一
天の川苗代水にせき下せ　蟬丸六八
天の河波立ち隔て　砧八三三
海士の刈る藻に栖む蟲にあらねど　海士一〇七
海士の刈る藻に棲む蟲のわれからと　同三七
蟬丸二七四一
海士の子どもも心せよ　鵜三五一
海士の子なれば宿をだに定めなき　胡一一四六
天の兒屋根
　久方の——の代々とかや　春日六七〇
天の兒屋根の御讓り　海一七一
天の兒屋根の神代より　佐一二六八
天の衣　西王一五七四
天の逆矛と名づけそめ　逆一二〇七
天の探女
　岩船を漕ぎ寄せし——は　岩二九二
天の探女が古を　佐一二七八
天の探女は波の腰鼓　岩二九四
海士の捨草徒らに朽ちまさり行く　松風二八一七
海士の捨草の波の藻屑の　俊寛一四三〇
海人の燒殘　敦一二九
天の巷
　陰陽の二神——に行合の　歌三五六
天の鼓を打たうよ　天二一三七
海士の釣舟

　泊り定めぬ——　通盛三八九九
天の戸に入らせ給ひけり　代一四八五
天の戸の明け行く空の朝日影　佐保山一〇七
天の瓊矛
　青海原にさしおろす——の雫　[illegible]一五一八
海士の苫屋に共寢し　[illegible]一一六
天の鳥船
　兵衛はさなから——にかくやらん　自五一二
天の戸を渡り　熊一四九
天の瓊矛の直なるや　金八七一
あまのの里(香川)　海一七三
あまのの原(香川)　海一七四
天の羽衣
　君が代は——稀にきて　草九八六・羽一四九三
天の羽衣の雲路に立ち歸り　富士山二六九一
天の橋立(京都)
　與謝の海の——はるばると　九世九一三
天の橋立光添ふ　九世上歌九三四
天の橋立與謝の海　大江五六四
天の羽袖に手折りて　泰一七三八
天の原
　雲路に續く——　梅二二七五
　月も曇らぬ——　金一七一六
　月も更け行く——　九世九六八
天の原隈なき四方の氣色　住一四七五

天の原ふりさけみると詠めける　野守二四二四
天の原ふりさけ見れば霞立つ　羽二四九〇
天の原八十島かけて漕ぎ出づる　龍虎道行三三六一
天の御矛を授け給ふ　逆二〇七
海士の見る目もいさみある　九世九三
天の叢雲ともこれなれや　小鍛一一三
天の村早稲種とりて　御二九六〇
天の村早稲種蒔きて　飛鳥六八
海士の呼び聲幽かにて　松風二六二七
海士の呼び聲里近し　八島三一四七
海士の呼び聲ひまなきに　忠度一聲一九〇七
天の小稲の天が下　御二九六五
海士の小舟にうち乘り　高砂一八六八
海士人　阿三一
海士人の歎きを身に積みて　須一四九七
天滿神の宮寺に　道明一八二七
天滿つ月も滿潮の　海次第一七五
天滿てる神の御幸の跡古りて　右三四三
雨夜の月
　彌陀賴む人は――なれや　百二六七二
雨夜の月の影　當一八四三
雨夜の月を待ちかぬる　綾一九四
雨夜の物語
　古に迷ふ――申さん　忠度一九一五
雨夜の物語聞くにも袖を濕して　須一四九四
雨夜の物語しなじな言葉の花も咲き　羅三三四九
あまりに堪へぬ心とや　姨三四八〇
餘りの惡念は却つて善心となる　殺一六四一
天少女
　一月夜々の――奉仕を定め　羽二四九二
　うたてはかなき――　梅四二八
　ちはやぶるなり――　放生二四六五
海士少女
　年經て住むや――　呉九七八
　友呼びかはす――　室三〇二三
海士少女と契りをこめ　海一七七
海士少女の通ひ馴れたる　富士山二六八七
海士小舟
　白波の八重折る上に――　梅四三五
　とまり定めぬ――　海一七三
海士小舟初瀨の川と詠み置ける　玉葛一九六〇
海士小舟渡りかねたる浮世かな　白鬚一四六五
網
　執心の――　阿三八
　誓ひの――　俊寛一四二九
阿彌陀
　今在西方名――　高野六一三・道明一八三〇・朝三二六八
　八萬諸聖教皆是――　當一八四三
阿彌陀といつぱその行　實一二五五
阿彌陀如來
　證誠殿は――　巻二八一一
　本宮證誠殿――の誓ひ　[illegible]二〇二六
阿彌陀佛
　三十六萬億同號同名――　陽一五三二
　八萬諸聖教皆是――　誓一五五七
阿彌陀佛歌舞の菩薩聲々に　土車二〇七六
阿彌陀佛やなまうだ　百二六七二
網をはし引くか　[illegible]
雨
　一味の御法の――　定二一一五
　一樓の明月に――始めて晴れり　羽二四八六
　風枯木を吹けば晴天の――　雨三三〇・經二〇八六
　雲となり――となり陽臺の時　松山鏡一八七一
　桂林――を拂つて松風を調む　女三四九〇
　五更の――もやむ事なし　蟬一六七四
　五日の風や十日の――　東方二一八〇
　舟子は解くこれ明朝の――　白鬚一四六五
　月にも疎く――をだに聞かぬ　蟬一六八六
　蓬窓――したゞりて　三井[illegible]
　降る――も時をたがへぬ　鵜四五三
　身を知る――の晴れぬ心や　攝一六五四
雨うち灑ぐ夜嵐の　紅一〇八八
雨多き年は黒き繪馬を掛け　繪馬二四四九
雨原憲が樞とも濕ふ　大原五三八
雨原憲が樞を濕す　半二五〇三
雨ごさめれ　[illegible]一〇四八

雨少き年は白き繪馬を掛け　繪△三四五〇
雨塊を動かさず　代一四八三
雨塊を動かさで　佐一三七八
雨塊を動かせり　石一三七九
雨塊を潤して枝を鳴らさぬ　放生三四五七
雨つちくれを潤して千里萬里の　[illegible]一四三
天地の神の威德はありがたや　御三九六一
天地の開けし時よ神さびて　富士山三六九〇
天地の開けし御代は久方の　和一[illegible]一〇三一
天地の開けしもさしおろす棹の　室三〇三
天地のむたに榮えまさなん　梅四三四
天地は何を隔てん玉垣の　羽二四九[illegible]
雨壽
　養ひ得ては花の父母たる――の　養三一三六
天長く地久しく　内三七五・難一三二八
雨に着る田蓑の島　蘆五四
天にます神の掟の風のまに　梅四三〇
雨による田蓑の島と詠み置きつる　蟬一六七七
雨の祈りの御時　紘一〇五〇
天鈿女命　綸ツレ三四四一
雨の音は龍渉　紘一〇五三
雨の大臣　紘一〇五〇
天の日蔭のかづら垂て　梅四三三
天の帝の御歌　采四〇二
天の帝の御代より　求三〇七二
天の御神の御採の鋒　玉井一九七七
天の八重雲をいづのちわきにちわき　内三七五
雨の夜
　廬山の――草庵の中ぞ思はる　芭三五三四
雨の夜の鬼一口に喰はん　安達二一九
雨の夜のつきぬ名殘ぞ悲しき　[illegible]三九三
雨の夜は目に見えぬ鬼一口も　通小七七〇
雨はそうようを打つ　采四一〇
雨はたされ
　月は漏れ――ととにかくに　雨三三
あめはこぎの緣より　采四〇〇
雨は降りきぬ同じくは濡るとも　雲雀三六四一
雨は又瀟湘の夜の　西三三
雨は矢先土は精劒　満八五四
雨叢雲や隱ぐらん　望一〇五四
雨もたまらぬ奥山の　二人三七三〇
天より降れる種　漢一四六
雨を帶びたる粧ひ
　梨花一枝――の　楊三一一九
危き（アヤオキを見よ）
綾織二人の人　吳九八〇
あやかし
　この御船には――が憑いて候　船辨三七八三
あやしの太鼓　綾一九四
綾菅笠にて顏を隱し　安宅八八
綾といつぱ唐土[illegible]　[illegible]九八
あやなく
　何か――わきていはん　右三四四
あやなく今日やながめ暮らさん　右三四四
綾錦
　梅津の秋の[illegible]は河水に[illegible]――　[illegible]八[illegible]
綾の御衣を添る　吳九八三
綾の衣
　くれはとり――の浦里に　[illegible]九七八
〔綾鼓〕　一八九
綾の鼓とは知らずして　綾一九三
綾の鼓は鳴るものか　[illegible]九六
綾の紋
　ためしに引くや――　吳九八六
綾の紋をあなす故に漢織とは申す　吳九八〇
漢織
　綾の紋をあたす故に――とは申す　吳九八一
　吳織――と申し二人の者　吳九八〇
あやまつて
　富士を――討たせぬ　小袖曾我四四〇
謬つて仙家に入つて半日の客　木[illegible]三三[illegible]・[illegible]三四
謬つて半日の客たりしも　志一三九四・石一三七五
綾女絲目の女婦を添へ　吳九八[illegible]
あやめ草
　鳴くや五月の――　菖蒲八八一
菖蒲の蘰の　杜六三八

あやをたす舞歌の曲　源太一〇七三
鮎
　國栖川にて釣りたる——を燒き　國八九八
　玉島川の——を釣らせ給ふ　國八九九
あゆみの板をどぶ〳〵と踏み鳴らし　夜△三三七一
歩みを運び
　賀茂の明神に——・　生二七〇
　年月——つつ　[illegible]四五二
歩みを運ぶ
　神に——なり　俊寛一四一五
歩みを運ぶ御値遇　道明一八二七
歩みを運ぶ神垣や　放下次第二四四〇
歩みを運ぶ宮寺の　[illegible]五一五
危きは薄氷を履む理のたとへ　龍田一九二六
あらあら一義を顯すべし　賀七三六
あら急がしや
　待つらんものを——　通小七七二
荒磯島にただ一人　俊寛一四二九
荒鵜
　島つ巢おろし——ども　鵜飼二〇六
荒海の障子おし開けて　大江五六五
荒海の障子を隔て　[illegible]三四二
荒鵜をとりて贄に供ふ　鵜祭四一六
荒金のその始め　[illegible]上歌四〇〇
あらかねの土といひ　逆一三二五
あらかねの土にして　草子一一九八
荒き風にも當てじと御志の　雷三三七
あらくらの夜や　通小七七一
嵐
　因果の花につきたる——　三山二九三
　無常の——音添ひ　隅一五三一
嵐木枯瀧の音　鞍九五九
嵐木枯村時雨　錦木二三五〇
嵐にもろき落椎　通小七六五
嵐の底の戸無瀨たる　賀七三九
嵐の山(京都)　嵐二〇三
嵐の山櫻　鞍九五八
嵐の山は名にこそ聞け　雲林四六〇
荒島
　國々は——なれば　逆一二一三
嵐や空に歸るらん　泰一七三五
〔嵐山〕　二〇一
嵐山(京都)　嵐所二〇一
嵐山
　嵯峨野の——瀧の響も嵐添へ　東九六九
　高雄——　[illegible]三六一六
　千本の櫻を——に移し置かれ　嵐二〇三
　松の尾の——　[illegible]
嵐山戸無瀨に落つる瀧つ波　西行一一七八
嵐山の峯には實相の聲滿ちて　松尾六八四七
爭ひは人の身も變らぬものを　[illegible]一三六六
あらたたる御影向　弓三三四
あらたに靈夢を蒙り　生三六六
あらたまの春の心を若草の　[illegible]四四四
改まれどもわれぞ古り行く　[illegible]
あらため・
　馬上を——海士の小舟に乘り　通[illegible]九二二
有乳の山(福井)
　末は——越えて　[illegible]一六七
有乳山(福井)
　淺茅色づく——・　安宅八三
　北時雨降り來る峯や——　[illegible]四一
あらつれなやつれな　盛二三二
荒天狗
　姿も心も——を師匠や坊主と　鞍九六一
あらぬ方へ逃げ行けば　[illegible]
顯し衣
　今こそは——の　[illegible]
　威光を——の　[illegible]
あらはし衣の色添へて　吳九七九
あらはし衣の袖つきて　山一七四
あらはしきの神と中寸門守の神　[illegible]
現れ出でし神松の　高砂一八七一
あらはれ出でし住吉の神　岩二九〇・雨三三七・白樂二四八〇
あらはれていつかは君と　[illegible]

荒ぶる神
　さばへなす——もおしなめて　水無月二九四二
荒ぶる神々これを歎き　綸三四五二
あらぶる神達の舞歌の袖　大社五八〇
あらぶる神は飛び滿ちて螢火の　水無月二九四二
あらまし
　かの——は候　夜三三六一
　都にて——のかひもなく　鳥二三〇三
あらましごとも徒らに　正一三六一
あらましの末頼みある中　元一〇八五
霰乞はう　水へ二六六二
霰玉散る　歌三六七
霰の白玉盤に落ちて欄干を走る　咸八〇二
有明残るあさぼらけ　江島・藤四九二
有明の月澄み昇る程　浮三一九
有明の盡きぬぞ名殘なりける　元一〇八五
有明のつきぬ涙をおさへつつ　蟬一六七八
有明の月も隈なき深更に　張上歌二〇四九
有明のつれなき命ながらへて　源氏三三六三
有明のつれなきながらながらふる　放下二四四〇
有明のつれなき春もすぎま吹く　花筐二五八三
有明のつれなくも御通り候もの　土車二〇七一
ありがたや今も在世の心地して　舎上歌一三八七
荒磯海の濱の眞砂の數々に　奉一七三五・白樂二四七七
荒磯海の濱の眞砂の數ならぬ　蘆四九

荒磯海深きは法の道ぞかし　一七三一
有常
　筒井筒の女とも聞えしは——が娘　井三四〇七
　業平紀の——の息女夫婦　井三四〇二
有常の女　井シテ三三九九
ありとは見えて逢はぬ君かな　木賊二三〇九
ありとは見えて逢はぬとこそ　柏六六四
〔蟻通〕　二一一三
ありとほしとも思ふべきかは　蟻二一一九
蟻通明神(大阪)　蟻所二一一三
蟻通明神　蟻シテ二一一三
蟻通の明神とて物咎めし給ふ御神　蟻二一一八
在原
　跡はここに——なるその業平の　賀茂物七五六
在原寺(奈良)　井三四〇一
在原の跡た隔てこそ杜若　杜上歌六三三
在原の跡は昔に業平の　水無月二九四一
在原の中將年經てここに　井三四一五
在原の月やあらぬとかこちける　夕三三一〇
在原の業平供奉し給ひ　小鹽三四六一
在原の業平のその身は朝に隙なきを　熊野三三四五
在原やなぞの翁ども　翁八
有馬山(兵庫)　藤榮二一四九
有馬山隱れかねたる世の中の　忠度一九〇七
あるかなきかにかげろふの　經二〇八七

あるかなきかにかげろへば　花三三五七
あるかなきかの心地して　鐘一四五
主なしとて春な忘れそ　老△五三〇
主忘れぬしるしぞと匂ひをとめて　三九二一
ある時翁申すやう　寢クセ二三九九
ある時おとどいは持佛堂に參り　望クセ三〇五二
ある時常は清涼殿に御出なり　クセ一六三九
あるにもあらぬ魂のありかを　柳三一二〇
あるはかひなき常木の　一五三一
あるはなくなきは數添ふ世の中に　關寺クセ一六一八
或は天つ御空の緑の衣　羽クセ二四九四
或は若有聞法者　梅枝上歌四四四
あれあれ嶺より雲起り　龍虎上歌三三六九
あれ御覽ぜよ御津の濱に　五三
荒れたる宿のうれたきに　現二二一七
あれ體の漁夫だにも　白樂二四七九
あれはともいはば形や消えなまし　上歌二三六九
あれはともいはば形や消えなん　三八九
あれを見よ野飼の牛の聲々に　上歌一八一一
あわてて事を爲損ずた　七九四
藍
　青き事藍より出でて——より深し　六五一
　泗水たたへて——の如し　一三三六
〔藍染川〕　二三九
藍染川に身を投ぐる　藍二三五

青海原にさしおろす天の瓊矛の露　善界一五九八
青かりし
　稲荷の山のもみぢ葉の――惠み　松尾二八四七
青かりし葉の秋　熊野三三五一
青き海の波颯々の鈴も　須一五〇三
青き鬼
　賀茂川に沈みしは水の――　鐵七一一
あをき(檍)が原(宮崎)
　西の海――の波間より　岩二九〇・雨三三六
青き事藍より出でて藍より深し　高砂一八七一・白樂二四八〇
青つづら
　眞柝の葛――來る人稀になり　檜二六一三
青和幣　大原五三八
　榊葉の――白和幣　檜三四五三
　波の白和幣麻の葉の――　水無月三九四四
　波の白和幣水の――　身二九七二
　松は立枝の――　志一三〇四
青和幣白和幣とりどりなりし　弓三三二九
青丹衣の風情　草子一一九二
青鈍の狩衣　須一五〇三
青女房と思しき人　葵一六〇
青丹よし楢の葉守の神心　金上歌八七一
青丹よし奈良の都を　百二六七八
青丹よし奈良の世々ぞ久しき　佐一三七三
青根が峯(京都)　嵐二〇九

青野が原(岐阜)　熊坂九三三
青野が原は名のみして古葉のみ　朝三三六二
英遠の濱(富山)　藤二七三三
青葉
　花も散りなば――ぞかし　三山二九二三
青葉隠れの遲櫻初花よりも　大原五四六
青墓(岐阜)(謠曲ではナヲハカと謠ふ)　朝所二二五五
青墓子安の森繁れば　熊坂九三六
青墓の長者　朝二三五九
青墓の宿　朝二三五七
　朝長は美濃の國――にて自害　朝シテ二三五五
青墓宿長者　大原五四五
青葉にまじる夏木立　藤二七二五
青葉に見ゆる紅葉川　籠三三九五
青葉の竹　歌一三二九・雞△二三三五
青葉の笛　大原五四〇
青葉を慕ふ山路かな　富士山二六九〇
あをみなづき
青柳　船辨二七七七
　絲には靡く――の枝を連ぬる　吉天三三九一
　深緑絲捻りかけて――の　大原五四〇
青柳絲を亂しつつ　遊三二〇四
青柳に鶯傳ふ羽風の舞　櫻一三三八
青柳の絲櫻　關寺一六一五
青柳の絲絶えず

青柳の絲長く　三輪二九八六
青柳の暇申して　墨一五〇九
青柳の朽木　花一〇〇六
暗々たる庵室に徒らに眠り　景六三四
安危
　四海の――は掌の中に照らし　羅三三四七
行脚
　抖擻――に身をやつし　朝二三六一
行脚の姿に身をやつせば　放下二四三九
闇穴道の巷にも九曜の曼荼羅の　弱三三一九
安居の御法と申すも御母摩耶夫人　百二六七九
安居も過ぎ方になり　半二四九八
安居院(アゴキンを見よ)
庵室
　あれなる――に立ち越え　蘆一三三
　暗々たる――に徒らに眠り　景六三四
　再び――へ歸らぬ法　自一三三六
暗濤月を埋んで清光なし　通盛二八九九
安堵
　自訴悉く――し　身三三九五
　自筆の狀――に取り添へ　鉢二九六九
安德天皇　[illegible]三五六・大會五五七
安堵仕り　七騎一三三〇
安堵の御教書を賜はり　望二〇四五
案のうち

一人を留めん事は――　景六四五
闇夜に篝火消うして　鵜一六七四
闇夜の篝火渡りの籌待ち得たる心地　高野六〇四
安樂
　微妙――の結界の樂となり　當一八五三
安樂國
　何況造立者必生　知二一四
　この身ながら――に生まるる　賢一三四八
安樂世界より今この娑婆に示現して　田一九九一
安樂寺（福岡）　松所五二一
安樂寺の地を踏し　藍二四四
安樂の國
　二世――にはや生まれ　誓一五五七

い

悠々
　水滔々として波――たり　天二四三・羨三一四〇
遊樂
　面白の――や　源太一〇七三
　花鳥――の瓊筵　松蟲二六四
遊樂遊舞の和歌を詠じ　松蟲二八五六
遊樂快然たる采女の　采四〇九
遊魚
　水中の――は釣針と疑ふ　竹三三四
遊花の友　雲雀二六四六
遊君
　宵とり――すゑ　熊坂九四二
祐慶　安達ヶ一一五
祐慶
　東光坊の阿闍梨――　安達一〇七
幽玄
　入つては――の底に動じ　放下二四四七
幽魂
　軀を守る――は夜月に飛び　生三六八・松山天二八九〇
　王昭君の――　昭一五八九

遊子殘月に行きしも　二人二七二〇
遊子伯陽は月に誓つて還りもなし　[illegible]
[illegible]
　渡口の――に頭靜まつて出づ　[illegible]
遊僧
　三塔一の――　[illegible]六五六
　三塔の――　[illegible]
遊女
　熱田にて――と相馴れ　景六六六
　江口の――　江口四八二
　祇王御前と申す――　[illegible]八九
　世上に名を得し――ありしに　佛二七九三
　ひやくま山姥とて隱れなき――　山二二六七
　繪に描ける――の姿にめでて　[illegible]四四八
優女
　小町はさも古は――にて　草一七一五
遊女の謠ふ舟遊び　江口四八一
優女の形となり　[illegible]一六四四
遊女の道を踏みそめし　祇八六五
遊女山姥　山ツレ三一六五
遊舞の寵愛甚しく　佛二七九二
幽靈
　敦盛が――　生二六九
　采女の――　采四〇一
　江口の君の――　江口四七九

項羽が——　項羽五九四
景季が——　箙五一四
呼韓邪單于が——　昭一五九〇
小宰相の局の——　通盛二九〇六
實盛が——　實一一五〇
平の知盛——　船辨二七八四
經政が——　經二〇八六
南無——出離生死頓證菩提　女一四九八
母海士人の——　海一八二二
光源氏の——成等正覺　源氏一〇三八
富士が——來ると見えて　富士太二七〇六
富士が妻のその——　梅枝四四四
佛御前の——　佛二七九七
松風村雨二人の女の——　松風二八二三
義經が——　八島三一五七
賴政の——　賴三三〇四
小野の小町の——　通小七六六
〔幽靈熊坂〕　熊坂異本九三一
幽靈ぞとは白波の　熊二五
幽靈朝長の佛事　朝二三六七
幽靈の幻ながら現れて　同三四
幽靈さきに成佛の道明らかに　砧八三九
遊獵
　小松殿北山にて茸狩の——の　[illegible]三一〇九
幽王の后褒姒と現じ　殺一六四四

忌垣
　榊の枝を——の内にさし置き　野宮二四一〇
　千早振る神の——も越えつべし　水無月二九四四
　和光同塵の——の内には　松尾二八四一
いかさまこの所に休らひ　姨三四七四
後の床のうき枕　車九六五
雷
　閃々たる——の光　江島四九五
　この矢即ち鳴る——となり　賀七三七
天に輝く稻光大地に響く——　善界一六〇四
鳴る——となり内裏に飛び入り　雷三三三七
雷の姿は現れたり　雷三三四〇
いかなるすぢを尋ね來ぬらん　玉葛一九六七
いかなれば容しき容に散る花の　藤一盛二七三〇
いかにあれなる道行人　櫻一三三九
いかに鬼神も確かに聞け　田一九九九
いかにしてこの一本にしぐれけん　六浦三〇一一
いかにせん都の春も惜しけれど　熊野三三五三
いかにまがへて折れる榊ぞ　野宮二四一〇
碇
　沖なる船の——を引き上げ　大原五四九
〔碇潜〕　二四七
碇を戴きて海底に沈んで　碇二六一
生死の海（シャウジノウミをも見よ）
　心からこそ——とも見ゆれ　八島三一五七

　妄執のその——なれや　綾五〇九
生きてある身は久方の　天鼓第二一三七
生きて恨み死して悦ぶ　[illegible]二四五
生きての恨み死しての悦び　[illegible]三四三
生きてよも明日まで人の　三山二九一九
生きとし生けるもの何れか父母を　春榮一四一三
生きとし生けるもの毎に歌を　白樂二四七六
生きとし生けるものごとに敷島の　高砂一八六六
生きとし生けるもの日月の恩德に　鵜二九六六
生きとし生けるものとして豐かなる　放生二四五七
生の松（福岡）
　猶いつまでか——それも久しき　高砂一八六一
異香薫じて瑞雲たなびき　嵐二一〇
異形たる有樣　高野六〇九
異形のいでたち心得ず　放下二四四五
生靈死靈の間を梓にかけ　葵一五七
息をつかせ　關原一六三九
幾日來ぬらん跡末もいさ白雲の　高砂一八六〇
生藥
　今のためしも——　[illegible]二一二四
軍神
　一の松明は——　[illegible]
軍の門出を祝ふ心の花も　[illegible]
軍の血祭　[illegible]一六一〇
軍物語が承りたく候　[illegible]二五四

五十串とて五十の幣帛を立て　淺一四四
幾關々の道芝から　國一五二〇
幾瀨渡りの野洲の川　鉢木道行二七五五
〔生田〕
生田(兵庫)　生巢(?)二六一
生田　俊所五〇五・求所三〇五九
われは――の渡り來る月の　紘一〇四六
〔生田敦盛〕　二六三
生田川(兵庫)　敦一三五
生田川
閻浮に歸る――の　錦五一八
來る年の矢の――　錦五〇八
生田川の水鳥をさへ二人の矢先　求三〇六九
生田川の身を捨てし物語　生二七一
生田川の身を捨ててこそ名は久し　錦五二一
生田の川(兵庫)　錦五〇八
生田の川に身を捨てて防ぎ戦ふ　千一七〇九
生田の川は名のみなりけり　求三〇六九
生田の里(兵庫)　求三〇六二
生田の名にも似ぬ命　求三〇七三
生田の森(兵庫)　生所二六三・求三〇六四
生田の森
東は――西は一の谷　錦五二一
生田の森の合戰に於て　通盛二九〇六
生田の森は平家十萬餘騎の大手　錦五一〇

生田の森へ下れと　生二六七
生田の小野(兵庫)　生二六八
生田の小野
若菜摘む――の朝風に　求三〇六三
生田の小野の若菜なり　求三〇六六
生田姫
春は佐保姫夏は――　佐△一二七五
生野の道の程遠き　九世九一一
生野の道は猶遠し　大江五六三
いくばくの田を作ればか時鳥　[illegible]七二
幾ばくの難を遁れ　忠信一八九四
幾代積りし雪ならん　二人三七一三
幾代積りて淵となるらん　邯七八五
幾萬代と舞ひをさむ　内三七九
幾萬代も限らじな　三笑一二八七
衣冠正しく引き繕ひ　張三〇五一
生贄の鯉や上らん　鵜飼三〇六
池田の宿の長をば熊野と申し　熊野三三九
池田次郎　木曾ツレ八一五
生贄
大蛇の――を悲しむなりと　源太一〇六九
生贄の鳫鳥もここに現れ　鵜祭四二一
池の浮草波に揺られ　大原五四〇
池の氷のとうとうと　自一三四四
池の凍の東頭は風渡り　綾一九八

池の玉藻と見るぞ悲しき　采四〇一
池の玉藻の濡衣　[illegible]一九一九
池の波よるの汀に座をなして　采女四一五
池の藤波夏かけて　大會五四六
池の汀の鶴龜は蓬萊山もよそならず　鶴一〇九八
池の藻屑に亂れ浮くを　采四一三
池は水草に埋れて　夕三二八
池水に汀の櫻散りしきて　大會五四一
いける身と思すかや　采四一[illegible]
生けるを放つかと深き誓ひも　放生四九[illegible]
生けるを放つ大悲の光　弓三三五
生けるを放つ祭　放生四九八
異國退治の御爲に　弓三三九
異國退治の御時　放生四九九
いさぎよき影や鏡の宮所　御一帶九七一
いざ今日は春の山邊に歸りなん　小林△四六五
いざ今日は春の山邊に交りたん　老松一三〇一
砂
眞珠の――瑠璃の――　咸七九三
庭には金銀の――を敷き　邯七八三
いさご長じて巖となり　高砂△一八六九
砂長じては又巖の　求二六六四
砂長する山川や　富士山次第一六八七
砂を塔と重ねて黄金の膚こまやかに　章一七一〇
いざ櫻われも散りなむ一盛り　春上歌一七六

いざさらば木蔭の月に臥して　雲林上歌四六六
いざさらば夜もすがら　夕待離三二一七
いざ弔はん數々の　同待宵三七
伊弉諾
　世界とならざりし前を――と　淡一四七
　木火土の精――となり　淡一四七
伊弉諾伊弉冊の天の浮橋を踏み　小鍛一二一
伊弉諾伊弉冊の尊天の磐座にして　鐵七一〇
伊弉諾伊弉冊の尊天の磐座の　金八七四
伊弉諾伊弉冊は天神の御教へ　逆矛一三〇七
伊弉諾と書いては種蒔くと讀み　淡一四五
伊弉諾神　淡シテ一三九
伊弉諾の御子素盞嗚の神　大蛇三五〇五
いざなはれ行く雲の上　花筐二五八二
伊弉冊
　伊弉諾――の第四の御子素盞嗚の神　大蛇三五〇八
　金水の精凝り固まつて――と顯る　淡一四七
　萬物出生する所を――と申す　淡一四七
伊弉冊と書いては種を收む　淡一四六
勇む心は眞清水の　楽三一三三
いざや成道なすべしと　星待宵一五一一
いざよふ
　ただよふか――か　大江五六五
漁する業は篝火と思ひしに　通盛二九〇〇
石和（山梨）　鵜飼所二九七
石和川（山梨）　鵜飼三〇四
石
　思ひの末は――に立つ　南七九四
石かね
　土はさながら――なりしを　逆一三一三
石川や瀨見の小川の清ければ　賀上歌七三六
いしくも隱さず申したり　籠三三九七
いしくも早く來たるものかな　葛二〇五一・土蜘二〇六一
石田の次郎　兼△七三
石壇
　羅生門の――に上り　羅三三五四
石に障りて遲く來れり　草子一一九七
石にさはりて遲くとも　養三一三五
石に精あり水に音あり　殺一六四三
石にだに立つ矢
　虎と思へば――のあるぞかし　望一一五九
石になろてふ楠の葉の　浦九一六
石にも矢の立つ　放下二四三八
石の上にも坐す　望一一六四
石の鐘（三重）　[illegible]二九五七
石の鳥居
　佛法最初の天王寺の――　弱三一一九
石の火
　石塔の――の光とともに失せ　昔一五一九
　蘇鳥稻妻――の見あへぬ程に　關原一六三〇
　世の中は電光朝露――の　[illegible]一〇八九
石の火の光の間　敦一三五・弱六九五・木賊三三一四
石橋山の合戰　七騎一三〇八
石は一つの神鏡として　弱六九七
意生化身自在不滅の鎖に引かれ　夢二七三〇
石山（滋賀）　源氏供一〇一五
石山寺（滋賀）
　かげろふの――を伏し拜み　田一九九八
　義平は――に籠りしを　朝二二七〇
石山寺に參らん　源氏一〇二八
石山に籠り源氏六十帖を書き　源氏一〇三一
石山の觀世音　聖一八・源氏一〇二八
石山の觀世音
　紫式部と申すはかの――　源氏一〇四〇
意趣
　私の――を以て身を捨つる事勿れ　内三七七
五十鈴
　神風や――の古き末を受くる　朝八九二
五十鈴川清き流れの深みとり　[illegible]一二九九
五十鈴の清き宮柱太しく立ちて　内三七四
伊勢石清水賀茂春日　白髭二四八〇
伊勢皇大神宮　草薙八八七
伊勢志摩
　まづ淡路島紀の國――筑紫四國　道三三三
伊勢島や阿漕が浦の汐をば　漕一〇四九

伊勢島や汐干に拾ふたまたまも　岩上貳六八
伊勢大神宮　内四三七一・第所一七六七
伊勢大神宮御降臨より　阿三三
伊勢大神宮に參詣申し　御二九五九
伊勢大神宮へ參らず候程に　須一四九三
伊勢大神を信じ給ひ　内三七三
伊勢天照大神を始め奉り　正一三六四
伊勢と三輪の神一體分身の御事　三輪三九八八
伊勢とやらんの御體に　佐々一二七五
伊勢の内外の宮柱　内三七四
伊勢の海阿漕が浦に引く網も　阿三三一
伊勢の海清き渚のたまたまも　阿三六八
伊勢の海の二見の浦二度世にも　松風六八二八
伊勢の神垣隔てなし　野宮二四〇八
伊勢三郎　安宅ツレ七七
伊勢の三郎義盛　忠信一八九一
伊勢の濱荻
　神風や――名をかへて　歌三五六
　神風や――折りしきて　御二九七一
伊勢の濱荻の音をかへて　阿三三
伊勢の二柱夫婦と現じ　繪三四四八
伊勢の神子　歌三二六
伊勢の宮居　内三七三・繪三四四三
伊勢の少女等あひ見つるかなと　御二九六四
伊勢人は濱荻といひ難波人は蘆といふ　蘆五一
伊勢まで誰か思はん　野宮二四二三
伊勢武者は皆緋縅の鎧着て　錦二三〇七
伊勢物語に曰く　杜六二一
伊勢物語の根本在中將業平　雲林四六三
伊勢物語を手馴れ　雲林四九九
伊勢や日向の事も問ひ給へ　歌三五六
伊勢や尾張の海面に立つ波までも　小督一一一七
伊勢や尾張の海面に立つ波を見て　杜六二六
伊勢兩宮へ數の御寶を奉らせ給ふ　繪三四四
伊勢をの海士　阿三二・海一七二
伊勢を拜し奉りしその神感の　花筐一五八二
急げ使涙を文に卷き籠め　夜三三六九
急げや早苗老いもこそすれ　飛鳥七二
磯千鳥
　沖の鷗――　[illegible]五三
　波路ただよふ――　[illegible]二〇一五
磯千鳥友呼びかはす聲すなり　[illegible]一二五一
磯菜
　こゆるぎの――摘む　和三〇三七
石上(奈良)　井筒三三九九
石上寺伏し拜み　玉葛一九五八
磯の禪師が女に靜といへる白拍子　正一三六四
磯邊寺住僧　櫻川一三三三
磯枕苔の衣を片敷きて　攝待三三[illegible]
磯山
梓が杵の――[illegible]　[illegible]
磯山に暫し岩根を待つ程に　[illegible]六九七
いたいけしたる物　[illegible]二九五一
いたづら事　[illegible]二四三〇・[illegible]六六
徒らに心を動かすは　[illegible]四四〇
いたづらに過ぐる心は[illegible]れと　[illegible]四五
板取(福井)
　杣山人の――　[illegible]八[illegible]
板鼻(群馬)
　下[illegible]の――[illegible]　[illegible]三五四八
板間も惜しと軒を葺かず　[illegible]
文蛤　[illegible]井[illegible]二九〇二
文蛤の精　[illegible]井[illegible]二九[illegible]
文蛤の銚子　[illegible]井[illegible]二九[illegible]
板井
　庭の――を掬びあげ花水とし　[illegible]四〇
市
　下おのづから――をなし　[illegible]一[illegible]
一榮一落まのあたりなる　[illegible]二七[illegible]
一葉(ヒトハをも見よ)
　舟を――といふ事　白一三四二
　船を――といふことこの御宇より　藤榮三二五八
一葉の蘆に凝り固まつて　白鬚一四六八
一葉の靡る風の行方を御覽せよ　放下[illegible]四四六
一葉の船の力　[illegible]

一葉萬里の舟の道　八島三一四七
一音なりともわれを念ずる時節　盛三一〇七
一河の流れ
一樹——を汲むも他生の緣　錦木三三五二
一樹の蔭　汲みて知る名も　櫻一三三六
一樹の蔭——これ又他生の緣　知三三四一
一樹の蔭——皆これ他生の緣　山三一八二
一樹の蔭——を汲みて知る　大江五六三
一樹の蔭に宿り——を汲む　小督一二〇〇・纒二〇八五
一樹の蔭の宿り——を汲みてだに　宝二一〇七
一河の流れ汲みて知る　松蟲三八六四・御二九六七
一河の流れの水汲みても　江日四七九
一河の流れを汲みて知る　合六八四
一河の流れを酌む酒を　紅三〇八六
一河の流れを汲んで他生の緣ある　田一九九七
一河の水
一樹の蔭や——皆これ他生の緣　作一五四三
　　千一七二一
一義
あらあら——を顯すべし　賀七三六
記する所の——によらば　自然一四六七
一行の果羅の旅　弱三一九
一夏
八瀬の山里に——を送る　通小七六三
一月夜々の天少女奉仕を定め　羽二四九二
一夏の開花を立て　半二四九八
一夏を送る僧　通盛二八九七

一期生の後に早く不退轉の位に至る　江島四九三
一期の浮沈極まりぬ　安宅九四
一劫をも浮かむ　舍一三八八
一矜伽羅二制多伽　横二〇三五・野守二四三三
一字千金　雷三三七
一七日參籠
淸水に——申し　大佛一七四五
善光寺の如來に——申し　道明一八三五
一七日參籠申し　誓一六五二
一七日詣で給ひ　半二六五
一寺の覺衞他山の覺え　鞍九五四・開案一六一六
一寺の覺衞を得ず　仲三一〇
一字の返歌と申す事　雲二〇
一字も變らで詠みたる歌　草子一一九一
一樹一河の流れを汲むも他生の緣　錦木三三五二
一樹の蔭
雨は降らねどもこの宿は——と　葉栗三一五一
他生の緣ありて——の花の緣に　自五一四
他生の緣による——の　芭三五三一
他生の緣の——に　自五一七
一村雨の雨宿り——に立ち寄りて　紅一〇八五
一樹の蔭一河の流れ汲みて知る　櫻一三三六
一樹の蔭一河の流れこれ又他生の緣　知三三四一
一樹の蔭一河の流れ皆これ他生の緣　山三一八二
一樹の蔭一河の流れを汲みて知る　大江五六三

一樹の蔭他生の緣と思し召し　[illegible]
一樹の蔭に宿り一河の流れを汲む　小督一二〇〇
一樹の蔭に宿ることもこれ生々の　纒二〇八五
一樹の蔭にや宿りけん　近一〇七八
一樹の蔭の宿り一河の流れを汲みて　江日四七九
一樹の蔭の宿り他生の緣と　宝二一〇七
一樹の蔭の宿りとて　[illegible]三六一
一樹の蔭の宿りもこの世ならぬ　纒一六八六
一樹の蔭の宿りも他生の緣　合六八四・[illegible]五五四
一樹の蔭や一河の水皆これ他生の緣　松蟲三八六四
　　作一五四二
　　千一七一一
一樹の宿りとして　纒一六八四
一樹の宿りなるも他生の緣と聞く　[illegible]四
一乘
二つもなく三つもなく唯——の　[illegible]三二〇
一乘の功力ながらに　朝三七一
一乘の妙なる花の紐　[illegible]七
一乘の妙文　身九五四
一乘妙典　[illegible]五三・[illegible]三八
一乘妙典
妙なる——の功力を得んと　錦木[illegible]六
混を出でし蓮——の題目なり　[illegible]四九九
一乘を說き給はねば　[illegible]三三六
一族ともに横領せられて　[illegible]五五九
一代教主釋迦牟尼寶號　自一三七・[illegible]九三
一大三千大千世界　[illegible]一六〇三

一大事　[illegible]七七八
身の——をも尋ねばや
一大事の御事　安宅六八四・國性一六二八
一大事を相傳す　藏九六〇
一大事を究き一見所を開き　谷一六三五
一代の教法は五時八教をけつり　大會一七七九
一段にて候　海△一八四
一稚兒二山王　大江五六三
一定のやうに申し　忠信一八九三
一塵法界の心地の上に雨露霜雪の　芭蕉二五四一
一條今出川に住む女　藍二二六
一條大宮（京都）　湖一一四一
一條の院に仕へ奉る　小鍛一一一三
一度に頼む彌陀の力　百二六七二
一度はさもなき時もあり　熊坂九三六
一男二女の山　三山二九一五
一日經書いてわが跡弔ひて　二人二七一四
一日に千里を驅くる名馬　項五九三
一如
萬法皆——なる實相の門　東岸二一七五
一人當千の武士　攝一六五八
一人に限らぬ思ひの色　桑一五〇七
一人も漏らさじの方便品を讀誦す　通盛二九〇五
一人を留めん事は案のうち　景六四五
一念化生の鬼女となつて　山三一八一
一念三千の機を現して三千人の　[illegible]七三一
一念三千の花薫じ　[illegible]上歌二九五〇
一念十念唯一聲の内に生まるる　通[illegible]二二〇一
一念十念の間に彼の國に迎へ取る　土車二〇七八
一念稱名の聲のうちには　[illegible]六一・實一三四七
一念瞋恚の邪婬の恨み　綾一九七
一念隨喜の信心なれば　芭二五三四
一念の起るは病となり　梅枝四四五
一念の功力だに三惡の罪は消え　知二三四二
一念の悟りにて多くの罪を滅し　通小七七三
一念の毒蛇となつて　道成一八〇〇
一念の窓の前攝取の光明を期し　大原上歌五四五
一念は恐ろしく　[illegible]一一六三
一念發起菩提心　鐘一四五七・卒一七二三
一念ひるがへせば無量の罪をも遁る　求三〇七三
一念彌陀佛卽滅無量　敦一三三・實一三五七・當一八四二
一念無量の鬼となる　戀一一六四
一念を飜し浮かむ力となり給へ　[illegible]三三八六
一の刀をば稚若子遊ばされ候へ　檀二〇二〇
一の松明は軍神　烏三四二五
一の谷（兵庫）　敦所一三三・碇△二五六
一の谷
東は生田の森西は——を限つて　[illegible]五一一
一の谷と申すに前は海　通盛二九〇六
一の谷にて討たれ　知三三四一
一の谷にて討たれ給ひし敦盛の　[illegible]
一の谷の合戰に生捕られ　平一七三
一の谷の合戰に討たれ　忠度一九二一
一の濱み　[illegible]
一の宮（兵庫）　[illegible]一四四
一の宮（石川）　[illegible]
一の室　谷一九四五
一の老體　七卿三三一・擔一六五六
市原野（京都）　通小町七六一
市原野
草深き——邊の露分けて　鐵七〇六
市原野のあたりに住む女　通小七六四
一番に斬つて入りしを　[illegible]三四三四
一番に馳せ參じ著到につき　鉢[illegible]五六〇
一番に破つて入り　[illegible]二五六一
櫟香椎餞手葉椎　通小七六五
市人　大飯一七六一・錦木一二四六
市人
袖ふれつゞく——の作ひ出づる　松[illegible]三六五四
市人あまた多き中に　昔三六八
一佛
これも淸水の——と　田一九九八
昔在靈山の御名は法華——　寶一五六三
若作障碍卽有——塵境　[illegible]一六〇五
一佛成道

土砂山河草木も——の法味に　野守二四三三
一佛成道觀見法界　鵜二三八九・佛二七九一
一佛乘の嶺と申すは　兼七一九
一佛乘の嶺には眞如の慧日　大會一七八〇
一分佛釋迦牟尼佛　江口△四八〇
一萬箱王か親の敵を討つたる所　望三〇五〇
一萬文殊三世の覺母たり　卷二八一一
一味雨
佛平等説如——　定二二一四
一味の雨風をそそぎ　道明一八三七
一味の雨に開くる花の　藤二七三〇
一味の法の雨等しく濺く　現一〇一七
一味の御法の雨　定二二一五
一命を輕んず
名を末代の家に惜しみ——　元一〇八九
一物を貯へず　御二九六六
一門の船の内に肩を並べ膝を組み　景上歌六四三・大佛上歌一七四九
市館
立つ——かずかずに　岩二九一
市館に禱をする盃を並べて　松蟲二八五六
一夜に三十餘丈の楠となつて　大江五六一
一夜の友　鞍九五三
一來法師　賴三三一〇
一輪滿てり淸光何れの所に　三井二九九九
一輪滿てる淸光の影　[illegible]三四八二
一輪も降らず萬水も昇らず　融二三三五
一類その以下武略様々　景六四三・大佛一七四九
一列
蒲山護法——し　雷三三三四
一樓の明月に雨始めて晴れり　羽二四八六
一院の御使源氏の大將　八島三一五一
一向に念佛三昧の定に入り　當一八四七
〔一角仙人〕　二七五
一角仙人　一角シテ二七五
いづ方も網を置きたる如く　千一七〇九
五日に當らん日ここに來れ　張二〇四六
五日の風や十日の雨　内三七八
一きう
神は——宮居は二つ　淡一四五
一騎當千の秘術を現し　兼七三〇
齋の院
賀茂の——にそなはり給ひ　定二一〇八
一曲一奏
主馬の盛久——の事　盛三一〇九
一去不來の名殘　[illegible]八六四
一空
三界所なし唯——のみ　景六三五
いづくか鬼の宿と定めん　土車二〇七五・[illegible]三三五〇
いづくか鬼のやどりなる　土蜘二〇六四
いづくか鬼の宿りなるらん　大江五六九
いづくか王地ならねば　天二一三三
嚴島の明神は娑竭羅龍王の第三の　白樂二四八〇
いづくとても住めば宿　百二六七七
いづく泊りと白波に　玉葛一九六三
いづくにか神の宿らぬ影ならん　大社上歌五七六
いづくにか今宵は宿をかり衣　[illegible]三一九三
いづくにても命を捨つるこそ肝要　夜三二六六
いづくにも心とめじと行く雲の　錦木道行二三四四
いづくにも住みは果つべき雲水の　梅枝道行四三七
一句のために殘す　花一〇〇三
因果の果をば末後まで——
一花開くれば天下皆春　雜三三三
一花開けて四方の春のどけき　芭二五四一
一花開けては天下の春　[illegible]五一二
一花開けぬれば天下は皆春　東二六五四
一見所を開き　[illegible]一六三五
一見卒都婆永離三悪道　普知三八八・卒一七三三・知二三四二
伊豆權現の力を副へ　[illegible]一〇九三
一切有情殺害三界不墮悪趣　[illegible]五九七・[illegible]二七四八
一切有爲の世の習ひ　谷行一九四八
一切衆生現當二世の爲に　道明一八二九
一切衆生悉有佛性　兼七一〇・[illegible]四六八
一切の男子をば生々の父と頼み　[illegible]三七一
一切の魔軍を[illegible]せり　[illegible]一六二一

一子
幸壽を——と定むべし　仲二三一七
法界無緣の衆生をだに——と　賀七四二
佛は衆生を——と思し　土車三〇七五
いつしか親子の御戯れ　小袖一二三一
一色一香の緣生は無非中道の眼に　[illegible]五〇八
一子出家すれば七世の父母成佛す　高野六〇四
一紙半錢の奉財　安宅九三
一床
心頭無事にして——寛し　[illegible]八四七
一生は風の前の雲　鐘クセ一四五二
一生は唯夢の如し　歌三六三
一生夢の如し　源氏一〇三七
一者不得作梵天王　梅枝四四四
一宿は利益なるべけれど　梅枝四三八
一酒とは竹葉の　俊寛一四三六
一首を詠ずればよろづの惡念を　卷三八〇九
一稱一念猶賴みあり　三井二九九〇・盛三〇九六
一所不住　東九六六
一所不住の沙門　鉢二五四八
一心敬禮　葛待斎七〇〇
一心三觀の月滿てり　身[illegible]九五〇
一心三觀の窓の前　現一〇一三
一心頂禮萬德圓滿釋迦如來　舍一三八七
一心不亂に南無阿彌陀佛　當一八四五
一炊の間
粟飯の——　邯七八八
一裏の色
金谷の春の花は——を見せ　祇八六四
一炊の夢
邯鄲の假枕——の覺めしも　鉢二五五五
何事も——　邯七八九
一寸の光陰は沙裏の金　盛三〇九八
一世
親子は——の中なるに　熊野三三四
親と子の——の契り　仲二三三二
必ず——に限るべからず　春榮一四二三
一聲の秋
風——の空　天二二四三
澗底の松の風——を催す　西行一一七一・東北二三〇〇
一聲の玄鶴空に唳く　張二〇四九
一聲の山鳥羽をたたく　山三一七九
一聲の鳳管は秋秦嶺の雲を　經二〇九〇
一跡
末が——を繼がせ申したき　春榮一四一七
一跡相續の爲に　竹雪一八七七
一石に一字書きつけ　鵜飼三〇八
一跡をも繼がせばや　[illegible]二三三
一殺多生の理　鵜飼三〇四
一世とかねたるこの世にだに　[illegible]二〇一四
一世の親子として　[illegible]三二四
一千年の色とても雪には暫し隱る　春[illegible]一四〇八
一千年の色雪のうちに深く　高[illegible]一八六五
一僧一宿の功力に引かれ　[illegible]三〇九
一足を提げ東西南北十方世界の　[illegible]九〇六
一體
伊勢と三輪の神——分身の御事　三[illegible]一九八八
大社御——の御事　源[illegible]一〇六六
佛と上人を——に拜み　[illegible]一五五八
一體分身現れて衆生濟度の御本尊　[illegible]一五六三
一體分身の御神所　源太一〇六七
一體分身の御代を守り給ふ　代[illegible]四八四
一旦の御恨み事にて　錦戸一三六五
一張の弓の勢ひ月心にあり　[illegible]四五一
五つの雲は晴れやらぬ　富[illegible]八四三
五つの鼓は僞りの　[illegible]三九五
五つの道
仁義禮智信——も正しくて　俊寛一四四一
一調子
今こそ——になりて　[illegible]一〇五四
一滴の露の始め　佛[illegible]一七九八
一滴の水
瓶には谷蓮——を納め　角二七九
一點
五更の——鐘も鳴り　天二二四五

五更の——より夜はしらじらと　源太一〇七四
初夜より後夜の——まで　盛三一〇七
一天四海波をうち治め　土蜘二〇七五
一天四海の内のみか　盛三一〇九
一天を鎭め四海を澄ます勸賞　正一三六八
一洞空しき谷の聲　山三一八〇
飯綱の三郎　鞍九五九
いつの因果の故やらん　蟬一六七九
いづのちわきにちわきて
天の八重雲を——　内三七五
いつの世の契りぞや　朝二一七一
いつの世の情ぞや　藤栄二一五一
一盃一盃又一盃　養△三一三八
伊豆箱根富士權現も御覽ぜよ　小袖一一三三
伊豆箱根富士淺間　正一三六四
一鉢
朝に——を得ざれども求むるに　闘寺一六一三
一法
胎金兩部のその——を現し　代一四八三
僞りなりつるかねことかな　清八四六
僞りのなき世なりけり神無月　定二一〇六
僞りのなき世なりせば如何ばかり　砧八三〇
僞れる姿
芭蕉の——の質を　芭二五三六
一帆の風に任す　八島三二四七
一筆啓上せしめ候　鞍九五〇

一壁には大長刀　熊坂九三六
一遍
念佛の行者——と申す聖　誓一五五一
一遍上人　誓ワキ一五四九
一遍上人の敎へを受け　遊三一九三
一遍證
萬行離正——　誓一五五五
一遍體
十界依正——　誓一五五五
一遍の念佛を回向申して　知三三四一
一遍法
六字名號——　誓一五五五
一歩擧げざる先をこそ佛の舞と　佛二七九八
いつまで草のいつかさて　錦木三三四五
いつまで草のいつまでと　咸六五七・松蟲二八〇六
いつまで草の蔭　求三〇七三
いつまで草の花散じ　闘寺一六一八
いつまで世をばわたづみの　通盛二八九八
泉川（京都）
都出で今日みかの原——　谷一九四四
泉が館に行き　錦戸三三六四
泉三郎　錦戸シテ二三六一
泉三郎妻　錦戸ツレ二三六一
和泉式部　誓シテ一五四九・東北シテ二一八九
和泉式部
あの石塔は——の御墓と　誓一五五八

この椿は——と申し　東北二一九一
和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅　東北二一九三
泉の壺を與へん　大甑一七六二
泉はそのまま盡きせぬ宿　猩一三五三
泉はもとより酒なれば　菊八二一
出雲住吉玉津島人丸赤人の　草子二一九六
出雲路の大明神
第五には——伊豫の三島の明神と　大社五七九
出雲と御一體和光垂跡の御事　源太一〇六六
出雲の御崎に跡を垂れ　大社五八二
出雲八重垣
神は——片そぎの寒き世のためし　[illegible]三八一〇
八雲立つ——妻こめに　俊成一四四四
いつより
今日は——酒を湛へ　[illegible]一八五六
出づるぞ名殘三日月の　[illegible]一七
出づる名殘の袖は濡れけり　[illegible]六五
いづれか秋にあはで果つべき　佛[illegible]七九五
いづれか先に起臥の床　[illegible]六五
いづれか順と見逆なりといはん　[illegible]一六八〇
いづれがそこにてましますぞ　揺一六五五
いづれの所より來り今生かくの如く　[illegible]一六四五
いつをいつとか定めん　[illegible]四五
いつをいつまでながらへ候べき　[illegible]六一
出入の月を見ざれば明暮の　[illegible]二一八

出船の纜に取りつき　俊寛一四三一
出舟も心ひく花ぞ綱手なりける　室一〇三一
絲
願ひの——の色見えぬ　[illegible]八六一
佛の御手の——　井三四〇
絲遊
遊ばば遊べ——の　車九七〇
伊東の九郎祐宗　禪一六九五
幼かりしその昔は父もなく　雷クセ三三七
いとけなき身の母に逢ひ　身上歌一九五一
絲毛の具足　鉢二五六四
絲毛の車　安達一一三
絲毛の花車　代一四八四
絲櫻
青柳の——　櫻一三三八
色はへて掛けし蓮の——　當一八四六
かざしの花も——　右三五〇
神のしめゆふ——の風の解け　卷二八一〇
近衞殿の——　西行一一七七
絲櫻色も盛りに咲く頃は　安達一一三
絲薄
穗に出づる秋の——　安達一一三
いとせめて戀しき時は烏羽玉の　鳥三三九九
絲竹に懸けて　關寺一六二一
絲竹の聲あやをなす　鷲一三三八
絲竹の聲澄み渡る月夜かな　小督一一〇八
絲竹の聲も佛事をなし添へて　鐘二〇八六
絲竹の手向草　關寺一六二〇
絲竹の手向をすすむれば　經二〇八九
絲竹の役々祕曲を盡し　白鬚一四七三
絲竹も音を添へて　寶二四〇一
いとどしく過ぎにし方の戀しきに　杜六二六
いとどしく蟲の音しげき淺茅生の　砧一四九七
いとど難波の浦は住み憂き　蘆五七
いとなき
涙——袂かな　天二一三四
營む業も手すさみに　玉井一九七五
絲の亂れも天つ日の　佐一三六九
絲萩
露を含める——のかごとばかり　卒一七三〇
絲引く木をばくれはといへば　吳九八一
いとほしかなしと育てつる　三井二九九七
絲女
綾女——の女婦を添へ　吳九八二
いとも畏き勅たれば宿はと問はれ　小督一一〇七
いとも畏き勅により　須上歌一四九七
絲もて繋ぐ駒　蟻二一八
絲柳
春や繰るらん——の思ひ亂るる　昭一五八一
稻毛の三郎　簾△七三三
伊奈佐の速玉の神
第三は——常陸鹿島の明神と　大[illegible]二九七
稻田姫　大蛇子方三九三
稻田姫（クシイナダヒメを見よ）
籔上の明神はその時の——　源太一〇六九
稻田姫の湯津の爪櫛とりなして　大[illegible]
稻妻
朝顏の露——の影いづれか　源氏一〇四〇
葛城や木の間に光る——は　葛六九五
螢鳥——石の火の見たへぬ程に　[illegible]一六[illegible]
稻妻四方に閃き渡つて　雷三三四〇
稻妻の稻葉の露に宿る程だに　雷七四四
いなとはいかが稻筵の　烏二三〇四
否にはあらず稻舟の　正一三六一
稻葉
稻妻の——の露に宿る程だに　雷七四四
靡く——の色までも千年の秋の　東方一一八〇
群鳥の——の雲に立ち去りぬ　鳥二一二〇
稻葉の雲の夕時雨　坎下二四四九
稻葉の鳥を立てんとて　烏二三九四
稻葉の山（鳥取）
立ち別れ——風吹き亂れ　戀一一六五
いなばの山の峯に生ふる　松風リカ二八三七
稻葉もそよぐ秋風に　鳥三三九六
稻光

堂前に輝く――　舍一三九一
天に輝く――大地に響く雷　善界一六〇四
稲舟
否にはあらず――の　正一三六一
のぼれば下るや――の　住一五四七
稲筵
いなとはいかが――の　烏二三〇四
稲荷(京都)
天雲の――の社伏し拜み　賴三三九九
王城の鎭守――祇園賀茂貴船　正一三六四
稲荷の神體小狐丸を　小鍛一一三三
稲荷の峯にぞ歸りける　小鍛一一三四
稲荷明神　小鍛シテ一一一一
稲荷の明神
某が氏の神は――　小鍛一一一五
稲荷の山の薄紅葉　熊野三三五一
稲荷の山のもみぢ葉の青かりし　松尾二八四七
稲荷山(京都)　小鍛所一一一一
稲荷山
都をばまだ夜をこめて――　鸚二三
紅葉も青き――　融三三八
夕雲の――行方も知らず　小鍛一一一九
古今の詠歌を撰み　志二三九七
古今の道　志一三九七
古の戀しかるべき橋の　浮三一七
古のこれこそ君よ名は今も　巴上歌二三七九
いにしへ人　蘆五六
古人
この世にはなき――の　水無瀬二九三二
古見馴れし車に似たるは　通小七六五
古を語るは猶も執心ぞと　梅枝四四七
犬
煩惱の――となつて　通小七六八
野干は――に似たれば犬にて稽古　殺一六四五
犬追物の始め　殺一六四五
犬櫻
打てども去らぬは家の――　三山二九二五
犬死　朝二三六三
犬鷹
地を走る――に責められ　善知三九三
命すなほに愁ひもなく　金八七二
命助かり申す事　大會一七八一
命ただ心に叶ふものならば　俊成一四四二
命つれなく候はば　柏六五五
命なりけり小夜の中山　盛三〇九七
命に代るべし　盛三二〇八
命の恩を報ぜん　國九〇四・攝一六六五
命のかなしさに又立ち歸り　俊寬一四三二
命の際
互に爭ふ――　仲二三一五
命の露をかけてまし　藤戸二七四五
命の科
憂きは――ならず　大蛇三五〇六
命のみこそ恨みなれ　天二一三四
命は君の爲　大江五六八
命は水上の泡　歌三六四
命は千秋萬歳の春を祝ふぞと　盛三二〇八
命は蜉蝣の定めなきに似たり　千一七〇三
命は無量壽佛　實一二五五
命二つ持ちたらんする者　七騎一三一一
命をしかの隠れ里　小袖次第一一二八
命を知れば江のほとりに繋がざる船　竜二六八
命を捨つこそ肝要　夜三三六六
命を捨てし郎黨の一人は母一人は子　攝一六五五
命を捨てば易かりなん　景六四五
命を延ぶ
萬歳樂には――　高砂一八七三
命をば旅人を頼み　景六三九
命を論ずれば……繋がざる舟　大原五四七
祈らずとても神や守らん　班二六〇四
祈らば祈るべし　車九七〇
祈　葵一六六
祈るは僧正鳴るは雷　雷三三四二
岩落(山梨)
この川下――と申す所　鵜飼三〇三

岩木にあらされば心弱くも　江三〇八六
岩きる水に放せば　園九〇〇
岩木を結ばぬ義經なれば　攝一六五六
蟠座やその關の戸の夜も明け　三輪二九八八
いはげなやいかなる事ぞ　望三〇五二
岩越す波
　松風にも——にも　碇二五八
岩越す波の彈きやせん　紘一〇五四
言はじ思はじや　盛三四八二
石淸水(京都)(男山八幡をも見よ)
　伊勢——賀茂春日　白樂二四八〇
　誓ひは淸き——の　放生二四五九
　月かげろふの——の　放生二四六二
　世の中の人は何とも——　船辨二七七〇
石淸水いさぎよき靈社と現じ　弓三一二九
石淸水絶えぬ流れの末までも　弓三二二五
石淸水八幡宮(京都)　女三四八九
言はじや聞かじ　江口四八三•三山二九二〇
いはじや水鳥のお主の　海一七八
岩代の松(福島)
　名のみは——の言の葉　錦木二三四八
岩代のまつことありや曉の　淸八五三
岩代の待つことありや有明の　右三四七
岩代の松の何とか結びし　[illegible]二八〇六
岩代の松の葉結ぶ露の身の　佛二七九四

岩田川(和歌山)
　三熊野の——波も散るたり　雪一八四一
衣鉢(エハツを見よ)
岩躑躅
　いはての山の——色には出でじ　放下二四四八
岩手の森の下躑躅色に出でずは　班二六〇九
いはでの山の岩躑躅色には出でじ　放下二四四八
岩戸(熊本)　檜垣二六二三
磐戸
　神の——の古の神思ひ出でられ　蟻二三三
　神の——の昔をうつす　御二九七一
岩戸の觀世音(熊本)　檜二六三四
岩戸のその始め隱れし神を　三輪二八八七
磐戸の舞　葛七〇一
岩飛び　竹生△二〇九
岩戸を手力雄の命は引き開け　繪二四五一
岩に口を漱ぎ　三笑一三八三
岩根の菊を手折り伏せ　菊八一一
岩根の床に夜もすがら　融三三三
岩根の枕松が根の宿りも　葛六九一
岩根松が根凌ぎ來る流つ流れに　賀七三九
岩の懸路を過ぎ給ふ　紅三〇八四
岩の物いふ
　壁に耳——世の中　小鍛二一一六
岩橋

葛城や夜通ふなる——　[illegible]二七五八
法の——架けざりしその咎めとて　葛六九七
まことは渡せる——を大峯かけて　[illegible]一九九
岩橋の[illegible]夜の精進へて　[illegible]七〇
岩橋の末絶えて　葛六八八
祝ふなる心ぞしるき　[illegible]二三三九
〔岩船〕　二八五
岩船
　天の——雲の波に　岩二九二
岩船を漕ぎ寄せし天の探女　[illegible]
巖
　天衣撫づとも盡きぬ——　[illegible]四〇九
　砂長じては又——の　氷二六六四
　君が代を撫でし——も盡きせぬ　[illegible]
　苔衣着たる——はこともなくて　[illegible]一四七六
　青苔衣をおびて——の肩に懸り　白樂二四七五
　撫づとも盡きせぬ——も　梅四三三
　撫づとも盡きぬ——さと　[illegible]一四
　撫づとも盡きぬ——ならなん　吳九八六
巖となりて苔のむす千代に　[illegible]三一三三
巖となりて苔のむす松の　弓[illegible]二四
巖となりて苔のむすまで　老五三二
巖に火焔を放ち　紅三〇九〇
岩木の本の身たれと　[illegible]七五六
岩もる水の思ひに咽び　玉葛一九六八

岩屋の内に封じこむ　一角二七七
茨からたち分けつくぐりつ　忠信一八九九
岩井の水は藥にて　養三二三一
いひかひなき者と思し召され　朝二三六三
いひかひなき者の讒言により　船辨二七六九
いひ甲斐なくは出家になし　藍二四〇
いひもあへねば雲の上　吉大三三九五
いひもあへねば不思議やな　江口待謠四八一
當待謠一八五一・養上歌三二三七
いひもあへねば妙經の　輪二三八一
いひやる言の葉もなし　雷三三三五
いぶかしく
　御氣色―　思しけるか　和三〇三三
いふかと見れば不思議やな　生二七二
伊吹颪の音にのみ　船橋二七五五
伊吹の山風の　朝二三五七
いふこそ程も久しけれ　熊坂九四三
いぶせき床の塵拂ひ　藤榮二一五〇
いふならく奈落の底に入りぬれば　錦木二三五三
いふならく奈落の底の水屑と　船橋二七六四
いふならく奈落も同じうたかたの　清八五四
いふに及ばぬけしきをば　小鹽三四五九
いふより早く色かはり　鐵上歌七〇七
家櫻
　心はかたき色好みの――　祇八六五
　里は軒端の――　小鹽三四六〇
　住む――色變へて　胡一一四五
家櫻切りくべて緋櫻になす　鉢二五五八
家づと　木賊三三〇八・女三四九〇
家づと
　手毎に折りて――にせん　雲林四六一
家づとなれば色々の　項五八九
家僕
　蘆屋の藤左衞門尉――　藤榮二一五二
家長
　乳母子の――が弓と　大原五四九
家に歸ると人や見るらん　實一三六〇
家の子若黨にも深く隱し　夜討二七四三
家の集　草子一一八九
家の寶となさばや　羽二四八八
いへども平生の顏色は　藍クセ二四二
家貧にしては親知少く　蘆四六・雲雀二六四〇
家を離れて三五の月の　烏二三〇〇
家を離れて三四月　道明一八三三
五百機
　織姫の――立つる窓に入つて　山三一八一
五百重の錦や瑠璃の樞　鶴二〇九八
今逢ひ見ずは終の悅び　土車二〇七七
今幾日ありて摘まゝし　二人二七三三
今幾程ぞ若菜摘む　野守二四二四
今熊野(京都)
　歌の中山淸閑寺――とは　[illegible]二三二八
　御名も同じ――　熊野三三五一
今熊野の梛の木の坊に帥の阿闍梨　谷一九六八
今熊野まで見え　檜二〇〇六
今西方の彌陀如來　田一九九一
いまし達は如何なる神ぞ　誓一五六三
今ぞ知る御裳濯川の流れには　大蛇三五〇八
今出川(京都)　大原五五〇
　一條――に住む女　藍三二六
今とても慰めかねつ更科や　姨上歌三四七六
今の草子には　梅四二六
今の女を引き立てて　籠上歌三三八九
今は梓弓よし力なし　千クセ一七〇九
今はかうよと見えし程に　忠度一九一七
今はの出立　碇二五九
今はの玉の緒絶　成八〇一
今はの時に昔く交の　[illegible]三六八
今はの時まで　[illegible]八五
今は春べと咲くやこの花　蘆六〇・難三三二〇
今は春邊も半ばぞかし　弱三三二〇
今は藜藋の草となる　[illegible]六
今一聲こそ聞かまほしけれ　[illegible]一五二
今降るも宿は昔の時雨にて　定上歌二一〇七

今降る雪もと見し雪に變らねど　鉢二五五〇
今三吉野の川の名の　二人一靜二七一九
今見る姿は人ならず　昭一五九〇
今めかしき仰せかな　大佛一七四八
今めかしき御諚　夜三三六三
今めかしき事　唐一八一四
今めかしの御事や　祇八六一
今もその友をしのびて松蟲の　松蟲上歌二八五九
今もその名に流れたる淸水の　田上歌一九九〇
今以て同じ事ぞかし　船辨二七八〇
今や今やと松浦舟　白樂上歌二四七四
今様朗詠聲々に拍子を揃へ　敦一三一七
今様朗詠す　住一五四二
今様を謡ひつつお酌に立ちて　正一三六四
今様を謡ひ舞ひ遊び　敦一三一六
今様を謡ひ朗詠し　淸八五三
今や引くらん望月の駒　蟬一六八一
今井の四郎兼平　兼七三五
今を盛りと木綿花の　小鹽上歌三四五七
今を始めの旅衣　高砂次第一八五九・卷次第二八〇三
いみじき身
かほど――なれども　昭一五八一
異名
私に名づけたる――　熊五一〇
妹
生ひにけらしな――見ざる間に　井三四〇七

妹背
翠帳紅閨に枕をならべし――　江口四八五
妹背うち連れ歸りけり　水無月二九四七
妹背戀路の跡　葵五九
妹背の中川(和歌山)
流れては――と聞く吉野の山は　錦木二一四五
吉野の山ならねどこれも――　船橋二七六四
妹背の中の情なれ　[illegible]二六一〇
妹背の波
歸れば連れよ――　女三四九九
妹背の橋も中絶えし佐野の　求三〇六七
妹背の道は淺からぬ　小鹽三四六一
妹脊の道は遠からず　高砂一八六三
妹背の道は隔てなき　小督二一〇六
妹背の山(和歌山)
流れては――の中に落つる　當三三一八
妹背をかけて弔はん　井三四〇三
妹にはわれよ今ならずとも　水無月二九四五
賤しき身には故人疎し　蘆四六・檜二六三五
賤しき者は輕き身を浮かめんため　[illegible]六四〇
いよいよ見まくほしき君かな　和三〇三三
甍破れては霧不斷の香を焼き　熊野三三四四
甍を竝べて夥し　大原五四一
　　盛七八三
刺高
赤木の數珠の――　葵一六六

[illegible]遍
山――として[illegible]せる紅樹　[illegible]八二七
入相ごされ[illegible]が給へ　[illegible]八七七
入相の鐘
聲も寂しき――　[illegible]一四八
入相のかねて知らする夕嵐　[illegible]一五八
入相の鐘に花ぞ散りける　道成一七八五・三井三〇[illegible]
入相の鐘響き月出でて　[illegible]三九五五
入相の鐘もにや聲々に諸行無常と　夜[illegible]六九
入相は寂滅爲樂と響き　三井[illegible]〇〇
入相もつくづくと　三山二九一八
入江にかれたつ足もとは　[illegible]一三五
入江の川鶴も聲惜しまぬ　住一五四七
入り定まれる高野の山　高野六一〇
入りつる方も白波の　志上歌一三九四・石上歌一三七五
入りての後も世を照らすらん　[illegible]一〇三一
入日
西岫に――の来た近ければ　[illegible]三一四
入日の影も舞ふ　當[illegible]五
入日を招き　竹生八二〇三九
入日を招き返す手　[illegible]三三九
いる野の薄露分けて　紅[illegible]八
射る矢もその身に立つまじ　[illegible]三三一
入るより早く明け暮れて　[illegible]八八
入れたて

御前に——かなはじものをと　夜三三七五
入筆
萬葉に——したると　草子一一九二
色ある花を手折りつつ　雲雀二六四三
色々を四方に染めなす秋の日の　飛雲上歌二六一六
色襲
花摺衣の——　通小七七二
花染衣の——　源氏一〇三七
色香に染める花心の　當一八四五
色香もさぞな深草の　果次第一五〇六
色香を飾る玉衣の　佛二七九二
色こそ見えね香やは隱るる　東北二三〇一
色好み
心はかなき——の家櫻　既八六五
此方も名に負ふ——の家に　江口四七八
小町は妙なる花の——　鸚三三
色衣のつまのかねこと　班二六〇八
色に出でけるぞ悲しき　定二二一〇
色に染み香にめでし昔を　東北二三〇一
色に染み香にめでて　泰一七三四
色に染み貪著の思ひ淺からず　江口四八五
色に染み花に馴れ行くあだし身は　胡一一四七
色に染み行く歌人の　志一三九七
色に染む人花心に似たれども　泰一七三九
色には出ださせ給ふ言の葉草の　山三一七三
色音に移る花鳥の　采四〇八
色の衣々數々に　佳一五四四
色の黒い時　翁八一〇
色ばかりこそ昔なりけれ　杜六二八
色はへて掛けし蓮の絲櫻　當上歌一八四六
色は外にぞ見えつらん　籠三三九一
綺ひ
御——あるまじく　元一〇八一
色人
月の——は三五夜中の空に　羽二四九四
イロハ　杜六二五・賀茂物七五三・通小七七一・舍一三九五・關原一六三一・千一七〇九・花筐二五九一・百二六七七・船辨二七七六・楊三一二三・熊野三二五三・吉靜三二八四・翁三三三五
色外に顯る
思ひ内にあれば——　熊野三三五〇
色外に現れ
思ひ内にあれば——　松風二八三三
色見えけるか如何にせん　紅三〇八五
色見えでとこそ詠みしものを　關寺一六一七
色めく紙の四手つけて　繪三四四八
色も香も知る人ぞ知らずな　小鹽三四五九
色を重んじ艶を專らとし　楊三一一五
色を飾り露を含みて　女三四八九
色を飾る事もなければ　松山鏡二八七六
色を盡して夜晝の　土蜘上歌二〇五九
色をも香をも知る人ぞ知る　藤二七二七
硫黃が島(鹿兒島)
神を——なれば　俊寛一四二四
育王山青龍寺般若臺に至るまで　望界一五九七
醫王佛の化現……三歸の翁　寢二四〇二
印
洒水の——を結んで　當三三八
陰
地は——を以て用となす　松尾六八四六
允恭天皇
衣通姫とは——の后にて　關寺一六一六
慇懃の教(オンゴンノオシヘを見よ)
因果
いつの——の故やらん　鹽一六七九
現の——を晴らさん　敦一三三
西海四海の——を見せて　清八五四
罪も報いも——の苦しみ　巴三三八三
妄執といひ——といひ　船橋二七六〇
因果經
過去——　春榮一四一二
因果の車の廻り來て　水無瀨一九一四
因果の果をば末後まで一句の爲に　花一〇〇三
因果の花につきたる嵐　三山三九一二
因果の焰の緋櫻子　三山二九二五

因果の妄執 砧八三七
因果の水を汲み 檜二六三三
因果の報いはこれまでなり 三山二九二五
因果の廻り来る火車に業積む 同三九
因果の廻る小車の 藤戸二七四一
因果の小車の 砧八一八
因果は車輪の廻るが如く 鐵七一二
因果歴然は目のあたり 綾一九八
因果を離れぬ絆皆親子兄弟の宿縁 元一〇八八
陰山を出でず 三笑一二八七
飲酒（オンジユを見よ）
引攝
　十悪といふとも――す 千一七〇八
　来迎――の誓ひを現し 誓一五六三
引導
　今世後世能―― 鵜祭四一七
　涼しき道に――し給へ 佛二七九〇
　われを――し給へ 盛三一〇〇
股のやうかは父を討ち 春栄一四〇八
陰魔（オンマを見よ）
印明
　薩埵の――を授かり 高野六一一
陰陽
　弓矢は天地――を象り 鱗四五一
陰陽の神
　本覺眞如の身をわけ――と 杜六二七
陰陽の神代 武一四三
陰陽の二神天の浮橋に行合の 東一五五
陰陽の道永く傳はる 鐵七一〇
陰陽二つの道を守る 西一三六
因位
　この神の――を尋ね奉るに 同一二七
因位の形 江島五〇三
印を解いて去る 三笑一二八六

う

鵜 鵜祭子方四一一
鵜
　かの――みづから贄に供はり 鵜祭四一六
羽衣の曲
　鷲山の宮の内月の夜遊の―― 楊三一三
羽衣の曲節に返す少女子が [illegible]
有縁の衆生の所願を叶へ 竹生一〇四
有縁の衆生を守る [illegible]四一八
鵜籠を開き取り出だし 鵜飼三〇六
［鵜飼］ 三〇七
浮かむべき波こともとや 知一〇三四七
浮かめる古壁 梅四一八
鵜草葺不合の尊の御代 白鬚一四六九
憂からぬ旅に出でうよ [illegible]五〇七・同三三一九
憂かりける人を初瀬の山颪 玉葛一九六八
うかれ心は烏羽玉の 蟬一六八六
浮かれ鳥
　よるべ定めぬ――鳴く音も法の [illegible]三七一九
浮かれ船となり 七騎一三一八
浮織物の直垂につま匂ひの鎧 知三三四八

浮木の龜の年を經て盲龜の闇路　蟬一六七四
浮木の龜山や　百二六七八
浮草
池の——波に搖られ　大原五四〇
ねをこそ絶ゆれ——の　檜二六二五
蒔かなくに何を種とて——の　草子一一八四
身は——の寄るべなき心の水に　野宮二四一三
身は——を誘ふ水　卒一七二〇
わびぬれば身を——の根を絶えて　關寺一六一六
浮草の波に誘はれ船に漂ひ　清八五二
浮雲のとまりはいづくなるらん　花一〇〇〇
浮雲を拂ふ嵐の風のまに　夕三一二
憂き事や賴みなるらん　蟬一六七三
浮き沈む涙のうつほ舟　鵜一聲三三八二
浮島(靜岡)
綠は波に——が拂ふ嵐に　羽二四九三
浮島が原(靜岡)
雲は——なれど　富士山二六八七
浮島を漕ぎ離れても行く方や　玉葛一九六三
浮洲に流れとまつて　鵺三三九二
浮洲の岩の少し此方の水の深み　藤戸二七四四
浮巣をもかけよかし　善知三九二
浮きたつ雲の行方をや　土蜘次第二〇五七
憂きだに急ぐわが方は　賀茂物七四九
憂き時は恨みながらも　柏六五五

憂き時も子を見ればこそ慰む　櫻一三二六
浮鳥
波の——住む程も　望三〇四一
うき鳥の下安からぬ思ひの數　鳥三三九六
憂きながら心の少し慰むは　通盛上歌三八九八
憂き名のみ龍田の山のもみぢ葉の　知三三四九
浮きぬ沈むと見しよりも　阿三五
うき寢
波に——の夜となく　項五九六
浮き寢に明かす水鳥の　水無月二九四一
憂き音に鳴くか賀茂川や　蟬一六八一
浮寢忘るる難波江の　蘆六二
憂きは命の科たらず　大蛇三五〇六
憂きは心の科ぞとて　浮三一六
憂きは心の習ひ　砧八二九
憂きはそのまま覺めもせで　砧八二九
憂き人に思ひ知らせん　鐵七〇七
憂き人に廻り逢ふべき小車の　水無月二九四一
憂き節しげき河竹の枕柱とも　藤戸二七四五
憂き節繁き竹柱　大原五五八
〔浮舟〕　浮一三
浮舟　浮シテ三一三
浮舟
逢瀨かひなき——の　砧八三三
風に漂ふ——の　大佛一七四九

樂しみ榮えを——に譬ふべし　源氏一〇三九
寄るべ定めぬ——の　浮三一三
浮舟の楫を絶え　玉葛一九五九
浮舟のともにこがるる思ひ妻　船橋二七六五
浮海松
鳥つ鳥——涼し波の上　江島四九二
浮藻
海松藻——の花も咲く　和一〇二一
うきめを水鳥の　清八五二
浮世
思ふ事叶はねばこそ——なれ　佛一七九三
何事も報いありける——かな　蟬一六七四
浮世語になりにけり　木賊三三一七
浮世語も恥かしや　山三一七八
浮世と見るも山と見るも唯その人の　西行一一七六
浮世に歸る六の道　俊二七五六
浮世に遠き鞍馬寺　鞍九五三
浮世の嵯峨
山までも——になるものを　西行一一七三
浮世の嵯峨たれや　百二六七八
浮世の嵯峨の奥深き　佛一七九二
浮世の旅
もとよりも——に又出でて　碇二五〇
浮世の旅に出でうよ　殺一六三五
浮世の旅に迷ひ來て　[illegible]七七八

浮世の習ひ
上﨟も下﨟も後れ先だつ――　竹三三三
これも――かや　柏六六一
時人を待たぬ――　朝三三六九
浮世の習ひなればと　二人二七二一
浮世の春のあだ櫻風吹かぬ間も　曙一五〇九
浮世の一節
棹の歌謡ふ――を　安三〇三
浮世の道出でて　知二三三九
浮世の夢も覺めぬべし　高野次第六〇六
浮世の業ぞ悲しき　通盛三八九九
浮世の業にこりずまの　須一夢一四九四
憂き世は牛の小車の　葵一五八
憂き世は電光胡蝶の夢の　俊成一四四三
浮世をば何とか廻る車僧　車九六五
浮世をば廻らぬものを車僧　車九六六
憂き世を廻る影も羽束師の　雲雀二六四三
憂き世を渡る一節　敦一三八
憂き業となき心かな　竹生二〇三四
憂きを知らする夕かな　砧八三三
鶯
青柳に――傳ふ羽風の舞　遊三三〇四
梅が枝に來居る――春かけて　鞍三三三七
梅が枝にこそ――は巣をくへ 梅枝四四七・紅一〇五五
枝の――絲繰り　山三一八一

老の――逢ふ事も涙に咽ぶばかり　熊野三三四四
老の――の百囀りの春に來れど　關寺一六一三
風吹かば如何にせん花に宿る――　梅枝四四七
木の花のうちの――　鵺三二一
それは雁がねこれは――　花一〇二四
竹に生まるる――の　竹生二〇三一
谷の戸出づる――の凍れる涙　放下二四四八
谷の戸出づる――も法を唱ふる　現一〇一四
谷の戸に鳴く――の聲までも　松山天二八八八
花に鳴く――水に住める蛙まで　白樂二四七六
世を――の聲しげし　寢二三九六
世を――の聲立て　竹雪一八八五
世を――の囀はこの花よ　傳五一四
柳花苑の――は同じ曲の囀り　咸八〇一
柳上に――飛ぶ片々たる金　杜六二八・熊野三三五一
鶯にあふ言葉の緣あり　歌三六〇
鶯の逢ふ事の嬉しさも　生三六九
鶯の青葉の竹　籠三三九九
鶯の歌を詠みたる讚歎には　白樂二四七七
鶯のかひご化して少女となり　富士山二六八八
鶯のかひこの中の子規　歌三五九
鶯のこは子なりけり子なりけり　歌三六〇
鶯の凍れる涙今ははや　朝二二六〇
鶯の聲に誘引せられて　梅枝四四七
鶯の聲ものどけき春風に　梅ッカ四三三

鶯の鳥貝　土井六二九八二
鶯の羽風に落つるか　歌林四六〇
鶯の花踏み散らす細臑を　花二〇〇四
鶯櫓
岸うつ波は――の音　鵺四三一
受け難き人界をたまたま受くる身　道四九
受け難き人身を受け　卷二四五・江口四八四
高野六〇四・卒一七一九
受け難き身の人界を受く　菅三五三六
受太刀になつて　烏三四三八
〔雨月〕　三三七
雨月の二つを爭ふ心　雨三三一
うけて心をとらん　安宅一〇一
右脇凪
頭北面西――　白髭一四六八
受け喜ばばそれこそ主よ　熊坂九三五
有驗の高僧貴僧に仰せて　鶴三八四
烏江(玄賓)　項羽五八七・自二三四〇
烏江といふ海を隔てて　西業三二五七
烏江野
刈萱まじる――に　項五八九
烏江の野邊の草刈　項五八九
動かぬ國ぞ久しき　江島四九〇・大社五七八
動くか動かぬか索の　道成一八〇二
動く時には清風をなし　放下二四四五
〔右近〕　三三九

右近とかや見來りて　玉葛一九六二
右近馬場(京都)　右所三三九
右近の馬場
　ひをりせし――の木の間より　右三四二
右近の馬場のひをりの日　右三四四
有相執着の妄念より起れり　土車二〇七八
兎も波を走るか　竹生二〇三六
うさにぞ返す本の社に　淸八四七
宇佐の郡蓮臺寺の麓に八幡宮と現れ　弓三二八
宇佐の宮と御一體なれば　女三四八九
宇佐八幡(福岡)
　行敎和尚は――に詣で給ひ　巴三二七八
宇佐八幡に御參詣あるべしと　淸八五〇
牛
　桃林に――を繫ぐ　唐一八一三
牛飼車寄せよとて　熊野上歌三三四六
憂しとはいひて捨つる身の　熊坂次第九三三
憂しと見し世も夢　淸八四七
艮
　王城より――に當つて　鞍七一九
うしの車
　名殘も――に召されて　住一五四七
牛の車のとことはに　百二六七三
丑の刻
　御惱は――ばかりにて　鵺二三八五
丑の時詣　鐵△七〇五
丑の時詣
　五條の天神へ――を仕り　橋二五〇九
牛の小車
　憂き世は――の　葵一五八
牛の小車のめぐりめぐり來て　野宮二四一八
牛は車に揉まるる　放下二四五〇
牛牽く星の名ぞしるき　唐一八一二
潮に映るは兜の星の影　八島三一六二
潮に引かれ波に乘つて　岩二九四
潮の落つる曉ならば　八島三一五四
潮の時つ風　淡一五三
潮も光り鳴動して　和三〇三七
丑三つ寒き川風も　船橋二七六五
丑三つ過ぐる夜の夢　阿三九
丑三つの時過ぎ　吳九八四
丑三つも時至れば　鵜祭四二一
有情非情
　草木國土――も悉皆成佛　知二二四七
　草木國土――も皆これ諸法實相　芭二五三五
有情非情皆俱成佛道　鵜三三八九
有情非情のその聲みな歌に　高砂一八六六
有情非情も隔てなく　胡一一五〇
烏鵲の橋の下に紅葉を敷き　天二二四五
後髮ぞ引かるる　通盛二九〇八
後の山風關路の鳥も聲々に夢も　松風六八三八
後の山風上野の嵐　知二二四七
後の山風吹き落ちて　敦一三六
後の山里に柴といふものの　忠度一九〇九
後の山里の柴といふもの　須一四九六
後の山の山颪關吹き越えて　住一五四四
うしろめたく
　女郎花――や思ふらん　女三四九二
うしろめたくも引きけるが　熊坂九四四
牛若　鞍子方九四七・關原シテ一六二五・橋子方二五〇七
　倍子方二五二一・烏子方三四一三
牛若(義經・判官・遮那王參照)
　義朝の御子常若の御腹には――　倍二五二二
　義朝の末の子――　關原一六二六
牛若子生まれさせ給ひし時　烏三四一三
牛若子少しも恐るる氣色なく　熊坂九四一
牛若この笠おつ取つて　烏三四一六
牛若は母の仰せの重ければ　橋二五一四
牛を桃林に繫く　錦二四四四
髻華　梅四三一
薄衣纔も引き被き　橋二五一六
薄衣のそばを取り　源氏一〇三四
薄衣引き被き　夜三二七五
薄霧まがふそなたより　住一五四〇
薄くも濃くも花は花　唐一八一八

薄氷(ハクヒヤウをも見よ)
川原に歸くる——　草子二一九四
龍田川紅葉を閉づる——　龍田一九二六
薄氷の深田に踏け込み　巴三三八五
薄氷を履むと見えて　氷二六六一
うす櫻
鞍馬の山の——　鞍九五一
薄墨に書く玉章と見ゆるかな　高野六〇七
薄手をも斬りつけ　鞍九五九
薄花櫻の單　鞍九六八
碓氷川(長野)　鉢二五四八
碓氷の峠(長野)　埒六五一
碓氷山(長野)　草薙八八一
薄紫の雲の羽袖を返す舞姫　藤二七三三
薄雪乞はう　氷△二六六二
歌(和歌をも見よ)
唐土の詩賦を以てわが朝の——　白樂二四七五
まうけて詠み出づる——の道　梅四二八
歌合
内裏にて御——　草子二一八三
右大將賴朝　大佛一七五一
[歌占]　三五三
歌占
小弓に短册をつけ——を引き　歌三五
泡沫
流れに浮かむ——は　養三一三五
身は定めなき——の消えぬぞ　關原一六三六
うたかたの汐汲車寄るべなき　松風二八三六
うたかた人は息消えて　夕三二五
疑ひは人間にあり天に僞りなき　羽三四九一
疑ひも夏立つけふの薄衣　善知上歌三八七
うたた寢
夢待つ春の——に賴むかひなき　胡一一五〇
うたたねなりし睦言は　通盛三九〇七
うたたねに戀しき人を見てしより　清八四七
うたてはかなき天少女　梅四二八
うたてやな一念彌陀佛即滅無量の　敦一三三
うたてやな隅田川の渡守ならば　隅一五二三
うたてやた父こそ縫り給ふとも　蟻二三四
歌には六義あり　俊成一四四三
歌に漏るる事なし
有情非情のその聲みな——　高砂一八六六
歌に和らぐ神心　蟻二三一
歌の遊びこそ心和らぐ道となれ　草子二一八九
歌の數は七千首に及んで　草子二一八九
歌の心すなほなるはこれ以て私なし　蟻三三一
歌の事とどまりぬ
人丸世に亡くなりて——　俊成一四四四
歌の樣さへ女にて　鸚二二
歌の樣は得たれども誠少し　綸三四四八
歌の父母　藏六〇
歌の中山清閑寺(京都)　[illegible]一九七一・[illegible]八
宇陀の御狩場(奈良)　関八九四
歌の道を尋ぬるに　[illegible]
歌の文字あらば鳥の跡も書き[illegible]　[illegible]
歌は天地開けし始めより　[illegible]
歌は神代より始まれども　[illegible]
歌は八雲をさきとして　綸三四四六
謡ひ狂はぬ御制戒　高野六一四
歌人([illegible]をも見よ)
色に染み行く——の　[illegible]
代々の集めの——の　鸚三三
謡へや謡へ月影さすまで　[illegible]
歌物語恥かしや　錦木三三四八
打たれても親の杖　小袖一一[illegible]
歌連歌の道も達者なり　[illegible]六六〇
歌を詠まぬはなき
生きとし生けるもの毎に——　白樂二四七六
宇治(京都)　[illegible]
[打入曾我]　夜異稱三三九七
雨中御つれづれ　[illegible]一七〇一
宇治川の網代の波　招三一〇七
宇治川へ打入り　箙△七三三
内兜にからりと射る　[illegible]七一八
うち返して賜はらう　関八九八
打衣

花の――風折烏帽子　草子一一九七
氏子
　神も木華開耶姫の御――　櫻一二六
宇治勢田の橋をも引き　正一三六三
内田の三郎　巴△三六八一
うちつけなる御事　玉井一九七八
うちつけに人の心も白雲の　紅三〇八七
打出の小槌　繪△三四五〇
打出の濱(滋賀)　筆△七三三
内外に通ふ花車　嵐二〇五
内外に通ふ夕月の後の世の　知二二四四
内外の神
　玉垣の――の御末にて　羽二四九三
内外の鳥居
　神風や伊勢の――　野宮二四一九
内外の宮に參らん　内三七二
内外の宮めぐり　御二九五九
内外の山の月を待ち　海一七三
〔内外詣〕　元七一
打磬を一つ打つ時　舎△一三九四
打ち鳴らすその聲の　天上歌二一四四
打ち鳴らす人もなければ君が代に　雜三三七
打ち並べたる幕の内　夜三六一
内には慈悲の心中をなし　元一〇八四
内野
　しめの――も程近く　胡一一五一
宇治の網代にかかりけるかな　賴三三〇七
宇治の大臣(賴長)　鵺二三九一
内の風ばし早いか　烏三四三三
宇治の河島とも申す　賴三三〇一
宇治の川に舟と橋とはありながら　賴三三〇〇
宇治の里(京都)　浮三一五・谷一九四四・賴三三〇〇
氏の神　正一三六四
氏の神
　春日の明神は――にて　佐一三六六
　諸天――も正に照覽あるべき　雲雀二六四九
　明神――も御知見あれ　仲三二一
　弓矢八幡――も御照覽あれ　增二〇一三
氏の神は稻荷の明神　小鍛一一一五
宇治の中宿井出の里　采三九七・三山二九一三
宇治の橋柱　浮三一六
宇治の橋姫も訪はんともせぬ人を　江口四八二
宇治の橋守年を經て　賴三三〇四
菟道の皇子
　難波の皇子――と互に卽位謙讓　蟬一六八四
宇治橋の合戰に味方うち勝ち　春榮一三九八
團扇の一句　放下二四四五
團扇の旗は兒玉黨か　知三五二
うち拂ふにも千代は經ぬべき　一角二八一
打火輝く鏡の面に　野守二四三一
氏人
　藤原や――よりこ　采三九九
うち見には恐ろしげなれど　大江五六四
打物
　好む――ひつさげて　正一三六九
打物の鍔もとくつろげ　夜三一七四
打物業にて叶ふまじ　熊坂九四五・烏三四三八
有頂
　上は――の雲を分け　九世九二六
宇治山(京都)
　世を――と人はいふなり　賴三三〇一
うち寄する駿河の海は　富士山上歌二六八七
内裏より賜はれる童隨身　住一五四二
うち渡す遠方人に問ふとても　半二五〇五
うち渡す遠方人にもの申す　賴三三〇四
鵜使　鵜飼シテ二九七
鵜使ふ事の面白さに　鵜飼三〇一
卯月卯の花の雪を廻らす　代一四八八
うつし心か村鳥憂かれと人は　百一六七三
うつし人とは誰かいふ　砧八三八
空蟬の唐衣　千一七〇七・山三八二
空蟬の骸は淺茅にやとまるらん　松山鏡二八八〇
空蟬の空しきこの世を厭ひては　夢長一〇三六
空蟬の空しき世を案ずるに　角一四九六
現とも更に辨へず　草三七八

現とも夢ともいさや白雲の　[illegible]一六〇二
現とも夢とも更に思はえず　初一五七五
現なき風情　木賊三三一
うつつなのわが有様　梅枝四四七
現に逢はんよしもがな　水無瀬二九三〇
現に語る人もなし　須一四九七
現に返すよしもがな　生二六九・源氏一〇三六
現の因果を晴らさん　敦一三三
現の人
　烏羽玉の闇の――もなく　夕三二一五
現の人に向ふが如く　船辨二七八五
討手
　祐宗は某が――のためな　禪一六九六
討手の大將　正一三六八
宇都宮の彌三郎　調二一三三
宇津の山(静岡)
　打つや――の　鐵七一三
　過ぎ行く波も――　盛三〇九八
　夢かとよ闇のうつつの――　定三一一四
うつの山現や夢になりぬらん　賀茂物七五五
梁の燕のならひすみねたき事を　竹雪一八八七
梁の燕も皆子ゆゑこそ物思へ　唐一八一九
打つべき時節は虚空に知れり　小鍛一一三
うつぼ竹取住吉はものふりたり　源氏△一〇三三
うつほ舟
　浮き沈む涙の波の――　鵜三六八二
　打つやうつの山の　鐵七一三
鶉
　衣はたた――の所々もつづかねば　竹雪一八八〇
鶉鳴くたる深草山　融三三一八
移り舞
　面はゆながらも――　住一五四六
　神も御影や――　賀茂物七五三
　月日も――の　楊三一二五
　昔男に――　井三四一一
移り舞を舞ふべし　山三一七四
移り行く雲に嵐の聲すなり　紅三〇八七
移れば變る眺めかな　六浦三〇一六
移れば變る習ひ　楊三一一八
空木
　朽ちたる花の――より　西行一一七五
　山ぶところの――に草を結び　雲雀二六四九
うつろふものは世の中の人の心の　西王一五七二
　關寺上歌一六一七
うつを限りの秋衣　元次第一〇七七
打てども行かぬ望月の　籠七六八
臺
　明鏡また――になし　卒一七二四
臺に到る事
　非情無心の草木の――　遊三三〇一
うてやうてやと報いの砧　砧八三七
打てや囃せや牡丹芳　石一三八〇
〔善知鳥〕　善八一
〔鳥頭〕　善知鳥一八一
うとうと呼ばれて子はやすかた　善知三九一
うとうの音に泣きて　善知三八九
うとうは却つて鷹となり　善知三九三
うとうやすかた
　鳴くなる聲は――　善知三八八
疎き人をも訪へかし　景六四三
烏兎の姿
　弓と申すは本末に――を象り　放下二四四五
鵜殿の蘆のほの見えし　江口四七四
鵜殿も同じ蘆の屋の　籠二三九一
優曇華の花待ち得たり　百二六八〇・身二九五四
優曇華の花待ち得たる心地して　現一〇一五・實一二四八
優曇華の花待ち得たる芭蕉葉の　芭一五一九
うながす
　襟――信太の浮島　櫻一三三四
　雲路――三越路の　山三一六八
海原や博多の海も程近く　和上歌三〇三三
菟名日處女　求シテ三〇九九
うなゐ子の友達語らひて　井三四〇六
畝傍(奈良)
　香久山は夫――耳成山は女たり　三山三九一五
畝傍の山の山守も　忠一一六四
畝傍山の女の名をば櫻子と聞えし　三山三九一六

〔采女〕

采女　三九五
采女、　采シテ三九五
　淺香山の言葉は——の土器とりどり　雖二三三
　里も二つの——の衣　三山二九一七
采女と申し入　采四〇二
采女なりける女の土器取りし　采四〇八
采女の盃取りあへぬ　蘆六〇
采女の舞の雪を廻らす　氷二六六六
鵜の郷(石川)　鵜祭△四一九
鵜の精　江島狂言四八九
鵜の段　鵜飼三〇六
鵜の鳥までも　江島△五〇一
卯の花
　卯月——の雪を廻らす　代一四八八
　垣根の雪は——　夜三三六〇
　咲く——の杜若　雲雀二六四三
卯の花くだしの五月雨も　歌三六七
卯の花の垣根や雪にまがふらん　六浦三〇一六
卯の花の白和幣　代一四八〇
〔鵜祭〕　四二一
姥　高砂ツレ一八五七
姥
　市原野邊に住む——　通小七六五

おほぢと——は諸共に　絃一〇五三
　百年の——　鸚一五
上帯切り　巴三三八七
姥が耳にそと御教へ　攝一六五五
上差の鏑　木曾八二三
優婆塞が行ふ道をしるべにて　夕三三一八
優婆塞の宮　浮三三一
烏羽玉の墨の衣の旅寢かな　墨一五二一
烏羽玉の闇の現の人もなく　夕三三一五
うば玉の夜の衣を返しつつ　旅待詣五一六
烏羽玉のわが黑髮も亂れずに　淡一四九
上露も下露も後れ先だつ浮世の習ひ　仲三三三
うはなり
　花の——打たんとて　三山二九二四
うはなり打ち　葵一六二
うはなりの髮を手にからまいて　鐵七一三
上の空
　聞くや如何に——なる風だにも　隅一五二一
上の空なる石の橋　石上歌一三七七
上の空なる賴みかな　鳥二二九七
上の空なる月に行き　大江五六二
上の空なる物思ひ　照一五九二
うはの空にあくがれ出でて　斑二六〇三
上の空にて影や絶えなん　夕三三一一

上の空にて絶えし跡の　半二五〇三
上の空に申しては　善知三八四
上の空の心なれや　右三四五
姥はもとより月に愛で　雨三三一
姥や見給へ　閑八九五
初冠
　十二にて——　須一四九七
　昔男——して奈良の京　杜六三五
初冠とは申すとかや　杜六三六
鵜舟に燈す篝火の　鵜飼一聲三〇一
鵜舟の篝影消えて　鵜飼三〇六
鵜舟を弘誓の船になし　鵜飼三〇九
筌
　魚を得て——を捨つ　放下二四四九
上聞きあへぬ涙　善知三八七
上なき思ひは富士の嶺の　竹雪一八八四
上なき思ひを見給ひし　夕三二三
上なき君の惠み　吉天三二九五
上野(兵庫)　敦一一六
上野
　後の山風——の嵐　知二二四七
　濱の——　根二〇〇五
上野に見ゆるかの岡に草を刈り　草薙八八一
上見ぬ鷲のお山とやらんを　三井三九九五

上見えぬ鷲のお山の名を殘す　熊野三三五一
上見ぬ鷲の尾の寺　田一九九
上童
　采女とは君に仕へし——　采四〇二
　鳥羽の院の——に玉藻の前と　殺一六三七
馬
　老いたる——にはあらねども　遊三一九五
　飼ひに飼うたる——に乘り　鉢二五六四
　華山には——を放し　唐一八一三
　痩せたりともあの——に乘り　鉢二五六〇
馬煙を立てあの道を横ぎつてくる　鉢△二五六三
うまてふ言を通はせて梅のその名　梅四三一
馬留め(京都)　熊野三三四八
馬に鞍
　使は來たり——　鞍九五一
馬にて海を渡す事希代の例　藤戸二七四九
馬の蹴上
　旅の衣に——を懸く　關原一六二九
馬の毛により明年の日を相し　綸三四四六
馬はあれども徒歩に行く　谷一九四四
驛路
　颯々の鈴も——の　須一五〇三
馬よりおりて沓を脱ぎ　紅上歌三〇八四
生まれぬ先の身を知れば　花道行一〇〇一・卒上歌一七一九
馬を華山の野に放ち　綸三四四四

海
　その御心は——の如くに　西王一五六九
　苦しみの——　(その項を見よ)
海越しに見えてぞ向ふ鏡山　志一發一三〇三
海少しある通ひ路の　旬二二四七
績麻
　賤が——の夜までも　安達一一
海の都　玉井所一九七一
海は下りて下化衆生の相を現し　室三〇二四
海は苔の露より滴りて　山三一八〇
海は少し遠けれども　鼓一〇五一・松風二八二六
海は細き流を厭はず　大會一七八四
海山かけて行く雲の　調次第三一二〇
有無
　諫臣は——に醉へり　盛八〇二
有無中道を離れて人を濟度の方便　松尾二八四六
有無の二偏に落つる事なし　放下二四四八
〔梅〕　四二三
梅
　いづくと思しめしてこの——を　胡一一四四
　うまてふ言を通はせて——の　梅四三一
　老をな隔てそ垣穗の——　鷺九五四
　かつ色見する——が枝　竹五一二
　勝つ色見せたる——が枝の　田一九九九
　薪となるは——櫻切りくべて　鉢二五五八

　たゞ梅も大内萬株の——　[illegible]
　花ならば——と櫻木　鳥二四三
　松——は殊に天神の御自愛にて　老五二八
　惠の——園の桃　通小七六五
　惠の——の北面は雪封して　[illegible]
　山里の折りかけ垣の——をたに　鉢二五五八
　闇にも——の木蔭かな　梅四三九
　折る梅落つる——　藤二七三三
〔梅枝〕　四三五
梅が枝に來居る鶯春かけて　雞リカ二三三七
梅が枝にこそ鶯は巣をくへ　梅枝四四七・[illegible]
梅が枝のかつ咲きそめて　六浦三〇一六
梅が枝の立枝も見えて　右三四三
梅か枝の匂ひに移るわが心　源氏二〇九九
梅が香に昔を問へば春の月　閑上歌一一四六
梅が香の南山深く匂ふ夜は　室三〇一
梅衣
　匂ひ來にけり——の春たれや　富三二一
梅櫻松を持ちて候　鉢二五五六
梅田(石川)
　その返報に加賀に——　鉢二五六九
梅千世　籠千方二三五
梅津の秋の葉は河水に浮かむ綾錦　松尾二八四五
梅津何某　老リ・五二一
梅津の何某　老五二三

梅壺
　梨壺――晝の間夜の御殿を　雷三三四二
梅壺侍從　藍シテ三三五
梅壺の侍從
　大內にありし時は――　藍二四〇
梅の盛りは花ならずや　梅四二七
梅のすはえ
　行ひには必ず――を取れよと　梅四三
梅の精　梅シテ四二三・雜狂言二三二五
梅の精なれば　梅四三〇
梅の立枝
　わが宿の――や見えつらん　江口四七九
梅の名は好文木又は鶯宿梅などと　東北三一九三
梅の花
　音無にかつ咲きそむる――　巻二六〇八
　春の夜の闇はあやなし――　東北三三〇一
梅の花色こそ見えね香やは隱るる　東北三三〇一
梅の花笠縫ふてふ鳥の　蘆五四
梅の花笠春も來て縫ふてふ鳥の　胡蝶五二四
梅の冬籠り
　雪にも――今は春べの　鐘三三八
梅若　梅子方二〇〇三
梅若子
　貴朝の卿の御子息――　櫻二〇〇六
梅若丸　隅一五二九

梅若丸の亡靈　隅子方一五一七
梅若丸の母　隅シテ一五一七
梅をば好文木とは附けられ　老五三八
埋木
　賤しき――なれども心の花の　卒一七三三
埋木の朽ちは果てしなや　小鹽三四五九
埋木の花咲くこともなかりしに　賴三三一二
埋木の花咲く世にあはん事　鉢三五五七
埋木の人知れぬ事となり　門寺一六一三
埋木の人知れぬ事のみ多き宿　江口四七八
埋木の人知れぬことわざまで　志一三九七
埋木の人知れぬとこそ思ひしに　松蟲三八五九
埋木の人知れぬ身と思し召さば　觀三三八
埋木の人知れぬ身と沈めども　西行一一七四
　實一三五六
埋木の人知れぬ身ならば　錦木三三五六
埋木の人知れぬ世の変はりや　[illegible]八六五
敬つて白す起請文の事　正一三六三
敬ふ者に從ふは君臣の禮　夜三三六七
浦遊び　[illegible]一五三
裏表あるものは人心　葵二六〇八
浦風も涼しさ添へて追風とや　九世一蝶九二一
占方
　神功皇后新羅を從へ給ひし――　國八九九
うら悲しげに聲立てて　玉葛一九五九

うら枯れの草葉に荒るる　野宮上歌二四一一
うらさみしくも見え渡るかな　[illegible]三三六
浦島
　あけて悔しき――が　海一八三
浦島が子の箱根寺にて　小袖一一三六
浦千鳥
　かひもなぎさの――　[illegible]二三六
占問はせ給へや　[illegible]二五六
浦たる闇(須磨)　[illegible]三三九
浦の濱木綿一重なる　俊寛一四三五
末管
　梓の弓の――に立ち寄り　葵二五九
浦人騒ぐ波路かた　羽四八六
浦舟
　ささ波や志賀の――こがれ行く　山三一六七
うらぶれ給へ　[illegible]二四
うらぶれ渡る沖つ風　[illegible]四九
恨みの鬼とたつて　[illegible]七七
恨みの積もりつとなかや　[illegible]八三一
恨みは葛の葉の　[illegible]八六八
恨みは人をも世をも思ひ思はじ　玉葛一九六八
恨みをいつか晴らさん　[illegible]一〇七七
恨みをさへにいひ添へて　清上歌八四九
恨むまじき人を恨み　[illegible]一一八
うら紫か葛の葉の　女三四九八

裏紫の心を碎き　栄四〇七
うら紫の藤袴　通小七七三
恨めしの御事や　高野上歌六〇五
うらやすの安き神代の傳へとて　梅上歌四二八
浦山かけて須磨の海　忠度一九〇七
うらやましくも歸る波かな　杜六二六
羨ましくも澄む月の　松風二八二六
浦より遠の淡路島　住一五四三
瓜を二つに割つたるやう　花△一〇〇七
嬉しからずの雪の中や　竹雪一八八五
嬉しからぬ月日身に積つて　卒一七二〇
嬉しきかなやいざさらば　老待謠五三一・金上歌八七五・呉待謠九八六
嬉しさを何に包まん唐衣　小督二一〇九
嬉し泣きに伏しまろべばや　小袖一一三七
嬉し泣きの涙は何かつつまん唐衣　七騎一三三二
うれたく
　萑の宿は——とも　梅枝四三八
愁ひに對して人々眠れば　道成一七九五
愁ひは崖寺の古るに破れ　芭二五三三
愁ひを弔ふ涙は問はざるに先づ落つ　雷三三三六
うろくづ　阿三三
うろくづ
　河水に浮かむ——は　女三四九三
　水の底なる——や乃至草木　栄四〇六

うろくづの生けるを放つ川波に　放生一二四五六
うろくづの數を盡して　竹生二〇三四
うろくづの精　谷六八六
うろくづもなどや命恩の　谷六八四
〔鱗形〕　四四九
鱗の精　谷狂言六八一
雨露霜雪の形を見す　芭二五四一
雨露の恩　海一七八
有漏の願力　鐘一四五三
雨露の惠み
　草木は——養ひ得ては花の父母　熊野三一四一
　土も草木も天より降る——を受け　芭二五四〇
雨露の惠みにて　養三一三六
有爲
　一切——の世の習ひ　谷一九四八
　人間——の身となりて　弱三三一八
有爲生死の巷來つて去る事早し　鞍七二六
有爲轉變の世の中の　俊三四八三
有爲轉變を悟り　柏六六一
有爲の有樣無常の眞　檜二六三〇
有爲の悲しみを告げ　鐘一四五三
有爲の濁塵に光を交へ　源太一〇七一
植ゑ置きし昔の宿の杜若　杜六二四
植木
　菩提もと——にあらず　卒一七二四
飢ゑたる者の食を求め　身二九五一

飢ゑては鐵丸を呑み　[illegible]
飢に疲れて死なん命　[illegible]
飢にのぞませ給ふかや　[illegible]
右衛門の府生壬生の忠岑　[illegible]
魚木に上る
　緑樹影沈んで——氣色あり　竹生[illegible]
魚を得て筌を捨つ　[illegible]三四九
雲客
　われに愛かりし——を饗應すべし　[illegible]
雲衢
　冉々として——を出づ　三井二九九九
雲月のある時は影滿ち　姨三四八三
雲居寺（京都）　花一〇〇三・自所一三三五
雲居寺造營の札　自一三三七
纔藻の禮實感應の　和[illegible]
雲上の花の宴　[illegible]
雲上の飛鳥は弓の影とも驚く　瀧三三三四
吽多羅吒干鈴　安達一一一九・善界一六〇五・道成一八〇二
運槻弓の力も落ちて　夜三三七五
運槻弓の引く方も猪に　巴三三八四
倦んで還る事をや知らすらん　三笑一二八三
運の極め
　義經が——と思ふべし　八島三一六〇
運の極めの悲しさ　朝[illegible]
運の盡くる處は　藤栄二一五二・鉢二九六〇

雲峯
南北に——をつらね　淡一五二
雲母の地
玉兎晝眠る——　俊寛一四三五
運も視弓のやたけ心も　生二七一
雲龍閣
阿房殿——にすゑ置かれ　天二一三三
雲龍閣や阿房殿　都七八三
〔雲林院〕　四五七
雲林院(京名)　雲林院四五七・半所二四九七
雲林院
紫野——に住居する僧　半二四九四

え

榮耀
榮華にも——にもげにこの上や　[illegible]七八六
影向(ヤウゴウを見よ)
郢曲のみぎんなれば　[illegible]三二三
榮花
事を盡すや——の家　[illegible]一七三五
百年の——は塵中の夢　盛三〇九八
嘗生が見し——の夢は五十年　[illegible]二五五五
榮囘
水——として露潤す黄菊　枕二八一七
榮華にも榮耀にもげにこの上や　[illegible]一七八六
榮華の家には住みもせで　[illegible]四九
榮華の牛だ　祇八五九
榮華の花も一時の　都七八二
榮華の春も常磐にて　[illegible]七八六
榮華の春も萬年　都七八四
榮華はこれ春の花　貞一四五三
えいさらえいさ　岩二九四・百二六七二
叡山(比叡)比叡山をも見よ
今一度——へ行幸なし奉り　補九一四
嬰兒の蠡を以て巨海を測り　木付八二一
えいじも躍るばかりなり　[illegible]一〇五四
潁川に耳を洗ひしは濁れる世を　草子二一九四
えいやえいやと夕汐につれて　[illegible]七八〇
永夜の清宵何のたすところぞや　[illegible]五
業を忘れて共に西方を修し　[illegible]一三八二
瑤臺霜滿てり一聲の玄鶴空に啼く　[illegible]〇四九
要文
枕の——疑ひなく　[illegible]八一〇
要文さまざまに書き記し　[illegible]〇
得難きは時逢ひ難きは友　西行一一七八
得がたきは時去り難きは貴命なり　[illegible]一〇九
〔江口〕
江口(大夫)　江口[illegible]四七一
江口　四七一
松の煙の夜寄する——の里　江口四七四
江口の遊女　江口四八二
江口君　江口[illegible]四七一
江口の君の川逍遙の月の夜舟　江口四八二
江口の君の嘗蹟かや　江口四七五
えせ人
大[illegible]坊といふ——　大江五六一
えせ者
箱王といひし——か　小袖一二三

枝に木傳ふ花鳥の　右三五〇
枝に霜は置くとも猶常磐なれや橘　[illegible]八八三
江田源三　正ツレ一三五五
枝は鳴らさじ　[illegible]二〇八
得たりと切つてかかれば　巴三八六
得たりやおうと　土蜘二〇六一
得たる便り
この笛に——のあるぞとは　笛二五二五
枝をため葉をすかし　鉢二五五八
枝を連ぬる
終には靡く青柳の——御契り　船辨二七七七
蛭子素盞嗚は——御神　第一七七三
枝を連ね
果葉——　敦一三五五・知二三五一
枝を連ねて諸共に　玉井一九七五
枝を鳴らさぬ
雨塊を潤して——松の風　放生二四五七
松の風——木の下に　寢三三九八
枝を鳴らさぬ氣色かな　春日六七一
枝を鳴らさぬ御代とかや　難三三三
枝を鳴らさぬ御代なれや　高砂一八六四
えならず見えし夕顏の　夕三二一四
〔江島〕　四八九
江島(神奈川)　鱗所四四九・江島所四八九
江の島は崑崙のきを寫し　江島四九二

江島辯才天　鱗シテ四四九・江島ツレ四八七
江野といふ浦(神奈川)　江島四九一
江のほとり
命を知れば——に繫かざる舟　[illegible]二六八
衣鉢を授くべし　[illegible]一六四一
夷の大將
胡國の——呼韓邪單于が幽靈　昭一五八〇
〔箙〕　五〇五
箙
一枝折つて——にさす　箙五一〇
箙の内よりも　木賊八三一
〔箙梅〕　箙異稿五〇五
箙の梅　箙五〇九
箙の花も源太もわれさきかけ〳〵　箙五一九
箙を見れば不思議やな短册をつけ　忠度一九一九
衣紋
紅の狩衣の——けたかくひき繕ひ　通小七七三
衣紋美しく着たいて　柏六六〇
煙嵐朧として夜の色を侵す　龍虎三三六九
煙霞跡を埋んでは花の暮を惜しみ　[illegible]一七四〇
延喜
住吉と申すは——の御事　高砂一八六四
延喜聖代の御讓り　絃一〇[illegible]七
延喜第三の皇子逆髮　蟬一六七九
延喜第四の皇子蟬丸の宮　蟬一六七三

延喜の聖主に仕へ奉る　[illegible]三三九五
延喜の聖代に仕へ奉る　[illegible]
延喜の聖代の昔　[illegible]二三九七
延喜の帝　[illegible]一三二六・光△五三〇
延喜の皇子のなり行く果　蟬一六七八
緣生
一色一香の——は　[illegible]五〇八
人間個々——の觀念　[illegible]五〇九
燕丹太子をも程なく遠ほし　[illegible]
煩惱
風緣野に收まつて——直し　[illegible]二六三〇
炎天の梅水は簡齋の詩　[illegible]二五六八
炎熱劇熱無間の底に　[illegible]二〇七五
役の優婆塞　[illegible]△六九・[illegible]一九七三・船辨一七六八・[illegible]二六二八
役の優婆塞の行儀を受け　[illegible]
役の行者　葛△六九九
役の行者國々の山々へ分け　富士山△二六九三
役の行者昔く御座をたし　[illegible]九九
役の行者の跡を繼ぎ　[illegible]一六五
燕の指圖の箱　[illegible]一七九五
緣の衆生を濟度せんと　[illegible]四七
煙波渺波の浮雲に飛行の自在を　[illegible]九六
閻浮(など參照)
あら——戀しや　女三五〇一
思ひ出でたり——の有樣　東北一九八

執心の——の涙　松風二八三三
月に詠じて——に下り　須一五〇一
妄執の——の世　大原五四四
輪廻妄執の——の名　實一二四九
閻浮戀しや　求三〇七二・賴三三〇七
閻浮提に示現し　松尾二八四六
閻浮檀金
塔婆の金寶に至るまで——なる　弱三三二三
閻浮に歸る生田川の　仲五一八
閻浮に歸る妄執の　旅上歌五〇九
閻浮の秋に歸る心　松蟲二八六二
閻浮の故郷
往くも歸るも——に　満八四七
閻浮の故郷に去つて久しき　八島三一五八
閻浮の夜遊に歸り　經二〇九一
閻魔宮
梵釋十王——　泰一七四一
閻魔法王
四大天王——五道の冥官　正一三六四
閻魔法王の呵責の詞を聞く　歌三六四
閻魔王　鵜飼シテ二九七
淵明
陶　三笑一三八四
宴罷んで紅燭猶餘れり　泰一七三六
延暦寺(近江)
比叡山——の座主　雷三三三三
閻王
梵天に祈誓し給へば——憐み　松山鏡二八七四
閻王に仰せつかはさる　生二七〇

お

おあし添へて召されよ　[illegible]五一
老隠るやとかざさん　小鹽三四六二
老が身の春の光にあたれとも　龍虎三三六三
老が身も心若菜を摘へ　國八九七
老木の枝は雪折れて　巴一八一三
老木の神松　老五二一
老木の柴と人や見ん　小鹽三四五八
老木の枫氣力なうしてよわよわと　遊三一〇四
老木の若緑　老五三一
老木も若緑　春榮一四一八
老木をそれと御覧せよ　實一二五〇
老いせぬ門(不老門をも見よ)
長生の家にこそ——はあるなるに　善三三二一
老いせぬ門に出て入るや　玉井一九七五
老いせぬや藥の名をも菊の水　智一二五一
老いせぬ齢を汲みて知る　玉井一九七五
老蘇の森(近江)
衰へは——を過ぐるや　盛三〇九七
鏡山——をうち過ぎて　朝三三五七
老いたる馬にはあらねとも　遊三一九五

老いたるも猛る世の習ひ　夜[illegible]六八
老いたるを責み身と思ひ　[illegible]〇四五
老鶴
　子を思ふ身は——の鳴くものを　木[illegible]一五
　つれなく残る——の眠りのうち　藤戸二七四五
　身は——の身に立てて　大蛇三五〇六
老いてかがめる姿をばみつ　ほくなと　[illegible]六[illegible]七
老な頭なそ花心　小督[illegible]四五八
老いにけるぞや　井[illegible]四一一
老に添へたる恋慕の秋　[illegible]一九三
老いぬればさらぬ別れのありといへば　熊野三[illegible]四四
老の鶯逢ふ事も涙に咽ぶにかかり　熊野三[illegible]四四
老の鶯の百囀りの春は来れども　関寺一六一三
老の思出　金八七一
老の坂
　重なる——たらん　[illegible]六一五
　通ひ馴れたる——　養三[illegible]三〇
老の鶴の塒に残る有明の　高砂一六六一
老の杖
　又力づく——　紘一〇四七
老の波越えて藤戸の明暮に　藤戸一聲二七四一
老の波も寄り来る　白髭上歌一四七〇
〔老松〕　五三一
老松　老シテ五三一
老松

紅梅殿や——の緑より　[illegible]六
年を——も緑は若木の姫小松　[illegible]一八八
老も風情少き有様を　龍虎三三六三
老い行く末も白頭[illegible]　[illegible]二六
老いらくの
　誰も知れ——春ふるも同じ　[illegible]
老らくの寝覚はとふる古を　三井[illegible]
老を知れとの心かな　[illegible]七五五
老をただに養はば　養老上[illegible]
老をな隔てそ垣穂の梅　[illegible]九五四
老を延へたる心こそ　養[illegible]
老をも忘れ水の　養[illegible]
老を養ふ瀧川の　養[illegible]
擁護の神橋姫　[illegible]一〇七一
應作如是觀　谷一九四八
應神天皇の御宇かとよ　[illegible]九八[illegible]
應神天皇の御宇に　[illegible]九八〇
應神天皇の御聖運　[illegible]八
應神天皇の尊苗を継ぎたから　花筐[illegible]五八二
應神天皇の皇子　蟬一六八四
おゝさい喜びありや　翁八九
興玉の神　御[illegible]九五七
興玉の神
　その時の田作の翁は今の——　御二九六三
興津(静岡)　草[illegible]八八八

沖つ白波
　風吹けば——龍田山　井[illegible]
起きつ轉びつ泣く泣く　[illegible]二〇一五
起きつさらへつ己と身を責めしか　[illegible]
沖つ舟
　雲も浮かぶや——　[illegible]
　雲をも分くる——　[illegible]九
起きても寝ても忘れぬ思ひの　[illegible]七二
〔翁〕　[illegible]一
翁　[illegible]一
翁草の霜重なりして　[illegible]一八[illegible]
翁さび
　篠原の草葉の霜の——　[illegible]一五一
翁さびしき木の下に　[illegible]八八九
翁さびたる山陰の　氷[illegible]六九九
翁さびて跡もたし　西行[illegible]七九
翁さびて人な咎めそ[illegible]たにも　大佛[illegible]七五五
翁さびて人な咎めそかりそめに　實[illegible]五[illegible]
翁さび人な咎めそわれこそは　代[illegible]八四
翁さみしき木のもとを　老五三七
翁舞　翁九
おきぬふに便りあり
　草衣夕の肩を隠さざれども——　關寺一六一三
沖の石
　袖に波越す——　[illegible]九一

沖の鴎
　あれこそ——候よ　鴎一五二四
早鞆の友千鳥　も群れ立つや　和三〇三三
沖の鴎磯千鳥　蕨三三
沖の鴎に心そへ　鴎四五三
沖の鴎も音を添へて　[illegible]一〇一五
興範　須[illegible]一四九一
興範
　藤原の——通りし時　塘[illegible]六[illegible]七
　宮崎の社官藤原の——　須一四九二
おきは積つて山の如し　[illegible]八八八
篝火、
　五濃は——の里娘となり　東三〇七五
起風茂き小笹原　芦[illegible]五四二
おきもせず寝もせで明かすこの　源氏一〇三五
起きもせず寝もせで夜半を明かし　大僧一七四九　錦木二三四五・三山二九一八
おきやがり小法師　葉[illegible]九五一
おき別れにしきぬきぬの裏や重ねし　[illegible]五七
晩稲の小田お刈りにほに　鳥三三九九
奥の院
　深々たる——　[illegible]六一[illegible]
膽病者
　彼奴は今に始めぬ——　鳥三四三五
奥も迷はじ咲きつゞく　[illegible]九五一

奥山の深谷の下の菊の水　松[illegible]一八六四
奥山の深谷の下のためしかや　巻三一三一
送り迎へし織物の　呉九七九
後れ先だつ浮世の習ひ　佛二三[illegible]
おこたりを申し　歌三五七
おこと　嵐二〇六・歌三五九
おこと
　自然又——世に出で給はん時の　[illegible]一五五六
おことの姿餘人の見る事なし　寶一二四八
おことはこれに待ち給へ　藍二三四
おことまだ稚かりし時よりも　笛ク七二五二五
おし明け方の[illegible]門より　大蛇上歌三五〇七
押しつけ
　鐙の胸板、揚卷　揺一六六[illegible]
おしてる海面遠く　雨一八二一
おし照る海山も皆成佛の姿なり　[illegible]二三三
おしてる宮に聞しめすなへ　梅四二六
おしてるや難波入江に寄するなる波　仕一五四四
鴛鴦の番去りにしあはれさよ　東三二六九
鴛鴦の番鳥とたつて　東三〇七四
惜しまじな月も假寝の露の宿　芭上歌一五三三
惜しみても惜しむべきは後名の嘲り　[illegible]二一八九
惜しむこそ惜しまぬ假の宿　江口上歌四七八
惜しむも乞ふも情あり　[illegible]秋四六[illegible]
於須臾頃便成正覺　理一〇二〇

推すも敲くも古人の心　[illegible]一三[illegible]五
おすや唐艪の　岩二九四
押せと押されず　車九六六
推せども出でず
　山影門に入つて——　三輪二九七九
遅櫻
　青葉隠れの——初花よりも　大原五四六
　比良や横川の——　[illegible]九五五
遅なはりや　[illegible]二〇四六
恐れがまし　[illegible]二[illegible]九
恐ろしや世は末世に及ぶと　花[illegible]上歌二五八九
愛宕の郡(京都)
　氷の物を供ふる所も——　東[illegible]六六六
愛宕の郡に平安の都を立て　金八七〇
愛宕の寺もうち過ぎぬ　熊野三三四八
落人となり　[illegible]七四
落ちくる瀧の響すなり　[illegible]一〇八二
落ちくる瀧の音羽の嵐に　[illegible]下[illegible]四五〇
落穂
　車に似たるは嵐におろき——　通小七六五
落汐
　[illegible]の舟の——に浮き立つ鳥や　[illegible]二九六
落葉
　風に散り水には浮かむ——　昭一五八三
落葉かくなるまで命ながらへて　高砂一八六一

落葉衣の袖添へて 高砂一八六一
落葉の積る木蔭にや 鬮次第一五八三
おつ取つて嚙み碎き 雷三三六八
おつとりこめて討たざらん 橋一五一〇
落つる梅
　折る柳―― 葉一七三三
落つる涙は百千行 道明一八三三
音かへて吹く風の 東方二一八〇
乙子 季△三二一
音こそ潮の滿干なれ 高砂一八六一
落し
　一先――申さばや 仲三三一三
音高し何と何と 葉月二七四二
音づれの稀なる中の秋風に 砧一龍八三三
おとづれは松にこと問ふ浦風の 高砂一八六一
おとどい
　ある時――は持佛堂に參り 望三〇五三
　われら――花水を手向けの爲に 水無瀨二九九九
おとどい選ばれ參らせ 松風二八三三
大臣よりの御使 葵一六五
おとなしく恥ぢがはしく 井三四〇六
音無にかつ咲きそむる梅の花 卷二八〇八
音無の天神（和歌山） 卷二八〇四
音には立てじ戀ひ死にし 戀一一六四
音羽の嵐に地主の櫻は散り散り 放下二四五〇

音羽の瀧（京都）
　波まぬ――波は 賀七三九
音羽の瀧の白絲の 田一九九二
音羽の瀧をよそに見て 實氏一〇一九
音羽の山櫻 熊野二一四六
音羽の山櫻花の瀧川 第一七六九
音羽の山續く 賴三三〇九
音羽の山の嶺よりも 田一九九二
音羽山（京都）
　關の此方と思ひしに後にたるや―― 蟬一六八一
　音に立てぬも―― 盛三〇九六
　霞むそなたや―― 田道行一九八八
　松吹く風の―― 西行一一七八
音羽山音に聞きつつ逢坂の 蟬三一三七
音羽山今朝越え來れば 志一三九三
音羽山嶺の下枝の滴りに 花一〇〇五
音羽山峯の松風通ひ來て 夕三三一九
音も變るか聞き給へ 同三
劣るをも賤しむた 敦一一八・志一三九六
おどろ
　髮には――の雪を戴き 山三一七八
　髮は――を戴き 蟬一六八二
　長き黑髮を――の如く亂して 百二六七二
驚かし來れや瀧祭 逆一二一三
驚く魚を追ひまはし 鵜飼二二〇六

驚く池に雪火亂れ [illegible]
刑つ場も時はほれ [illegible]
衰へは老蘇の森を 盛三〇九七
荊棘を戴く[illegible]は[illegible]を[illegible]れて [illegible]一九九二
同じ憂き寢の美濃尾張 杜六一九
同じかざしの[illegible]を [illegible]一九一八
同じかざしの花鬘 [illegible]八六一
同じ子に同じ柞のもりめのと 小袖一一三二
同じ蓮の臺となるべきに 八山[illegible]一八七
同じ道にたらんとて 安宅[illegible]二
同じ世の逢瀬とこれを思はめや 雷三三三六
鬼
　赤き―― 鐵七二一
　安達が原の塚にこそ――隱れりと 大江山六[illegible]
　青き―― 鐵七二一
　一念無量の――となる 雷二一六四
　恨みの――となつて 鐵七〇七
　假にも――のすたくなると 現一〇一七
　心の――の身を責めて 水無瀨二九三四
　この野に住みける―― 野守二四一六
　こもれる――を從へずば 羅三三五一
　賤の目に見えぬ――とや 山三一八二
　執心の――となつて 船橋二七六六
　執心の――となる 鐵七一三
　千方といひし逆臣に仕へし――も 田二〇〇〇

悲魄の——となつて　求三〇七四
魔境の——　綾一九七
冥途の——か恐ろしや　昭一五九〇
冥途の——といふとも　綾一九九
目に見えぬ——とぞなり　鐵七一四
面色變り——となり　金一三九一
四つの——を使ひしかば　土車二〇七五
鬼が城（京都）
丹後丹波の境なる——　大江五六四・花一〇〇八
鬼神（キジンをも見よ）
目に見えぬ——をも和らげ　蘆六〇
目に見ぬ——の猛き心を和らぐる　鵜三四四六
鬼神たりと大君の惠みに　大江五五六
鬼神たりとも通すまじ　大江五六九
鬼神にてもあらばこそ　景六四四
鬼神にてもたまるまじ　烏三四三五
鬼神をも和しむく　梅四二八
鬼の形
名も恐ろしき——　夕三二一三
鬼の醜草とは誰がつけし　大江五六四
鬼の城に遣はす　土車二〇七五
鬼の住家
安達が原の黒塚に籠れる——　安達一一七
鬼の住家へ先驅はこわもの　大江△五五七
鬼の間
目に見えぬ——に入り　大江五六五
鬼の宿
いづくか——と定めん　土車二〇七五・羅三三五〇
鬼のやどり
いづくか——なる　土蜘二〇六四
いづくか——なるらん　大江五六九
御庭掃の老人　鼓ノ子一八九
鬼一口
雨の夜の——に喰はん　安達一一九
目に見えぬ——も恐ろしや　通小七七〇
鬼一口に食はんとするを　大江五七〇
鬼一口の雨の夜に　山上絵三一七八
鬼も神も納受する和歌の道　放生二四六七
鬼も去り火焔も消えて　求三〇七五
鬼王　小袖ツレ一一三五・禪ツレ一六八九・夜ツレ三三五七
鬼王
曾我兄弟の人々に仕へ申す——　禪一六九〇
鬼王か團三郎か兄弟に一人　夜三三六二
斧
賤が爪木の——の音　大原五三八
薪の——の永き日も　志一三〇三
おのおの歸る法の場　寶一二四七
おのおの歸る法の場人　善一五六四・佛二七九八
おのが波に同じ木葉のしをれけり　藤二七二五
おのころ島と申すもこの一島　淡一四〇七
磯馴鷹島や淡路潟　通盛一九〇一
おのづから春の手向となりにけり　田一叢一九八八
おのれおのれとかはれども　聟一五五四
おのれおのれの時を得て　六浦三〇一五
おのれと出現して　石一三七八
おのれ等
あら物々しや——よ　烏三四三六
おのれらさへに見捨つるか　小督一一二五
己を盡くし身を碎き　岡一七七
大原（オホハラをも見よ）
笈
御——をも肩に懸け　正一六六二
强力が負ひたる——　安宅八五
兵具に對する——を負ひ　大江五五六
帶
衣着ぬ山の——をするかた　白髭二四七六
白雲——に似て山の腰を圍る　白樂二四七五
追風
御簾の——匂ひ來る花の都人に　千一七〇五
追風にまかせつつ　高砂一八六八
追手
たと——をばかけまりしぞ　正六五三
追風がおりて候　唐一八一七
追手領たる跡の汲　満八五三
追手の武士に　國九〇三
追鳥高縄をさし　鷺一九九一

生ひにけらしな妹見ざる間に　[illegible]四〇七
〔追松〕　[illegible]五二
追松と名づけられ　淀△五三〇
芽生の浦舟漕ぎつれて　鳥[illegible]九
大達道の皇子　花[illegible]五八〇
大臣殿父子　知[illegible]九
大内
　名所といふ事はわが——にあり　[illegible]林四六八
　同じ雲居の——や神泉苑に　[illegible]二二八
大内にある時は梅壺の侍従　[illegible]二四〇
大内の御垣守　源太一〇六六
大内も程近く　[illegible]一一四五
大内山の陰高き　金八七一
大内山の春霞　杜六二五
大内山の道ならん　[illegible]早一六〇四
大内山の山守
　人知れぬ——も　小袖一二三九
　百敷や——も　卒一七二一
大江の岸(大阪)
　渡邊や——に寄る波も　作一五四〇
　渡邊や——も移り行く　廣四五
大江の惟章が心變りせし程に　閑手一六一六
大江の定基といはれし寂昭法師　石一三七四
〔大江山〕　五五三
大江山(京都)　大江所五五三

大江山の鬼神　大江五五五
大江山の鬼神を從へ　羅三四七
大方殿より出家にたし申せと　[illegible]一〇八一
大方殿よりの御諚には　小袖△一二三〇
大きに和らぐと書いて大和歌と　白[illegible]二四七五
大君
　摂袋の——　[illegible]一
大君の國
　草も木もわが——なれば　御[illegible]九六一
　土も木もわが——なれば　大江五六九・[illegible]一八六八
　上蜘二〇六四・土車二〇七五・[illegible]二三五〇
大君の國なれば土も木も　[illegible]三三三
大君の神國
　土も木もわが——に　田一九九九
大君の御影の國　土車二〇七五
大君の御影のどけき時とかや　金八七一
大君の詔を賤しき身として　養三一三
大君の惠み
　鬼神なりと——に漏る方あらじ　大江五五六
大口のそばを高く取り　花一〇〇四
大崩
　都——にて賊の口を射させ　朝三六三
大鷦鷯の天皇の御位に卽かせ給ひし　梅四二七
大鷦鷯の帝を花にそへ歌の　[illegible]三一
大島(福岡)

舞人も[illegible]舞ふとか——の　[illegible]
大内裏木井も酒肆に　[illegible]二〇四
大嶽(叡山)
　比叡の——　花一〇二九
大太刀
　五尺三寸の——をするりと拔いて　乃三四五七
大太刀おつ取り肩に上り　[illegible]二七
おほぢが伏屋の上に　閑八九五
おほぢと姥は諸共に　[illegible]二〇五
祖父は秋の村時雨　[illegible]
おほぢは笏を携へ　昭一五八二
大津(近江)　自[illegible]一二[illegible]五
　おぼつかなくも呼子鳥の　[illegible]六四七・山[illegible]八〇
おぼつかなしや恐ろしや　紅三〇九〇
大手搦手の海山かけて　[illegible]五一
大手搦手より　木廿八一八
大手に向ふべし　鳥三四二八
大手の陣を心もとなきぞと　通[illegible]一九〇六
大藤内　夜狂言三三七
おほどかに過し給ひしを　浮三一八
大伴の黒主　草子一二八二・[illegible]一二九六
大伴の黒主が歌の様　[illegible]林[illegible]六四
大伴の御津の浦　廣六二
大友の皇子に襲はれて　[illegible]七一〇
大長刀

一壁には――　熊坂九三六
もとより好む――　橋三五一五
大長刀もあらばこそ　花一〇〇四
大長刀を薙長にとりのべ　俊二五四
大嘗
年の端の――に從ふ小忌の人達も　梅四三三
大幣の引く手あまたの心かな　玉井一九七八
大幣の引く手あまたの人心　水無月二九四一
大庭が手勢　七騎一三三三
大旗小旗馬印皆一樣にて　鉢△二五六三
〔大原御幸〕　五三五
大原寂光院(京都)　大原所五三五
大原野(京都)　小鹽所三四五五
大原の寂光院に浮世を厭ひ　大原五三七
大原野の花　小鹽三四五七
大原野の行幸に　小鹽三四六一
大原の良忍聖　三山二九一三
大原山の花櫻　小鹽三四五七
大原や小鹽の山の小松が原より　小鹽三三六〇
大原や小鹽の山も今日こそは　[illegible]二三九・小鹽三四六〇
大比叡の杉のしるしはなけれども　浮三三〇
大比叡や横川の杉の梢より　[illegible]一六〇二
大比叡や横川の杉の古き事ども　[illegible]三二四
大炊の御門　給△三四四九
大峯(大和)
山上――釋迦が嶽　花一〇〇九
大峯かけて遥々と　谷一九五三
大峯葛城に參らす候程に　野守二四三三
大峯葛城に參らばや　葛六九一
大峯の前鬼が一黨　[illegible]九五九
大宮
二條――を南がしらに歩ませ　羅三五五三
大宮權現の寳殿　白鬚一四六八
大宮造り
仁德天皇この難波の浦に――　蘆五三二
大宮造りせし庭に　俊成一四四四
大宮の内まで聞ゆ網引すと　蘆五三三
大宮の御在所寳殿　[illegible]七三〇
大宮人の御遊にも蹴鞠の庭の面　[illegible]三〇三
大宮人のかざすなる櫻襷　放生二四六七
大宮人の小忌衣櫻をかざす　采四〇八
大物主の御前　三輪△二九八一
公の私といふことのあれば　俊寛一四三三
大八洲の國
八つの國となつて――と名づけ　逆一三一三
大八洲の國を作り　[illegible]一四〇七
〔大社〕　五七二
大社(出雲)　初所二五七三
大社御一體の御事　[illegible]一〇六六
大社は三十八社を鎭守の地　大社五七八
大山の天狗もわれに親しき　大江五六四
大床　葵一六五
大床さして見渡せば　鉢二五六七
大床に伺候して　鵜二三八九
大床の胡床に參着申し　盛七九九
おぼろおぼろ
山も川も――として　[illegible]三〇二
尾上の鐘――と聞き馴れて　寢三三九六
朧々と杉の木の間を洩り　采三九八
朧けならぬ契りゆゑ　須一四九七
おぼろけの行人　石一三七八
朧月夜
春の夜の――にあらはれて　關一五九〇
朧月夜にしくものもなき　八島二一五〇
朧なる雁の姿や月の影　[illegible]上歌二二四八
朧の清水(京都)
芹生の里の細道――月ならで　大原五四五
朧舟こがれ來る　[illegible]五二
大鵬に乘じ舜風を吹かせ　玉井一九八〇
大童の姿となつて　熊五一九
大井河(京都)　[illegible]〇七
大井河
緩る瀬瀬の――　[illegible]三〇九八
雲に流るる――　百二六七八
花は――井堰にせかれなるらん　西行一一七八

水も無く見えし――　[illegible]七二九
大井河筏の床のうき沈　車九六五
大井の入江霧こめて　松風二八四二
大井の波の音までも常楽我浄の　松尾二八四七
大井山(長野)
　吹くや嵐の――　鉢二五四八
おほゐそ鳥
　鳥てふ――も心して　[illegible]八三八
御室
　仁和寺――に仕へ申す僧都行慶　經二〇八五
面影のあるかなきかにかげろへば　花筐二五九三
面影は身に添へど　富士太二七〇四
重きが上の小夜衣　通小七六七
重く濁れるは地となれり　淡一四七
面ざし少しも違はず　春榮一四一〇
面白の氣色やな　橋上歌二五一五
面白の花の都や　放下二四五〇
面白や千草にすだく蟲の音の　松虫ワカ二八六五
面白や山水に　安宅一〇二
面白やゆたに吹くなる春風に　藤ワカ二七三三
面討には並びなし　熊坂九四一
おもて白や　[illegible]三四五二
面つれなき心とは　祇八六二
面に立たん兵　烏三四二八
面は猿足手は虎　鵺二三九〇

面伏
　わか子の――たれと　三井三〇〇五
面も色づくか　大[illegible]五六四
面を越され
　誰に――誰に劣る振舞の　巴[illegible]八四
面を向く
　人に――ることあらじ　[illegible]三五一
面を向くべきやうあらじ　[illegible]二五一六
面を向くべきやうぞなき　[illegible]二六一九
おもなの舞の有様やな　[illegible]二一六
面なやおもはゆや　葛七〇二
重荷
　休む――に肩を貸し　山三二八一
重荷なりとも逢ふまでの　[illegible]第一一五八
重荷を作つて上を綾羅錦繍を以て　戀一一六二
思はざる外の旅行の道　盛三〇九七
思はじと思ふ心のなどやらん　天二一二四
思はじと思ふ心も弱るかな　砧八三四
思はず深山の奥の住居して　大原五四七
思はずも雲居を出づる春の夜の　國[illegible]八九三
思はぬ人を思ひ妻の　水無月二九四〇
思はぬ人を思ひ寝の夢か現か　錦木二三四五
思はめや
　同じ世の逢瀬とこれを――　雷三三三六
面はゆくや思し召しけん　浮△三二一

面はゆながらも移り舞　住一五四六
おもはゆの有様やな　[illegible]二一六
思ひ出でじと思ひ寝の　天二二三四
思ひ出でじ忘れんと思ふ心こそ　[illegible]七四八
思ひ内にあれば色は外に見え　[illegible]
思ひ内にあれば色外に顕る　[illegible]
思ひ内より言の葉の　小鍛二四六六
思ひ思はずよそながら見ん　野守二四二八
思ひ思はぬ中ならば　笛二五二四
思ひ川
　いかにせんとか――　夕三二一五
思ひきや榻のはしがきかきつめて　錦木二三五七
思ひ草
　立居苦しき――　浮三三一六
　花を刈るとや――　[illegible]八八九
　一方ならぬ――　百二六七八
　尾花がもとの――の　錦木二三五三
思ひ草葉末に結ぶ白露の　花[illegible]二五九三
思ひ草花にめでて月にそみて　[illegible]四八三
思ひ子
　わらはも東に――の　隅一五二四
思ひ子の別れを慕ふ世の習ひ　大蛇三五〇六
思ひ樒を折り添へて　須一四九四
思ひ知らずや思ひ知れ　[illegible]一六三
思ひ知らせん　雷三三四一

思ひ捨つれば安き身を　放下二四四二
思ひ立つ朝の雲の旅衣　成一聲七九四
思ひ立つあしたの原も遥々と　大蛇道行三五〇五
思ひ立つ心ぞしるべ　融二三二一
思ひ立つ心も西に行く月の　松山天道行二八八五
思ひ立つ其方の空も北時雨　鵜祭道行四一三
思ひ立つ空も重なる雲の袖　寢道行二三九五
思ひ立つ日を吉日と　唐一八〇八
思ひつつ寢ればや人の見えつらん　關寺一六一八
思ひ妻
　あはれ昔を――の　千一七一〇
　思はぬ人を――の　水無月二九四〇
　都の人を――　隅一五二四
思ひ夫の二世と契りてもなほ　砧八三八
思出は身に殘り昔は變り跡もなし　砧八三〇
思ひに障る方もなし　玉葛一九六三
思ひには死なれざりけり　柏六五七
思ひ寢
　思はぬ人を――の夢か現か　錦木二三四五
　思ひ出でじと――の　天二一三四
思ひ寢の涙かたしく　景六三三
思ひ寢の夢だにも涙心の　三井三〇〇二
思ひ寢の夢の一時　簡二五二五
思ひの家ながら火宅を出づる道　芭三五三五
思ひの家を出で　土車二〇七三

思ひの色
　下安からぬ――　藍二三四
思ひの色に出づるこそ　望三〇五二
思ひの色にや出でぬらん　千一七一〇
思ひの絆
　生々世々もいつまでの――　天二一三八
思ひの煙
　邪婬の業深き――の　砧八三七
思ひの煙胸に滿つ　柏六六二
思ひの末通る　元一〇七九
思ひの末は石に立つ　成七九四
念ひの珠の數々に　定三二二三・遊俳名三三〇〇
念ひの珠の數繰りて　知三三四一・朝三三六九
念ひの珠の緒の命も　盛三一〇二
思ひのつま
　夕の嵐朝の雲何れか――ならぬ　班二六〇六
思ひの露もたまさかの　小唄待宵三四六五
思ひの火
　鱸魚に別れて――を胸に焚き　天二一三四
思ひの外に君が來ませる　江口四七九
思ひのみこそしるべなり　右三四四
思ひの闇のせん方なさに　簡三三九二
思ひはうちにあれど色になど　雲雀二六四六
思ひは同じ思ひなれば　野一六六三
思ひは同じ戀路　鳴一五二五

思ひはます鏡　菫一六三
思ひは山の鹿にて招くと更に　通小七六八
思ひやるさへ遙かたる　六浦次第三〇八
思ひ寄るべの波枕　掃待宵二三〇七
思ひ煩ふ母が身の　嵐上歌二一二四
思ひを述ぶるばかりたり　高砂一八六一
思ふ方より風や吹くらん　誌一〇五二
思ふ心のそこひなく　羅生門二五九
思ふ心を見ん僞めと　張上歌二〇四七
思ふことといはでただにや止みぬべき　小唄二四六六
思ふ事叶はねばこそ浮世なれ　佛七九三
思ふ夫をば取らで　鐵七一四
思ふ中
　鳴る神も――をば避けられし　鐵七〇七
思ふ日に當れり　佛七九〇
思へ櫻色に染めし袂の惜しければ　雲雀二六四六
思へただ世は空蟬の唐衣　千上歌一七〇七
思へば久し住吉の松　高砂一八六九
面忘れ
　親と子の――せばいかならん　曖一二二一
　見しにもあらぬ　日六八四
　身は白雪の　貫六一
　われただに知らぬ――　四八
親
　あはれむべき――あたし　花一〇〇二・卒一七一九

生々の——を助けんこと　高野六〇五
千里を行けども子をば忘れぬ——　[illegible]七七五
人の——の心に闇にあらねども　大政[illegible]一四
人の——の迷ふ春きことの闇には　[illegible]二〇八八
親ありとも思ふべからず　藍三三二
親孝行もかくばかり　元一〇九〇
親孝行のためしにならん　小[illegible]一一六八
親子
一世の——として　本朝三二一三
假の——の今をたに　日六六一
この世にたに添ひも果てざる　[illegible]一〇一四
生々の——皆以て誰か又自他　春栄一四一三
立つや若竹の——の睦み　春栄一四一八
千度百度——ぞと名乗らばやと　水無瀬二九三一
馴れぬ——を悲しみ　景六三七
世々毎の假の——に生まれ來て　天三一三七
親子鸚鵡の盃の幾久しさの　仲三三一
親子鸚鵡の袖なれや　百二六七六
親子鸚鵡の袖ふれて　生三七一
親子兄弟と榮ふる事も　春栄一三一九
親心
千里行くも——子を忘れぬ　隅一五三三
親心かなしむ母の門途り　大佛一七五〇
親心の闇打に現なき　仲三三一六
親子手に手を取り組み　善知三八九

親子に[illegible]の袖を振り切りたき　水無瀬二九三四
親子にあひ竹の　竹雪一八八八
親子のあはれ
鳥類や畜類だにも——は知る　三井二九九六
親子のあはれ知らざるや　天三一二八
親子の御戯れ　小袖一一三一
親子のしるしの碑　天二二三九
親子の契り
これや限りの——と　小袖一一三八
睦しきは——　雷三三三六
親子の契り麻衣　百二六七四
親子の契り朝潮の　海一八二[illegible]
親子の契り朽ちもせぬ　櫻一二三九
親子の契り盡きせずも富貴の家と　三井三〇〇六
親子の契りも今を限り　生二七〇
親子の道
二世安樂の縁深き——　櫻一三四〇・竹雪一八八八
親子の道にまとはりて　百二六七三
親子の者　[illegible]三一三一
親子は一世の中たるに　熊野三[illegible]四
親子は一體二つの命ならずや　七騎一三一二
親子は三界の首枷　天二一三八
親子よりも主從は深き契りの中　堀上歌一六五五
親子をも思ひ思はぬ中ならば　笛[illegible]五四
親しさくれば妹に逢はぬかも　船橋二七六五

親と子
四鳥の別れ——に二度逢ふ[illegible]　歌三六[illegible]
夢に相逢ふ——の　水無瀬[illegible]
親と子の一世の契りの　仲三三三一
親と子の緣は盡きせぬ契りとて　[illegible]
親と子の面忘れせばいかならん　[illegible]二二一
親と子の定めなき迷ふ闇路の　春栄一四一七
親と子の四鳥の別れ　隅一五三三
親とても諫めず　隅一五二九
親と名乗らで情なく　水無瀬二九[illegible]
親ながら恥かしとて　弱三三二七
親に孝あるにより　[illegible]一三五〇・大[illegible]一七六〇
親にだに惜しまれぬ身　仲三三一五
親の思ひ子の名殘惜しさ　谷一九四[illegible]
親の御慈悲も子によりけるかや　景六四三
親の敵
一萬箱王が——を討つたる所　望[illegible]〇五〇
七歳にて——を討つ　鳥二[illegible]〇三
親の敵ぞかし　富士太二七〇五
親の敵の事世に隠れなく　小袖一一三五
親の敵を討たぬ者は不孝　[illegible]下[illegible]四[illegible]八
親の敵を討つ事も孝行深き故　放下二四五一
親の飼ふ蠶の繭に　松山鏡二八七五
親の絆　景六三七
親の子を思ふこと人倫に限らず　唐一八一九

親の慈悲　頭一六七六
親の十三年　龍三三九七
親の追善　自一三三〇
親の杖
　打たれても――　小袖一一三三
親の遺言背かぬなり　錦戸三三六六
親は千里を行けども子を忘れぬ　木賊三三一四
親物に狂はば子は囃すべきものを　木賊三三一五
親を思はぬ習ひ
　子はあつて千年を經れども――　木賊三三一四
凡そ惟つて見れば　蟻ク七三一
凡そ千年の鶴は萬歳樂と謡うたり　翁ワカ八
凡そ富士の嶺は　富士山ク七三六九一
凡そ彌陀の悲願には　上東ク七三〇七八
及ばぬ穗に浮舟の　花筐三五八七
及びなき身の眺めにも　羽三四八七
織り縫ふ業のいとまなき　呉三一九
おり立つ田子の數添ふや　御三九六〇
織姫の五百機立つる窓に入つて　山三一八一
織姫のかざしの袖　呉九八七
下り居させ給ひしを　宅二一〇八
織るが如くにして天台に掛く　三長一一八五
おろかなる
　汝一人――　卷二八〇五
おろかの仰せ　鵜四五二
おろかの人の心やな　生三六九
おろかやた心からこそ　八島三一五七
おろそか
　ことも――なりとて設けなど　采四〇八
恩
　身は――のため命は義による　巴三八四
恩愛
　あだに契りし――の　善知三八六
恩愛愛執の涙は四大海より深く　身三九五三
恩愛心を悩ませども誰か黃泉の責に　歎三六四
恩愛の契りのあはれさは　夜三六八
恩愛の契りも唯今を限りぞ　七騎一三一六
唵阿毘羅吽欠　安宅九三・安達一一九・葛三六二〇
御暇ごひしさ一方ならぬ望みなり　小袖一一三六
御綺ひあるまじく　元一〇八一
御覺えあし垣の隔てあるこそ　小袖一一三一
音樂聞え花降りて　作三七六・遊二二一
音樂聞え花降りぬ　業三一三七
御事
　見馴れ申さぬ――　鵜祭四一五
唵呼嚕呼嚕に　安達一一九・葛三六三〇
慇懃の教へ
　釋迦大士の――を忘れ　歌三六四
御曹子の小太刀に斬り立てられ　鳥三四三八
御爵
　始皇の――にあづかる程の木　高砂一八六六
飲酒は如何に　通小七七二
飲酒は佛の戒め　木賊三三二三
飲酒を破りなば邪婬妄語も諸共に　江三〇八七
御大事
　鎌倉に――あらば　鉢三五六〇
御大事に眞先かけて討死仕るべき　夜三六四
恩地(蒲二)　楠九一二
御誓言に蔀遣戸を立て添へられ　小袖一一三三
御弔ひを身に受けば　熊坂上歌九三五
音頭を取り　百三六七一
御庭掃の老人　錢一九〇
御坊
　あら物々しやいかに――　吉野一六〇四
御はからひぞ吉野山　吉靜上歌三三八三
御腹召されよ　正一三六八
陰魔
　煩惱の悪魔　死魔天子業魔　第一七七四
御札に妙文を記し　化一八一八
御社を拵えしにより　元一八一八
御子心すなはたなるにより　猩一三五三
御山の程のかしこさよ　鳥三四二五
御襖の裾よごれたりしを　御二九六三
御山の柞の紅葉かたしきて　[illegible]一三一一

か

海雲漫々として　檜二六二四
海燕
　流水羅紋——回る　遊三三〇〇
颶々たる雷の光　江島四九五
垓下の城に籠り給ふ　項△五九五
戒行
　前の世の——こそ拙けれ　蘆四九
　前世の——いみじくて今皇子と　蟬一六七四
　前世の——拙き故　蟬一六七六・鉢二五五二
海嶠
　圜々として——を離る　婕三四八二
　圜々として——を離れ　三井二九九九
海月(神奈川)
　鎌倉——の間に深澤といふ湖　江島四九八
海草　玉井狂言一九七一
海藏の御寶　和三〇三四
海草の精　和狂言三〇二七
戒授け給へ　通小七六七
崖寺の古るに破れ　芭二五三四
海上の楫取を某一人に仰せつけ　船辨△二七八一

介錯
　淵陸左右に——し　三笑一二八八
海神　玉井シテ一九七一
海人(アマをも見よ)
　あまのの里の——　海一七三
　浦には——樣々の　熊五一三
海人あまた來れり　江島四九二
海人とおぼしき女性　富士山二六八六
海水滾々として月眞如の光をかかげ　山[illegible]二八〇
海青樂を奏しけり　寢二四〇一
海青樂を舞ふべし　白樂二四七八
街道
　古道とて昔の——を御通り候　遊三一九五
海棠の眠れる花の如し　皇九九四
戒定慧の三學を見せ三塔と名づけ　[illegible]七二一
海津の浦(滋賀)　安宅八二三
開闢し給へ　白鬚一四七〇
涯分申して　元一〇八六
涯分舞を舞ひ　道成一七九四
かいまみえさせ給ひしを　和三〇三三
垣間見しつつおはせしも　浮三一九
海漫々
　東西は——として　淡一五二
海漫々と漕ぎ行けば　唐一八〇八
海漫々と分け入り　海一七九

開目即見とて目を開き御覽すれば　江口△四八〇
偕老
　戯れに名を聞いてただに——を契り　[illegible]
偕老同穴と契りし夫　[illegible]
偕老同穴の語らひも　[illegible]
海龍王の出現　大[illegible]八四
戒力に引かれはたとか傳道　[illegible]七六八
皆令傳道同覺の　[illegible]
海陸共に治まる御代の　大[illegible]八五
海陸の隔てなかりしに　白[illegible]
香
　露不斷の——を焼き　大原五四一
孝
　親に——あるにより次第次第に　大瓶一七六〇
　親に——あるにより天の憐み　大佛一七六一
〔項羽〕　五八七
項羽　項シテ五八七
項羽高祖の攻めを受け　通[illegible]九〇七
項羽高祖の戰ひ　項五九三
項羽の后虞氏　項五九三
孝恩の心たからんや　木賊二三一四
流盃の盃
　天の濃漿や——　[illegible]七八四
流盃の盃　同じく仙家の盃なり　[illegible]七八四
孝行
　親の敵を討つ事も——深き故　放下二四五一

御身——の心深き故 生二七〇
歸るは——留まるは忠義の 楠九一八
烏きうきうの—— 角二五二五
善哉々々——切なる心を感ずるぞ 谷一九五二
眞は深き——なり 春榮一四〇八
孝行にもはづれ 熊野三二四四
孝行の心力に 谷一九四四
孝行のその道 内三七七
孝行の深きや涙なるらん 谷一九四二
孝行の威德ぞめでたかりける 三井三〇〇六
孝行を守り給ふ三島の宮の 春榮一四一九
行客
　山遠うしては雲——の跡を埋み 一角二一七八
　咸七九四
向顔のため 小袖一一三〇
幸菊丸 歌子方三五三
高貴德王菩薩
　兜率の內院にして——と號し 雨三三七
香囊髻をきり半ば櫃に枕す 蟬一六七六
香花を供へ 海一八〇
郊原
　夕には白骨となつて——に朽ちぬ 朝三三七〇
　檜二六三〇
孝謙天皇の御宇 白樂二四七七
郊原に朽ち殘る魄靈 松蟲二八六二
郊原に朽ち果てて思ひや跡に殘る 藍二四四三

高座
　上人の——を幾重ともなく 現一〇二〇
　導師——に上り 自一三二七
耕作の道の直なるを 給三四四六
高札 攝一六五〇
高札の表に任せ 咸七九五
好山
　萬里の——に雲忽ちに起り 羽二四八六
降三世
　東方——南方軍荼利夜叉 船辨二七八五
降三世明王 安達二一九・葵一六六・道成一八〇一
　野守二四三三・飛雲二六一九
降三世明王は靑蓮の眦に惡魔を 調二一一九
高山千丈の雲
　父の恩の高き事——も及び難し 歌三五八
高山重疊として人倫通はぬ所 一角二一七九
柑子（カンジを見よ）
孝子（ケウシをも見よ）
　かほどの——ありけるよと 唐一八一七
孝子の弔ふ功力によつて 松山鏡二八八一
好事門を出でず 藤戸二七四四
向上の一路は如何に 放下二四四七
恒沙の龍王哀愍納受 道成一八〇三
幸壽が耳に留まり 仲二三一三
幸壽丸 仲子方二三〇七
好色高位

宮女の——の姿 昭一五八五
鮫人 合[illegible]六八一
行進安穩に布帆恙もなく [illegible]
行人征馬の數々 蟬一六七八
行人征馬の行くへの如し 箱三三〇四
鮫人といへる魚の精なり 合六八五
鮫人涙に玉をなし 合六八五
耿然たる一天虛明なる內に 盛三一〇七
高祖
　漢の——の臣下張良 [illegible]九六〇・張二〇四五
　項羽——の攻めを受け 通盛二九〇七
　項羽——の戰ひ 項五九三
かうそ
　末世の—— 花一〇〇三
高僧貴僧
　有驗の——に仰せて [illegible]二八四
高宗皇帝の后 海[illegible]七六
拷訴といつぱ捨身の行 自一三三七
高祖の世に鍾馗大臣の御事 鐘△一四五五
香染の袈裟を纏け 盛三一〇七
講堂の庭に出でて月を眺めばや 三井二九九三
講堂の庭に立ち出づる [illegible]
更闌け夜靜かにして 采三九八
閑なりとも申し又不覺なりとも [illegible]二六六〇
香の衣に香の袈裟かけ [illegible]門一八二八

頭の戰よりこの御腰の物を　鳥三四三
香の直垂　調二二三
かうぶう　[illegible]一二四七・大[illegible]一七九九
好文木
　梅の名に—又は高宿梅たとと　東北二一九三
　梅をば—とは附けられ　老五三八
頭に玉紋冑は金色兩臂をかゝみて　松山鏡二八八一
頭には雷光を戴き　[illegible]一七二六
頭をつき髓を喰ふ　求三〇七四
頭を回らさず
　枯木を抱きて鳴き盡して—　俊寛一四二五
かうほの里(支那)　昭所一五七七
降魔の力を合はせ　善界一六〇六
高名富み貴く心の如くなる　船辨二七七七
高名人に勝れしかば　[illegible]五一〇
衡門
　そのたけ—の軒に等しく　羅三三五五
かう門
　瑠璃の瓦を敷ける—あり　玉井一九七四
高野山(和歌山)(タカノヤマをも見よ)　高野所六〇一
高野山の僧　高野六〇六
高野山より出てたる僧　卒一七一九・水無瀬二九二八
高野の山
　入り定まれる—を歸り出てよ　高野六一〇
〔高野物狂〕　六〇一
高砂岡の相人につけたりし　[illegible]一四九七
高良の神(カハラノシンを見よ)
強力　[illegible]七七・大[illegible]五五[illegible]
香爐
　日—を照らして紫煙をたつ　[illegible]一八五
高樓に登つて鐘を撞く　三井二九九九
高樓に上つて袖を振つ　[illegible]八[illegible]
峨々たる石根に　[illegible]六一九
峨々たる高山あり　老五三七
鏡
　賢女の名を磨く—　松山鏡二八八〇
　戀しき時は—をぞ見る　松山鏡二八七八
　塵の—の影を恥ぢて　花筐二五九三
　年を經て花の—となる水は　昭一五八七
　萬鏡を映す—の如し　求二六六五
　古里を—に映ししはとけつ　昭一五八七
　誠を寫す—　昭一五九[illegible]
　桃の花を—に映せば即ち仙女　昭一五八六
　山は—をかけまくも　[illegible]二一八
鏡には戀しき人の映るなり　昭一五八七
鏡の如くに萬鏡を寫しながら　御一九六六
鏡の宿(滋賀)　鳥所三四一三
鏡の峯(滋賀)　内三七三
鏡の宮所(三重)　御一九七一
鏡の割れ
　[illegible]りし—となりぬとの如くに　松山鏡二八七[illegible]
鏡山(滋賀)
　海越しに見えて立向ふ—　[illegible]
　立ち寄る影は—　[illegible]
　月は鏡山の—　三年二九九七
　湖向ふ—　第一七六九
　鏡山老蘇の森をうち過ぎて　[illegible]
　鏡山立ち寄り給へ客御前　松山鏡上歌二八七[illegible]
かからざりせばかからじと　[illegible]
かからん後は何にかせん　松山天二八八八
かかりあれと植ゑ置きし　[illegible]五八
かかりけるところに　[illegible]
篝火
　鵜舟に燈す—の　鵜飼[illegible]〇一
　舟に焚く海士の—更け過ぎて　通盛二八九九
　門司の關の戸あかせや—　碇二五三
かかる恨みは身ひとりかや　[illegible]八六一
かかる所の秋なりけり　松風八七
かかる不思議に逢ふ事も　現在[illegible]一一九
垣
　雲の—雲の軒も玉簾　金[illegible]八七一
　綠羅の—翠黛の山　大原五四一
柿
　人丸の垣ほの—　通小七六五
かきくどき宣へば　夜上歌三二六

かきくらす心の闇に惑ひにき　錦木一三五四
かきくらす心の闇のひたすらに　藍一三三
かきくれて降る五月雨のそらごと　卒一七二八
餓鬼道
　潮なれば飲水せず――の如く　大原五四八
〔杜若〕　六一七
杜若
　植ゑ置きし昔の宿の――　杜六二四
　咲く卯の花の――　雲雀二六四三
　似たりや似たり　花菖蒲　杜六二八
　三河の國八橋とて――の名所　杜六二〇
　女の――になりし謂れ　杜六二四
杜若いつ唐衣はるばるの　雲雀二六四六
かきつばたといふ五文字を　杜六二一
杜若の精　杜シテ六一七
垣に金花を懸け　關寺一六一八
垣根の雪は卯の花の　夜三三六〇
餓鬼の苦しみも無邊なり　歌三六六
柿の裃懸
　九會曼荼羅の――　安宅九一
柿本のまうちきみ　草子一一九一
垣ほの薄吹く風の　満八四六
何況造立者必生安樂國　知二二四二
客
　花の下の半日の――　鞍九五三

樂　一角二八二・鶴祭四三一・梅枝四四七・江島五〇三・大社五八四・邯七八六・菊八一〇・國九〇五・源太一〇七三・三笑一二八七・白髭一四七三・唐一八二一・鶴二〇九九・天二二四五・東方二二八六・寢二四〇三・富士山二六九五・富士太二七〇七・枕二八一九・輪三三八二
額
　誓願寺と打ちたる――を除け　誓一五五八
かくい
　秦の――は師匠をうつ　春榮一四〇八
樂音乾闥婆王　春日六七八
かく川
　さぞな景色も――の　玉葛一九六一
樂器を手ん手に携へて　枕二八一九
樂乾闥婆王　春日六七八
覺悟の前なれば　正一三六七
鶴氅
　人は――を着て立つて徘徊す　鉢二五五〇
覺樹の花散りぬ　源氏一〇三八
覺紹
　河内の――　熊坂九四一
かくて暮れ行く雲の脚　皇上歌九九五
かくて時過ぎ頃去れば　皇上歌七八
かくなは
　蜘蛛手――十文字　籠五一九
樂に引かれて古鳥蘇の　金八七五・道一三二一

樂人
　住吉より富士と申す――　富士太二六九九
　天王寺より淺間と申す――　富士太二六九九
樂の鼓うつつなの　梅枝四四七
かくはかり祈る心の　生上歌二六六
かくばかり驚くべきに　初上東二五七五
かくばかり經がたく見ゆる世の中に　松風二八三六
樂は何ぞと聞きたれば　小督一一〇二
樂拍子
　撥も數ある――　源太一〇七三
覺明　木曾シテ八一五
覺母
　一萬文殊三世の――たり　卷二八一一
　二世――の大聖文殊をこの島に　九世九二五
かくや姫　富士山二六八三
かくや姫の教へに隨つて富士の　富士山二六九一
香久山は夫畝傍耳成山は女なり　三山二九一五
鶴翼
　魚鱗――もかくばかり　住五一三
鶴翼飛行の秘術を盡くす　籠五一九
神樂　内宅七八・籠四五五・大社五八八・現一〇二二・東田一九三三・卷二八一〇・三輪二九八七・室古三三
神樂
　すずしめの――　住一五四二
　　　　　　　　　　　　　給三四五二

長き夜の――ぞめてたかりける 松尾六八五二
二月の初卯の――面白や 弓三三三
八百萬の神遊びこれぞ―のはじめ 三輪六九八七
神樂寅始めて 葛七〇一
神樂催馬樂とりとりに 白鬚上歌一四七二
神樂の韓神催馬樂 綸三四五二
神樂の鼓聲澄みて 嵐上歌二一〇
神樂の鼓春を得て 作一一七七
神樂の舞 志一三〇三
神樂の役々 綸四五五
神樂の夢は覺めにけり 道明一八三七
神樂を奏し 蟻二二三
神樂男
五人の―― 蟻二六六・住一五四
隱るるまでにかへり見ぞする 道明一八二一
隱れ笠 善知三九〇・綸△三四五〇
隱れがの深きや心なるらん 卒一七一八
隱れ所の山といへども 西行二一七三
隱れはよもあらじ 昭一五九一
隱れ蓑 善知三九二・綸△三四五〇
娥皇女英
湘浦の浦や―― 綸三三九五
覺王如來
大日―― 逆一三一三
本地――寂光の都を出て 藍二四四

樂を奏し 巴一八一
掛帶
心――の引きかへし 八六六
禪――引きかへてたた子か 三輪九八四
八幡に祈り――の 富士上歌七〇一
掛川(静岡)
岸邊に波を―― 賀茂物七五四
〔景清〕 六二一
景清 景シテ六二一・大佛ツレ一七四二
景清
惡七兵衛―― 景六三三・大佛一七四五・八島三二五一
八島にて――が御高名 景六四三
景清これを見て 景上歌六四五
景清の母 大佛ツレ一七四二
影屏を動かすなり 三山一九〇四
影さへ見ゆる山の井の 姿三三三六
かけし頼みはあだ波の 佛八六八
影白河の水汲めば 植女第六三五
かけず
諸膝――流れてかつぱと倒れ 鍋戸二三七三
かけずたまらずつつと射通し 摂一六六二
景季 旅シテ五〇五
景季
源太―― 盛五一〇
名をとめし主は花の――の 旅五一一

蒂頼みおはしませ 巴四一
懸路
岩の――を違ひ給ふ 紅二〇八四
懸路の末を尋ねかかる 飛雲二六一四
懸路の梯も晴れ晴れこ 嵐三三九六
かけて
木曾の梯――たに思はぬ 作一七〇
かけてぞ頼む同じ世に 松風六八三五
かけても知らぬ身の行方 千一七〇一
景時
梶原平三―― 盛五一〇
渡邊にて――が申しも 八島三二六〇
景時がその讒言の水上を思へば 吉野八五
影ともにわれも都を下り月 築上歌三九七
掛緒
くり返す日の韵紙の――の 土井一九七五
薩野
草の――の露の世を 江口四七六
山の――の道すから 東九七一
影はさだから霜夜にて 三月第一九九八
影恥かしきわが姿 檜垣上歌一八六
影は二つ
月は一つ――滿つ汐の 松風六八九
筧の水
巣竹の――はかかるとも 經二〇八七

蔭踏む道に休らへば　右三四三
蔭踏む道に行きかふ人も　九世九二三
蔭踏む道は末もなく　遊三一九六
かけ水を汲み乾さばに　檜三六三三
影身になり給へ　元一〇八五
影身の如く馴れ馴れしに　初二五七五
影身を離れず弓矢の力を添へ　蔵九六
影珍しや客人の　雷三三三五

カケリ
　蘆四九・碇二六〇・浮三三三・歌三六六・高野六〇七・賀茂物七五〇・櫻一二三〇・俊成一四四五・隅一五二一・蟬一六八〇・忠度一九一九・玉葛一九六七・田一九九九・經二〇九一・花筐二五八六・雲雀二六〇三・雲雀二六四三・通盛二九〇八・水無月二九四〇・三山二九二三・三井二九九六・八島三一六一・夜三二七五・籠三三九五・烏三四三六・女三五〇一

かげろふ
　あるかなきかに――の　經二〇八七
陽炎稻妻水の月かや姿は見れども　熊坂九四五
かげろふ姿
　木の間の月の――となり　六浦三〇一八
かげろふのあるかなきかの心地して　鐘一四五三
かげろふの石山寺を伏し拜み　田一九九八
蜻蛉の身なるべし　源氏一〇三九
かげろふの小野の　生二七三
かげろふ人の面影ありと見えつつ　小鹽三四六三
かげろふ人は如何ならん　江口四七八
かげろふ夕月の　山三一七四

懸緒
　三色組の烏帽子――取り出だし　烏三四二一
我劍降鬼　皇九九七
かこちかこたるる形見ぞつらき　湯八四九

かごと
　現なき花筐の――とや　花筐二五九〇
人の――を御用ゐありて　雲雀二六四八
草葉の露の――をも　紅三〇八七
かごとはかりに散りそむる　卒一七一〇
かごとばかりに散る花を　櫻一三三七
かごい名の弓矢の道　木曾八一七

笠
　肩上の――には無影の月を傾け　鶉六九三
吳山にあらねど――の雪の重さよ　竹雪一八八四
御侍御――と申せと詠み　蟬一六七七
笠置の解脫上人をば次郎と頼み　春日六七二
風車　敦八九五一

鵲
　紅葉の橋の――　善知三一九
より羽の橋か――の行き合ひの　船橋一七六五
鵲一つ飛び來り陳氏が肩に　松山鏡一八七九
鵲も有明の月の笠　蘆五四

かざし
　しをりして花を――の袖ながら　小鹽三四五八
立ち舞ふ袖の――かた　蘆六一
八少女の袖も――の玉かづら　松尾三八五一
折知る春の――とかや　西王一五七〇
かざしぞ多き花衣　百三六七八
かざして行かん見ぬ人のため　藤三七三七
かざしの袖を引き引かれ　小鹽三四六

かざしの花
　臨時の祭には――を賜はる　宗貞月三九四五
かざしの花の手向草　和三〇三五
かざしの花もうつろふや　百九九四
かざしの花もしをしをと　羽一四八九

笠印
　この花郎も――となりて　五二〇
笠に蓑　通小七七〇

蓑の衣
　山吹の――を懸け給ふ　胡一四八
蓑の衣の下こがれ　源氏一〇三四
笠の段
笠は重し吳山の雪　鶉六九
風早の三保の浦わを漕ぐ舟の　羽一聲二四八六

笠松
　輪田の――　善知三九〇
笠も見苦し風折烏帽子　通小七七

風折り

立烏帽子を―― 卒一七三九
柳色の狩衣も――も [illegible]三〇四
風折召され [illegible]三二三
風折烏帽子 [illegible]三・通小七七二・[illegible]七五三・草子一一九七
かしけ
嬋娟たりし兩鬢も膚に――て 卒一七三六
かしこう御身討たすらん [illegible]三五一一
かしこうぞ長生して 實一三四八
賢き古の世もたけ心さえて道ある 松蟲二八六五
畏き君の勅を受け [illegible]第二九四
畏み畏み申す 内三七五
我此道場如帝珠 [illegible]三四四
柏木の及びなき戀路も [illegible]三〇三
〔柏崎〕 六四九
柏崎（[illegible]） 柏崎六四九
柏崎殿の御内に 柏六五一
かしはでの公成 三山二九一七
香椎
襟――貞子葉椎 通小七六五
香椎博多をうち過ぎ 藍二三七
鹿島（茨城）
神樂の役々は住吉――諏訪熱田 大[illegible]五八四
かしましかしまし 景六三九
鹿島野（茨城）
この程の宿――の草枕 野守二四三三

東を知るも――や 佐一三六八
鹿島の神[illegible]夜の何業 [illegible]三四五五
鹿島の神[illegible]何業 右三四一
鹿島の明神
伊奈佐の速玉の神常陸――と 大[illegible]五七九
鹿島三島諏訪熱田 [illegible]三四八〇
呵責
あはうらせつの――も [illegible]一九八
呵責の詞
閻魔法王の――を聞く [illegible]六四
呵責の聲のみ恐ろしや [illegible]八七七
呵責の責も隙なかりしに 天一一四[illegible]
呵責の責も隙なくて [illegible]三
頭の雪
受けて――とのみ 賀七三九
頭は猿尾は蛇足手は虎の如くにて 鵺三三八六
歌人（ウタビトをも見よ）
見れとも――の知ろし召す 代一四八一
わが身にあたらぬ――さへ 草子一一九一
我身敬禮三寶前 [illegible]三四四
歌人の家には知る 求三〇六九
歌人の家の木の實には人丸の 通小七六五
嘉辰令月
天長地久――の 御二九六三
嘉辰令月とはこの時 春榮一四一七

春日（奈良）
伊勢石清水賀茂―― 日[illegible]四八〇
よりこ[illegible]見れば――なる三笠の山 谷一九四四
春日大明神御寵愛あつて 第△一七七三
春日の御山
今は――こそ卽ち靈鷲山 春日六七二
春日の里（奈良） 采所三九五・春日所六六七
野守所二四三一・佐一三六七
春日の里
神も敬への牡鹿鳴く――に 大佛一七四六
奈良坂や――に 采三九七
奈良の京――に知るよしして [illegible]六五
春日の局 小[illegible]五
春日野に起き臥すは鹿の苑 春日六七四
春日野に若菜摘みつつ萬代を [illegible]九
春日野の寺 采三九八
春日野の飛火の野守出でてだに 小袖一一三三
春日野の飛火の野守出でて見よ 佐一三七・[illegible]六
春日野の飛火の野守出でて見れば 野[illegible]四四
春日の野山金色の世界となり 春日六七七
春日野の雪間を分けて生ひ出でくる 采二六〇三
春日野の若紫のすり衣 小鹽ク七三四六七
春日の祭の勅使 [illegible]五
春日の明神
御暇乞の爲に――に參らばや 春日六六九
慈悲萬行の大菩薩――の御作 [illegible]

春日の明神は氏の神にて　佐一三六六
春日のみやつこ　大佛一七五三
春日祭にあらばこそ　大佛一七五三
春日山(奈良)
　松にも花を　[illegible]四〇一
　御影を四方に　靡き恵みの　佐一三六八
　牡鹿伏すなる――　[illegible]八九四
春日山本宮の峯に影向　[illegible]三九九
〔春日明神〕　六六七
かすけ毛月毛額白　[illegible]三五六三
數ならでなにはの事もかひなきに　住一四四七
數ならぬ身には思ひのたかれかし　[illegible]一六五五
數ならぬ身にはたかたか恐れなし　小袖一一三九
數ならぬ身ほどの山の奥に來て　紅三〇八五
數の御寶を奉らせ給ふ　綸三四四三
數の寶に代へ　唐一八一〇
數の寶を集め　鳥三四一五
數の寶を下さるる　天三一四〇
數の外の宮　須一四九七
霞
　天の原ふりさけ見れば――立つ　羽一四九〇
　都をば　　とともに立ち出でて　班三六〇〇
霞うながす信太の浮島　櫻一三一三
霞立てば遠山になる朝ぼらけ　葺子一一九八
霞に遠き眺めかな　龍虎三三六二
霞に紛れ雲に乗り　大[illegible]三五六一
霞にまぎれて失せにけり　羽三四九五
霞の網にかかり目路もなき　雲雀二六四七
霞うちの錦櫻ひとへに惜しき　泉九九一
霞の奥の高野山　高野ワキ六一三
霞の衣
　佐保姫の　と詠みたれば　佐一一七一
　緋緒の　のにほやかに　賀茂物七五五
霞の衣きて見れば　[illegible]一七三六
霞の衣緯薄き　佐一三六九
霞の關(東京)
　春立つや　を今朝越えて　東北三一九一
霞の間には樺櫻　櫻一三三八
霞の小舟こがれ來て　八島三一四七
霞をあはれみ露をかなしめる心　櫻一三三七
霞む外山の櫻狩　雲雀二六四一
霞める空に歸る雁の　高野六〇七
風
　宮漏高く立ちて――北にめぐり　砧八三三
　五塵六欲の――は吹かねども　江口四八五
　五日の――や十日の雨　東北三一八〇
　月すさまじく――高うして鶴　櫻一三三六
　澗樹緑に　を含む　櫻一三三六
　東南に雲收まり西北に――靜か　[illegible]一三九八
　時知る　にたち渡る　現一〇一三
　虎嘯けば――生ず　龍虎三三六七
　鳥三寶を念じて、――常樂と音づる　大會一七八〇
　猛虎深山に　を起す　龍虎三三六六
　柳の髮をも　は梳るに　[illegible]一六八〇
　柳は――に欺かれて緑漸く垂れ　[illegible]六一三
　夜寒を――や知らすらん　砧八三三
風一聲の秋の空　天三一四三
鹿(かせぎ)
　思ひは山の――にて招くと更に　通小七六八
　姿こそ山の――に似たりとも　小鹽三四五九
風歸帆を送る萬里の程　白樂一四六五
風狂じたる秋の葉の　[illegible]三六〇四
風狂じたる心地して　[illegible]八三四
風狂じたる心かな　高野六〇七
風枯木を吹けば晴天の雨　[illegible]・[illegible]三〇八六
風寒しとて衣うつ　[illegible]三一四
風常樂の夢を破る　中三一八〇
風たちばなの香をとめて花も[illegible]たる　[illegible]一六八四
夏雪
　林間に向つて　をなし　[illegible]一三八六
鳩背杖にすがり　玉井一九八[illegible]
風に隨つてえめぐるが如し　放三六四
風に漂ふ浮舟の　[illegible]一七四八
風にちぢめる枯木の　[illegible]三六[illegible]
風に散り水には浮かむ落葉　[illegible]一五八三

風に出船の習ひ　櫻二〇三四
風に任する浮雲の　花女第一〇〇〇
風に瞬く燈火の、　夕三一五
風の音水の音もおのづから諸法實相　身二九五五
風の狂ずる
　人の心の花ならば——散も　[illegible]
風の狂ずる心亂れに　三山二九三三
風の氣色
　月の色——　[illegible]
風の心地
　かりそめに——と仰せ候ひて　柏六五一
　母御の——にて　谷一九三九
風の心地を尋ねん　上蜩三〇五七
風の誘へば一葉も散るなり　斑二六〇四
風のたよりと思へども　斑二六〇七
風の前の雲
　一生は——　鐘一四五[illegible]
風の行方の便りにも　砧八二九
風の行方をしるべにて　松山天狗第六八八五
風茫々と物凄き　芭二五四三
風は上なる松本や　繪道行三四四三
風は空廊の箒となつて　大會一七八〇
風破窓を射て燈火消えやすく　芭三五三三
風は大虚にわたる　殺一六四三
風は吹けども山は動ぜず　淡一五[illegible]

迦葉阿難の大聲聞　大會一七八五
風吹かぬ間もあるべきか　墨一五〇九
風吹かば如何にせん花に宿る露　[illegible]
　[illegible]一六五五
風吹けば沖つ白波龍田山　井三四〇三
迦葉世尊西天に出世し　[illegible]一四六八
風まくり　島三四三七
風向ふ雲の浮波立つと見て　[illegible]四八七
風結ぶ涙の袖の玉だすき　昭一五八二
風も嘯く寅の時　老五三一・金八七五・巣九八六
風も枝を鳴らさぬ　[illegible]三八五一
風も音せぬ春べかた　[illegible]四七
風も靜かに楢の葉の　[illegible]第八七〇・[illegible]
風も涼しき旅衣　[illegible]九二〇
風もつらし
　花も憂し——　櫻一三三八
風もよきて吹き水も影を濁すな　[illegible]
風もをさまり雲靜かに安全をなす　[illegible]四〇八
風繚野に收まつて蟠條直し　[illegible]
風旅人の夢を破る　一角二七八・歳七九四
風を逐つて潛かに開く　老五三五
歌仙の歌に時知らぬ山は　富士山二六八九
父母に逢はせ作り　[illegible]一九七八
我則歡喜
　誓くも保つものは——して　身二九五四
父の神　[illegible]一九七九

數へ
　舞うては——　花一〇〇九
かた絲
　歸らん事も——の一筋にただ　竹生一八〇三
　又いつか歸らんことも——の　[illegible]一六〇四
[illegible]　[illegible]
[illegible]道に[illegible]者たり　[illegible]
片思ひ
　契りあさ衣の——　梅枝四四六
敵大勢ありとても　鉢二五六〇
敵と見えしは群れゐる鷗　八島三一六三
敵の前のたふれ　[illegible]三一三六
敵の所[illegible]の恐ろしさに　[illegible]
敵は[illegible]勢われ等は一人　[illegible]一〇七七・[illegible]
敵を討つは父が偽りを[illegible]思はぬ　[illegible]
敵を[illegible]れんとの出家　[illegible]
かたし貝
　かひも渚の——あはぬ思ひを　[illegible]二〇一四
片敷きの袖ふれて月に明かさん　小督二一〇四
かたしくや森の木蔭の苔衣　[illegible]四一六
かたじけなさに涙こぼるる　巴二三七八
形代
　補縄が——を巻き縛り　[illegible]
形代を調伏し給ふ　[illegible]二一九
肩過ぎぬ

くらべこし振分髮も—— 井三四〇七
かたそぎ
　千木もかまず——も反らす 第一七七〇
　御垣もつづく——の 岩二九一
かたそぎ造りの社 木[illegible]八二〇
片そぎの寒き世のためし 卷三八一〇
形はさながら山彦の聲ばかりして 鐵一四五四
形を求むれば苔底が朽骨見ゆるもの 朝三三六四
交野に狩り暮れて春見し花の 住一五四〇
交野の狩場の吹雪 [illegible]三九三
交野の御野禁野につづく天の川 雲雀二六四一
肩箱
　雨皮——とりつけて 安宅八八
かたへ涼しき風ぞ吹く 水無月二九四一
かたへ涼しき川水に 放生二四六六
形見
　母御の御—— 藍二三三九
形見こそ今はあだなれこれなくは 柏六六〇
　班二六〇九・松風二八三五
形見こそたなかか憂けれこれなくは 清八四九
かだみて魚はよもためじ 鵜飼三〇六
形見と名づけそめし事 花筐二五九四
形見に過ぎたる事あらじ 富士太鼓二七〇三
形見には手跡に勝るものあらじ 夜三三六八
かたみの扇手にふれて [illegible]二六〇五

形見の鏡に不死藥を添へ 富士山二六八八
形見の鏡破りて綺光ぞ殘る 松山鏡二八七九
形見の品々を持ちて二人ながら 夜三三六三
形見の品々を持ちて古里へ下れ 蟬一六九一
形見の太鼓形見の衣 梅枝四四一
篋の德 花筐二五九四
形見の直衣身に觸れて 井筒四二一
かたみの舞
　人間の御遊の—— 羽[illegible]二四九一
形見に人の亡き跡の思ひの種 夜三三六八
形見よとて玉の釵取り出で 楊三一二〇
形見を贈りし例には 夜三三六七
形見を向くる[illegible]づれは [illegible]六五三
傾く嶺の雲雀山 雲雀山二六四一
傾くる盃の影をたたへて 猩一三五〇
かたらはされ
　大師坊に—— 大江五六一
語るもよしなや 碇二六〇
片輪
　盲目の足弱車の——ながら 弱三三二〇
片輪なる身の癖として 景六四〇
片岡(人名) 安宅八二・吉野静三六八六
片岡山の裂を路生に弘め給ふ [illegible]子一一八三
かたをたみ
　寄せては歸る—— 松風二八二八

かたをたみ蘆邊をさして行く田鶴 [illegible]三四四
かたをなみの蘆邊をさして田鶴 [illegible]二四
肩を結んで裾にさげ 百二六七四
片折戸したる所 [illegible]一〇九九
加持
　祈り——して 葛六九六
　行者は——に参らんと [illegible]一六五
加持を静め[illegible]を調へて [illegible]八九九
徒歩路
　[illegible]の—— [illegible]三四八
[illegible]の葉もろき露涙 [illegible]八三
徒歩跣足
　君を思へば—— 通小七〇
　旅を[illegible]の—— [illegible]四六
徒跣にて参り [illegible]二六九
梶原
　諸司の別當——父子 謡二一三
　渡邊にて——が逆櫓の意見 [illegible]一五八
梶原が讒奏により [illegible]一六[illegible]
梶原が申し事 [illegible]八五
梶原源太 [illegible]七[illegible]
梶原の二度の懸 [illegible]五一五
梶原平三景時 [illegible]五一〇
楫枕
　馴れし汐路の—— 三井三〇〇二

褐袍せめては月を松風の　[illegible]六八
褐唐綾小櫻威　鉢△二五六三
かつ色見する梅が枝　[illegible]五二三
勝つ色見せたる梅が枝の　田一九九九
渴仰　嵐二〇六・[illegible]太一〇六六
かづき上げすくひ上げ　鵜飼三〇六
かつ消えかつ結んで　養三一三五
かづきの海士　海一七四
かづける衣は紅葉襲　雲林四六八
羯鼓(舞)　花一〇〇八・自一三四四・藤榮二一六〇
羯鼓(器)　東岸二一七五・放下二四四九・望三〇五四
鉦鼓——や絲竹の　吉天三三九五
身を捨舟に、——を打ち　鳥三三九六
羯鼓と鳴子を飾りたる舟　鳥三三〇一
羯鼓の撥を大きに拵へ　藤榮二一六〇
羯鼓を打つて　自一三四三
上總の介
三浦介——兩人に綸旨をなされ　殺一六四五
喝食
東岸居士と申して——の　東岸△二一六七
渴しては銅汁を飲む　歌三六六
甲冑
瞋志の——　朝三三七三
體玉は黃金の——を帶し　一角二八四
法體の身にて——を帶し　賴三三〇八
甲冑を帶し兵具いみじく見え給ふ　通盛二九〇六
甲冑を帶し見え給ふは　八島三一五七
かつて
三吉野の——知らすな　吉[illegible]二八四
勝手神(奈良)　嵐ツレ二〇一
勝手木守とて夫婦の神　嵐二〇七
勝手の御前
三吉野——　二人三七一三
勝手の社(奈良)　二人靜三七一一
勝手八所　國九〇五
かつぱと倒れどうと伏す　錦戸三三七三
かつぱと轉びけるが　鳥三四三八
〔合浦〕　六八一
合浦の浦(支那)　合所六八一
〔合浦の玉〕　合[illegible]六八一
合浦の玉とても寶珠の外に　岩二八九
桂(京都)
梅津——の色々に　松尾二六四七
桂(木)
月の——の光添ふ　玉井一九七五
湯津の——の樹あり　玉井一九七四
葛
定家の執心——となつて　定二一〇八
野邊の——のはひ廣ごり　志一三九七
〔葛城〕　六八九
葛城(奈良)
大峯——に參らず候程に　野守二四三三
君——の峯の雲　定二一一〇
しもとゆふ——も同じ神山の　代一四八四
よそにのみ見てや止みなん——や　谷一九四三
〔葛城賀茂〕　代[illegible]一四七七
葛城賀茂明神(奈良)　代[illegible]一四七七
葛城高間よそまでもあるまじ　[illegible]九九九
葛城の王勅に從ひ　[illegible]七四〇八
葛城の神　葛シテ六八九
葛城の神姿恥かしや　定二一一七
葛城の神の苦しみ盡き難き　葛六九七
葛城の神の契りの夜かけて　紅三〇八七
葛城の賀茂の神垣時を得て　代[illegible]一四七九
葛城の明神は當社御一體の御事　代一四七八
葛城や斯りし久米路の橋は如何に　[illegible]二七五八
葛城や木の間に光る稻妻は　葛クセ六九五
葛城や高間の山　花一〇〇九・[illegible]六四六
葛城山(奈良)　葛所六八九・谷所一九三七
葛城山
神の昔の跡とめて——に　葛六九一
標結ふ——に降る雪は　葛六九五・代一四八八
葛城山に年を經し土蜘蛛の精魂　土蜘二〇六五
葛城や夜造るなる岩橋ならば　船橋二七五八
桂子　三山シテ二九一一

桂子
耳成山の女の名をば――といはれ　三山二九一六
桂子思ふやう　三山ク七二九一八
桂の池（福岡）　鵜一九〇
桂の枝々に光を花と散らす粧ひ　雜三三三
桂の御祓ひ白木綿かけて川波の　野宮二四一三
桂の川（京都）
月の――瀬舟漕ぎ行く人は　卒一七三一
桂の木の蔭こそ昔の姨捨の　鸚三四七五
桂の椅柱
寺は――。　熊野三三五一
桂の黛
玉のかんざし――。　玉井一九八三
桂の黛青うして　卒一七六六
桂の黛丹花の唇　楊四〇三
桂の黛も落ちぶるる涙の　定三二一六
桂の黛羅綾の衣　一角二八〇
桂の眉も霜降りて　檜二六三二
桂は實る三五の暮　三井二九九七
門（モンをも見よ）
老いせぬ――に出で入るや　玉井一九七五
門の外法の車の音聞けば　東北二一九八
かどはされ
人商人に――てかやうに　隅一五二七
門は葎や閉ぢつらん　三輪二九七九

門守神
門守の神　雨經言三二七・九世注言九一九
あらはじきの神と申す――　雨△三三五
九世の戸の文殊に仕へ申す――　九世△九二七
門守の神までも悉く　第△一七七三
縑の衣
鹽焼き衣色かへて――の空焼　松風二八三四
門脇殿の二男能登の守教經　碇二五四・攝一六六一
鐵履を踏ん脱ぎ捨て　烏三四五七
かたくりすつるみての袂　頭一六八一
悲しみ早く來れり
樂しみ既に去つて――　鐘一四五三
悲しみの至りて悲しきは生別離の心　谷一九四八
悲しみの思ひは世々をひく　東岸二七四二
かたしみの袖は空しくなり　土車二〇七三
悲しむまじき身を歎き　天二一三八
叶はぬ命葉かんとて　鵜飼三〇三
叶はぬ母
われ等――にただに面白しと　錦二三〇
かなはねばこそ憂き世
思ふ事――。　安宅九九
鼎
殘星の――には北溪の水を汲み　檜二六三二
鼎には青山數片の雲を煎ず　一角二七九
〔鐵輪〕　七〇三

鐵輪　鐵七一一
頭に戴く――の足の
我朝時鳥現清淨光明身の床の上　身三九五〇
鐘
暮れそめて――や響くらん　道成一七九四
觀音寺の――の聲　道明一八三三
後夜の――を撞く時は是生滅法と　三井三〇〇〇
初夜の――を撞く時は諸行無常と　三井三〇〇〇
月にや――は冴えぬらん　三井二九九八
秀鄕龍宮より取りて歸りし――　三井二九九八
發願の――の聲　誓一五五六
夕の――の聲々に稱名の御法　誓一五五三
尾上の――も響くたり　高砂一八六〇
鐘うち鳴らし念佛す　誓一五五七
かね金山（支那）　望一三五〇・大般若一七五九
かねこと
僞りたりつる――かた　清八四六
色衣のつまの――　東三六〇八
その――もあらじかし　仕一五四六
人心頼むかひなき――かな　水無月二九四一
かねてよりかくあるべきと　富士太鼓二七〇四
鐘撞き鐘夜は跡に　白鬚一九〇七
鐘の供養を致さばや　道成一七九一
鐘の聲
關寺の――諸行無常と聞く　關寺一六一九

長樂の——は花の外につきぬ　三井二〇〇一
更け行く——までも　谷一六八九
菩提の道の　三井三〇〇〇
待つ宵に更け行く——聞けば　三井三〇〇三
法寺の——も聞えず　蝶二一六
鐘の聲諸行無常となり　[illegible]三五三六
鐘の聲
半夜の——は客の船にや通ふらん　三井三〇〇二
鐵の棒
杜杖にあらざる——　熊坂九三六
鐘は寒雲を隔てて聲の至ること遲し　熊野三二五一
鐘は卽ち湯となつて　道成一八〇〇
鐘は銘東大寺形平等院聲園成寺　三井△二九九八
〔兼平〕　七一五
兼平　兼シテ七一五
兼平
今井の四郎——　兼七二五
兼平申すやう後より御敵　兼ク七二七
兼房　攝ツレ一六四七
兼房
十郎權の頭——は判官殿の　二人二七一七
増尾の十郎權の頭——　攝一六五六
兼房申すやう　八島三一六〇
鐘もただ鳴れ夜も明けよ　通小七七一
鐘を枕の上に聞く　鵜飼二九九九

鐘をも待たぬ別れ　西行一一七九
彼の岸に到り到りに　[illegible]七五一
彼の岸に到り到りて樂しみを極む　[illegible]一五六三
彼の岸に到り給へや　東[illegible]二一七〇
彼の岸に渡してたばせ給へ　兼七三六
彼の岸の臺に到り給へ　[illegible]一四四一
彼の岸の海際に浮かみ出て　[illegible]三四七
香の來ること疾し
花は流水に隨つて——　熊野三三五一
彼の國
一念十念の間に——に迎へ取る　土車二〇七八
深き教への——に安く到らん　[illegible]一〇六五
彼の國近き極樂の　[illegible]九七
彼の國に迎へつつ　[illegible]六六三
彼の國へ行く法の船　實三三四七
鹿子斑に雪の降るらん　富士山二六八九
鹿の子斑や群山の　小袖一二三八
かの昭君の黛は　昭上歌一五八一
かの蟬丸の古　[illegible]上歌三〇四九
狩野源六　蟬ツレ一六八九
狩野の介宗茂　千一七〇一
かの松浦佐用姫が　七騎上歌一三一五
かの岡に草刈るをのこ心して　錦木二三四九
かの岡に草刈る男野を分けて　敦一三六
川風寒み千鳥鳴く　谷一九四四

川隈　[illegible]四八
見え隱れなる——に
川越の重房が手に渡り　千一七一〇
川崎の御堂　[illegible]
樺櫻
霞のうちの——ひとへに惜しき　[illegible]
霞の間には　櫻一三三八
河島の行末は淺瀬の道に　[illegible]
川逍遙
江口の君の——の月の夜舟　江口四八二
河瀨の石を拾ひ上げ　鵜飼待謠二〇八
河瀨の様なる所　藤戸二七四三
川瀨舟
月の桂の——漕ぎ行く人は　[illegible]一七二一
川そひ柳朽ち殘る　遊三一九六
河竹
憂き節しげき——の杖柱とも　[illegible]七四五
河竹の流れの身　[illegible]九九
河竹の流れの女　江口四八四
河内の疊紹　熊坂九四一
河内の躬恒　草子一二八七
蛙
相宿りする——の聲　[illegible]四四九
花に鳴く鶯水に住める——まで　白樂二四七六
河津(祐泰)

あれ見よ――が子どもこそ　小袖一二三五
御身の父――殿は　詞二二二四
六萬遍の念佛父――殿に回向する　小袖一一三六
河津殿より仰せ出ださる子細　元一〇八一
河津の三郎が子に一萬箱王とて　望三〇五一
河津の三郎が末の子久上の禪師　[illegible]一六九六
河津の三郎祐泰　夜△三三七〇

屍

　龍門原上の土に――をば曝す　七騎一三一〇
骸の跡を思へただ　元一〇八九
骸を爭ふ猛獸は禁ずるに能はず　女三四九八
骸を爭ふ猛獸は去つてまた殘る　求三〇七三
屍を失ふぐはくは秋風に嘯く　生二六八
骸を白沙に埋んで日月の算を經　海一八五
屍をば愁歎の焰に焦がせども　東岸二一七三
川のつまり　鵜飼△三〇七
川橋や礬石に押され　船辨二七六〇
川舟に召され野間の內海へ　朝三三六三
川舟をとめて逢瀨の波枕　江口上歌四八一
川柳は水に揉まるる　放下二四五〇
川淀近き山陰の香もなつかしき　二人二七一九
河よりをちの夕煙　[illegible]一七

瓦

　さ丹塗の軒の――の鬼の形　山三一七八
都府樓の――　道明一八三三

河原おもてを過ぎ行けば　[illegible]二四七
土器
　淺香山の言葉は采女の――とりどり　[illegible]三三三
　采女なりける女の――取りし　[illegible]四〇八
河原太郎兄弟　[illegible]△五一五
變らぬ契りを忍ぶ草の忘れ得ぬ友　松蟲二八六三
變らぬ友こそは買ひ得たる市の　松蟲二八五七
變らぬや氷室の山の深綠　[illegible]二六六四
河原の大臣の御例とて　住一五四二
高良の神　弓シテ三三二一
河原の宮居末早き　竹生二〇三三
河原院(京都)　融所二二九
河原の院こそ鹽竈の浦候よ　融三三三三
河原の院と御覽せよ　夕三二一三
代り
　烏帽子の――は定まりて候　烏三四三三
變る姿の衰へは　木賊三三一六
代るに代るものならば　[illegible]九九四
變るを以て期とせり　[illegible]二六二一
下郛(支那)　張所二〇四三
かひあるべきは空しくて　[illegible]一五三一
かひこ
　鶯の――化して少女となり　富士山二六八八
　鶯の――の中の子規　[illegible]二五九
かひごを出でて程經れば　初二五七五

下郛といふ所に土橋あり　[illegible]
かひなき命助かり　[illegible]
飼ひに飼うたる馬に乗り　[illegible]
かひもたぎきの浦千鳥　[illegible]
かひも渚のかたし貝　[illegible]
伽毘羅衞に契りし事のかひありて　[illegible]
耿々たる燈火も　[illegible]
兜にかはる兜巾を着　大江[illegible]
兜の錏
　後より――を摑んで　[illegible]
　三保の谷が着たりける　[illegible]
　三保の谷が着たる――を摑んで　八島三一五二
兜の星の影　八島三一六二
兜の緒をしめ　[illegible]
兜の緒を引きちぎつて　[illegible]
兜二はね　碇二六一
甲冑の亭主　[illegible]
兜を脫いで矛を伏せ　[illegible]
兜をぬぎ[illegible]を伏せ　[illegible]
甲に三極を備へ
　萬代の池の龜は　[illegible]
[illegible]の菩薩
　極樂の――となり　[illegible]
　極樂の――の御法とは　[illegible]
　胡蝶も――の舞の　胡一一五三

[illegible]に[illegible]の——の化現　[illegible]六二四
歌舞の菩薩満々に　[illegible]三〇七六
歌舞の菩薩となり　[illegible]二二九八
歌舞の菩薩の[illegible]にあたり　[illegible]一八五一
歌舞の菩薩の[illegible]の袖を　[illegible]三〇四
[illegible]
　御上臈の　[illegible]八二三
歸さ
　母が——を待ち給へ　藍二三四
返す返すも約諾し　大會上歌一七八三
返すたゝ波の花散る白衣の袖　須[illegible]一五〇三
返す[illegible]袖を月や知る　雲林四六九
返すや夢の黄楊の枕　雲林四六九
楓
　本堂の庭に——の候か　六浦三〇一〇
楓の[illegible]　六浦[illegible]三〇七
壁に耳岩の物いふ世の中　小鍛上歌一二一六
かへらぬは昔とまらぬは心づくしよ　[illegible]八五三
歸らぬはもとの水　[illegible]七八
歸らば連れよ[illegible]の夜　女三四九九
かへり打つ
　[illegible]の[illegible]は——　[illegible]一五三九
歸る嬉しき古里を　望次第三〇四四
歸る嬉しき都路に　賀茂物次第七四八
歸るさ知らぬ[illegible]衣　[illegible]三一九

歸るさになりぬれば　[illegible]一六七八
歸るさには[illegible]をなし　[illegible]八五四
歸るさの心をとめて出づる日も　谷一九四三
歸るさ名残[illegible]の　[illegible]三六〇〇
歸るは孝行留まるは忠義　[illegible]九一八
歸る山(福井)
　暇申して——の　小袖一一三八・山三一八三
　それは越路に——　蟬一六九一
かほく
　角は——眼は日月　[illegible]二九〇
卜北面　[illegible]一六〇
かほど妙なる御事を　身上歌二九五三
かほどまで便りなき身を　[illegible]上歌二九二九
かほどめでたき花の徳　墨クセ一五一三
顔ばせは憔悴と衰へ　[illegible]一六
かほよ鳥の鳴きうつる[illegible]まで　[illegible]三六四六
顔佳花　[illegible]六一〇
薫中將
　浮舟は——の假初にする給ひし　浮三一六
鵞毛
　雪は——に似て飛んで散亂し　[illegible]一五五〇
鎌倉([illegible])　[illegible]二五四五・[illegible]一〇九
鎌倉
　花——にて　柏六五一
　星月夜は[illegible]——に　[illegible]二〇八

義經を——へも入れられず　[illegible]
鎌倉入り
　大名小名是を[illegible]　[illegible]
鎌倉[illegible]　[illegible]
鎌倉[illegible]　[illegible]
鎌倉殿([illegible])
　星月夜——の　小袖一一三八
鎌倉殿に參りけり　[illegible]三一〇五
鎌倉殿の[illegible]　[illegible]三一一
鎌倉殿の御内に　千一七〇一
鎌倉殿より揃め揃つて參れと　[illegible]一六九六
鎌倉殿より大名十人附け申され　正一三五八
鎌倉に御大事あらば　鉢二五六〇
鎌倉に渡さるる　千一七一〇
鎌倉の中納言[illegible]の[illegible]　[illegible]
鎌倉へこそ上せけれ　[illegible]一六九七
鎌倉へ[illegible]上る　鉢二五六四
鎌倉山([illegible])
　星月夜——に入りしかば　千一七一〇
　星月夜——を越え過ぎて　[illegible]
　六浦のわたり——　鵜飼二九九
鎌倉山の[illegible]　[illegible]三〇九八
鎌倉山[illegible]　[illegible]
鎌倉より早打立つて　春榮一四一〇
鎌倉より[illegible]立つて　[illegible]二〇〇五

鎌田殿と仰せられし程に　朝三三六三
鎌田兵衛正清の妹　烏三四三
かまひて靜かに召され候へ・・　隅一五三六
かまへて御參り候な　雷三三三七
かまへて御身をよくよく愼み　大佛一七四九
かまへて御覽じ候な　安達二一四
構へて味方を戒め　木賊八一九
かまへてよくよく屆け給へ　二人三七一五
鎌を持つて岩間を傳ひ　和三〇三八
我慢增上慢心の便りを得ん　善界一六〇〇
我慢高雄の峯に住んで　鞍九九九
我慢の旗矛の靡きもやらで　善界一六〇二
神
山河海村野田殘る方なく――のます　大社五七六
澄み濁るをば――ぞ知るらん　船辨二七七〇
隔てぬ心は――ぞ知るらん　正一三六五
佛と現じ――となり世を守り　巴三八〇
佛も――も同一體　大佛一七五三
三十一文字の――も守護し　志一三九八
髮
荊の――も結ぼほれ　定二一一〇
氣霽れては風新柳の――を梳り　實一三五九
綠の――は空さまに生ひのぼつて　蟬一六七九
見る度に心づくしの――なれば　清八四七
柳の――をも風は梳るに　蟬一六八〇

神あげのお山に上らせ給へば　大社五八六
神遊び　賀二〇九
天の岩戸の――　弓三三九
樣々色々の――今も絶えせぬ　大社五七九
月住吉の――　高砂一八七三
八百萬の――これぞ神樂のはじめ　三輪二九八七
神有月
今月は――とて諸神影向なり　大社五七五
神歌
謠ふ榊葉の――　佐一五四三
榊葉の――　御二九七一
神歌の一節さをの歌とや　佐一三七八
上雲上の月卿より　弓クセ三三八
神垣しどろに木綿四手の　綸三四五一
髮かき撫でよそめ思はぬ氣色　蟲二四一
神垣はしるしの杉もなきものを　野宮二四一〇
神樂　翁九
神かぐら
袖を飜して――　内三七八
空澄み渡る――　杜五三三
久しき代々の――　高砂一八七一
拍子を揃へて――　色一三〇四
神かぐらの手の舞足踏拍子を揃へ　右三五〇
神隱れにぞなり　葛六九八

神隱れになりにけり　賀七四〇
神かけて變らじと契りし事も　船辨二七七五
神が瀬
山のべの御井を見かへり――の　御二九六四
神風
三吉野の――あらば　嵐二〇七
小忌衣の手風――に吹き戻され　白樂二四八一
神が瀬とて神の渡瀬のあればこそ　御二九六四
神風に心安くぞ任せつる　第一七七一
神風の一もみ揉んで　歌三六七
神風や五十鈴の古き末を受くる　國八九三
神風や伊勢と申すも　御二九六四
神風や伊勢の内外の鳥居　野宮二四一九
神風や伊勢の濱荻名をかへて　歌上歌三五六
神風や伊勢の濱荻折りしきて　御ワキ二九七一
神風や伊勢の宮居　内一二七三
上京邊に住居する者　飛鳥六六
神氣が添うて現なくなり　歌三六三
神氣とて面色變り　歌三六六
神慮(神心)
誰とても隔てはあらじ――　竹生四一四
塵に交はる――三笠の森の　春日六七一
塵に交はる――和光の影も　右三四九
神心種とこそなれ歌言の　歌一謠三五五
紙衣を拵へて　大會二一六八四

神さび
宋の玉垣―に　生二六六
朝政―て　花筐二五九一
神さびて心も澄み渡るに　蟬二一六
神さびて高く貴き駿河の富士　富士山三六九〇
神さびて渡れる折から　白髭一四七三
神さびわたれる折からに　源太一〇七三
神さぶる伊勢の内外の宮柱　内二七四
神さぶる松は十かへり千代の秋　道明上歌一八二七
神姿
見苦しき顔は甚い―　葛七〇一
上直なれば下までも安く樂しむ　内三七五
上直なれば下までも豐かに治まる　金八七二
髮筋
荊棘を戴く―は主を離れて　照一五九一
神ぞ糺の道ならん　賀七三四
神だにも塵に交はる宮寺の　大佛一七五三
神路川(三重)
川をば―といひ　御二九六三
神路山(三重)
ここは嚢らぬ―内外の末も　御一九六一
神路山御裳濯川のその上に　第一・蟬一七七〇
神司
敬つて白す―。　蟻二三三
上野や佐野の船橋取り放れし本領　鉢二五七〇

神といひ佛といひ唯これ水波の隔て　[illegible]一五六三　松尾八四六・[illegible]二一一九
神と君
ただ貴くせよ―　金八七六
神と君が代の動かぬ國ぞ久しき　白樂二四八一
神と君が代の廣き御影　[illegible]六八
神と君とに仕への臣武内と申す　放生二四六五
神と君との御惠み　岩二九三
神と君との隔てなき世　大社五七七
神と君との道すぐに　采四〇七・高砂一八七三・弓三二三五
神と君とは隔てなき　岩二八八
神と人との中や絶えなん　龍田一九二四
神無月時雨降りおく奈良坂や　千一七一〇
神南備の御室の岸や崩るらん　逆上歌二三〇五　龍田一九三三
神たらで三熱の苦しみといふ事　葛六九七
神ならぬ身を恨みかこち　富士太二七〇四
神鳴り稲妻頻りに充ち滿ち　松山天六八九一
雷鳴稲妻天地に滿ち　一角三八四
神なりとも佛なりとも祇王が　佛八六〇
雷鳴の壺にもこらへず　雷三四二
上にあつては下を惱まし　卒一一五
神に五衰の苦しみあり　葛六九七
神に事ふる身にしあれば　大社五七六
髮にはおどろの雪を戴き　山三一七八
神の掟

天に坐す―の翼の上に　[illegible]
神の怒り
肝膽を碎き―申し上ぐる　歌三六七
神の御扶持　[illegible]
神の御惠め　[illegible]
神の御名も[illegible]　[illegible]
上の句をば彼に問ひ給へ　[illegible]
上の句をつかば下の句には　[illegible]
神の事あさ〳〵しくは申さぬ事　[illegible]八八四
神の示し
木綿四手の―か　梅四八
神のしめゆふ綿襷の風の靡け　葵六八一〇
上の瀬へ廻らう　項[illegible]
神の誓ひ
日の本の―はあらためて　仕一五四一
神の告
木綿四手の―：　江島四九〇・春日六七五・放生二四六三
神の告ぞといひ捨てて　大社五八〇
神の告ぞと木綿四手の　御一九七七
神の告木綿四手に　第一一七七
神の告をも待ちて見ん　卷五三二・[illegible]八七五・[illegible]九六六
神の引き合はせ　歌三六[illegible]
神のひこさの昔より　[illegible]八
神の御稜威は異國に仰ぎても　内三七四
神の御孫の末長く　内三七六

神の御前に通夜をして　龍田待宵一九三〇
神の宮瀧(奈良)
　櫻木の宮——西河の瀧・・　二人三七三〇
神の御幸の跡古りて　右三四三
神の祭
　千早ぶる——早めん　逆一三〇八
神の昔の跡とめて　葛次第六九〇
神の惠み
　佛の道もよそならぬ——を　源太一〇六五
神の宿木
　榊葉これは——　金八七六
神の代(神代をも見よ)
　種蒔きしその——　飛鳥六八
　七つ五つの——　淡一五三
神の代七代すなほに人あつうして　蟻三三三
神の世繼は久方の　御二九六〇
神の代の跡を殘して　淡一醉一四三
神の代の誓ひは盡きぬ驗とて　右三四九
神の代の道すぐに　淡一四八
神の代の昔語を思出の　九上歌九三三
神の代を思ひ出雲の宮柱　大社上歌五七八
　源太上歌一〇六七
神は上らせ給ひ　藍二四六・雨三三八・右三五一・歌三六七
神は出雲八重垣片そぎの寒き世の　卷二八一〇
神は受けずや思ふらん　野宮二四一九
髮はおとろを戴き　蟬一六八三
神は宜禰が習はし　蟻二一七
上は御一體なれば　吉靜三三八三
上は御一體の御事なれば　船辨△三七八一
神は正直の頭に宿り　代△一四八六・吉靜三三八五
神は千代まで榮うる御代　岩三九五
神はなほ君を守りの御威光　大佛一七五四
神は人天百王の守護神として　松尾三八四六
神は人の敬ふによつて威を增し　卷二八〇八
神は人の敬ふによつて威を增す　白鬚一四七三
神は非禮を享け給はず　龍田一九三一
神は本覺眞如の都を出でて　逆一三一三
神松
　老木の——　老五三三
神祭
　誓ひあまたの——　大社五七四
　木綿たたみ幣とりどりの——　代一四八〇
神祭急ぐなり　鵜祭四一四
神祭る日も二月の今日とてや　弓一〇三三四
神辨　淡一五三・志一三〇三・代一四八八・高砂一八七三
　蟻三三八・松尾三八五一・御二九七一・蟬三一四
　〇・弓三三三
上道下道上路越と申して　山△三一六九
神も木華開耶姬の御氏子　櫻一三三六
神も濁世に應じ給ひ　道明一八三一
神も願ひのある故に　三輪一九八三
神も佛も同一體　道明一八三〇
神も佛もましまさぬかや　安宅九九
神も交はる塵の世の　小鹽三四五七
神や受けずもなりにけん　定二一一〇
神や佛とは唯これ水波の隔て　道明一八三〇
神山
　賀茂の——　代一四八六
神山の葵草かけて頼むや　賀茂物七四九
神山の二葉の葵年ふりて　水無月二九四四
神代今の代おしなめて　水無月二九四四
神代今の世のしるしの箱の明らか　弓三三三四
神代の歌は文字の數も定めたし　俊成一四四三
神代の佳例をうつし　岩三九二
神代の古跡　淡一四一
神代の事も思ひ出づらめ　小鹽三四六一
神代の月の影淸く　大蛇三五〇八
神代の傳へ
　うらやすの安き——とて　梅四六八
神代の習はし草を殘しみ木を貴む　梅四五一
神代の昔物語　三輪一九八五
神代も聞かずといひ置きし　飛雲三六一六
神代も和歌を上げ舞を舞ひける　武生四六六
神を齋ふやまつりごとげに神慮も　巴三三七八
神を硫黄が島なれば　俊寛第一四一四

神を敬ひ君を守る秋津島根の寶算　　九二
上を敬ひ下を憐み　　楠九一三
髪を切り烏帽子を着　　烏三四一八
髪をはやし
　路次にて——て給はり候へ　　七一〇八七
髪をはやして千代までと　　七一〇八八
禿を正條が宿へ見せに遣され　　狂八一三六六
龜　　鳥子寸三〇九五
龜
　鶴と——の齢にて　　翁六
　萬代の池の——は甲に三極を備へ　　翁八
　浮木の——の年を經て盲龜の　　紀一六七四
　松竹鶴——の齢を授くる　　老五三
　綠の——も舞ひ遊べば　　鶴二〇九九
　佳名は未だ半ばならず　　八島三一六〇
龜は萬年の齢を經　　鶴二〇八八
龜山(京都)
　岩根に波かかる——も　　嵐二一〇
　浮木の——や　　百二六七八
龜山の院に仕へ奉る　　氷二六五五
龜井の水(大阪)
　萬世に住める——までも　　弱三三二三
〔賀茂〕　　七三一
賀茂(京都)　　生所二六三・賀所七三一・賀茂物所七四
賀茂　　七・水無月所二九三七

伊勢石清水——春日　　白樂二四八〇
北野平野や——貴船　　松尾二八四七
上人——へ御参詣　　生二六五
鶴の——と當社室明神とは御一體　　賀七三三
王城の鎮守稻荷祇園——貴船　　正一三六四
賀茂川(京都)
　憂き音に鳴くか——や　　錦一六八一
　下は白川上は——　　賀七三八
　山陰の——や末白河の　　東北三三〇〇
賀茂川に沈みしは水の青き鬼　　鐵七二一
賀茂川の後瀬しづかに後も逢はん　　水無月二九四五
賀茂の齋の院にそなはり給ひ　　定二二〇八
賀茂の川
　あはれはかけよ——波　　賀茂物七五四
　山陰の——波紀の森の　　賀茂物七五〇
賀茂の川瀬も變る名の　　賀七三八
賀茂の河原に出づるなり　　賀七三四
賀茂の河原に御祓して　　水無月二九四一
賀茂の神山
　平安城に現れ給ふ——　　代一四八一
賀茂の本社
　この宮居こそとりわきて——　　代一四八二
賀茂のみあれに飾りしは　　安達一一三
賀茂の御あれのひをりの日　　狂上歌三四四八

賀茂のみあれ十五日の　　代一四八四
賀茂の御手洗いささごと　　代一四八三
賀茂の明神に参詣申し　　水無月二九三八
賀茂の明神に仕へ申す神職　　代一四七八
賀茂の明神へ参詣あるべき由　　二六五
賀茂の御社伏し拝み　　上歌二二三
賀茂の宮替ひ紀の神ならば　　水無月二九四一
賀茂の宮居
　月の都の山陰の——に　　賀七三三
　山陰の——を立ち出でて　　生二六七
　室山陰の神垣の——　　二二三
賀茂の祭の車争ひ　　野宮二四一七
賀茂の山風神風・　　一六六六
賀茂の山並御手洗の影　　上歌七四五
賀茂三所の神所　　賀七三七
鷗
　あれこそ沖の——候よ　　鵜一五二四
　沖の——に心そへ　　四五
　沖の——も音を添へて　　檜二〇一五
　敵と見えしは群らがる——　　八島三一六二
　千鳥——の沖つ波　　羽二四九〇
〔賀茂物狂〕　　七四七
伽耶の成道
　摩耶の誕生——　　春日六七五
茅筵

異草もまじる――　安達一一〇
駕輿丁
官人――御輿を早め　鶴二〇九九
〔通小町〕　七六一
通ひ路の關守はありとも　卒一七二九
通ひ馴れたる道の末　鐵上歌七〇六
骸
空蟬の――は娑婆にやとまる　松山鏡二八八〇
唐絲
妙典の理をとく――の一筋に　現一〇一八
から臼の音聞え　半△二五〇一
韓神
神樂の――催馬樂　錦三四五二
韓神催馬樂　道明一八三五
唐衣
大和にも織る――の營みを　吳九七九
唐衣の錦にも衣の珠はよも掛けじ　芭二五三三
唐紅
月に照り添ひて――の庭の面　六浦三〇一七
唐衣
嬉しさを何に包まん――　小督一一〇九
嬉し泣きの涙は何か包まん――　七騎一三三三
杜若いつ――はるばるの　雲雀二六四六
三つの輪は清く淨きぞ――　三輪二九八三
世を空蟬の――　山三一八二

唐衣きつつ馴れにし妻しある　千一七〇七
唐衣きつつなれにし妻しあれば　杜六三一
から碓　小鹽三四六七
鳴き騒ぐ鳥の――身にしみ　夕三一八
辛崎の一つ松(志賀)　鵜一八・俊七三一・源氏一〇一九
志賀――　自一三四〇・三井二九九六
辛崎の松
志賀――風までも　志一三〇三
鳥きうきうの孝行なるは　箙二五二五
鳥にふおほをそ鳥も心して　碇八三八
幹竹割に二つにたつて　正一三七〇
唐玉
少女子が――の琴の絲　國九〇五
刈らでも運ぶ濱川の　海一七四
唐戸の脇にぞ待ちかけたる　夜三三七五
からなづな
長安のなづな――　東三〇六七
唐錦
大和にも織る――　逆一三〇三
唐人
言さやぐ――なれば　白楽二四七四
からまき
搦手を手に繰り――　昔二九四

搦手
大手――の海山かけて　[illegible]五一二
唐櫓
おすや――の　昔二九四
櫓音を靜め――を押へて　通盛二八九九
艪には――といふものあり　自一三三四
伽藍
始めて――たちばなの　道成一七九五
雁
天つ――歸る越路の　白鬚一四六五
田の面に落つる――鳴きて　放下二四四九
春秋の雲居の――も留め得ぬ　[illegible]
春霞立つを見捨てて行く――は　[illegible]二六四五
家隆の歌に龍田川　龍田一九三五
雁がね
雲居に歸る――もわが如くにや　[illegible]九九一
それは――これは鶯　花一〇〇四
田のむの――こそ連れて越路の　花筐二五八六
花を見捨つる――のそれには越路　[illegible]一六九一
熊野三三五四
雁がねさむみ稔れし田を　[illegible]七[illegible]
雁がねの歸り行く天路を聞けば　羽三四九〇
雁がねの翼は文字の數なれど　草子一一九四
雁金の花を見捨つる名殘まで　[illegible]行七四九
雁がねの南へ渡る天つ空　[illegible]五八五

雁がねも四門なくては過を難し　曾七九三
狩衣
　青鈍の――　嶺一五〇三
　變らぬ――の疑ふ所も　富士太三七〇四
紅の――の衣紋けたかくひき繕ひ　通小七七二
木賊色の――　雲三・雲林四六八
二重の――　鸚三三八五
夕顏の花の――烏帽子を着　[illegible]八六三
烏帽子――堂衛の上に掛け　[illegible]三九八四
男の姿――に　富士太三七〇六
狩衣の袖をうちかついで　卒一七三九
狩衣の袖をうつ肩ぬいで　花一〇〇四
狩衣を着しつつ　梅枝四四五
狩くら
　赤澤山の――にて父も失せ　小袖一一三六
　赤澤山の――にて尾越の矢に　曾二一一四
狩衣
　いづくに宿を――今日ばかり　鉢三五六一
思ひ立ちぬる――　小袖一一三九
一夜ばかりの――　砧八三三
宵々にぬぎてわが寢る――　松風二八三五
狩衣今日ばかりこそ翁さび　大佛一七五三
刈りじほ
　晩稲の小田も――に色づく秋の　鳥三三九九
假初の口論により　羅三三五三

假初の値遇も容しからず　[illegible]
假初も他生の緣　谷一九四七
假にも鬼のすたくたると　現二〇一七
假寢の野邊の露の曙　[illegible]七五一
假寢の夢に馴れて見ん　昌六三四
假の親子に生まれ來て　天三二一七
假の親子の今をだに　内六六一
雁の姿や月の影　[illegible]三三四八
雁の姿や友千鳥　松風二八三七
雁の翼につけしは蘇武が文　高野六〇七
假の宿
　住み果てぬこの世は、　たるを　藤戸七四三
　世を厭ふ人とし聞けば　に　江口四七七
假の宿りを惜しむ君かな　江口四七六
假の世
　夢幻の――　曾二六八
狩場
　聲をしるべの――の末　[illegible]〇八二
狩場に於て例惡しし　小袖一一三六
狩場は四季の遊びにて　雲雀二六四一
狩場への門出　小袖一一三六
狩場や漁りに不慮の爭ひある　小袖一一三六
狩人に紛れ　小袖一一三九
迦陵頻伽
　孔雀鳳凰――飛び廻り　西王一五七四

迦陵頻伽の聲にかりの歌に乘りて　[illegible]
迦陵頻伽の聲は[illegible]に乘り　[illegible]
迦陵頻伽の類ひなき　[illegible]
迦陵頻伽の馴れ馴れし　[illegible]
迦陵頻伽は卵の内にして聲諸鳥に　[illegible]
刈萱
　秋の山草桔梗――吾亦紅　大江六四
　女郎花――も亂れあひ　[illegible]三一九九
刈萱まじる鳥江野に　[illegible]九八九
枯蘆
　身は――の　[illegible]
乾飯
　粟豆の――を袋に入れ　卒一七六六
嘉例めでたき物語　[illegible]
かれがれ
　鹿の音蟲の音も――　[illegible]二六八
　よその契りは――なり　井三四〇六
かれかれならばたかたかい　[illegible]
かれがれの中となり　定二二九
かれたつ
　入江に――足もとはよろよろと　昌一三五二
枯れたる木なりとも花櫻木の　田一九九
枯れたる木にだにも誓ひの花は咲く　道明一八三三
枯れたる木にだにも花咲くべくは　三井上歌二九九一

枯れたる木にも花咲く　花一〇〇六
枯れてだに花咲く千手の袖ならば　千一七一〇
枯れてだに二度花や咲きぬらん　春榮一四一四
枯野にすだく蟲の音も花を惜しむか　項五八九
枯野の草に火をかくれば　草薙八八七
枯野の草に火をかけ　小鍛一一一八
枯野の萩本のあらまし　源氏一〇三五
香をなつかしみとめてこそ折れ　野宮△三四一五
寒雲
　鐘は——を隔てて聲の至る事遲し　熊野三三五一
顔淵
　草——が巷に滋き思ひ　大原五三八
　瓢簞屢空し草——が巷に滋し　半二五〇三
感應
　蘊藻の禮奠——の　和三〇三一
　諸佛も——　張二〇五〇
　地神も——の海山　弓三三二九
　人間の業なりとも——などか　源太一〇七三
感應あれば影向微妙の　賀七四二
感應肝に銘ずる折から　嵐二二〇・朝三三六八
漢宮四豪もこれにはいかで勝るべき　[illegible]八六五
漢宮萬里の外にて　昭一五八一
漢宮萬里の粧ひ　楊三一一八
岸花紅に水を照らし　櫻一三三六
干戈を戢めし例　弓三三二七

漢月袖に靜かなり　卒一七三六
諫鼓苔深うして鳥驚かず　山三八〇
諫鼓苔むし難波の鳥も驚かぬ御代　難三三三八
諫鼓苔むすこの鼓　籠三三九五
簡齋の詩　芭△三五三八
閑窓に煙絶えて春の日いとど　雲雀二六四〇
神崎(兵庫)
　渡邊——より押し渡らんと　二人三七一九
釵
　しるしの——また賜はりて　楊三一三五
　玉の——取り出でて　楊三一三〇
髮ざし
　翡翠の——嬋娟の鬢　采四〇三
　翡翠の——は婀娜とたをやか　卒一七三〇
雁山の夕の雲に馳す　俊成一四四三
柑子
　大小——金柑　通小七六五
勘狀に申すやう　殺一六四〇
岸上の草
　身を觀ずる時は——　咸三五八
閑靜の床の上には眠り遥かに　卷二八〇九
簡寂觀に隱居して　三笑一三八七
巖松峙つて山聳え谷廻り　女三四八四
寒暑時を違へざれば　鶯一三一七
肝心

如來——の法門を說き給ふ　大會一七六五
澗水たたへて藍の如し　櫻一三三六
寒水をそそぎ淸風を吹かして　氷三六六
眼睛
　白髮を碎く苦しみ——を殘り　[illegible]七三四
寒蟬枯木を抱きて鳴き盡して　俊寛一四三五
甘泉殿
　御形を——の壁に寫し　花筐三五九二
　御姿を——の壁にうつし　松山鏡二八七四
甘泉殿の春の夜の夢心を碎く端と　熊野三三四三
甘泉殿の夜の思ひ　小督一一〇六
勘當
　師匠の——蒙りたれば　鳥三四一六
　生々世々永き世までの——　夜三六七
　母にて候者の——にて　小督一一二八
間道より密かに忍び出て　忠信一八九七
神館
　山の姿——の面白さ　[illegible]八四四
〔邯鄲〕　七七五
邯鄲(支那)　邯所七七五
邯鄲の假枕一炊の夢の覺めしも　鉢二五五五
邯鄲の假枕夢は五十のあはれ世の　女三四九二
邯鄲の宿主　[illegible]七七五
〔邯鄲枕〕　[illegible]七七五
邯鄲の枕　[illegible]七八〇

邯鄲の枕の夢楽しむこと百年　邯八〇八
肝膽を砕き祈りけり　巻七二〇・野守三四三一
肝膽を砕き祈りしかば　巻一六四五
肝膽を砕きかの者の命を　巻二四三
肝膽を砕き神の怠り申し上ぐる　歌三六七
漢帝せいしやうを用ゐずは覇陵原　江島四九三
澗底の松の風一聲の秋を催し　東北三三〇〇
澗底の松の風一聲の秋を催す　西行一一七一
漢朝の勅使この所に來り　富士山二六九四
[illegible]
湖水天に連つて――遙かなり　龍虎三三六一
巌洞
竹林の――は虎の栖にて　龍虎三三六五
巌頭
雲――に定まつて月桂まとか　檜二六三〇
神門が嶽の木葉の精　大蛇△三五一〇
巫　龍田一九二六
巫につくも髮の御幣も亂れて　卷二八二
巫のやうなる有樣にて水無月祓の　水無月△二九三九
漢女が粉を添ふる鏡淸瑩たり　松山鏡二六七八
神主　大社狂言五七三
神主（宜禰・神職をも見よ）
阿蘇の宮の――友成　高砂一八五九
出雲の國大社の――　大社△五八〇

宰府の――　[illegible]二三八
住吉の――衛門の何某　住一五六八
神主海中に入つて水底の和布を刈り　和二〇三九
神主御幣を捧げつつ　住一五四一
神主松明振り立てて　和二〇二七
神主の姫　初シテ二九七三
漢の高祖の臣下張良　殺九六〇・張二〇四五
漢の皇帝の臣下　[illegible]八一六
漢の武帝に仕へ申す官人　東方三一七八
漢の武帝の后李夫人なくならせ　松山鏡二八七二
寒風御衣の袂に移りて　[illegible]二六五六
干滿兩顆の名珠を海底に沈め　鵜羽四二七
桓武天皇九代の後胤平の知盛　船辨慶二七八四
冠
巻纓の――を着　西王一七七五
透額の――を着し　杜六二三
昔男の――直衣は女とも見えず　井筒四一一
冠唐衣　杜六三三
冠の巾子
狩衣の袂を――にうちかづき　雲林四六九
この花の木を――に添へ　梅四三三
雁門
雁がねも――なくては過ぎがたし　咸七九二
〔咸陽宮〕　七九一
咸陽宮（支那）　咸所七九一

咸陽宮と申すは　咸七七一
咸陽宮の[illegible]中に　咸[illegible]
咸陽宮の[illegible]たり　安達一一八
[illegible]に[illegible]つて三[illegible]く　咸八四七
寒林に骨を打つ靈鬼　山三一七七
感[illegible]軒に[illegible]つつ　輪三三七八
感[illegible]軒に[illegible]するぞや　含一三六七
甘露
試みは――もかくやらん　[illegible]七八六
漢王三尺の劍居ながら秦の亂れを　小督三三二六
漢王のその昔甘泉殿の夜の思ひ　小督三三三六
漢王は李夫人の[illegible]別れを歎き給ひ　花筐一九九一
閑院の左大臣冬嗣　小鹽△三四六三

き

樹
鳥は宿す池中の── 東北三〇〇・謡三三四
義
身は恩のため命は──による 巴三八四
奇異の曲者と組んで 實一三五八
舊遊皆亡す
往事を思へば── 歌三六四
舊遊零落して半ば泉に歸す 善知三九〇・松山鏡六七八
九夏三伏の暑き月 高砂一八六九
九夏三伏の夏闇けて 東北三三〇〇
九夏の天も暑を忘れ 善知三九一
きうきう
鳥──の孝行たるは 鶴三五五
九牛が一毛 専一八一三
九華帳の内にして反魂香をたき 花筐三五九三
九華の帳をおし除けて 皇九九五・楊三一一九
朽骨
苔底が──見ゆるもの今は 朝三三六五
宮商上り下る時に靡 源太一〇七三
弓箭の道は違はぬに 八島上歌三一五八
弓箭をつつみ干戈を戢めし例 弓三三七

弓箭を以て世を治めし始め 弓三三八
舊苔の鬚
氷消えては波──を洗ひ 實一三五九
舊苔の鬚を洗ひしは川原に解くる 草子一一九四
宮中にて身を斬る 歌三六五
宮女
さながら──の如く 佛二七九三
宮女の好色高位の姿 昭一五八五
宮女の貌
さも美しき── 一角二八〇
宮殿(クウデンを見よ)
九陌
輕軒──の塵に交はる 石三四九
弓馬の家
われたまじいに──に生まれ 唐三〇九六
牛馬の通ひ路 鵺一七
弓馬の道ならねど 俊成一四四一
弓馬の道もさきかけんと 田一九九九
舊銘
苔紛々として──を埋む 項五九七
舊里
廣く──を去つて遍く幕下を兼ね 藍二四四
戀慕の涙──を思ふ魂を消す 楊三一二〇
舊里に歸つて七世の孫に逢ふ 木賊三一一三
舊里を出でし鶴の子の松に歸らぬ 捨一聲一六五三
宮漏高く立ちて風北にめぐり 砧八三三

舊院に仕へ申しし 墨五〇六
歸依渇仰の御袖に惠みをいだき 吉野靜二八五
消えかへり
身にしむ色の── 野宮二四〇九
消え消えと形もなくて 鶴二〇八七
消え消えとなり行けば 隅一九三四
消えずはありと花と見ましや 小鹽三四六六
喜悦の眉を開き 島二一九五
消えぬ便りも風なれば 景次第六三三
歸依佛 野守二四二一
機縁
ありがたき──にてましませ 佛二七九〇
機縁ある我等かた 望三〇四四
〔鬼界島〕 俊寛四一四二一
鬼界が島(鬼界島) 俊寛一四二一
鬼界が島の流人の中 俊寛一四二三
鬼界が島守
後の世を待たで──と 俊寛一四三五
伎樂
各々──を奏しつつ 項五九七
伎樂鬼神 谷三一九七七
伎樂伎女
使者の鬼神の──を遣はし 谷二九五一
龜鶴蓬萊山と名づく 鶴四六六
歸雁は友を忍ぶ

龍鳥は雲を戀ひ――　[illegible]三〇一〇・[illegible]二六三五
歸雁列を亂るなる　[illegible]一三五
巍々
　莊嚴――として　楊三一七
ききうの祭　九世九三五
雉子
　燒野の――夜の鶴　唐一八一九
聞き逝げは無念なり　橋三五一一
桔梗刈萱破帽額　大江五六四
菊
　岩根の――を手折り伏せ　菊八二一
　わが君――を御寵愛あつて　謠一一五五
菊賣る市
　わが宿は――にあらねども　松蟲二八五六
菊賣る市の數々に　岩六九〇
菊衣の花の袂を韆し　郡七八五
〔菊慈童〕　八〇五
菊水
　淸き名を千代に傳へて――の　楠九一七
　汲めどもいやましに出づる――　郡七八六
　流れは――の流にひかれて　郡七八五
　飮むからにげにも藥と――の　俊寬一四二七
　酈縣の山の滴り――の流れ　菊八二一
菊園の何某　住ツキ一五三七
菊園の何某

　住吉の神主――　住一五三八
菊月
　酸め酒と――の　大[illegible]一七六二
聞くにも袖を濕して　須上歌一四九四
菊の盃
　猶喜びはまさり草の――　[illegible]七八五
　行末千代ぞと――　[illegible]七七五
菊の盃十ゑ置き　大[illegible]一七六二
菊の酒
　壽命は千代ぞと――　[illegible]七八四
　種は千代ぞと――　盛三一〇八
　所は山路の――　紅三〇八六
　所も山路の――　安宅一〇三
菊の酒仙家に入りし身の　仲三三一
菊の下葉を取らせられ　[illegible]一一五五
菊の白露
　わが宿の――今日毎に　郡七八五
菊の白露積り積つて　三[illegible]二二八七
菊の露
　濡れて干す山路の――の間に　俊寬一四二七
　山人の折る袖匂ふ――　一角一八一
菊の露積りて盡きぬこの泉　大瓶一七六五
菊の名の曾我の昔を思ひ出てて　元一〇九三
菊の葉
　この妙文を――に置く滴りや　菊八一〇

菊の花のもとに歸らん事を忘れ　[illegible]
菊の葉にかの妙文を寫し　[illegible]
菊の水
　奧山の深谷の下の――　[illegible]
　藥と――　[illegible]
　藥の名をも――　[illegible]
　彭祖が――　[illegible]
　山路の――汲めや掬べや　[illegible]
聞くや如何に上の空なる風だにも　[illegible]
聞くやいかにと普すらん　[illegible]
聞くや如何にと夕波の　俊寬一四[illegible]
菊王
　能登殿の童――丸　攝一六六三
　船には――も討たれ　八島[illegible]
菊をたたへて夜もすがら　理一三五〇
菊を東籬の下に採つて　三[illegible]
儀敬とやら申す人　合[illegible]六八六
機嫌
　言語道斷以ての外の――　[illegible]〇四七
喜見城
　かかるためしは――　西王一五七〇
　寂光の都――の樂しみ　[illegible]七八三
　法勝寺法成寺唯――の春の花　俊寬一四[illegible]七
喜見城の帝釋現れ　大會一七八六
喜見城の寶をここに降さん　[illegible]一九三

喜見城もこれにはいかで勝るべき　東方二一七九
機嫌はよきぞ　熊坂九四三
綺語
狂言——（その項を見よ）
妄語——惡口兩舌は口にて作る罪　東岸二一七三
木樵の歌
草刈の笛——　求一八
后の御事を思ひ出でて　小鹽三四六一
象の山（奈良）　攝一一四三
二月時正の日　弱三三一九
二月七日の合戰に　知三三四一
二月の初卯の神樂面白や　弓三三三三
二月の初申　佐一三七七
二月の佛の縁　巴一五一二
二月初卯八幡の御神事たり　弓三二三三
二月やまだ宵なれど　雲林クセ四六八
雉
われは——とぞなり　善知三九三
岸うつ波は覆檣の音　梅四三一
岸うつ波は茫々たり　岩二九一
來し方の御願に猶もうち添へて　住上歌一五四三
岸田
住吉の——　飛鳥七三
岸田の早苗綠にて　飛鳥六七
岸野
潮風も吹くや——の秋の草　松蟲二八五五
岸の姫松幾代經ぬらん　住一五四三・高砂一八七一
岸の山吹咲き亂れ　大原五四〇
木島の里（長野）
野邊の——とかや　柏六五八
幾生の善
天人返す返すも——を悦ぶ　山三一七七
きしやうの善根のその爲に　放生二四五九
歸性の善所
輪廻を遁れ——に至らざらん　山三一七三
起請文に書き表し　正一三六三
喜春樂
春は霞の袖歌を上げて——を　放生二四六六
鬼神　大江シテ五五三・野守シテ二四二一
鬼神　雷電シテ二六一三・羅シテ・三三四五
いかさま——か人間にてはよも　熊坂九四三
いかに——も確かに聞け　田一九九九
大江山の——の事　大江五五五
大江山の——を從へ　羅三三四七
鏡のそのうちに——の姿ぞ映り　皇九九五
九條の羅生門に——の住んで　羅三三五〇
使者の——の伎樂伎女を遣はし　谷一九五一
そのたけ一丈の——の　紅三〇九〇
その丈二丈ばかりなる——の裝ひ　大江五六八
耳には鐵を下げたれば——と　昭一五九一
魑魅——妨げをなし　黃七一〇
魍魎——に至るまで　六浦一二一七
夜叉——島を作る　江島四九五
鬼神魂魄の境界に到り　八島三一五七
鬼神に横道あらんや　黍一七四一
鬼神に横道曩りなし　野守二四三三
鬼神に横道なし　大江五六九・鐘一四五七
鬼神に横道を正す明鏡　野守二四二四
鬼神の聲天に響き地に滿ち　土蜘二〇六五
鬼神の形は現れたり　田一九九九
鬼神の姿面を向くべき　飛雲二六一九
鬼神の姿は失せにけり　殺一六四六
鬼神の持ちたる鏡をば野守の鏡と　野守二四二五
鬼神は怒りをなし　羅三三五五
鬼神は通力失せ　鐘一四五八
鬼神も感をなす　志一三九八・俊寛一四三〇
鬼神より猶恐ろしや　土蜘八二三
鬼神を感ぜしむることわざ　東北二一九九
鬼神を感ぜしめ　野守二四三三
木好きも無用と存じ　鉢二五五六
着背長
靜は——參らする　正一三六七
紫裾濃の御——　八島三一五一
わが君の御——の草摺に　攝一六六三
着せ綿
白菊の——を溫めて酒をいざや　猩一三五一

貴賤群集
　佛法の力とて――の色々に　蕣一五五三
貴賤群集するこの寺の　百上六七八
貴賤群集の色々に　西行一二七三
貴賤群集の稱名の聲　實一三四六
貴賤群集の粧ひも　賀茂物七五五
貴賤群集をなし　右へ三四七
貴賤と親疎とを辨へぬ　實九五三
貴賤にはよらざりけり　國九〇四
貴賤に紛れ御[illegible]信のために　大母一七六八
貴賤の人に行きあひの　弱三三二六
貴賤の道も普しや　續一〇八六
貴賤の利益なすとかや　東九七三
喜撰法師が住みける庵　招一三〇一
貴賤交はり隙もなし　西王一五七〇
〔木曾〕　八一五
木曾(長野)　飛雲所二六一三
貴僧高僧を請じ申され　茨一五七
〔木曾興廿〕　木曾異種八一五
木曾路(長野)　飛雲三六一五
木曾路
　月日程なく――經て　木賊三三〇五
木曾殿の御前に參り　實一三五八
木曾殿は江州粟津原にて果て　爺七一六
木曾の麻衣
　立ち上る――袖しをり　綾三三九六
　木賊刈る――袖濡れて　木賊三三〇七
木曾の麻衣の袖を解き　[illegible]六八五
木曾の棧道
　麻衣――谷深み　飛雲二六一四
　信濃路や――名にし負ふ　爺七一七
木曾の棧道かかる身の　木賊三三〇六
木曾の棧道かけてげに積みも　十車二〇三五
木曾の棧道かけてただに思はぬ　生七〇
木曾の棧道ゆらりとうち渡り　實四〇三
木曾の鄉に寢覺の床とて　實三九五
木曾の御坂(長野)
　信濃路や――の春風に　實三九六
木曾の御坂の梢より　木賊三三〇六
木曾の御坂を遙々と　巴三三七七
木曾の山家より出でたる僧　爺七一六・巴三三七七
木曾義仲　木曾八一八・正一三五八
木曾義仲の御在所同じく神と　巴三三七九
希代たる少人かな　梅三五一八
希代の例
　馬にて海を渡すよりもこれぞ――　藤戸二七五〇
北時雨
　思ひ立つ其方の空も――　鵜飼四一三
　山より出づる――　定二一〇三
北白河に年經て住める女　閑一五三二
北野(京都)
　西に松尾――や　菅丞一六〇六
　われ――を信じ　老五三三
北野右近の馬場の花　右三四一
北の御方　[illegible]九一
北の御方
　古の主君の――　[illegible]
北野の神の宮居に花色の神と申されし　右[illegible]
北野の御作この詩を詠ぜば　千一七〇八
北野の櫻葉の神　右三四七
北野大神(京都)　輪所三三七三
北野の天滿天神は當社御一體の御事　輪三三七五
北野の春も時めける　右三四[illegible]
北野の森
　唯花ゆゑに――にて　右三四四
北野の森も近づくや　右三四一
北野平野や賀茂貴船　松尾二八四七
北の宮居(京都)　右三四五・輪三三七八
北は黄に南は青く東白　歌三五七
北祭今日ぞ花の都人　賀茂物七五五
北祭の折なれば　大原五四五
北山(京都)
　小林殿――にて菲狩の遊路の　盛三一〇九
　所は都――陰　雲林四六三
　都の外の――につぐや葉山の　求塚六五九

鬼畜
　志を知らざらんは——には猶劣る　一角二八一
鬼畜生
　種々諸悪道畜生——　盛三一〇一
鬼畜の身をかりて　善界一六〇一
吉左右めでたき御方　高砂△一八七〇
吉次　鳥トキ三四一三
吉次
　三條の——信高　熊坂九四一・鳥三四一五
紀路の関越えて　護二三六七
几帳
　御枕近き御——に立ち添へて　葵九九五
　御簾——も下りたり　小袖一一三三
鬼女　安達シテ一〇五・紅シテ三〇七九
鬼女
　一念化生の——となつて　山三八一
　山姥とは山に住む——　山三一七三
祇女
　祇王——佛刀自　佛二七八三
吉六　烏トキツ三四一三
杵築大神　大社シテ五七三
杵築大社(出雲)　大社時五七二
切先を揃へて　田[illegible]一六三〇・[illegible]三三一三
切先を競べ　戒二六一
きつつなれにし水はかれたん　三山△一九三一

切つて三[illegible]となす　放下二四四七
絆
　因果を離れぬ——皆親子兄弟の　元一〇八八
　親の——　景六三七
狐
　蘭菊の花に隠るなる——　錦木二三五〇
狐川(京都)
　蘭菊の——より引き返し　忠度一九一六
狐蘭菊の花に隠れ住む　殺一六三八
来ても見よ身延の山の法華たに　現上[illegible]一〇一四
機轉
　唯今の——更に凡慮よりなす業に　安宅九七
木戸
　山姥の事を山に住む——と申し　山△三一七六
奇特
　かかる——に逢ふ事も　白鬚一四七三
　天下に——の告あり　須一四九七
　目前の——あらたたり　石一三七九
木戸を開いて　[illegible]一六九七
黄なる涙を流せば　項五九四
衣笠
　天つ少女の——　廬五四
衣笠山も近かりき　經二〇九一
きぬぎぬ
　曉の旅情を惜しむ——の　三井三〇一三

おき別れにし——の妻や重ねし・　[illegible]五七
　捨て妻の——なれば恨みもなし　盛三四〇
きぬぎぬに引き離るる袖と袖　千一七一三
衣着ぬ山の帶をするかな　白髭二四七六
〔砧〕　八二五
砧
　いづれ——の音やらん　砧八三四
　うてやうてやと報いの——　砧八五七
　高樓に上つて——を擣つ　砧八三〇
　里人の——擣つ音　砧八三〇
　夜寒の——うつとかや　[illegible]三三〇
砧擣たうよ　西三三四
宜禰(神主・禰宜をも見よ)
　神は——が習はし　蟻三一七
　けしたる——御幸の先に進み　金八七一
宜禰が頭に乗りうつる　[illegible]三三七
宜禰が鼓にたくふたる　現一〇三一
宜禰が鼓も數至りて　内三六八・[illegible]田一九三三
宜禰が鼓も聲々に　龍田一九三一
宜禰が鼓も聲澄みて　白[illegible]一四七三
紀の有常
　[illegible]——の息女夫婦　[illegible]
紀の海や波吹上の浦風に　[illegible]四一
木の音ものどけき飛鳥風　[illegible]六
紀の國
　まづ淡路島——伊勢志摩尾張[illegible]　[illegible]一三一

茸
耳には――がなり　山会三一七五
紀の關
　鶯笑よい――越えて　冬二八〇三
　鶯笑よし――越えて　高野六〇八
紀の關守
　鶯笑よい――が手束弓　雲雀二六四五
紀の關守が手束弓　誓一五五二
紀の路潟(和歌山)　安達一〇八
紀の路にいざや急がん　卷二八〇三
紀の路の小島　弦一〇四八
紀の路の關越えて　雪一八四一・[illegible]三三七九
紀の貫之　蜻三二一五
紀の貫之
　小町を始め河内の躬恒――　草子一一八七
紀の貫之も躬恒もかくこそ　俊成一四四四
木の花のうちの鶯　蜻三二一
昨日入りにし三吉野の　謡曲次第六六
昨日過ぎ今日と暮れ明日また　通盛二六九八
昨日だに訪はんと思ひし津の國の　生三六七
昨日と過ぎ今日と暮れ　蘆四九
昨日にかはり今日にさめ　[illegible]八六五
昨日の早苗いつの間に　鳥三三九六
昨日の花は今日の夢　茨一五九
昨日の淵は今日の瀬になる　[illegible]七一
昨日は薄きもみぢ葉の　松尾二八四五
昨日は薄きもみぢ葉も　[illegible]
昨日は盛んたれども今日は衰ふ　[illegible]
昨日に少年今日に白頭の雪　[illegible]
昨日は憂き今日は悦び　[illegible]
昨日は人の上今日はわれをも知らぬ　[illegible]
昨日は北闕に悲しみを懐る士たり　[illegible]
昨日は北闕に悲しみを蒙る身　[illegible]
昨日は都の花と榮え今日は東の春　[illegible]一七〇六
昨日も徒らに過ぎ今日も空しく暮れ　[illegible]
昨日も過ぎ今日も空しく暮れ　大原五四三
魏の文帝に仕へ奉る　菊八〇七
木の丸殿
　朝倉や――にあらばこそ　[illegible]二一五三
木丸皇居(福岡)　[illegible]一八九
木の丸の皇居に仕へ奉る臣下　[illegible]一九〇
木目山(福井)　安宅八三・鵜祭四三
岐伯が絶技を先にあげ　江島五〇一
木は又七重寶樹とたつて　大會一七八五
氣霽れては風新柳の髪を梳り　富士歌二三五九
貴妃
　類ひなき――の紅色　皇九九一
機婦
　情なきことを――に妬む　[illegible]八六六・下一七〇八
歸附
　名を宗廟の氏族に――す　木曾八三一
急々に衰れ　[illegible]
及第叶はゞ衆中を越さ　[illegible]
及第のみきん　[illegible]
貴船(京都)
　北野平野や賀茂――　[illegible]八四七
　王城の鎮守稲荷や園賀茂――　[illegible]二六
貴船川(京都)
　音ある水や――　[illegible]七九
　頼みをかけて――　[illegible]七六
貴船の川瀬の螢火　[illegible]七二
貴船の社人　鐵輪三七〇三
貴船の宮(京都)
　禮衣――に參らん　[illegible]七五
貴船の社(京都)　[illegible]七[illegible]
貴船や三所の明神は夫婦男女の　[illegible]一七九五・[illegible]四五一
急歸　[illegible]
饒の瀧口
鬼魅
　山神――夜叉羅刹　江島四九四
君
　この――たらで日の本に又異君の　花筐[illegible]八八
　千秋萬歳――千代までと　[illegible]五六五
　御代千秋の――が住む都は間近き　松尾[illegible]八四五
君安全に民敎く　弓[illegible]五
君安全に民榮え　松尾二八五[illegible]
君が住む越の白山知らねども　歌[illegible]二・花筐二[illegible]八六

君が住む宿の梢をゆくゆくも　道明ク七一八三一
君がため春の野に出でて摘む若菜　知三〇三〇
君がため春の野に出てて若菜摘む　末三〇六六
君が千年のある數をたとへても　繪三四四五
君葛城の峯の雲と詠じけん・　宝二一一〇
君が代
　打ち鳴らす人もたければ――に　雜三三三七
　わが――のたとへに足らじ　榛四三三
君が代の長柄の橋も造るなり　雜一龍三三二八
君が代は天の羽衣稀にきて　（見九八六・羽二四九三）
君が代は千代に一度ゐる塵の　正一三六五
君が代は千代に八千代にさゞれ石の　弓三三二四
君が代は盡きじとぞ思ふ神風や　御二九七〇
君が代を撫でし歳も盡きせぬや　吉天三三九五
君が代を守りの神　右三四六
君開けや七尺の屏風は　成八〇三
君君たれば臣も赤水よく船を浮かむ　雜三三三三
君君たれば誰とてもいさみある世の　両王一五七一
君賢人をなし給はば　鐘一四五一
君と神との御惠み　右三四九
君と神との道すぐに　白髭次第一四六三
君と神とは隔てなき御物語　御二九六七
君としてこそ民をはごくむ習ひ　田九〇四
君と住む程だにありし山里に　花筐上歌二五八三
君とは誰が事を申すぞ　花筐二五八八
君とわれとわれと君と枕定めぬ　［illegible］二一五六
君なくてあしかりけりと思ふにぞ　蘆五七
君ならずして誰かあぐべき　井三四〇七
君にぞ逢ふ道は逢はじ　雪三一八九
君に忠ある故とかや　［illegible］一二八六
君に仕へて義を守り　内三七七
君に二度逢はんとぞ思ふ行末　［illegible］二七七五
君に齢をゆづり葉や　金八七三
君の御爲たれば　［illegible］三三五一
君の御爲父の命をば背くとも　七騎一三一三
君の神德天下一統と守る　弓三三三四
君の爲によき人をば德を擧げて褒む　内三七七
君の千歲を經ん事も　翁七
君の天罰を當り　［illegible］二三九一
君の御影は久方の　［illegible］三三四七
君の惠まずば一時の命を保ち得じ　内三七六
君の惠みも高照らす　花筐次第二五八三
君の齢も長生殿に還御なる　鶴二〇九九
君の威光も影高く　右三四九
君は船臣は瑞穗の國々も　弓三三二七
君は船臣は瑞穗の國も　金八七七
君は船臣は水水よく船を浮かむ　内三七六・田九〇三
君は船臣は水水よく船を浮かめ　代一四八三
　　　　　　　　　　　　　　　［illegible］三一四〇
君萬歲と齊るなる　弓上歌三三二五
君萬歲の御守り　代一四八一
君まさで煙絶えにし鹽竈の　［illegible］二［illegible］六
君守る神の宮居に參らむ　［illegible］四一［illegible］
君も安全に萬民時を樂しみ　志一三九八
君もすたほに民を守りの御札　金八七七
君も豐かに民榮え　［illegible］七八四
歸命
　南無といつば卽ちこれ――　寶一三五五
歸命稽首敬つて白す　安宅九三
歸命頂禮大恩教主釋迦如來　大會一七八六
歸命頂禮大日覺王如來　［illegible］一二一二
歸命頂禮八幡大菩薩　［illegible］八二一
歸命妙法蓮華經一部八卷四七品　［illegible］二九五四
歸命禮
　頭面接足――　藍二四四
君を崇め國を守る王仁といつし相人　［illegible］二一七
君を仰ぎ神を敬ふ心あらば　［illegible］一四六七
君を祝ふ千秋の鶴が岡の　［illegible］三二一〇
君を思へば徒步跣足　通小七七〇
君を重んじ親子の孝行　［illegible］七三
君を守りの御惠み　［illegible］二［illegible］四
君をもつて主とし
　天地人の三才にも――　氷二六五八
木村の源五重章が額を上げて　［illegible］二九〇八
貴命

去り難きは [illegible]三一〇九
王土に住む習ひ——は去るも遣れぬ [illegible]二二一八
肝魂を消まかす 善界一六〇四
肝を煎つて 大江△五五八
肝を貫り拜まさせ申さう 六浦△二〇一四
肝を消す [illegible]七九四
肝をつづめて [illegible]六六四
鬼門
王城の——を守りつつ 東北二一九九
わが山は王城の——を守り 鞍七一九
行歡居士 田一九九〇
行幸
大原野の——に 小鹽三四六一
行幸を波の底にたしまゐらせ [illegible]二五九
經書堂はこれかとよ 熊野三三四八
狂氣にたれ衣の 松風二八三四
行基菩薩
婆羅門僧正は——の御手を取り 卷二八〇九
行基菩薩御出でありて 大佛△一七七〇
行較べ 車九七〇
行慶 經ツキ二〇八三
行慶
仁和寺御室に仕へ申す僧都—— 經二〇八五
行教和尚の御法の袖に影映る 放生二四六一
行教和尚は宇佐八幡に詣で給ひ 巴二三七八

狂言 [illegible]
この一曲を——すれば 白一三三九
狂言綺語にて候程に 山三一八三
狂言綺語の道すぐに讃佛乘の因 [illegible]七三一
狂言綺語も隔てあらじ [illegible]七五一
狂言綺語を振り捨てて [illegible]一三三九
狂言綺語を以て讃佛轉法輪の 東岸二一七二
狂言ながらも法の道 自一三四四
向後の事をこそ心得候べけれ [illegible]三〇五
行者
役の——の跡を續き 葵一六五
行者
いかに——ありがたや [illegible]二七六二
車僧もあれば太郎坊の——もあり 車九七〇
念佛の—— 當一八四一
念佛の——一遍と申す聖 誓一五五二
行者十餘人 調二一二八
行者のお前に跪いて 谷一九五三
行者の床を飽びて降魔の利劍を待つ 善界一六〇三
行者の法味功力により 鐵輪二七六六
行者の法力盡くべきか 道成一八〇一
行者の威力いよいよ増り 飛雲二六三〇
行者は加持に參らんと 葵一六五
行人

世の常の—— 百一三七七
狂人
勢田の長橋は——のつれなき [illegible]一八
邊土遠境の——となつて 蟬一六七九
都の人といひ——といひ 隅一五三三
よそ目にはひたふる——と人や [illegible]八五三
女といひ——といひ 花筐二五八七
狂人の身にて 三井二九九九
狂人走れば不狂人も走る 關寺一六二一
兄弟
持つべきは——なり [illegible]一四〇九
兄弟親孝行のためしにならん 小袖一一三八
兄弟ならでは又もなし 元一〇七八
兄弟念力のその期にありて 放下二四五一
兄弟の宿意
因果を離れぬ絆昔物語——の [illegible]二〇八八
兄弟の好み 春榮一四一六
兄弟目をひき 小袖一一三八
行道の利益となさん 輪三三八〇
狂女 柏六五八・賀茂物七五一・隅一五二六
班二六〇四・百二六七五・水無月二九四三
行住坐臥の行ひに [illegible]一八八
行德
奇特に逢ふこともこれ——の故 野守一四二一
この年月の——もかやうの時にて 谷一九五〇

行德も劣るまじ　車九七〇
經とはなどや名づくらん　鵜飼三一〇
經念佛して弔ひ　松風二八二五
經念佛して弔ひてこそ　松山鏡二八七二
行の次第もしどろにて　莒子二一九二
襁褓のうちよりなどやらん兩眼盲ひ　弱一六七四
狂もよく念へば聖　賀茂物七五一
狂亂の心つきて　卒一七二七
經論聖教和漢の才　殺一六三九
京童の申し慣はして候　山三二六七

逆

いづれか順と見——なりといはん　蟬一六八〇

逆緣

身の後の世の——　自一三二九
逆緣ながら足引の山より歸る折　忠度一九〇八
逆緣ながら一見せばや　野宮二四〇七
逆緣ながら誓ひに逢はせて　百二六八〇
逆緣ながら弔ひて　梅枝四四〇・松風二八三三
逆緣ながら念佛を御申し　隅一五三八
逆緣なりと浮かむべし　卒一七二三
逆緣の御利益　東北二一九三
逆緣の法をも說き給ひ　定二一〇六
逆緣もなとかなかるべき　知三二四一
逆罪たるべきに　春榮一四〇八

客僧（ヤマブシをも見よ）

あの——こそ汝がつまよ　道成一七九九
僧正の谷に住居する——　鞍九四九
羽黑山より出でたる——　攝一六五七
三熊野より出でたる——　船橋二七五五
都よりの——はいづくに　檀二〇〇八
客僧達いづくよりいづ方へ御通り　大江五五九
客僧達これは關にて候　安宅八八
客僧達に申し候　安達一二一四
客僧は奥へ下れば　善知三八五

逆風

雲霞——に薰じつつ　富士山二六九一

却來

執心——の修羅の妄執　實五一六
蘇命路に——して　敦三五九
法身——の法味　當一八五二
彼奴は曲者よ　烏三四三四
消ゆるものは二度見えず　歌三六四

御衣

紅錦の——を着し　西王一五七五
御遊の御酒の折々も　[illegible]四〇八
御遊の折も時を得て　鷺一二一七
御遊をなして色々の　東方上數三一七九
御意に背くことはあるまじ　夜三二六二
御意も御意にこそより候へ　夜三二六四
興がる友と思しめせ　大江五六四
興にひかれて來り興盡きて歸り　[illegible]六八三
凝念不動の理を顯し　善界一六〇一
漁翁の罪を恐るるゆゑ　和[illegible]
漁翁夜西岸に傍うて宿す　八島三一四七

巨海

嬰兒の蠡を以て——を測り　木賊八二一
淸き渚の玉の數々　御[illegible]九七一
淸き名を千代に傳へて菊水の　菊九一七
淸き水上尋ねてや　賀次第七三三
淸く明らかなるは天となり　淺一四七

玉淵

積礫にならつて——を窺はざる　天三一三七
玉階にて頭を打ち碎き　皇九九二
玉貝の劍の双先を揃へ　一角六八四

玉釵

頭に——膚は金色雨臂をかがみ　松山鏡二八八一
玉觴に盛れる桃を　西王一五七五
玉珠樓の風の音絲竹の調めとりどり　[illegible]四八三

曲水

手まづ遮る——の　西王一五七五・山三一七六
流に牽かるる——の　[illegible]一二三
曲水に浮かむ鸚鵡は石にさはりて　[illegible]二二五
曲水の宴のありし時　[illegible]四九
曲水の盃うけたり遊舞の袖　[illegible]
曲水の手まづ遮る盃も　[illegible]一三一八

玉體を抱き目をふさぎ　[illegible]三六二
玉塔
　三十丈の――にかの珠を籠め　海一八〇
玉殿
　雲の上なる――の　金八七一
　夕月の上に輝く――に　天三三七
玉殿廊下の下　鐘一四五七
玉兎晝眠る雲母の地　俊寛一四三五
玉斧の修理とこしなへにして　羽二四九三
玉妃（ヤウキヒをも見よ）　楊三一八
曲もなや　自一三三一
玉文の瑞籤　舟三三六
玉樓金殿
　昨日までは――の床を磨き　蟬二一八五
玉樓金殿の御住居　松山天二八八八
御袴
　紅の――のそばをとり　忠一三〇四
漁火
　江村の――愁ひに對して人々　道成一七九五
　江村の――もほのかに　三井三〇〇五
曲終へて人見えず　一角三七九
清澄（千葉）　六浦三〇〇九
清澄より出てたる僧　鵜飼二九九
漁村に燈す篝火　藤五三
清瀧川の水波まば高嶺の深雪　賀七三九

〔淸經〕　八四一
清經　清ツ八四一
清經
　左中將――　清八四三
清經の妻　清ツレ八四一
清貫　[illegible]一六七一
清見が關（靜岡）
　月を――に終にはその名を留め　小袖一一三八
清見が關の者　三井三[illegible]
清見潟（靜岡）
　越えても關に――　盛三〇九八
　月――富士の雪　羽二四九三
　忘れめや山路をわけて――　羽二四八七
清水（京都）　花一〇〇一
清水
　東には祇園――　放下二四五〇
清水寺（京都）（セイスヰジをも見よ）　花所九九九・田所一九八五・東岸居二一六五・三井所一九八九
清水寺の古　熊野所三三三七
清水寺の花盛り　道三[illegible]〇三
清水に一七日參籠申し　[illegible]九六
清水の方へ輿を立てて　大佛一七四五
清水のただ頼め頼もしき　[illegible]二〇九五
清水の佛の御前に念誦して　熊野三三五一
　熊野三三四九

清見寺の鐘を[illegible]常に聞き馴れ　[illegible]三九八
清見原とに人の行よた　[illegible]九〇二
清見原の天皇　因八九〇一
清見原の天皇大友の皇子に　人七三[illegible]
清み祓へ　[illegible]九〇二
清宗の方を見やり　知二三五〇
虚明
　耿然たる一天――たる内に　[illegible]
淸盛
　安藝の守――から上と　[illegible]九四・[illegible]
　平相國――の朝臣　[illegible]八三五
淸盛の三男　大佛一七九〇
魚鱗鶴翼もかくばかり　[illegible]五三
綺羅衣の御神も　[illegible]一八六八
きら星
　集まる兵――の如く　鉢二五六七
猗蘭殿の内には有爲の悲しみを告げ　錦一四五三
霧
　蕣破れては――不斷の香を焼き　大原五四[illegible]
切石
　泰山の山下水その巖石を――　金八七三
切髮
　薫物の沈香なから――の　樂一五〇九
斷雁に寄せつけ　錦戸三三七二
蟋蟀（きりぎりす）

つづりさせてふ——茅蜩　松蟲二八六五
機織松蟲——　錦木二三五五
松蟲鈴蟲——の鳴くや　蟬一六八一
切檣
尋ね——罪を助けてたび給へ　三輪二九七九
梧竹
鳳凰もこれにめでて——に飛び下り　經二〇九〇
霧立ち隠す　大佛一七五四
桐壺の帝の御弟前坊と申し奉り　野宮二四一三
桐壺の御子　浮△三三一
桐壺の夕の煙速かに法性の空に　源氏一〇三八
桐壺の夕の煙堪へぬ思ひ　須一四九六
桐の木　金八七三
桐の葉落ちて秋来ぬとしるく　藤二七三二
桐の花咲く井上の　柏六五八
霧の籬の露深き　六浦三〇一三
きりはたりちやう　錦木上歌二三五五
きりはたりちやう
機織る音の——　松蟲二八六五
踏木の足音——　[illegible]九八七
錐嚢に脱す
碧玉の寒き蘆　梅枝四四四
霧間を凌ぎ雲を分け　一角二七八
器量
あつぱれ御——や　角三四二一

あつぱれ——の人體かな　正一二六九
賢才人に越え——勝れ　葵二〇五〇
氣力
老木の柳——なうして　遊三三〇四
騏驎も老いぬれば駑馬に劣る　景六四三・大佛一七四九
〔祇王〕　八五七
祇王　祇ツレ八五七
祇王祇女佛刀自　佛二七九二
祇王御前と申す遊女　[illegible]八五九
來居つつ鳴くは都鳥　隅一五二五
義を全うして心猛く　張二〇五〇
祇園（京名）
東には——清水　[illegible]四五〇
王城の鎭守稲荷——賀茂貴船　正一三六四
祇園精舎をあらはし　熊野三三五一
祇園林（京名）
花やあらぬ初櫻——下河原　熊野三三五一
祇園林の秋の風　松尾二八四七
銀河の水　三[illegible]二二八六
金柑
大小柑子　道小七六五
琴棊書畫を嗜む身　[illegible]三九一
金玉玉殿に美女の數を集め　[illegible]八六五
金銀（コンゴンをも見よ）
金銀珠玉は降り満ちて　[illegible]二九五

金銀珠玉をかのまれ人に捧ぐる　竹生二〇四一
金銀の砂
庭には——を敷き　[illegible]七八三
金銀の瓶にさす山吹の　[illegible]一一四七
金銀の床
七寶の臺——　東方二一七九
金銀の前立物　[illegible]△二五六二
金銀盌裏に瓊を供へ　玉井一九八二
金銀をのべたる太刀刀　[illegible]二五六四
金花
垣に——を懸け　關寺一六一八
槿花一日唯同じ　[illegible]一〇三七
槿花一日の榮　[illegible]一二五・金七一六・[illegible]一六一八・下一七〇三
金冠を見せ寶座なたし　[illegible]一九一
金雞夜宿す不萌の枝　[illegible]一四二五
金谷の春の花は一宴の色を見せ　[illegible]八六四
金谷の春ゆくへもなし　松山鏡二八七一
〔金札〕　八六九
金札
天より——の降り下り　金八七三
琴詩酒
白樂天が酒功讃を作りし——の友　[illegible]六八六
琴詩酒と聞くも隔てぬ友人の　[illegible]一七六一
琴詩酒の友なれば　[illegible]一二八六
琴棋

震東に向ふろう月は——にあたり　牛二五〇三
琴上
花——に散りぬれば雫を集めて　垂二六〇五
謹上再拜　藍二四四・内三七五・鷺四五五・鐵七一〇・現一〇二一
謹上再拜敬つて白す　小鍛一二三一・龍田一九三三
謹上再拜抑も富山は　蟻三三一・住一五四二
金雀　鉢二八一〇
翠翹——とりどりに　皇九九四
金色（コンジキを見よ）
銀色輝き異香薫じ　佐一三七〇
金紙をとよごす事もなく　鵜飼三〇九
金水（コンスヰを見よ）
謹請西方白體白龍　道成一八〇三
謹請中央黄體黄龍　道成一八〇三
謹請東方青龍清浄　道成一八〇三
禁足
虎溪を去らぬ——　木賊三三一三
禁足は破らせ給ふか　三笑一三八八
金刀の剪裁し易きを恐る　三笑一三八五
錦帳
蘭省の花の時——の下とは　芭二五三四
金打せさせ　錦戸二三六三
公時　大江リキツレ五五三・羅リキツレ三三四五
公時
貞光季武綱——　大江五五六・羅三三四七
公成
かしはでの——　三山二九一七
緊那羅王
持法——　春日六七八
妙法——　春日六七八
琴の聲
楚王の臺の上には夜の——　班二六〇五
金の札　金八七四
金貢
塔婆の——に至るまで　弱二三三
銀盞に玉をすゑて　昔二八八
琴瑟は玉殿に鉦鼓は庭上　頼太一〇七三
金峯山（奈良）　正一三六四
公光　雲林リキ四五七
公光
蘆屋の里に——と申す者　雲林四五九
欽明天皇に仕へ奉る　江島四九一
欽明天皇の御宇　鱗△四五四・弓三三八
欽明天皇の昔より　放生二四六〇
禁野（大阪）
交野の御野——につづく天の川　雲雀二六四一
金谷
三身の——を顯して　木賊八二一
公能御參宮なされ　綸△三四九
禁裏雲居の御火　[illegible]
金[illegible]
白雲深き所——躍る　放下三四四七
金色[illegible]　[illegible]
金色の[illegible]　[illegible]

く

虞奈何すべき　蟻二一六
具一切功德慈眼視衆生　箙八一〇
悔の八千度悲しきは　身二九五三
悔の八千度身をかこち　現一〇一七
悔の八千度百千鳥　櫻一三三七
悔の八千度百夜草　砧待宵八三六
宮前の楊柳寺前の花　遊三三〇三
宮殿にかかる浮橋を　淡一五三
宮殿巍々として更に邊際もなく　楊三一一七
宮殿樓閣はただ邯鄲の假の宿　邯七八八
空洞風涼し　車九六六
空廊
　風は——の箒となつて　大會一七八〇
九曜七星二十八宿　鐵七一〇
九曜の曼荼羅の光明　弱三三一九
苦海(クルシミノウミをも見よ)
　冥々とある——に沈み　盛二四五
苦海の煩惱を拂ひ　嵐二一一
陸には波の楯　八島三一六三

〔久上〕　禪異稚一六八九
久上寺(新潟)　禪所一六八九
久上禪師　禪シテ一六八九
久上の禪師
　河津の三郎が末の子——　禪一六九六
九上の禪師は寺にあり　小袖一一三三
久上の寺へ參り候へ　禪一六九三
茎長
　大長刀を——にとりのべ　薙二五四
公卿詮議あつて　調二三八五
茎立
　佐野の——若たちて　求三〇六七
供御
　爪木蕨を折り——に供へ　大原五三九
　氷の物の——拜みは奉れども　氷二六五五
供御を近づけ給はず　國八九七
箜篌
　笙笛琴——孤雲の響　須一五〇二
　簫笛琴——孤雲の外に充ち滿ち　羽二四九三
　簫笛琴——孤雲の御聲　富士山三六九四
　笙笛琴——夕日の雲に聞え　石一三七九
供御の力にあらでは　氷二六五八
九献を一つ聞し召し　紅△三〇八二
草
　根を離れたる——　大原五四七
　花に又宿かる——を尋ねん　項五八九
　身を觀ずる時は岸上の——　[illegible]二五八
　蓼莪の——　鸚一六
日下の里(大阪)　蘆四四
日下左衛門　蘆シテ四一
日下左衛門の妻　蘆ツレ四一
草香山(大阪)
　春は綠の　弱三三二六
草刈
　烏江の野邊の——　項五八九
草刈の笛木樵の歌は歌人の詠にも　敦一二八
草刈笛の高麗唐土をば　唐一八一三
草刈笛の聲添へて　敦次第一二六
草刈男　敦シテ一二三・項ワキ五八七
草刈るをのこ
　かの岡に——心して　錦木二三四九
草刈るをのこ心なく　項上歌五八九
草顏淵が巷に滋き思ひ　大原五三八
草顏淵が巷に滋し
　瓢簞しばしば空し——　半五一[illegible]
草木(サウモクをも見よ)
　靡かぬ——もなき時なれや　石一三八〇
草木の色ぞ知らするや　俊寛一四二七
草木も時を知り鳥獸も心あるや　砧八三八

草木も法身の姿を現し　朱下二四四八
草ぐき
鶉の——ならぬ身の　雲雀二六四七
草衣
古を何と信夫の——　野宮二四〇九
しをれぞまさる——　天二一三八
手向を受くる——の　松蟲二八六三
女郞花の——しほたれて　[illegible]三四八一
草衣尾花か袖の露分け　佛一七九四
草摺轟げにざつくと投げかけ　夜三一七五
草摺長に着なしつつ　橋二五一五
草摺をたたみあげ　實一三六二
草恙さへもなくして　枕二八一七
〔草薙〕　八七九
草薙の神劍を守る神となる　草薙八八三
草薙の劍　草薙八八八
草薙の故とかや　小鍛一二一九
草の蔭にて守りの神となる　藍二四〇
草の蔭にわれ等を守り給ふ　元一〇九〇
草の陰野の假枕　傘七一七
草の陰野の露と消えし　富一三五七
草の陰野の露の世を　江口四七六
草の假寢のとことはに　松蟲二八六二
草の袂に色添へて　綾一九三
草の袂も露涙　芭二五三三

草の袂も久方の　芭二五四三
草の袂もわが袖も露觸れそめて　女三五〇二
草の露水の泡はかなき心のたぐひ　朝三三五九
草の戸ざしはそのままに　錦木三三五六
草の樞を引きたてて　雲雀二六四〇
草のはつかに見え君かも　[illegible]二六〇[illegible]
草の枕露を添へて　[illegible]六[illegible]
草の枕の夜寒なる　望三〇四一
草の枕は理や　[illegible]
草茫々として露深々と古塚の　非三四〇五
草葉の色
平生の顏色は——に異ならず　藍二四三
草枕
幾夜な夜なの——　六浦三〇〇九
ただ——と思しめせ　八島三一五〇
草結びする女　身二九五二
くさめくさめ　竹生△二〇三九
草も木も佛體となる　春日六七七
草も木も皆成佛の　道明一八三三
草も木もわが大君の國なれば　御上歌二九六一
鎖
耳には——を下げたれば鬼神と　昭一五九二
草を賤しみ木を貫む　梅四三二
虞氏　項ツレ五八七
虞氏

項羽の后——　項五九三
數行——が涙もこれにはいかで　通盛二九〇七
燈火暗うしては數行——が涙　蟻二六・千一七一〇
奇稻田姫(イナダヒメをも見よ)　大蛇三五〇八
九識の窓の前十乘の床　[illegible]六四
虞氏は思ひに堪へかね　項五九八
九十九所の王子まで　[illegible]三四
九十九夜
榻の數よみて見たれば——なり　通小七七三
百夜までと通ひて——になりたり　卒一七三〇
倶生神　松山鏡シテ二六六九
倶生神急ぎ罪人を見せよとの仰せ　松山鏡二六八〇
九生如來の御再誕　竹生[illegible]
孔雀鸚鵡の同じく囀る鳥の　[illegible]四八[illegible]
孔雀鳳凰迦陵頻伽飛び廻り　西王一五七四
虞舜はかたくななる父を敬ふ　木賊三三一四
楠
石になるてふ——の葉の　楠九一六
〔國栖〕　八九一
國栖(奈良)
吉野の——といふ事もこの時より　國八九六
國栖魚　國八九七
國栖魚のしるし　國八九九
國栖魚やかからまし　櫻一三三八
國栖川(奈良)　國八九八

楠
　一夜に三十餘丈の——となつて　大江五六一
楠正成　楠九二一
〔楠露〕　九〇九
葛の葉
　恨みは——の　砧八三八
葛の葉の恨み　葵一六一
葛葉の里（大阪）　鸚二三
藥
　岩井の水は——にて　養三一三一
　子を先だてて枕に殘る——を恨む　天二一三四
藥と菊の水　養三一三六
藥と菊水の　俊寛一四二七
　飲むからにげにも——
藥となつて二世を助く　巻二八二一
藥の酒なれば　菊八二一
藥の名をも菊の水　猩一三五一
藥の袋
　番の醫師は——を劒に合はせ　成八〇三
藥の寶さへ結びつつ　梅四三一
藥の水
　七百歳を經ることも——　養三一三六
　仙家の——もかくやと　養三一三三
　南陽の酈縣の山より——流れ　枕二八一六
　よも盡きじ——も泉なれば　田七八五
　酈縣山の麓より——涌き出で　菊八〇七
藥の水なれば醽酒にて　俊寛一四二六
藥の水の故なれや　玉井一九七五
藥の水誠に老を養ふなり　養三一三四
藥の雪
　仙家には紫雪紅雪とて——あり　氷二六五六
藥を燒きしより富士の煙は立ち　富士山二六八八
弘誓深如海歷劫不思議　通盛二九〇〇
弘誓の船
　鵜舟を——になし　鵜飼三〇九
弘誓の船に浮かめば　藤戸二七五一
救世觀音
　その御本地——にて　道明一八三〇
　如意輪の佛像——とも申す　弱三三二二
曲事
　前代未聞の——　藤栄二二六一
曲事と仰せ候間　鷹△二三一
曲事にてあるぞ　安達△二一七・道成一七九八
救世の提闡
　聖德太子は——　草子二一八三
〔九世戸〕　九一九
九世戸（京都）　九世戸九一九
九世の戸
　丹後の國——に參り　氷二六五三
　天の七代地の二代をこれ——と　九世九二三
　九世の戸は神代の古跡にて　九世九二〇
曲舞
　相——　鳳八六二
　地獄の有樣を——に作り　歌三六二
　わが子の常は小歌——に好き　木賊三三二
曲舞に作つて　山三一六七
曲舞によりての異名　山三一七三
曲者
　奇異の——と組んで　實一三五八
　彼奴は——よ　烏三四三四
具足
　白金物打つたる緋毛の——　鉢二五六四
具足し作り逢坂山に捨て　蟬一六七四
具足取つて投げかけ
　ちぎれたりともこの——　蟬二五六〇
具足の金物
　脇より見ゆる——　大佛一七五四
朽たし
　亡き人の名をも——　攝一六五四
　名をも——　鳥三三九八
朽たす
　名をば——　海一七八
くたす
　何と家人と——とも　春栄一四〇八
下り月

いざ白雲の――の　[illegible]三四六七
影ともにわれも都を――　柴三九七

愚癡
貪欲瞋恚――は又心に於て　東岸二一七三

朽木
昔[illegible]の――　花一〇〇六

朽木櫻
年古り朽ちる――　熊野三三四四

朽木に腰をかけ　卒一七三二
朽木の柳忽ちに楊柳觀音と現れ　遊三二〇三
朽木の柳とて名木あり　遊三一九五
朽木柳の精　遊シテ三一九一

口ずさみ
あら面白の――や　[illegible]四四四
今の詠歌の――　江口四七六
朽ちたる花の客木より　西行一一七五

口なし
問へどもいはぬ――の　仲三三一〇
愚癡の凡夫を救はん爲　卒一七三四
愚癡のわれ等に示し給へ　葵一五五五

脣
影――を動かすなり　三山二九二四
輕漾激して影――を動かせば　雲林四六二
丹花の――　柴四〇三
花の影――を動かす　西行一一七八

愚癡[illegible]
一切衆生の――なるを象り　[illegible]三四四六

口を漱ぎ
流れを枕として岩に――　三笑一三八三
究竟の兵七十餘騎　[illegible]一六一〇
屈竟の名馬
井上黒とて――　[illegible]

脣の音
暮に數ある――　遊三二〇三
脣は香ばし楚地の花　葛六九三
鏃を揃へ川水に少しもためらはず　賴三三一一
脣を浸して攻め戰ふ　八島三一九九
脣を取つて噬かせ　[illegible]一〇四五
九條の袈裟　[illegible]一八[illegible]
九條の御所　[illegible]二五二〇
九條の羅生門に鬼神の住んで　羅三三五〇

口傳
秘曲――を殘さず傳へ　[illegible]一〇五三

工藤
本領の名をばわが敵――と申し　望[illegible]
工藤一臈祐經　調二一三三
工藤左衛門祐經こそ親の敵なれ　夜ム三三七〇

功德
具一切――慈眼視衆生　菊八一〇
願以此――普及於一切　白一三[illegible]

妙法蓮華經の――　[illegible]二九五三
[illegible]の――　江島五〇一
功德池の[illegible]　柏六六三
國々の末はじつの[illegible]を　[illegible]
苦に苦しみを受け重ね　東岸二一七一
國常立伊弉諾に託して宣はく　逆一三〇七
國常立の始めより　淡一五三
國富み民の竈まで賑はふ　[illegible]二六一
國富み民も豐かなる　代一四八二
國富み民も豐かにて　養三一三九
國富み民も豐かに治まる　弓三三二八
國富み民を撫む御心　住一五四一
垢膩のあかづける衣あり　卒一七〇七
國の起り家々に傳はる所　白髭一四六七
國の寶となすべきなり　[illegible]一四八八
國の[illegible]　大蛇三五〇八
國見もこれか[illegible]哉や　調二一二二
國を惠み民を撫でて萬機の政を　[illegible]一一九七
國を惠み民を撫でて四方に治まる　[illegible]
國を治め人を教へ　[illegible]四五七
國を治め民を撫む御事たるに　[illegible]一六七五
國を治め民をあはれむ志　[illegible]
愚人夏の蟲の火を消さんと飛び入り　經三〇九三

ぐはく
屍を失ふ――は秋風に嘯く　生二六八

桑田の郡（京都）
　丹波の國――に氷室を定め　氷二六五七
桑の弓
　蓬の作りし――　鵜四五一
桑の弓取るや蓬の八幡山　弓上頁二二一七
桑の弓蓬の矢にて世を治めしも　弓三三六
桑原／＼　舎ム二三九二
弘法の錫ならず　小鍛一一三五
首枷
　親子は三界の――　天二三六八
　緑子は三界の――　水無瀬一九三四
水鷄
　叩く――の外面に立つや　合六八四
頸にかけたる袋には　卒一七二六
首の座敷　二〇一五
頸の骨
　三保の谷が――こそ強けれ　景六四六
供奉
　一門――し申す　碇二五九
供奉の官人　昭一五八一
九品上生
　極樂の――の臺　六五九
九品蓮臺の花散りて　六六一
熊谷の次郎直實　敦一二五
［熊坂］　九三一
熊坂の長範　熊坂九四〇
熊坂の長範六十三　烏三四三六
熊手に懸けて既に危く見え　八島三一五九
熊野（和歌山）（ユヤをも見よ）　八〇一
熊野參詣三十三度の歩み　一四二
熊野參詣の爲　正一三六〇
熊野は胎藏界密嚴淨土　八一〇
熊野へ年詣でする山伏　道成一七九九
熊井太郎　正ソレ一三五五・正一三六九
汲みては勸め掬ひては施し　八一一
久米路の橋
　葛城や渡りし――は如何に　二七五八
汲めどもいやましに出づる菊水を　七八六
汲めども汲めどもよもも盡きじ　二六六四
酌めども盡きず飲めどもかはらぬ　一三五二
汲めども盡きせぬ泉　大一七六四
汲めや掬べや　六八二〇
雲
　五つの――は晴れやらぬ　當一八四三
　一片の――を吐く　三輪二九七九
　風の前の――　鐘一四五二
　金龍――を穿ち　三三六六
　五嶺蒼々として――往來す　三三六二
　西北に――起りて東南に來る雨の　四三一九
　東南に――收まり西北に風靜か　二一九八
　東南に――收まりて西北に風靜か　九八二
　涅槃の――に隠れ　安宅九三
　萬里の好山に――忽ちに起り　二四八六
　不定の――覆へり　一五三一
　三吉野の花をも――と思ふ　二人七一六
　山を遠く來て――又跡を立ち隔て　一二九四
　石一三七五
　龍吟ずれば――起り　三六七
　籠鳥は――を戀ひ歸雁は友を忍び　一〇二〇
　檜六一五
　横障の――の隔てか　一九〇
蜘蛛
　枝の一葉の上に――の乘りて　三一〇一
雲行客の跡を埋み　一角七八・一九四
雲隱れ
　源氏の卷の名たかれや――して　須一四九九
雲霞あと遠山に越えなして　一五〇二
雲かと見えて八重一重　二四七
雲巖頭に定まつて月桂まどかなり　檜六三〇
蜘蛛切
　膝丸を――と名づくべし　土蜘二〇六二
雲霧光を覆ふ習ひ　九一五
雲透に見れば　三一八
雲路うたかすに鳥路の　三一六八
雲路をとび行方知らずも　一四九〇
雲路を凌ぐ旅の空　一五九七
蜘蛛手
　水行く河の――なれば　杜六二一

蜘蛛手かくたは十文字　曽五一九
蜘蛛手十文字に繋ち破り　衆七三〇
蜘蛛手に物ぞ思はるる　杜六三三
蜘蛛手に物を思ふ　賀茂物七五四
蜘蛛手に物を思へとは　千一七〇七
雲となり雨となり陽臺の時　松山鏡二八七一
雲となり雨となり夢現とも　須一五〇三
雲となり雨となる　善界一六〇四・融三三五・船橋二二六〇
雲と見し櫻は花に顯る　二人二七一六
雲と見しは三吉野の　櫻一三六八
雲鳥の羽ぶさをたたむ綾とたす　吳九八三
雲に嵐の聲すなり　紅三〇八七
雲に起き臥す時もあり　花一〇〇九
蜘蛛のいへにあれたる駒は繋ぐとも　鐵七〇五
雲の浮波立つと見て　羽二四八七
雲の上
　いざなはれ行く――　花筐二五八二
雲の上なほ遙かなる　富士太鼓二七〇〇
雲の上なる玉殿の　金八七一
雲の上はありし昔に變らねど　鸚一九
雲の上人　鸚一七・海一七五・胡七八二
雲の上人に馴れ馴れし　關寺一六二〇
雲の上人包やかに　雲林四六七
雲の上人の舞樂の聲々に　鶴二〇九九
雲の上人春ごとに　朝一一四五

雲の上人も月たき夜半を悲しみ　[illegible]三〇一
雲の垣霞の軒も玉簾　金八七一
雲の梯花に戲れ　右二五〇
雲の通ひ路
　天つ風――心せよ　西王一三七四
　天つ風――吹き閉ぢよ　泰一七三六・寢四〇一・羽二四九
　天つ風――吹き閉づるや　吉天二〇九五
雲の通ひ路絶え果てて少女の姿　定二二一〇
蜘蛛の精靈千筋の絲を繰りため　土蜘二〇六五
雲の袖
　思ひ立つ空も重なる――　寢三三九五
　千重ふるや雪を廻らす――　融三三三
　花鳥のとぶさに及ぶ――　榮四〇八
雲の波煙も見えし松原の　草五〇七
雲の羽風
　遙かに上るや――　右三五一
雲の羽袖
　薄紫の――を返す舞姫　藤二七三三
雲の羽袖を重ねつつ　胡七八六
雲の羽袖を返し　志一三〇四
雲の旗手
　夕暮の――に物を思ひ　班二六〇三
雲の旗手の天つ空　白樂二四七一
雲の旗手も見えて夕暮の　錦木二三四四

雲の旗手をついて　[illegible]八五四
雲の花鳥春風に和しつつ　西王一三七五
雲の林（京都）
　紫野――　雲林四六三
雲の林の蔭茂き　櫻一三二八
雲の林の夕日影　夕三三一〇
雲の林を尋ねん　雲林四五八
雲の髮づら花の顏ばせ　楊三二一九
蜘蛛の振舞かねてしるしも　關寺一六一六・土蜘二〇六三
蜘蛛の振舞かねてより知らぬ　土蜘二〇六〇
蜘蛛の振舞げにもと思ひ　自二二四一・[illegible]二一五八
雲の八重疊を敷き　玉井一九七九
雲の八重山いかばかり　[illegible]六一四
雲の行くそたたやしろべ櫻狩　右道行二四一
雲は萬里に斂まりて　[illegible]二四五〇
雲晴れねども西へ行く　百二六七三
雲水
　心を誘ふ――の　[illegible]二二九
　行方やいづち――の　高野六〇六
雲水の粟津の原の朝風に　旅一二七二四
雲水の身
　上り下るや――は定めなき　舩辨二七七〇
雲水の身はいづくとも定めなき　殺道行一六三五
雲水の身は果て知らぬ　梅枝道行四三七
雲無心にして以て岫を出で　三笑一三八三

雲も上なき梢　嵐二〇四
雲もをさまり風もなし　弓三三四
雲や霞の如くにて　生二七一
雲來去す
　山青く山白くして――　熊野三二四七
曇らぬ神の時代かな　佐一二六八
曇りなき君の御影は久方の　羅上歌三三四七
曇りなき名の日の本や　源六次第一〇六三
曇りたき都の山の朝ぼらけ　放生道行二四五五
雲居寺（京都）（ウンゴジをも見よ）　白一三二七
雲居に翔れ時の間も急ぐ心の　小督一一〇〇
雲居に隔てありとも　花筐一五八三
雲居の月
　晴れし――も變らず　小督一一〇四
雲居の月をよそに見んとは　大原五四七
雲居の春ぞ久しき　右三四一
雲居の外に見し人も　竹生二〇三六
雲をしるべのよそに見て　竜次第二三五〇
雲をも分くる沖つ船　知二三三九
雲折りしきてそのまま　大江五六五
九郎（三國）　熊坂九四二
九郎（義經）
　いかにもして――を討たん　碁六四四
九郎大夫の判官義經　大原五三七
九郎大夫判官　正一三六八

藏人　[illegible]一二一五
藏人
　さぎの――　鷺一三二一
九郎判官を尋ね給ふ　碇二五四
鞍笠につつ立ち上り　八島三一五一
闇から ぬ夜の錦の直垂に　賞上歌一二五七
暗き所の燈火　景六四六
暗きに行かぬ有明の　杜六二七
冥きより冥きに赴く六道の　東岸二一七一
暗きより暗き道にぞ入りにける　俊寛一四二五
　鵜三三九二
鞍の前輪に押しつけ　實一二六一
くらべこし振分髮も肩過ぎぬ　井三四〇七
鞍馬川（京都）
　月遲き夜の――　鐵七〇六
鞍馬寺（京都）
　浮世に遠き――　鞍九五三
　忍びて出づる――　岡原一六二六
〔鞍馬天狗〕　九四七
鞍馬の奥僧正が谷　鞍九四九
鞍馬の少人牛若丸　烏三四二五
鞍馬の寺
　學問の傷に――へ御上せ　笛二五二三
鞍馬の寺に御座候ひし牛若殿　烏三四二四
鞍馬の山のうず櫻　鞍九五一

鞍馬山（京都）　鞍九四七
位も氏もけなげさもよき主なれば　橋二五一九
位山
　道道たらば――　円八九二
くり返す王の尚紙の掛繩の　長井一九七五
倶利迦羅
　三に――七大八大金剛童子　檀二〇三五・野守二四三三
倶利迦羅（富山）
　蠣波山や――志保の合戰　巴二三八四
倶利迦羅御嶽（奈良）
　寳山――　遊一二一三
倶利迦羅が谷（富山）　木曾八一八
倶利迦羅明王
　御矛を守りの――　遊一二一四
功力
　一乘の――ながらに　朝三三七一
　一僧一宿の――に引かれ　鵜飼三〇九
　五十展轉の――　賴三三〇八
　衆生稱念必得往生の――　遊一〇〇
　妙なる一乘妙典の――　錦木三三五六
　平等大慧の――　賴三三〇九
　妙典の――に引かれ　岡一一五〇
繰り言茂く　大瓶一七六五
苦しからず　鵜飼八三〇七・谷一九四六・望三〇一六
苦しからぬ事　[illegible]五六

苦しからぬ事そと一日見うずる　藍二四二
苦しからぬ人　鶴[illegible]二〇三
苦しみの海(クガイをも見よ)
世々生涯——に浮き沈み　春栄一四一三
身を——の面　阿三三
苦しみの海に沈む　天二一三八
苦しみの海に沈め給ひしを　藤戸二七四三
くると思ふた取ると思はじ　三輪二九八三
來る年の矢の生田川　熊次第五〇八
狂はするやうが候　櫻一三四
車
門の外法の——の音聞けば　東北二一九八
車爭ひ
賀茂の祭の——　野宮二四一七
車大路や六波羅の　熊野三三四七
車斬り
めぐりあへば——　熊五一九
〔車僧〕　九六三
車僧　車リキ九六三
車僧
浮世をば何とか廻る——　車九六五
浮世をば廻らぬものを——　車九六六
車僧あれば太郎坊の行者もあり　車九七〇
車の榻に通はん　卒一七二八
車の榻に百夜通ひし所を　通小七六九

車の段　百二六七一
車の物見もつつましや　通小七六九
車宿り(京都)　熊野三三四八
車寄の邊たる柴垣の　開一一四[illegible]
車を作る継の木　[illegible]八七[illegible]
車を並べ輿を續け　右二四
胡桃
鼻には——がなる　山△三一七五
胡桃にふける友鳥　鷺△九五一
呉竹の筧の水はかはるとも　[illegible]二〇八七
くれ竹の一夜を明かさせ　梅枝四三八
呉竹の夜の闇　嵐二〇八
暮れて行く秋の涙か村時雨　玉葛上歌一九五九
暮れなばなげの花衣　雲林四六六
暮れなばなげの花の蔭　雲林△四六五・志一三〇二
くれなゐ靡く旗のあし　知三四九
紅の御袴のそばをとり　志一三〇四
紅の狩衣の衣紋けたかくひき繕ひ　通小七七二
紅の涙に身をこがす　檜二六三三
紅の袴召されたる女性　雲林四六二
紅は園生に植ゑても隱れなし　安宅八七・賴三三〇八
くれなゐ深き顔ばせの　紅三〇八六
紅まさに老いたり　關寺一六一三
暮に數ある沓の音　遊三一〇三
〔呉服〕　九七五

くれは
綾引く木ならば——といへば　呉九八一
呉服の里(大阪)　[illegible]九七五
呉織　呉[illegible]九七五
くれはとり(呉服)
聞くに心も　[illegible]八五[illegible]
くれはとる手によそへつつ——と　呉九八[illegible]
今日も——綾のあやをなす　[illegible]四〇八
心たくれそ——　[illegible]一〇一
水のあや——くれくれと　[illegible]月二九四六
くれはとり怪しめ給ふ旅人の　呉上歌九八一
呉織あやに戀しくありしかば二村山　呉九八一
くれはとり綾の衣の浦里に　呉二番九七八
呉織あやの衣を砧に擣ち　[illegible]八[illegible]
呉織漢織
呉服の文字を和らげて——と　呉九八[illegible]
呉織漢織と申しし二人の者　呉九八〇
くれはとる手によそへつつ呉織と　呉九八一
紅蓮大紅蓮とたつて　[illegible]一九九
紅蓮大紅蓮なりとも　善知三八八
紅蓮大紅蓮の氷　氷二六六四
紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ　歌三六五・船橋二七六〇
紅蓮大紅蓮の氷に身を傷め　阿三九
紅蓮大紅蓮の氷をば終に解かす事　東岸二一七[illegible]
紅蓮の闇

内裏は——の如く　雪三三四〇
鐵の築地方四十里　盛七九三
黑鐵の嘴足劒の如く　求三〇七四
鐵の嘴を鳴らし　善知三九三
黑髮
嬋娟の——は亂れて　藍二四三
年ふればわが——も白河の　檜一六二七
黑髮のあかざりし別れ路の　花筐三五八七
黑髮の飽かで行く　譚一六八六
黑髮の飽かぬやいつの寢亂れ髮　玉葛一九六七
黑髮は土水の藻屑塵芥　檜一六三三
黑髮を荆棘の如く亂して　百二六七二
黑酒白酒の神酒たうべ　梅四三二
黑木の鳥居小柴垣　野宮二四〇七
黑坂(富山)　木曾八一八
黑谷(京都)　西行一二七八
黑谷法然上人　生二六五
〔黑塚〕　安達異稱一〇五
黑塚
安達が原の——に籠れる鬼の住家　安達一一七
陸奥の安達が原の——や　現一〇一七
〔黑主〕　志異稱一三九一
黑主　草子ワキ一二八一
黑主
大伴の——　草子一二八三・志一三九六

黑主が歌の心は薪を負へる山人の　雲林二六一六
黑主が歌の如くその樣賤しき山賤　志一三九五
黑の繪馬
よみぢの——を掛け　繪三四四六
會稽山(支那)
朱買臣は錦の袂を——に飜し　寶一三六〇
陶朱公は勾踐を伴ひ——に籠り　船辨一七七六
會稽の恥を雪ぎしも陶朱功を成す　船辨三七七七
會稽を雪がせ申すべし　松山天二六九二
會稽を雪がん　敦九六二
外人
かやうの——は然るべからず　敦九五二
廻雪の袖ならん　雪三一八九
廻雪の袖を飜し　放生二四六七
外祖
天より降る御神の——となり　玉井一九七九
廻文歌　鸚一一
快樂(ケラクを見よ)
光陰
一寸の——は沙裏の金　盛三〇九八
光陰の心惜しむべしやた　當一八五三
光陰惜しみても歸らぬ　賀七三八
光陰惜しむべし時人を待たざるに　高野六一三
光陰を惜しみ給へや　朝二三六九
黃纐纈の林

紅葉の秋の夕——色を含む　江口四八四
黃菊
水榮回として露潤す——　枕二八一七
皇居に參り跪き　代二五九
黃金の業現れて　右一三八〇
黃壤
魂——に去つて一十三年　海一八五
皇孫
地神の爲めに——を蘆原の中つ國に　御二九六六
荒村の野人　草薙八八一
皇孫は日向の國に天降り給ひ　淺一四八
皇孫をいつき給ひ　佐一三七三
黃石
姿を——と現し　張三〇五四
黃石公　張シテ二〇四三
黃石公にこの一大事を相傳す　張九六〇
黃香の晴り　敦一六〇
黃泉
上碧落下——まで尋ね　周二一一六
誰か——の責に隨はざる　敦二六四
黃泉中有の旅の空　春榮一四一四
黃泉の道をも免れう　成八〇一
廣宣流布
後五百歲中今少し——の時を　身二九五〇
皇大神

下つ岩根に宮居して――となり　御二九六七
皇大神宮神主　内こテ二七一　九八九
〔皇帝〕
皇帝　鶴ンテ二〇九五
黄帝
水上――の御宇より事起つて　自一三四〇
黄帝の貨狄が心　[illegible]三一〇二
黄帝の臣下に貨狄といへる士卒　自クセ一三四一・藤栄クセ二一五七
黄鐘
野花――春風を領し　[illegible]一一二一
皇國長く固く帝道遐かに昌んなり　氷二六八八
光伯女　海へ一八三
光明皇后
聖武皇帝の后――なくならせ　松山鏡二八七四
光明皇后の儔に　大佛へ一七五〇
光明遍照十方世界に漏るる方なき　誓一五五五
光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨　忠度一九一八
光明遍照十方の衆生を　當一八五四
光明遍照十方の誓ひ　柏六五九
曠野人稀なり　求二〇七二・女三四九八
廣林
この花――に開けたり　半二四九九
花葉様々のその姿を心なしとは　六浦三〇一五
花葉時を分かず　高砂一八六五

火焔
涙は却つて――となつて　砧八三七
火焔の輪塔あり　老五二七
火焔を放ち水を出だす　土蜘二〇六四
蝸牛の角の爭ひ　頼三三〇七
蝸牛の角の上にして　[illegible]三三六六
〔花月〕　九九九
花月　花[illegible]九九九
花月
それは養由これは――　花一〇〇四
管絃
詩歌――に至るまで　殺一六三九
管絃講　海へ一八四
管絃講にて御弔ひあるべき　天二一四〇
管絃講にて弔ひ申せ　經二〇八五
管絃講を以て弔らう　藤戸へ二七四七
華原磬　海一七六
管絃の御遊ありしに　殺一六三九
管絃の役者　海へ一八四・藤戸へ二七四七
管絃の役を爭ひ　梅枝四四〇
管絃の役を望み　富士太二六九九
過去因果經　春榮一四一三
過去久遠の大悲の光　盛三一〇六
過去塵點の如く　春榮一四一四
過去にてなせば現世にやがて報い　伸二三一三

過去の業障を果し後の世を助けん　[illegible]一六六六
過去遠々の間　[illegible]一六〇二
過去遠々の昔を思へば　[illegible]二一三
火爆足裏を焼く　[illegible]
華山（支那）
馬を――の野に放ち　鎗三四四四
花山に入つて日を暮らし　峯一七三四
華山には馬を放し　唐一八一三
花山の木を伐れば　[illegible]八七三
花實の種を中空の　[illegible]一七四〇
花實の時をたがへず　[illegible]一六六五
花實の折
心なき草も――は忘れめや　西行一二七六
四の時にも勝れたるは――　西行一二七一
火生三昧に入り給ひ　[illegible]一六〇一
冠者　[illegible]九四四・[illegible]一六二〇
火車
天よりは――降りかかり　俊寛一四四六
火車に業積む　阿三九
火車の責　錢一九八
くわするこくの仙女
李夫人は本は……――　花筐二九九二
華清宮にも宮前の楊柳寺前の花　[illegible]三〇三
花前に蝶舞ふ紛々たる雪　[illegible]六八・[illegible]一二五一・[illegible]一五〇
火宅

思ひの家ながら――を出づる道　芭二五三五
苦しみは身を燒く――のすみか　求三〇七三
三界無安猶如――　歌三六五
羊鹿牛車に乘り――の境を出で　春榮一四一三
われも――を出でにけるかな　東北二一九八
火宅の出車　東九六六
火宅の門を出でざれば　砧八三八
火宅の門を去りやらで　谷一九四九
火宅の門をや出でぬらん　葵一五八・野宮二四一九
火宅の柱にすがりつき　求三〇七五
火宅を出でたる　定二一一六
月神、
日神――を祟め申す　第一七七二
日神――蛭子素盞嗚と申すは　淡一四七
華頂山（京都）
昔遍昭僧正の浮世厭ひし――　西行一一七八
月輪
黄金の山を築かせては銀の――を　枇七八三
月氏七道の大山　富士山二六九〇
月天子
南無歸命――本地大勢至　羽二四九四
くわつと
大手が――開けたるは　鳥三四三三
左右へ――ぞ退き　八島三一五三
花鳥遊樂の瓊筵　松蟲二八六四

花鳥酒宴にまとはされ　土車二〇七三
花鳥風月詩歌管絃を專らとし　經二〇八八
花鳥風月の戯れ詩歌管絃の樣々に　生二七〇
貨狄
黄帝の――が心　遊三三〇二
黄帝の臣下に――といへる士卒　藤榮二一五七
流れ――が謀より出でたり　自一三四〇
火天　輪ツレ三三七三
火天
十二天のその中に――これまで　輪三三七八
畫圖にうつせる面影も　昭一五八一
畫圖に立ち添ひ　花筐二五九二
畫圖の屛風萩の戸闇の夜の錦　殺一六四〇
火難水難もろもろの難を除き　現一〇三二
火難の恐れをなす事なし　墨一五一三
くわの字はと問へば春は花夏は瓜　花一〇〇二
果報拙き者　元一〇八七
果報なき者　鳥二二九四
和風樂
花の春の琴曲は――に柳花苑　成八〇一
過分に存じ候　自一三四二
過分の振舞かな　藤榮二二六一
花木
陽に向へる――は又春に逢ふ　芭二五四一
花木の精　西行一一七六
火盆地獄は頭に火焰を戴けば　歌三六五

花陽夫人　成ツレ七九一
花洛
帝都を――と號し　田一五一二
果羅の旅
一行の――　弱三三一九
慈姑
白黒の――あり　草一七三七
還幸
はや――と勸むれば　大原五五〇
勸學の窓に入り僧正を賴み奉り　雷三三三七
勸學院の雀は蒙求を囀る　賴三三〇一
歡喜寺（京都）　定△二一一三
歡喜の心いくばくぞや　實一二五五
歡喜の心限りなし　盛三一〇八
歡喜微笑の賴みを含んで　田一九九八
看經
持佛堂に――して　藍八二二九
緩々と使されて眠れるが如く　咸八〇二
官軍
源家の――右大將賴朝　大佛一七五一
官軍おのおの競み居つつ　東方二一七九
觀見法界
一佛成道――　佛二七九一
勸請
大社は三十八社――の地たり　大社一五七八

三所權現を――申し　堤二〇二五
七社の神々を――申され　道明一八二九
天竺五臺山の文殊を――の地　九世九二〇
三熊野を――申し　俊寛一四二四
勸修寺左大臣の六代の孫　源氏△一〇三三
願書
祈誓の儀――を參らせう　木曾八二〇
菅相公の養ひに　雷三三三七
菅丞相　卷△五三〇
菅丞相昨日までは君恩を蒙る臣下　雷三三四一
勸進
東大寺の――　安宅九二
勸進帳　安宅九二
觀世音（クワンノンをも見よ）
石山の――　源氏一〇二八
岩戸の――　檜三六二四
清水の――を信じ　盛三一〇〇
娑婆示現――三世利益同一體　高野六〇三
道明一八三〇・朝三二六八
娑婆示現し給ひて我等が爲の――　盛三一〇二
生身の――を拜まんと　田一九九〇
慈眼視衆生現れて娑婆示現――　誓一五六三
南無や大慈大悲の――さしも草　三井二九九〇
盛三〇九六
守佛の――　春榮一四一三・夜三三六九

緩怠
全く――あらざる趣　正一三六三
緩怠なき由聞し召し開かれ　望三〇四五
歎冬誤つて暮春の風に綻び　雲雀一六四五
歎冬の影をあやまつ　松山鏡二八七七
願以此功德普及於一切　自一三三二
官人　貴狂言九九一・泉狂言九八九・鷺狂言一一二
一五・鶴狂言一〇九五・東方狂言二一七七
官人
玄宗皇帝に仕へ申す――　鶴△二〇九六
周の穆王に仕へ奉る――　西王△一五六八
秦の始皇帝に仕へ申す――　咸△七九二
官人駕輿丁御輿を早め　鶴二〇九九
官人立ち寄り拂ひけり　花筐二五八八
官人を引き連れ　一角二八三
官人を以て搜し出だし　天三二三三
觀念
一心不亂に――し　當一八四七
今更何の――をかなせる　善界一六〇五
稱名――の床の上　當一八四七
われ佛前に――し　舍一三八八
觀念の眠りを覺まし　寢三三九九
觀念をなしければ　第一七七四
觀音（クワンゼオンをも見よ）
大蛇は――の再誕　張二〇五三

觀音薩埵
志度寺の――　通一八〇
觀音薩埵の御再誕　田一九九〇
觀音懺法
亡者の責み給ひし――責み佗り　雷二六七
觀音寺の鐘の聲　道明一八三三
觀音の御利生　熊野三五五
觀音の慈悲
提婆が惡も　卒一七一四
賴みしままの――　[illegible]
觀音の佛力　田三〇〇一
觀音も同座あり　熊野三三四七
觀音力
念彼――刀尋段々壞　盛三一〇〇
關白
御堂の――この門前を通り　東北二一九八
桓武天皇
傳教大師――と御心を一つにし　當七三〇
桓武天皇に御請け申し　大江五五九
桓武天皇に仕へ奉る　金八七〇
官位を東屋の内に籠めて　源氏一〇三九
九會曼荼羅の柿の篠懸　安宅九一
疆を守る幽魂は夜月に飛び　生二六八
疆を守る幽魂夜月に飛ぶ　松山天一八九〇
旬を分つて五體と云木火土金水たり　東三三六

久遠
　過去――の大悲の光　盛三一〇六
久遠劫
　釋尊――のその昔　現一〇一六
君恩
　菅丞相昨日までは――を蒙る臣下　雷三四一
君子に私の言葉なし　昭一五八六
君臣親子夫婦兄弟ともに禮儀をなす　内三七六
群臣の選みに出だされ　花筐二五八二
君臣の道別雷の神　賀七四三
君臣の禮
　敬ふ者に從ふは――　夜三六七
群臣は聖人の御助け　咸八〇二
君親二つは二體の義　錦戸三三七二
君臣を重んじ義を全うして心猛く　張二〇五〇
君道を守らんのその誓願　鐘一四五七
軍茶利夜叉　葵一六六・船辨二七八五
軍茶利夜叉明王　安達二九・道成一八〇一・飛雲一六一九
軍茶利夜叉は火焔の炎を吹きかけ　調二三〇
ぐんでうず
　日本一の剛の者と――よ　寶一二六一
君邊を忘れ奴志　千一七〇三
群類
　魔道に沈む――を救はん　鵜飼三一〇

け

偈
　二句の――を書き添へ　菊八一〇
蹴上
　馬の――を懸くる事　關原一六二九
瓊筵
　花鳥遊樂の――　松蟲二八六四
荊軻　咸ワキ七九一
荊軻
　燕の國の傍に――秦舞陽と申す　咸七九五
景行第三の皇子　源太一〇六七
景行天皇第三の皇子　草薙八八六
景行天皇の御宇に至り　江島四九九
景行天皇みことのりの御名を　小鍛一一一七
輕軒九陌の塵に交はる　石三四九
警固あるべし　鶴三三八五
稽古の際　敦九五九
警固の者に申しつけ　大佛一七五四
霓裳羽衣の曲
　そよや――　陽三一二六
霓裳羽衣の曲をたし　羽二四九一
霓裳羽衣の曲をなせば　鶴二〇九九
けいせき
　王水の――を出でし道　松蟲二八六五
鷄聲闇からず　鐘八一四五五
荊臺
　柳條恨みを牽いて――に到る　遊三〇〇
繼體天皇　花筐子方一五七九
繼體天皇
　御即位をさまりて――と申す　花筐二五八四
化一切衆生皆令入佛道　通盛二九〇五
桂殿の間に餘りしぞかし　卒一七三六
けいの劍
　煬帝が――周室の光を奪へり　小鍛一一一六
傾盃樂を舞はうよ　放生一四六六
瓊粉金膏の假なる色を事ともせず　殺八一六四三
荊棘蒲朽ちて螢空しく去る　山三八〇
桂木の枝に鼓を掛け　綾一九〇
瓊門
　寂々たる――あり　光五七七
輕漾激して影唇を動かせば　雲林四六三
界蒼射樹を傳へて　竄三九九
桂林雨を拂つて松風を調む　女三四九〇
雞籠の山
　夜半の鐘の音――に響き　班二六〇六
鷄籠の山木隠れて　俊成一四四六

敎戒
人の――にて　竹雪一八八七
けうかる法師なり　鉢木五六三
叫喚(地獄)
等活黑繩衆合――大叫喚　求三〇七五
苦擧りつつ泣き叫ぶ聲は――の　大[illegible]五四八
敎外
敎內――を分たれ　大會一七七九
敎化して歸けう　卒一七二一
敎外別傳にしていふもいはれず　放下一四四六
髐骨
膚は――と衰へたり　景六三四
孝子の弔ふ功力によつて　松山鏡二八八一
曉鐘を數へ待ちつつるに　張二〇四六
敎主釋尊も羅睺爲長子と說き　木賊二二一四
堯舜の嘉例なれ　草子一一九八
堯舜の御代にも越えつべし　[illegible]三三三二
堯舜よりこの方　蟬一六七五
曉天より星を戴き宮中を拜す　源太一〇六五
氣疎き秋の野らとなり　夕三二一八
氣疎き姿　西王一五九一
氣疎き物の氣の人失ひし有樣　夕三一一八
敎內敎外を分たれ　大會一七七九
憍慢もつとも甚しう　卒一七二〇
憍慢の劍を揃へ　淸八五四
孝養　海一八七
摩耶夫人の――のお爲なれば　百三六七九
孝養に報せん　[illegible]五四四
孝養申したう候　[illegible]〇一八
下界
修羅王をもとの――に追ひ下す　俊成一四四五
地に又作めば――たり　羽三四八九
下界に追ひ下す　舍一三九五
下界に住んで神を敬ひ　[illegible]九三
下界の地には　正一三六四
下界の龍神　江島四九五・九世九六・綾一〇五七・和三〇三四
下界の龍神現れたり　竹生三〇四〇
下界の龍神の參會か　春日六七七
下向
賀茂へ御參詣御――の時　生六五
勅使に――申し　鵜祭四一五
下向道なれば　氷三六五三
下向道に赴き　當一八四一
下向道を忘れて　吉靜三八三
逆臣
この國と申すに――多き所なり　碇二五九
この國と申すに――多く　大原五四九
逆臣の黨を悉くとりひしぎ　松山天六八九三
逆鱗の餘りなれば配流みた近づき　松山天六八八九
下化衆生
秋の月の水底に沈むは――の象を　敦一三五
渇水に映る月影は――の相を得　[illegible]
海は下りて――の相を現し　[illegible]
無明谷深き[illegible]は――を表し　山三八一
下化冥闇の水に宿る　西行一一七一
化現
西王母……無量壽佛の――　[illegible]
業平は極樂の歌舞の菩薩の――　[illegible]六四
本地十羅刹女の――　[illegible]
華嚴
五時といつぱ――阿含方等　大會一七七九
華嚴の朝より般若の夕に至るまで　[illegible]一〇三六
華嚴の御法より般若に及ぶ四十餘年　[illegible]一九四
袈裟
香染の――を著け　[illegible]一〇七
罪障懺悔の――をかけ　放下一四四
不淨を隔つる忍辱の――　[illegible]一六六
華藏世界
御嶽は金剛界の曼荼羅――　[illegible]八一〇
袈裟かけ
法師が切るとて――たり　[illegible]一六九七
今朝よりは龍田の櫻色ぞ濃き　[illegible]一九三二
けしからず
聲かはり――　卒一七七
けしからず攝して候　鵜飼三〇三
けしからず物體に候　[illegible]一九三一

けしからず正しき由 歌三五五
化したる
その樣——人間 菊八〇九
けしたる宜禰御幸の先に進み 金八七一
化したる人 天三一四三・藤戸二七四九
下生
慈氏の——を待ち給ふ 高野六一一
化生
人倫ならぬ——の者 大江五五五
王法を傾けんと——して來り 殺一六四〇
化生と見るよりも 土蜘上歌二〇六一
化生の姿を現し 紅三〇九〇
化生の者とは申すべけれ 菊八〇九
化生の物に寄せ合はせ 橋二五一一
牙舍利
現化奇持の——の御相好 舍一三八七
外道
惡心——の變化 劍二三九〇
足疾鬼といふ—— 舍一三九五
解脱上人 第ワキ一七六七
解脱上人
笠置の——をば次郎と頼み 春日六七二
解脱の衣の袖ながら 夕三一一九
解脱の種を植ゑす 江口四八四
氣多神社（石川） 鵜祭所四一一
氣多明神 鵜祭シテ四一一
氣多の明神
能州——は靈驗無雙の神にて 鵜祭四一三
氣多不思議智滿大菩薩 鵜祭四一七
獸の雲に吠えけん心地 春榮一四一六
獸も足を立つべき地にあらず 通盛二九〇六
下知
唯一人の——によつて 賴三三一一
外忠
內恩——の威儀未練なり 雷三三四一
結緣
草木までも成佛の緣ある 遊三一九五
見佛聞法の—— 西王一一七一・土車二〇七八
見佛聞法のその——の功により 三界一六〇一
上人に——をなす 現一〇一五
常樂我淨の—— 松尾六八〇七
大慈大悲の觀音擁護の—— 田一九九七
多年値遇の御—— 盛三〇九六
天神同位の御—— 道明一八三〇
法の—— 芭二五三三
一時も——せばそれこそ卽ち佛心 身二九五三
聞法値遇の——に 舍一三八八
經藏に納め——の手に觸れ 菊三三七七
和光同塵の本願は——の始め 第一七七一
和光同塵は——の御始め 住一五四一・松尾六八四六
和光同塵は——の始め 蟻二三三・龍田一九二七
結緣に引かれ 鵜飼三一一
結緣の衆生に契り結ぶの誓 賀茂物七五六
結緣の衆生を擁護の神稿姫 源太一〇七一
結願
七日の御經——の夜 草薙八八四
下知に從ふ武士の 土蜘一〇八四
化女
化尼——の夢中に現じ來れり 富一八四九
下女やはしたの者までも 熊坂九三六
月下の門
僧は敲く—— 東北三二〇〇・[illegible]二二二四
結界
佛法——の地となすべし 白鬚一四六九
微妙安樂の——の衆となり 富一八五二
結界淸淨の地に入り定まれる 高野六一〇
〔月宮殿〕 鶴[illegible]二〇九五
月宮殿にて舞樂を奏せられう 鶴[illegible]二〇九八
月宮殿の有樣玉斧の修理とこしなへ 羽三四九二
月宮殿の白衣の袖も [illegible]
月宮殿の白衣の袂 鶴二〇九九
月宮の影に天降り [illegible]一四九八
月宮の月の桂 [illegible]
月宮の昔もかくやとばかり [illegible]
月宮を廻らす舞曲 [illegible]四九一

結句主を追つ下げて　烏二三〇三
月光地に鋪いて掃へども又生ず　三輪二九七九
月花門左近の櫻　[illegible]一五一二
月卿雲客うち團み　[illegible]五九七
月桂まとかなり　檜二六三〇
決定往生
　六十萬人——の御札　葬一五五二
月輪(クワツリンを見よ)
月天子(クワツテンシを見よ)
月[illegible](クワツチリンを見よ)
化鳥
　冥途にては——となり　善知三九三
化天耶摩天他化自在天　舍一三九五
化天耶摩天にてもなく　春一七四〇
健氣たることを仰せ候ものかな　仲三三一二
化尼　當シテ一八三九
げにありがたき法の道　身上歌二九五五
げに今とても神の代の　淡待謠一五一・岩上歌二九三　右待謠三四九・檜尼待謠二八五〇
げに枝を惜しむは又春のため　雲林上歌四六二
化尼化女の夢中に現じ來れり　當一八四九
げにこれも旅の宿　鉢上歌二五五三
げにさぞな所から　遊上歌三一九五
げに島隱れ入る月の　草子上歌一一八七
げにや古も月には千賀の鹽竈の　融上歌二三二五
げにや歌の樣語るにつけ　鸚クセ三三
げにや思ふ事叶はねばこそ　傳クセ二七九[illegible]
げにや聞きても信夫山　錦木次第二三四三
げにや心なき草木なりと申せとも　老クセ五二七
げにや年を經て　櫻クセ一三三六
げにや流れては妹背の　錦木上歌二三四五
げにや人の親の心は　藤戸クセ二七四五
げにや夢の世の何か喩へに　烏上歌二三九七
げにや世々毎の　百上歌二六七[illegible]
げに世の中に憂き事の　昭上歌一五八三
げに治まれる四方の國　岩次第二八六・老次第五三[illegible]
家人
　現在の兄を——といふ　春榮一四〇八
　佐渡の島の御——本間の三郎　[illegible]二〇〇四
　譜代召しつかひ候——　春榮一四〇五
家人にだにも恐るれば　烏三三九九
下人に引かせ　關原一六三〇
下人をば何とて縛め給ふぞ　卷二八〇六
下馬は渡りもなかりけるか　蟻二一七
氣比の海宮居久しき神垣　安宅八二
檢非違使五位尉の源の義經　八島三一五一
けふ(狹布)
　細布衣陸奥の——の寒さを　鉢二五五〇
今日思ひ立つ旅衣　船辨慶次第二七六九
今日思ひ立つ道のべの　谷上歌一九四四
今日かざす[illegible]の玉鬘　[illegible]
今日東すは明日は雲とぞ降りなまし　[illegible]四六六
驕士　[illegible]二四八二
　月はかの如来の有の——　善知三八七
けふの薄衣
狹布の郡の名にし負ふ細布の　錦木[illegible]三五
狹布の里　錦木所二三四一
今日の日も夢の現そ　[illegible]七四二
狹布の細布
　陸奥の——胸合はず　梅二六三四
狹布の細布胸合はじとや　錦木二三四八
狹布の細布をりをりの　錦木次第二三四四
狹布の細道分け暮らし　錦木二三四九
今日は西都に恥を清むる屍たり　道明一八三三
今日は西都に蘇さん　藍二四五
今日はなごしの祓なるらん　水無月二九四二
今日早稲の神祭　[illegible]二〇二九
今日また明日の昔　成下二四四[illegible]
今日見ずは悔しからまし花盛り　[illegible]九七〇
今日も暮れぬと告げ渡る　[illegible]四八
今日もくれはとり蹉のあやをなす　呉四〇八
今日も空しく暮れなんとす　歌三六三・大原五四三
煙
　閑窓に——絶えて春の日いとど　雲雀二六四〇
煙は竹を白雪の　竹生一八八五

煙滿ち來る小松原　道成一七九三
外面は菩薩
　女人は――に似て内心は夜叉　現一〇一七
下郎は筋なき者にて　藤戸二七四三
快樂
　人民――の御惠み　給三四四七
劒
　惡魔降伏の――　羅一六九六
玄翁　殺ワキ一六三三
玄鶴
　一聲の――空に喚く　張二〇四九
見我身者發菩提心　安達一一三〇・藥雲二六二〇
見我身者發菩提の功力を受け　船辨二七六四
懸河瀰々として巖峨々たり　山三一七七
懸河流瀉の御聲にて　現一〇一三
源九郎義經　攝一六六一
絃管
　旅行の道の慰めに――の數を奏し　昭一五八一
源家の官軍右大將賴朝　大佛一七五一
原憲
　雨――が樞とも濕ふ　大原五三八
　雨――が樞を濕す　半二五〇三
阮浙と申す者　大瓶△一七六二
元弘の合戰　檀二〇〇四
滅劫
　第九の　人壽二萬歳の時　白髭一四六八
〔現在七面〕　一〇一一
現在の兄を家人といふ　春榮一四〇八
現在の果を見て過去未來を知る　安宅九八
賢才人に越え器量勝れ　張二〇五〇
源三
　江田の――　正一三六九
幻相
　世間の――を觀ずるに　柏六六一
げんざう申さう　翁△九
見參
　そと――に入れ候べし　熊野三三四三
〔源三位〕　賴異本三三九七
源三位賴政合戰にうち負け給ひ　賴三三〇三
げんし
　人間有爲の轉變は――の中に現れ　吉五〇九
源氏（光源氏をも見よ）
　須磨の浦――の住み所　忠度一九一七
〔源氏供養〕　一〇二五
源氏この浦に移され給ひ　絃一〇五二
源氏に終に供養をせざりし科　源氏一〇三〇
源氏の供養をのべ　源氏一〇三〇
源氏の大將かりに人間と現じ　須一五〇一
源氏の大將住み給ひし在所　須一四九三
源氏の中將と聞えしは　半二五〇四
源氏の旗
　白鷺の群れゐる松見れば――を　盛八五二
源氏の巻の名なれや雲隱れして　須一四九九
源氏の物語　源氏一〇二二
〔絃上〕　一〇四三
勸賞行はるべき處に　正一三五八
絃上青山獅子丸　絃一〇五七
玄弉三藏　代△一四八六
肩上の笠には無影の月を傾け　葛上歌六九三
賢聖の障子に似せ繪にこれを　昭一五八五
絃上の主たりし村上天皇　絃一〇五六
還城樂　源太一〇七三・高砂一八七二
驗者達はわが本坊に　道成一八〇三
劒樹地獄の苦しみは　歌三六五
劒樹共に解す　歌六五
現受無比樂後生清淨土　江島五〇二・鳴三三七七
源氏六十帖
　石山に籠り――を書き記し　源氏一〇三〇
賢心といへる沙門　田一九九〇
賢人二君に仕へず貞女兩夫に見えず　錦戸三三六八
賢人無雙の弓取　錦戸三三七二
賢人も山より出で賢人も君に仕ふ　呉二六九
沅水羅紋海燕回る　黄三〇一
現世安穩後生善處と晉念する　小督一二三六
玄宗　皇ワキ九八九

驗僧
　劒の——の法味に引かれて　龍田一九三一
玄宗皇帝に仕へ申す官人　鶴△二〇九六
玄宗皇帝に仕へ申す方士　楊三一一五
玄宗皇帝の鍾馗大臣も　小鍛一二一六
玄宗華淸宮にも宮前の楊柳寺前の花　遊三二〇三
眷族に酒呑童子と呼ばれ　大江五六〇
源太（景季）
　箙の花も——もわれさきかけん　箙五一九
〔源太夫〕　一〇六一
源太夫
　熱田の——が娘橘姫の靈魂　草薙八八六
源太夫神　源太シテ一〇六一
源太夫の神と顯れ東海道の旅人を　源太一〇六九
現當二世の爲に　道明一八二九
現當二世までの道を照らし　松尾一八四七
現當の罪を果す　千一七〇六
源太景季　箙五一〇
乾闥婆王
　樂——　春日六七八
　樂音——　春日六七八
現住奇特の牙舍利の御相好　舍一三八七
嚴重の奇特を見せん　調二二三〇
還著於本人　田三〇〇一
賢女の名を磨く鏡　松山鏡二八八〇
玄冬素雪の寒き朝　高砂△二八六九
玄冬の朝も寒からず　善知三九一
驗德
　双の——を顯し　調二二二八
劍の精靈嵐となりて　草薙八八八
權扉を押し開き　木賊八二一・草薙八八三
玄賓僧都　三輪ワキ二九七五
元服
　殿上にての——の事　杜六二六
　箱王を申し請け、——せさせばや　元一〇八〇
〔元服曾我〕　一〇七五
見佛の緣　舍一三八八
見佛菩薩舞ひ給ふ　代一四八九
見佛聞法ありとも　當一八四五
見佛聞法の數々　東北三〇〇
見佛聞法の結緣　西行一一七一・上東三〇七八
見佛聞法のその結緣の功により　善界一六〇一
源平藤橘四家　鞍九六一
源平の合戰の巷　八島二一五一
源平兩家の童形達　鞍九五三
眩惑すれども瞼がばこそ　東九七二
顯密兼學
　密宗の奥儀を傳へ、——の所　善界一六〇〇
監物太郎　知三四九
監物太郎賴賢もあの汀にて　知三五〇
顯教[illegible]の首[illegible]　鞍九五八
見聞の益　春日六七[illegible]
濁流淸く澄る　鵜二二[illegible]
元暦元年三月十八日の事　八島[illegible]二五
建禮門院　大原[illegible]五五
源六
　狩野の——　園一六九七
眩惑（[illegible]）を見よ

こ

子

憂き時も──を見はこそ慰む　櫻一三三六
心は──にや迷ふらん　藍二三七
心を留むる──もなし　花一〇〇一・卒一七一九
千代もと祈る──の爲　熊野三三四五
夜の鶴の──を思うて籠のうちに　經二〇九〇
わが──ゆゑに捨てん命露程も　海一七九

故

──の──には百八の數珠　自一三四三
小鮎さばしるせせらぎに　鵜飼三〇六
小家がちなる軒のつまに　夕三一四

公案

坐禪の──何と心得候べき　放下二四四七

紅葉（モミヂをも見よ）

烏鵲の橋の下に──を敷き　天二一四五
紅花の春の朝──の秋の夕暮も　檜二六三三
林間に酒を煖めて──を燒く　紅三〇八六
紅葉醉乾いて牡鹿鳴く　項五九〇
紅葉青苔の地
堪へず──又これ凉風　紅三〇八八

紅焔の旗を靡かし　熊五一八
紅霞浦を隔てて人煙遠し　龍虎三三六一

紅顏

朝に──あつて世路に樂しむ　檜二六三〇
朝に──あつて世路に誇る　朝二三七〇
紅顏空に消えて華麗を失へり　藍二四五
后宮に定め置き給ひ　楊三一一四
後宮の佳麗三千人　皇九九一
後宮世にましましし時だにも　楊三一一九
弘徽殿に神鳴する　雷三三四二
弘徽殿の細殿に人目を深く忍び　雲林四六八
後記にも佳名を留む　八島三一六一
紅錦繡の山　江口四八四
紅錦の御衣を着し　西王一五七五
紅花の春の朝紅錦繡の山　江口クセ四八四
紅花の春の朝紅葉の秋の夕暮も　檜二六三三

紅閨

翠帳──に枕をならべし　江口四八五
翠帳──の粧ひ昔を忘れず　老五三七
公家うち負け給ひ　櫻二〇〇四
江月照らし松風吹き　弱三三二五
孔子は鯉魚に別れて思ひの火を胸に　天二一三四

恒沙

十方──の諸神　小鍛一一三一
江上數峯青かりし術　一角二七九
恒沙の眷屬引き連れ　春日六七八

紅樹

山迤邐として霜傍せる──　[illegible]三八一七

紅燭

宴罷んで──猶篠れり　樂一七三六
紅色の花の裾ひ衰へて　花筐三五八三
紅色を事とし　殺一六三九

紅雪

仙家には紫雪──とて藥の中にあり　[illegible]六六六

勾踐

陶朱公は──を伴ひ會稽山に　船弁七七六
勾踐の本意を遂げ　[illegible]二七七六
江村の漁火愁ひに對して人々　道成一七九五
江村の漁火もほのかに　三井寺[illegible]
後世に知らるる者はただ和歌の友　東北二一九九
後世に猶望みあり　鏡一四五三
後代の爲　木賊八二〇

小歌曲舞

わが子の常は──に好き　木賊三三一
後宇多の院に仕へ奉る臣下　[illegible]
公庭に隙なき身　[illegible]二〇四五
江天渺々として水光平らかなり　[illegible]一四六五
功成り名遂げて身退くはこれ天の道　[illegible]
功成り名遂げて身退くは天の道　[illegible]七七七
紅梅殿　[illegible]

紅梅殿や老松の　右一四六
紅波楯流し數度に及べる處も　小督一一一七
紅波楯を流し白刃骨を碎く　巴五一六・錦三三〇七
紅波楯を流す旌旗に落花を亂す　舍七二四
弘法大師とて貴き人の御笛を傳へ　笛三五六
興福寺へ三つの寶を渡さる　海一七六
江北の柳蔭　蟻二一八
功名
　最期に臨んで——を惜しまぬ者　巴一三八四
後名の嘲り
　惜しみても惜しむべきは——　元一〇八九
鴻門楯破れ　安宅八一
口論
　假初の——により　羅三三五三
　闘の清次と申す者他鄕の者と——し　籠三三八六
孤雲
　笙歌遙かに聞ゆ——の上　實一二四七・善一五六三
　笙笛琴箜篌——の響　須一五〇二
　簫笛琴箜篌——の外に充ち滿ち　羽二四九三
　簫笛琴箜篌——の御聲　富士山二六九四
五蘊もとより皆是空　生二六八・松山天二八九〇
五戒を亂さず慈悲を起し　輪三三七九
〔小督〕　一〇九五
小督　小督ツレ一〇九五
五更の雨もやむ事なし　蟬一六七四
五更の一點鐘も鳴り　長三一四五
五更の一點より夜はしらじらと　東大一〇七一
五更の天も明け行けば　遊行三〇四六
御幸の山路　大原五三七
木隱れ笠　[illegible]二九〇
木隱れてそれとは見えじ梓弓　小町上東一二二九
木隱れてよしなや　卒一七二一
木隱れの月に現れぬ　雲林四〇四
木蔭の塵を掃かうよ　高砂一八六一
〔小鍛冶〕　一一一一
小鍛冶
　三條の——宗近　小鍛一一一三
黃金作りの太刀刀　實一三五七
黃金の砂を地には敷き　東七九二
黃金の岸
　譬を力の助け船——に至るべし　柏六六三
黃金の言葉多くせば　實一二五七
黃金の鈴を結びつけ　弓三二九
黃金の日輪を出だされたり　富七八三
黃金の箱に小龍を入れ　大社五八四
金の峯の光も輝く　嵐二二一
黃金の山を築かせては銀の月輪を　鵜七八三
古歌の喩への心をもつて　志一三九六
木枯
　野の宮の森の——秋更けて　野宮二四〇九
木枯に吹き合はすめる笛の音を　小督ツレ一一〇九
焦がるゝ胸より出づるほと見える　玉鬘一九六八
こがれ行く旅をしのぶの宿哉　花筐上歌二五八七
古歌を盜むは道理なり　草子一一九〇
後漢の帝に仕へ奉る臣下　天二一三三
呼韓邪單于　昭一一七七
呼韓邪單于
　胡國の夷の大將——が幽靈　昭一一九〇
御機嫌を以て申さうずる　下一七〇三
御機嫌を以て申し上げう　土蜘二〇五八
弘徽殿（こうきでん・こきでん）
小狐と裏にあざやかに　小鍛一一二三
小狐丸
　稻荷の神體——を　小鍛一一二〇
故鄕
　住まぬ時には——もなし　百二六七七
故鄕に歸つて纔かに七世の孫に　鳥三三一四
故鄕の砧聞えしとたり　砧八三〇
故鄕の花といふ鳴にて　俊成一四四三
故鄕へは錦を着て歸る　實一三六〇
五行
　七德——の姿　嵐四五一
五行の神
　天に——まします　逆△二三一〇
五行の神まします木火土金水　式一四〇七

五逆
愛着慈悲心は達多が――に勝れ　熊坂九三七
十惡を導き――を憐む　巻二八一
調達が――の因に沈みはてにし　身二九五三
五逆の達多は天王記別を蒙り　海一八五
漕ぎ行く人は誰やらん　卒一七二一
漕ぎ行く舟の跡見ゆる鳰の浦わも　白鬚一四六五
こきりこの二つの竹の　放下二四五〇
こきりこは放下に揉まるる　放下二四五〇
呉郡(支那)
綾といつぱ唐土――の地より　呉九八二
吾今三點楊枝淨水唯願降臨　朝二二六八
古今に至る神道を表し　春日六七〇
古今の序　高砂一八六二
古今萬葉の勅撰　草子一一八九
御供田
當社二の宮の――　淡一四四
虚空に音樂聞え異香薫じて　吉天三三九五
虚空に音樂聞え花降りたる　竹生二〇四〇
虚空に闕の聲聞ゆ　葵二六〇
虚空に花降り音樂聞え　羽二四八七
黑雲鐵火を降らし　田二〇〇〇
黑雲にうち乘つて虚空に上らせ給ひ　雷三三四三
黑雲俄かに立ち來り　生二七二
黑衣の天人
白衣――の數を三五に分つて　羽二四九二
こくか
身を――に碎きても　自一五四二
國家を改め萬民を救へ　弱三三二二
國家を護る誓ひ　采四〇七
黒縄
等活――衆合叫喚大叫喚　東三〇七五
谷水の彭祖が七百歳を　俊寛一四一六
叢城山(支那)　張全二〇四八
獄卒阿防羅刹の苔の數　砧八三七
獄卒は標をあてて追ひ立つれば　求三〇七五
極重悪人無他方便　大原五四三・柏六五八・土車二〇七九
小口に立つて　烏三四三六
國土安全長久の　浦上秋七八五
國土安全の勸めをなし　現一〇一三
國土安全のみぎん　金八七〇
國土安全を守り給ふ　巴三三七八
國土安穩に四海波靜かたり　采四〇九
國土萬民を漏らさじの大悲の影　田一九九一
國土豐かに榮ゆくや千年の山も　氷二六五五
國土豐かに民厚かれと安全を守り　松尾二八四六
國土豐かに民あつき　御二九六一
國土を守る誓ひあり　鐘一四五七
後句なかりしかば　三井二九九九
酷熱(地獄)
炎熱――無間の底に　求三〇七五
極樂
・唯稱彌陀得生――　大原五四三・柏六五八・土車二〇七九
極樂世界
西方――三十六萬億同號同名　隅一五三三
さたがらここぞ――に　誓一五六一
極樂世界と申してめでたき所の　大原五四九
極樂世界に行きぬれば　實一二五五
極樂世界の御法の聲　佛一七九七
極樂の內ならばこそ惡しからめ　卒一七二五
極樂の臺の緣と　初二五七六
極樂の歌舞の菩薩となり　誓一五六二
極樂の九品上生の臺　柏六五九
極樂の東門
天王寺の西門を出でて――に向ふ　弱二三一五
極樂の彌陀誓願の誓ひかや　籠三三九七
小車
因果の――の　竹八二八
谷漣一滴の水を納め　一角二七九
御願圓滿國土成就　羽二四九四
虎溪(支那)
廬山の――にも劣らぬ光　三笑二二八七
廬山の古――を去らぬ室の戸の　松尾一八六四
虎溪を出でし古も　花一〇八六
虎溪を去らぬ禁足　木賊二二一三

苔衣
かたしくや苔の木蔭の　野宮二四一六
苔衣着たる巖はさもなくて　白樂二四七五
苔に露けき袂にや　野守次第二四三三
苔の下道たどり來て　松山天六八八七
苔の袂やせめてたゞ乾かざらめや　[illegible]一五一三
苔の露より滴りて波濤を疊む萬水　山[illegible]一八〇
苔の筵に法をのべ　鐘[illegible]一四五六
苔は滑りて足もたまらず　石一三七七
苔紛々として舊銘を埋む　項五九七
苔を身に着て椎の露を甜め　一角六八一
苔を身に着て年は經れども　東方二一八一
五穀成就福壽圓滿　大社五八五
五穀成就も國土を守護し　賀七四四
五穀成就もこの時たれや　小鍛一一二三
胡國とやらんに捨て置かれ　砧八三〇
胡國の夷の大將呼韓邪單于が幽靈　昭一五六〇
胡國へ遷され　昭一五八〇
ここに消えかしこに結ぶ水の泡の　土蜘二〇五八
ここに來て昔ぞ返す在原の　井ツ三四二一
ここに又吉武藏相摸の境に　江島ク七四九八
ここに御幸を住吉の　岩上歌二九〇
五湖の煙濤
小船に棹さして――を樂しむ　船辨二二七七
五湖の煙の波の上かくやと　白樂二四七二

九つの夜半にもなりたりや　籠三三九六
後五の時代に至るまで　[illegible]一八二一
後五の時代の今更に　舍一三八八
九重
見渡せば八重一重げに――の春の　田一九八九
九重にいざや歸らん　[illegible]八四一
九重に咲けども花の八重櫻　西行一一七七
九重の雲居を出でて　[illegible]行一一一五
九重の空ものどけき春の色　[illegible]行一四六四
九重の花盛り　熊野三三四七
九重の花の名殘を尋ねてや　大原一五四〇
九重の春ぞ久しき　[illegible]四八
ここは所も白河の　檜上歌二六三六
後五百歳中今少し廣宣流布の時を　身二九五〇
後五百歳の時　現一〇二三
後五百歳の佛法既に末世の　舍一三八九
後五百歳の佛法を守るべし　白[illegible]一四七〇
五劫思惟の本願なり　土車二〇七九
心あてたる日に向ひ　弱三三三四
心あてにそれかあらぬか　賀茂物七五七
心あらん人に見せばや津の國の　[illegible]五三
心あり顔なれども　三井二九八五
心あり顔にて優しうこそ候へ　[illegible]二六一五
心ありて休むか　志一九五
心掛帶の引きかへて　[illegible]八六六

心變り
われ等若に――申由　[illegible]
心こそ厭へ
姿が世をも厭はばこそ――　卒一七三三
心詞に現るるその風情しかりけり　[illegible]
心言葉は人の情　[illegible]
情詞を幾千[illegible]文をたす　[illegible]
心さえて道ある友人の　[illegible]
志の末通りけるか　[illegible]
志の者　實一三四八
志を知らざらんは鬼畜には劣る　一角六八[illegible]
志をば報せん　[illegible]
心ざまよしありて　[illegible]
心すたほたるにより　[illegible]
心せよ
海士の子どもも――　[illegible]二五一
心せよ胸の月　[illegible]二六四
心空たる花筐　花[illegible]五九[illegible]
心ただ誠の道に叶ひなば　[illegible]一二〇・土歌・六〇四
心づからやうつろふと見ん　雲林四六一
心づくしの秋風に海は少し遠けれど　松風六八六
心づくしの秋風に木の間の月ぞ　[illegible]九
心づくしの木の間の月　[illegible]一九七・土蜘九六二
心づくしの春の夜の　皇上歌九九[illegible]・國[illegible]一六三六
心解けて物語り　[illegible]五

心とむたと思ふばかりぞ　江口四七七
心たき草木も花實の折は忘れめや　西行一一七六
心なき山賤の身にも應せぬ花好き　小噺三四五九
心なき山賤までも尊みて　杖道行六八一六
心なくれそ呉織　安宅一〇一
心なしとは誰かいふ　六浦三〇一五
心なの村雨やな　熊野三一五二
心に思ひ口にいふ妄舌の縁　江口四八五
心に知らぬ科なれば　蟻二二〇
心に任せぬこの身の習ひ　[illegible]八六七
心の秋の花薄穂に出で初めし契り　定二一〇九
心の池のいひがたき　淡一四三・實一三五六
心の池のいひは離さじ　綾一九七
心の色はおのづから　小鹽三四六六
心の鬼を白河の　殺一六三六
心の鬼
　魂は身を責むる――となり　船弁二七六〇
心の鬼の身を責め　歌三六六・水無瀨二九三四
心の猿　笑四〇六
心の下簾つれづれと　雲林四六八
心の師とはたり心を師とせざれ　熊坂九三七
心の種蒔きて　淺上歌一四三
心の月
　われは曇らじ――　通小七六八
心の月ぞさやけき　現一〇一三

心の月の御舟はそこと　玉葛一九五九
心の科
　憂きは――ぞとて　谷三一六
心の花
　賤しき埋木なれども――のまだ　卒一七三三
　色香にめでしも皆これ――　雲雀二六四五
心の花の色香まで　志一三九八
心の花は殘りけるぞや　西行一一七四
心の花開け　笑四〇八
心の花も盛んにて　西行一一七三
心の花もしをしをと　千一七〇二
心の花を手向とて　第次第一七六九
心の隔て
　捨てても廻る世の中は――なり　梅枝四三六
心の水
　妙なる法を得るなるも――　笑四〇六
心の水の濁りを澄まし　佛二七九〇
心の水は濁り江に引かれて　夕三一八
心の水も底ひなく　井三四〇六
心の闇
　海士人の――を弔ひ給へ　鵜三三八三
　いつかは晴れん――の　元一〇八八
　かきくらす――に惑ひにき　錦木三三五四
　かきくらす――のひたすらに　藍三三三
　もとよりも――はありぬべし　弱三三一八

心の闇の夢ともなく　實一三五一
心の闇はまだ晴れず　[illegible]三三〇〇
心の闇を晴らすべき　綾一九四
心は子にや迷ふらん　[illegible]三三七
心は空に墨染の　[illegible]一五五三
心は空にたりやせむ　[illegible]一七三六
心は西へと一すぢに　[illegible]一五三一
心は茅店の月に嘯き　[illegible]三一三〇
心は花にならばこそなさばたらめや　小[illegible]四五九
心はもとより慈悲の行　大江五六二
心一つに思ふ思ひ　千一七〇七
心一つに怠らず　浮三二四
心菩提心を勸めて善殊に深し　夕三二一四
心勝りの閨の人　[illegible]一六六一
心亂れ
　風の狂ずる――に　三山二九三三
心許なく
　母の御氣色――　藍三三四
心もともに澄む月の　代待謠一四八七
心も西へ行く月の　實一二五四
心も惑ひ肝を消し　安達上歌一一八
心和らぐ道
　歌の遊びこそ――となれ　草子二一八七
心ゆるすた南無阿彌陀佛　[illegible]一八四二
心よりより狂亂して　蟬一六七九

心弱き身に任せては叶ふまじし　熊野二二四五
心を砕く端となり　熊野三三四二
心を汲みて知る人の情の盃を　盛一六六五
心を誘ふ雪水の　西次第三二九・狂次第一六三五
心をさへに筑紫人の　藍二三六
心を饂とせされ　熊坂九三七
心を知るも法の人の　芭二五三五
心を知れば盲龜の浮木　鯉二三八一
心を種として言葉の花色香に　鬮手一六一四
心をつくさせられ　七騎一三三〇
心を轉せずそのままに思ひ沈む　土蜘二〇九九
心を留むる子もなし　花一〇〇一・卒一七一九
心を友と菅筵の　高砂一八六一
心を述ぶる和歌の友　雨三三七
心を隔くに隔てはなし　内三七四
箇々圓成の道すぐに　東岸二二七〇
ここを去ること遠からず　柏六五九・誓一五六四・當一八五二
ここを去ること遠かるまじ　實一三四八
ここを先途と戰ひしが　八島△三一五五
ここを先途と見えたるぞや　夜三三七三
御祭
　神所の——様々なれども　和三〇三一
　年の極めの——　和三〇三〇
小宰相局　通盛ツレ二八九五
小宰相の局乳母を近づけ　通盛二九〇一

御相好　三輪二九八六
五相成身の峯を開き　大會一七八〇
こざかしき事を申す　橋一二三
こざかしき申し事　元一〇七
こざかしき者　安宅△八七・正△一三六六・長△一六四二
御座所
　天子の——にこそ紫雲は立つ　國八九五
御沙汰捨てさせ給ふな　鉢二五六二
小澤の刑部友房　望三〇四三
御座船
　あれに見えたるが——にて　七騎一三一七
　遙かの沖の——に追ひつき　知二三四三
御座船になくて叶ふまじ　景六四三・大佛一七四九
御座船も兵船も遙かにのび給ふ　敦一三一七
御座船を中にとりこめ　碇二六一
御座船を龍頭鷁首と申す　白一三四二・藤榮二二五八
小三郎
　正田の——が進んでかかるを　鞍一六九七
ござめれ
　入相——急が給へ　通盛二八九七
　西塔山伏——　攝一六五八
　千滿殿——　三井三〇〇三
小猿
　壬生の——　熊坂九四一
御座を直され　攝一六九九

興山(去来)
　笠は重し——の雪　鳥六三三
興山にあられとも笠の雪の重さとよ　百二二八八四
巾子
　冠の——　巻四三二・雲林四六九
こしうに歸る身の上かと　鳥三三一四
腰掛の石
　蜂子の御前の——　大原△五八三
来し方いづくなるらん　蟬三三九
来し方戀しや　野守一六二三
腰刀を抜き持ちて　鵺百二二七〇
来し方もいづくならまし　藤榮二二四八・盛三五四八
来し方行く末をかがみて　東八五三
五色
　三重の高欄——の幣　鶴七二〇
　瀧の水——に見えて　花二〇〇六
　壇に——の幣帛を立て　夜一六四四
五色にいかで染みぬらん　當一八四三
五色に見えし瀧波を　養二二〇三
五色の雲も輝き出づる　内三七九・綸二四五一
輿車
　貴賤の花見——の　小鹽二四六三
腰車(剣法)
　八方拂ひや——　鳥三四三七
輿車はいふに及ばず　通小七七〇

期したる事
かねて――なれば 横二〇一五
腰鼓
天の探女は波の―― 岩二九四
後日に口がきかれまい 鉢△二五六三
五日の風も枝を鳴らさぬ 松尾二八五〇
五日の風や十日の雨 東方二一八〇
五日の風や十日の天が下 養三一三九
五時といつぱ華嚴阿含方等般若法華 大會一七七九
越の長濱(石川) 鵜祭四一三
腰の物
頭の殿よりこの御――を 烏三四二三
小柴垣
黒木の鳥居―― 野宮二四〇七
五時八数
一代の数法は――をけづり 大會一七七九
世尊の数法は――に配立し 現一〇一二
五十展轉の功力 賴三三〇八
五十展轉の隨喜功德品 通盛二九〇〇
五十二類もわれ同性の 鵜二三九〇
五十年
盧生が見し榮華の夢は―― 鉢二五五五
五十年の榮華も盡きて 置七八七
兒島(岡山)
御恩賞に――を賜はつて 藤戸二七三九
子島寺(奈良) 田一九九〇
小姓
あれ程の――ひとりを 關原一六三一
胡床
大床の――に參着申し 成七九九
五常
仁義禮智信の――を守りつつ 經二〇八八
五障
女は――の罪深きに 葛六九六・夕三二一七
後生こそは悲しけれ 盛三一〇一
五障三從
女は――の罪深き者なれば 東北△二一九六
五障三從のこの身なれば 佛二七九〇
後生淸淨土
現受無比樂―― 江島五〇二
後生善所
夫の――をも祈らばや 柏六六〇
母上の現世安穩――と祈念す 小袖一一三六
後生善所をも思はず 攝一六五四
後生善所をも誰か賴まん 盛三一〇〇
五常正しき弓取の末こそ 烏三三〇五
五城の垣重なほけれども 江島四九二
五障の霞の晴れがたき 船辨二七六四
五障の雲霧も今みなつきぬ 水無月二九四三
五障の雲のかかる身を 誓一五五七
五障の雲の隙よりも 竹雪一八八四
五障の雲晴れて 三井三〇〇一
五常の道に叶ひ 内三七七
小姓一人をきればとて 橋二五一八
五常樂
煩惱の雲晴れて――を打ち 富士太二七〇七
五尺三寸の大太刀をするりと拔いて 烏三四五七
五者佛身云何女身 梅枝四四四
小尉
津守の―― 雨三三五
御書所
貫之は――を承りて 蟻二三〇
御所五郎丸 夜ツレ三三五七
古書を寫すが如く 木賊八二一
小次郎(牧野) 放下ツレ二四三五
小次郎(傳) 土車シテ二〇六九
小次郎の兄 放下シテ二四一五
後白河の院の御宇 忠度一九一六
後白河法皇 大[illegible]二五二九
頭を立て
淸水の方へ――て 盛三〇九五
故人
賤しき身には――疎し 薫四六・梅二六二五・[illegible]二六四〇
御神鏡を戴き國々をめぐり給ひ [illegible]九六二
御神體は櫻木にて [illegible]一三三三

故人散り早く覺めて　串二三〇
古人の掟は眞なりけり　志一三九六
故人の心
　二千里の外の――　三井二九九七・鉄三四八〇
己身の彌陀如來唯心の淨土　胡六六二
己心の彌陀の國　富一二四六
故人を數ふれば親類多くかくれぬ　散三六四
小硯料紙取り出だし　木什八二二
小簾の隙洩りくる風の匂ひより　遊三三〇三
五衰
　神に――の苦しみあり　葛六九七
　天上の――より　楊一一三
　天人の――も目の前に見えて　羽二四九〇
湖水天に連なつて雖點遙かなり　龍虎三三六一
五衰の衰への消えもやられぬ　大原五四七
五衰の眠りを無上正覺の月に覺まし　葛七〇〇
　草薙八八六・松尾二八四六
巨水漫々として碧浪天を浸し　白樂二四七二
五衰滅色の秋なれや　俊寛一四二七
五衰を慰め給ふべし　円三三八〇
梢波立つ汐越の　山上歌三一六七
梢に響く山彥の　山三一八〇
梢の秋ぞ久しき　松尾二八四二
梢の嵐猿の聲　大原五三八
梢の嵐吹きしをり　善界上歌一六〇四

梢はいづれ一葉散る　砧八三三・木賊三三〇六
梢に花に雲られど　[illegible]一七六八
御製
　これを最期の――にて　大原五五〇
五節
　豐の明の――の舞の冠　[illegible]六二三
　豐の明の――の舞姫の袖　關寺一六三一
五節の始めこれたれや　國九〇五
五節の舞小忌の衣の羽袖を返し　吉天三三九三
後撰集の歎に年ふれば　檜三六二七
小先達　谷行キャッ・一九三六
御膳調進の網を引く所　阿三三
御前に入れたてかなはじものをと　夜三三七五
胡籙の鵰　江島四九八
御膳の贄の網　阿三六
五千餘卷の御經を晝夜に守護し　輪三三一八
攀足下足の舞の手を盡し　参三八一三
姑蘇臺の秋の月は涅槃の雲に隱れ　咸八六四
小袖
　この身を――に代へて　自一三三一
〔小袖曾我〕　一一三五
小袖肌の守を置き給ふ　円三三八七
去年とやいはん年の暮　綸三四四四
濃染
　今日は――の色深き　松尾二八四五

こぞりて
舟――狹くとも　昭一五三五
五智
　句を分つて――と[illegible]木火土金水なり　[illegible]
　五智の如來に――を授け　國三三八
五大五輪は人の體　卒一七三
五體さながら苦しめて　歌三六七
五臺山(清涼山)
　天竺――の文殊を勸請の地　[illegible]
五臺山淸涼山　國九〇一
五臺山の望みあらば吉野筑波を　春日六七三
五大尊の四面の佛前　[illegible]一一九
五體は熾火の黑煙となり　求三〇七五
五體も續かず　海一八一
五體を苦しめて　殺一六四五
五體をつづめ
　千筋の絲筋に――　土蜘二〇六〇
孤島峙つて波悠々たるよそほひ　鷺一三六八
五道の罪
　三密加持の行ひに――も消え　船橋二七六三
五道の冥官泰山府君　正一三六四・卒一七一九
五道六道に廻る事　[illegible]一一三
小太刀を衣に引き隠し　巴三三八八
小太刀を拔いて渡り合ひ　熊坂九四三
小楯

折妻戸を——に取つて　熊坂九四四
答へ山影もわが袖に移る匂ひも　胡一一四六
兒玉黨
團扇の旗は——か　知三三五二
小太郎(柏崎の者)　柏ツレ六四九
小太郎(増尾從者)　春榮一四一一
五重色空の雲に映る　歌三五八
五重唯識の秋の風春日の里に　野守三四三四
五重唯識の月の光　[illegible]四〇〇
こちの風向うて西になさう　檀二〇三四
五智の如來に五體を投げ　[illegible]二一三八
五智の寶冠
兜巾といつぱ——　安宅九一
東風吹かば匂ひおこせよ梅の花　老△五三〇
東風吹く風に東を見れば　善界一六〇六
五濁の塵の交はり　三輪二九八五
五濁の濁りありとても　嵐二〇七
五濁の人間を導きて　弱二三三
五濁の水に影清し　花一〇〇五・田一九八九
五濁の水に實相無漏の大海となつて　卒三〇三四
五塵六欲の風は吹かねども　江口四八五
乞丐人　卒一七二二・弱三三一九
木津川の川上より金色の光さし　田一九九〇
骨がらあつぱれ大將やと　八島三一五一
乞食
盲目なる——　景六三八
乞食の腰かけたるは　卒一七二二
骨髓の丹誠　小鍛一一三一
後詰の者を觸れう　烏△三四三三
五頭龍　江島五〇〇
五頭龍王　江島シテ四八九
五帝
三皇——の昔より　西王一五六九
五條(京都)　半所二四九七・夕所三二〇七
五條あたりと夕顏の　半上歌二五〇〇
五條あたりにて夕顏の宿を　安達一一三
五條あたりのあばらやの　夕三二一〇
五條あたりの夕顏の露の宿り　賀茂物七五七
〔五條忠度〕　俊成異稿一四三七
五條の三位俊成の卿　忠度一九一六
五條の三位俊成卿と和歌の　俊成一四三九
五條の天神へ丑の時詣を仕り　橋二五〇九
五條橋　橋所二五〇七・笛所二五二一
五條の橋
夜な夜な——に出て數多の人を　笛二五二二
五條の橋の橋板をとどろとどろと　橋二五一五
五條わたりに住居する　梅四二四
〔胡蝶〕　一一四一
胡蝶　土蜘ツレ二〇五五
胡蝶
花園の——をさへや下草に　胡一一四八
胡蝶と申す女　土蜘二〇五七
胡蝶にも誘はれなまし心ありて　胡一一五一
胡蝶の遊び
春の夢の内——色香にめでて　雲雀二六四五
胡蝶の遊び戯るる舞の袖　[illegible]三四八四
胡蝶の精　胡シテ一一四一
胡蝶のひと遊び　源氏一〇三六
胡蝶の舞
何事も夢幻の戯れやあはれ——　[illegible]三一三
花に飛びかふ——の　胡一一五一
百年は花に宿りし——　關寺一六三三
胡蝶の舞人　胡一一四七
胡蝶の夢　[illegible]七一
胡蝶の夢の中　東[illegible]二一七〇
胡蝶の夢の戯れ　胡一一五二
胡蝶も歌舞の菩薩の舞の　胡一一四七・俊成一四四二・[illegible]二七六四
御殿頻りに鳴動して　藍二四五五・鱗四五五・竹生二〇四〇
御殿忽ち鳴動し　[illegible]八八五
五天竺
三笠山に——を寫し　春日六七五
古殿の燈火を挑げ　大[illegible]一七八〇
琴
松の小枝は——を調め　梅四[illegible]
琵琶　和琴笙篳篥　[illegible]二九九五

琵琶——和琴笛竹の　東門一八三五
事あたらしき問ひ事かな　花笠二五八八・小簾三四六一
御燈の光なんどにこそ　鉄二一六
異浦
難波わたりにてこそ——なんどと　紘一〇五〇
異浦見れば夕煙　蘆四九
言書に私の家にてと書かれ　定二一〇六
異草もまじる茅筵　安達一一〇
異國
神の御稜威は——に仰ぎても　内三七四
事々しや
あら——候　船辨二七七三
言さやぐ唐人なれば　白樂二四七四
殊更にこの度は　龍田上歌一九二八
今年生は少し　求三〇六七
今年ばかりの風や厭はん　遊三三〇五
今年ばかりの花をだに待ちもやせじ　熊野三三四四
事代主の翁とて御代を守り申す　代一四八五
事代主の御神　三輪△三九八一
事代主神　代シテ一四七七
事代主の神なごめ拂ひ給ひ　水無月二九四二
琴柱に落つる聲々　成八〇一
琴柱を立て並べ　紘一〇五四
異妻を重ね給ひぬれば　松山鏡二八七五
殊に又かの青山といふ琵琶を　經上歌二〇八五

琴にも香詩を作るにも盃　大[illegible]一七六一
事の心分き難かりけらし　關寺一六一四
琴の爪音
岩越す波にも更に紛れぬ——　[illegible]二五八
琴の音に峯の松風通ひ來る　円九〇五
琴の音添へて音づるる　千歳第一七〇二
言葉多き者は品少し　烏三九二・吉靜三三八四
事始め
四季の節會の——　鶴二〇九七
言葉戰ひ事終り　八島三一五一
言葉に花を咲かせ　調△二二二七
言葉の泉盡きもせず　雷三三三七
言葉殘りて鳥や鳴かまし　六浦三〇一七
言葉の末眞か僞りか　鉢二五六八
言葉の花
心を種として——色香に染まば　關寺一六一四
しなじな——も咲き　羅三三四九
言葉の林榮ゆくや　志一三九八
後鳥羽院の御宇　定へ二一一三
言葉ばかりは祝へども　元一〇八八
言葉外に現るる
情内に籠り——　采四〇七
言葉を固めて候に　夜三三六四
言葉を交はす値遇の緣　六浦三〇一六
琴彈く人はなかりけり　小督一一〇三

琴琵琶
夢の黄鶴樓彈く——の　[illegible]
琴笛鼓は讓させん　[illegible]
ことぶきは限りあらじな　杜六八〇
こともおろそかなりとて設けなど　采四〇八
言寄せ妻の容積め　[illegible]一一六四
小鳥
落花狼藉の——　[illegible]一〇〇四
古鳥蘇
樂に引かれて——の　[illegible]八七五・道一三三一・[illegible]三六六[illegible]
理過ぐる氣色かた　三山二九三三
ことわり給ふ　安宅九九
理なれや痛はしや　元一〇八三
ことわりや白菊の　[illegible]一[illegible]五一
事を盡すや榮花の家　[illegible]一七三五
琴を枕の短夜のうたたね　千一七一一
御惱は丑の刻ばかりにて　[illegible]三[illegible]八五
子ながらも恥かしや　[illegible]三三
子に知れぬ親　[illegible]二四〇
五人の神樂男　[illegible]三三
五人の王子おはします　大社五七八
この浮舟ぞ寄るべ知られぬ　[illegible]三[illegible]四
この上はとにもかくにも宗近が　小鍛上歌一一一四
この君ならで日の本にまた異君の　花笠二五八八
この木や佗ぶると心を盡し　[illegible]二五五八

この子善くは弟子ともなし　元一〇八四
この草庵を立ち出でて　通小待斎七六六・三輪待斎二九八三
木の下鹿毛　賴△三三〇五
木の下風
　それかあらぬか——か　雪林四六〇
木の下闇に忍び寄り　秦一七三八
この生に浮かますは　當一八四四
この生にこの身を浮かめずは　天二二三八
この度は幣とりあへぬ折なるに　龍田一九二八
子の爲なれば寒からず　昭一五八二
兒の手柏の二面
　奈良坂の——とにもかくにも　百二六七七
　奈良坂や——とにもかくにも　雲雀二六四六
この所より外へはやらじ　翁△九
木の葉
　神風に敵は——と散りぬべし　木賊八二三
木の葉返し　巴二三八六
木の葉衣の袖の上　雨三三四
この橋立を造らんと　九クセ九二五
この八軸の誓ひにて　通盛待斎二九〇五
木葉天狗　鞍狂言九四七・大會狂言一七七七・松山天狂言二八八三
木葉天狗
　愛宕山大天狗に仕へ申す——　大會△一七八三
　鞍馬の奥僧正が谷に住む——　鞍△九五六
　白峯相摸坊に仕へ申す——　松山天△二八八九
この花
　今は春べと咲くや——　難二三三一
　難波津に咲くや——冬籠り　雲林四五九・難二三三〇
　難波津に名を得て咲くや——を　難二三三〇
　難波津の春ならばただ——とこそ　弱三三二〇
　梅花を嘉して——といへり　梅四三一
この花還つてここに迎ひ　遊三三〇二
この花廣林に開けたり　半二四九九
木華開耶姫　蓬ツレ二三二五
木華開耶姫の御氏子　櫻一三三六
木華開耶姫の御神木の花　櫻一三三七
木華開耶姫の神靈　寶三三七
木の花の精とも　梅四三〇
木の葉の雨の音づれ　雨三三四
木の葉の盃　俊寛一四三七
木の葉の時雨雲深し　卒一七三九
木の葉の精　大蛇狂言三五〇三
木の葉の一葉も袈裟に附きて　采四〇〇
この法甚しければ信ずる事も　當一八五三
この春ばかり墨染に咲け　墨一五〇七
この春ばかりの花見の友　熊野三三三九
この春は殊に櫻の花心　吉天道行三三九一
この春よりは墨染に咲け　墨一五一三
この程の暫し旅居の假枕　[illegible]道行三四七三
この程の旅の衣の　碪道行八二七・熊野道行三三四〇
この程の宿鹿島野の草枕　野守道行二四二三
この程は人目をつつむわが宿の　[illegible]上歌八四六
この程は鄙の住居に馴れ馴れて　清道行八四四
木の間になさん槻の木　金八七三
木の間の月
　心づくしの——　[illegible]一九六三
木の間の月ぞすくなき　同二九
木の間の月のかげろふ姿となり　六浦三〇一七
木の間の月も朧にて　泉九九一
木の實
　故ある——を集めつつ　雲雀二六四三
木の實爪木を持ちて　通小七六三
木の實の數々　通小七六四
この身殘りて母知らず　海一七七
この身皆以てその名ひとりに殘る　草子一一九六
この御代に照る梓弓の　放生上歌二四五七
この身をこのまま成佛の法　身延一九五一
好む打物ひつさげて　正一三六九
木の芽春雨降るとても　二人上歌二七一三
木の芽も春の淡雪に　求三〇六三
このもかのもの蔭ごとに　小[illegible]二四六二
このもかのもの花盛り　櫻一三二八
この矢即ち鳴る雷となり　賀七三七
子の行方をも白絲の　三井一聲二九九六
この夕ぐれを限りぞと　三山二九一九

この世とても旅ぞかし　[illegible]八五[illegible]
この世にだに添ひも果てざる親子　七二〇一四
この世の人とも思はれず　紅三〇八六
この世は假の宿なるを　[illegible]二七四二
子の別れ路を悲しみて竹の雪をかき　竹雪一八八五
近衞殿の絲櫻　西行一一七七
近衞の院の御宇　[illegible]六四
子はあつて千年を經れども親を　木曉二二一四
子は親に似るなるものと思はれ　松山鏡[illegible]八七八
子は親のため命を惜しまぬ　知[illegible]五〇
小萩が下のさみしさまで　須一四九七
小萩原
　野邊は錦の――　項五八九
こは子なりけり鶯の　櫻一二四〇
こは子なりけり子なりけり　歌二六〇
子は三界の首枷　天二二三八・水無瀬二九三四
木幡の里(京都)
　山城の――に馬はあれども　通小七七〇
木幡の關(京都)
　深草や――を今越えて　賴三二九九
　深草山――をうち過ぎて　三山二九一三
木幡の關を今朝越えて　笑三九七
木幡の關をよそに見て　賴三二〇九
木幡山(京都)
　氣色もさぞな――伏見の里も　放生二四五五
木幡山伏見野竹田淀鳥羽も見え　[illegible]
護法
　蒲山――一列し　雷三三四
護法善神　谷一九五一
胡馬北風に斷え　[illegible]三二一・[illegible]二四三
こは夢かさても夢ならば　[illegible]一四二一
五番六番きつといましめ　[illegible]
戀
　逢はでぞ――は添ふものを　[illegible]六〇八
　胸あひ難き――とも詠み　錦木[illegible]四七
鯉
　生簀の――や上らん　鵜飼三〇六
戀草のこと繁く　船弁二七六〇
戀草の力車に七車　百二六七三
戀草の露も思ひも亂れつつ　松風上歌二八三四
戀心
　餘りわりなき――　小督一二〇七
戀こそ寝られぬ　花一〇〇三
戀衣
　人にて花を――　雲林四六二
　日も數添ひて――貴船の　鐵七〇五
　われは――紀の有常が娘　井二四〇七
戀しき時は鏡をぞ見る　松山鏡二八七八
戀しきは昔忍ばしきは閻浮の　傳三四八四
戀しき人の手馴れしものを形見と　花筐二五九四
戀しや戀しやと慕へども　[illegible]
小[illegible]
　横川の――　[illegible]
戀すてふわが名はまだき立ちにけり　[illegible]
戀せじとかけし御祓も　[illegible]
戀せじと[illegible]かいひけん[illegible]　[illegible]
戀せじと御[illegible]せし御[illegible]の　[illegible]
戀路
　思ひは同じ　隅一五二五
　よしたき――に[illegible]されて　梅枝四四五
戀路にはあらねども別れの鳥と　初二五七五
戀路のそら情逢ふさへ夢の手枕　錦三四四八
戀路の闇に迷ふとも　[illegible]一六五
戀路をただす神ならば　水無月二九四〇
戀塚(京都)
　鳥羽の――秋の山　作一五四〇・卒一七二一
戀と申す事は高き賤しき隔てぬ事　[illegible]一六二
戀には上下をわかぬ習ひ　[illegible]
戀には人の死なぬものかは　[illegible]一六三
戀の歌の文字たれば忍び草の　[illegible]二九五
〔戀の重荷〕　一一五三
戀の重荷　[illegible]一五八
戀の染木ともこの錦木を詠み　錦木二三五七
戀のつかね　綾一九三
戀の淵　綾一九九・松風一八二八

戀の亂れの束ね緒も　戀一一六〇
戀の道
　誰踏み分けて――　戀一一五八
戀の持夫　戀一一五八
戀の奴になり果てて　戀一一六〇
戀はくせもの　花一〇〇三
小兵
　義經は――なりといはれんは　八島三一六〇
五百八十七廻りまでも　橋△三五一三・夜△三三七二
戀ひ痩せ顔ぞ見ても泣く　松山鏡三八七五
戀よ戀わが中空になすな戀　戀一一六三
戀忘れ草も住吉の岸に生ふ　梅枝四四四五
戀ひわたる身はそれならで玉葛　玉葛一二九六七
戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は　絃一〇五二
國府
　伊豆の――三島の里　春榮一四〇〇
　越後の――に着きしかば　柏六五七
業
　修羅の――に沈む　知三三五二
業因
　淺からざりし――　八島三一五七
業苦
　煩惱――の三つの綱に繋がれ　春榮一四一三
呉服の文字を和らげて呉織漢織と　呉九八三
業障
　過去の――を果し後の世を助けん　蟬一六七六
　業障の薄雲は晴るる事更になし　源氏二〇三九
劫初よりこの方　龍田一九三一
劫初よりこの山に住んで　代一四八七
御扶持ある方々に憎まれ　巴六四〇
後佛は未だなり　佛二七九八
後佛は未だ世に出でず　卒一七一九
業に悲しみ猶添ふる
　死に苦しみを受け重ね――　歎三六六五
五部の大乘經を書き　道明一八一九
業力の鵜を使うて　鵜飼三〇五
古墳
　累々たる――のほとり　藍二四三
　わが――ならで又何物ぞ　求三〇七一・女三四九八
古墳多くは少年の人　求三〇七三
御幣
　神主――おつ取つて　藍二四四
　神主――を捧げつつ　住一五四二
御廟所
　新院の――松山　松山天二八八六
枯木
　風――を吹けば晴天の雨　雨三三〇
　寒蟬――を抱きて鳴き盡して　俊寛一四二五
子程の形見あるべきか　柏六五五
子程の寶よもあらじ　唐一八一六
氷
　紅蓮大紅蓮の――　阿三九・歎三六五・東岸二一七三
　波を收むるも――水を鎭むるも氷　求二六六四・船橋二七六〇
氷消えては波舊苔の鬚を洗ひ　[illegible]
氷にも中絶ゆる名の龍田川　龍田上歌一九一六
氷の如くなる刀を拔いて　藤戸二七五〇
氷の衣霜の袴　芭二五四三
氷は水より出でて水よりも寒し　[illegible]
氷を敷きて瑠璃壇になる　求二六六一
凍れる涙今ははや解けても　[illegible]
凍れる涙解けそめて　放下二四四八
駒
　今や引くらん望月の――　蟬一六八一
　蜘蛛のいへに荒れたる――は　鐵七〇五
　羊の歩み隙の――　砧八三七・百二六七八
　隙行く――の道行かじ　[illegible]
護摩
　百座の――　[illegible]
虚妄
　大聖の誓約豈――にあらずや　盛三一〇〇
虚妄法
　深著――堅受不可捨　[illegible]
〔狛形猴々〕　[illegible]
駒くらべ

掛けならべたる——　繪三四四八
小町　鸚シテ一三・通小ツレ七六一・草子シテ一一八一
　關寺シテ一六〇九・卒シテ一七一五
小町
黒主が相手には小野の——を　草子一一八三
百年の姥と聞えしは——が果の　關寺一六二三
小野の良實が女に小野の——　鸚一五
小野の良實が女小野の——　卒一七一五
小町がもとへ通はう　卒一七一八
小町黒主遺恨なく　草子一一九七
小町こそ衣通姫の流とは承れ　關寺一六一六
小町はさも古は優女にて　卒一七二五
小松が原
大原や小鹽の山の——より　小鹽三四六〇
小松殿北山にて茸狩の遊路の　盛三一〇九
小松原(和歌山)
潮滿ち來る——　道成一七九三
駒とめて袖うち拂ふかげもなし　鉢二五五三
駒の頭も見えばこそ　兼七二八
護摩の壇上に走り上り　禪一六九七
護摩の壇上をかまへつつ　調二一二八
駒の林(兵庫)　絃一〇四六
狛のわたりや足早み　浮三一一五
高麗笛　敦一二九
駒も進まず高嘶きし　羅三三五四
駒もところに踏み鳴らし　[illegible]四二七
高麗唐土の寶を買ひとる　岩二八七
高麗唐土も殘りなき御調の道の末　岩二八七
高麗唐土も隔てなき　岩二八八
御夢想
善光寺の如來の——　道明一八六八
込む長刀を打ち拂ひ　正一二七〇
こもり江
聞けば涙も——にこもれる水の　玉葛一九六四
木守勝手藏王權現同體異名の姿　嵐二二一
木守勝手の神　嵐二〇六
木守の御前　國九〇五
木守神　嵐ツレ二〇一
こや(昆陽、大阪)
津の國の——日の本の　海一七二
津の國の——都路の　[illegible]
富島の磯や——難波　絃一〇四八
後夜
初夜より——に至るまで　寶一三五四
初夜より——の一點まで　盛三二〇七
牛羊徑街に歸り鳥雀枝の深きに　百二六七七
子安の塔を過ぎ行けば　熊野三三四八
子安の森(岐阜)
青墓——繁れば　熊坂九三六
こや住みの江の浦傳ひ　松蟲二八五四
五夜の[illegible]月に[illegible]ふ　[illegible]
昆陽の池(兵庫)　[illegible]
昆陽の池(兵庫)
月も宿かる——　[illegible]一九六・[illegible]二四九
後夜の鐘　[illegible]一六七・[illegible]二四三・[illegible]
後夜の鐘の聲　西行一一七八・當一八五四
後夜の鐘を撞く時は是生滅法と　[illegible]
こやの住居の冬ごもり　蘆六二
後夜の勤めを始めばや　葛六九六
後夜の鐘には南嶺の[illegible]を[illegible]く　[illegible]
小弓　敦△九五一
小弓に短冊をつけ歌占を引き　歌三五五
こゆるぎの磯菜摘む　[illegible]
子ゆゑ
梁の燕も皆——こそ物思へ　唐一八一九
野飼の牛の聲々に——に物や思ふ　唐一八二三
子故に迷ふ親の身は恥も人目も　三井三〇〇五
子故に身をこがししは野邊のきじ　柏六五八
今宵一輪滿てり清光何れの所にか　三井二九九九
今宵ぞ秋の最中たる　[illegible]
今宵の月の惜しきのみかは　姨三四八〇
五郎(曾我)　夜三六五
五老の月　木賊[illegible]五
五郎丸
御所の——　夜三[illegible]七五

虎狼野干の栖　烏八〇八

虎亂入
　獅子奮迅——　熊坂九四三
虎亂の勢ひ猛く　龍虎三三七〇

こりずま
　かく憂き業にも——の　忠度一九〇七
　世に汐じみて——の恨めし　松風一八三三
懲りずまの心とこ　賀茂物七五五
こりの泣く音やな　富士太三七〇六
こり果てぬ鹽木かた　須一四九四
御領に附けられ　實一二六〇

五輪
　五大——は人の體　卒一七二三
孤輪の月を戴き　三輪二九七八

惟章
　大江の——が心變りせし程に　關寺一六一六
五嶺蒼々として雲往來す　龍虎三三六一
これぞこの行くも歸るも逢坂の　第一七六九
これとても同じ宮居と三熊野の　俊寛上歌一四三五
これなくは忘るる事もありたん　清八四九
これにつけても弔ひの　敦待謠一三三
これによつて本有の靈光　巻クセ二八〇九
これは又浮世を渡る柴舟の　籠上歌七一八
これまでなりやこれまでとて　雷三三四三

惟光　住一五三七
惟光に紙燭召して　班二六一〇
惟光も傳御前をとりどりの　住一五四六
惟光を招き寄せ　半二五〇四

維茂　紅ワキ三〇七九
維茂少しも騷がず　紅三〇九一
これや限りの御使　小督一一〇八
これやこの行くも歸るも別れては　安宅八二
　盛上歌三〇九七
これをしるしにと涙を添へて　善知上歌三八五
これを見かれを聞く時は　鵜飼三一一
これを水といはんとすれば　松山鏡二八七八
頃待ち得たる櫻狩　西行次第一一六九・櫻次第一三三七

衣（キヌをも見よ）
　垢膩のあかつける——あり　卒一七二七
　青苔——をおびて巖の肩に　白樂二四七五
　忍辱二諦の——を着　放下二四四四
　はだかなる者の——を得たる如く　身二九五一
衣擣つ砧の上に怨別の聲　吳九八七
衣かたしく木蔭かた　羽一一五〇
衣川の御最期まで　二人二七一七
衣替へ憂き今日にぞありける　雲雀二六四六
衣寒暖に與へざれば　景六二四
衣手寒し消え殘る雪ながら　東三〇六六
法衣に恐れて得は打たず　自一三三五
衣に落つる松の聲　砧次第八三三

衣の玉
　唐衣の錦にも——はよも掛けじ　[illegible]
　苔の——ならば　阿三七
　法の——ならば　玉葛一九六四
衣の玉はありながら　班二六〇四
衣の玉を含むらん　野守二四一三
衣の袂に御影をうつし　巴二七八
衣のつまに金色の文字すわれり　三輪二九八二
衣は裁ちもかへなん　砧八三三
頃もはや霜降月の曙に　三笑上歌一三八四
頃もはや彌生なかばの春の空　田道行一九八七
衣ほすてふ天の香久山　三山△三九二一
衣も同じ苔の道　源氏次第一〇三八
衣を取り杖を推すべき力もなく　身九九三
吳王を亡ぼして勾踐の本意を遂げ　[illegible]二七七六
小脇にかいこんで　景六四五

こわもの
　鬼の住家へ先驅は——　大江△五五七

木居
　鷹は——にありけるぞ　野守二四一八

〔五位鷺〕　[illegible]
五位の鷺　[illegible]
古院の常に叡覽ありし花を　[illegible]一五〇七
故院の昔の夢の昔　[illegible]
弊あそをなす　[illegible]

聲未だ聞かず
　花松前に笑んで——　[illegible]六四四
聲かはりけしからず　[illegible]一七七
聲のあやをなす　[illegible]四八
聲の至ること遅し
　鐘は寒雲を隔てて——　熊野三五一
聲に大和詞なり　[illegible]八八
聲佛事
　蟲の音までも——をやたしぬらん　傳七九一
聲佛事をもなし給はば　山三七三
聲佛事をやたしぬらん　[illegible]・鵜木一五五
聲滿つや法の山風月更けて　[illegible]三六七
聲も枯野の蟲の音の　[illegible]四
聲も寂しき入相の鐘　羅三四八
聲も更け行く浦風の　八島[illegible]一五六
聲も旅雁の横たはる　[illegible]四
聲をしるべに出舟の　[illegible]七八四
聲をしるべの狩場の末　紅三〇八二
聲を力に來りたり　敦一三九
聲をば聞けど面影を見ぬ　[illegible]六七
子を思ふ道にはたとへん　元一〇八八
子を思ふ道に迷ふとは　[illegible]一五一・木賊[illegible]一四　[illegible]一七四五
子を思ふ身は老鶴の鳴くものを　木賊[illegible]三一五
子を思ふ身を白雪の振舞は　竹雪一八八三

子を思ふ闇の夜鶴の　木賊三一五
子を先だてて跡に殘る事を恨む　[illegible]一一四
子をのみ思ひの闇　元一〇八八
期を待つばかりなり　土蜘二〇五九
子を忘れぬ
　親は千里を行けども——　木賊三一四
金剛
　遡か又揺すは——　[illegible]
　唯有一實頌唯一——　[illegible]
金剛界の曼荼羅華藏世界　[illegible]
金剛藏王
　辛酉歳は——かりに出化して　[illegible]一七三
金剛山(大和)
　大和の——三國不二の峯として　代一四〇四
金剛山の雷光この地に飛んで　[illegible]
金剛杖に縋り　[illegible]
金剛童子
　三に毘利迦羅七大八大——　[illegible]・野守一四三三
金剛の峯
　高間の山と申すは——として　代一四〇三
金剛夜叉は寒風の鐵雨を降らし　調三三〇
金剛夜叉明王　[illegible]
　[illegible]
矜羯羅
　一——二制多迦　檀三〇二五・野守一四三三

矜羯羅制多迦を始め十二大　[illegible]
矜羯羅制多迦を始め給ふ　調三二九
[illegible]
　大小の——を嫌はず　[illegible]
[illegible]に出だす[illegible]數に盡ず　放下二四四六
權現の御告別なれば　元一〇八四
言語道斷如何なる者ぞと　[illegible]
言語道斷かやうの儀を存じて　[illegible]
言語道斷の御事にて候ものかな　[illegible]
言語道斷の事　[illegible]・[illegible]一七五四・[illegible]三〇四七・[illegible]三三八
言語道斷以ての外の曲事なり　[illegible]
言語道斷以ての外の御事　[illegible]
金銀珊瑚琥珀瑠璃の影　[illegible]
今年西方名所御靈記　[illegible]
金色の世界
　春日の野山——となり　春日六七七
金色の光
　木津川の川上より——さししを　[illegible]
金色の光輝き渡るは　[illegible]
金色の光天地に滿ち　富士山二六九三
金色の文字
　衣のつまに——すわれり　三輪二九八三
權實二教
　天台の佛法は——に分ち　[illegible]
權實二教に分てり　[illegible]

今者已滿足　通盛二九〇五
今生の望なし　千一七〇八
今生の利益もし缺けば　[illegible]三一〇〇
今生よりの冥途たり　[illegible]一四一〇
權者の御身なれば　[illegible]八一八五〇
こんじゆせんの岩の洞　花一〇〇六
金水伊弉册と現じ給へり　[illegible]八一三一〇
金水の精凝り固まつて伊弉册と　淡一四七
今世後世能引導　[illegible]四一七
今世後世の面目なり　[illegible]一六六
金胎兩部に一足をひつさげ　[illegible]二一
金胎兩部のかたち　[illegible]八七六
金胎兩部を顯せり　富士山二六九
金堂の御本尊は如意輪の佛像　[illegible]
濃漿
天の——や流霞の盃　[illegible]七八四
金泥の御經　仲三二〇九・[illegible]三一〇二
混沌未分に分れしより　大蛇三五〇五
渾沌未分漸く分れ　[illegible]一四六
今日の御祈禱なり
天下泰平國土安穩　[illegible]八
こんねんたうと申す御腰の物　[illegible]三四二四
權の頭
高橋——　春榮一三九八
魂魄の在所を尋ねて参れ　[illegible]二一六
魂魄の境界
鬼神——に歸り　八島三一五七
魂魄は君に仕へ奉り　小鍛一一一六
魂は善所に赴けども魄は修羅道に　[illegible]三七
魂は冥途にありながら魄はこの世に　[illegible]一三五〇
魂は陽に歸り魄は陰に殘る　[illegible]五一六
混本
長歌短歌旋頭——の類　[illegible]一
混本歌　[illegible]三
根本中堂
嶺には——を建て　大[illegible]五八一
わが立つ杣と詠じ給ひし——　[illegible]七〇
來ん世も[illegible]き契り絕えすた　夕二一八
袞龍の御衣の紋　[illegible]九八[illegible]
金[illegible]
須彌は——より生じて　[illegible]五八
金[illegible]際に及べり　山三一八一
金[illegible]際より涌出したる島　竹生一〇三九
紺瑠璃
大地は——　大會一七八五
崑崙
江の島は——のさきを寫し　江島四九[illegible]
崑崙山に住居なす玉樹にかしづく　九二八一九
金王丸　朝三六二
近衛の院（[illegible]）

さ

最愛の夫人　[illegible]九[illegible]
塞翁が馬　綾一九三
人間萬事——
西海四海の因果を見せて　[illegible]八五四
在鎌倉　[illegible]六五一
西行が歌を詠ずる有樣　西行一一七五
〔西行櫻〕　一二六七
西行と聞えし歌人
佐藤兵衛[illegible]出家し——　[illegible]一一九七
西行の庵室の花　西行一一七〇
西行法師　[illegible]七・西行[illegible]一二六七・[illegible]山[illegible]六[illegible]
西行法師
嵯峨の奥に住居する——　[illegible]九・[illegible]山[illegible]六八五
齋宮（三重）　繪所三四四一
齋宮に立たせ給ひし人の　野宮一四〇九
採果汲水年を經て　[illegible]一八[illegible]
採果汲水に隙を得す　[illegible]四[illegible]
西國行脚　藤榮三一四九・松風二八三三・八島三一四五
西國方より出でたる[illegible]　[illegible]
最期に臨んで功名を[illegible]し[illegible]者[illegible]　[illegible]六四

最期の廣言　貧七二九
最期の十念亂れぬ　清八五四
罪業のほど悲しく　二人二七一六
最上吉日　春栄一四一七・藤栄二一六二
罪障懺悔に辛力の　鵜羽二〇五
罪障懺悔の袈裟をかけ　敦下一四四四
宰相三位舞の藏人　當一六〇
罪障の山高く生死の海深し　朝六六二
罪障の山にはいつとなく煩惱の雲　東岸二一七一
採桑老
　波立て打つは――　雜二三三九
さいしやう老人
　大聖文殊の御前なる――　九世九二七
祭主
　太人杵の神王を――と定め　鶴祭四一七
最勝王經を講じ　草薙八八一
在所の主　嵐二二八
西大寺(奈良)
　南都――のあたりにて拾ひ　百二六六九
西塔の傍に住居する武藏坊辨慶　船辨二七六九
西塔の傍に住む武藏坊辨慶　橋二五〇九
西塔の武藏坊辨慶　正一三五八
西塔山伏ごさめれ　攝一六五八
再誕
　九生如來の御――　竹生二〇三七
　觀音薩埵の御――　田一九九〇
　上行菩薩の御――　身二九五二
　大蛇は觀音の――　張二〇五三
在中將業平
　伊勢物語の根本――　雲林四六三
西天居士日域に　舍一三八九
西天の貧女が一衣を僧に供せしは　自一三一八
齋藤別當
　長井の――實盛　實一三四九
濟度の舟をも寄す　弱三二三三
濟度方便の影な忘れそ　御一九七一
濟度利生の道　杜六三四
細輭
　瓔珞――の衣を脱ぎ　春日六七四
西方
　業を忘れて共に――を修し　三笠一三八三
西方極樂世界三十六萬億同號同名　陽一五二一
西方極樂の教主法藏比丘は御子の　竹生一八八三
西方淨土に通ひ給ひ　鳥一五六三
西方大威德北方金剛夜叉明王　船辨一七八五
西方に大威德明王　通盛一六〇一・[illegible]一六一九
西方に迎へ行く御法の舟の　當一八五四
西方の主叉婆婆に示現し給ひて　春三〇一三
西方の淨土は十萬億土　山三一六九
西方は十萬億土　實一二四六
西方便行一蓮生　[illegible]
西方彌陀如來　源氏一〇三九
西方もここを去る事遠からず　賀一五六四
催馬樂
　神樂――とりどりに　白鬚一四七三
　神樂の韓神――　鈴三四五二
　韓神――　道明一八三五
宰府(筑前)　量一一七
宰府
　筑前の――に知る人あれば　籠三三九七
左右左さいふ颯々の　羽二四九四
宰府に居住の僧　[illegible]
宰府の神主　量一一八
最明寺實信　[illegible]二二六一
最明寺殿さへ修行に御出で　鉢木二一五・[illegible]二五六二
西門
　ここは――石の鳥居　弱三三二四
草庵
　廬山の雨の夜――の中と思はる　[illegible]五四
霜葉
　露命窮まつて――に似たり　檜一六三五
草葉纔じ蟲の音も枯れたり　[illegible]一六一八
草衣夕の肩を隱さされども　[illegible]一六一三
雙蛾
　宛轉たりし――も遠山の色を失ふ　卒一七一六

相好
　現住奇特の牙舍利の御――　舍一三八七
　微妙の――莊嚴ましのあたり　賀七四二
相好莊嚴赫奕として　鵜祭四二〇
相好誠に肝に銘じ　室三〇二四
藏經
　釋迦一代の――を大唐よりも渡し　輪三三七六
草花
　それ程多き――をなど一本　項五九二
草花りようとして見えつる中に　半二四九九
草徑が亡骨となつて　朝二二六四
草根にまとはり
嘈々
　嬋娟の黒髮は亂れて　藍二四三
　大絃は――として村雨の如し　經二〇九〇
草子
　今の――にはさなんめれど　梅四二六
〔草子洗小町〕　一二八一
莊子があだに見し夢の　胡一二四七
相思の字をあらはし　呉九八七
草子は萬葉題は夏　草子一一八九
雙樹
　泥洹――の苔の庭　舍一三九〇
蒼生を利せんが爲　木曾八二一
相續の者　唐一八一八

蒼苔路滑らかにして僧寺に歸り　項五九〇
草堂に立ち寄り　佛二七八九
草蟲露に臥しをれ　讀上歌一四五二
藏通別圓　大會一七八〇
雙調
　七德――七拍子　道明一八三七
相傳
　黃石公にこの一大事を――す　鞍九六〇
蒼天に月日の光なく　蟬一六七四
窓東に向ふろう月は堺樹に　半上歌二五〇三
左右なう靡く事もなかりしが　求三〇六九
左右なう渡すべきやうもなかつし　紹三三一一
左右なう渡らぬ橋よなう　石一三七七
左右なう渡り給ふな　烏七一
相人
　高麗國の――のつけたりし　須一四九七
　君を崇め國を守る王仁といつし――　難二三三七
左右の腕をさし出だし　碇二一五五
左右の大臣　草子一一九一
雙の眼雨の手の如く　春日六七二
滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し　知二二四九
想夫戀
　夫を想ひて戀ふる名の――　小督二一〇二
　女の夫を戀ふる――の　梅枝四四七
草壁の宿

松風――に通ふ　梅枝四三八
霜蓬
　頭には――を戴き　卒一七三六
草木國土
　回向は――まで洩らさじ　鐵數九二五
草木國土有情非情も悉皆成佛　知二二四七
草木國土有情非情も皆これ諸法實相　芭二五三五
草木國土おのづから　西行一一七一
草木國土悉皆成佛　墨一五二一・杜一六四二・東二三八九・佛二七九一
草木國土悉皆成佛道　半二四九九
草木國土悉皆成佛の機を得　定二一一五
草木國土悉皆成佛のこの妙文　六浦二〇一五
草木國土悉皆成佛の法華經　現二〇二六
草木國土悉皆成佛の御法　井六一八
草木國土悉皆御法も　鵜二二二一
草木國土成佛の　采四〇〇・雪一八四五
草木國土まで悉皆成佛疑ひなし　采四〇六
草木國土皆成佛の御法　西行一一七七
草木國土皆成佛の靈地　身二九五五
草木國土も成佛なれば　巴二八三
草木心なしとは申せども　井六二〇・高砂一八六五
草木土砂風聲水音まで萬物の　高砂一八六六
草木は雨露の惠み　熊野二四一
草木までも成佛の緣ある結緣　[illegible]一九五

草木も法の色を見せ　[illegible]一二九〇
淺立僧[illegible]　[illegible]六八八
早[illegible]連[illegible]
　淨藏淨眼――　[illegible]一六八四
雙林の入滅　春日六七五
草露に臥して空しくなる　松[illegible]八五八
草露の道のへ　[illegible]一〇四
小枝蟬折　[illegible]二二九
嵯峨(京都)
　浮世の――なれや　東九七二・百二六七八
　浮世の――の奥深き　[illegible]七九[illegible]
　所は――の奥なれども　西行一二七五
　山までも浮世の――になるもの　西行一二七三
　榮えは古今相同じ　高砂一八六四
〔逆髪〕　蟬丸異稱一六七一
逆髪
　延喜第三の皇子――　蟬一六七九
　白髪は亂れ――の雪を散らせる　歌三六七
逆髪宮　蟬[illegible]一六七一
榊
　いかにまがへて折れる――ぞ　野宮一四一〇
榊の枝を忌垣の内にさし置き　野宮一四一〇
榊葉
　謡ふ――の神歌　[illegible]一五四[illegible]
　同じかざしの――を　龍田一九[illegible]八
　神祇の歌は――の庭火に袖ぞ　草子一一九五
　群れゐて謡ふや――の　弓三三三九
　木綿四手に――添へ　第一七七二
　少女子がかざしと思へば――の　野宮△三四一五
榊葉これは神の宿木　[illegible]六七三
榊葉の青和幣白和幣　[illegible]一四五[illegible]
榊葉の神[illegible]　[illegible]九七[illegible]
榊葉のさして往生を願ふべし　源氏一〇三八
榊葉をうたひ　[illegible]一一〇八
榊葉を謡ふ少女の袖はえて　[illegible]八四八
逆さまなる御弔ひ　春栄一四〇七
逆さまたる事はをかしいよた　[illegible]一六八〇
嵯峨釋迦堂(京都)　百所二六六七
嵯峨清凉寺より出でたる僧　[illegible]一五七
盃
　秋の夜の――　[illegible]一二五[illegible]
　流溢の――とは……仙家の盃なり　邯七八四
　影もめぐるや――の　菊四〇八
　傾くる――の影をたたへて　[illegible]
　曲水の――　融三三三
　心を汲みて知る人の情の――を　猩一六六五
　琴にも――詩を作るにも――　大瓶一七六一
　木の葉の――　俊寛一四二七
　月の――取り出だし　猩一六六五
　人の情の――にうけて心を　安宅一〇一
　人の情の――の深き契りのためし　紅三〇八六
盃の影のめぐるも[illegible]久しき　[illegible]
盃の数は重なれども　[illegible]
盃も浮かみ出でて　[illegible]
肴
　さておーーは何々ぞ　大江五六四
嵯峨野(京都)　東所九六三・小督所一〇九五・野宮所一四〇五
坂上の田村丸大同二年の春の頃　[illegible]
坂上の田村丸の御願　[illegible]
嵯峨の奥に住居する西行法師　[illegible]
嵯峨の御寺廻らば廻れ　[illegible]
嵯峨の大念佛　[illegible]
嵯峨の天皇の御宇　融二二五
嵯峨野の嵐山　東九六五
嵯峨野の方ゆかしく　野宮一四〇七
嵯峨野の寺に参りつつ　[illegible]六七八
嵯峨野の原にていざ遊ばん　[illegible]九七〇
嵯峨の原下は大堰川の　[illegible]
嵯峨の山御幸絶えにし跡た[illegible]ら　小督一二四
嵯峨の山御幸絶えにし芹川の　[illegible]八四[illegible]
境川
　越後越中の――　山三一六八
境をさかり
　人畜類の生を背き――にき　和三〇三四
酒船に酒をたたへん　大蛇三五一〇

〔逆才〕
相摸の守高時　一三〇一
相摸の國を立ち出でて　[illegible]三〇一九
相摸坊　景上歌六三三
相摸坊　松山天ツレ二八八[illegible]
白峯の――
白峯の――に從ふ天狗とも　松山天二八八九
鳴尾殿の御――と申すか　[illegible]一五一
酒迎ひ　鞍九五八
逆茂木のけさせ　箙△五一五
逆茂木を引き　安宅△八六
坂本(滋賀)
戸津――の人家まで　[illegible]七一九
酒盛
潯陽の江のうちの――　[illegible]一三五[illegible]
榮ゆく道
男山――のありがたさよ　女三四九[illegible]
榮ゆくや男山にし松立てる　放生[illegible]四四六
盛りとて光を埋む花心　三山二九[illegible]三
盛りの人の身に華とたらば　[illegible]三一三四
盛り久しき藤波の　[illegible]七[illegible]
盛りふけたる女郎花の　[illegible]上歌[illegible]四八一
さがり松の梢の嵐吹きしなり　[illegible]一六〇四
下り松の下に二歳ばかりなる男子　生二六五
逆艣
渡邊にて梶原が――の意見　[illegible]一三五八
逆艣立てんと浮舟の　[illegible]八五
〔鷺〕　一三一五
鷺　[illegible]一三一五
鷺
五位の――　鷺一三三一
洲崎の――　[illegible]一三一九
さきかけん
弓馬の道も――と　[illegible]一九九九
先繰りな事　籠△三三八八
先だたぬ悔の八千度悲しきは　[illegible]九五[illegible]
さきだたぬ悔の八千度百千鳥　櫻一三三七
さきだたぬ悔の八千度百夜草　[illegible]八[illegible]六
さぎの藏人
前の陸奥の守(義家)　鷺一三三一
前の世の成行こそ拙けれ　[illegible]八[illegible]一
前の世の報いのままに生まれ來て　[illegible]四九
前の世の報いまで思ひやるこそ　船橋上歌[illegible]七五六
鷺のゐる池の汀に松ふりて　江口四八四
先へは進まぬ足弱車の　[illegible]上歌一三一八
咲きも殘らず散りも始めず　[illegible]二五六五
索(ロック)(を見よ)　[illegible]九五〇
索々
第一第二の絃は――として　[illegible]一六八[illegible]・[illegible]一〇九〇
渚の砂――として朝の日の色を朗じ　[illegible]八
作者も題も文字の形も少しも　[illegible]一一九六
作者をつけてただ給へ　[illegible]一九一五
笏拍子の役
謠ふや笛――とも知らずや　[illegible]一八[illegible]五
開耶姫(コノハナサクヤヒメを見よ)　櫻一[illegible]
櫻
あたら――のとがにはありける　西行一一[illegible]四
あたら――のとがは散るぞ恨みたる　櫻一[illegible]八
池水に汀の――散りしきて　大[illegible]五四一
大宮人のかざすなる――橘　放生三四〇七
大宮人の小忌衣――をかざす朝　[illegible]四[illegible]八
雲と見し――は花に顯る　二人三七一六
左近の――に至るまで　[illegible]一五一[illegible]
それは柳これは――　花一〇〇四
七日に限る――の盛り三七日まで　[illegible]一[illegible]四一
花一時の榮花の――　[illegible]四[illegible]
深草の野邊の――し心あらば　[illegible]一五[illegible]七
道のべの便りの――夏かけて　[illegible]四九
道の辺のたよりの――折り添へて　[illegible]一[illegible]九五
柳――をこきまぜて都ぞ春の錦なる　[illegible]四[illegible]
櫻町の學生の浦櫻　[illegible]七六五
櫻色に染めし袂の惜しければ　[illegible]一六四六
櫻魚と聞くもなつかしや　[illegible]一[illegible]八
櫻かざしの袖ふれて　[illegible]四六六
〔櫻川〕　一三三三

櫻川(茨城)　櫻[illegible]
櫻川
　散れば又波も――　櫻一三三五
　常よりも春べになれば――　櫻一三三[illegible]
櫻川とて花の名所　櫻一三三八
櫻狩
　霞む外山の――　雲雀二六四一
　願待ち得たる　西行一一六九・櫻一[illegible]七
櫻狩雨は降り來ぬ同じくは　右三四一
櫻木
　御神體は――にて　櫻一三三[illegible]
　蓮の絲を染めて掛けて乾されし　雷一八四五
櫻木の宮(奈良)
　頼み給ひける――神の宮瀧　二人二七三〇
櫻木の明神(宮崎)
　日向の國にては――と申す　右△三四八
櫻子　櫻子方一三三三・三山ツレ二九一一
櫻子
　畝傍山の女の名をば――と聞え　三山二九一六
櫻子の母　櫻シテ一三二三
櫻衣の裏ふき返す　右三五〇
櫻田(愛知)
　ここもや――の雪をもかへす　淡一四三
櫻散る花の所は春ながら　雲林△四六五
櫻の歌
　かたがたいかで――なるべき　[illegible]四七
櫻の精　西行[illegible]一二六七
櫻の花盛りただ雲とのみ三吉野の　六浦三〇一六
櫻の馬場(宮崎)　櫻一三三[illegible]
櫻の馬場の西にて櫻子の母　櫻一三三五
櫻の宮(三重)
　天照る神にては――と現れ　右[illegible]四七
櫻の宮の花盛り　[illegible]一七七[illegible]
櫻は舊院の御愛木　[illegible]一五一
櫻花
　あだなりと名にこそ立てれ――　井三四一〇
　降るは涙か――　熊野[illegible]五[illegible]
　見てのみや人に語らん――　雲林四六一
　見るからに袂ぞ濡るる――　大蛇三五〇六
櫻花今盛りなり難波の海　[illegible]四[illegible]六
櫻花散りにし風の名殘には　櫻一三三〇
櫻花咲きにけらしな足引の　西行一一七三
櫻葉の神(京都)
　北野の――　右三四七
櫻葉明神　右[illegible]九
櫻葉の宮所(京都)　右[illegible]四五
櫻は花に顯れたる　寶一[illegible]五〇
櫻は花に顯れにけり　春榮一四〇八
櫻は諸木に勝れ水を生ずる德あり　[illegible]一五一
櫻町(京都)　[illegible]所一七三三
櫻町中納言　[illegible]一七三三
櫻木の中納言　[illegible]一二七[illegible]
櫻井(富山)
　雪中に――上野に櫻井田　[illegible]三六九
櫻をのみ花といふなる古言は　[illegible]四八
櫻を見れば春ごとに　[illegible]
櫻を折らぬ人しなき　[illegible]
さくりにつけて　[illegible]一六四五
柘榴忽ち火焰となつて　雷三三三八
座具をのべ香を焼き　通小七六六
酒
　赤きは――の科ぞ　[illegible]五六四
　泉はもとより――なれば　菊八一一
　竹の葉の――　[illegible]一[illegible]五[illegible]
　天の濃漿とはこれ仙家の――の名　邯七八四
　日夜に――を愛し　三笑一三八六
　無明の――の醉ひ心　[illegible]九[illegible]
　八しぼりの――取り合はせ　大蛇三五一〇
咲けども今は恨めしや　[illegible]上歌一五〇八
酒のみの友ばかり　大瓶一七六一
酒は百薬の長　大瓶△一七六三
叫べど醉が出でばこそ　[illegible]八[illegible]七
酒をいざや商はうよ　[illegible]一五一
佐國は花に身を捨てて　[illegible]七[illegible]〇
佐國まさに身を捨て後の春を　[illegible]一七四〇

左近尉(宿主) 藍ワキツレ二三五
左近尉(日暮從者) 鳥ワキツレ二三八九
左近の櫻に至るまで 景一五一二
榮螺 玉井△一九八一
ささがに
　わが背子が來べき宵なり——の 岡寺一六一六
　土蜘二〇六二
ささがにのいとあさからぬ 三山二九一七
ささがにのいと苦しとは 昭一五八二
ささがにのいとはかなくも 自一三四一
佐々木の三郎盛綱 藤戸二七二九
佐々木の四郎 衾△七二三
笹栗
　山の邊の—— 通小七六五
小竹田男血沼の大丈夫と申しし者 求小三〇六八
ささて來にけりうつほ舟 鵜上歌二三八三
ささ波や志賀辛崎の一つ松 源氏一〇二九・三井二九九六
ささ波や志賀の浦のほとりに 白鬚一四六九
ささ波や志賀の浦舟こがれ行く 山三一六七
ささ波や志賀の都の名をとめて 志一蓍二三九四
ささ波や志賀の都は荒れにしを 俊成上歌一四四三
ささ波や濱の眞砂は盡くるとも 關寺上歌一六一五
ささ波や三井の古寺鐘はあれど 三井二九九八
笹の段 百二六七三
笹の一夜の契りだに 楊三二二四

ささへ
　無益と——けり 羅三三五一
笹結び 籠△九五一
私語(さざめごと)
　小弦は切々として——に異ならず [illegible]三〇九〇
　驪山宮の——も誰か聞き傳へて 班二六〇六
　驪山宮の——漏れし始めを 小督一一〇七
ささめごとかくやらん 岩二九二
私語たれども今洩れ初むる 楊三一二一
ささら(簓)
　心亂るるこの—— 花一〇〇九
　波の鼓や風の—— 東岸二一七三
さざら波
　打つなりや—— 岩二九四
簓の起りを尋ぬるに 自一三四二
簓の敵には百八の數珠 自一三四三
簓の竹には扇の骨 自一三四三
ささらも八撥をもうち捨てて 土車二〇七六
簓八撥うち連れて 東岸二一七五
さざれ石
　君が代は千代に八千代に——の 弓三三二四
　千代に八千代に——の 老五三三
　千代に八千代を——の 春榮一四一八
さざれ石の巖となりて 養三一三三
座敷を定め敷皮敷かせ [illegible]三一〇三

座敷を靜め
　笏拍子をうち—— [illegible]二一九七
指圖
　燕の——の箱 [illegible]七九五
さしも草
　觀世音——さしも畏き誓ひの末 三井二九九〇
　[illegible]〇九六
　唯賴め標茅が原の—— 藍二四四・田一九九三
　[illegible]七七八
座主
　比叡山延暦寺の—— [illegible]
さす枝の袖は若木の花の袖 老ワカ五三三
さす鷹には雲霞を拂ひ [illegible]
さす鷹には[illegible]を拂ひ 道明一八[illegible]七
さすき八間を結び置き 大[illegible]
さす盃の廻る夜も [illegible]
さす手も引く手も 富士[illegible]七〇七
さすも引くも光なれや [illegible]七八五
さすらひ歩き [illegible]
坐禪の公案 放下[illegible]四四六
坐禪の床 [illegible]
坐禪圓月の窓の內 [illegible]一八四七
さそくをつかつて十方斬 [illegible]
左足を踏み鐵壁も徹れと 熊坂九四四
さぞな名にし負ふ花の都の 田クセ一九九三
誘はれし花の行方を尋ねつつ [illegible]六〇七

誘はれつつも千代を唱ふる　[illegible]
誘ひ出づるすきも男　雲林四六八
誘ふ花とつれて散るや心なるらん　田一九九三
誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ　[illegible]一六一六
誘へばぞ散る
　散ればぞ誘ふ——　[illegible]
沙汰
　御——捨てさせ給ふな　[illegible]二五六三
　その御——は候はぬぞ　[illegible]二五六〇
　理非によつてその——致す　[illegible]二五六九
左大臣の御息女葵上　葵一五七
定家（テイカをも見よ）
　藤原の——の軒の建て置き給へる　定二一〇五
貞任
　安倍の——勅使として　[illegible]四二〇
　安倍の——宗任を御追罰　烏三四二〇
貞光
　大江の——ツレ　五五三・[illegible]ツレ　一二四五
貞光季武綱公時　大江五五六・[illegible]一二四七
定めなき事ながら　熊[illegible]六〇二
定めなき世のなかなかに　蟬次第一六七三
定めなき世の習ひ　善知六六・鳴一五三一
定基
　大江の——といはれし寂昭法師　石一三七四
左中將清經　清八四三
五月半ばの富士の雪　小袖一二二八

五月の玉の波を散らす　[illegible]七三
五月待つ花橘の香をかげば　[illegible]二六四三
五月山梢を高み時鳥　[illegible]七三
索（さっく）
　動くか動かぬか——の　[illegible]一八〇三
　大聖不動明王の——にかけ　[illegible]一九五〇
　不動は——の縄にて藁縄を形代を　[illegible]三三〇
　不動明王の——にかけて　[illegible]
　明王の——にて身を縛め　[illegible]六七七
颯々
　鈴の——の響の袂　松[illegible]六八五
　松吹く風——として　東[illegible]一七三
颯々たる涼風と衰鬢と一時に来る　關寺一六二一
颯々といふ聲は樂々と聞く、　代一四八九
颯々の鈴の音　現一三二一・住[illegible]五四
颯々の鈴の聲　[illegible]八・[illegible]二〇八・[illegible]一九四
颯々の鈴も驛路の　須一五〇三
薩埵
　吾今三點楊枝淨水唯願——　[illegible]八
　大慈大悲は——の悲願　盛三一〇〇
薩埵の印明を授かり　高野六一一
離體一つにあらざれば　蟬三三一
薩摩潟鬼界が島の流人　俊寛一四二四
〔薩摩守〕　忠度異稱一九〇三
〔薩摩守忠教〕　忠度異稱一九〇三

薩摩の守忠度　[illegible]
薩摩の守忠度の果は如何に　通盛二九〇八
薩摩の守忠度[illegible]　[illegible]
さてお肴は何々ぞ　大江五六四
さて慰みは浦の名の　八島上歌三一五〇
さてはなからん跡までも　松山鏡上歌二八七三
さて又[illegible]にかりそめに　[illegible]
さても[illegible]の[illegible]を出でこそ[illegible]　[illegible]
佐渡（[illegible]）
佐藤[illegible]が後家　[illegible]一六四四
佐藤忠信を此方へと　忠信一八九五
佐藤継信能登殿の矢先にかかつて　八島三一五三
佐藤の館に於て山伏饗待　[illegible]
佐藤兵衛憲清出家し西行と、　[illegible]二九六
里神樂　[illegible]四六
里の名を聞かじといひし人も　浮三一七
里離れ須磨の家居の習ひとて　[illegible]上歌二〇五一
里離れたる通ひ路の　[illegible]六八六
里は平安の街を見せ　[illegible]六七〇
悟りの道やそのままに[illegible]道の佳　[illegible]六五
悟りは一つぞ胸の月　輪三三七八
悟りをも迷ひをも迎へ給ふ　[illegible]一五五六
さなきだにあだなるに芭蕉の　芭上歌三五四一
さなきだに古の　浮上歌三一一七
さなきだに暮るるを急ぐ　山上歌三一七四

さなきだにせばき世に　雲雀上歌二六四〇
さなきだに人心　紅ク七三〇八六
さなきだに闇の夜鶴の　綾一拾一九一
佐那田の餘一義忠　七騎一三一三
早苗
急げや——老いもこそすれ　飛鳥七三
昨日の——いつの間に　鳥二二九六
座に直り　盛三一〇三
さ丹塗の軒の瓦の鬼の形　山三一七八
實方の宮居(京都)　賀茂物七五三
さねかづら
元結更にたまらねば　にて　昭一五九一
實平　七騎シテ一三〇五
實平
土肥の次郎——　七騎一三一七
[實盛]　一三四三
實盛　實シテ一三四三
實盛
長井の齋藤別當　實一三四九
佐野(群馬)　鉢所二五四五・船橋所二七五三
佐野の茎立若たちて　求三〇六七
佐野の源左衛門の尉常世　鉢二五五九
佐野の庄に鳥が無く候　船橋ハ二七六二
[佐野船橋]　船橋異詞二七五二
佐野の船橋
東路の——とりはなし　船橋二七五七
上野や——取り放れし本領に　鉢二五七〇
佐野のわたり(群馬)
これは東路の——　鉢二五五三
佐野のわたり(奈良)
大和路や三輪が崎なる　鉢二五五三
佐野のわたりの雪の夕暮　鉢二五五三
佐野のわたりの夕暮に袖うち拂ひ　船橋二七五九
さばしる
小鮎——せぜらぎに　鵜飼三〇六
澤田
伏見の——見え渡る　賴三三〇〇
さばへなす荒ぶる神もおしなめて　水無月二九四二
狹蠅なすあらぶる神も我への　金八七六
澤邊の螢の影　葵一六三
さはり
少し契りの——ある　女三四九九
錆びたりとも長刀を持ち　鉢二五六〇
錆長刀やうやうに横たへ　鉢二五六八
雜兵の手にかからん事　朝二三六四
三郎
淡津の——　清八四三
伊勢の——　安宅八二二
泉の——　錦戸二三六四
飯綱の——　鞍馬九五九
土屋の——　七騎一三一〇
本間の——　檀二〇〇四
緒方の——　大原五四九
佐保の川(奈良)
月の御船の——面　春日六七九
佐保の川をうち渡り　百二六七八
佐保の山風のどかにて　室三〇二三
佐保の山邊をたち隱すらん　佐一三七三
佐保姫の霞の衣と詠みたれば　佐一三七一
[佐保山]　一三六五
佐保山(奈良)　佐所一三六五
佐保山の神祭　佐一三七四
佐保山の柞の緑かたしきて　佐保名一三七六
佐保山姫　佐一一三六五
佐保山姫の雲の袖　佐一三六八
樣替へてたび給へ　巣一五〇九
樣變へばや　[illegible]二一八・[illegible]九九六
樣々に弔ふ法の聲立てて　藤戸上歌七四八
さまされ
說法の場——申す　自一三三四
三摩耶形を行ひ給ふ　卒一七三
五月雨
かきくれて降る——のそらごと　卒一七一八
五月雨に物思ひ居れば時鳥　[illegible]一四一

小筵
　涙かたしく――に　砧八三二
侍かと思へば錦の直垂を着たり　實一三五八
覺むる枕に[illegible]き　忠度一九〇七
醒井の宿(近江)　[illegible]二七五五
さも忙はしかりし身の　忠度上歌一九一六
さもらしや方々に　景六四五
さも妙なれや九重の　嵐上歌二〇五
さやうの事をば簾中にては　船辨二七八[illegible]
さやけき影は所から　放生二四六六・弓三三三四・女三四九四
さやけき月の世を照らすとは　春日六七四
鞘つまりたる言葉の末　大佛一七五四
小夜神樂　作一二七八
小夜衣
　秋の恨みの――　雨三三四
　思ひも深き――の　檜二六三二
　人知れぬ心は重き――の　土蜘二〇五八
　わが思ひ重きが上の――重ねて　通小七六七
小夜千鳥
　水無瀬の川の――共音に鳴きて　水無瀬二九二九
小夜の手枕
　結び定めよ――　表一四九
小夜の手枕結び定めし世　歌三五六
小夜の中山
　命なりけり――　座三〇九七
小夜の中山なかなかに命のうちは　[illegible]七五[illegible]
佐用姫が松浦潟　江口上歌四八二
さらさらさらに戀こそ寝られね　花一〇[illegible]
更科(長野)
　わが心慰めかねつ――や　姨三四七五
更科越路の月雪　[illegible]三二五七
更科の里(長野)　[illegible]四七五
更科の月　[illegible]四七[illegible]
さらぬ鏡の影は離れじ　須[illegible]一五[illegible]
さらぬやうにて行き過ぐる　土車二〇七七
さらぬ別れ
　老いぬれば――のありといへば　熊野三三四四
　世の中に――のなかりせば　[illegible]三一二四
さらぬ別れのなくもがな　熊野三一四五
さらば沈みも果てずして　船橋クセ二七六〇
さらば留まり給へとて　安達上歌一一〇
去り難きは貴命　[illegible]二一〇九
さりとては捨てぬ命の身に添ひて　鸚上歌一六
さりともと思ふ心も蟲の音も　清八五一
猿
　頭は――尾は蛇足手は虎の如く　鵺二三八六
　心の――　采四〇六
　梢の嵐――の聲　大原五三八
　水の月取る――　采四〇三
　水の月を望む――の如く　花筐二五九一
　峯に木傳ふ――の聲　[illegible]一六八五
猿が馬場(富山)
　礪波山の山中――　木曾八一九
猿澤の池(奈良)
　龍神は――の青波立てて　春日六八[illegible]
　吾妹子が寝くたれ髪を――の　采四〇三
猿澤の池とて隔れたき　[illegible]四〇一
さるにてもよそには何と御裳濯川　水無月祓一九四五
さるにてもわれながら　梅枝クセ四四五
さる人の讒言により　弱三三一七
さる人の讒奏により　[illegible]六八
さる程に兄弟文こまごまと　夜[illegible]六八
さる程に三光西に行くことは　姨クセ三四八二
さる程に次第次第に道狭き　二人[illegible]七一九
さる程に嫡子悪源太義平は　[illegible]七[illegible]
さる程に女人は　現クセ一〇一六
さる程に更け静まりて　國クセ九〇四
さるほどに平家は時を廻らさず　賴クセ三三〇九
猿丸太夫
　おことは古の――の流なれば　草子一一九〇
去る者は重ねて來らず　[illegible]四
されどもこの人　三輪クセ二九八五
されども世の中の　楊上歌二一一
さればかの經政は　經上歌一〇八八
さればにや眞如平等の秋風は　高野クセ六一三
さればにや二柱の御神の　[illegible]クセ一四七

されば人一日一夜を經るにだに　求上歌三〇七二
されば和歌のことわざは　蟻上歌二二〇
藏王權現　嵐シテ二〇一・國シテ八九一
藏王權現
　木守勝手——同體異名の姿　嵐二一一
藏王權現の來現　嵐二一〇
藏王とは王を藏すや吉野山　國九〇五
早蕨の萌え出でそめし思ひ　葵一六一
さゐさゐ
　玉衣の——沈み浮き波の　東岸二一七三
左衞門
　日下の——　廣四五
　父の——よ　花一〇七
　直井の——何某　竹雪一八七六
　牧野の——何某が子　放下二四三六
左衞門の尉通俊　弱三三一七
左衞門尉康淸の御子　遊△三一九八
棹
　しるしの——　室三〇二三
小牡鹿
　妻戀ひかぬる——の　放下二四四九
　待つとは知らで——の　田一九九九
さを投ぐる間の夢の　佐二三七四・當一八五四
さを投ぐる間も急げ人　身二九五一
棹の歌
　神歌の一節——とや　佐一二七八
　月も影さす——　江口四八三
棹の歌謠ふ浮世の一節を　室三〇二三
棹のしただり
　天地の開けしもさしおろす——　室三〇二三
殘鶯
　ただ——と落花とに別る　藤二七三一
三惡道
　一見卒都婆永離——　善知三八八・卒一七三三・知二三四二
　諸々の惡趣をも——は遁る　卒三一〇一
三惡道を出でながら　善界一六〇一
三惡の罪
　一念の功力だに——は消え　知二三四二
散衣
　麁弊の——を著しつつ　春日六七四
山影門に入つて推せども出でず　三輪二九七九
三界
　一切有情殺害——不墮惡趣　項五九七・藤戸二七四八
　親子は——の首枷　天二一三八
　眼裡に塵あつて——窄く　滿八四七
　綠子は——の首かせ　水無瀨一九三四
三界一心なり　柏六六二
三界火宅のすみか　東三〇七三
三界唯一心の外ならず　輪三三七八
三界に流轉して　柏六六三
三界の絆をここにて切る　土車一〇七七
三界の首枷かや　百萬六七二
三界の親子恩愛の歎き　谷一九四九
三界は所なし唯一空のみ　景六二五
三界は水の上の泡　鐘一四五二
山海萬物の出生卽ち王地の恩德　放生六五八
三界無安の內を去りて　東北上歌二一九九
三界無安猶如火宅　歌三六五・東九六七
三界唯心の理　放下二四四九
山河海村野田殘る方なく神のます　大社五七六
三學
　戒定慧の——を見せ三塔と名づけ　舍七二一
山河草木國土治まりて　龍田一九二四
山河草木震動し　[illegible]一六〇四
山河草木震動して　大江山八六九
三月廿五日の夜に入つて　藤戸二七四三
三韓
　神功皇后——を從へ給ひ　岩九八二
神功皇后——を鎭め給ひしより　弓三三三八
慙愧懺悔にあらはし　知三三五一
慙愧懺悔の姿を現し　現一〇二三
慚愧懺悔の物語　實一三五七
慚愧の心時過ぎ　[illegible]二八二
三極
　萬代の池の龜は甲に——を備へ　鶴八

山僧の會　胡一二四二
［參宮］　内異梅三七一
參宮　内三七五
參會
日夜朝暮——　羅三三四七
參會禁制　[illegible]九五一
三皇五帝の昔より　西王一五六九
三光西に行くことは　鏡三四八二
山花開けて錦に似たり　櫻一三三六
三觀
一心——の月滿てり　[illegible]九五〇
一心——の窓の前には　[illegible]一一三
懺悔
慚愧——にあらはし　知三三五一
慚愧——の姿を現し　現一〇二〇
慚愧——の物語　富一一五七
さんげ
無明——の敵を拂はざ　鱗四五六
殘月
遊子——に行きしも　二人二七二〇
懺悔に語り申さん　梅枝四四五
山下にこそは下りけれ　[illegible]二八三
懺悔に罪の雲消えて　船橋二七六四
懺悔の有樣　[illegible]一九六八
懺悔の有樣見せ申さん　[illegible]三〇七五
懺悔の心夢覺め　放生[illegible]四六
山下の人家軒を並べ　[illegible]
懺悔の姿現さんと　殺一六四一
懺悔の姿夢中にたゞ現す　錦木三三五六
懺悔の姿を現すなり　三山二九二三
懺悔の舞を奏で　[illegible]四四六
懺悔の物語　[illegible]一二一四
懺悔の廻心　[illegible]
三國
天竺震旦わが朝——に渡り　[illegible]六七九
三國不二の峯　代一四八四
三國無雙のこの瀧　三笑二三八六
本朝に於てわが姿を　[illegible]
三壺の形あらたなり　江島四九三
三五の暮
柱は實る——　三井二九九七
三五の月
家を離れて——の隈なき影　鳥三三〇〇
三鈷の祕に伴ひ　高野[illegible]
三五夜中の新月の色　小督一一二一・[illegible]
三五夜中の新月の二千里の外まで　三井[illegible]九九七・[illegible]一四八〇　雨三三三
三鈷を投げさせ給ひ　高野六一[illegible]
三才
上下は即ち天地人の——　[illegible]
天地人の——となる　逆一二一三
さんざんに打擲す　[illegible]
さんざんの體　鉢三五五九
三史五經の道を極め　[illegible]
三枝の禮
鳩に——をなし　[illegible]
三十一字[illegible]　[illegible]
[illegible]——[illegible]　[illegible]
三十三身の秋の月五濁の水に　[illegible]一〇〇五・[illegible]一九八九
三十三天攀ぢ上り　[illegible]一一九五
三十三度
[illegible]——の歩み　俊寛一四三四
三十丈の玉塔にかの珠を籠め　海一八〇
三十二
具相——以八十種好　海一八六
三十八社
大社は——を勸請の地　大[illegible]五〇八
三十八萬歳の間この山を守護し　御三九六三
三十番神
御幣に——をしまし　鐵七一三
三十六宮　[illegible]七九
三十六萬億同體同名同號阿彌陀佛　[illegible]
山上大峯釋迦が嶽　[illegible]一〇〇九
三尺の劒
漢王——居ながら秦の亂れを　小鍛二一六
三尺の長刀指しかざし　[illegible]一六九六
三種の神寶事故なく都に納まり　大原五三七

三種の神寶をみづから授け給ひ　御二九六六
三從
　五障——のこの身なれば　佛二七九〇
三春
　花盛り——だに經ずして　[illegible]一七三五
　花に——の約あり　鞍九五四
三所
　八幡——の神託　弓三三九
三所權現
　三熊野——　[illegible]三六一八
三所權現を勸請申し　[illegible]三二五
三所の權扉を押し開き　木曾八二一
山神鬼魅夜叉羅刹　江島四九四
山神護法善神　谷一九五一
三身の金容を顯して　木曾八二一
山神の宮居又は楊柳觀音菩薩　[illegible]三二三九
護臣はいさましに世にあり　安宅九九
山神木神の氷室を守護し　[illegible]六六〇
三身圓滿の妙體を受け　現一〇三三
ざんすゐ地獄の苦しみは　歌[illegible]六五
三世
　主從の御契りこれも——の御値遇　[illegible]六一
　二世の願ひや——の御恩を少し　攝一六六四
ざんせい
　夕陽の——新に窓を穿つて去る　[illegible]二五〇三

殘星の影には北溪の水を汲み　[illegible]
〔三笑〕　一三八二
三笑の昔となりにけり　三笑一三八八
三世覺母の大聖文殊をこの島に　[illegible]九五
山背の馬蹄も見えぬ　[illegible]九九
三世十方の佛陀の聖衆も　朝三三六四
三世の覺母
　一萬文殊——たり　卷二八二
三世の機緣の始め　[illegible]二五一九
三世の主君を尋ねて　高野六二一
三世の主君を手にかけ　仲[illegible]三〇
三世の諸佛十方の薩埵　[illegible]二三八
三世の諸佛の出世の本懷　[illegible]四四三
三世の諸佛[illegible]に　大佛一七四二
三世の契り
　世を捨て給ふとも——たるものを　高野六一五
三世の契り朽ちせねば　高野六二五
三世の契りの滿ちてこそ　[illegible]二一六四
三世の好み　春榮一四〇七
三世の利益同じくは　[illegible]二一三
三世利益同一體　高野六〇三・誓一五六三・道一八三〇・朝三三六八
三世了達の智慧を以て　[illegible]三六四〇
三千
　一念——の花薰じ　身二九五〇
三千界の内にまづ　江島[illegible]四九二

山川草木國土豐かに　[illegible]〇九九
三千世界の諸神　大社五八四
三千世界は眼に盡き　[illegible]一八[illegible]
三千世界は眼の前に盡きぬ　[illegible]一三一八
三千世界もよそならず　[illegible]四九四
三千人の后　咸八〇〇
三千人の衆徒を置き　[illegible]七二〇
三千人の寵愛いづれをわくる　昭クセ一五八五
三千の寵愛一身にあり　[illegible]九九一・[illegible]△一六四[illegible]
山川萬里を隔つれども　[illegible]一八六[illegible]
三足の青鳥御殿の上を飛び翔り　東方[illegible]一八一
山賊夜盗の盜人等　[illegible]九[illegible]
三代八部　[illegible]一九〇
三塔
　戒定慧の三學を見せ——と名づけ　[illegible]七二一
三塔一の遊僧　[illegible]一六五八
三塔の遊僧　[illegible]一〇[illegible]
三塔の鐘も杉間の雲の　[illegible]一五一五
三斷
　切つて——となす　[illegible]二四四七
三段舞　[illegible]△四一九・江島△五一一・[illegible]△七四[illegible]
九世△九二八・[illegible]一〇七一・白[illegible]△一四〇
二・白樂二四七九・富士山△二六九三・和△
三〇三六・養△三一三八
三重の高樓[illegible]色の階　[illegible]七一[illegible]

三途に沈み果てて紅蓮大紅蓮の　錦木七六〇
三途にも歸らんこと　高野六三四
三途の瀨踏なり　善界二七四九
三途八難の悪趣に墮し　江口四八四
山洞
　心すごの——やな　大會一七八〇
山頭には夜孤輪の月を戴き　三輪二九七八
三度頂戴仕り　鉢二五六九
山外に山あつて山盡きず　熊野三一四七
三悌　雷電三三三六
山鳥
　一聲の——羽をたたく　山三一七九
三條烏丸(京都)　烏三四二〇
三條の吉次信高　熊坂九四一・烏三四一五
三條の小鍛冶宗近　小鍛一一一三
三條の衞門　熊坂九四一
三黜
　吾今——楊枝淨水唯願薩埵　朝二一六八
三難耳絕えて　卷二八〇九
三に倶利伽羅七大八大金剛童子　野守二四三三
三如來四菩薩も　舍一三九〇
三人一所にありつるだに　俊寛一四一九
三熱の神ごころ　葛七〇一
三熱の苦しみ
　神ならで——といふ事あるべきか　葛六九七
三熱の苦しみあり　葛六九六
三熱の苦しみを免る　春八〇六
三熱の苦しみを免るべしと　現一三二八
三熱の害を早く免れん　現一一一八
三拜
　宗近に——の膝を屈し　小鍛一一一三
三は我等が命　烏三四一五
三番叟　翁狂言一
三番の左折に折りて　烏三四一九
三伏の夏闌け　大三二四三・東北二三〇〇
三伏の夏の歎　富士山一六八九
三伏の夏の日の　源太一〇六七
三伏の夏もなく　西行一一七一
讃佛乘の因ぞかし　山三一八一
讃佛乘の因縁　卒四一〇・善一七三一
讃佛乘の心ならば何はの事も　賀茂物七五一
讃佛轉法輪
　狂言綺語を以て——の誠の道に　東方二一七〇
三寶
　我身敬禮——前　盛二四四
　鳥——を念じて風常樂と音づる　大會一七八〇
　佛神——も捨て果て給ふと　當八五一
三寶加持の行ひに五道の罪も　鵜飼二七六三
三寶衆僧の御布施一裏　自一三三八
三寶に供養し奉る　自一三三八
三寶院(石清水)　熊野六一一
三昧
　出でては——の門に遊ぶ　東北一四四七
　火生——に入り給ひ　善界一六〇一
　内身——自消たり　高野六一一
　念佛——の道場に出で入る　實一五五三
散米
　首途をとりて——に　俊寛一四二五
三摩耶形(サマヤギヤウを見よ)
三位
　五條の——俊成卿　俊成一四三九
　宰相——舞の藏人　碇二六〇
三密の月を澄ます　善一六四
三位殿　三井△二九九四
三明
　六通——の劔を提げ　舊四六六
三面の琵琶　昌一一五七
山陽道南海道合はせて　盛五一二
參禮
　西王母この君へ——申すべし　東方二一八一
參籠
　熱田に參り一七日——　草薙八八〇
　清水に一七日——　大佛七四五
　暫く——し　檜二六二四
　善光寺の如來に參り一七日——　道明一八二五
　近き所に——　竹雪一八七七
　三熊野に參り一七日——　巴一五五二

山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲　志一三九四・石一三七五
山王
　一稚兒二――　大江五六三
山王權現　善界一六〇六
山王權現
　あじかの大明神と現れ給ふ――　大社五七八
　南無や八幡――　大江五六八
山王二十一社（滋賀）　兼七一九
三會
　慈尊――の曉　高野六二一・松尾二八四七
三會の曉未だたり　弱三三二三

し

詩
　唐には――を作つて遊ぶ　白樂二四七五
　琴にも盃――を作るにも盃　大瓶一七六一
蚩尤といへる逆臣　自一三四〇・藤榮二一五七
詩歌管絃
　花鳥風月――を專らとし　[illegible]二〇八八
　花鳥風月の戯れ――の樣々に　生二七〇
詩歌管絃に至るまで　殺一六三九
詩歌管絃の御遊を催し　調一一四五
詩歌の舟を浮かめ　鸚一二一八
蹴鞠
　大宮人の御遊にも――の庭の面　遊三三〇三
祝言
　親と子の定めを祝ふ――　春榮一四一七
　時にとつての――なり　小鍛一一一九
祝言の謡ふ聲　小袖一一三八
祝言申しし烏帽子折　烏三四二一
秋猴が手を出だし斑狼が涙にても　富士太一七〇四
秋後に霜たうして落葉遅し　熊野三三四七
秋霜に枯るる蟲の音聞けば　松蟲二八六三

主從（シュジュウを見よ）
周室の光
　煬帝がけいの劍――を奪へり　小鍛一一一六
　舟子は解くこれ明朝の雨　白樂一四六五
舟車
　春を送るに――を動かす事を　藤三七三一
しう上の秋の山　半二五〇三
しうたんの泉の聲雨原憲が樞を　半二五〇三
愁歎の焔に焦がせども　東岸二一七二
祝着
　かかる――なる事こそ候はね　元一〇八三
　今宵のお宿何より以て――申し　大江五六〇
近頃――申して候　歌三五九
周の穆王に仕へ奉る官人　西王二一五六八
周の穆王に召し使はれし　菊八〇九
周の代は八百年の昔　花三八一八
周の世を治めし國のためしには　弓三三二七
秋風
　屍を失ふくはくは――に嘯く　生三六八
秋風恨みあり　玉三六〇七
秋風樂
　秋來る客の舞には――を舞ふ　代一四八九
秋風樂たれや松の聲　[illegible]一四五
秋風樂はいかにや　[illegible]三九
秋風樂を舞はうよ　放生二四六七
臭穢は滿ちて膨脹し　雪[illegible]一一七

紫雲
今日も又――の立つて 實一三四七
天子の御座所にこそ――は立つ 國八九五
紫雲たなびき異香薫じ 九世九二八
紫雲たなびき音樂聞え 水無瀬三九三四
紫雲たなびき四種の花降り 現一〇二一
紫雲たなびき光さし 身二九五五
紫雲たなびく夕日影 譬一五六二
紫雲に乘り 雲一八四九
紫雲のたなびいたる 國八九五

枝葉
あら――や 熊坂九四四

紫煙
日香爐を照らして――をなす 三笑一三八五

鹿(カセキをも見よ)
落ちくる――の聲すなり 紅三〇八二
濡れてや――のひとり鳴く 紅三〇八二
山田の――の如くなる臥所荒れ 竹雪一八八〇

〔志賀〕 一三九一

志賀(滋賀)
三吉野の――の山櫻 求三〇六五

四海安全に國治まり 大社五八五
此界一人念佛名 遊上歌三三〇一
四海波靜かなり 朱四〇九
四海波靜かにて國も治まる時つ風 高砂上歌一八六四
四海の安危は掌の中に照らし 羅三三四七
自害の手本よ 伽七三〇
四海の波も穩かなり 伎生三四六一
四海の波も靜かにて 内三七五
四海の波も治まりて 代一四八二
四海八洲の外までも 志一三九八
四海治まりて人家戸ざしを忘れ 小鍛一一一八
四海を澄ます勸賞 正一一五八
自害をせんと罷り立つ 草子一一九六
四海を掌にし萬民を憐愍せしむ 木賊八三一
志賀辛崎の一つ松 伽七三一・源氏一〇三九
志賀辛崎の一つ松つれなき人の 白一三四〇
志賀辛崎の一つ松は身の類ひ 鸚一八
志賀辛崎の松風までも 志一三〇三
鹿垣の道のさかしきに 紅三〇八三

〔志賀黒主〕 志黒稱一三九一

しかと歸るまじきか 夜三三六五
しかと見知り申されて候か 烏三四二四
志賀の浦のほとりに 白鬚一四六九
志賀の浦舟こがれ行く 山三一六七
鹿の起臥堪へかねて 花筐二五八七
志賀の神の白木綿かけまくも 志一三〇三

志賀の里(滋賀)
山越近き―― 竹生三〇三三

鹿の苑
春日野に起き臥すは―― 春日[illegible]
麑の胎内に宿り出生せし [illegible]
麑の音聲の音もかれがれの契り [illegible]

志賀の浦(滋賀)
ささ波や――の名をとめて [illegible]
志賀の都花園昔ながらの山櫻 竹生[illegible]
志賀の宮路に歸り [illegible]

志賀山(滋賀) [illegible]

志賀の山越(滋賀)
名に負ふ――や [illegible]
花園の――うち過ぎて 日吉一四六四
花の吹雪と詠じけん―― 三井[illegible]
花の吹雪の―― [illegible]
志賀の山櫻今を盛りなる山 [illegible]

飾間(兵庫)
旅を――の徒歩跣足 烏[illegible]四二六
麑までも皆悉く出で向ひ 春日六七三
飾磨の徒歩路 熊野三三四八
飾磨の徒路行く船も [illegible]

志賀明神 志シテ一三九一
しかもとの水にはあらず [illegible]

信樂笠
近江なる――を木曾の里に [illegible]八八

しがらみ(柵)
高瀬漕ぐ袖の――ひぢまさり [illegible]三一八九

谷川に風のかけたる――は　紅三〇八一
叱りてもよしぞなき　箙二五二四
然りとはいへども輪廻の道を　善界クセ一六〇一
然るに皇大神　御クセ二九六六
然るに葛城や高間の山　代クセ一四八三
然るに教主釋尊も　木賊クセ三三一四
然るに勾踐は二度世を取り　船辨クセ二七七七
然るにこの石橋と申すは　石クセ一三七八
然るに仙人のその數　東方クセ三一八二
然るにその昔神功皇后の　鵜祭クセ四一七
然るに長能が言葉にも　高砂クセ一八六六
然るに佛法東漸とて　舎クセ一三九〇
然るに平家の榮華を極めし　生クセ二七〇
然るに平家世を取つて　敦クセ一三五
然るに義經弓馬の家に生まれ　安宅クセ九八
然るに世の中は　綾クセ一九三
しかれ〳〵　船辨△三七八二
然れども時至り　和クセ三〇三
然れども世の中の一度は榮え　杜クセ六二六
鹿を逐ふ獵師は山を見ず　善知クセ三九一
仕儀
兼平が最期の――　兼七三〇
この――なれば身を恥ぢ　景六三九
その時の――によつて　白一三三九
食
饑ゑたる者の――を求め　身二九五一
色界
欲界――無色界　舎一三九五・春一七四〇
敷皮
座敷を定め――敷かせ　鷹三一〇三
敷皮の上に直らせ　檀二〇一五
〔式三番〕　翁巽稽二
敷島の陰に寄つし事　忠度一九一六
敷島の陰による　高砂一八六六
敷島の道
今――かけて言の葉草の　呉九七九
わが君――に御心をかけられ　鵜一五
敷島の道ある御代の翫び　志一二九八
敷島の道までもげに　老五二五
敷島の大和島根まで動かぬ國ぞ　大社五七八
敷島は人敬つて神力ます　三輪二九八五
色性
佛體――の卒都婆　卒一七三三
色即是空
邪正一如と見る時は――　山三一八一
敷妙の袖枕　菊八一一
敷妙の枕上に　梅枝四四五
敷妙の枕づく妻屋の内に　関寺一六一九
敷波も立ち添ひ　同三五
四季ならば春秋月雪の眺め　烏三四二一
しきねんの春の頃　白楽一四七七
四季の節會の事始め　鸚二〇九七
四季の和歌を上げ　放生二四六六
樒
後の山に上り――を摘み　大原五三九
思ひ――を折り添へて　須一四九四
樒閼伽の水を汲みて　玉鬘二九七七
樒が原（京都）
愛宕山――に雪積り　車九六九
愛宕山――をよそに見て　春日六六九
詩狂と答ふ　三井二九九九
頻りの年よりこの方　木賊八二一
四季折々の御遊　芦一二一七
四季折々の花盛り　胡一一五一
四季折々は目の前にて　一七八七
じきんのみぎんなれば　通盛一八〇三
慈救の偈　通盛一八〇三
死苦の身
天仙尙し――たり　歌六五
四句の文
三熊野の御夢想に――あり　籠一五五五
時雨せぬ夜も時雨する　西一二四
時雨時を知るといふ心　定二二〇六
時雨の亭　定二二〇五
時雨降りおく天が下に　大佛一七五三

時雨降りおく奈良坂や　千一七一〇
時雨を急ぐ紅葉狩　紅葉狩三〇八〇
時雨をとどむる宿の歌　定二〇六
時雨を晴らさばや　宣二〇四
始皇　咸シテ七九一
始皇
　秦の――の御狩の時　老五二八
始皇の御狩にあづかる程の木なり　高砂一八六六
止觀
　麓に――の海を堪へ　[illegible]七二〇
重章
　木村の源五――が鞭を上げて　通盛二九〇九
四教とはこれ藏通別圓　大會一七八〇
重忠
　秩父の莊司――　[illegible]二一一三
二月（ニグヮツを見よ）　[illegible]二三八五
重籐の弓に取り添へ　[illegible]二五二四
寺家の覺え　千異稱一六九九
〔重衡〕　千ツレ一六九九
重衡
重衡
　相國の御子――の卿　千一七〇一
重衡燒き拂ひたるを　大佛△一七五〇
重房
　川越の――が手に渡り　千一七一〇

示現
　安樂世界より今この娑婆に――　田一九九一
　慈眼視衆生現れて娑婆――觀世音　[illegible]一五六三
慈眼視衆生現れて娑婆示現觀世音　[illegible]一五六三
慈眼視衆生慈く　高野上人六〇三
示現大菩薩八幡の神託　弓三三三四
伺候
時刻移りて叶ふまじ　正一三五九・俊成一四三九
時刻の到來運視弓の　仲三三一四
錏　巴二三八四
　後より兜の――を摑んで　羅三三五四
　兜の――を摑んで　八島三二五二
　兜の――を取り外し　景六四五
尻籠を見奉れば短冊の　俊成一四三九
子細あらじ　海一七九
自在不滅
　意生化身――の緣に引かれ　藤二七二〇
〔獅子〕　石異稱一三七三
獅子　石ツテ一三七三
獅子（舞）　内三七八・石一三八〇・望三〇五五
四洲
　須彌の――の樣々に　楊三一二三
　日月は――を照らすと雖も　御二九六五
四洲常樂の波に浮かみ　歎三五八
獅子頭

　たいきんりきんの――　石一三八〇
獅子頭を戴きて　[illegible]
ししや結び　殺△九五一
四七品
　歸命妙法蓮華經一部八卷――　身二九五四
しゝつうわうの古より利生更に　竹生二〇三八
死しての悅び
　生きての恨み――　[illegible]
死しては生じ
　生じては死し――　春榮一四一三
死して悅ぶ
　生きて恨み――　[illegible]二四五
獅子團亂旋に村上の天皇も　[illegible]
獅子團亂旋の舞樂のみぎん　石一三八〇
獅子團亂旋は時を知る　[illegible]二〇五四
獅子には文殊や召さるらん　[illegible]一〇五八
慈氏の下生を待ち　高野六二一
獅子の子を生みて三日を經る時は　[illegible]二九一五
獅子の座
　釋迦如來――に現れ　大會一七八五
獅子の座にこそ直りけれ　石一三八〇
獅子の齒がみ（翻法）　[illegible]二四七
獅子の舞　内三七八
獅子の渡り（京都）　九世九二四
獅子は小蟲を食はんとても　石一三七六

獅子奮迅虎亂入　熊坂九四三
獅子舞
　某は――をまなび　望三〇四八
獅子丸
　紘上青山――　紘一〇五七
四生
　六趣――を出でやらず　葵一五九
師匠
　秦のかくいは――をうつ　春榮一四〇八
時正
　二月――の日　弱三三一九
自性淸淨天然動きなきこれを不動と　[illegible]一六〇五
至誠心深心廻向發願の　誓一五五六
自性眞如の月讀の神とも示現し　御[illegible]九六七
師匠にや叱られ申さん　鞍九六〇
師匠の御計らひ　元一〇八三
師匠の勸當蒙りたれば　烏三四一六
自性の月の光を添へ　[illegible]二一九
自性の月漸く雲收まれり　卷二八〇九
時正の時節なり　當一八四八
師匠や坊主と御賞翫　鞍九六一
自性を變化して　山三一八一
四者轉輪聖王　梅枝四四四
侍從　雲雀シテ二六三七
侍從と申す乳母　雲雀二六三九

四種の花降り下り　大會一七八五
四種の花降り虛空に音樂聞えきて　現一〇二一
紫笋猶動き誇り　[illegible]二三
しようなき手柄　熊坂クセ九三六
紙燭
　惟光に――召して　班二六一〇
四所明神の寶前　[illegible]三九八
獅子王
　げにも上なき――の勢ひ　石一三八〇
獅子王といふ御劍を賴政に下され　鵺二三九一
自身自佛はさていかに　放下二四四七
紫宸殿
　僧正は――に坐し　雷三三四〇
四睡の一つにもあらはれ　龍虎三三六七
二星（ニセイを見よ）
紫雪紅雪
　仙家には――とて藥の雪あり　氷二六五六
時節到來なり　朝二二七〇
時節を待ちて又取るべし　羅三三五六
時節を待つべし　鐵七一四
思禪師
　太子御生前震旦國の――にて　弱三三三三
自然の時節を御待ち候へ　横二〇一九
自然の時の爲　鉢二五五九
寺前の花
　玄宗華淸宮にも宮前の楊柳――　[illegible]二一〇三
自然又おこと世に出で給はん時の　鉢二五五六
自訴の事あるにより　砧八[illegible]七・烏[illegible]九四
慈尊三會の曉　高野六二一・松尾八四七
慈尊の出世遙かに　弱三三二二
自他
　親子皆以て誰か又――ならん　春榮一四一三
四臺
　漢宮――もこれにはいかで勝るべき　[illegible]八六五
次第
　この歌の――とやらんに　山三一七二
次第次第に富貴の身となり　[illegible]一一五〇
四大天王
　梵天帝釋――　江口四九五
四大天王閻魔法王五道の冥官　正一三六三
次第に變るそのかみ　[illegible]八〇九
四諦の曉の雲を引く　[illegible]一一九〇
四諦の御法を說き　春日六七四
下庵
　谷の――遙々と　龍虎三三六[illegible]
下草
　花園の胡蝶をさへや――に　胡一四八
私宅へ忍び入り　草子一一八三
下こがれ
　襲の衣の――　源氏一〇三五

親しきだにも疎くして　敦一三七
親しきだにも疎くなれば　[illegible]三六四〇
下簾
　網代の――　野宮二四一七
　心の――つれつれと　雪林四六八
下染も時過ぎて　[illegible]三六一七
したゝか斬られた　夜△三七三
したたかに鐘が煮えてある　道成△一七九七
下つ岩根に宮柱太敷き立てて　第一七七三
下躑躅
　岩手の森の――色に出でずは　[illegible]二六〇九
下手
　弱き馬なれば――に立て　頼三三一
信太の浮島(常陸)
　漂うたかす――　櫻一三三四
自他の本意を達し給へ　[illegible]界一五九九
下葉積らめもみぢ葉を　[illegible]三六一八
下樋の水音も君に聞えて　三輪二九七九
下紐
　井手の――末かけし　逍二二〇三
下枕
　寝られんものか――　泰一七三七
下紅葉夜の間の露や染めつらん　紅上歌三〇八一
下安からぬ思ひこそあれ　仲二三三
下安からぬ思ひの色　蔵二二四

下安からぬ思ひの数　鳥三九六
下安からぬ心かな　望二〇四一
しだり柳は風に揉まるる　放下二四五〇
紫檀の机に金泥の御經　仲三二〇九
榻
　暁毎に忍び車の――に行けば　通小七六九
　車の――に通はん　卒一七二八
　車の――に百夜通ひし所を　通小七六九
　花車の――立てて　右二四五
七箇日の御神拝
　四王寺の峯に於て――　弓三三九
〔七騎落〕　一三〇五
絲竹の調とりどりに　一角上歌六八二
絲竹呂律の色々に　[illegible]一六一二
絲竹呂律の聲々に　西王[illegible]一五七四・[illegible]二一四一
七賢
　晋の――が樂しみ　[illegible]三三一五
　竹林の――竹ゆゑ消ゆる絲子を　竹雪一八八八
七歳にて親の敵を討つ　[illegible]三〇三
七社の神々を勧請申され　道明一八二九
七社の神輿の御幸　簾七三一
七社の靈神を斎ひし　大江五六一
七星
　九曜――二十八宿　鐵七一〇
七星常住の仙郷　鵜祭四一七

七尺の屏風の上になほ餘りて　紅三〇九〇
七尺の屏風は躍らば越えつべし　[illegible]八〇三
七世の父母
　一子出家すれば――成佛す　[illegible]
七世の孫
　舊里に歸つて――に逢ふ　木賊三三三
　故郷に歸つて纔かに――に　烏三二〇四
　仙家に入りし身の――に逢ふ　仲二三三一
七世の孫に逢ふ事の[illegible]へ　七騎一三三一
七大寺(奈良)
　光ぞまさる――　春日六七五
七大八大
　三に倶利迦羅――金剛童子　[illegible]
七道
　月氏――の大山　富士山[illegible]六九〇
七堂
　南都――に参り　[illegible]
七多羅樹　鐘一四五四
七重寶樹となつて　大會一七八五
七重寶樹の梢に翔り　初二五七八
七徳五行
　弓矢は天地陰陽を象り――の姿たり　[illegible]四五一
七徳雙調七拍子　道明一八三七
楊の數々よみて見たれば九十九夜　通小七七一
楊のはしがき

曉の――百夜まで　卒一七二九
思ひきや――かきつめて　錦木二三五七
七百歳
その身も變らぬ――を保ちぬる　菊八一三
彭祖が――を經しも　俊寛一四二七
七百歳を經ることも藥の水　養三一三六
七福則生の願ひを滿てしめ　現一〇三三
七辨　禪△二三八八
七寶
さたから――をちりばめ　湯三一一八
七寶莊嚴の草木花のもとに行かん　源氏一〇三九
七寶莊嚴の瑠璃の座の上に　葛三三八四
七寶充滿の寶を降らし　羽二四九四
七寶の金銀の床　東方二一七九
七寶の露を拂ひ　葵一六五
四智圓明の明石の浦に澪標　源氏一〇三八
賤
路頭山林の――となつて　東一六八五
しづえ
森の――松垂れて　放三〇六七
下枝に交る汐薦の　善知三八九
靜
磯の禪師が女に――といへる　正一三六四
悉皆成佛
草木國土――　殺一六四三・鵜二三八九・佛二七九一

草木國土――の機を得　芭二二一五
草木國土――のこの妙文　六浦三〇一五
草木國土――道　半二四九九
草木國土有情非情も――　知三三四七
賤が家居の假なれど　小督一一〇三
漆膠の約
天長く地久し――と聞えしに　祇八六五
賤が績麻の夜までも　安宅一一一
靜御前　正子方一三五五・二人シテ二七一一
船辨シテ二七六七・吉野シテ三三七九
賤が爪木の斧の音　大原上歌五三八
賤が鳴子田引き連れて　鳥三二九四
靜かなる時は明月を見す　放下二四四五
靜に囃せや靜が舞に　吉靜三三八四
賤が軒端を葺きぞわづらふ　雨三三三
靜は御供と見え申し　船辨二七七二
靜は着背長參らする　正一三六七
靜は忠信がその契約を違へじと　吉靜三三八三
疾鬼（足疾鬼參照）　金一三九一
しづく石をも玉とぞわが見る　藤△二七二九
雫も芳しく滴りも匂ひ　菊八一一
日月（ニチグワツを見よ）
長生不老の――まで甍を竝へ　鶴七九三
日月上に明らかなれども雲霧光を　弱九一五
日月燈明佛　九世九二九

日月の影を踏み普天を渡る心地　雲七〇四
日月の算を經　淡一八五
日月の瀬にうつりて光陰を增す　淡一七八
日月の光を天子の叡慮にて　鶴二〇九七
日月は六合を照らせども　内クセ三七六
日月光りかかやきて山の端出づる　竹生二〇四〇
日月光り雲晴れて　鱗四五五・草薙八八五
日月二つの御影を隱し　繪三四五一
日月をここに表し　放下二四四五
しづ心なき戀　[illegible]一九〇
實相
嵐山の峯には――の櫻滿ちて　松尾二八四七
梢も草も吹く風は皆――の響　放生二四六三
萬法皆一如なる――の門　東北三一一五
唯有一――唯一金剛　卷二八〇九
日想觀の時節　弱三三〇四
實相の色を顯し　雲二一三九
實相の風荒く吹いて　鵜飼三〇九
實相の花盛り　[illegible]二〇七
實相の道廣き　雲二三八九
實相無漏の大海となつて　安宅三〇三四
實相無漏の大海に五塵六欲の　三井四八五
實信
最明寺　藤榮二一六一
執節の勅を受け　吉野一三八五

悉達太子は淨飯王の都を出て　大會五元
悉達太子は仙人に仕へ　東方三八一
悉達と生まれ給ひ　自然一四六八
失念
けつたと——してあるぞ　元一〇九〇
賤の目に見えぬ鬼とや　山三八二
賤の女の目に觸れたるる世の習ひ　小督一一〇一
賤の苧環
賤や賤——繰りかへし　二人二七三一・吉野三二八六
沈むは浮かむ緣ならめ　鶴三三八七
賤や賤賤の苧環繰りかへし　二人二七三一
　吉野ワカ三三八六
しづり
雪の——を掻き集め　氷二六五九
四手
色めく紙の——つけて　繪三四四八
師弟三世
志の深き事は——に若くはなし　雷三三三六
師弟の契約淺からす　元一〇八四
師弟の契約をたし　柏六五六・櫻一三三七・三井二九九三
師弟の契りの中なれば　谷一九四八
師弟の約
貴きは——　雷三三三六
四鳥
親と子の——の別れ　隅一五二三

四條五條の橋の上　熊野上歌三三四七
して據つはただ山姥が業　山三八二
四鳥の塒に親と子の　雲雀三六四九
四鳥の別れ親と子に二度逢ふ　歌三六二
四敵の寄せ來るとも　鳥四五六
四手の田長と見えつるが　御三九六七
四手の田長の亡き人の　[illegible]三八七
四手の田長の一聲も誰が冥路をか　鐘一四五三
四手の田長を朝な朝な呼ぶ　飛月七三
死出の山田のほととぎす　飛鳥七三
四天王寺と名づけ　弱三三三
鷙といふ鳥は小さけれども虎を害す　望三〇五一
　菊シテ八〇五・枕シテ二八一五
慈童
慈童
周の代に——といつし者　枕二八一八
慈童が七百歲をわが君に授け　菊八一三
慈童が枕は古の思ひ寢なれば　菊八〇八
紫藤の露のもとに殘る花の色　藤二七三一
志度寺の觀音薩埵　海一八〇
褥
古の錦の——なるべし　蟬一六八五
花の錦の——の起き臥し　關寺一六一九
志度浦(香川)　海所一六九
蔀遣戶
御誓言に——を立て添へられ　小袖一一三三

しどろ
神垣——に木綿四手の　[illegible]
行の次第も——にて　[illegible]
品變りたる畜生の　[illegible]
したじた言葉の花も咲き　[illegible]
品々の方便を語るも　[illegible]
品少なし
言葉をきものは——
信濃路遠き旅衣　[illegible]
信濃路や木曾の遠名にし負ふ　[illegible]
信濃路や木曾の御坂の春風に　[illegible]
信濃たる淺間の嶽に立つ煙　東六二六・鳥追行二五四八
信濃たる淺間の嶽も燃ゆるといへば　[illegible]
　富士太三六九九
死なば一所とこそ思ひしに　松蟲二六五八
死なば骸を一所とこそ思ひしに　[illegible]
死に苦しみを受け重ね業に悲しみ　[illegible]
死人を見る事はたけれども　[illegible]
〔自然居士〕　[illegible]
自然居士　[illegible]
自然居士
先師——の　東岸二一六八
士農工商の家にも生まれず　[illegible]
死の緣とて生所を去つて東の　隅一五二〇
死の緣の所も逢ひに靑墓の　[illegible]

師の御影をばいかで踏むべき　雷三三三六
鑓を倒つて戦ひけるに　錦戸二三七三
鑓を倒つて戦ひしが　鳥三四三七
鑓を倒り暫しが程は戦ひしが　夜三三七五
信太の森(大阪)
和泉なる――をうち過ぎ　鵆二三七九
しのに物思ひ立ち舞ふ袖　芭二五四二
東雲
わがまだ知らぬ――の道　楊三一一五
別れの鳥の聲鐘も聞うる――に　唐三一〇三
東雲の客もほのほのと明け行けば　隅一五三四
東雲の客も名殘の都路を　蟬上歌一六七四
東雲の道の迷ひの言の葉も　夕三三一五
〔篠原〕　實異稿一三四三
篠原(石川)　實所一三四三
篠原(石川)
蘆の――波寄せて　安宅八三
篠原(滋賀)
野路――に夜をこめて　熊坂九三三
野路――の草枕　繪三四四三
篠原黨の殿原達の不覺にて　實八五一五
篠原の池のあだ波よるとなく　實一三五一
篠原の池のほとりの法の水　實行盛一三五四
篠原の合戦　實一三四九
篠原の草葉の霜の翁さび　實上歌一三五一

〔篠原實盛〕　實異稿一三四三
忍び車
曉毎に――の榻に行けば　通小七六九
忍び車のわが姿　葵一五九
忍び車を引く汐の　松風二八二七
忍びし夫を松浦潟　唐一八〇八
忍び妻阿漕阿漕といひけん　阿三四
忍び音の月には愛でじこれぞこの　鸚二四
忍ぶ(草)
軒の――にうつろひて　砧八三三
忘れ――の軒の草　三山二九一八
忘れは草の名に聞きて――や　大佛一七四五
忍ぶ草
同じ世をだに――　砧八二八
古を――　草薙八八二
古をも――を召されよや　雲雀二六四四
軒端の――忍ぶ方々多き宿　夕三三三
忍ぶ草も亂るる忘れ草も亂るる　草子二一九五
忍ぶ今宵のあらはれて　繪二四四八
信夫摺
思ひ亂れし――誰ゆゑぞ　賀茂物七五四
信夫摺木賊色の狩衣　鸚三
忍ぶ便りもあるべし　円三三八六
しのぶに傳ふ軒の玉水　羅三四八
信夫の草衣　野宮二四〇九

忍ぶの摺衣　花筐二五八七・女三四九二
しのぶの亂れ限り知らずも　小鹽三四六七
忍ぶは人の面影　龍三三六
忍ぶもぢすり
陸奥の――誰も皆　采四〇八
陸奥の――誰ゆゑに　錦木二三四五
忍ぶもぢずり誰そとも　紅二〇八五
忍ぶもぢすり誰やらん　竹一五四六
忍ぶもぢすり誰ゆゑぞ亂れ心には　花筐二五九〇
信夫山忍びて通ふ道芝の　杜六三五・定三一〇九
信夫山忍ぶかひなき世の人の　藤戸一七四二
信夫山その通ひ路を尋ねん　錦木二三四二
忍ぶる事の弱るなる　定三一〇九
四の宮河原(京都)
誰をか松坂や――四つの辻　蟬一六・蟬三〇九七
四の宮河原逢坂の　鳥三四一七
四の宮や河原の宮居末早き　竹生島行二〇三三
柴
後夜の爐には南嶺の――を焚く　檜六三三
擔頭の――には不香の花を手折り　葛六九三
わびしき業を――取りて　[illegible]
四方に本尊を懸け奉り　小鍛一一二三
四方を拂ふ八方拂ひ　円三三八六
柴垣の戸を開き　西行一一七三
柴垣の隙より見れば　鵜一一四三

柴垣のもとに露にしをれて　小督一一〇五
しばさせ給へ　山三一七四
暫しとてこそ立ちとまり　[illegible]二一九七
柴積み舟の寄る波も　[illegible]一三一六
柴といふものの候へば　忠度上歌一九〇九
柴といふものまで名をとり　[illegible]一四九六
柴といふものの折り敷き　[illegible]一三六
しば鳴く千鳥音ぞ淋き　忠度一九〇七
柴の戸の暫しが程の　田八九六
柴の樞のしばしが程も　大[illegible]五四六
柴の樞都の音づれは　大原五三八
柴の樞を推し開き　角上歌三八〇
柴の戸を敲く　雷三三四
【柴舟】　[illegible]異称七一五
柴舟
憂きを身に積む——や　[illegible]七一七
しばふる人と見ゆるにも　小[illegible]三四六二
柴屋
高間の山の——の夕煙　葛六九五
柴山の雲となつて　富士山二六九三
暫くも保つものは我則歡喜して　身二九五四
慈悲
内には——の心中をなし　元一〇八四
心はもとより——の行　大江五六二
内心——の御惠み　善界一六〇一

無漏の——を垂れ　[illegible]三一〇〇
慈悲加護　[illegible]一八五[illegible]
自筆の状安堵に取り添へ　[illegible]二五六九
慈悲に漏れたる人々かな　[illegible]九五三
慈悲の心を先として　鵜飼三一一
慈悲の渡四海に普く　[illegible]
慈悲の涙に潤せとも　東[illegible]二一七[illegible]
慈悲の母　小袖一一三五
慈悲は上より下り　藤栄三一六三
慈悲萬行
秋は立田姫冬は——　佐一二一五
慈悲萬行の神徳の弘き誓ひの　佐一三七三
慈悲萬行の神徳の迷ひを照らす　春日六〇四
慈悲萬行の大菩薩春日の明神の御作　[illegible]一五六三
慈悲萬行の春の色三笠の山に　野守二四二四
慈悲萬行の日の影　[illegible]四〇〇
四病八病　草子一一九〇
泗濱石　海一七六
詩賦
唐土の——を以てわが朝の歌と　白楽二四七五
天竺の靈文を唐土の——とし　白楽二四七五
十惡といふとも引攝す　千一七〇八
十惡の里
大慈大悲の春の花——にかうばしく　花一〇〇五
田一九八八

十惡八邪の迷ひの雲も空晴れ　[illegible]一五四
十惡を導き五逆を憐む　[illegible]八二一
十界依正一遍體　[illegible]一五五五
十界差別まちまちなり　田一〇二六
十五童子　[illegible]一五三
十日の雨
五日の風や——　[illegible]三一八三
十乘の床　[illegible]一四
執心
古を語るは猶も——ぞ　[illegible]四四七
疾鬼亦——　[illegible]一九一
婆娑の——　[illegible]四〇
定家の——葛となつて　[illegible]三〇八
拂へども——のながき闇路や　[illegible]一九六七
又立ち歸る——　[illegible]四四一
執心如來の修羅の妄執　[illegible]五六
執心の網　[illegible]八
執心の浦波　阿[illegible]四
執心の恨み　[illegible]一九七
執心の閻浮の涙　松風二八三
執心の閻浮の世に　[illegible]一五一
執心の鬼となつて　船[illegible]二七六六
執心の鬼となる　[illegible]七三
執心の修羅の道　[illegible]一二六一
執心の罪にも沈み　松風二一三六

執心の水を汲み　檜二六三一
執心はよも盡きじ　錦木二三五六
執心を殘し來て　殺一六三八
執心を晴らしつつ　梅枝四四五
執心を纏し　鐵一四五二
執着の妄念より起れり　土車二〇七八
十二因緣の變をする　安宅九一
十二因緣の流轉は車の庭に廻る　江口四八三
十二因緣は心のうちに際もなし　三笑一二八四
十二因緣は心の裏に空し　鷺一三一八
十二因緣より二十五有の沈淪　春榮一四一三
十二月往來　翁異式一一
十二天
　伐折羅制多迦──　善界一六〇六
十二天のその內に火天　輪三三七八
十念
　巖にあがりて──し　唐一八一九
　最期の──亂れぬ　清八五四
　西方にて御──も終らぬに　賴三六〇
　御──と勸めけり　柳二〇一六
十念授けおはしませ　敦一二一九
十念の柴の樞には聖衆の來迎を　大原五四五
十念を授け給へ　三山二九一九
十念を賜はり　遊三一九七
十方斬

さそくをつかつて──　烏三四三七
十方恒沙の諸神　小鍛一一三一
十方三寶影現中　葵二四四
十方世界
　光明遍照──に洞る方なき　誓一五五五
　光明遍照　念佛衆生攝取不捨　隅田一九一八
　東西南北──の虛空に飛行し　國九〇六
二神出世の古──を定めしに　羽三四九三
若我成佛──　敦一二三〇・三山二九二〇
十方の薩埵
　三世の諸佛──　自一三三八
十方の世界
　若我成佛──　柏六六三
十八公の粧ひ千秋の緣をなし　高砂一八六六
十八の賢
　白蓮社を結び──あり　三笑一二八三
十萬億土
　西方の淨土は──　山三一六九
　西方は──　當一二四六
十萬普賢滿山護法　卷二八一一
十文字
　蜘蛛手──に擊ち破り　兼七三〇
　蜘蛛手かくたは──　實五一九
十郎
　曾我の──祐成　元一〇七七・小袖一一三八・夜三三五九

十郎權の頭重衡は判官殿の　千一七一七
十羅刹女と現じ　江口四八〇
十羅刹女の化現　大社五八三
十力の數珠を手に纏ひ　咸下一四四四
十六萬由旬の勢ひ　歌三五八
十六羅漢
　大唐より渡されたる──　舍一三八五
十王
　梵釋──閻魔宮　[illegible]一七四一
四壁の內に人の泣く聲の　竹生一八八六
死別ならばかほどの歎きよもあらじ　谷一九四八
志保（石川）
　礪波山や俱利伽羅──の合戰　巴一二八四
汐蘆
　下枝に交る──の　善知三八九
潮風も吹くや岸野の秋の草　松蟲上歌二八五四
〔鹽竈〕　融異稱三三一九
鹽竈（宮城）
　君まさで煙絕えにし──の　融三三二六
　陸奧はいづれはあれど──の　融三三二三
鹽竈の浦（宮城）
　河原の院こそ──候よ　融三三二三
鹽竈の名の近々と寄りゐつつ　融三三五一
鹽木
　こり果てぬ──かな　須一四九四

賤が——を運びしは阿漕が浦に　松風二八六八
汐汲　融二三三三
汐汲車わづかなる浮世に廻る　松風一發二八二五
汐籠りにかき紛れ　融二三三〇
鹽煙
燒く——心せよ　松風二八二八
汐越(福井)
稍波立つ——の　山三一六七
汐衣
東からげの——　融二三三〇
汀に滿干の——　松風二八二七
鹽崎の浦(和歌山)　安達一〇八
四菩薩
三如來——も　舍一三九〇
汐じまぬ旅衣　紘一〇五二
汐じみてこりすまの恨めし　松風二八三三
しほたるるわが身の方はつれなくて　盧上歌四九
鹽土男の翁の教へに從ひ　玉井一九七三
汐馴衣袖寒き　融二三二三
潮引島も見え渡る　和三〇三三
潮干の石
朝熊や——とあらはれしも　御二九七一
潮涸
潮滿——の二つの瓊を鐔に奉り　玉井一九七九
汐見坂(静岡)　盛三〇九七

潮滿潮涸の二つの瓊を鐔に奉り　玉井一九七九
潮滿瓊
光散る——のおのづから　玉井一九八二
涸める花の色なうて匂ひ　井三四一三
鹽屋
海士の——に立ち寄り　松風二八二五
これなる——に立ち寄り　八島三一四六
鹽燒き衣色かへて縑の衣の客燒　松風二八二四
鹽屋の主の歸りて　紘一〇四九
死魔
煩惱の惡魔陰魔——天子業魔　第一七七四
島隠れ行く舟をしぞ思ふ　草子一八七
島隠れ行く船を惜しとぞ思ふ　知二三四八
島つ巣おろし荒鵜ども　鵜飼三〇六
島つ鳥浮海松涼し波の上　江島一發四九二
島つ鳥浮世なれども　楊三一二五
紫磨忍辱の藤袴　源氏一〇三九
四魔の軍を破り給ふ　放下二四四五
島小舟
雪さし下す——　賴三三〇二
淸水流るる柳蔭　遊三一九七
注連
不淨を隔つる七重の——　小鍛一一一二
四明の洞
天台山と號するは震旦の——を　錦七二〇

四明の洞和朝にてはわが立つ杣　[illegible]
しめぢが原(栃木)
唯頼め——立ちや　[illegible]一一六〇
ただ頼め——のさしも草　盛二四四・田一九九三
[illegible]三七七八
注連縄
いふや——の長きよを　井三四〇八
標野
紫野行き——行き野守は見ずや　右三四六
しめの内野も程近く　胡一一五一
灑る松明ふり立てて　[illegible]
四面に楚歌の聲のうち　千一七一〇
四面に関の聲を上ぐれば　項五九三
霜
瑤臺——滿てり　[illegible]二〇四九
月落ち烏啼いて——天に滿ち　三井三〇〇二
月平沙を照らせば夏の夜の——　[illegible]
經二〇八六
橋に置く——の白きを見れば　張二〇四九
身は板橋の——に漂ひ　養三一三一
夢より——や結ぶらん　鉢二五五四
山河邐迤として——使せる紅樹　枕二八一七
下おのづから市をなし
桃李もの言はず——　西王二五七〇
下河原(京都)

上なる黒谷―― 西行一一七八
花やあらぬ初櫻祇園林―― 熊野三三五一
下京邊に住居する者 水無月二九三八・小塩三四五七
下京邊に住居仕る者 西行一一六九
下京邊に住むもの 鐵七〇八
霜曇り
翁草の――して 道明一八三三
霜月初午の御祭禮の儀式 鵜祭四一二
笞
熱鐵の――を振り上げて 松山鏡二八八〇
下として上を計るに似たるべし 富士太二七〇四
笞の數の隙もなく 砧八三七
しもとゆふ葛城も同じ神山の 代一四八四
標結ふ葛城山に降る雪は 葛上歌六九五・代一四八八
標木綿花の白和幣 葛七〇一
標を解き亂し火に焚きて 葛六九四
標を振り上げ追つ立つれば 求三〇七四
笞を振り上げ車を打つ 車九七〇
笞を振り上げ責め奉れば 綾一九八
霜に朽ちにし名ばかりは 定二一一〇
霜の翁の年々に 氷二六五五
下の句
面白や即ち歌の――なり 雨三三二
下の句をば續くべし 卷二八〇七
霜の經露の緯こそ弱からし 芭ワカ二五四二

霜の袴
氷の衣―― 芭二五四二
霜雪
月落ち鳥鳴いて――天に滿汐 草紙一七九五
霜雪に冬の氣色の知らるらん 藤二七三三
霜より霜に朽ち果てて 定二一〇九
霜を帶びたる白菊の 胡一一五二
しもんにうつる月影まで 融三三三四
邪婬
一念瞋恚の――の恨み 綾一九七
飲酒を破りなば、妄語も諸共に 紅三〇八七
殺生偸盗――は身に於て作る罪 東岸二一七二
邪婬の惡鬼となつて 船橋二七六六
邪婬の惡鬼は身を責めて 女三五〇一
邪婬の思ひにこがれ行く 船橋二七六〇
邪婬の業深き 砧八三七・船橋二七六四
邪婬の妄執 定二一〇九
笙
篳篥――の笛和琴 土車二〇七六
琵琶琴和琴――篳篥 吉天三三九五
生ある直道の弔ひ 円三三八三
正一位勳一等氣多不思議智滿大菩薩 鵜祭四一七
淨衣
白張――に立烏帽子 大佛一七五三
淨衣の袴かいとつて 卒一七二九

生涯限りありつる處に 安宅九七
淨海掌に天下を治め給ひ 祇八五九
上界の諸仙
われもそのかみは――たるが [illegible]二二四
上界の天人下界の龍神 [illegible]九五
上界の嬋妾
李夫人は本はこれ―― 花筐二五九二
正覺
成等―― （その項を見よ）
悲願を起して――年久し 竹生二〇三八
正覺ならせ給へ 水無瀬二九三三
正覺の跡を追ひ 身二九五二
正月七日は菜摘川より若菜を 二人三七二三
笙歌の花降りて 石一三七九
上行菩薩の御再誕
上人のこの所に到り給ふは―― 身二九五三
上宮太子國家を改め萬民を敎へ [illegible]
上求菩提
法性峯聳えては――を現し 山三一八一
上求菩提の機をすすめ
春の花の樹頭に上るは―― 敦一二四
山は上りて―― [illegible]二〇二四
上求菩提の機を見せ [illegible]〇〇
上求菩提の相を表す 箙一七七〇
上求本來の梢にあらはれ 西行一一七〇

聖教
　經論——和漢の才　拾一六三九
　八萬諸——皆是阿彌陀　當一八四二
聖教の都名にて　鵜飼三一〇
上下のわづらひ　笛二五三三
上下は卽ち天地人の三才　雨三三六
淨眼
　淨藏——　鐘一四五四・蟬一六八四
鉦鼓
　琴瑟は玉殿に——は庭上　源太一〇七三
湘江の雨は屢々も楚畔の竹を染む　夕三二一
鉦鼓羯鼓や絲竹　吉天三三九五
相國（清盛）
　知章とは——の三男　知二三四一
　入道——に仕へ申す　祇八五九
　平——といふものあつて四海を　木曾八二一
　平——の御時　佛二七九三
相國に仕へ申す　俊寛一四二三
相國の御子重衡の卿　千一七〇一
相國の御息女　小督一〇九八
鉦鼓を鳴らし　隅一五三一
莊嚴巍々として　楊三一一七
常在靈山の秋の空　舍一三九〇
淨藏淨眼　鐘一四五四
淨藏淨眼早離速離　蟬一六八四

正像既に暮れ末法に生を受け　東岸二一七一
正像末
　滅後の弘經も——に次第して　現一〇一三
莊司
　山科の——　戀一一五五
生死
　出離——　（その項を見よ）
生死娑婆の妄執　船辨二七六六
生死長夜の月の影　隅一五三一
生死長夜の長き夢　安宅九三三
生じては死し死しては生じ　春榮一四一三
生死に住せば輪廻の苦　放下三四四七
生死に輪廻し　安達一一三
生死に流轉して人間界に生まる　春榮一四一三
生死涅槃に入り定まれる高野の　高野六一一
生死の海に沈淪せり　八島三一五七
生死の海にはとこしなへに　東岸二一七一
生死の海は離るまじや　砧八三八
生死の海深し　柏六六三
生死の海を渡りて願ひのままに　藤戸二七五一
生死の海を渡り山を越えて　天二一三八
生死の海を渡るべき船橋を　船辨二七五六
生死の掟をば遁れ給はず　熊野三三四四
生死の去來を見る　柏六六一
生死の境を尋ね申し　歌三三五八

生死の轉變をば夢とやいはん　東岸二一七一
生死の橋には宿らぬ住家もなし　東岸二一七二
生死の道様々にして　[illegible]六八
生死の道を神は受けずや思ふらん　野宮二四一九
生死の終りもなし　楊三一二三
生死無常の世の習ひ　土車二〇七三
〔猩々〕　一三四七
猩々　[illegible]一三四七。大瓶[illegible]一七五九・大瓶[illegible]一七九九
猩々
　海中に棲む——　望一三五三
　潯陽の江に年久しき——　大瓶一七六一
淸淨光明身
　我爾時爲現——の床の上　身三九五〇
淸淨心の頭を深く天照らす　内三七七
生々世々永き世までの勸當　俊三三六七
生々世々もいつまでの思ひの絆　天二三一八
淸淨土
　現受無比樂後生——　橋三三七七
生々の前を知らず　江口四八三
生々の親子皆以て誰か又自他ならん　春榮一四一三
生々の親を助けんこと　高野六〇五
淸淨の心を感じ來りたり　身世九一七
生々の契り
　一樹の蔭に宿ることもこれ——　九一〇七八
生々の父

一切の男子をば――と頼み　朝二三七一
生々の母
　萬の女人を――と思へ　朝二三七一
瀟湘の夜の雨頻りに降つて　蟻二一六
猩々舞を舞はうよ　猩一三五二
生者必滅の理に漏れん　楊三一二三
生者必滅の世の習ひ　熊野三三五一
聖衆
　三世十方の佛陀の――も　朝二三六四
　十念の柴の樞には――の來迎を　大原五四五
　天人――菩薩の舞も　江島五〇三
　菩薩――雲霞の如く　大會一七八五
　聖衆來迎す落日の前　實一三四七。誓一五六三
　聖衆來迎の雲の上には九品蓮臺の　柏六六一
生所
　死の緣とて――を去つて東の　隅一五三〇
生所もあらず出所もなく　寢三三九八
生所も知らず宿もたし　山三一八一
生死輪廻の根元を尋ぬるに　土車二〇七八
生死流浪の須磨の浦を出でて　源氏一〇三八
生死を離れば斷見の科　放下二四四七
生死を離れよ　熊坂九三五
生身の觀世音を拜まんと　田一九九〇
生身の彌陀如來　柏六五八
生身の彌陀來迎あつて　當一八四七
淨水
　吾今三點楊枝――唯願薩埵　朝二三六八
湘水
　曉――を汲んで楚竹を燒く　八島三一四七
上西門院の上童　通盛△二九〇三
〔正尊〕　一三五五
正尊　正シテ一三五五
正尊
　土佐――　正一三五九
昌泰三年　老△五三〇
成道
　一佛――觀見法界　鵜二三八九
　採果汲水年を經て終に――し　東方三一八二
　終に――なるとかや　大原五三九
　八相――の後遺敎流布の地　白髭一四六八
　八相――は利物のはてしなき　住一五四一
　摩耶の誕生伽耶の――　春日六七五
正直
　神は――の頭に宿り給ふ　吉備三三八五
　誠は――の頭を照らす　内三七六
正直捨方便の御惠み　賀茂物七五一
正直捨方便の象を現す　第一七七〇
正直捨方便の誓ひ　卷三八〇八
正直捨方便無上の道に到るべし　身三九五四
正直の頭に宿り給ふ　讃八五三・放生二四六一・御二九六五
正直をもつて本とす　御二九六五
正直を本として仰ぎて仕へ　内三七四
常住の思ひをなさん　歌三六三
常住の燈火をかかぐ　大原五四一
常住不滅の相を顯し　松尾二八四六
常住不滅の果をなし　百五〇八
常住不滅法界の妙體たれば　白髭一四六八
常住無有變易の波の聲　白髭一四六八
笙笛琴箜篌孤雲の聲　鐘一五〇三
簫笛琴箜篌孤雲の外に　打二四九三
簫笛琴箜篌孤雲の御聲　富士山二六九四
笙笛琴箜篌夕日の雲に聞え　石一三七九
淨土
　西方の――は十萬億土　山三一六九
　一つ――の緣となし　柏六六三
　眞の――はいづくぞ　春日六七三
　唯心の――　柏六五八・春榮一四一四
成等正覺
　一門の人々――　大會五四四
　和泉式部は――を得る　東北三一九九
　平の經政――と　經二〇八五
　南無幽靈――　水無瀨二九二三
　南無幽靈――出離生死頓證菩提　通小七六六
　光源氏の幽靈――　源氏一〇三八
　物故平の知章――　知三三四三
上東門院に仕へ申す官女　源氏△一〇三三

上東門院の御時　東七三一九三
淨土經
　唯心の——　當一八五三
聖德太子は救世の觀[illegible]　笠子二一八二
淨土に迎へ給へ　鶴[illegible]三七三
上人　三山二九二二
上人に結緣をなす　現一〇一五
上人の御手跡にて六字の名號に　葬一五五八
上人のこの所に到り給ふは　身二九五二
上人も丞相も心解けて物語　雪三三五
上人をば太郎と名づけ　春日六七二
性根がない　道成△一七九六
生年二八の春たれば　知三三五一
笙の岩屋の松風は　嵐上歌二〇七
城の内にさも面白き笛の音の　歌一三六
淨玻璃
　罪をあらはす——　昭一五九二
淨玻璃の鏡
　地獄の有樣を現す一面八丈の——　野守二四三四
成佛
　草木國土有情非情も悉皆——　知三三四七
　草木國土悉皆——（その項を見よ）
　おし照る海山も皆——の姿なり　弱三三三
　この身をこのまま——の法　身二九五一
　若有聞法者無一不——　現一〇一五

成佛得脱の身　東一六七・鶴[illegible]二七五一・通[illegible]二九〇九
上北面下北面　[illegible]六〇
湘浦の浦かとこまたらに見ゆる　常[illegible]二八八五
湘浦の浦や娥皇女英　能三三九五
上品上生に到らん事　[illegible]三三〇二
上品蓮臺に心をかけ　源氏一〇三九
淨飯王
　悉達太子は——の都を出て　大[illegible]五[illegible]九
聖武皇帝　[illegible]宅九二
聖武皇帝の后光明皇后なくたらせ　松山[illegible]二八七四
聖武皇帝の御建立　大傳一七五一
淨妙
　筒井の——　部[illegible]一〇
生滅滅已
　晨朝の響は——　三井[illegible]〇〇〇
情欲（セイヨクを見よ）
生老病死苦以漸悉令滅　求三〇七[illegible]・[illegible]三〇一
生老病死の次第をとれば　歌三五八
常樂
　四洲——の波に浮かみ　歌三五八
　谷嶺の風——の夢さめ　高野六一三
　鳥三寶を念じて風——と音づる　大會一七八〇
　嶺松巍々として風——の夢を破る　山三一八〇
常樂我淨の結緣を示す　松尾二六四七
常樂の緣をなす　東北二三〇〇

上﨟
　[illegible]とも見えぬ——の[illegible]れ車に　葵一六〇
　やごとなき——の　紅三〇八四
上﨟[illegible]　[illegible]一九八一
上﨟たち　志三九六
上﨟達を集め　初二五七六
上﨟の御身にて　鳥[illegible]
青[illegible]
　[illegible]東方——[illegible]　[illegible]
淨瑠璃淨土
　新宮藥師如來——は東にて　[illegible]三[illegible]六
淨瑠璃世界の主藥師忽然と出て　白[illegible]二四九
青蓮のまなじり
　[illegible]魔降伏の——　嵐二一一
　降三世明王は——に惡魔を降伏し　[illegible]二[illegible]九
淨識不二の[illegible]法を表す　放下二四四五
上苑
　花——に明らかにして　右三四九
生を受くるに任せて　東岸クセ二一七一
生をこそ隔つれども　[illegible]二〇八七
生をもかへぬこの世より　弱三三一八
釋迦
　玉中に——の像まします　海一七六
　靈山の——の御許に契りて　[illegible]八〇九
釋迦一代の藏經を大唐よりも渡し　高[illegible]七六
釋迦が嶽（不良）　花一〇〇九

釋迦既に滅し彌勒未だ生ぜず　遊三三〇三
釋迦大士の慇懃の教を忘れ　歌三六四
しやが父に似てしやが父に似ず　歌三五九
釋迦如來
　一心頂禮萬德圓滿――　舍一三八七
　歸命頂禮大恩教主――　大會一七八六
　大聖――わが子に逢はせ　百二六七四
　釋迦如來獅子の座に現れ　大會一七八五
　釋迦は遣り彌陀は導く一筋に　柏六五九・當一八四三
釋迦牟尼
　一代教主――寶號　白一三二七・水無瀨二九三三
釋迦牟尼佛
　われを知れ――世に出でて　春日六七四
娑竭羅龍王
　嚴島の明神は――の第三の姫宮　白樂三四八一
娑伽羅龍王　春日六七七
斜脚の曉風に開け　鐵七一一
爵
　御感のあまり――を賜ひ　鶯一二三一
寂光土に歸らんとし給へば　白鬚一四六九
寂光の都
　本地――を出でて　杜六二四
　本地覺王如來――を出で　氣二四四
寂光の常寂見城の樂しみ　巴七八二
寂光院（京都）
　大原の――に浮世を厭ひ　大原五三七
　寂光院の有樣を見渡せば　大原五四〇
〔石橋〕　一三七三
石橋（支那）
　これに見えたるが――にて　石一三七五
　廬山のさかしき――を　三笑一三八四
釋教の道の數々は蓮の緣ぞ觀る　草子一一九五
昔在靈山の御名は法華一佛　誓一五六三・佛上歌三一〇一
昔在靈山名法華　高野六〇三・道明一八三〇・朝三三六八
寂照法師　石げき一三七三
寂照法師
　大江の定基といはれし――　石一三七四
赤栴檀の香木にて　朝三三三三
釋尊
　教主――も羅睺は長子と說き　木賊三三二四
　大聖――その授記を得て　白鬚一四六八
　大聖――も羅睺爲長子と說き　竹生一八八三
　龍女は如意の寶珠を――に捧げ　合六八七
釋尊久遠劫のその昔　現一〇一六
釋尊靈鷲山にて御說法の有樣　大會一七八一
寂然閑靜の床の上には眠り遙かに　卷二八〇九
尺八おそ　夜△三三七一
笏拍子打つ音は窓の雨の　草三六七
笏拍子をうち座敷を靜め　草子一一九七
寂寞とある柴の戸に　草二五二一
寂寞無人聲　海一八五・身二九九
寂寞無人の樞の內　現一〇一三
寂滅爲樂
　入相は――と響き　三井三〇〇〇
釋門の習ひ　安宅一〇七
社官
　宮崎の――藤原の興範　須一四九二
舍兄
　御――に增尾の太郎種直　春榮一四〇四
社家の人その外の人々にも　二人三七一四
邪見の劔身を碎く心をなし　谷一九四九
邪見の眼の光　清八五四
砂礫の行術馬術の稽　鶴二〇九八
社參申さばや　榮三九七
邪正一如と見る時は色即是空　山三一八一
蛇身
　年經たる――　現一〇一八
捨身抖擻の行體　安宅一〇七
社人ともを召し出だし　住一五三八
捨身の行
　捨身といつぱ――　白一三一七
　難行苦行――にて　石一三七六
灑水の印を結んで　雷三三三八
蛇體　道成シテ一七八九
蛇體の勢ひ紅の舌を振り立て　草二〇五二

蛇體は現れたり　成一八〇三
蛇體は神宮に飛んで　和三〇六八
社壇に入りにけり　大社五六〇
社壇に参らばや　鱗四五三
灑濯歸命頂禮　善三〇三

遮那
峯には——の相を並べ　兪七三〇
遮那教主の秘藏を受け　大會一七八〇
沙那王殿とつけ申す　鞍九五四
斜日竹竿のもとに透けり　老五五七

娑婆（同行をも見よ）
安樂世界より今この——に示現　田一九九一
客蟬の惱は——にやとまるらん　松山鏡三八八〇
慈眼視衆生現れて——示現觀世音　誓一五六三
標梅花の光を並べては——の春を　箙八五七
二度——に逢り給ひ　松山鏡三八七四
妄執多き——なるに　忠度一九一五
われ——にありし時は　須一五〇一
娑婆示現觀世音　高野六〇三・道明一八三〇・朝三三六八
娑婆示現し給ひて我等が爲の觀世音　寺三一〇三
娑婆電光の境　葵一六〇
娑婆に在りし時　當一八五三
娑婆にての妄執　松風二八三六
娑婆に殘る妄執愛着　水無瀬二九三四
娑婆にも行かれず冥途にも歸り　水無瀬二九三四
娑婆の執心　佐渡九四〇

邪法
雲のうちよりも——を唱ふる聲す　車僧一六〇五

赦免状　俊寛一四二八
赦免の御使　俊寛一四三二
赦免使　俊寛ワキ一四三一

沙門（僧をも見よ）
一所不住の——　鉢二五四八
賢心といへる——　田一九九〇
解脱と申す——　第一七六九
玄賓と申す——　三輪二九七七
入唐の——　龍虎三五六三
身延山より出でたる——　梅枝四五七
無縁の——　梅枝四三八
沙門の形といつぱ十力の數珠を　放下二四四
沙門の體とて思ひゆるすも　田一六九七
じやもんもん／＼　三井寺二九九八

娑羅雙樹
地主權現の花の色——の理たり　熊野三三五一

〔舍利〕　一三八三
舍利殿に臨み昔の如く　舍一三九一
舍利に望みあり　舍一三九一

沙裏の金
一寸の光陰は——　[illegible]三〇九八
社稷を贈り禮奠隊なく　鵜祭四一七
酒友に見給ひつゝき　[illegible]

終南山（しゆ）
終南山道仙律師　[illegible]
終南山を立ち出でて　鍾道行一四五〇
從頭も散り散りになり　[illegible]
壽永三年三月下旬　[illegible]
壽永の秋の葉の　歌一一五
壽永の秋の紅葉　[illegible]

酒宴
御——の始まりて候　[illegible]
つはものの交はり頼みある中の——　[illegible]
酒宴半ばの春の興　[illegible]

衆合
等活黒縄——叫喚大叫喚　[illegible]
衆合地獄の重き苦しみ　[illegible]

授記
大聖釋尊その——を得て　[illegible]

修行者　西三二一・鉢三五四九
修行の旅なれば乘物をばこれに留め　[illegible]
酒狂の舞　[illegible]
宿因内に通じて受け難き人身を　[illegible]
宿願の子細　西三二九・西一三七〇・大佛一七四五・[illegible]

宿善
身は——のかひそなき　[illegible]

宿坊

荘司がもとを――と定め 津成一七九九
御寺も――も難なくおはせかし 吉離三三八二
主君を打つ杖 寺宅九八
酒功賛
　白樂天が――を作りし琴詩酒の友 松異二八五六
酒功賛に酒を愛し 大庭一七六一
守護神
　この國の――とならば 江島四九九
　妙經の――の御厨子の扉 曾三三八一
守護神は八龍並み居たり 海一八〇
衆罪如霜露慧日の光に消え 身二九五三
衆罪如霜露慧日の日に照らし給へ 曾十三八九
衆生
　惡業の――の苦患を助け 曲三二一
　一切――悉有佛性 會七二〇・白兒一四六八
　いつを――の始めと知らす 馬三一三三
　有縁の――の所願を叶へ 竹生二〇四一
　有縁の――を守る 調獄四一八
　我等與――皆共成 自一三三三
　具一切功徳慈眼視―― 菊八一〇
　光明遍照十方の――を 曾一八五四
　下化――（その項を見よ）
　隨――性所受不同 宅三二一四
　小機の――益なきを 春日六七四
　但住――心想之中 學一六〇一
　濁亂の――なればこの經は 身二九五四
　法界無縁の――をただ一子と思し 賀七四三
　佛――通ずる身 會七二〇
　佛あれば――あり 山三一八一
　佛あれば――もあり車僧あれば 東九七〇
　佛あれば――もあり善惡又不二 會一三六九
　佛は――を一子と思し 土車三〇七五
　佛も――も隔てなし 卒一七二四
　無佛世界度―― 調伏四一七
　衆生あれば山姥もあり 山二一八一
衆生済度
　一靈分身現れて――の御本尊 葉一五六三
　假に現れ――のわれぞと 葉六二七
　素盞嗚の御再來――の方便にて 源太一〇六七
　業平の花に映じて――の姿を 小鹽一四六四
　末世の――のために袴襲に納め 鸚三三七六
　末世の――のため佛の御名を現し 葉一五六二
衆生済度の爲に靈像を勧請し 今世九五五
衆生済度の誓ひ様々なれば 竹生二〇四一
衆生済度の御方便 江島四九六
衆生済度の方便生死の相を助けん 九世九五五
衆生済度の方便なるを 三輪二九八四
衆生済度の方便の扉 黄三一三九
衆生成佛の直道なり 梅枝四四五
衆生稱念必得往生の功力 東三三〇〇
主上二位殿を始め奉り 知三三四九
衆生のための父なれば [illegible]六八一
衆生の輪業も今ここに [illegible]一九三〇
衆生不念佛
　諸佛念衆生―― 土車三〇七一
主上夜な夜な御惱あり [illegible]一三八四
衆生を済度し給へり [illegible]一三〇
衆生をして西方に勧め入れんがため [illegible]一四八二
主上を始め奉り 曾三七〇・七[illegible]五四
主從（しゆうじゆう）
　商人の――となる手悲しき [illegible]四一七
　親子よりも――は深き契りの中 [illegible]一六五五
　三世の契りの――と [illegible]三〇四四
　切なるは―― 雷三三六
主從三騎に討ちなされ [illegible]三四九
主從三世の契り絶え果て 田三三六六
主從の御契りこれも三世の御値遇 [illegible]三六一
主從八騎思へば不肯の例なり 七[illegible]一三三九
主從隔てなかりしは [illegible]・大[illegible]一四九
種々諸惡地獄鬼畜生 [illegible]三〇七・[illegible]二三
數珠
　十力の――を手に掛ひ [illegible]四四
　水晶の――を爪ぐり [illegible]三〇七
　その木の實をとり――とし [illegible]三九
　百八煩惱を壊る――の [illegible]一六七
數珠さらさらと押しもんで [illegible]七六五

数珠の御法 [illegible]一八三[illegible]

呪咀
今の姿を木像に作り明暮――す 松山鏡二六七三
法の咎の――を負ひ 葛六九六
呪咀諸毒藥念彼觀音 國三〇〇一

首陀
剎利も――も變らざりけり 錦木三三五[illegible]

受持
妙なる法の――に逢はば 梅枝四四五
受持し讀誦せんをや 身三九五[illegible]

柱杖
柱杖にあらざる鐵の棒 熊坂九三六
柱杖に團扇を添へ 放下二四四五

述懷 祇八六三

出化
金剛薩埵かりに――し 卒一七三

出家
敵を遁れんとの―― 小督一一一五
出家と申し旅といひ 松風二八三一
出家にあらざれば髮も剃らす 東岸二一六九
出家には手をささじ 大江五五九
出家の御暇 千一七〇五
出家の功德に劣るまじ 七一〇八三
出家の事にて候へば [illegible]三五一
出家の身をも許さねば 朝三三六一

出仕
日々に――申す [illegible]三[illegible]六[illegible]
出生出世定まらず 殺一六三九
出仕をとどめ [illegible]八六〇

出世
出世の本懷
三世の諸佛の―― 佛[illegible]

出離生死
南無阿彌陀――頓證菩提 [illegible]三六八・[illegible]三[illegible]七
南無阿彌陀成等正覺――頓證菩提 女三四九八
出離生死を離れよ 通小七六六
出離の緣と思ひ 熊坂九三五
出離の緣として 花一〇〇〇
出離の佛像に應じつつ 櫻一三三六
出離の道 [illegible]
進み難きは―― 東[illegible]三[illegible]七[illegible]
出離を求むる知識はこの枕たり 邯七八九

酒呑童子
酒呑童子 大江[illegible]五五[illegible]
わが名を――といふ事は 大江五六〇

衆徒
三千人の――を置き [illegible]七[illegible]〇
老若の――稚兒童 國三三一
しゆとう(宗燈カ)
妙法――繁昌の日 身三九五〇

修讀
御經を――せしに [illegible]三〇七
衆徒の[illegible]議り 忠信一八九五
衆徒の手に渡りなば [illegible]七[illegible]
衆徒も時刻を移さじ [illegible]二八四
主の命に代ること弓矢取る身の習ひ [illegible]三[illegible]四
朱買臣は錦の袂を會稽山に翻し [illegible]六[illegible]

壽量
をさむる手には――を抱き 高砂一八七三
をさむる手には――を招き 道明一八三七
鷲峰の說法雙林の入滅 作日六七五
須彌山を讀みたる歌 歌三五八
須彌に上らんとするを [illegible]七七五
須彌の四洲の樣々に 因三一三
須彌は金輪より長じて 歌三五八
壽命長遠息災延命の寶の珠 合六八七
壽命は千代ぞと菊の酒 雁七八四
壽命めでたき事を顯ふ 宮三三九五
主馬の盛久一曲一奏の事 [illegible]三一〇九
須臾に生滅し刹那に離散す 歌ク七三六四

修羅
帝釋――の戰ひ 經二〇九一
畜生――の悲しみも 歌三六六

修羅道
魂は善所に赴けども魄は――に 朝三三七二
修羅道にをちこちの 青八五四

修羅道の苦しみの隙なきうちに　知三二四七
修羅道の苦を受くる　通盛二九〇九
修羅道の戦ひ　大[illegible]五四八
修羅道の巷となりぬ　[illegible]五一八
修羅の散天地を響かし　生[illegible]七三
修羅の合戦の始まるぞや　[illegible]二六〇
修羅の苦患の数々を　[illegible]一二五六
修羅の業に沈む　[illegible]三三五二
修羅の瞋恚が起こるぞとよ　[illegible]二六〇
修羅の太鼓は打ちやみぬ　[illegible]二七〇七
修羅の大将無明王とぞ　碇二六〇
修羅の時になるべし　八島三二五四
修羅の妄執　[illegible]五一六
修羅王の梵天に攻め上るを　俊成一四四五
鐘樓　道成一七九二
酒宴の御座敷　吉靜三三八二
酒を勧めばや　羅三三四七
衆怨悉退散といふ文は　盛三一〇一
舜
　虞舜──はかたくなる父を敬ふ　木賊三三一四
順
　いづれか──と見逆なりといはん　蟬一六八〇
春覺坊　代一四八九・[illegible]三三二四
〔春榮〕　一三九七
春榮　春榮子方一三九七
春榮丸
　増尾の──　春榮一四一六
順縁
　同所の人なれば──に弔はせ　巴三三八五
順縁に外れたり　卒一七三三
順義
　身を捨てて山に入るは──　高野六一〇
　よも──にては候はじ　吉靜三三八五
順義の法は違ひたり　錦戸二三六六
順逆
　これ皆──の二つなり　[illegible]一六八〇
順逆二列の境に迷ひ　錦戸二三七一
順逆の縁はいやましに　東北三三〇〇
〔俊寛〕　一四二二
俊寛　俊寛シテ一四二二
蓴菜の羹鱸魚とても　國八九八
春秋を指く　[illegible]二四四
俊乘坊　大佛△一七五〇
俊乘坊重源　安宅九二二
俊成　俊成ツ一四三七
俊成
　五條の三位──と和歌の御值遇　俊成一四三九
　五條の三位──の卿　忠度一九一六
〔俊成忠度〕　一四三七
俊成の御内にありし　忠度一九〇六
春宵一刻値千金　西[illegible]一一七八・泰一七三六・田一九九二　小[illegible]四六六
春宵一刻その値千金も何ならず　唐一八一六
春宵短きを苦しみ　[illegible]九九四
春前に雨あつて花開くること早し　熊野三三四七
俊徳丸　弱[illegible]一五
俊徳丸が果　弱[illegible]七
春風
　雲の花鳥──に和しつつ　[illegible]一五七六
　野花黄蝶──を領し　胡一一五一
春風桃李花の開くる時　右三四二
春満丸　高野子方六〇一
春雷
　石上に──をなす　三笑一三八六
順禮の街路に幣を捧げつつ　俊寛一四二五
[illegible]　高砂シテ一八五七
[illegible]
　色の黒い──　[illegible]一〇
　婦人はこの──　白楽二四七八
承引
　さはお御──候べき　[illegible]六八四
承引すべきか　夜三六三
[illegible]子　[illegible]二一三
　[illegible]御遣しろへ申さう　竹生[illegible]〇一七
[illegible]
　朧月──の中に映じ　[illegible]五三七

財が住家に　閨八九五
證實分明ならでは　草子一一八九
〔鐘馗〕　一四四
鐘馗　皇シテ九八九・鐘シテ一四四九
松菊を植ふ　三笑一二八六
鐘馗大臣ゐ劍の德に魂魄は君邊に　小鍛一二一六
鐘馗といへる進士　鐘一四五一
承華殿（支那）　東方所二一七七
承華殿
　帝の御殿は——　東方二一七九
松花の色十廻りともいへり　高砂一八六五
松柱
　梟——の枝に鳴きつれ　殺一六三八
松柱に鳴く梟　錦木二三五〇
松柱の枝を引き結びたる庵　一角三七八
松根に倚つて腰を摩れば　高砂一八七三
稱讚淨土經　當一八四七
承相（クヮンシャウジャウをも見よ）　雷三三三五
證誠殿阿彌陀如來の誓ひ　檀二〇三六
證誠殿に通夜申し　[illegible]一五五三
證誠殿は阿彌陀如來　巻二八一一
證跡正しき物　藤榮二一五二
昇沈不定にしては鳥の林に遊ぶに　土車二〇七八
稱念の鐘の下よりも　盛三一〇四
松風（マツカゼをも見よ）
　桂林雨を拂つて——を調む　女三四九〇

江月照らし——吹き　[illegible]三三三五
松風草堂の宿に通ふ　梅枝四三七
松風蘿月に言葉を交はし　[illegible]三二一四
松風蘿月に言葉をかはす賓客も　[illegible]四八五
勝負を見せ　大佛一七五四
稱名
　所から心に叶ふ——の　六浦三〇一四
　別時の——　實[illegible]
稱名觀念の床の上　當一八四七
稱名寺（神奈川）　六浦三〇〇九
稱名の心一つを積みつつ　[illegible]一五六一
稱名の聲うち添ふる初夜の鐘　[illegible]
稱名の時節の逢ふ事　實一二四八
稱名の法事　[illegible]一一三四
稱名の御法　[illegible]一五五[illegible]
稱名の妙音　當一八五四
松明とくと進むれば　俊一六四〇
證文　[illegible]一五五[illegible]
松門ひとり閉ぢて年月を送り　景六三四
松嵐梢を拂ふ　[illegible]一四五七
松嵐花の跡訪ひて　[illegible]上歌九五五
松林の下に住んで久しく風を送る　[illegible]三五七
勝劣
　いづれ——なけれども　[illegible]三四八二
　家人か兄かの——を見せ申し　春榮一四〇六
　日夜の——見えざりけり　白鬚一四七四・西王一五七〇

初夜
　觀心——の形　高野六一〇
諸行無常
　鐘の聲——となり　芭三五三六
　初夜の鐘を撞く時は——と響く、　[illegible]
　[illegible]寺の鐘の聲——と聞く、　[illegible]一六一九
諸行無常と告げ渡る　[illegible]
諸行無常の聲やらん　[illegible]
[illegible]
　[illegible]草花を[illegible]に——を連ね　女三四八九
式子內親王　定シテ二一〇一
式子內親王の御墓　定二一〇八
[illegible]
　[illegible]——の上衣の色を[illegible]り　[illegible]一六二九
[illegible]人文を濯ふ[illegible]　[illegible]山[illegible]一八七八
蜀の國の傍に[illegible]生といへる　[illegible]七七八
職の譽れを業る事　小[illegible]一一三一
諸願成就皆令滿足　[illegible]一[illegible]
所願成就し　[illegible]三三二七
諸願成就を積ゑ置く　[illegible]四〇〇
所願も空しくはなりたり[illegible]　俊寛一四二四
職を營む凡夫　[illegible]
諸國一見の僧　（一[illegible]をも見よ）
所作
　諸法を心が——として　放下一四四五

遲々たる春の日も——足らねば　善知三九一
所作多罪　歌三六四
庶子（ソシを見よ）
諸司の別當梶原父子　[illegible]三二三
初成道の時悟り得給ひし妙法華經　現一〇一六
所詮此方の念佛をば止め　隅一五三三
所詮何と仰せ候とも　仲三三一二
所存
　世を捨て者の——　[illegible]九三六
所存は誰にも劣るまじ　[illegible]二五六四
書傳
　家々の——にも記し置き　[illegible]三
諸天
　明王——はさて置きぬ　[illegible]一六〇六
諸天氏の神も正に照覽あるべき　雲雀二六四九
諸天善神とたつて虚空に飛行し　賀七四三
諸天納受して　唐一八三〇
諸天來去の影向かた　[illegible]三一三九
所得いくばくの利ぞ　歌三六四
諸人快樂福壽圓滿　住一五四二
序𦄵　[illegible]二四・[illegible]四〇九・梅四三[illegible]・雲林四六九・江口四八五・[illegible]六二六・葛七〇一・西行一一七九・住一五四七・誓一五六四・關寺一六三一・千一七二一・[illegible]二二一六・東北二三〇〇・木賊二三二五・野宮二四一八・羽二四九四・半二五〇五・芭二五四二・檜二六三四・[illegible]人二七三一・[illegible]二七三[illegible]・佛二七九七・身二九五五・六浦三〇一七・楊三一二五・[illegible]三一八九・遊三三〇四・夕三三一八・吉靜三三八六・井三四一一・小鹽三四六八・姨三四八四
諸法實相
　風の音水の聲もおのづから——と　身二九五五
　草木國土有情非情も皆これ——　芭二五二五
諸法を心が所作として　放下二四四五
諸佛出生の本來空　放生二四六一
諸佛念衆生衆生不念佛　土蜘二〇七三
諸佛菩薩　[illegible]七一〇
諸佛も感應ましますあたり　[illegible]二〇五〇
所變
　楊柳觀音の御——　花一〇〇六
初發心の者　熊坂九三六
初陽
　花の新に開けし日は——潤ふ　[illegible]一五一三
初陽每朝來不遭還本宿　白樂二四七七
初夜の鐘
　稱名の聲うち添ふる——　遊三三〇〇
初夜の鐘を撞く時は諸行無常と　三井三〇〇〇
初夜より後夜に至るまで　[illegible]一二五四
初夜より後夜の一點まで　[illegible]一〇七
所勞
　難義の——なれども　[illegible]八
所勞仕り　歌三五九
白絲の腹卷白柄の長刀　[illegible]一一五六
　[illegible]九五八
次郎
　安[illegible]の太[illegible]同じき——　[illegible]二五五
　池田の——　木賊八一九
　新開の——　七騎一三一〇
　[illegible]河の——　[illegible]八[illegible]
　高師の——　[illegible]六〇二
　[illegible]の——　[illegible]一[illegible]八
四郎
　新田の——と戰ひ給ひしが　[illegible]七[illegible]
　三保の谷の——と名乘つて　八島三[illegible]
次郎坊
　比良の峯の——　[illegible]一〇[illegible]
白柄の長刀　[illegible]九五八
白金物打つたる絲毛の具足　[illegible]五六四
白河（福島）　[illegible]二九一
白河
　心の奥を——の　[illegible]六[illegible]
白河（京都）
　跡——を行く波の　[illegible]九[illegible]
　ここにも名に立つ——の　融三三三
　下は——上は賀茂川　[illegible]六
　末——の波風も　[illegible]二
　末——をうち渡り　[illegible]一六八一
白[illegible]（[illegible]）
　影——の水漫めば　[illegible]五

年ふれはわが黒髪も――の　梅六三七
　昔に歸れ――の波　梅六六五
白河表過ぎ行けに　[illegible]一〇九
白河に架かれる橋は　東[illegible]三六九
白河の庭のあたりを藤原の興範　梅六六七
白河の關(謡曲)
　秋風の音――路より　[illegible]三六〇〇
白河の關路と聞けば秋風も　[illegible]一九三
白河の院に仕へ奉る　[illegible]一一五五
新羅[illegible]を[illegible]
　神功皇后――を從へ給ひし古方　目八九九
白菊
　ことわりや――の　猩一三五一
　霜を帶びたる――の　胡一一五三
　庭の――うつろふ色も　紅三〇八一
白菊の着せ綿を濕めて酒をいざや　猩一三五一
白菊の花はさながら紅の　[illegible]一三八四
白衣のうららなる　作一二六九
新羅の國に天降り　大蛇三五〇五
白木の手束弓　歌三五五
白雲
　花におり立つ――の　春一七三五
白雲かかる山となるまで　正一三六五
白鷺の群れゐる松見れば源氏の旗を　滿八五二
白太夫神　道明シテ一八二三
白玉
　包めども袖にたまらぬ――は　關寺一六一七
　訪はれて[illegible]寺に――の　[illegible]九一
　人は――の思ひはうちにあれど　小督一〇六
白玉か何ぞと問ひし人までも　[illegible]六四六
白玉椿八千代經て　山三七八
白露
　思ひ草葉末に結ぶ――の　花筐一五九二
　夏果つる扇と秋の――と　班[illegible]六〇五
白露のおのが姿をそのままに　身[illegible]九五一
白露の情置きける言の葉の　夕[illegible]三一四
白露も時雨もいたくもる山は　[illegible]三六一七
白鳥
　薄き日影も――の鳥羽の　作一五四〇
白鳥の峯(發句)　草薙八八四
白波
　沖つ――の打ち入るを　[illegible]三四二九
　寄せかけて打つ――の音高く　[illegible]三七三
白波とよそにや聞かん　正一[illegible]一三六八
白波の八重折る上に海士小舟　梅四二五
白和幣
　青和幣――とりどりなりし　弓三三九
　卯の花の――　代一四八〇
　榊葉の青和幣――　繪三四五二
　標木綿花の――　葛七〇一
　月も宿も――　[illegible]・[illegible]
　波の――[illegible]の青和幣　[illegible]
　波の――水の青和幣　[illegible]二九七一
　花に宿の――　[illegible]
不知火
　海岸そことも――の　[illegible]三四〇七
　末――の筑紫潟　[illegible]四八九
　舟路の末も――の筑紫を　[illegible]三三六一
不知火の筑紫の海の朝ぼらけ　白樂一〇三四七二
不知火の筑紫人かと　[illegible]一三九
知らぬ男の寄り來つつ　[illegible]
白旗數多ととのへつつ　木[illegible]八六八
白旗を靡かして　[illegible]三二〇
白羽の矢
　白木綿に――を立て　[illegible]七三六
白張淨衣に立烏帽子　大佛一七五二
〔白髭〕　一四六一
白髭の神
　その時の翁も今の――とかや　白髭一四七〇
白髭明神　白髭[illegible]一四六一
白髭明神社(謡曲)　白髭[illegible]一四六一
白髭の明神は當神にて　白髭一四六三
白拍子　[illegible]八九九・[illegible]一七八九
白拍子
　磯の禪師が女に靜といへる――　正一三六四

この國の傍に住む―― 道成一七九三
檜垣しつらひて住みし―― 檜二六二七
佛御前と申しし―― 佛二七九〇
白拍子をぞ謡ひける 千一七二一
白拍子をぞ奏でける 住一五四三
白斑の鷹 野守二四二八
白眞弓
いさ――彌猛心の人の 賀七三五
今ぞ始めて―― 輔二〇〇六
老い行く末も―― 浮三一六
誰とも―― 紅三〇八五
亡き跡の名は――の歸る方を 知二三四四
若木の花の―― 伴五一一
白眞弓取の身の 巴二三八四
白眞弓引きはかへさじ 元一〇九三
白峯(香川) 松山天二八八七
白峯
降り積む雪の―― 花一〇〇八
白峯の相撲坊 鞍九五八
白峯の相撲坊に從ふ天狗ども 松山天二八八九
白むは花の影たり 西行一一七九
調めは隠れなきものを 小督一一〇三
調めは隠れよもあらじ 小督一一〇四
調めも四つのをりから 鼎一六八二
白山(石川) 歌所三五三

白山
君が住む越の――知らねとも 歌三六二
花筐二五八六
遙々と越の――知らざりし 佛二七八八
雪消ゆる――風ものどかにて 藤二七二五
雪三越路の――は 歌三五四
白山禪定 傳二七八八
白山立山富士の御嶽 大江五六二
白雪
花はさながら――の 竹生二〇三六
松に殘る――の 春一七三六
身は――の面忘れ 歌三六一
白雪の消えし跡こそ道となれ 二人二七一四
白雪の道行き人に言傳てて 陽一五二一
白木綿
神の――かけまくも 蟻二二二・志一三〇三
袖の――返す返すも 弓三三三
白木綿かかる玉垣 大社六八〇
白木綿かけて川波の 野宮二四一三
白木綿懸けて咲く花の 春一七三五
白木綿に白羽の矢を立て 賀七三六
白木綿の御祓も頼もしや 大江五五六
白木綿花の御祓して 俊寛一四二五
白木綿花を捧げ 蟻二二三
芝蘭の契りの袂には 東岸二一七二

死靈
生靈――の間を梓にかけ 葵一一五七
程もたく――となつて 綾一九八
知る事あらば申さ給へ 高砂一八六二
しるしに柳を植ゑて 陽一五二八
しるしの釵また賜はりて 楊三一二五
しるしの棹
雪の深さをも知るや――立てて 定一〇三三
しるしの杉
神垣は――もなきものを 野宮二四一〇
三輪の山――も立ち別れ 浮三一一五
しるしの箱
神代今の世――の明らか 弓三三三四
しるしの筥を納むる法の神宮寺 女三四九四
しるしばかりの淺茅が原となる 陽一五三四
しるしを賜べ 實二三五一
知る人
高安の里に――ありて 井三四〇六
知る人も知らぬ人をも渡さばや 實一二四七
知るも知らぬも逢坂の關守も 盛三〇九七
知るも知らぬも逢坂の山 安宅八二
知るも知らぬもおしためて 蟬一五五三
知るも知らぬもこれ見よや 蟬一六七八
知るも知らぬも花の蔭に相宿りして 吉野天二五九三
知るも知らぬも道のへの 蟬一七七一
しれ者

すは——よ物見せん　[illegible]二五一七
知れるはいよいよ萬德を得　放生二四五七
知れるを以て道とす　草子一一八四
代
　往來の人にこれを——なし　雲雀二六三九
銀の月輪を出だされたり　邯七八三
銀の山を築かせては黃金の日輪を　邯七八三
白酒
　黒酒——の神酒たうべ　梅四三三
白き扇のつまいたう焦がしたりし　半二五〇四
白き花のおのれひとり笑の眉を　半二四九九
白き繪馬
　雨少き年は——を掛け　繪馬三四五〇
白きを見れば
　渡せる橋に置く霜の——　張二〇四九
白妙に雲も霞も埋もれて　田上歌一九八九
白妙の袖を飜し　內三七八
〔代主〕　一四七七
しろみ草　求三〇六七
代物　櫻一三三五
四王
　梵釋——の人天に降り給ふ　須一五〇三
四王寺（編岡）
　深き思ひを——　花一〇〇八
四王寺の峯に於て七箇日の御神拜　弓三三三九
四王天の[illegible]花　[illegible]一一六八
椎の木
　車を作る——　[illegible]八七[illegible]
〔四位少將〕　通小異稱七六一
四位の少將
　深草の——　卒一七二八
　小野の小町——　通小七六九
しをりして花をかざしの袖ながら　小鹽[illegible]三四五八
紫苑と云ふは何やらん　[illegible]五六四
信
　友と交はりて——あり　內三七七
瞋恚
　貪欲——愚癡は　東岸二一七二
　妄執の——とて　八島三一五七
瞋恚に引かるる妄執　八島三一五七
瞋恚の敵の責　[illegible]五一七
瞋恚の甲冑　[illegible]二七二
瞋恚の焔　[illegible]五九八
瞋恚の焔は荒磯の　俊成一四四五
瞋恚の焔は太鼓の烽火の　富士太二七〇七
瞋恚の焔は身を焦がす　葵一六三
瞋恚の焔胸の煙を　小袖一一三八
瞋恚の猛火は雨となつて　[illegible]二〇九一
晨瓔の冠を着　西王一五七五
人煙
　江[illegible]浦を隔て[illegible]——[illegible]　[illegible]
　身延山の風大[illegible]の[illegible]へて　[illegible]
　身延山より出でたる[illegible]　[illegible]
[illegible]息
　當社の——ぞと悦び　[illegible]二四五
[illegible]
臣下
　延喜の聖主に仕へ奉る——　[illegible]二三九五
　延喜の聖代に仕へ奉る——　竹生[illegible]
　龜山の院に仕へ奉る——　氷二六五三
　漢の皇帝の——　枕二八一六
　魏の文帝に仕へ奉る——　菊八〇七
　木の丸の皇居に仕へ奉る——　[illegible]一九〇
　欽明天皇に仕へ奉る——　江島四九一
　桓武天皇に仕へ奉る——　[illegible]八七〇
　後宇多の院に仕へ奉る——　弓三三三
　後漢の帝に仕へ奉る——　天[illegible]二
　後白河の院に仕へ奉る——　大原五三六
　白河の院に仕へ奉る——　戀一二五五
　朱雀院に仕へ奉る——　[illegible]一五七
　當今に仕へ奉る——　[illegible]二〇五・內三七[illegible]・[illegible]世九二〇
　　[illegible]九七七・逆二二〇三・志一三九二・白鬚一四六三・雖三三二七
　　[illegible]六〇三・松山三八四三・御[illegible]九五九・[illegible]
　高倉の院に仕へ奉る——　小督一〇九八
　藤原の院に仕へ奉る——　富士太二六九八

波羅那國の帝王に仕へ奉る―― 一角二七七
雄略天皇に仕へ奉る―― 峯三一二七
人家
遙かに――を見て花あれば則ち入ろ 古三四三・雲林四〇六・數九五三
七騎ッ 一三〇五
新開次郎
神幸
右近の馬場わたり――ぞ 右三四六
汀に――なり給へば 和三〇三六
深更に軒白し 雷三三三四
神樂の役々は住吉鹿島 大社五八四
心が所作として 放下二四四五
人家を離れて無人聲 高野六一一
信感
あらたなる御――は限りなし 盛三一〇八
神感の至りにや 花筐二五八二
神感も頼もしや 源太一〇六五・巴三三七八
仁義
外には――を旨として 元一〇八五
神祇
大小の――冥道請じ驚かし 正一三六四
神祇の前は榊葉の庭火に袖ぞ 草子一一九五
親兒の禮を重んじ 船辨二七六九
仁義禮智信五つの道も 俊成一四四一
仁義禮智信の五常を守りつつ 維二〇八八
仁義禮智信の祖師 天二一三四
神功皇后三韓を從へ給ひ [illegible]九八二
神功皇后三韓を鎮め給ひしより 弓三三三八
神功皇后新羅を從へ給ひし古方に [illegible]八九九
神宮皇后の勅を受け [illegible]四一七
神宮寺
しるしの箭を納むる法の―― [illegible]三四九四
新宮藥師如來の淨瑠璃淨土は東にて [illegible]二〇三六
秦皇徐市を送ばば[illegible]山ちよの春の 江口四九二
神火を燈して日夜に土を運び 九世九三六
心觀の窓に向ひ 身二九五一
神君父母の重恩言葉に盡し難かる 内三七六
新月
三五夜中の――の色 (その項を見よ)
三五夜中の――の二千里の外 雨三三三
心外無別法心佛及衆生 怕六六二
神劍
熱田の――をも下し奉り 草薙八八七
十握の―― 大蛇三五一三
日本武の尊――を守る神とたる 草[illegible]八八六
人口
世の――もあるべけれ 錦戸二三六五
人口を思し召すなり 船辨二七七五
新古今 遊三一九七
神國
大君の―― 田一九九九
君を守りの―― [illegible]
素盞嗚尊の守り給へる―― 草子二一九八
大日本國といつぱ――たり 逆一三二三
盡虚空界の莊嚴 [illegible]一八五二
神國といひながら又は佛法流布の [illegible]一四一四
神國として佛法今に盛んなる 善界一五九七
神國の姿を[illegible]せり 富士山一六八五
神國王地の惠みを積み 土蜘一〇六六
神護景雲二年 [illegible]九九
心地
八幡の御託宣あらたに――に殘る 満八五三
眞言
[illegible]の――千手の陀羅尼 [illegible]二一一八
身三口四意三の十の道 怕六六二
神事
神有月とて……御――樣々 大社五七五
二月初卯八幡の御――なり 弓三三三三
當社におき御――樣々 二人[illegible]七一三
八幡の御―― [illegible]四五八
囃子物をして神前に參る御―― 室三〇二〇
和布刈の御―― 和三〇二九
進士
鐘馗といへる―― 鐘一四五二
身色
染色とは風病の―― 歌三五八

親子兄弟の宿縁
　因果を離れぬ輩者——　元一〇八八
親子の孝行　錦戸三三七一
尋常に討死し　軍一六九六
尋常に討死せよ　七騎一三一四
尋常に拵へ　生二六五
尋常に誅せられう　安宅九〇
尋常に腹切り給へ　錦戸三三七一
眞性不生の道を示し　放生二四六一
神蛇大王　代△一四八六
新珠島（春日）　海一七六
人壽二萬歳の時
　第九の減刧——　白鬚一四六八
眞珠の砂瑠璃の砂　咸七九三
信受の功力　現一〇三三
人壽百歳の時　白毫一四六八
人壽六千歳の始めより　白毫一四六九
人壽を絶ちし現當の罪　千一七〇六
揚鋒夕焚の聲絶うることなし　老五三七
神職　末狂言六五一
神職（神主・社人参照）
　鹿島の——筑波の何某　放生二四五五
　鹿島の——何某　右三四一
竹生島の天女に仕へ申す——　竹生△二〇三八
早鞆の明神に仕へ申す——　和三〇二九

　二見の浦の——　歌二五七
　舊賀茂の明神に仕へ申す——　代一四七八
　室の明神に仕へ申す——　賀七三三・室三〇三〇
神所垂跡多けれど　鵜祭四一四
神所の御祭樣々たれども　和三〇三一
神璽を脇に挾み　當二五九
深々
　深——と古寺の　井三四〇五
深心
　至誠心——廻向發願の　誓一五五六
人身
　受け難き——を受け　（その項を見よ）
信心清淨の心を感じ來りたり　九世九二七
信心私なくは　百二六七六
眞水
　法の——と思し召し　木賊二三一三
信西が女阿波の内侍　大原五四三
新關　安宅八〇
神泉苑（京名）　鵜飼一三一五
神泉苑
　同じ雲居の大内や——に　鵺一一八
神泉苑にして琵琶の秘曲を　絃一〇五〇
神僊人化の境界として　富士山二六九〇
神前の事業なれば　源太一〇七三
親疎多くかくれぬ　歌二六四

神孫
　天照大神の——なれば　花筐二五八二
神體
　あらたに——現れ給ふ　繪二四五一
　石は一つの——として　葛六九七
仁體
　さも不思議なる——なり　西行二一七五
進退ここに谷りて　小鍛一二一四
神體時の弟子たれば　小督一二二三
新大納言行家　墨一五
身體わななき手をおして　鳥七九八
神道
　古今に至る——を表し　春日六七〇
　判官は——を重んじ朝家を敬ひ　吉備三二八五
　神道の譽らぬ末を受けて　御二九六七
　神道も榮え國も富み　草薙八八八
神託
　あらたに——なし給ひ　鐵輪四五六
　御——に任せて　鵜二三
　これを御——と思ひ定めて　春日六七五
　行末護れとわが——の　花五三
神託正にあらたなる　春日待宿六七七
深達罪福相　善一八六
霞日の四明の淵をうつせり　笠七二〇
心地

一塵法界の——の上に雨露荷等　苗三五四一
親知
　家貧にしては——少く　謡四六・大系三六四〇・拾二六三五
神忠を致さん　鐵三三二
人畜類の生を背き境をさかりにき　御三〇三四
新中納言知盛　盛二五九・大累五四九
新中納言知盛の御子息　知三三四一
新中納言使者を立て　盛二五四
深著虚妄法堅受不可捨　身三九五四
神通
　悪鬼の——通力自在の勢ひ絶えて　鐵七一四
　仙人——を以て諸龍を悉く　一角三七七
神通自在の祕術を現し　寝二四〇三
神通の身を現じて　鱗四五六
神通の弓
　愛染明王も——を張り　放下二四四五
神通を得て　杜六八一八
身體疲痒する小町ぞ　鸚二三
晨朝の書は生滅滅已　三井三〇〇〇
神田　湯一四四
神燈
　星月——白みわたる　内三七九
心頭無事にして一床寛し　蝉八四七
神徳
　二世安樂の——　放生二四六二
神徳長久の惠みを仰ぐ祭事　御一九六二
神徳王地の惠みを受くる　御一九六五
心耳に残り充ち満ちて　高野六一三
心耳を澄ます聲出でて　大二三三九
心耳を澄ます夜もすがら　金一三八九・當一八四七
心耳を澄ます折からに　白鬚一四七四
秦のかくいは蒲匡をうつ　春榮一四〇八
秦の始皇の御狩の時　花五二八
眞如
　佛體——の善心となさん　殺一六四三
　本覺——の圓月に坐せり　當一八五二
眞如朽ちせず逢ひ見つと詠歌　巻二八〇九
眞如實相の觀弓の　弓三三三
眞如實相の無漏を出でて　源太一〇七一
眞如の秋の月　砧八三七
眞如の玉
　これこそ——の緒の　合六八七
　何よりも磨くべきは——　木賊二三〇八
眞如の玉葛　玉葛一六六八
眞如の玉はいづくぞ　錦木三三四九
眞如の玉も曇らじ　江島四九七
眞如の月出でて妄執の雲消えたん　雪三一八七
眞如の月の影を眺め　三井三〇〇一
眞如の月の西方も　舞一五六四
眞如の月の澄める世に　墨二〇七
眞如の月の春の夜なれど　八島三一五七
眞如の月の夜汐に浮かみ　朝三三九〇
眞如の月の梅の譜れ　大原月二九四三
眞如の月は曇らじを　東二六〇四
眞如の月はたは照るや　屋島一九三三
眞如の月も出でつべし　鱗三七六四
眞如の月も晴れよとぞ　夕三三二
眞如の月や出でぬらん　鳴三三〇九
眞如の月宿らす　東岸三一七一
眞如の月弓　鱗四五一
眞如の觀弓
　悪魔降伏の——　金八七六
眞如の花の色香　西王一五七〇
眞如の光
　海水濛々として——をかかげ　山三一八〇
眞如の慧日まとかなり　大會一七八〇
眞如法身の玉垣の内　金八七三
眞如法身の玉橋の　竹生島二七六六
眞如平等の臺に至らん　小六六六
眞如平等の慈風は八葉の峯を　高野六一三
神農の作りし桑の弓　鱗四五一
晉の七賢が樂しみ劉伯倫か翫び　難三一二五
眞序舞　南三三七・老五三二・竹一三七七・放生二四六六・日三四八〇
秦の亂れ
　漢王三尺の劍居ながら——を　小督一一一六

枕設の斜紅　皇九九四
人馬巖窟に身を碎き　小督一一一七
臣は水
　君は舟——　春三一四〇
神慮
　かかる——も大方の　江島四九九
　疎吏——多ければ　鵜祭四一五
　當社の——委しく御物語り候へ　大社五七八
　當社の——に於て樣々あるべき　賀七三六
　當社の——悉に御物語り候へ　淺一四六
神祕を委しく語り給へ　第一七七一
神佛一如　道明一八三一
心佛及衆生
　心外無別法——　柏六六二
神佛水波の隔てなり　江島五〇四
神變奇特不思議なる　橋上歌 五一一
神變はいさ知らす　海一八〇
神變佛力にあらすは　石一三七九
神木
　嵐山の千本の櫻は皆——にて　嵐三〇六
　今——となり給へば　老五三六
　木華開耶姫の御——の花　櫻一三三七
　草木國土成佛の——と思し召し　采四〇〇
　菅原の——にも折らて手向けよと　女三四九一
　八幡の——と敬せしより　旅五一〇
　三輪の明神の——は杉なり　龍田一九一七

紅葉を——と崇め　龍田一九一七
秦舞陽　咸陽宮一七九一
秦舞陽
　燕の國の傍に荊軻——と申す　咸七九五
身命を捨てて熊野權現に頼みをかけ　[illegible]一〇三五
身命をつぎ　鉢二五五五・望三〇四〇
身命を佛力にまかせて　石一三七六
人民快樂の御惠み　鈴三四四七
神武天皇より　江島四九八
神明納受垂れ給ひ　木賊八二三
神明の納受疑ひなく　松尾三六四四
神明佛陀の冥感に至る　東北三一九九
神明佛陀の冥感に背き　船辨三七八三
神妙
　勅に從ふこの鷺は——神妙　鷺一三一三
神妙に思し召し候　船辨三七七三
神馬七匹その外金銀種々の　満八五〇
神物
　人は天下の——たり　御二九六五
眞文
　般若の——を講じ　松尾三六四二
しんやうが持ちします鏡　昭一五八七
潯陽江(支那)　碑所一三四七・大瓶所一七五九
潯陽の江
　四の緒の音を留めし——　岩三九二

潯陽の江に年久しき翁々　大[illegible]一七二一
潯陽の江のほとりなれと　[illegible]二七
潯陽の江のほとりにて　[illegible]一三七三
潯陽に花を供する天人　中[illegible]七七
深夜の鐘の聲　[illegible]二六
深夜の月
　燈火を背けては共に憐む——　俊成二四四六
　[illegible]三〇九一
　朝長を共に憐みて——も　朝[illegible]三九
　共に憐む——　采三九八
臣よく君を仰ぐ御代とて　春三一四〇
新羅(ここをも見よ)
新羅百濟の兇賊を盡く亡ぼし　鵜祭四一七
森羅萬象
　草木——まで御影の[illegible]　佐一七七二
新柳の絲
　氣霽れては——を梳り　[illegible]一三五九
神力
　敷島に人敬つて——ます　三輪三九八五
　佛力といひ——も　田一九九九
　八幡の　木賊八二四
神力の妙樂を樂らざらん　第一七七一
神力も佛說も同じ和光の影　道明一八三一
神力を現じて　百三六七九
神力を示し消へ給ふ　身二九五四

神慮
空飛ぶ鳥も地に落ちて——に從ふ　鵜祭四二一
人倫
今——に遍し　蟻三三〇
親の子を思ふ事——に限らず　唐一八一九
人倫通はぬ所　一角二七九・砧八〇九
人倫心なし　卷三八〇六
人倫絶えたる所　安達△一一五
人倫ならぬ化生の者　大江五五五
人倫に於て專らなり　忠度一九一六
親類とても尋ね來ず　隅一五二九
神靈
木華開耶姫の——　難二三三七
秦嶺の雲
一聲の鳳管は秋——を動かせば　經二〇九〇
神を敬ひ國を護る辯才天　竹生二〇四〇
神を敬ふ心あらば　白鬚一四六七
人屋しるき眺望の　鐘一四五〇
新院の御廟所松山　松山天二八八六
新院本院位を爭ひ　松山天二八八五

す

數行虞氏が涙もこれにはいかで　通盛二九〇七
數千騎に身を變じ　田二〇〇〇
數千蓮華の上　安宅九三
數駄の寶を集め　熊坂九四一
數人
その外——竝み居つつ　鉢二五六七
すかされ
面々聲々に——て　[illegible]一六六七
菅薦
十符の——　藤榮二一五〇
姿が世をも厭はばこそ心こそ厭へ　卒一七三三
姿こそ山のかせきに似たりとも　小鹽三四五九
姿たければ訪ふ人もなし　[illegible]一六〇
姿は見れども手に取られず
陽炎稻妻水の月かや——　熊坂九四五
姿は山賤の心は高き謙　國九〇三
姿を改めぬこそ發心初緣の形　高野六一〇
姿を變へよといひしかば　通小七六九
菅の根の長門の關路程もたく　藍二三七
菅原の神木にも折らで手向けよと　[illegible]二四九一
菅原や伏見の里の宿造り　[illegible]八七一
菅蓑
濡れじと——や笠を傾け　善知三九二
菅筵
心を友と　の思ひを述ぶる　高砂一八六一
杉
しるしの——　（その項を見よ）
三輪の明神の神木は——なり　龍田一九二七
過ぎ來し世々は白雪の　高砂一八六一
杉立てる門
訪ひ來ませ　三輪二九八〇
杉の木の間
朧々と——を渡りくれば　[illegible]九八
杉のしるし
大比叡の　はたけれども　[illegible]三三〇
杉の二木を見れば　三輪二九八三
透額の冠を着し　[illegible]
杉を御神木とも御神體とも崇め　三輪△二九八一
宿世
かけも離れぬ——とは　[illegible]一四五
直なる人は苦しみ　[illegible]九九
直なる道をあらためんと　[illegible]三七
すぐなる道を行く如く　玉井上歌一九七四
直に導く彌陀の教へ　[illegible]二一〇
直に治まる時世かな　住一五四〇

抄ひ網　棲一三九
拘ひては施し　[illegible]八二一
祐經　[illegible]一二一九
工藤一臈——　[illegible]二二四
祐經を射留めて　小袖一一三九
祐經を討つ程ならば　禪一六九三
祐經を今夜々討かけに討つ　夜三六三
資朝　[illegible]二〇〇三
資朝
壬生の大納言——　[illegible]二〇〇五
祐成　元シテ一〇七五・小袖シテ一一三五・夜ツレ三三五七
祐成
曾我の十郎——　元一〇七七・夜三三五九
祐成ともに勘當　小袖一一三四
祐成に郎等もなし　小袖一一三五
祐宗　禪ワキ一六八九
祐宗
伊東の九郎——　禪一六九五
好ける心にあくがれて　來一七三四
好ける道
飛花落葉の折々は——とて　闍寺一六一九
洲崎の鷺　鷺一三一九
洲崎の御堂　徧へ二三八一
朱雀院に仕へ奉る臣下　葵一五七

素盞嗚
日神月神蛭子——と申すは　[illegible]二四七
蛭子——は夜を進ぬる御神　[illegible]一七七二
素盞嗚現れ出て　[illegible]一七七五
素盞嗚の御再來衆生濟度の方便　[illegible]二〇六七
素盞嗚の神靈　[illegible]八八六
素盞嗚の神
伊弉諾の御子——　大蛇三五〇五
素盞嗚尊　[illegible]ツレ一七六七・大蛇ツレ三五〇三
素盞嗚の尊出雲の國に到り　[illegible]一〇六六
素盞嗚の尊に斬られし大蛇　[illegible]八八七
素盞嗚の尊の守り給へる神國　草子一一九八
素盞嗚の尊より三十一字に定め　俊成一四四四
すさみ參らせ　許吉へ二四一五
鈴
黄金の——を結びつけ　[illegible]九
颯々の——の聲　[illegible]八・[illegible]一二〇八
颯々の——の音　現一〇二一・住一五四二
篠懸
九會曼茶羅の柿の——　安宅九一
七寶の露を拂ひし——　葵一六五
旅の衣は——の　安宅八一・安達一〇七・攝一六四九
山伏の兜巾——沓の衣　谷一九四四
鎧にあらぬ——　大江五五六

篠懸[illegible]
篠懸の袖の朝霜起臥の　[illegible]
鈴鹿川[illegible]　[illegible]
鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず　[illegible]
鈴鹿路[illegible]　[illegible]一七六九
鈴鹿の惡魔を鎭め　[illegible]一六六八
鈴鹿の[illegible]　[illegible]一九九七
鈴鹿山[illegible]　[illegible]
薄
垣ほの——吹く風の聲をも立てず　[illegible]八四六
初花——露重み穗に出でがたき　[illegible]八六五
小野とはいはじ——生ひけり　[illegible]七六六
涼しき道
彌陀の國——ぞ賴もしき　[illegible]一五五七
涼しき道ならば唯心の淨土　春一四一四
涼しき道に引導し給へ　[illegible]九九〇
涼しき道に引かる　[illegible]八五二
すずしき道は賴もしや　[illegible]八四二
すずしめ
[illegible]を讀うて神慮を——　蟻二三
すずしめ給へ宮つこ達　高砂一八七一
すずしめの神樂　住一五四三
すずしめの聲も聞えず　蟻二一七
鈴之段　翁△一〇
涼みとる言の葉の　遊三一九七

涼み取るてふ絲の海に　江島五〇四
涼みとる裳裾を濕す折からに　賀七四三
鈴蟲、
松蟲——きりぎりすの鳴くや　蟬一六八一
勸め　安宅八九
雀
勸學院の——は蒙求を囀る　賴三三〇一
勸めに入りつつ　東岸二一七〇
鈴も颯々の舞の袂　松尾二八五一
硯をならしつつ筆を染め　關寺一六一九
裾野
富士の根や——に　富士山二六八六
裾野の櫻四方へぱつと散るかと　富士太二七〇七
裾を結びて肩にかけ　百二六七四
すだく
秋の野の草葉に——蟲までも　松蟲二八六四
簾貝　玉井△一九八一
筋なき事な宣ひそ　羅三三五〇
筋なき事を申し候　松山鏡二八七五
筋なき人のいひごと　調二一二四
筋なき拍子とも人や聞く　鳥三〇〇
捨つる身
宿定めなく——の　碇二五〇
捨つる身なれば恥ぢられず　鵜飼二九九
捨つる身になき伴の里　鉢二五四八
捨つるや現なるらん　卒一三五・土車二〇七〇
捨草
海士の——徒らに朽ちまさり行く　松風二八二七
捨子
父母さへに——となる　藍二三五
捨衣
世の篤身をば——　鳥三四二六
捨て妻のきぬぎぬなれば恨みもなし　藍二四〇
捨ててだにこの世の外はなきもの　西行一一七三
捨ててはや久しかりつる　道明道行一八二五
捨てても廻る世の中は　梅枝次第四三六
既に軍明日にきはまりぬ　通盛クセ二九〇七
捨てぬ命の身に添ひて　鸚一六
捨人に値遇を運ぶ　檜二六二六
捨人も花には何と隱れ家の　西行上歌一一七三
捨舟
身を——に羯鼓を打ち　鳥三三九六
捨小舟
母もわれらも——の　水無瀨二九二九
松のひま行く——　岩二九一
身は——恨みても　七騎一三〇八
捨小舟法の力を頼むなり　鵺三三八四
崇德上皇　松山天シテ二八八三
簀戸の竹垣ありし世の　半二五〇三
すねいお僧　鵜飼△三〇一・鵺△二三八一
諏訪(長野)
鹿島三島——熱田　白樂二四八〇
住吉鹿島——熱田　大社五八四
すは遠山寺の鐘の聲　通盛二八九七
諏訪の明神
鳥居の大明神信濃の——と　大社五七九
諏訪八幡も御知見あれ　籠三三九六
諏訪明神に祝ひたると申す　三輪△二九八一
すはや數添ふ時の鼓　西行一一七八
すはやそれぞと心づくしに　白樂二四七四
數百の遊び時を移す　熊坂九四二
須磨(兵庫)
淡路繪島——明石　雷三三二六
里離れ——の家居の習ひとて　絃一〇五一
左は——右は明石の　雷五一三
須磨明石のとかく三年の程もなく　安宅九九
〔須磨源氏〕　一四九一
住まで世に經る土車　土車次第二〇七二
住まぬ時には故鄕もなし　百二六七七
須磨の海士人は鹽木にも若木の櫻を　海一七三
須磨の海
家路もさぞな——　敦一二七
浦山かけて——　忠度一九〇七
須磨浦(兵庫)　絃所一〇四三・須所一四九一・忠度所一九〇三
知所三三二七・松風所二八二一

須磨の浦
　里の名問へば――　[illegible]五〇八
　生死流浪の――を出でて　源氏二〇三八
　關よりも花にとまるか――　須一四九六
　波ここもとや――　敦一三五・知二二四七・松風二八一六
　都の遠き――思はぬ敵に　通盛二九〇一
　わくらはに問ふ人あらば――に　忠度一九〇八
　松風二八三一
　侘ぶと答へてこの――の汐　絃一〇四九
須磨の浦海士の磯屋に宿りして　知二二四四
須磨の浦海士の焼くたる鹽　竹雪一八八五
須磨の浦源氏の住み所　忠度一九一七
須磨の浦關の戸ともに　阿二九
須磨の浦に旅寢して眺めやる　俊成一四四四
須磨の浦野山の月に旅寢して　須待名一五〇一
須磨の浦又は駿河の海過ぎて　櫻一三三〇
須磨の浦藻鹽誰とも知られなば　敦上歌一三七
須磨の浦わもいつしかに　住一五四四
須磨の御願はたしに　住一五四四
須磨の關守
　寢覺も――　敦一三三
須磨の關屋の旅寢かな　忠度一九一五
須磨の卷の春かとよ　絃一〇五二
須磨の山櫻若木は散りぬ　知二二五一
須磨の山路や一の谷　生二七一
須磨の若木の櫻もまだ咲きかぬる　[illegible]五一二
住みあかざりし宮のうち　[illegible]二〇八七
住みうかれたる古里の　[illegible]二五五五
墨衣思ひ立てどもさすが世を　高野六〇五
墨染
　心は空に――の　[illegible]一五五三
　この春ばかり――に咲け　墨一五〇七
　この春よりは――に咲け　墨一五一三
〔墨染櫻〕　一五〇五
墨染櫻
　深草野邊の――　墨一五一一
墨染櫻の精　墨シテ一五〇五
墨染の衣はすてふ日も出でて　雪道行三一八六
墨染の下に忍辱の鎧　禪一六九六
〔隅田川〕　一五一七
隅田川（東京）　隅一五二〇
　名に負ふ――
　武藏の國と下總の中にある――　隅一五一三
隅田川岸（東京）　隅所一五一七
隅田川の渡守　隅一五一九
墨つき
　文字の――遊ひたり　草子一一九二
住み馴れし大原の里を立ち出でて　三山道行二九一三
住み馴れし國を雲路のあとに見て　邯道行七七八
住み馴れし嵯峨野の奧を　雨道行三三九
住み馴れし松浦の里を立ち出でて　[illegible]四八九
住み馴れし都の空は[illegible]にて　[illegible]
澄み濁るをば神ぞ知るらん　[illegible]
すみれたき事を聞きたから　[illegible]一八七
住の江（大阪）　[illegible]九
住の江
　こや――の浦傳ひ　[illegible]八五五
　高砂――の松に相生の名あり　高砂一八六三
　松原見えし遠里のここ――や　[illegible]
　和歌を守りて――や　[illegible]七
住の江の里　梅枝四七
住の江やのどけき波の淺香潟　[illegible]行九七七
墨の衣の碓氷川　[illegible]三五四八
住み果てぬこの世は假の宿　[illegible]上歌七四一
住吉（大阪）　岩船一八五・雨月三一七・梅枝四二五・住吉一五三七　高砂所一八五七
住吉
　出雲――玉津島人丸赤人の　草子一一六六
　長居もめでたき――の岸　[illegible]三九四
　晦日にとりわきて――一所は影向　大[illegible]五七九
　われ見ても久しくなりぬ――の　住一五四三
　高砂一八七一
住吉に參詣申し　[illegible]九七七
住吉玉津島に　[illegible]一四一・嫗三一五
住吉と申すは……延喜の御事　高砂一八六四

住吉にも富士と申す伶人　梅枝四四〇
住吉の市のちまたに出づる　岩二八七
住吉の浦に始めて濱の市を立て　岩二八七
住吉の浦より遠の淡路島　住一五四三
住吉の神
　西の海あをきが原の波間よりあらはれ
　出てし――　岩二九〇・雨三三七・白樂二四八〇
住吉の神主菊園の何某　住一五三八
住吉の岸山　飛鳥七三三
住吉の岸に生ふてふ草ならん　住一五四六
住吉の岸に生ふてふ花なれば　梅枝四四六
住吉の久しき松を洗ひては　草子一一九五
住吉の松こそ見ゆれ　絃一〇四八
住吉松の精　高砂シテ一八五七
住吉の松の隙より眺むれば　梅枝四四六・富士太二七〇一
　弱ワカ三三三五
住吉の松の緑の　岩二九二
住吉明神　高砂シテ一八五七・白樂シテ二四六九
住吉の明神に參詣仕り　雨三三九
住吉はものふりたり　源氏△一〇三三
【住吉詣】　一五三七
住吉より富士と申す樂人　富士太二六九九
菫
　春の野に――摘みにと來し人の　求三〇六七
住みわびつわが身捨ててん津の國の　求三〇六九
すむ水の春にも秋や通ふらし　善一五五九
住むもかひなき池水の　梅枝上歌四四一
澄むも濁るも同じ江の　賀七三八
皇大神の御神言　内三七七
皇大神の御心に叶はんと　内三七四
住めば所による　同二
皇孫
　天照大神――を蘆原の中つ國の　水無月二九四二
すめらぎの畏き御代の道廣く　賀三三八
天皇の畏き御代を守る　右三四九
すめらぎのその御心は普くて　西王上歌一五七一
すめらぎの御代久に　志一三九八
すめらぎの萬代いつと限らまし　金八七五
摺衣
　春日野の若紫の――　小鹽三四六七
　忍ぶの――の　女三四九三
　遠山伏の――　葵上二六一四
磨針太郎兄弟は面討には　熊坂九四一
磨針太郎兄弟は火振の親方として　烏三四三四
駿河の海
　須磨の浦又は――過ぎて　櫻一二三〇
駿河の次郎　安宅八二
駿河の富士
　神さびて高く貴き――　富士山二六九〇
駿河舞
　東遊の――この時や始めたる　月四九[illegible]
菫
　黄金の――現れて　石一三八〇
隨一
　通盛もその――たりしが　通盛二九〇七
瑞雲
　異香薫じて――たなびき　嵐二一〇
隨緣
　法性――の月の影　高野六[illegible]二
隨緣眞如の波　江口四八六
隨緣眞如を顯せり　現一〇二四
水干は世を秋の野の花盡し　二人七一八
隨喜
　一念――の信心なれば　巴二五二四
　聞法――のその爲には一滴も　身九五[illegible]
水牛
　大威德の乘り給ふ――の角に　[illegible]二一六八
隨喜渴仰様々に　輪三七八
隨喜功德品　通盛二九〇〇
　五十展轉の――
隨喜せり　唐一八一七
隨喜の涙眼を浮かみ　大會一七八六
醉狂
　一つはまた――もまじると　大[illegible]三一五
水光平らかなり　白[illegible]一四六五

水火の責めに詰められて　長三〇七四
水火青雷　江島四九四
翠翹金雀とりどりに　皐九九四
瑞験
　不思議の——あらたなれば　田一九九八
水金二膏の重精に顯る　歌二五八
水晶
　戸には——を連ね　闇寺一六一八
水晶の數珠を爪ぐり　盛三一〇七
水晶の玉の内に御影を映し　内三七六
垂跡
　國土を——の方便　賀七四三
　この神は——年久し　鶴祭四一七
　神所——多けれど　鶴祭四一四
垂跡示現して　現一〇三三
隨業生性所受不同　定三一一四
隨身　住子方一五三七
水神　大瓶狂言一七五九
水神
　悪龍の——となつて　藤戸二七五一
　潯陽の江に住む——　大瓶△一七六三
隨身
　これを物見に御——　繪三四四八
翠黛
　綠羅の垣——の山　大原五四一

翠黛紅顏生まれながらの相にして　長二一六四一
水中の遊魚は釣針と疑ふ　藏三三三四
翠帳紅閨に枕並ぶる床の上　東クセ二六〇六
翠帳紅閨に枕を並べ　定三二一四
翠帳紅閨に枕をならべし妹背も　江口四八五
翠帳紅閨の纏ひ昔を忘れず　花五一七
垂仁天皇の御宇　鶴祭四一七
垂仁天皇の御宇まで　江島四九八
垂仁天皇の皇女倭姫の命　御二九六三
垂仁の御宇にはじめて　第一七七三
水波の難を遁れ萬民富める世を　石一三七八
水波の隔て
　神といひ佛といひ唯これ——　誓一五六三
　　松尾二八四六・養三一三九
　神佛——なり　江島五〇四
水波の隔てと聞く時は佛も神も　大佛一七五三
翠屏
　洞門開けて——現れ　江島四九八
衰鬢
　颯々たる涼風と——一時に　闇寺一六二一
瑞諷
　玉文の——　朝三六八
水邊の草といふ題を賜はり　草子一一八三
睡眠
　少し——のうちにあらたなる靈夢を　生三六六
　　盛三一〇三・三井二九九一

雖行かず虞奈何すべき　錦二一六
翠柳の風を含む形　富△二六四一
水流花落ちて春とこしなへにあり　雪一一六
末暗からぬ燈火の永き闇路を　寄三九五五
季武　大江リキツレ五五三・羅リキツレ三三四五
季武
　貞光——綱公時　大江五五六・羅三三四七
末摘花の臺に坐せば　雲裏二〇八
末の露本の雫もよしやよし　盛三二六
末の松山風荒れて　一七一
末の松山千代までと　砧八三八
末の松山波越えて歸らざりし　六〇
末の松山はるばると　雪大第二八六
末の闇路をはるけずは　芭一五六
末の世に迷ふわれ等が爲　當一八四一
末葉
　おのが波に同じ——のしをれけり　藤二七三五
末葉の露の消え易きもとの雫の世語　夕二一八
末引きしをる浦里の　六八九
末も東の旅衣　隅次第一五一九・烏次第三四一五

せ

精
相生の松の——夫婦と現じ　高砂一八六七
石に——あり水に音あり　誓一六四三
梅の——　梅四三〇
梅の春年々の花の——　難二三三四
うろくづの——　合△六八六
海草の——　和△三〇三五
鮫人といへる魚の——　合六八五
杜若の——　杜六二四
朽木の柳の——　遊三三〇一
花木の——か　西行一一七六
この木(楓)の——　六浦三〇一二
木の花の——　梅四三〇
木葉の——　大蛇△三五一〇
難波の梅の——　難△二三三五
花の——　墨一五二一・藤二七二七
非情の——芭蕉の女と現れ　芭二五四〇
雪の——　雪三一八八
聖
狂もよく念へば——　賀茂物七五一

制戒
謡ひ狂はぬ御——　高野六一四
女人の参るまじきとの御——　柏六五九
青海波とは青海の波立て　實二三三九
青海波とはこれやらん　高砂一八七[illegible]
青海波の遊び舞楽に引かれて　須一五〇一
青海波の波返し　梅枝四四六
精好
袴は——　二人二七一八
笙歌の花降りて　石一三七九
笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上　實一二四七・[illegible]一五六三
西岸居士　東岸二一六八
清閑寺(京都)
歌の中山——　田一九九一・融二三二八
青巌の形を削りなせる　山三一七七
清光
暗濤月を埋んで——なし　通盛二八九九
今宵一輪満てり——何れの所に　三井二九九九
清光を見ざれば時の移るをも　景六三四
誓願
佛陀の御——　圓二二二七
〔誓願寺〕　一五四九
誓願寺(京都)　誓願一五四九
誓願寺
御本尊も上人も唯同じ御——ぞ　誓一五五七

誓願寺と打ちたる額を除け　誓一五五八
誓願寺へ日夜朝暮御参詣　東北△二一九六
せいくを萬天の間に飛ばし　江島四九五
星月神燈白けわたる　内三七九
精鋭
雨は矢先土は——　清八五四
精魂
胡蝶の——　胡二一五一
中将姫の——　當一八五二
土蜘蛛の——　土蜘二〇六五
誓言の御罰を當り　正一三八四
星霜年ふりたり　遊三一九六
星霜二千二百餘回　身一九五〇
青山
絃上——獅子丸　絃一〇五七
青山数片の雲を煎ず　一角二七九
青山と申す御琵琶　經二〇八五
清次
關の——と申す者他郷の者と口論し　[illegible]三八六
西施
唐土の——が申しけるも　[illegible]一六七六
清次の妻　[illegible]二二八五
せいしやう
漢帝——を用ゐずは覇陵原の秋の月　江島四九二
聖人

かほとの——なりしだに　三井二〇〇〇
賢人も山より出で——も君に仕ふ　岩二八九
聖人に夢なし　清八四七
聖人の諺　綸三四四四
成人の子をば先立てて　春栄一四一二
聖人人に見えず　唐八〇〇
聖人御代にまた出て　鵜三三九
清水寺(キヨミズをも見よ)　田一九八八
清水寺の鐘の聲　熊野クセ三三五一
清水寺の地主の花　西行二一七八
清水寺へ參らばや　東岸二二六七
清宵
永夜の——何のなすところぞや　弱三三五
青若袖を埋む有様　遊三一九六
青苔衣をおびて巖の肩にかかり　白楽二四七五
制多伽
一矜羯羅二——　檀二〇二五・野守二四三三
矜迦羅——十二天　善界一六〇六
矜羯羅——を始め　調二二一九
西岫に入日の未だ近ければ　融二二三四
青鳥
三足の——御殿の上を飛び廻り　東方二二八一
西都
今日は——に恥を濤むる屍たり　道明一八三三
今日は——に蘇さん　藍二四五

城南の離宮に赴き　忠度一九〇六・箙ク二一四九
勢の上る　鉄二三五六四
征馬
行人——の數々　蝉一六七八
清風
動く時には——をなし　敦下二四四五
明月——唯動靜の内　敦下二四四五
生別離
悲しみの至りて悲しきは——の心　谷一九四八
西北に風靜かなり　巴九六三・調三二一〇
西北に風靜かにて　志一二九八
西北に雲起りて東南に來る雨の脚　梅枝上歌四三九
西北に雲靜かならず　催坂九四〇
西北の風も吹き治つて　寶二四〇二
西北の雪霜に責められ　安宅九九
晴明　鐵ワキ七〇三
青陽の始め色香妙なる梅が枝の　六浦三〇二六
青陽の春になれば　鶴二〇九七
青陽の春になれば所々の花見の　満一二一七
青陽の春の朝には　放下クセ二四四八
情欲分つ事なし　蝶三三三
精力を盡し　譬一二六三
清涼山(支那)　石橋一三七三
清涼山
五臺山——　國九〇一

文殊の淨土——　石一三七六
清涼山に參り　石一三七五
清涼寺(京都)
嵯峨——より出でたる僧　朝三三五七
清涼殿に御出なり　雷一六三九
清涼殿に雷鳴る　雷一四三
清涼殿の御會　草子二二八六
清涼殿や長階の出御　代一四八四
青龍寺(支那)
育王山——般若臺に至るまで　[illegible]一五九七
精靈
鐘樋大臣の——　皇九九七
鐘馗の——　鐘一四五七
蜘蛛の——千筋の絲を繰りため　土蜘一〇六五
劔の——嵐となつて　草薙八八八・小鍛一二一八
夢の——妙幢菩薩　巴九八八
西樓に月落ちて花の間も　籠一二九三
世路に誇る　朝三二七〇
[西王母]　一五六七
西王母　西王母シテ一五六七・東方二二七七
西王母この君へ參禮申すべし　東方二二八一
西王母と聞えしは：無量壽佛の　東方二二八三
西王母の園の桃か　西王一五七一
西王母の分身　西王一五七三
清和天皇の後胤　殺九六一

勢を七手に別ちつつ　木曾八一八
燒香
　持佛堂に立ち出で——せばや　松山鏡二八七一
小角（役の行者參照）　葛へ六九九
樵歌牧笛
　山路に日暮れぬ——の聲　志一二九四・石一三七五
樵歌牧笛とて草刈の笛木樵の歌は　敦一二八
樵歌野田の月　項五九七
小機の衆生の徭なきを　春日六七四
〔昭君〕　一五七七
昭君（王昭君參照）　昭一五七九
昭君胡國へ遷されし時この柳を植ゑ　昭一五八四
せうけいと申す士卒　富士山二六八五
小絃は切々と私語に異ならす　經二〇九〇
簫颯
　風枝——として秋の聲より凄し　龍虎三三六九
笑止
　あら——や未だ火が消えず　櫃二〇二一
　あら——やこの御文のやうも　熊野三三四二
　あら——や俄かに日暮れ　蟻二一六
　あら——や俄かに村雨の降り　梅枝四三七
　あら——や俄かに山嵐のして　櫻一三三四
　あら——や俄かに雪の降り來り　鵜祭四一三
　あら——や日の暮れて候　安達一〇八
　あら——や又雪の降り來り　葛六九一
　あら——やまた雪の降り來りて　鉢二五四九
　ここに——が候　自一三三六
瀟湘（支那）
　雨は又——の夜の　雨三三三
少將
　四位の——　通小七六九
　丹波の——成經　俊寬一四二三
　深草の——　通小七六九
　深草の——がなれる果て　土車二〇七〇
　深草の四位の——　卒一七二八
　吉田の——　班二六〇〇
瀟湘の夜の雨頻りに降つて　蟻二一六
少人
　希代なる——かな　橋△二五一八
　鞍馬の——牛若丸　烏三四二五
少人の御事　橋二五一九
小水（支那）　芭所二五二九
小水
　楚國の傍——と申す所　芭二五三〇
憔悴
　顏ばせは——と衰へ　鸚一六
蕭然として坐したりしに　盛三一〇七
小船一艘浮かめり見れば漁翁なり　白樂二四七三
小船に棹さして五湖の煙濤を　船辨二七七七
簫笛琴箜篌孤雲の御聲　富士山二六九四
簫笛琴箜篌孤雲の外に充ち滿ち　羽一四九三
小天狗とも來り　鞍九五九
小天狗を引き連れて　松山天二八九二
小童思ひの外峯入の姿　谷一九四四
せうとの王依姫　玉井一九七八
鈔に又申さく　東岸二一七〇
焦熱大焦熱なりとも　善知三八八
焦熱大焦熱の焰煙　同三九
焦熱大焦熱の焰に咽び　歌三六五
焦熱大焦熱の焰をば終に滅す事　東岸二一七三
少年
　昨日は——今日は白頭の雪　龍虎三三六三
　古墳多くは——の人　求三〇七一
　花を踏んでは同じく惜しむ——の春　西行二一七九・俊成一四四六
昭明王に仕へ奉る　富士山二六八五
照覽（知見をも見よ）
　諸天氏の神も正に——あるべき　雲雀二六四九
　明王の——計り難う　安宅九一
　弓矢八幡氏の神も御——あれ　櫃二〇一三
小龍
　黄金の箱に——を入れ　大十五八四
小龍を引き連れて　出三三四一
せがい
　船の——　七騎一三一〇

〔善界〕
世界ともならざりし前を伊弉諾 一五九五
善界坊 善一四七
善界坊 善界シテ一五九五
大唐の天狗の首領―― 善界一五九七
世界わたつみ隔てなくて 和三〇三一
石割地獄の苦しみは 歌三六五
石火（イシノヒをも見よ）
電光――の光の陰 草蓮八八一
石公（黄石公をも見よ） 鞍九六一
石公の粧ひ 張二〇五〇
石魂
那須野の殺生石その――にて候 殺一六四一
石根に雲起つて雨はそうようを打つ 朱四一〇
夕日
笙笛琴箜篌――の雲に聞え 石一三七九
赤子の身より哀憐の情によりこ 内三七六
石上に春雷をなす 三笑一三八六
石上に塵なく 大會一七八〇
寂々たる瓊門あり 老五二七
積善の餘慶家々に普く 松蟲二八六五
積善の餘慶限りなく 國九〇四
積善の餘慶殊に滿ち 放生二四五七
石塔
あの――は和泉式部の御墓と 誓一五五八

石塔の石の火の光とともに失せ 誓一五五九
石塔を見れば星霜古りたるに 定二二〇八
關路の駒の隙もなく 鐘二二一〇
關路の鳥も聲々に 松風二八三八
關路の夕烏 蟬一六八六
關寺（滋賀） 鸚所一三・關寺所一六〇九
〔關寺小町〕 一六〇九
關寺の鐘の聲諸行無常と聞く 關寺一六二九
關寺住僧 關寺ワキ一六〇九
關寺邊小野の小町が方 鸚一五
關戸（大阪）
夜の――の明暮に 蟻二一五
關戸の宿は名のみして 忠度一九〇六・藤榮二一四九
關戸の宿も移り來ぬ 住一五四〇
關戸の宿も名のみにて 梅四二五
關のこなたと思ひしに後になるや 蟬一六八一
關のこなたにと詠みたれば 融二二二七
關のこなたの朝霞 源氏一〇二九
關の清水（滋賀）
逢坂の――に影見えて 蟬一六八一
逢坂の――に影見ゆる 蟻三一
關の清次と申す者他郷の者と口論し 籠太鼓八六
關の戸
旅の――明け暮れて 東北二一〇五
四方に道ある――の 草二二二九

關の戸さして秋津洲や [illegible]
關の戸さして逢坂の [illegible]
關の戸ささで通はん 岩二八六・老五三三
關の戸さしてこれぞこの 内三七三
關の戸さして千里まで 殺三三二九
關の戸ざし
逢坂の――も心して 熊野三三五四
逢坂山の――の藁屋の 蟬一六七八
關の戸ざしもささざりき 弓三三二五
關の人々肝を消し 安宅九三
寂寞（ジャクマクをも見よ） 楊三二一九
寂寞たる御眼の内に 關原一六二九
關原の山の岩角踏みたらし 一六二五
〔關原與市〕 關原ツレ一六二五
關原與市 關原一六二七
關原與市が美濃の國中川の畔を 住一五四四
關吹き越えて行く程に 松風二八二六
關吹き越ゆると詠め給ふ 老五二七
夕梵
晨鐘――の響絶ゆることなし 七騎一三一〇
赤面したるばかりなり 卒一七二九
關守 松山鏡二八七一
通ひ路の――はありとも
月日の道に――なければ 拳一七三六
人知れぬわが通ひ路の――は

施行
　天王寺にて一七日——を引き　弱三三一七
夕陽のざんせい新に窓を穿つて去る　牛二五〇三
關よりも花にとまるか須磨の浦　須上歌一四九六
石靈
　汝元來殺生石問ふ——　殺一六四三
積礫に習つて玉淵を窺はざるは　咸七九八・天二一三七
世間の幻相を觀するに　柏六六一
是三無差別　柏六六二
世上に隱れなければ申すなり　羅三三五〇
世上に名を得し遊女ありしに　佛二七九二
世上の有様
　人樂しみ人愁ふこれ皆——　熊野三三四七
世上の聞え如何なるぞ　吉靜三三八四
世上萬德の妙花を開く事　山三一七三
是生滅法
　逢坂の山風の——理をも得ば　關寺一六一九
　後夜の鐘を撞く時は——と響く　三井三〇〇〇
世々生涯苦しみの海に浮き沈み　春榮一四一三
世々の絲り
　來世猶來世更に——を　江口四八四
せせらぎ
　小鮎さばしる——に　鵜飼三〇六
世尊
　大聖——となり給ふ　東方二一八二
世尊の教法は五時八教に配立し　現一〇二二
瀬田(滋賀)
　兼平——より參り合ひ　兼七二六
勢田の長橋(滋賀)　鸚一八
勢田の長橋うち過ぎて　熊坂九三三
勢田の長橋うち渡り　朝三三五七・盛三〇九七・烏三四一七
勢田の長橋踏み鳴らし　綸三四四三
勢田の橋　田一九九八
　宇治——をも引き　正一三六二
節分にこの所に繪馬を掛く　綸三四四三
節會
　四季の——の事始め　鶴二〇九七
　豐の明の——にも逢はでぞ　卒一七二九
節會の儀式に從ひて　嵐七九八
殺害の科を遁れ得ぬ　籠三三九〇
折檻
　折々の御——にてこそ候へ　仲三三一一
せつ鬼
　冥途の——　綾一九八
殺生禁斷の所　藍二三三七・鵜飼三〇四
說經者
　自然居士と申す——　自一三三四
雪山
　富士は——なれば　富士山二六八九
雪山の薪　鉢二五五七
雪山の鳥啼いて思ひを傷ましむ　歌三六三
雪山の道　車九七二
攝し
　けしからず——て候　鵜飼三〇三
殺生
　拙かりける——　阿三〇
　科の中の——　鵜飼三〇三
　方便の——だに菩薩の萬行に　放生二四五九
　方便の——は菩薩の六度に優れり　熊坂九三七
殺生の家に生まれ　阿三〇
殺生禁斷と相觸れ　藤戸二七四八
〔殺生石〕　一六三三
殺生石
　汝元來——問ふ石靈　殺一六四三
　那須野の——とて人間は申すに　殺一六三七
殺生石魂　殺一六三三
殺生の業不審にこそ　放生二四九八
殺生偷盜邪婬は身に於て作る罪　東岸一七一
殺生を營み　鵜飼三〇一
攝取せよ　殺一六四三
攝取の光明
　一念稱名の聲のうちには——　實二三四八
　一念稱名の聲のうちには——を待ち　柏六六一
　一念の窓の前に——を期し　大原五四五

攝取の願望おのおの成就圓滿の　松尾六八四四
攝取不捨　富一八五三
攝取不捨
　念佛衆生——　敦一三〇・泉渡一九一八・三山二九二〇
攝取不捨の誓ひ　寶一三四六
切々
　小袖は——として私語に異ならず　經二〇九〇
　松吹く風は——として　昔二九一
〔攝待〕　一六四七
攝待
　山伏——　攝一六五〇
雪中に山路なし　車九六九
刹那が間に喜見城の　大會上歌一七八六
刹那に叶へ申すべし　大會一七八一
刹那に離散す
　須臾に生滅し——　歌三六四
切なりしは　鉢二五六九
切なるは主從　雷三三三六
殺の報殺の緣　春榮一四一三
說法
　鷲峯の——雙林の入滅　春日六七五
說法一座演べんとて　自一三二七
說法には道理を演べ給ふ　自一三三四
說法の後　生二六五
說法は百日千日聞し召されても　自一三三三

節分（セチブンを見よ）
利利も首陀も變らざりけり　鍋木二三五三
瀨戸三島（神奈川）　敦下四三五
瀨戸の三島へ參らばやと　敦下三四四
瀨尾太郎　祇ワキ八五七
世法
　佛法あれば——あり　車九六九・舍一三六九・山三三八一
是非知らぬ身の行方　鎌腹九三七
是非に及ばず　鵜飼△三〇七
是非の言葉もあらばこそ　元一〇八三
是非をいはせぬ　正一三六〇
是非をばいかではかるべき　卍七八一
是非をば申さず　谷一九四七
是非を辨へず　烏三四一八
瀨踏
　思へば三途の——なり　藤戸二七四九
蟬
　秋の——の吟の聲　蟻三二一
蟬のもとに卷き隱したる　笛二五二六
瀨見の小川（京都）
　石川や——の清ければ　賀七三八
〔蟬丸〕　一六七一
蟬丸
　延喜第四の皇子——の宮　蟬一六七三
　かの——の古　望三〇四九

蟬丸宮　蟬一六七一
蟬丸は逢坂や藁屋にて琵琶を彈き　經二二五一
蟬折　西三九
責一人に度重なる　[illegible]
攻鼓
　打てや打てやと——　富士太二七三六
　敵——をうちかけて火箭を放ち　草薙八六七
　小鍛二二八
責め鼓と寄拍子　[illegible]九八
せめて今一日　小鍛一一三
せめてやしばし磨おと　小督上歌一〇二
芹川（京都）
　嵯峨の山御幸絶えにし——の　松尾六八四三
芹生の里の細道　大原五四五
善
　惡といふも——なり　章一七四
善惡の影響の如し　放生四四七
善惡の二道ここに極まつて　自一三二一
善惡の二つを辨へんため　自一三三一
善惡二つは兩輪の如し　車九六九
善惡不二　山三三七七
善惡又不二　舍一三六九
仙家
　謬つて——に入つて半日の客　木賊三三三三
　烏三三〇四
菊かき分けて山路の——に　菊八一三

流盃の盃と申すことは——の盃　邯七八四
天の濃漿とはこれ——の酒の名　邯七八四
先考先妣諸共に同じ臺に生まれん　自一三二九
千行の悲涙袂を朽たし　景六四〇
仙樂
　聞きも馴れざる——を奏せば　枕二八一九
仙家に入りし身の七世の孫に逢ふ　仲二三二
仙家に入りし身の半日の程に　七騎一三三一
仙家には紫雪紅雪とて藥の雪あり　氷二六五六
仙家の藥の水もかくやと　養三一三二
前鬼
　大峯の——が一黨　鞍九五九
仙宮
　魂は——に至り　楊三一二
　本の——に歸りぬ　花筐二五九二
仙境
　さながら——かと見えて　富士山二六八五
　七星常住の——　鵜祭四一七
　人間の妙奇——の祕跡　江島四九三
仙鄕といつぱ人間に交はらず　東方二八一
仙境には松の葉を好き　一角二八一
仙境にや入りぬらん　佐二二七〇
仙境に分け入り　一角二七七
詮議を加ふる衆徒もあり　吉靜三二八六
千金
春宵一刻値——　（その項を見よ）
　春の夜の一時の——をなす　岩二九一
　春の夜の一時を——にかへじ　雲林四六一
千金にも代へじとは　田一九九二
千金も何ならず子程の寶よもあらじ　唐一八一六
千金を延べたる御弓なりとも　八島三一六〇
善光寺（長野）　柏所六四九・土車所二〇六九
善光寺の住僧　柏六九六
善光寺の如來に一七日參籠申し　道明一八二五
善光寺へ御參りありたき由　山三一六七
善光寺への望みにて　土車二〇七〇
善光寺へ參らばやと　藤二七二四
千顆萬顆の玉衣の　岩二九一
千顆萬顆の玉よりも　雲林四六一
千顆萬顆の御寶の數　邯七八三
禪觀の窓に向ひ　大會一七八一
淺間（靜岡）
　伊豆箱根富士——　正一三六四
　富士——の唯今の影向　富士山二六九四
淺間大菩薩　富士山二六九二
嬋娟たりし兩鬢も膚にかしげて　卒一七二六
嬋娟の黑髮は亂れて　蘆二四三
嬋娟の鬢　采四〇三
前業より猶恥かしうこそ　千一七〇六
千戶萬戶の旗のあし　邯七八三
千戶萬戶の旗を靡かし　西王一五七〇
前後を忘じ
　餘りの大雪にて——て　鉢一五五一
　今の吹雪に——て　葛六九二
　乘りたる駒さへ臥して——　蟬二二七
　俄かに日の暮れ——　山三二七一
　日もやうやう暮れかかり——　一角二七九
　道に踏み迷ひ——　大江五六〇
前後を忘じて控へ給へり　巴二二八五
前後を忘ずるばかりなり　船辨二七八四
前後をわきまへず　蟻二二六
善根
　きしやうの——のその爲に　敦生二四九九
千歲　翁ツレ一
千載集に一首の歌を　俊成一四四二
千載集の歌の品には　忠度一九一五
善哉善哉孝行切なる心を感ずるぞ　谷一九五二
善哉善哉と感じ給へば　白鬚一四七五
善哉なれや　當一三八二
千歲舞　翁七
禪師
　九上の——　小袖一一三二・禪一六九四
　慧遠——　三笑一六八四
先師自然居士の　東岸二一六八

〔禪師曾我〕　一六八九
選子内親王　源氏☐二〇二
禪師の御事よなう　禪一六九三
宣旨の御使　小督一二〇三
千秋（センシウ・チトセをも見よ）
　君を祝ふ――の鶴が岡の　盛三一一〇
　十八公の榮ひ――の綠をなし　高砂一八六六
　萬歲――と舞ひ納め　石一三八〇
　われらも――さむらはう　翁六
千秋の秋津洲　淺一五三
千秋の松が枝には萬歲の綠常磐に　松尾一八五〇
千秋萬歲君千代までと　大瓶一七六五
千秋萬歲の千箱の玉を奉る　難二三三三
千秋萬歲の猶悅びの盃の　春榮一四一七
千秋萬歲の寶の珠　合六八八
千秋萬歲の春を祝ふぞと　盛三一〇八
千秋萬歲の舞の袖　春榮一四一八
千秋萬歲の歡びの舞　翁九
千秋萬德の春を得て　佐一二七二
千秋樂
　君の御命――と打たうよ　富士太二七〇七
千秋樂には民を養ひ　道明一八三七
千秋樂は民を撫て　高砂一八七三
前生の業
　靈鬼泣く泣く――を恨む　山三一七七
前生又前生曾て生々の前を知らず　江口四八三
撰者は橋の諸兄　草子二一八九
〔千手〕　一六九九
千手
　枯れてただに花咲く――の　千一七二一
千手觀音
　濃本の――　東一〇二六
千手觀音の光を放つて　田二〇〇〇
〔千手重衡〕　千異稱一六九九
千手陀羅尼を滿て給へば　雷一四四三
千手の陀羅尼　道成一八〇三・□三二八
千手の誓ひには枯れたる木にも　花一〇〇六
千手前　千シテ一六九九
千手の前と申すは手越の長が女　千一七〇一
千手の御手のとりどり樣々の誓ひ　田一九九一
善所
　魂は――に赴けども魄は修羅道　朝三七三
善心
　餘りの惡念は却つて――となる　殺一六四一
　佛體眞如の――となさん　殺一六四三
善神
　諸天――となつて虛空に飛行し　賀七四三
善神は一切の福を授け　江島四九七
善心を思ひ龍の口の明神　江島四九九
千聲萬聲の憂きを人に知らせばや　砧八二四
千聲萬聲の諸に障らして響つ　山三一八三
前世に誰をか厭ひけん　善一三一八
前世の戒行いみじくて今生千とは　□一六七四
前世の戒行拙き故　姨一六七六・鉢二五五二
前世のかたらひの宿緣　□二三六
前世の事と思ひ　□□七四
前世の宿緣離れやらざる故　□二六八
前世の契り淺からぬ　□二〇八七
前世の報い　千一七〇六
冉々として雲霄を出づ　□□九九
闡提
　二乘――惡人女人おしなめて　現一〇二五
　敗種の二乘――も皆々同じ悟り　現一〇二七
　破戒――をも洩らさず　土車一〇七八
闡提救世の方便あらたに　熊野一四七
先代の昔はそも知らず　草子一一八九
前代未聞の曲事　藤榮三一六
先達　谷一九四五
先達
　辨慶は――の姿となり　安宅八一
旋陀夫人　一角ツレ一二七五
旋陀夫人とて並びなき美人　一角一二七七
旋陀摩訶瞻遮那　葛一六七・通盛一八〇三
旋茶利摩登枳　安宅一一九・鵜雲三六二〇
山陰道より道に踏み迷ひ　大江五六〇

栴檀沈瑞香　舎一三九二
栴檀の蔭に寄生木　源氏一〇三九
栴檀は二葉より香ばし　蟬一六八四
栴檀は二葉よりこそ匂ふなれ　播一六五九
船中にては申さぬ事にて候
　さやうの事をば――　船辨二七八二
塼中の砂淸淺たり　江島四九八
禪定
　立山――　善知三八三
　白山――　佛二七八八
禪定無漏の仙人は　江島四九八
仙女
　くわするこくの――　花筐二五九二
　桃葉といひし人――と契り　昭一五八六
　齡を延ぶる――となる　草薙八八四
　王母にかしづく――　枕二八一九
仙女やらん　佐一二七一
千丈の峯
　塵土より起つて天雲かかる――　山三一七九
船賃
　さて――は候　項五九〇
　讀誦をわれらが――　碇二五二
船賃なくて渡らんとは　碇二五二
先帝　大原五三六
先途
　ここを――と見たる　夜三七三
　その際の――をも見屆けざれば　春榮一四〇七
善途
　涙玉を貫く思ひを――に黐し　安宅九三
船頭　俊七一九・自一三三八・鴉一五二〇
仙洞
　百家――の交はり　鸚一八
旋頭
　長歌短歌――混本の類　蟻二三一
旋頭歌　鸚二一
仙洞の紅葉の秋の夜　葵一六一
仙德
　露の養ひに――を受け　養三一三六
前途程遠し思ひを雁山の夕の　俊成一四四一
泉涌寺（京都）　舎所一三八三
泉涌寺
　東山――　舎一三八五
仙人　東方狂言三一七七・龍虎狂言三三五九
仙人
　樣々に難行し――に仕へ　大原五三九
　禪定無漏の――は　江島四九八
　量りなき命の――　東方二一八二
千人斬り　橋△二五一二
仙人神通を以て諸龍を　一角二七七
仙人に仕へし雪山の薪　鉢二五五七
仙人の謂れ　東方二一八一
善人の敵を招け
　惡人の友を振り捨てて――　敦一三四
仙人の衣　作一二七〇
仙人の告げて曰く　松山鏡二八七四
千年（チトセ・センシウをも見よ）
　丹頂の鶴も――の齡を君に授け　鶴二〇九九
　北洲の――終に朽ちぬ　楊三一三三
千年の鶴は萬歲樂と謠うたり　箙八
千年の綠手に滿てり　高砂一八七二
せんの字
　船の――を公にすすむと　自一三四一・藤榮二一五八
仙の法を行ひ給ふ御方　掃△七七七
仙の法を學んで　三笑一二八七
千の矢先雨霰と降りかかつて　田二〇〇〇
前坊
　桐壺の帝の御弟――と申し作り　野宮二四一三
禪法
　いづれの祖師の――を御傳へ　放下二四四六
懺法
　亡者の貴み給ひし觀音――　朝三三六七
禪法に好きたる由　放下二四一九
先非
　聞くより人々――を悔い　吉部三三八四
先妣

先考――諸共に同じ當に生まれ　自[illegible]三九
千疋の卷絹を三熊野に納め申せ　卷三八〇三
先非を悔ゆ　鵜飼三〇二
先非を悔ゆる父が心　雲雀三六四八
前佛は過ぎぬ後佛は未だたり　佛二七九八
前佛は既に去り後佛は未だ世に　卒一七一九
千本(京都)　定家二二〇一
千本の花盛り　西行一一七八
千滿　三井子方二九八九
千滿殿ごさめれ　三井三〇〇三
千滿の母　三井シテ二九八九
宣命をふくめ給ひ　鵜祭四三三
宣命を含めて　鷺一三三三
仙藥となる　東方二一八二
仙藥を聞しめさば御年一千歲まで　邯七八四
千里
　一日に――を驅くる名馬　項五九三
千里に隈なき月の夜　姨三四七四
千里の行も一歩より起る　六浦三〇〇九
千里を驅ける虎は一毛を惜しみ　元一〇八九
千里を行くも遠からず　花一〇〇[illegible]
千里を行けども子をば忘れぬ親　藤戶二七四五
千林の梢にのぼり　蟬一六八〇
善を賞し惡を去る　放生二四五七
善をなし　海一八五
善を見ても進ます　東岸二一六九

そ

そいう　唐子方[illegible]八〇五
そいう
　そんし――と申す兄弟の者　曾一八〇八
疎韻
　秋の風松を拂って――落つ　[illegible]〇九〇
僧(沙門・住僧・聖をも見よ)
　高野山の――　高野六〇六
　高野山より出でたる――　羊一七一九・水無瀨二九六八
　木曾の山家より出でたる――　[illegible]七一六・巴[illegible]七七
　清澄より出でたる――　鵜飼三九九
　西國方より出でたる――　[illegible]五〇七・[illegible]三二九
　　求三〇六三
　宰府に居住の――　輪[illegible]七五
　蒼苔路滑らかにして――寺に歸り　項五九〇
　嵯峨清凉寺より出でたる――　朝三三五七
　諸國一見の――　浮三一五・善知[illegible]八[illegible]・[illegible]九七・江口四七
　　四・高野六一九・玉葛一九五八・藤榮三一四
　　九・錦木三四三・鸚[illegible]三七九・野宮[illegible]四〇
　　七・松風二八二三・八島三一四八・雲三一八六
　　帽[illegible]九九・龍虎三三六〇・井三四〇一
　東國方より出でたる――　山一九六七・[illegible]
　　[illegible]
　豐後の國より出でたる――　[illegible]
　北國より出でたる――　[illegible]
　松浦潟より出でたる――　[illegible]四六
　美保の關より出でたる――　合一三八四
　都方より出でたる――　佛[illegible]九[illegible]・[illegible]七三四
　　佛二七八八・八島三一四五
　三吉野の奧に山居の――　關一三四[illegible]
　無緣の――　[illegible]
　無道心なる――達　[illegible]
　紫野雲林院に住居する――　半[illegible]四九四
　八瀨の山里に一夏を送る――　通[illegible]七[illegible]
　洛陽の邊より出でたる――　六浦[illegible]六八
　往來の――　[illegible]
僧形
　誰とも知らぬ――の　土蜘[illegible]六[illegible]
贈官せられし大臣　皇九九[illegible]
贈官を寄丞相に下され　雷[illegible]四[illegible]
僧正が谷(京都)
　鞍馬の奧――に住居する　鞍九四九
僧正遍昭は歌の樣は得たれども　鸚[illegible]七[illegible]四八
僧正遍昭は名にめでて　女三四九一
增上慢心

我慢――の便りを得ん　善界一六〇〇
奏者草と申す子細は　芭△二五三八
總神分に般若心經　自一三三八
僧俗にあらず　鐘△一四五六・△松蟲二八六二
僧俗二つの道を離れ　放下二四四二
僧俗を嫌はす人數を集め　隅一五一九
總持の義によれり　谷三八〇九
僧都は船に叶ふまじと　俊寛一四三一
僧尼の姿を顯し　弱三三三二
僧の腕立て　熊坂九三七
宋の明帝　三笑一三八七
僧は敲く月下の門　東北二三〇〇・融二三三四
宗廟
　名を――の氏族に歸附す　木曾八二二
　二所――の御惠み　御二九六六
宗廟の神として　放生二四六〇
聰明勇進辯才天の　江島五〇一
そうよう
　雨は――を打つ　采四一〇
總領庶子繁昌し　藤榮二一六三
送離果別の袂　[illegible]八六四
僧會を供養するならば　鵜飼三二一
楚歌
　四面に――の聲のうち　千一七一〇
曾我（神奈川）　小袖所一一三五・禪所一六八九
曾我
　菊の名の――の昔を思ひ出でて　元一〇九二
曾我兄弟の母　小袖ツレ一一三五・禪ツレ一六八九
曾我兄弟の人々に仕へ申す鬼王　禪一六九〇
僧伽陀國
　南膽――波斯彌陀尊者　小鍛一一三一
曾我に歸れば　夜三三六九
曾我の里に着き　禪一六九一
曾我の里を立ち出づる　元一〇七八
曾我の十郎祐成　元一〇七七・小袖一一二八・夜三三五九
息災安穩
　その身も――なるべし　鱗四五六
息災延命の寶の珠　合六八七
息災延命の德を得　鵜祭四一八
俗在出家にはよるまじ　松蟲△二八六一
卽座に討たれ給ひ　禪一六九一
粟散邊地の小國なれども　善界一五九七・末△二六六一
　富士山二六九五
足疾鬼　舍シテ一三八三
足疾鬼が奪ひしを　舍一三八七
足疾鬼といふ外道　舍一三九五
足疾鬼とは足疾き鬼なれば　舍一三九二
足上頭下と落つる間は　求三〇七五
卽身成佛
　知我心者――　安達一三〇・葵一六七・道成一八〇二
　佛原三六三〇・船辨三七六四
卽身成佛たり　身二九五三
卽身成佛の相を現し　高野六一三
卽身卽佛の山伏　安宅九一一
俗體
　その身は――なりといへども　輪三三七九
束帶給へる男　雲林四六二
粟豆の乾飯を袋に入れ　卒一七三六
速得成佛　梅枝四四四
俗には劣るべし　小督一一三六
そくばく
　谷の――深き事　石一三七九
俗呼ばつて女郎とす　女郎四〇
速離
　淨藏淨眼早離――　東一六八四
卽位謙讓の御志　白一六八五
祖慶官人　唐船一八〇五
楚國の傍小水と申す所　菊三五三〇
楚國の帝の御位　邯七八一
楚國の羊飛山　邯七七八
粗忽なる事　[illegible]一六五三・[illegible]三五五〇
底ひなく
　心の水も――　[illegible]四〇六
素盞嗚（スサノヲを見よ）

祖師
いづれの――禪法を御傳へ　放下二四四六
仁義禮智信の――　天二二三四
庶子
總領――繁昌し　藤榮二一六二
庶人
皇子なれども――に下り　蟬一六八〇
素性法師　雲林四六一
楚竹
曉湖水を汲んで――を焼く　八島二一四七
楚地の花
笠は重し呉山の雪沓は香ばし――　葛六九三
帥阿闍梨　谷リキ一九三七・檀リキ二〇〇三
帥の阿闍梨
今熊野梛の木の坊に――　谷一九三八・檀二〇〇六
率土
普天の下――の内　國九〇六・田一九九八
率土四海の内は王土　雷三三四一
袖
風結ぶ涙の――の玉だすき　昭一五八二
駒とめて――うち拂ふ蔭もなし　鉢二五五三
包めども――にたまらぬ白玉は　關寺一六一七
箙三三九一
匂はぬ――ぞ悲しき　通小七六四

そでありける　善知三八七
袖うち振るも恥かしや　俊寛三七七六
袖うち振れる心しるしや　楊三一三五
袖笠肘笠
難波女のかづく――　蘆五四
袖寒しとは思へども手の傷なれば　昭一五八二
袖に朽ちにし秋の霜　小督一一〇七
袖に波越す沖の石　善知三九一
袖のしがらみひぢまさり　雪三一八九
袖の柵隙なきに　百一六七七
袖のしぐれぞ山にさきだつ　六浦三〇一一
袖の月の影　西王一五七二
袖の露涙の數や積るらん　昭一五八三
袖の涙の玉琴の　小督一一〇三
袖の羽風天つ空の衣ならん　西王一五七四
袖ひぢて掬びし水の凍れるを　氷上東三六五八
袖ひぢて掬ぶ手の　善三一三六
袖ふれ馴れし月影の　花筐二五八三
袖もかざしの花盛り　右三五〇
袖を連ね踵をついて　誓一五五三・鶴二〇九七
袖を連ね裳裾を染めて　東北二三〇〇
袖を結んで肩にかけ　松風二八二七
ぞといふ文字こそ返歌なれ　鸚二〇
そと見參に入れ候べし　熊野三三四三
外の濱（青森）　善知所三八一

外の濱
陸奥の――なる呼子鳥　善知三八八
卒都婆
新しき――を立て置き　知三三四〇
一見――永離三惡道　善知三八八・卒一七二三・室三一四一
乞食の腰かけたるは正しく、　卒一七一一
佛體色性の――　卒一七二三
〔卒都婆小町〕　一七二五
そとは何かは苦しかるべき　卒一七二五
卒都婆のそとは誰　善知三九〇
卒都婆は金剛薩埵かりに出化して　卒一七二二
そと一さし舞ひ候へ　望三〇五三
衣通姫この道の守たらん事を歎き　草子二一八九
衣通姫とは允恭天皇の后にて　關寺一六一六
衣通姫の御歌　關寺一六一六
衣通姫の流なれば　草子二一九〇
衣通姫の流を學び給ふ　關寺一六一六
そと舞を舞ひ　道成一七九四
外面へ出て迎ひ　鉢二五四九
その上神事の御先に立たす　梅ヶ枝四四二
そのかみに祈りし事は忘れじを　賀茂物七五四
そのかみ洛陽や　道ヶ七三〇三
その頃源氏の中將と聞えしは　半ヶ七二五四
その時春鶯鳴詔して宣はく　大蛇ヶ七五〇九
その時人々力を添へ　海一七九

その時義經尼に語り給ふやう　攝ヶセ一六六四
その紐解けとこそ　卷三八〇六
その名も高き富士の嶺の　夜次第三三五九
その名をだにもまだ聞かぬ　現上歌一〇一六
その昔違はず逢ひ見ん　住一五四六
その後人壽百歳の時　白髭ヶセ一四六八
その後日の本に渡りし法の　輪ヶセ三三七九
園の桃
　窓の梅――　通小七六五
　西王母が――か　西王一五七一
園原（長野）　木賊所三三〇三
園原
　妻や籠りし――の　木賊三三〇六
　木賊刈る山の名までも――や　木賊三三〇六
園原茂る木賊色の　雲林四六九
園原や伏屋に生ふる帚木の　柏六六四・木賊三三〇九
園原や伏屋の里も秋ぞ來る　木賊三三〇六
園原山（長野）　木賊三三〇五
園原山
　木賊刈る――の木の間より　木賊三三〇七
園原山の木賊は名所といひ名草と　木賊三三〇八
園生
　紅は――に植ゑても隱れなし　安宅八七・賴三三〇八
その風等しかりけり　雨三三八
園生に植うる桃の三千年に　東方三一八二
その身に應せぬふるまひ　志一三九六
その身にも應せぬ業　敦一一八
その故は素盞鳴の尊の　俊成ヶセ一四四四
そばを取り　鸚三三・花一〇〇四・源氏一〇三四
娑婆訶　安達一一九・飛雲三六三〇
そば高く挾んで　大原五四九
娑婆多耶　道成一八〇二
岨傳ひを女院の御歸り　大原五四四
岨傳ひを山人の來り　龍虎三三六二
楚畔の竹を染む　夕三三一一
蘇武
　雁の翼につけしは――が文　高野六〇七
蘇武が胡國に囚はれ　千一七〇三
蘇武が旅寢に故鄉の砧聞えし　砧八三〇
蘇武が旅寢は北の國　砧八三三
蘇武が旅雁玉章をつけし　花筐三五八六
蘇武は旅雁に文をつけ　砧八三八
麁弊の散衣を著しつつ　春日六七四
そへ歌
　大鷦鷯の帝を花に――の　難三三三一
六義の始めの――にも難波の梅　難三三三〇
そほづ
　山田守る――の身こそ悲しけれ　三輪二九七九
杣山人の板取　安宅八二
そみかくた　葛六九六
染色とは風病の身色　[illegible]五八
蘇命路の山
　西くれなゐの――　當三五七
　落日の紅は――をうつし　羽三四九三
〔染川〕　藍異稱三三五
染木
　標の――ともこの錦木を詠み　錦木三三五七
染寺（奈良）
　あれは當麻寺これは――　當一八四四
染殿の井（奈良）　當一八四四
そも漢王の宣旨には　昭ヶセ一五八五
そもそも鶯の歌を詠みたる讃歎　白樂ヶセ一四七七
抑も景時がその讒言の　吉靜ヶセ三三八五
抑もこの寺は坂の上の　花ヶセ一〇〇五
抑もこの淵明と申すは　三笑ヶセ一三六六
抑も當社は垂仁の御宇に　第ヶセ一七七三
そもそも難波津淺香山の　志ヶセ一二九八
初陽
　花の新に開くる日――潤へり　雲林四五九
そよかかる秋と知らす　三三五四一
そよと聞えし　高四二八
そよや霓裳羽衣の曲　[illegible]
そよや陸奥の千賀の鹽竈は　岐上一〇四八
虚起請の罰を忽ち與ふべし　正一三六九
容言

あら――や 大江五六九
五月雨の――なりとも 卒一七二八
虚言あらじ、 花筐三五八五
空焼
纏の衣の――なり 松風二八三四
空飛ぶ鳥も地に落ちて神慮に從ふ 鵜祭四二一
そら情
戀路の――逢ふさへ夢の手枕 綸三四四八
空に知られて木の下に吹き立てて 竹雪一八八五
空に知られぬ雪ぞ降る 昭一五八〇
空の通ひ路
夏と秋行きかふ――は 水無月三九四一
空は限りもなければとて久方の空 羽三四九二
空は一つに雲の波 海一七九
虚腹切つて 忠信一八九九
空目
何か――なるべき 自樂二四七四
夕顔の――して 藍三三五
夕顔の――せし間に夢となり 半三五〇〇
空目もあらじ 賀茂物七五七
空より外に置く露の 大蛇上歌三五〇六
それかあらぬか木の下風か 雲林四六〇
それ生死に流轉して 春榮クセ一四一三
それつらつら惟ん見れば 安宅九三
それといはんも恥かしや 姨上歌三四七七

それは雁がねこれは鶯 花一〇〇四
それは養由これは花月 花一〇〇四
それは柳これは櫻 花一〇〇四
楚王の臺の上には夜の琴の聲 班二六〇五
疎韻
松を拂つて――落つ 蟬一六八二
疎屋
怪しき――の内に 大蛇三五〇七
月――を穿ちて夢なりがたき 芭三五三二
尊詠の僞りなくは 船辨二七七八
存外なる振舞 關原一六二九
存外たる者 鳥三三〇一
そんし 唐子方一八〇五
尊性 道明ワキ一八三三
尊性
田代と申す所に――と申す者 道明一八二五
樽の前に醉を勸めてはこれ春の風 松蟲二八五七
尊苗
應神天皇の――を繼ぎながら 花筐三五八二
存命不定 春榮一四〇五
尊容
毘首羯磨が造りし赤栴檀の―― 百二六七九
尊靈
光源氏の――か 須一五〇二

た

他阿彌上人 [illegible]一一四三
他阿彌上人
遊行十四代の流れ―― 實△一三四六
第一義大の月まとかなり 現二〇二三
第一第二の絃は索々として 蟬一六八二・經クセ二〇九〇
太入杵の神王を祭主と定め 鵜祭四一七
大雨降ること終日 建二〇五〇
太液の芙蓉の紅未央の柳の綠も 楊貴三一九
大音上げて名のるやう 正一三六八
大恩教主
歸命頂禮――釋迦如來 大會一七八六
大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隱れ 安宅九三
大伽藍
世に隱れなき――佛の供養 大佛一七五一
大伽藍の御供養 大佛上歌一七五三
大伽藍を建立すべしとて 田一九九〇
大虚
風は――にわたる 殺一六四三
たいきんりきんの獅子頭 石一三八〇
退屈

はや茱も——仕り　土車二〇七八
第九の滅劫人壽二萬歳の時　白鬚一四六八
大紅蓮
紅蓮——　（その項を見よ）
大紅蓮の責め　調三三〇
代官
判官殿は頼朝の御——として　船弁二七六九
大紱は嘈々として村雨の如し　絃二〇九〇
太鼓
あやしの——や　錢一九四
今の——は波なれば　難三三九
形見の——形見の衣　梅枝四四一
瞋恚の焔は——の烽火の　富士太三〇七
大剛の者にて　箙三八七
大國を窺はん　紱一〇五五
醍醐清水大原などの花　雲林△四六四
太鼓こそ憂き人の形見なりけれ　富士太三〇八
醍醐天皇昌泰三年　老△五三〇
太鼓の上手　富士太二六九九
太鼓の役　源太一〇七二
太鼓は朽ちず苔むして　梅枝四四一
太鼓はとうとうと　鳥三九九
太鼓も羯鼓も笛篳篥　東岸二一七四
胎金兩部のその一法を現し　代一四八三
胎金兩部の峯　葵一六五
胎藏
天を指す手は——　國九〇六
胎藏界
熊野は——密嚴淨土　卷二八一〇
胎藏界の辯才天　鱗四五五
胎藏黒色の腰巾　安宅九一
第三第四の紱は冷々として　絃二〇九〇
大山となつて道を塞ぐ　草薙八八七
泰山の山下水その巖石を切石　金八七二
〔泰山府君〕　一七三三
泰山府君　泰シテ一七三三
泰山府君
五道の冥官——　正一三六四・泰一七三九
泰山府君に申さく　花筐二五九二
泰山府君の祭　泰一七三五
大師
御法を弘めにし——の惠み　高野六一五
大事
兵法の——を傳へて　鞍九五六
大慈大悲の觀世音さしも草　三井二九九〇・盛三〇九六
大慈大悲の觀音擁護の結緣　田一九九七
大慈大悲の理は　浮三三四
大慈大悲の誓ひある　玉葛一九六六
大慈大悲の春の花十惡の里に芳しく　花一〇〇五
田一九八八
大慈大悲は薩埵の悲願　盛三一〇〇
第四には鳥居の大明神　大江ノ[illegible]五七九
大師の御身は内身三昧目前なり　高野六二一
太子の御生前震旦國の思禪師にて　弱三三三
大事の行
峯入とやらんは——と　谷一九四〇
大事の手なれば堪へずして　攝一六六三
大師の待ち給ふは慈尊三會の曉　高野六一二
太子の賓客
唐の——白樂天　白樂二四七〇
大事の囚人　[illegible]一〇〇五
大事の渡り　隅一五三六
大師坊といふえせ人　大江五六一
大赦
非常の——行はるるにより　俊寛一四三三
大蛇（ヲロチをも見よ）
いづくに——のあるべきぞと　草薙一八〇三
かの湖に——住めり　江島四九八
さもすさましき——とたつて　現二〇二〇
素盞鳴の尊に斬られし——　草薙八八七
千尋の——とたつて　春日六八〇
天地に群る——の形　竹生二〇四二
簸の川上の——に存まれ　大蛇一五〇九
大將かと見ればつづく勢もたなし　實一三五八
大將軍の御出立には　八島三二五一
大聖釋迦如來わが手に逢はせ　百三六七四

大聖釋尊その授記を得て　白鬚一四六八
大聖釋尊も羅睺羅長子と說き　竹生一八八三
大聖世尊となり給ふ　東方二一八二
太政大臣
　少女の卷に——　須一四九七
太政大臣師長　絃一〇四五
大聖の誓約豈虚妄にあらずや　[illegible]三一〇〇
大聖の威力　[illegible]一六〇〇
大聖不動明王　葵一六七
大聖不動明王の火焰に　調二二八
大聖不動明王の索にかけ　谷一九五〇
大聲聞
　迦葉阿難の——　大會一七八五
帝釋
　喜見城の——現れ　大會一七八六
　二者——三者魔王　梅枝四四四
　梵天——四大天王　江島四九五・正一三六三
　梵天——の御憐みを蒙り　忠三三三七
帝釋出てあひ修羅王を　俊成一四四五
帝釋修羅の戰ひ
　月をも手に取るや——　經二〇九一
帝釋天まで追ひあぐれば　舍一三九五
帝釋天より下り給ふ　大會一七八六
帝釋天王　大會ツレ一七七七
帝釋の御作

　菩薩の像儀もこれ——　[illegible]九三
大蛇の生贄を悲しむ　[illegible]二〇六九
大蛇は觀音の再誕　[illegible]二〇五[illegible]
大蛇は劍の光に恐れ　[illegible]二〇五[illegible]
帝珠
　我此道場如——　藍二四四
大乘經
　五部の——を書き　[illegible]一八六九
大乘經の奧に血を以て御誓ひ狀を　松山天八六九〇
大織冠　海△一八三
大事を傳へて來世に遺し　[illegible]二〇四七
大神宮　内府三七一
大神宮に參らん　[illegible]一七六九
太佛殿と額の打たれ　[illegible]二二八
大勢至
　天上の力を得る故に——とは號す　[illegible]二四八三
　南無歸命月天子本地——　羽二四九四
大勢力の鬼神と見えしが　[illegible]三六二〇
大勢力の力を出だし　國九〇六
大小柑子金柑　通小七六五
大焦熱
　焦熱——（その項を見よ）
大焦熱の煙の中に　東二〇七三
大小の根機を嫌はず　放下二四四八
大小の神社諸佛菩薩　鐵七一〇

大小の神祇冥道に驚かし　[illegible]
大石のありしを敵[illegible]と思ひ　[illegible]四八
大山（[illegible]）
　伯耆には——　花三四八
　伯耆の——　大山五三
提闍
　聖德太子は救世の——　[illegible]一二八[illegible]
大谷澤かみ出て　[illegible]一五七
大山の伯耆坊　鞍九五八
大祖
　文道の——　[illegible]三二四
大僧正が谷　鞍九五六
大地は紺瑠璃　大會一七八五
大通智勝佛
　三島の明神本地——　春榮一四一四
苔底が朽骨　[illegible]三六四
退轉
　擲鐘——仕り　[illegible]一七九[illegible]
大天狗　營[illegible]九四七・車[illegible]九六[illegible]
大天狗は合掌して　車九七三
大同二年の御踏朝　高野六二三
大同二年の御草創　同一九九〇
大權現
　日本秋津島の——　[illegible]二四五〇
大納言局　花ツレ二四七・大原ツレ[illegible]

大日覺王如來　逆一三二
大日大聖不動
　中央に——　道成一八〇一
大日大聖不動明王　．　．　安達二一九・飛雲三六三〇
大日本國といつぱ神國たり．　逆一二二
大念佛
　嵯峨の——　百二六七〇
大念佛を申す事の候　隅一五一九
對の屋を造り傍に置き　松山鏡二八七一
提婆が惡も觀音の慈悲　卒一七二四
大法
　御——の如く太刀刀を汝預かり　咸七九七
　この所の——にて　鵜飼△三〇〇
　われらが中に——の候　自一三三六
大法の如く谷行に行ひ　谷一九四六
大法の事にて候間太刀刀を　春榮一四〇二
大法祕法醫療樣々の御事　葵一五七
大法を修せられ　鵺二三八四
大般若一部六十巻　源氏△一〇三三
大般若の妙軸を受け　代△一四八六
大悲
　國土萬民を漏らさしの——の影　田一九九一
大悲擁護の薄霞　熊野三三五一
大悲の光
　生けるを放つ——　弓三三三五
　過去久遠の——．　夢三一〇七
大悲の光色添ふ故か　田一九八八
大悲の弓には智慧の矢をはめ　田二〇〇〇
大悲の利劍　海一八〇
大夫
　松を——といふ事は　老五二八
　帝——といふ爵を贈り給ひ　老五二八
〔大佛供養〕　一七四三
大佛供養の由　大佛一七四五
大佛殿にておはします　大佛一七五一
太夫の將監　玉葛△一九六五
太夫の進朝長は美濃の國靑墓の宿　朝二三五七
大瓶
　あまたの猩々——にあがり　大瓶一七六四
〔大瓶猩々〕　一七五九
泰平の御代のしるし　弓三三二七
泰平樂
　安穩に——を打たうよ　富士太二七〇八
　天下——．　代一四八八
瑇瑁を飾り　關寺一六一八
松明
　一の——は軍神　烏三四三五
　濕る——ふり立てて　鵜飼三〇六
　二の——は時の運　烏三四三五
松明の占手　烏三四三五
大名十八附け申され　正一三五八
大明神
　衆生を度せんと——と現れ　采四〇〇
大名小名
　東八箇國の——思ひ思ひの　鉢二五六四
對面向顔
　夢中の——をなす　傳五一七
題目
　めでたき——たり　弓三三二六
大物浦（兵庫）　船辨慶二七六七
大紋の袴のそばを取り　鸚二三
大庾
　たゞ憐む——萬株の梅　龍虎三三六三
内裏
　鳴る雷となり——に飛び入り　雷三三三七
内裏にて御歌合　草子二八二三
内裏は地より三里高く　鳴七九三
臺嶺の雲を凌ぎ　檀二〇二五
大嶺の雲を凌ぎ年行の功を積む　野守二四三三
〔第六天〕　一七六七
第六天魔王　第シテ一七六七
第六天の魔王
　佛法を破却する——．　第一七七四
大威德
　西方　北方金剛夜叉明王　船辨二七八五

大威徳の乗り給ふ水牛の角に　[illegible]二二六八
大威徳は水牛の角振り立て　[illegible]二二三〇
大威徳明王　[illegible]二九・[illegible]一六七・道成一八〇一・[illegible]雲二六一九
〔大會〕　一七七七
大會散り散りになつて　大會一七八六
桃葉といひし人仙女と契り　邯一五八六
陶淵明　三笑ツレ一三八一
陶淵明が志にて飲酒を破り　木賊三三一三
桃顔露を含んで色猶深き姿　昭一五八六
當今に仕へ奉る臣下……（「臣下」を見よ）
桃花
　春來つては遍くこれ——の水　草子一一九七
　三千年に花咲き實なる——　西王一五七一
桃花雨を帯び柳髪風にたをやかなり　[illegible]二三
當座などをも遊ばされ　熊野三三五〇
當座の席を遁れんと　正上歌一三六三
當山を信じ參る上は　吉静三三八二
導師高座に上り　自一三二七
桃實を聞し召さば御壽命長遠　東方二一八二
道者　吉静三三八二
〔道成寺〕　一七八九
道成寺（和歌山）　道成所一七八九
道成寺
　道成興行の寺なればとて——と　道成一七九五
道成寺の住僧　道成一七九一

堂上堂下　[illegible]△二三六八
陶朱公は勾踐を伴ひ會稽山に籠り　[illegible]一七七六
陶朱功を成す
　會稽の恥を雪ぎしも——とかや　[illegible]二七七七
道人
　玄翁といへる——　殺一六三五
盗人ざうな　安宅九六
刀尋段々壞
　念彼觀音力——　[illegible]三一〇〇
〔唐船〕　一八〇五
刀山
　足に——踏む時は劔樹共に解す　歎三六五
道仙律師
　終南山——　舍へ一三九四
道俗男女に殘さず勸め　大[illegible]一七六五
田獵
　笛鼓を鳴らし——をうたひ　[illegible]六七
滔々
水——として波悠々たり　天二四二・[illegible]三一四〇
道場
　念佛三昧の——に出て入る人の　誓一五五三
唐帝の古も　小督クセ一一〇七
唐土（モロコシをも見よ）
　西天——日域に　舍一三八九
唐土の詩賦を以てわが朝の歌とす　白樂二四七五

唐には詩を作つて遊ぶ　白樂二四七四
桃仁　東方[illegible]二一七七
唐の太子の賓客白樂天　[illegible]
當麻寺（奈良、[illegible]）
　當麻の御寺とも申し又——とも　當一八四四
〔道明寺〕　一八三[illegible]
道明寺（大阪）　[illegible]
堂宮に掛けてある鰐口がなる　山△三一七五
道迎へのその場に酒を持ちて　[illegible]二四三六
當面黄舌の囀り　歎三六〇
當來導師
　南無——彌勒佛とぞ唱へ　[illegible]二五〇四
當來にては數千蓮華の上に坐せん　[illegible]
當來までの二世の願ひ　舍六八七
蟷螂が斧とかや猿猴が月に相同じ　[illegible]一六〇〇
蟷螂が斧を取つて隆車に向ふ如し　木[illegible]八三三
桃李
　春風——花の開くる時　右三四二
桃李もの言はず下おのづから　西王[illegible]一五七〇
桃李もの言はず春いくばくの年月　西王一五七二
桃李物言ひ而して自ら道をなし　羅△一五一〇
桃林（支那）
　牛を——に繫ぐ　[illegible]三四四四
桃林に牛を繫ぐ　唐一八一三

田植女　飛鳥ツレ六五
〔當麻〕　一八三九
當麻寺(奈良、タウマジをも見よ)　當所一八三九
當麻の寺
　二上山の麓なる——　當一八四一
當麻の曼荼羅の謂れ　當一八四六
鷹
　うとうは却つて——となり　善知三九三
高嘶き
　駒も進ます——し　羅三三五四
高嘶きし足掻きして　知二二四三
尊氏
　朝敵——大學して上洛　楠九一一
他郷の者
　闘の清次と申す者——と口論し　錦三三八六
高垣姫垣調はり　玉井一九七九
高き名を雲居にあげて富士の嶺の　小袖一一三八
高き屋に登りて見れば煙立つ　難ク七二三三三
高き山深き海妹背戀路の跡　蘆五九
高草(鳥取)
　生國は因幡の國——の人にて　東北△二九六
高く貴き
　神さびて——駿河の富士　富士山二六九〇
高倉の宮の内　賴三三〇九
高倉の院　小督一〇九八

高子の后の御衣　杜六二三
〔高砂〕　一八五七
高砂(兵庫)　高砂所一八五七
高砂
　誰をかも知る人にせん——の　高砂一八六一
高砂住の江の松に相生の名あり　高砂一八六二
高砂といふは上代の萬葉集の古の義　高砂一八六三
高砂の浦　高砂一八五九
高砂松の精　高砂ツレ一八五七
高砂の松の春風吹きくれて　高砂一聲一八六〇
高砂の松も昔の友烏の　敦九五三
高砂の尾上の鐘曉かけて　三井三〇〇一
高砂の尾上の鐘の音すなり　高砂一八六六
高砂やこの浦舟に帆をあげて　高砂待謠一八七〇
高師四郎　高野シテ六〇一
高師の四郎
　平松殿に仕へ申す——　高野六〇三
高師山(靜岡)　盛三〇九七
高瀬漕ぐ袖のしがらみひぢまさり　雪三一八九
高瀬の四郎　鳥三四一四
高瀬舟に取り乘つて　満八五〇
誰が玉章のもじの關守　和三〇三三
誰が爲の錦なればか秋霧の　佐ク七一二七二
高照らす
　君の惠みも——紅葉の御幸　花筐二五八四

高時
　相摸の守——こそ敵　櫻二〇一九
臺宇てりかかやき　玉井一九七九
高梨　旅△七二三
高縄をさし　善知三九一
高荷どもを集め　鳥三四一五
高荷を落し　熊坂九三六
高嶺の深雪解けぬべき　賀七三九
高野の山深み　高野六〇八
高野山(和歌山、カウヤサンをも見よ)
　霞の奥の——　高野六一三
高橋權頭　春榮ワキ一三九七
互に通ふ心遣ひ　高砂一八六三
互にそれぞと見みえし中の　船橋二七六五
互の論は弛弓の　錦戸上歌二三六七
高間(奈良)
　葛城——よそまでもあるまじ　葛九五九
誰が誠よりしぐれそめけん　定二二〇六
高松(香川)
　八島に立てる——の苔の筵は　八島三一五〇
高松の朝嵐　八島三一六三
高天の寺(奈良)　白樂二四七七
高天の原
　岩橋の——はこれなれや　葛七〇一
高天の原に神ととまつて　繪二四五三

高天の原に神集りまして　内三七五
高天の原の岩戸の舞　葛七〇一
高天の原の昔より　第一七七二
高間の山(奈良)
　葛城や——山上大峯　花一〇〇九
　葛城や——の嶺續き　雲林二六四六
　白雲や——の嶺の椎居の　葛六九五
高間の山と申すは金剛峯として　代一四八二
高間の山の峯の雲晴れぬは　谷一九四三
高間の山の峯の雲よそにのみ　小督一一三一
高間の山のよそにのみ見てや　花筐二五八六
高もがりの内　善知八三八五
高櫓に走りあがり　忠信一八九九
高安の里に左衛門の尉通俊　弱三一七
高安の里に知る人ありて　井三四〇六
誰か世と月はよも訪はじ　砧八二三
寶
　數の——に代へ連れて歸國　唐一八一〇
　數の——を集め　烏三四一五
寶の池の蓮の臺　管一三五七
寶の池のほとりに立つや並木の　烏三四八二
寶の池の水功德池の　增六六三
寶の市に出でうよ　岩二八八
寶の珠
　壽命長遠息災延命の——　合六八七
寶の御船を守護し奉り　岩二九三

寶の御矛
　日本第一の——を納めしは　道一二〇六
寶の山(奈良)　代一四八四
寶の山
　法性眞如の——　葛七〇〇
寶の山と號すなり　道一二〇七
高雄(京都)
　愛宕——の初櫻　數九五五
高雄嵐山　[illegible]三六一六
高雄の峯(京都)
　我慢——に住んで　數九五九
高雄の山(京都)
　わが名のみ——にいひ立つる　東九六六
高雄山
　わが名やよそに——　東一六〇三
笋をまうく
　孟宗は親のため雪の中に入り——　竹雪一八八五
瀧川
　老を養ふ——の　養三一三
薪
　菜摘み水汲み——とり　大原五三九
　折を待て春の——にさす花の　[illegible]三三六三
薪となるは梅櫻切りくべて　鉢二五五八
薪になほ花の枝を折り添へ　志一二九五
薪に花を折り添へて　忠度一九〇八

薪の峯の永き日も　志一三〇三
薪を重き身の山人　志一二九五
薪を負ひて花の蔭に休む者は　志一二九六
薪を負へる山人の花の木蔭に休む　[illegible]一二六一六
瀧つ心を澄ましつつ　道二一九
瀧つ心を人知らじ　道二〇六
瀧壺までには漲りして　百一二七七
瀧波の雲より落ちて數千丈　百一二七七
瀧の絲雲より懸りて　百一二七九
瀧の響も聲澄みて　道二一二七
瀧の水五色に見えて　花一〇〇六
瀧祭
　誓ひも絶えぬ——　東一一五五
　久方の月も落ちくる——　龍田一九五二
瀧祭神　道一一三〇二
瀧祭の御神とは即ち當社の御事　道一三〇六
　龍田一九一二
瀧祭の神の社はいづくぞ　道一二〇八
瀧祭の神和光に出でて龍田の神　道一二一二
瀧祭の明神この御矛を預かりて　道二一二七
瀧本の千手觀音　杜二〇六
異物の沈香たから切燈の　野一五〇九
瀧所
　波頭の——は日晴れて見ゆ　紅葉二七七六

詑宣
　當社の——か　弓三三六
類ひなき名を望月の今宵とて　三井上歌二九九三
楮領巾
　天つ少女の天つ——　梅四三
涿鹿(支那)
　血は——の河となつて紅波楯流し　小鍛一二七
　血は——の河となつて紅波楯を流し　頼三〇七
　血は——の河となり紅波楯を流し　竹五一六
竹
　鶯の青葉の——　籠三九五
　楚畔の——を染む　夕三二一
　昔——鶴龜の齢を授くる　老五三
　雪の——涙や色を染むべき　竹雪一八八五
武内と申す末社の神　紅△三〇八八
武内の神　放生シテ二四五三
武内の神はわれなりと　放生一四六二
茸狩
　小松殿北山にて——の遊路の　盛三一〇九
竹箭午の風を含み　高砂△一八六九
他化自在天
　化天耶摩天——　舎一三九五
竹田(京都)
　木幡山伏見野——淀鳥羽も見え　雞三三九
竹田の里(京都)　墨一五〇七

竹取住吉はものふりたり　源氏△一〇三二
たけなる馬にうち乗つて　羅三五三
竹に生まるる鶯の　竹生歌第二〇三三
竹には虎や住むらん　竹雪一八八五
竹の垣
　松の木柱に——夜寒さこそと　松風二八三一
竹の杖
　千代をこめたる——　金八七二
　身のうき世とや——　通小七七〇
竹の葉
　亂るるふしは——の　紅三〇八六
竹の柱に竹の垣　蟬一六八五
竹の葉の酒
　よも盡きじ萬代までの——　與一三五二
竹の細枝つき連れて　望三〇四九
多気の都(三重)　第一七六九・野宮二四一三
〔竹雪〕　一八七五
竹の雫
　子の別れ路を悲しみて——なかき　竹雪一八八五
竹柱
　憂き節繁き——　大原五三八
竹は直にして内の清きをわが友と　龍虎三三六七
竹一夜のうちに　竹生△二〇三九
田子
　おり立つ——の數添ふや　御二九六〇

他国の物語　[illegible]三〇五
多祜の浦(富山)　藤所二七二三
田子の浦(静岡)
　雲もおり立つ——　富士山二六八七
　持つや——東からげの　[illegible]三三〇
多祜のうら
　藤咲く——めしの身ぞ　藤二七三五
田子の浦うち出でて見れば眞白なる　[illegible]三〇九八
多祜の浦底さへ匂ふ藤波を　[illegible]上歌二七二七
田子の浦の汐をばいざ下り立たん　紘一〇四九
多祜の浦や汀の藤の咲きしより　藤二七三六
太宰府(福岡)　[illegible]二三五
太宰府神主　[illegible]二三五
太宰府に庵に檜垣しつらひ　檜二六二七
太宰府に住み給ふ　藍二四四
太宰府へ流され給ふ　[illegible]五二〇
他山の覺え
　一時の賞翫——　敦九五四・關原一六三六
他山の聞え寺家の覺え　[illegible]五二四
但馬の守經政　經二〇八五
但馬の守經政もにや討たれ致　通[illegible]九〇八
太上天皇
　藤の裏葉に——　須一四九八
他生の緣
　一河の流れを汲むも皆これ——　小督一一〇一

一河の流れを汲んで――ある旅人　田一九九七
一樹一河の流れを汲むも――　錦木二三五三
一樹の蔭――と思し召し　巴三三八〇
一樹の蔭一河の流れこれまた　知二三四一
一樹の蔭一河の流れ……これ又――　櫻一二三六
一樹の蔭一河の流れ皆これ――　山姥一八二
一樹の蔭に宿り……皆これ――　經二〇八五
一樹の蔭の宿り――　朝二三六一
一樹の蔭の宿りも――　松蟲一八六四
一樹の蔭や一河の水皆これ――　住一五四三
一樹の宿りをも――と聞く　千一七一一
一夜の契りも――ある　阿三四
假初も――　遊三三〇五
花の友人は――　谷一九四七
他生の縁ありて一樹の蔭の花の縁　吉天三三九二
他生の縁ぞとて時もこそあれ　俊五一四
他生の縁による一樹の蔭の　御二三八七
他生の蔭の一樹の蔭に　芭二五三三
他生の縁はありがたや　仲五一七
他生の縁は朽ちもせて　碇二五三
他生の縁は朽ちもせぬ　小鍛三四六五
他生の功力　定二一〇七
他生の種の縁に　敦一三四
田代(信濃)　頼三三一三
　　　　七騎一三一〇

田代(神奈川)
相摸の國――と申す所に熊性　道明一八二五
多勢に無勢叶はねば　烏二三七〇
たそかれ
夕顔の――時もはや過ぎぬ　[illegible]二一九九
折りてこそそれかとも見め――に　半二五〇五
黄昏月もはや入りて　雲林四六九
たそかれにほのぼの見れば夕顔の　半二六一〇
誰そやこの鳴門の沖に音するは　通盛二八九九
ただ憐む大庾萬株の梅　確虎[illegible]六三
唯一人の下知によつて　頼三三一一
唯一念の功力だに　知上歌二三四二
叩く水鷄の外面に立つや　合六八四
ただこと歌
小町が歌をこそ――の例に　草三二
唯これ水波の隔てにて　道明上歌一八三三
唯これ地水火風の　安達ク七一二
唯これ法の奇特ぞと　芭・時名二五三九
ただ殘鶯と落花とに別る　藤二七三一
糺(京都)
神ぞ――の道ならん　賀七三四
神の名を――の竹の　代一四八二
夜も――のかはらぬは　鐵七〇六
糺の御神の御惠み　水無月二九四七
糺の神

賀茂の宮居か――たらば　水無月二九四一
戀路を――ならば　水無月二九四〇
誓ひ――ともに　生二六六
糺の森(京都)　[illegible]二九七七
糺の森
賀茂の川波――の緣も夏木立　賀茂七五〇
糺の森の宿より初音ふり行く　賀七七[illegible]
糺の森もうち過ぎて　夕三三一〇
糺へ御參り候か　水無月二九九九
糺へ參らうする　半二六〇[illegible]
忠澄　俊成一一一四三七
忠澄
岡部の六彌太――　俊成一四二[illegible]
岡部の六彌太――と組んで　通盛二九〇八
岡部の六彌太――と名乘つて　忠度一九一七
ただ賴め
淸水の――賴もしき　熊野[illegible]五[illegible]
唯賴めしめぢが腹立ちや　戀一一六〇
唯賴め標茅が原のさしも草　戴二四四・田一九九[illegible]
ただ賴め細谷川の丸木橋　船辨二七七八
ただ賴めわれ世の中にあらんほど　通盛八九〇四
直路
夢の――に歸らん　鉢二五六一
忠綱　[illegible]五〇九

田原の又太郎——と名乘つて 賴三三一一
〔忠信〕 一八九一
忠信 忠信シテ一八九一・吉靜ワキ三三七九
忠信
　弟——は都にて失せ 攝一六五四
　佐藤——・ 忠信一八九五
　靜は——がその契約を違へじと 吉靜三三八三
多田の滿仲—— 仲三三〇九
〔忠度〕 一九〇三
忠度 俊成シテ一四三七・忠度シテ一九〇三
忠度
　薩摩の守—— 忠度一九一一
　薩摩の守——の果は如何に 通盛二九〇八
　薩摩の守——をば某が手にかけ 俊成一四三九
忠度は文武二道を受け給ひ 忠度一九一六
たた一聲のうちに生まるる彌陀の數 遊三三〇一
唯一筋に老武者の 賴三三一三
忠岑 草子ツレ一一八一
忠岑
　右衛門の府生壬生の—— 草子一一八七
ただよひ行くと見えつるが 飛雲二六二〇
ただよひ寄りて 菊八二一
ただよふかいざよふか 大江五六五
立たんとすれば碁石に押されて 戀一一六三
立ち出でて見ればに深山邊の 關上歌一七

立枝
　梅が枝の——も見えて 右三四三
　柱の——を折り持ちて 三山二九二四
太刀刀
　金銀をのべたる——・ 鉢二五六四
太刀刀禁制 春榮一四〇三
立ちかへり夜になりて 殺上歌一六四一
手力雄命 繪ツレ二四四一
手力雄の命
　岩戸を——は引き開け 繪二四五二
立ちすがりたる市人の 松蟲二八五九
太刀取 盛ワキツレ三〇九三
太刀取後にまはりつつ 盛三一〇四
太刀拔きそばめ 關原一六三〇
裁ち縫はぬ衣着し人もなきものを 作一三七〇
室クセ三〇三三
衣ち縫はぬ衣干せばとて 作上歌一三七一
立ち上る木曾の麻衣袖しをり 寢上歌二三九六
橘
　古の戀しかるべき——の 浮三一七
　大宮人のかざすなる櫻——・ 放生二四六七
　風——の香をとめて花も連なる 蟬一六八四
　常磐なれや——の 雲林二六四四
橘の小島が崎(京都) 攝三三〇二
橘の小島が崎を見渡せば 浮三一七

橘の小島の色は變らじを 浮[illegible]三三
橘の貧女 草薙八八一
橘の道成 小鍛一一三・道成一七九五
橘の諸兄
　撰者は——・ 草子一一八九
橘姫 草薙ツレ八七九・源太ツレ一〇六・
　熱田の源太夫が娘——の靈魂 草薙八八六
橘姫
　結緣の衆生を擁護の神—— 源太一〇七一
立廻 蟬三三三・戀一一六四・橋一二五一六・百二六七九
船橋二七六五・卷二八一一・山三一八二
立ち舞ふ袖までさもみやびたる 松山天一八八八
立ち舞ふべくもあらぬ身の 船辨二七七六
太刀も刀もいるまじや [illegible]二二五五
立ち寄ればげにも野守の水鏡 野守上歌二四一六
立ち別れ稻葉の山風吹き亂れ [illegible]一一六五
立ち別れいたばの山の峯に生ふる 松風二八三七
立居苦しき老の波の 實一三四七
立居苦しき思ひ草 浮三一六
田鶴
　蘆邊の——こそは立ち騒げ 松風二八三八
　蘆邊をさして——鳴き渡る [illegible]三四
　蘆邊をさして行く——の [illegible]四
　入江の——も聲惜しまぬ 住一五四七
　汀の千鳥鳴く——も和光の影の 鵜四五四

群れゐる——の音を鳴き　鶴[illegible]四五三
群れ居る——を御覧ぜよ　八島[illegible]五〇
手束弓
紀の關守が——　杜[illegible]五五二
白木の——　鐡三五五
たづきなき憂き身　浮三一六
たづきも知らず泣きゐたり　雲[illegible]八一九
たづきも知らぬ身　土蜘[illegible]九六三
たづきも知らぬ山中に　一角[illegible]二七八
當一八四八・雲雀二六四七
〔龍田〕　[illegible]九二一
龍田（奈良）　龍田所一九二一
龍田
　今朝よりは——の櫻色ぞ濃き　龍田一九三三
名にも——の紅葉の色　飛雲二六一六
吉野——の花紅葉　藤栄二一五七
達多
愛着慈悲心は——が五逆に勝れ　檀坂九三七
五逆の——は天王記別を蒙り　海[illegible]八五
龍田川（奈良）
　年毎にもみぢ葉流る——　龍田一九三三
龍田川錦織りかく神無月　逆一・蘚一二〇四・龍田一九三六
龍田川紅葉亂れて流るめり　龍田一九二四
龍田川紅葉を閉づる薄氷　龍田一九二六
龍田越　龍田一九一三

龍田の川　龍田一九三三
龍田の川の水は濁るとも　龍田一九三三
龍田の神
　清祭の神和光に出でて——　逆[illegible]二二
龍田の里に住みて久しき　逆二〇四
龍田の明神　龍田一九二四
龍田の明神は雲神にて　逆[illegible]二〇三
龍田のもみぢ葉の色に染み　[illegible]七三四
龍田の山（奈良）　逆[illegible]二〇[illegible]
龍田の山
　憂き名のみ——のもみぢ葉の　知[illegible]四九
名こそ——風も静かなり　龍田一九三三
龍田初瀬の紅葉　代一四八一・求三〇六五
立つ旅衣春とてや　作次第一三六六
〔立田姫〕
龍田姫　龍田異稱一九二二
龍田山（奈良）　龍田シテ一九二[illegible]
龍田山　逆所一二〇一
　風吹けば沖つ白波——　井三四〇三
龍田山同じかざしの榊葉を　龍田一九三八
龍田山紅葉の八葉も　逆[illegible]二〇八
貫きは師弟の約　雷三三六
立つ名もよしなや　鸚[illegible]二四
尋ぬるに形なく　鐘[illegible]四五三
尋ぬる人の琴の音か　小督一一〇三

尋ね行く幻もがなつてにても　楊貴妃[illegible]二一六
龍田の明神（龍田）
　善心を思ひ——　江島四九九
龍田の明神と現れ　龍田[illegible]四
龍田の明神に夫婦の御神　江島四九六
龍の都を出づるなり　合六八三
立つも立たれず居るも居られぬ　雲雀[illegible]四四六
田づらの鳥を追はせ　鳥[illegible]三五
橘
紅波——を流し白刃骨を砕く　綾[illegible]三〇七
紅波——を流しつつ白刃骨を砕く　[illegible]五[illegible]六
波の——　八島三一六二
立てし誓ひに二心　内上求三七四
經緯の霞の衣のにほやかに　[illegible]七五
栖の六郎　[illegible]八七三
立て花の蔭に隠れけり　[illegible]五〇〇
立山（富山）　善知所三六一
立山
　雲や煙の——の　善知三六八
白山——富士の御嶽　大江[illegible]六[illegible]
立山禪定　善知三六八
立烏帽子
この程の形見とて御——狩衣を　松風[illegible]六二五
白張淨衣に——　大佛一七五
女姿に——　[illegible]八六四

立烏帽子を風折り　幸一七二九
たとひ暮るるとも　松蟲上歌二八五六
たとひ罪には沈むとも　天二一三六
七夕
　天の河たな渡りして——の　項五九一
七夕の織る綵竹の手向草　閻寺上歌一六二〇
七夕のたとへにも似ぬ身の業の　唐一登一八一三
七夕の手向の袖ならば七返し　閻寺一六二一
七夕の契りには一夜ばかりの　砧八三三
七夕の契り待つ年に一夜は　船橋二七五五
七夕の年に一夜は心せよ　項五九・
七夕の星の祭を急ぐなり　東方二一七八
七夕の祭を執り行ひ　閻寺一六一一
たな渡り
　天の河——して七夕の　項五九一
[谷行]　一九三七
谷行
　大法の如く——に行ひ　谷一九四六
谷行とて忽ち命を失ふ事　谷一九四七
谷川に風のかけたる簗は　紅三〇八・
谷の川音雨とのみ　志一三九四・石一三七五
谷の下庵遥々と　黄虎三三六二
谷のそくばく深き事　石一三七九
谷の戸出づる鶯の凍れる涙　放下二四四八
谷の戸出づる鶯も法を唱ふる　現一〇一四

谷の戸に鳴く鶯の聲までも　松山天二八八八
谷の水音消々と　養三一三九
谷水
　此お酒は——の　俊寛一四二七
谷水をせく水口に五十串立て　淡一四四
谷を隔つる山鳥の尾を履む峯の　竹生一八八五
種直　春榮シテ一三九七
種直
　増尾の太郎——、　春榮一四〇〇
種蒔きしその神の代　飛月六八
種を蒔き種を收めし神代より　御二九六一
種を蒔き種を收めて苗代の　淡上歌一四六
種を收めし國　淡一四二
多年値遇の御結縁　雲三〇九六
他念なき身　小袖一一三六
頼うだ人に手向ふ者あらば　放下△二四四一
頼うだる御方　土蜘△二〇六三
樂しみ榮えを浮舟に譬ふべし　源氏一〇三九
樂しみ既に去つて悲しみ早く來れり　鐘一四五三
樂しみの際盡きもせず　弓三三二八
樂しみを極むる國の道なれや　善一五六三
他の力
　諸人の憐み　洩らさじ　土車二〇七五
他の人よりもわが人　放生二四六一・弓三三三三
頼みても頼みなきは人の心なり　船辨二七七三

頼む木蔭
　三吉野の——の花の雪　二人二七三〇
頼む木蔭さへ今はなき身と　實三三三
頼む木蔭も嵐吹く　高野六〇六
頼む木蔭も撫子の　望三〇四一
頼む木のもとに雨漏りて　朝三三七一
頼むぞよ頼もしくて　俊寛一四三三
田のもの雁がねこそ連れて　花筐一五八六
頼めし人は夢にだに　淺一九四
頼めただ袖ふれ馴れし月影の　花筐二五八三
たのめて來ぬ夜は積れとも　班二六〇六
田の面に落つる雁鳴きて　放下二四四九
他方の淨土
　玉の臺の數々に——を現す　雷二四八三
戯れに名を聞いてだに偕老を契る　女一四九〇
戯れの舞
　醉に引かるる——　作一五四六
俵の藤太秀郷より八代目　遊△三一九八
田原の又太郎忠綱と名乘つて　賴三三一
旅
　迷々來ぬる　をしぞ思ふ　杜六二一・小鍛三四六七
度重たらば顯れやせん　同三一
度重たる罪　同
度重たれば顯れにけり　同
旅心筑紫の海の船出して　〇七

旅衣思ひ立ちぬる朝霞　須道行一四九三
旅衣木曾の御坂を遙々と　巴道行三三七七
旅衣今日九重を立ち出でて　第道行一七六九
旅衣末はるばるの都路を　高砂道行一八五九
旅衣八重の汐路の浦傳ひ　求道行三〇六二
旅衣八重の潮路をはるばると　知道行二二三九
旅所
神の御幸なるお——.　女三四九三
旅寢せし御裳濯川の波枕　御二九七〇
旅寢やすらむ荒き濱邊に　御二九七一
旅の衣は篠懸の　安宅次第八一・安達ヶ第一〇七
攝次第一六四九
旅の習ひ
泊りも果てぬ——　忠度一九〇六・藤榮二二四九
もの憂き事も——　杜六三三
旅の習ひの思はずも雲居の外に　竹生二〇三六
旅人の道妨げに摘むものは　求三〇六六
平の知章
物故——と書かれたり　知二三四〇
平の知盛幽靈なり　船辨二七八四
平の宗盛　熊野三三三九
旅居
神の御——.　右三四六
塔
砂を——と重ねて黄金の膚　卒一七三〇

たぶさ
手に取れば——に織る立てながら　半二四九九
折りとらば——に織る立てながら　女三四九一
塔婆　田一九九一
塔婆の金寶に至るまで閻浮檀金　雷三[illegible]
たふれ
敵の前の——.　烏二一二六
堪へす紅葉青苔の地　紅ヶ三〇八八
妙たる法の御經　鵜飼三〇八
妙なる法の受持に逢はば　梅枝四四五
妙なる法の蓮葉の花の臺　胡一一四七
妙なる法の道　小鹽三四六五
妙なる法の三つの心　西王一五七〇
妙なる御法の花の緣　身二九五二
玉霰
小笹の上の——　昭一五八三
魂いらせ給ふ　龍二三九〇
玉江の橋（富井）
袖に露散る——　山三一六七
玉垣
白木綿かかる——に　大社五八〇
玉垣の内
眞如法身の——.　金八七三
玉垣の内外の神の御末にて　羽二四九三
玉垣の内の國に跡を垂れ　雨三三七

〔玉葛〕　[illegible]
玉鬘
鶺鴒の——かかる時しも　岩一六八
思ひわたる身はそれならで——.　玉葛一九六七
涙の露の——　[illegible]九九一・[illegible]四八九
玉鬘かかる袂は　[illegible]四〇
玉鬘かけしばし　源氏二〇〇七
玉かづら來る年の緒の春毎に　作上歌一三六九
玉葛内侍　[illegible]一九五七
玉葛の内侍この初瀬に詣で　玉葛一九六三
玉葛のゆかり　夕三一三
玉衣
色香を飾る——の　鳥二七九三
千顆萬顆の——の　岩三九一
日に磨き風にさらせる——の　作二二六八
穢翼鳳車の——の色を飾り　關寺一六一九
玉衣のさゐさゐ沈み浮き波の　東岸二一七三
玉衣の袖ひきかへて　蟬一六八五
手枕
夢の——　[illegible]四四八
玉琴の緒合はせに　千一七二一
たまさかの光を見るも花心　[illegible]四六四
魂（たましひ）（コンをも見よ）
飛揚の——いづくにか獨り赴く　[illegible]
魂黄壤に去つて一十三年　[illegible]八五

魂は籠中の鳥の開くを待ちて去る　歌三六四
魂は山行の深きに傷ましむ　芭二五三四
魂は仙宮に至り　楊三一二一
魂は身を責むる心の鬼となり　船橋二七六〇
魂は冥途にもぬけの衣の　松山鏡二六八〇
魂を消す
　戀慕の涙舊里を思ふ――　楊三一二〇
玉島川にあらねども小鮎さばしる　鵜飼三〇六
玉島川の鮎を釣らせ給ふ　國八九九
玉簾
　人待つ女物病み――の光も　杜六二七
玉簾に木向といふ紋を現す　墨一五一二
玉襷
　落つる涙の――結んで肩に　草子一一九三
　風結ぶ涙の袖の――　昭一五八二
　袂の露の――　檜二六三三
　藤の衣の――　鵜飼三〇六
玉襷畝傍の山の山守も　戀一一六四
玉襷かけも離れぬ宿世とは　住上歌一五四五
たまたま
　伊勢島や汐干に拾ふ――も　岩二八八
　伊勢の海清き渚の――も　阿三八
たまたまこと訪ふものとては　自一六八五
玉章
　あなたの――こなたの文　卒一七二八
　御――と朝毎に御手に馴れし　花筐二五八一
　薄墨に書く――と見ゆるかな　高野六〇七
　誰が――のもじの關守　和三〇三三
　涙の露の――　成八〇二
玉章をつけし南の都路に　花筐一登二五八六
玉津島（和歌山）
　足柄箱根――　班二六〇三
　出雲住吉――人丸赤人の　草子一一九六
　住吉――に參詣仕り　淡一四一
　業平――にて法樂の舞　鸚三三
玉津島に參らん　嵯二一二五
玉津島の明神　草子一一八九
玉椿
　八千代をこめし――變らぬ色を　玉鬘二九八五
玉椿の八千代二葉の松の末かけて　鐵七一二
玉手箱
　契りをこめて――二道かくる　三山二九一七
玉にも貫ける春の柳の　遊三三〇四
魂のありか
　あるにもあらぬ――を　楊三一二〇
魂のありかはそこともしも　楊道行三一一六
玉の臺の數々に他方の淨土を現す　鐘三四八三
玉の冠直衣の袖　國八九六
玉の釵
　形見よとて――取り出でて　楊三一二〇
玉のかんざし柱の櫛　玉井一九八三
玉の釵羅綾の袂　宇三〇・四
玉の輿
　夕露の光かかやく――　郡七八二
玉の簾と申す寶物　六浦三〇・四
玉の簾をかかげつつ　楊三一一九
玉の段　清一七九
玉の釣瓶
　くり返す――の掛繩の　玉井一九七五
玉の戸
　四方の門邊の――を　四七八三
玉の床
　よしや君むかしの――とても　松山天二六八八
玉の御輿に法の道　住上歌七八三
玉の御手を捨てつつ　有三〇四
玉の甕を取り出でて藥の水を　現六八三〇
〔玉井〕　一九七一
玉の井
　門前に――あり　玉井一九七四
玉の緒琴
　今はの――　鳴八〇二
玉の緒琴を彈き鳴らし　鼓一〇五三
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば　六三二〇九
玉箒
玉箒　面一九八九

初春の初子の今日の――　氷二六五九
玉鉾の便りに立てし御車　夕三二四
玉穂の宮（地名）　花筐二五七九
玉穂の宮に今宮造り　花筐二五八四
玉松が枝に咲き添ふや　大原五四六
玉松の光も散るや　松尾二八五一
玉水
しのぶ傳ふ軒の――　羅三三四八
軒の――とくとくと　卒一七二九
井手の里――は名のみして　百二六七八
玉水の水上澄める御代ぞとて　養三一三四
玉藻
淺香潟――刈るなる海士人の　吳九七七
淺香潟――刈るたる岸陰の　高砂一八七三
池の――の濡衣　三山二九一九
猿澤の池の――と見るぞ悲しき　采四〇三
玉藻の前
心底曇りなければとて――とぞ　殺一六三九
鳥羽の院の上童に――と申しし　殺一六三七
玉依姫　玉井ツレ一一七一
溜り水
跡に殘れる――いつまですみは　松風二八二七
民戸ざしをささず
吹く風枝を鳴らさず――　（その項を見よ）

民の竈
國富み――まで賑はふ　放生二四六
民の竈は賑ひにけり　[illegible]
民の戸ざしもささぬ御代　[illegible]一二九八
田蓑の島（大阪）
雨に着る――　蘆五四
雨にとる――と詠み置きつる蓑　[illegible]一六七七
田蓑の島も遠ざかる　住一五四七
手向
春の――となりにけり　田一九八八
手向け返して夜もすがら　[illegible]八四七
手向草
かざしの花の――　和三〇三五
心を種の――　水無月二九四五
七夕の織る絲竹の――　關寺一六三〇
波をかざしの――　[illegible]三〇三一
手向にはつづりの袖も切るべきに　谷一九四三
手向の袖
木綿花の――も一入に　小[illegible]四五七
手向の鼓打ちて　天二四四
手向の舞樂はありがたや　天二四四
手向の舞を舞ふとかや　賀茂物七五三
手向を受くる草衣の　松蟲二八六三
〔田村〕　一九八五
田村堂の軒漏るや　田一九九四

田村丸　田シテ一九八五
田村[illegible]
坂上の――大同二年の春の頃　[illegible]
坂上の――の御願　[illegible]
ためじ
かだみて魚はよも――　鵜飼三〇六
ためしに引くや[illegible]の枝　[illegible]九八六
爲相
鎌倉の中納言――の卿　六浦三〇二一
爲時の息女　源氏△二〇三三
〔爲世〕　[illegible]
爲世　[illegible]
爲世
水無瀬の里に――といはれし者　[illegible]
爲義
[illegible]父――西へ開きし時も　七[illegible]一三二九
爲世の妻　[illegible]
袂に縋り絶えこがれ　[illegible]
袂にすがり留むれば　[illegible]
袂の乾く隙もなし　[illegible]
袂の露の玉襷　[illegible]
袂も朽ちて袖せばき　[illegible]
袂を月や昇るらん　[illegible]
多聞天
本尊は大悲――　[illegible]

多聞は鉾を横たへて　熊坂九三七
他門へ參らばこそ　錦戸二三六五
たよりとなれば早船に　玉葛クセ一九六三
便りの風は恨めしや　楊三一二〇
太郎
　安藝の――兄弟　大原五四九
　熊井――　正一三六九
　監物――　知二三四九
　上人をば――と名づけ　春日六七二
　瀬尾の――何某　風八五九
　錦戸の――　錦戸二三六三
　富士――　鞍九五九
　增尾の――種直　春榮一四〇〇
太郎坊　善界ツレ一五九五
太郎坊
　愛宕の山の――　花一〇〇八
　愛宕山――が庵室　車九六七
太郎坊に案内を申さばや　善界一五九八
たらちね
　夢になりとも――の　生二六六
たらちねの親の飼ふ蠶の繭の　松山鏡二八七五
たらちねを守り給へや　熊野三四八
陀羅尼
　千手――を滿て給へば　雷三三四二
　千手の――不動の慈救の偈　道成一八〇二

藥師の眞言千手の――　調二一三八
他力の船に法の道　遊三一〇三
たるまじ
　鬼神にても――　烏三四三五
垂井青墓赤坂とて　熊坂九三六
誰あつて百年を送る　源氏一〇三七
誰追ひ驅けて阿毘羅吽欠　安宅八八六
誰かいひし春の色げにのどかなる　熊野三四七
誰かいひし春の色は東より來る　難三三三六
誰とても隔てはあらじ神慮　鵜祭上歌四一四
誰に面を越され誰に劣る振舞の　巴三三八四
誰に問はまし
　道芝の露の命の限りをば　綾一九三
誰に問はまし道芝の露　東北二一九五
誰踏み初めて戀の道　戀一聲一一五八
誰も知れ老いらくの　賀七四〇
誰をかも知る人にせん高砂の　鞍九五三・高砂一八六一
他を助くべき力
　往來の利益こそ――なれ　鵜飼三一一
たをやか
　花の顏ばせ――に　松山天二八九一
手弱女の袖吹き返す飛鳥風　飛鳥七四
手弱女の袖も裳裾もたなびき　西王一五七五
手折枝折をしるべにて　鞍九五一
手折るは見ぬ人のため　雲林四六二

檀
　香爐をきり半ば――に枕す　蟬一六七六
斷惡修善
　聞我名者　安達一一三〇・[illegible]
短歌
　長歌・旋頭歌折句誹諧　關二一
　長歌――旋頭混本の類　蟻[illegible]
淡海公　海一七六
潭荷葉動くこれ魚の遊ぶ有様　放生二四六〇
談合　安宅八四・錦戸二三六四・放下二四三七
且過
　われ等が私宅は――にて候　木賊三三一
丹花の唇　采四〇三
斷見の科
　生死を離れば――　放下二四四七
丹後丹波の境なる鬼が城も程近し　大江五六四
短冊
　小弓に――をつけ歌占を引き　歌三五五
　尻籠を見奉れば――の御座候　俊成一四三九
〔短冊忠度〕　忠度異本一九〇二
短冊に寫し枝につけて　羅一五〇七
短冊にうつしさむらはん　草子一一八四
短冊の段　[illegible]
短冊をつけられたり　忠度一九一九
團三郎　元ツレ一〇七五・小袖ツレ一一二五

[illegible]一六八七・夜[illegible]三五七

團三郎
　鬼王か——か兄弟に一人　夜三六三
　曾我兄弟の人々に仕へ申す——　曾一六九〇
但使一生常不退　卒三〇三
誕生
　摩耶の——伽耶の成道　春日六七五
壇上に立て置き　羅生四
彈正の大弼仲國　小督一〇九八
團雪の扇も雪なれば　[illegible]六〇七
たんだく
　星は北に——の　大三四五
たんだへ
　この血を——　土蜘一〇六三
たんだ弱りに弱つて　攝一六六三
たんだ弱りに弱り　鵜一五七
段々
　劒——に折れ　盛三〇一
團々として海嶠を離る　張三四八二
團々として海嶠を離れ冉々として　三井元九九
段々壞
　刀尋——　盛三〇〇
但住衆生心想之中　菩東一六〇一
壇場
　花——月傳法院　高野六一三

丹頂の鶴も一千年の齢を君に授け奉り　鶴二〇九九
栴頭の紫には不香の花を手折り　葛六九三
檀特山のさかしき道を凌ぎ　大[illegible]元九
檀那
　汝一人の——を待ち　田一九九〇
壇に五色の幣帛を立て　卒一六四四
壇の浦(由日)
　思ひぞ出づる——のその船軍　八島二六一
壇の浦の合戦　[illegible]四
丹波路の末はるばると思ひ立つ　[illegible]九〇
丹波の少将成經　俊寛一四三
[信風]　[illegible]〇〇三

ち

地
　重く濁れるは——となれり　[illegible]四七
痴
　もとの——とはなる　[illegible]〇七
千五百種の國　玉井一九七三
中央大聖不動明王　[illegible]七八五
中央に大日大聖不動　[illegible]八三・[illegible]六三
中陰經の妙文　[illegible]一
中有
　雲となり雨となる——の道も　[illegible]六一
　黄泉——の旅の空　[illegible]四[illegible]
中有の道に迷ふなり　[illegible]八
忠か不忠になりけるか　春榮一四七
忠義
　歸るは孝行留まるは——の　[illegible]九六
忠勤を抽んでて私の心更になし　[illegible]八五
中宮御產の御祈り　俊寛一四三
中宮は正しき相國の御息女　小督一〇八六
中間
　二佛の——の衆生として　[illegible]二四

乘替　きらびやかに　鉢二五六四
中間に於て何と心を延ばへまし　弱三三二
忠言耳に逆ふ
　良藥口に苦く――　楠九一五
中將
　在原の――年經てここに　井一四〇五
中將殿の黒髮かや　清八四六
中將姫　當シテ一八三九・雲雀子方二六三七
中將姫
　失ひ給ひし――何しにこの世に　雲雀二六四八
中將姫この山に籠り給ひ　當一八四七
中將姫の精魂　當一八五三
住僧（寺門・僧などを見よ）
　闘寺の――　闘寺一六一一
　善光寺の――　柏六五六
　道成寺の――　道成一七九一
　園城寺の――　三井二九九三
偸盜
　殺生――邪婬は身に於て作る罪　東岸二一七三
中道
　無非――の眼に應す　西五〇八
偸盜の雲の上　泰一七四〇
中納言
　萬里小路の――　大原五四二
中にて結ぶ　愛宕坂九四五

忠の者
中舞　蘆△五九・七騎一三三二・二人二七一七・敦一三七・生二七一・右三五〇・賀茂物七五六・東八六四・是九八七・嵐一一五一・草子一一九八・自一三四〇・昭一三五二・正一三六五・住一五四三・西王一五七五・大會一七六四・鶴二〇九八・東岸二一七〇・初二五七七・羽二六〇七・雲雀二六四七・絵葉二七七七・楊貴二八三七・水無月二九四五・室三〇二四・紅三〇八八・熊野三三五二・吉天三三九五・綸三四五一
中門の扉を敲きけり　雷三三三四
中門の廊に出て給ひ　正一三六七
中門の脇の廊　大江五五九
中門を見やりつつ　小袖一一三
晝夜各參の擁護　春日六七二
持戒破戒を選ばず　放下二四四八
近頃誤りて候　安宅九六
近頃親着申して候　歌三五九
近頃めでたき御事　歌三六二・元一〇八六
知我心者即身成佛　安達三三〇・葵一六七・道成一八〇三・愛宕三六二〇・船橋二七六四
千方といひし逆臣ありしが　土車二〇七四
千方といひし逆臣に仕へし鬼も　田二〇〇〇
千賀の浦（宮城）
　陸奧の――わを眺めんや　融二三三五
千賀の鹽竈（宮城）
　その名や――　楊貴二八三八
千賀の鹽竈は名のみにて　融二三四九
千賀の鹽竈身を焦がす　善知三九一
千賀の鹽竈を都の内に移されし　融二三三三
誓ひ（誓願・誓約參照）
　惡魔降伏の御――　三一六八
　衆生濟度の――様々たれば　竹生二〇四一
　隔てぬ――頼まん　放下二四四〇
　末世相應の御――　弱三三三三
　利益諸衆生の御――　放生二四六三
　男山に――を示し給ひ　巴三三七八
誓ひあまたの神祭　大江山五七四
誓ひの網には洩るまじき　弱法三三三
誓ひの網に漏るべきや　實一二四七
誓ひの網に漏れに　俊寛一四二九
誓ひの網に漏れぬ　放生二四五九
誓ひの海のうろくづの　放生二四五七
誓ひの海の底ゐなく　藤六二〇六五
誓ひの海はありがたや　代一四八〇
誓ひの海も豐かにて　弓三三二七
誓ひの花
　枯れたる木にだも――は咲く　通圓六八二
誓ひの春
　逢ひ難き――に又逢ふ　盛二四五
誓ひの舩

漏らさじの——に法の人　砧二五三三
誓ひの船に乗るべきなり　竹生二〇三五
誓ひは同じ法の水　養二一三九
誓ひは清き石清水の　[illegible]生二四五九
誓ひは盡きぬ無量億の樂しみ　江島四九七
力及ばぬ事
　この上は——　[illegible]一〇八三・錦戸二三六三
力車
　戀草の——に七車　百二六七三
力なき事　春榮一四二一・東一八一八
力なく捨てし梓弓昔に歸る己が名の　[illegible]六四〇
力なし
　よしそれとても——　天二一三六
力の勝負せんとて　鳥三四三八
力をも入れずして天地を動かし　綸三四四六
直奏かたく申し上げ　皇上歌九九三
直道
　生ある——の弔ひ　[illegible]二三八三
　衆生成佛の——なり　梅枝四四三
　菩薩の——　盛三一〇〇
直道に弔ひなせる法の力　賴三三〇八
直の御返事を賜はりて　小督二一〇六
ちぎのかまへは豐かなり　飛鳥六八
地給の樂人　富士太二七〇四
千木もゆがまずかたそぎも反らず　第一七七〇
持經
　法華——の身なれば　芭二五三〇
契り
　變らぬ——を忍ぶ草の忘れ得ぬ　松蟲二八六三
契りあさき衣の片思ひ　梅枝四四六
契りあだなる妻琴の　籠三三九五
契りし事の末は違はじ　第一七七〇
ちぎれたりともこの具足取つて　鉢二五六〇
値遇
　歩みを運ぶ御——　道明一八二七
　かやうの人に——申してこそ　鉢二五五二
　假初の——も容しからず　當三三三四
　捨人に——を運ぶ　檜二六三六
　多年の御——　經二〇八五
　御法に——の度重なり　身二九五[illegible]
　開法——の結緣に　舍一三八八
値遇の緣　[illegible]一九二一・六浦三〇一七
竹葉（タケノハをも見よ）
　一酒とは——の　俊寛一四三六
　甕の——は影や綠を重ぬらん　養三一三五
竹葉の世は皆醉へり　松蟲二八六五
竹竿
　斜日——のもとに透けり　[illegible]五二七
千草
　野邊の——もさまざまに錦を彩る　身二九五一
千草にすだく蟲の音まで　身二九五五
千草の錦の[illegible]織りて　[illegible]
千草の花盛んにして　[illegible]四九九
千草の花にうつろひ　[illegible]二四八
畜生
　種々諸患是地獄鬼——　[illegible]・[illegible]三〇一
畜生修羅の悲しみも　[illegible]二六六
畜生道
　駒の蹄の音聞けば——の　大[illegible]四八
竹枝にすがり膝をかがめて　[illegible]
竹馬にいざや法の道　[illegible]六九
〔竹生島〕　[illegible]
竹生島（書目）　竹生島[illegible]
竹生島の明神は[illegible]神にて　竹生[illegible]
竹林の[illegible]は[illegible]の[illegible]にて　[illegible]五
竹林の七賢竹ゆゑ消ゆる継子を　竹雪一八八
竹林の王妃として皇女に　富士山[illegible]九一
畜類鳥類[illegible]吹く秋の風まで　弓[illegible]四
畜類の心もかねて白羽弓　大蛇三五一〇
畜類も心ありけるよと　[illegible]四
智火
　名號——には消えぬべし　[illegible]八
致景
　所の——を見るに　檜二六二四
知見（照覽をも見よ）
　諏訪八幡も御——あれ　[illegible]九六

明神氏の神も御・あれ　仲三三一
弓矢八幡も御――あれ　檀二〇一七
稚兒　關寺子方一六〇九
一――二山王　大江五六三
唯今の――達は平家の一門　鞍九五四
地獄
種々諸惡趣・鬼畜生　東三〇七三・盛三一〇一
目の前の――も眞なり　阿三九
地獄道　野守二四三四
地獄遠きにあらず眼前の境界　鵜飼三〇八
地獄に歸るぞとて　松山鏡二八八一
地獄の有樣見ても恐れぬ人の心は　善知鳥三八三
地獄の有樣を現す・淨玻璃の鏡　野守二四三四
地獄の有樣を曲舞に作り　歌三六二
地獄の苦しみは無量なり　歌三六六
稚兒も法師も知らぬ　檀二〇三三
稚兒童　同二一二一
千聲の春ののどけさよ　志一三〇三
地藏堂よと伏し拜む　熊野三三四七
千里の濱邊（和歌山）　卷六八〇三
千里の外まで上もなき道に至りて　西王一五七一
千里の道こめて住家と定む　龍虎三三六七
千里萬里も治まれる誓ひの海　代一四八〇
千里も同じ月の夜の　女上歌三四九四

千里も同じ一足　勸三三二一
千里行くも親心子を忘れぬ　隅一五三三
千里を行くも遠からず　卒一七一九
遲參
狩場に――やあらんと　小袖一一三八
遲參心得ず　生二七三
知識
出離を求むる――はこの枕なり　邯七八九
尊き――のましますは　邯七七八
知識の床を立ち去らず　殺一六五五
知識外に助け逢ひ難き誓ひの春に　藍二四五
千入
百入――に薄き濃き梢の秋は　雲二六一七
智者は惑はず勇者は恐れず　八島三一六〇
地主權現の花盛り　田一九八八
地主權現の花の色姿紛纏樹の理　熊野三三五一
地主の曲舞　花一〇〇三
地主の櫻
音羽の嵐に――は散り散り　放下二四五〇
この寺の――に若くはなし　田一九八八
東山――を一見仕り　西行一一六九
地主の花
清水寺の――　西行一一七八
治承の夏の頃　賴三三〇九
地神五代には天照大神の　源大一〇六八

地神五代の御天照大神　曾二四五〇
地神五代の始め
日神月神蛭子素盞嗚と申すは――・　淡一四七
地神四代に至り火火出見の尊　玉井一九七三
地神第四の火火出見の皇子　淡一四八
地神第四の御代火火出見の尊　和三〇三
地神二代
天神七代――の御神　九世九三三
地神の爲に皇孫を蘆原の中つ國に　鵜九六六
地神も感應の海山　弓三三九
千筋の結ぶ筋に五體をつづめ　土蜘二〇六〇
千筋の縄をかけまくも　夜三七六
地水火風空五大五智は　卒一七三三
地水火風の假に暫くもまとはり　[illegible]一一二三
池水に映る月影は下化衆生の相を　東北三三〇〇
治世の聲は安樂にて　源大一〇七五
馳走
これは馳走に――す　歌三六四
千度百度親子ぞと名乘らばやと　水無瀨二九三一
千度百夜
錦木の――いたづらに　錦木三三四五
父
一切の男子をば生々の――と頼み　[illegible]三三七一
敵を討つは・赤ヶ孝行をば　禪一六九三
[illegible]はかたくななる――を破ふ　木賊三三二四

衆生のための――たれば　西三六八一
先非を悔ゆる――赤心　[illegible]三六四八
習はぬ業も――の[illegible]　[illegible]三四八
池中の樹
鳥は宿す――　東北三三〇〇・謡三三三四
父が立ち寄れば父が影　松山鏡三八七七
父が別れはいかなれば　[illegible]六五五
父こそ變り給ふとも　藍三三四
父關延命冠者　翁二二
遲々たる春の日も所作足らねば　[illegible]三九一
千々に戰ふ大長刀　橋二五一八
父の恩の高き事高山千丈の雲も　歌三五八
父の敵を討たばやと　望三〇五二
千々の種
あつき國士の――桃花の色ぞ　西王一五七二
千々の情ありがたき　春榮一四一六
父母（フボ・ブモをも見よ）
乳房の恩の――に　高野六〇五
父母さへに捨子となる　[illegible]三二五
父は山　歌三五八
秩父の莊司重忠　[illegible]二二三
秩父の山（埼玉）
明暮思ひを信濃なる――　竹雪一八七八
東路の――の松の葉の　春榮一四一八
父を討ち
股のやうかは――　春榮一四〇六

千束
錦木は――になりぬ今こそは　錦木三三五七
錦木を日毎に立てて――とも詠み　錦木三三四七
千束の契り忍ぶ身の　[illegible]
地頭
藤屋の先　藤左衛門　[illegible]二一五一
千年（センネン・センザイ・センジュウをも見よ）
君が――のある數をたとへても　綸三四四五
君の――を經ん事も　翁七
露の間に――を經るや　春三一三六
靡く稻葉の色までも――の秋　東方二八〇
延ぶるや――たるらん　[illegible]八一〇
松も――の緑にて　[illegible]二五八四
われも――を經る心地する　俊寛一四二七
千年の秋をも限らじや　松蟲二八五六
千年の命延ぶとこそ聞け　[illegible]一九四二
千歳の坂
つくからに――をも越えなんと　[illegible]一六七七
千歳の榮ゆく杖　[illegible]一六七七
千年の松は代るまじ　[illegible]八七[illegible]
千年の山（京都）
國土豐かに榮ゆくや――も　氷二六五五
千鳥
淡路潟通ふ――の聲聞きて　[illegible]二九
淡路潟通ふ――の聲聞けば　[illegible]一三
川風寒み――鳴く　谷一九四四

しば鳴く――音ぞ遠き　忠度一九〇八
ともねの――も聲々なり　[illegible]五一三
渚の――泣くばかりなる　俊寛一四三〇
汀の――鳴く田鶴も和光の影の　[illegible]四五三
夕波――聲添へて、　[illegible]三〇二三
夕波――友寢して　知三三四六
千鳥鷗の沖つ波　[illegible]二四九〇
千鳥ともいへ鷗ともいへ　[illegible]一五三四
地に在らば願はくは連理の枝　[illegible]三二二
茅にて作りたる輪を持ちて　[illegible]一九四二
地に又住めば下界なり　[illegible]二四八九
血沼の大丈夫
小竹田男・――と申し者　求三〇六八
血の涙
空にて――を降らせば　[illegible]九二
茅の人形を人尺に作り　[illegible]七一〇
地は陰を以て用となす　[illegible]六八四六
千箱の玉を奉る　[illegible]三三三
持法駄都羅王　[illegible]六六八
血は涿鹿の河となつて紅波楯流し　[illegible]一二一七
血は涿鹿の河となつて紅波楯を流し　[illegible]三三〇七
血は涿鹿の河となり紅波楯を流し　[illegible]五六
[illegible]掛帶引きかへてただ親子が着す　[illegible]九八四
千早に歸り　楠九一三
千早ぶる神遊び　[illegible]三三九

千早振る神に歩みを運ぶ　賀七三四
千早振る神の忌垣も越えつべし　水無月二九四四
千早振る神のひこさの昔より　第八
千早ぶる神の祭早めん　逆二二〇八
ちはやぶるなり天少女　[illegible]生二四六五
ちはや振るたりゆだちの袖　御二九七一
千尋の大蛇となつて　春日六八〇
千尋の縄を腰につけ　海一七九
ちぶさの海山の　[illegible]二〇七八
乳房の恩の父母に　高野六〇五
持佛堂
　ある時おとといは——に參り　[illegible]三〇五三
持佛堂に看經して　[illegible]八六九
持佛堂に立ち出て燒香せばや　[illegible]山三六八七一
持佛堂に參り勤めを始めう　[illegible]九三五
持佛堂の床の上に走りあがり　錦戸三三七三
千重ふるや雪を廻らす雲の袖　[illegible]三三三
巷に謠ふ聲までもこれ和歌の詠に　[illegible]一三九八
巷にうたふ和歌の聲　[illegible]八六四
血祭
　今日の軍の——にせよ　[illegible]一六三〇
智滿大菩薩
　正一位勳一等氣多不思議——　[illegible]四一七
千本の櫻
　吉野の——　[illegible]二〇三
千本の櫻にこそ吉野の種取りし花　[illegible]三三九〇
千本の櫻を植ゑ置き　西行一一七七
千本の花
　吉野の山櫻——の種とりて　嵐二〇五
　吉野の山櫻ここも——の影　[illegible]一七三七
長
　池田の宿の——をば熊野と申し　熊野[illegible]
　鎌倉殿が江が谷の　に預け　[illegible]六三七
　手越の——が女　千一七〇一
長安のなづなからなづな　求三〇六七
長閑寞の巷　春榮一四一四
聽我說者得大智慧　安達一三〇・[illegible]一六七・[illegible]一六〇五・道成一八〇三・[illegible]三六三〇
長歌短歌　[illegible]二・[illegible]二三一
張儀が英聲を後に聽す　[illegible]五〇一
定業亦能轉は菩薩の直道　[illegible]三一〇
定相
　人間の——を守り　泰一七三九
長者(高[illegible])　[illegible]三三五九
長者(野上)　班狂言二五九七
長者(池田)　熊野三三四〇
頂上は八葉にして　富士山二六九〇
聽衆の中より若き女性の走り出て　[illegible]二六五
聽衆の眠り覺まさん　自一三五九・[illegible]一五五七
聽衆の人音　[illegible]一五五三
茶臼は挽木に[illegible]まるる　[illegible]四五〇
長生殿
　君の齡も——に還御なる　鶴二一〇〇
長生殿の内には春秋をとどめ　[illegible]七八二
長生の家にこそ老いせぬ門は　[illegible]
長生不老の日月まで甍を竝べて　咸七九三
長生[illegible]山の有樣もこれには更に　[illegible]二一八
長と不和なる事の　班三六〇一
定に入り
　一向に念佛三昧の——　當一八四七
長能が言葉にも有情非情のその聲　高砂一八六六
定の弓
　愛染明王は——慧の矢にて　[illegible]三三九九
聽竇刹の耳に充てり　當一八五三
長範　[illegible]一九三一・[illegible]
長範
　熊坂の——　熊坂九四〇
　熊坂の——六十三　烏三四三六
帳門開かざるに　井[illegible]〇一
長樂の鐘の聲は花の外につきぬ　[illegible]三九[illegible]
〔張良〕　二〇四三
張良　[illegible]
張良
　漢の高祖の臣下——　敦九六〇・張二〇四五
張良が[illegible]術を盡しつつ　[illegible]三七五

著到
　一番に馳せ參じ――につき　鉢二五六〇
[illegible]書　[illegible]
重代の作家
　比叡山を――とし　大原五六〇
重代の太刀
　家に傳はる――　春榮一四一七
　別當に傳はる――　元一〇九二
重代の太刀を佩き　[illegible]五三
千代
　神は――まで榮うる御代　岩一九五
　菊の露うち拂ふにも――は經ぬべき　角六八
　謠はれつつも――を唱ふる　[illegible]七三
　鶴も――をや重ぬらん　鶴二〇九八
　所――までおはしませ　翁六
　松にたぐへて――までも　岩二六八
重結
　水金二輪の――に顯る　歌三五八
重源
　俊乘坊――　安宅九三
重山
　月――に隱れぬれば扇をあげて　班二六〇五
重陽
　時は――所は山路　俊寛一四二六
直下と見れども底もなく　海一七九

勅勘の身の悲しさは讀人知らずと　忠度一九一五
勅使　[illegible]リキ二〇二・[illegible]リキ一六八五・[illegible]リキ一七一・[illegible]
リキ四二一・江島リキ四八九・[illegible]リキ七七五
[illegible]リキ八〇五・[illegible]リキ八六九・[illegible]リキ一〇六
一・小督リキ一〇九五・白鬚ワキ一四六一・天
[illegible]リキ二二二・[illegible]リキ三三九・[illegible]リキ一六八三
[illegible]リキ六八五・[illegible]リキ二一七・[illegible]三三一
[illegible]リキ三四四一
勅使
　一條の院の――　小督一二二三
　春日の祭の――　[illegible]六六六
　帝より――　[illegible]三三一
勅使これまで來りたり　[illegible]七八一
勅使三度に及ぶならば　[illegible]三三六八
勅使立つて　[illegible]一六四五
勅使に與へ　[illegible]二四〇三
勅使に下向申し　[illegible]四一五
勅請
　この神を――し作り　[illegible]四一七
濁世
　神も――に應じ給ひて　道明一八三一
濁世の人間殊に掬きわれらにて　[illegible]一八六五
濁世の人間と生まれ　大[illegible]五七六
濁世のわれ等　第一七七一
濁塵

有縁の――に[illegible]　[illegible]
勅なれば
　いとも畏き――宿はと問はれて　小督一一〇七
勅に應せんしるし　江島五〇〇
勅に從ふこの[illegible]は[illegible]　[illegible]
勅の使　鵜祭四一八
勅の使
　唐の天子の――方士　[illegible]三一八
[illegible]の[illegible]なればこの[illegible]は　[illegible]九五四
直路
　彌陀來迎の――　山三一六九
勅を受けわが立つ杣を出で　[illegible]一二〇四
女工の長き營み　[illegible]九八二
女工の昔を思ひ出づる　[illegible]九七八
如在の[illegible]を仰ぐ　[illegible]八四
徐市
　秦皇――を疑はば驪山ちよの春の風　江島四九三
千代童　善知子方三八一
千代に八千代にさざれ石の　老五三三
千代に八千代のためしまでも　[illegible]二二四
千代に八千代をさざれ石の　春榮一四一八
千代の秋
　松は十かへり――　道明一八二七
千代の影添ふ若緑かな　春榮一四一八
千代の影を守らん　[illegible]一一六五

千代の聲
松の風——のみいやましに　放生二四五七
千代のためしの數々に　鵜上歌二〇九九
千代のためしな松蔭の　養三一三一
千代の古道跡ふりて　松尾二八四二
千代の古道たどり來し　小督一一〇四
千代の御聲を松風の　弓三三三〇
千代もと祈る子の爲　熊野三三四五
千代も人には添ひてまし　楊三一二四
千代や萬代と民も榮え　富士太二七〇七
千代萬代と撫ひ給へば　鵜二〇九九
千代萬代の末かけて　鵜祭四一四・御二九六一
千代萬代の春　老五二九
千代萬代の舞の袂　住上歌一五四三
千代萬代も限らじと謠ひ　梅四三三
女郎
俗呼ばつて——とす　女三四九〇
女郎花(ヲミナメシをも見よ)
盛りふけたる——の　鳩三四八一
千代をこめたる竹の杖　金八七二
千夜を一夜
秋の夜の——に重ねても　六浦三〇一七
散らぬさきにと尋ね行く　春榮次第一三九九
塵
君が代は千代に一度ゐる——の　正一三六五

散りかかる花の木蔭に立ち　昭一幕一五八〇
散りかかる花や曇るらん　昭一五八七
散りかかるをや曇るといふらん　櫻一三三六
散りがたになりたるとや　遺一三三一
塵積つて山姥となれる　山三一八三
塵積つて山となる　高砂へ一八六八
散りなん後に都へ行かん　梅四二六
散りにし花の名殘には　禪次第一六九〇
塵に交はり
分段同居の——　嵐二一一
塵に交はる神心　白三四九・春日六七〇・道一三〇五
代一四八〇・龍田一九二七・和三〇三一
塵に交はる和光の影　賀茂物七五一
散りぬれば後は芥になる花と　遺一三三六
塵の浮世にも　鵜祭四一四
塵の鏡の影を恥ぢて　花筐二五九二
塵の身
心にかかる——は拂ひもあへぬ　昭一五八六
塵の世
神も交はる——の　小鍛三四五七
本覺の和光に交じる——を　御三九六七
塵の世に交はる誓ひ頼もしや　松尾二八四五
塵ひぢの積る木の葉を　雨三三四
塵土より起つて天雲かかる千丈の峯　山三一七九
散りもせず咲きも殘らぬ花盛り　小鍛上歌三四五八

ちりやたらり　翁六
散るか賀所の萬城の　紅三〇八七
散る花
いかなればむなしき空に——の　藤二七三〇
散るを惜しまぬ人やある　熊野三三五三
散ればぞ誘ふ誘へばぞ散る　櫻一三六八
散ればぞ波も櫻川　櫻次第一三三五
智慧の矢
大悲の弓には——をはめ　田二〇〇〇
地を得れば安し
天を得れば清く　竹二八二九
智を捨てても愚ならず　東岸三一六九
地を踏じ
安樂寺の——　藍二四四
地を走る犬[illegible]に責められ　景清六九二
地を走る獸容を翔る翅まで　江ノ三三六八
沈香
叢物の——たから切蔓の　曽一五七九
陳氏
第一つ残て來り——が肩に　松山鏡一六八九
唐土に——とて賢女の聞えあり　松山鏡一六七九
沈璃香
梅檀——の上に立ちのぼる　谷三一九二
夢中の夢
百年の榮花は——　邯鄲一九八

座斷
過去——の如く　春榮一四一四

つ

築地
鐵の——方四十里　盛七九三
通
飛行自在の——を得る　東方二八一
通道
天地陰陽の——として　富士山二六九〇
通力
鬼神の——忽ちに　飛雲三六二〇
鬼神は——失せ　鐘一四五八
毒酒に醉ひ伏し——失せて　大蛇三五一三
通力自在の遍滿なれば　巻一七四一
通力自在も失せ　皇九九七
通力盡き果て　第一七七五
通力の身を變じ　小鍛一二一九
通力遍滿の奇特を見せん　上世九九九
通力を失ふ天罰の　一角二八三
通力を失ふばかりなり　大江五六三
通力を以てよく見るに　巻一七四〇
つうわい〳〵　吉静△三八一
繼がざるはこれ藥なり　梅枝四四五
柄長におつとり延べ　錦戸三七三
束ね緒
絲の亂れの——も　[illegible]
塚の上の草茫々として　関一三五四
塚の神
天竺にては班足太子の——　殺一六四四
塚の草
松も老いたる——　井三四〇五
束の間
牡鹿の角の——も　一角三六〇・鶴卜三五三
使の泣きて歸りしは　禪道行一六九一
使は來たり馬に棧　鳳九五一
塚より女郎花一本生ひ出て　女三五〇〇
塚を守る悲魂は松風に飛び　[illegible]
月
明石潟——待つ方に行く舟の　住一五四四
秋の——の水底に沈む　千一七〇二
暗濤——を埋んで清光なし　通盛二八九九
一心三觀の——滿てり　身三九五〇
一張の弓の勢ひ　心にあり　[illegible]四五一
肩上の笠には無影の——を傾け　葛六九三
木隱れの——に現れぬ　雲林四六四
心づくしの木の間の——の　枝一九七
心も西へ行く——の　實一三五四
五夜の哀猿——に叫ぶ　蝉二〇四九

今宵の――の惜しきのみかは　蟻三四八〇
孤輪の――を戴き　三輪二九七八
三密の――　葵一六四
自性の――の光を添へ　調二一二九
眞如の――（その項を見よ）
西樓に――落ちて花の間も　籠三三九三
千里に隈なき――の夜　姨三四七四
それは明州の――なれや　野守二四二四
誰が世と――はよも訪はじ　砧八三三
袂を――や昇るらん　檜二六三三
科なうして配所の――を見る　檀二〇一〇
楓落ちては――も又常住の燈火を　大原五四一
共に憐れむ深夜の――　宋三九八
茅店の――　養三一三〇
松島や小島の海士の――にだに　松風二八二八
磨かれ出づる秋の夜の――　木賊二三〇七
三笠の山陰の――かも　野守二四二四
水に近き樓臺はまづ――を得る　芭二五四一
水の――かや見れども手には　熊坂九四五
無上正覺の――に覺まし　葛七〇〇・草薙八八六
松尾二八四六
山の端の心も知らで行く――は　半二五〇三
夕三三一一
庾公が樓に登りしも――に詠ぜし　三井二九九九
夜の車に――を載せて　松風二八二九
鷲の山いかに澄みける――なれば　現一〇三一
姨捨山に照る――を見て　姨三四七五
つき出だしたる扇づかひ　國二一三三
月落ちかかる淡路島山　弱三三三五
月落ちかかる山葛の　佛二七九七
月落ちかかる山城も　富士太二七〇一
月落ち鳥啼いて霜天に滿ち　三井三〇〇二
月落ち鳥鳴いて霜雪天に滿汐　道成一七九五
月海上に浮かんでは兎も波を走るか　竹生二〇三六
月海上に浮かんでは波濤野火に似　八島三一四七
月影
池水に映る――は下化衆生の　東北三三〇〇
積めただ袖ふれ馴れし――の　花筐二五八三
廻りあふべき――を秋の頼みに　花筐二五八三
月影たまらぬ閨のうち　安達一〇九
月影の移ろふ花の顔ばせ　松蟲二八五六
月影は雪にて明くる箱根山　元上歌一〇七八
月頭には東にあり　藤戸二七四三
撞鐘退轉仕り　道成一七九一
雑木の櫻　泰一七四一
月淸き夜半とも見えず　土蜘一龍二〇六〇
月淸見潟富士の雪　羽二四九三
月毛のこの駒を引き立て　鵜二二一
月毛の駒
秋の夜の――に心して　小督一一〇〇
月こそさはれ蘆の屋　松風二八二九
月こそ友よ　卒一七二九
月こそ桶にあれ　松風二八二九
つぎ櫻
家を花若――　烏三三〇五
月さへ濡らす袂かな　松風二八二六
月常住の地を占め王城を守る神德　松尾二八四七
月眞如の光をかかげ　山二一八〇
月すさまじく風高うして鶴歸らず　櫻一三三六
月住吉の神遊び　高砂一八七三
盡きせぬ宿
この泉――に返し授け置き　大瓶一七六五
月千里に明らか
夜庾公が樓に登れば――　雪三一八七
月千里に明らかなり　竹雪一八八四
月鏡屋を穿ちて夢なりがたき　草二五三三
月重山に隠れぬれば扇をあげて　東三六〇五
月傳法院　高野六一三
月なみ
水の面に照る――を数ふれば　源三三三
月に嘯き水に戯れ波を穿ち　天二一四五
月に詠じて闇浮に下り　鉢一五三一
月に陰
花に淸香――　雲林四六一・西行一二七九・春一七七六
田一九九二・山二一七八・小鍛二四六六
月に棹さす時もあり　通盛二九三一

月内に流る
　磯砧緩く急にして　砧八二二
月にしらむは劒の光　八島三一六三
月にそみて遊ばん　鵜三四八二
月に散る花の　栄三九八
月に訪ふ宿りは假の露の世に　小督二二〇八
月に鳴けば同じ雲居の時鳥　栄四〇九
月に馴れ花に添ふ心も老と　源大一〇六五
月に馴れ花に戯るる秋草の　鵜三四八四
月には見えじかげろふの　葵一五九
月には亂るる心あり　三井二〇〇〇
月には愛でじこれぞこの　鸚二四
月には行くも晴からす　通小七七〇
月にめで花を詠めし古の　賀茂物七五六
月にも疎く雨をだに聞かぬ蓬屋の　鐘一六八六
月にもたどる蔦の細道　定二一一四
月にも花にも捨てられ　賀九五四
月にも行く闇にも行く　卒一七三九
月にやあくがれ出で給ふ　小督一一〇二
月にや鐘は冴えぬらん　三井二九九八
月の雨
　心にかかる――　富士太二七〇〇
月の入る雲も浮かむや沖つ舟　白樂上歌二四七二
月の色風の氣色　砧八三四
月の色人は三五夜中の空に　羽二四九四
月の影
　朧たる雁の姿や――　自三四八
　生死長夜の――　昌一五三一
　露の間に宿るか袖の――　西王一五七三
　伴ふものは――　竹雪一八七九
　涙の露の――　關一五八三
月の影は天にかかつて萬水の底に　[illegible]一六八〇
月の笠　[illegible]五四
月の桂
　月宮の――　遠一九二
　光散る――も花ぞかし　三山二九三三
　久方の――の男山　放生二四六六
　久方の――も手に取るばかり　鶴四五五
月の桂の川瀬舟　卒一七三一
月の桂の花や咲く　羽二四九二
月の桂の光添ふ　玉井一九七五
月の桂の緑の髪も　三山二九一九
月の桂の身を分けて　羽二四九二
月の顔
　影幽かなる――　松風三八二七
月の顔ばせも曇りがちに　定二一一六
槻の木
　木の間になさん――　金八七三
月の盃急ぎつつ　元一〇八五
月の盃さす袖も　紅三〇八八
月の盃取の間も　[illegible]
月の盃とりどりに　[illegible]
月の盃なりとても[illegible]　[illegible]
月の下蔭刈り持ちて　[illegible]
月の傷には浮雲の種　[illegible]
月の出汐の沖つ波　[illegible]
月の友人まどろむ[illegible]　[illegible]
月の名近き秋なれや　[illegible]
月の光
　五更唯識の――は春日の里に　[illegible]四〇
重信
　佐藤――能登殿の矢先にかかつて　八島三一五三
　繼信――は八島にて討たれ　[illegible]一六五四
繼信が子　[illegible]
繼信の母　[illegible]一六四七
月の前にも友待つや　[illegible]
月の前の一夜の友　[illegible]
月の前の調めは夜寒を告ぐる秋風　[illegible]八〇一
月の御舟に棹さして遠き客は　[illegible]
月の御船の佐保の川面　春日[illegible]七九
月の御船の水馴棹　佐三一七八
月の都に入り給ふ　[illegible]
月の都の外までも　小督二一〇七
月の都の舞樂まで遷せる方も　皇九九四
月の都の山陰の賀茂の宮居　賀七[illegible]

月の都を立ち出でて　安宅八二・大江五五六
月のむら戸を押し開けて　田一九九四
月の夜遊
　驪山の宮の內——の羽衣の曲　楊三一二三
月の夜遊を始めん　住一二七四
月の夜遊を見せ申さん　吉天三三九三
月の行方もそなたぞと　春日次第六六九
月の行方をしるべにて　雨三三九
月の夕の浮雲は　歌次第三六三
月の夜頃を厭ひ　鵜飼三〇一
月の夜舟
　江口の君の川逍遙の——　江口四八二
月はかの如來の右の脇士　姨三四八二
月ばかりこそ昔なれ　金一三九〇
月は雲居に歸るべし　國八九四
月は古殿の燈火を挑げ　大會一七八〇
月は木の間にて心筑紫の旅の道　絃一〇四六
月はさせども柴の戸を敲く　富三三三四
月は一つ影は二つ滿つ汐の　松風二八二九
月は程なく入汐の　道成上歌一七九三
月は待つらん月をば待つらん　通小七七一
月は見ん月には見えじながらへて　草薙上歌八八二
　雲雀上歌二六四三
月は昔に變らめや　江口四八二
月は昔の友ならば　江口次第四七四
月は漏れ雨はたまれととにかくに　雨三三三
月は山風ぞ時雨に鳰の海　三井上歌二九九七
月は宵の間　鵜飼八一一
月日（ジツゲツ・ニチグワツをも見よ）
　蒼天に——の光なく　蟬一六七四
　流れて早き——かな　旅五〇八・錦木二三四五
月日曇らぬ天つ神地神二代を　九世九三二
月日こそあれ今日この頃　住一五四五
月人男の舞なれば　富七八六
月日の道に關守たければ　松山鏡二八七一
月日經て移れば變る眺めかた　六浦クセ三〇一六
月日も受けよ行く末の　春上歌三一六
月平沙を照らせば夏の夜の霜　雨三三〇・經二〇八六
月星は隈もなき　猩一三五一
月また出づるそたよりに　白樂二四七一
月待つ程の轉寢に　紅三〇八八
月待つ程の慰めに　白一三二七
月見ぬ里に住みや習へると　三井二九九六
月見る方にと山廻り　山三一八三
月見んとての海士のしわざに　阿三三
月も動くや秋の水　放生二四五六
月もおしてる難波の浦　梅四三三
月も影さす棹の歌　江口四八三
月も假寢の露の宿　芭二五三三
月も雲も白妙の袖を飜し　內二七八
月も曇らぬ天の原　東一七六六
月も曇らぬ日の本や　羽二四九三
月も心や澄ますらん　井三四〇二
月も霜も白和幣　龍田一九五三
月も袂や濡らすらん　檜二六二五
月も流れを尋ねてぞ澄む　賀七六八
月もはや出汐になりて　融・當三三三
月も光や磨くらん　金八七一
月も更け行く天の原　九世九六八
月も南の海原や　八島次第三一四五
月もろともに出汐の　高砂一八七一
月もろともに出でて行く　卒上歌一七三〇
月やあらぬとかこちける　夕三三一〇
月やあらぬ春や昔と詠めしも　井二四二一
月やあらぬ春や昔の春ならぬ　雲林四八七・杜若六三七
　業平物七五六・小鹽一二四六五
月雪
　更科越路の——　藤榮三二五七
　四季ならば春秋——の眺め　烏三四三一
月雪の古き寺井は水澄みて　舍上歌一六八九
月雪の三吉野なれや花鳥の　國九〇四
槻弓
　運も——のやたけ心も　生七七一
槻弓のもとの身ながら　八島三一五八
槻弓の八洲の波の　[illegible]一六〇六

月讀
　宮に匂ふ――の渡り來る影も　[illegible]一七七一
月讀の神
　自性眞如の――とも示現し　[illegible]九六七
月讀の明神の御影の尊容　[illegible]四五〇
月夜よし　小竹一一〇八
月より外は友もなし　松風二八二六
月若　竹生千手方一八七五・蘆葉千手方二一四七
月若
　七百餘町の所一男――に讓り　藤榮二一五三
月若の姉　竹生ツ一八七五
月若の實母　竹生ミミ一八七五
月を出だせる扇の繪の　[illegible]二六二〇
月を隱して懐に持ちたる扇　[illegible]二六〇八
月を友寢の夢ばかり　[illegible]上歌二〇四一
月をばながめあかすとも　葵上歌一五九
月を招き螢を集め　[illegible]三三七
月をも思ひ雨をさへ厭はぬ　[illegible]三三
月をも思ひ雨をも待つ　雨三三一
月をも手に取るや帝釋修羅の戰ひ　[illegible]二〇九一
月をも運ぶなり　[illegible]五一
月をも日をも手にとる　[illegible]五一六
月をも見雨をも聞けと　雨三三四
月をや船に乘せつらん　[illegible]五九一
月を山に見て指を忘るる思ひ　[illegible]下[illegible]四四九
つくからに千歳の坂をも越えなん　[illegible]一六七七
筑紫
　名に負ふ心――とて　道明一八三三
　まづ淡路島紀の國伊勢志摩――四國　[illegible]三三二
筑紫とは西ぞとばかり　藍上歌二二七
筑紫人
　心をさへに――の　[illegible]三六
筑紫人虚言すると聞きつるに　藍上歌二三三
筑紫寺法の僞にと思ひ立つ　[illegible]行[illegible]七五
つくづくと春のながめの寂しきは　羅上歌三三四八
筑波(茨城)
　五臺山の峯みあらば吉野――を　[illegible]日六七三
筑波嶺の木々の梢　[illegible]九一
筑波何某　[illegible]生ワキ二四五三
筑波の何某
　筆島の神藏――　[illegible]生二四五五
筑波の山
　ここも――やらんと　高野六〇八
筑波山(茨城)
　廣き御惠み――の陰よりも繁き　[illegible]三三
筑波山このもかのもの花盛り　櫻上歌一三三八
九十九髪
　面影に――　[illegible]一六
　百年に一年足らぬ――　[illegible]一七三六
つくも髪の御幣も亂れ　[illegible]二八一三
つくも髪われや戀ふらし面影に　[illegible]一六六七
作りし罪も消えぬべし　[illegible]一七[illegible]
作り田　[illegible]
作り山伏
　判官殿十二人の――となつて　[illegible]八[illegible]
黄楊の櫛
　人にや[illegible]も――こし來る汐を　松風二八二九
圓[illegible]の氷室(丹波)　[illegible]
黄楊の枕
　返すや夢の――　雲林四六九
黄楊の小櫛はささず來にけり　[illegible]
厨子
　紗羅の守護神の御――の扉に　[illegible]八一
蔦
　軒には――朝顔這ひかかり　大原五四一
蔦葛に――身を縛め　葛六九六
蔦葛のみ這ひかかり　遊三一九六
蔦葛這ひまとひ形も見えず　定二一〇八
拙かりける身の業と　鵜飼上歌三〇一
津田の入江青葉後瀬の山々　[illegible]六[illegible]
蔦の細道
　月にもたどる――　[illegible]二二四
蔦の細道分け過ぎて　[illegible]七五五
傳へ聞くかの一行の　[illegible]上歌[illegible]八
傳へ聞く唐土の　[illegible]一二四七

土
あらかねの――といひ　逆一二一三
〔土蜘蛛〕　二〇五五
土蜘蛛　土蜘ミテ二〇五五
土蜘蛛
葛城山に年を經し――の精魂　土蜘二〇六五
〔土車〕　二〇六九
土の車　土車二〇七二
土はさながら石かねなりしを　逆一二一三
土橋
下邳といふ所に――あり　張二〇四五
土は精劍　滿八五四
地久しく
天長く――して　難二三三八
土も木も
大君の國なれば――　難二三三三
土も木も大君の御影にいかで洩るべき　氷二六五九
土も木もわが大君の國なれば　大江五六九
高砂一八六七・土蜘一聲二〇六四・土車二〇七五・羅三三五〇
土も木もわが大君の神國に　田一九九九
土屋三郎　七騎ツミ一三〇五・盛リキ三〇九三
つつましながら御神の　玉井一九七八
鼓
綾の――　綾一九四

柞木の枝に――を掛け　[illegible]一九一
諫鼓苔むすこの――　籠三三九五
宜禰が――にたくふなる　現一〇二一
ていとうと打つ波の――も　逆一二〇八
ていとうの――の音　雨三三八
ていとうの――の聲々に　住一五四二
天より眞の――降り下り　天二一三三
時守の打ちます――聲聞けば　[illegible]三三九四
波の――や風の節　東岸二一七三
波の――を打てば　絃一〇五七
念佛申し――を打ち　土車二〇七三
ふるき――の苔むして　難二三三七
もとより――は波の音　藤榮二一六〇
鼓の聲も時ふりて　籠上歌三三九五
鼓の聲も音に立てて　籠一聲三三九五
鼓の聲や二十五聲の　源太一〇七三
鼓の時も移るなり　天二一三九
鼓は瀧波　山三一七九
鼓は波の音　自一三四三
鼓は波の音笛は龍の吟ずる聲　白樂三四七八
包み井の隱れて住める　蘆五八
包み井の深き心の底ひなく　梅四六九
包み井の水隱れて住む　知三三四四
鼓をかけて一時づつ時を打つて　籠三三九〇
鼓を苔に埋まん　富士太三七〇六

包む事はなくとも　雲雀二六四四
包むも事によるものを　水無瀬[illegible]
包めども袖にたまらぬ白玉は　圖子一六一七・[illegible]三九一
包めどわれも穗に出でて　通小七六八
つづりさせてふ蟋蟀茅蜩　松蟲二八六五
つづりさせよと鳴く蟲　錦木[illegible]五五
つづりの袖
手向には――も切るべきに　谷一九四三
筒井筒の女とも聞えしは有常が娘　井[illegible]四〇七
筒井筒井筒にかけしまろがたけ　井[illegible]四〇七
筒井の淨妙　賴三三一〇
つて
嘆れ行く幻もかた――にも　[illegible]
夙に起き夜半に寢覺め　源大上歌一〇六五
〔綱〕
綱　[illegible]四五
綱(人名)
貞光季武――公時　大江ワキツレ五五[illegible]・羅ワキ[illegible]四五
綱(物名)
煩惱業苦の三つの――に繫がれ　春榮[illegible]四[illegible]
繫がざる船
命を知れば江のほとりに――　碇[illegible]五八・大原五四七
繫がぬ船のかひもなく　大佛一七四六
綱手
出舟も心ひく花ぞ――なりける　[illegible]

綱手かなしきたぐひかな　玉葛一九五九
綱手を手に繰りかへさき　昔[illegible]九四
つなぬかれ
阿毘羅吽欠に――　禪一六九七
つなぬき
劒の先に――給へば　調二二三〇
綱はしるしを賜はりて　羅上歌[illegible]五一
綱麻呂の獄に多結の浦底さへ　藤[illegible]
常の衣
色香妙にして――にあらず　羽二四八八
常の燈火
宮寺の――明々たり　道明一八三五
常の燈火影清く　誓一五六二
常の道
道の道たるは――にあらず　草子一一八四
〔經政〕　二〇八三
經政　經[illegible]二〇八二
經政
但馬の守――は未だ童形の時より　[illegible]二〇八五
但馬の守――もはや討たれぬ　通盛二九〇八
經盛われらを集め　敦一三六
常世　鉢シテ二五四五
常世
佐野の源左衛門の尉――　鉢二五五九
常世が本領佐野の庄　鉢二五六九
常世の妻　鉢ツレ二五四五
常よりも春へにたれば櫻川　櫻上歌[illegible]
角
年經る――には雲霧かかり　大蛇三五一三
津の國のなにはの事に至るまで　[illegible]
津の國のなにはの事も忠度なり　俊成一四四三
津の國の難波の春は夢なれや　[illegible]六一
角はかぼく眼は日月　[illegible]
燕
梁の――のならひすみねたき事　竹雪一八八七
梁の――も皆子ゆゑこそ物思へ　唐一八一九
鍔もと
打物の――くつろげ　夜三七四
つはものの交はり頼みある中の酒宴　羅[illegible]四九
終に逢ふ瀬は程あらじ　小督一一〇八
終には隠れよもあらじ　春榮一四〇八
終の住家
いづくか――なる　西行一一七四
終の道よも闇からじ　盛三一〇二
終の宿りは知らせ申しつ　半二五〇五
つほい
馴れて――は山伏　大江五六四
頭北面西右脇臥　白鬚一四六八
壺に泉をたたへ　猩一三五三
局々の女房達も　草子一一九一
妻
唐衣きつつなれにし――しあれば　[illegible]
つま
白き扇の――いたう焦がしたり　[illegible]
爪木
賤が――の斧の音　[illegible]
毎日木の實――を持ちて　[illegible]
妻衣
おのが――それならで　[illegible]
つま木の道
馴れつつも――の苦しきさ　飛雲二六二五
爪木樣を折り供御に供へ　大原五三九
爪櫛
稲田姫の湯津の――とりなし[illegible]　大蛇三五〇九
爪ぐり
水晶の數珠を――　盛三一〇七
妻琴
その――の引きかへて　[illegible]二九四六
契りあだなる――の　[illegible]
引き別れにし――の　砧八三六
妻戀ひかぬる小牡鹿の　放下二四四九
〔妻戸〕
妻戸にくわつと吐きかけ　[illegible]
妻戸をきりりと押し開く　[illegible]七〇五

妻戸を放ち出でたれば　孝三二二
つま匂ひの鎧　知二三四八
夫の敵いざや狙はん　富士太二七〇五
夫の後生善所をも祈らばや　柏六六〇
爪はぢきする内に三千世界を驅け　舎利一三九三
つまもこもれりわれもまたこもる　小鹽三四六七
妻や重ねし難波人　蘆五七
妻や籠りし園原の　木賊三三〇六
つまよつて
　方便の矢を――　放下二四四五
詰り
　ここの面廊かしこの――に　熊坂九四五
妻をしのび子を尋ぬるも思ひは同じ　隅一五三五
罪科は人間にあり　三輪二九八四
罪の雲
　懺悔に――消えて　船橋二七六四
罪の報いを知らせけり　卷二八〇六
罪も同じ罪配所も同じ配所　俊寛一四三九
罪も報いも因果の苦しみ　巴三三八三
罪も報いも後の世も忘れ果てて　鵜飼三〇六
罪をあらはす淨玻璃　昭一五九二
罪を斬る彌陀の劍の　山三一六八
積むとも盡きじ重くとも　百二六七二
爪
　銅の――を磨き立て　善知三九三

つめつ開いつ戦ひ　兼三五一七
頭面接足歸命禮　藍二四四
津守の浦（大阪）　高二八七
津守の浦
　波はさながら白雪の――に　住一五四四
　山の如く――　高二九五
津守の浦の玉意の如し　高二八九
津守の小尉なれば　雨三三四
津守の宮社　高二九一
積れば人の老となるものを　雪二四
通夜
　神の御前に――をして　龍田一九三〇
　讃誠殿に――申し　誓一五五二
露
　霞をあはれみ――をかなしめる心　櫻一三三七
　苔を身に着て桂の――を甜め　一角三八一
　七寶の――を拂ひ　葵一六五
露潤す黄菊
　水縈回として――　枕二八一七
露刈りこめて秋草の　項上歌五九一
露けき袖やしをるらん　安宅八一・安達一〇七・攝一六四九
露けき宿に明け暮らし　須一四九七
露けさも昔に似たる旅衣　住一五四七
露時雨濁る山陰の下紅葉　一角上歌二七八
露深々
　草茫々として――と古塚の　井三四〇五
露ながら水かけ草の種とりて　御裳一九六二
露涙
　梶の葉もろき――　梶八二三
露に置かれ雨に打たれ　實盛二六四七
露の命
　伏柴の――もいかならん　兵九九一
露の臺や花の縁に浮かめて　女三五〇二
露のかごとを夕顔の　半一一五九
露の紫玉　歌三六七
露の玉ぞ散る　木賊三三〇七
露の情に引かれつつ　大原三〇一六
露の緯
　霜の經――こそ弱からし　呉三五四二
露の間に千年を經るや　菊二一三六
露の間に宿るか袖の月の影　西王一五七三
露の身
　芭蕉葉の脆くも落つる――は　芭三五四三
　松の葉結ぶ――の　佛二七九四
露の身の消えて名のみを殘さばや　正一三六一
露の養ひに仙徳を受け　菊二一三六
露の世
　誰に問はまし道芝の――に　東北三一九五
　月に訪ふ宿りは假の――に　小督一一〇八
　眞葛が原の――に　隅一五三一

露の世になほ老の身の　[illegible]一三三四
露結ぶ庭の夏草繁りあひ　大原五四〇
露も貫菅の雲　[illegible]五四
露往き霜來つて　關寺一六一八
露往き霜來る色なれや　志一三九八
露分け衣きて見れば　[illegible]一九六
露をかたしく草枕　巴待謠三三八二
露をかたしく草筵　[illegible]七一四
露を含み
　色を飾り――て　女三四八九
露を結んで肩にかけ　鞍九五八
露をも運ぶ袖の上　[illegible]五〇
強からぬは女の歌なれば　關寺一六一九
強きに水を防がせよ　[illegible]三三一一
つらきものにはさすがに　野宮クセ二四一三
辛しと思ふも幻の　[illegible]八四七
連なる枝
　香をとめて花も――とかや　[illegible]一六八四
貫之　蟻ワキ二二三・草子ツレ一一八一
貫之
　紀の――　蟻二一五・草子一一七八
　紀の――も躬恒もかくこそ　俊成一四四四
貫之が歌　[illegible]一三三三
貫之が言葉の玉の　志一三九七
貫之が袖ひぢて掬びし　[illegible]一六五七
貫之もこれを書き　[illegible]一二九九
貫之も詠め　[illegible]三三六
貫之も男山の昔を思つて　[illegible]五〇
釣竿の暇惜しや　[illegible]二四七四
釣せで人や歸るらん　羽三四八七
釣殿と申して面白き所　[illegible]
釣殿の邊と思しくて　[illegible]三三〇
釣の營みいつまでか　[illegible]一四六五
釣のいとまも波の上　八島上[illegible]二一四八
釣の小舟も歸る波　[illegible]一四五〇
釣針(テウシンをも見よ)
　水中の遊魚は――と疑ふ　[illegible]二二三四
　火闌降の命の――をかり　玉井一九七[illegible]
釣人多き小舟かな　羽三四八七
釣舟　竹生二〇三三
鶴　鶴子方[illegible]〇九五
鶴
　老の――の塒に殘る有明の　高砂一八六[illegible]
　舊里を出でし――の子の松に　[illegible]一六五三
　雲居の――は月影のさやけき姿と　元[illegible]一〇八八
　千年の――は萬歳樂と謠うたり　翁八
　丹頂の――も一千年の齡を君に授け　鶴二〇九九
　松竹――龜の齡を授くる　老[illegible]
　燒野の雉子夜の――　唐八八一九
　夜の――の子を思うて籠のうちに　[illegible]二〇九〇
敦賀の津より船出して　[illegible]
鶴歸らず
　月すさまじく風高うして――　[illegible]一一三六
〔鶴龜〕　[illegible]〇九五
鶴龜
　池の汀の――は蓬萊山もよそならず　[illegible]二〇九八
鶴が岡(神奈川)
　君を祝ふ千秋の――の　[illegible]
劒(ケンをも見よ)
　憍慢の――を揃へ　[illegible]八五四
　玉具の――の双先を揃へ　一角二八四
　六通三明の――を提げ　[illegible]
劒段々に折れ　[illegible]
劒の枝の撓むまで　[illegible]
劒の樹(ケンジュをも見よ)
　手に――をよぢれば百節も落す　[illegible]
劒の驗佛の法味に引かれ　[illegible]
劒の精靈となつて　[illegible]
劒の徳
　鐘馗大臣も――に魂魄は君邊に　[illegible]
劒の光
　月にしらむは――　[illegible]
劒の山の上に戀しき人は見えたり　[illegible]
劒は雨と降りかかつて　[illegible]一五六八
劒は身を通し磐石は骨を碎く　[illegible]

剱降らしや獅子の歯がみ　鳥三四三七
剱をくづし針に作り　玉井一九七三
剱を提げ繩を持ち　望三〇五二
剱を箱に納むるこそ　弓三二二七
剱を降らし
　猛火を放ち――　生二七二
剱を納め
　弓をはづし――　金八七七
鶴と龜との齢にて　翁六
都留の郡(山梨)　鵜飼二九九
鶴の林
　枯れにし――まで　西行一一七八
釣瓶
　玉の――掛繩の　玉井一九七五
　猛火の――を提げ　檜二六三三
釣瓶繩
　深き井桁を切るたるは桐井の　食八七二
釣瓶の懸繩くり返し憂き古も　檜ク七二六三三
釣瓶の繩
　水掬ぶ――の繰り返し　檜二六三五
釣瓶の水に影落ちて　檜次第二六三二
鶴も千代をや重ぬらん　鶴二〇九八
鶴若　攝子方一六四七
つれなき命ながらへて　龍虎三三六三
つれなき命惜しむらん　元一〇七九

つれなき人の心かな　白一三四〇
つれなく殘る老鶴の眠り　藤戸二七四五
つれなくも通ふ心の浮雲を　夕上歌三二一二
つれづれと降り暮らしたる宵の雨　望三三四九
つれなや
　あら――つれな　盛二三三
追求
　これによつて――す　敦三六四
追善
　かの所に下り――をもたさばや　海一七三
　亡き人の――と思しくて　竹三四〇
杖
　千歳の榮ゆく――　蟬一六七七
　千代をこめたる竹の――　金八七三
　遍昭が詠みし――か　蟬一六七七
　身にうき世とや竹の――　通小七七〇
　杖柱とも頼みつる海士のこの　藤戸二七四五
　杖柱とも頼みつる父帝　蟬一六七八

て

庭宇
　光――をかかやかし　西王一五七五
〔定家〕　三〇一
〔定家葛〕　定家三〇一
定家葛　定三〇八
定家にこの事申さんと　良暖一九一四
定家の執心葛となつて　定三〇八
啼哭
　いみじく――する聲あり　大蛇一五〇七
定說
　都の御方に――を承り　芦△五九
　都の御方に御目にかかり――を　山△三一六
庭前の木を切る　昌二〇八
ていたいは薪を採り老いたる母を　木賊二三一四
帝道
　皇圖長く固く――遐かに昌んなり　東六五八
躑躅は夜遊の人の折を得て　雲雀六四五
貞女兩夫に見えず　[illegible]三六八
泥々
　足もとは――泥々と　三笑一六八八

ていとうとうち連れ　自一三四四
ていとうと打つ波の鼓も　蓮二三〇八
ていとうの鼓の音　雨三八
ていとうの鼓の聲々に　住一五四三
ていとうの拍子　碁二九四
帝都を花洛と號し　墨一五一二
泥を出でし蓮一乘妙典の題目なり　半二四九九

朝恩
百姓も萬民も皆――に誇り　常葉三一六三
朝家を敬ひ
判官は神道を重んじ――　吉野三三八五
鳥雀枝の深きに集まる　百二六七七
釣針を尋ねつつ　玉井一九七九
鳥聲とこしなへにして老生と靜か　三輪一九七八
超世の悲願　當一八四三
超世の悲願普き影　誓三四八二
超世の悲願に身を任せて　道三三〇二
調達が五逆の内に沈みはてにし　身二九五三
朝敵の御名をあらはさんは　俊成一四四三
朝敵の虛名を晴らさんその爲　忠信一八九四
朝に隙なき身なれども　大社五七七
朝に隙なき身なれば　松尾二八四三
朝に隙なきを
在原の業平のその身は――　熊野三二四五
調法

某が――には叶ひ難く　貴七〇九
調法仕り候　錦木△三三五一
調伏
形代を――し給ふ　當三三二九
〔調伏曾我〕　三三二九
調伏の祭あるべしと　袋一六四〇
朝暮の勤行　海一八七
鳥類畜類までも貢に供はる神の　鵜祭四一六
鳥類畜類までも和歌を詠ずる　白樂三四七六
鳥類畜類も王威の恩德のがれぬ身　鷺一三三三
鳥類の身を轉じ佛果に至れ　鵜祭四三一
鳥類や畜類だにも親子のあはれは　三井二九九六
朝露
電光――猶以て眼にあり　求三〇七三
世の中は電光――石の火の　葛六九五・元一〇八九
手風
御鉾の――　淡一五三
小忌衣の――神風に吹き戻され　白樂二四八一
手飼の虎の引綱も　遊三三〇三
荻花
籬の――は林葉の秋を汲む　善三一五五
敵虎
大石のありしを――と思ひ　放下二四三八
敵人
某が――謀叛人と申し上げ　鉢二五六七

手綱
解けや――の亂れ髪　卷二八〇六
手綱の綱の綱　[illegible]二五
手綵の綵
取るや異服の――　[illegible]九八七
手越の長
千手の前と申すは――が女　千一七〇一
手待に折りて家づとにせん　雲林四六一
手こめ
敵を――にし　望三〇五五
手籠め申す上は　[illegible]八〇一
出汐
月の――の沖つ波　八島三一四七
出汐をいざや渡まうよ　松風二八二六
手すさみ
營む業も――に　玉井一九七五
手勢
大庭が――君を討ち奉らんと　七騎一三二三
手勢七十騎にて　關原一六二九・烏三四三四
手玉もゆらぐ袂かな　商三九六〇
手玉も由良の湊田　飛鳥七三
手塚の太郎光盛　實一三五八
鐵丸
飢ゑては――を呑み　歌三六六
鐵札數をつくし　鵜飼三〇九

鐵城
　山は——雲の旗手をついて　満八五四
鐵刀
　地よりは——足を貫き　俊成一四四六
鐵杖頭を碎き　歌三六五
鐵杖の勢ひ　安達一一九
鐵杖の數々　野守二四三四
鐵杖を振り上げ　羅三三五五
鐵杖を以て裂き破る　江口四九五
手どり足とり誇ひ　國二一二六
手取りにせん　熊坂九四五
手摩乳　大蛇シテ三五〇三
手摩乳脚摩乳　源太一〇六九
手鼓
　ものものしや——は知りぬ　八島三二六一
手鼓にいかで洩らすべき　關原一六三一
手たみの程を見すべきなり　正一三六二
手鼓は知りつらん　鳥三四三六
手習ふ人の始め
　この二歌を父母として——となり　關寺一六一四
　難波津の歌を以て——にもす　關寺一六一四
手馴れし衵の　羽二五七四
手に劒の樹をよどれば百節零落す　歌三六五
手に手を取りかはし　東一六八三・望三〇四四
手に手を取り交はせば　隅一五三四
手に手を取り組み　土蜘二〇六五
手にとるからにゆらぐ玉の　氷二六五九
手に取ればたぶさに穢る立てながら　卒二四九九
手にまづ取りて夜もすがら　養三一三五
手にもたまらで程もなし　花筐二五九三
手の舞足踏拍子を揃へ　右三五〇
手の舞節拍子　歌三六七
手箱
　男子の美しきを——の蓋に入れ　生二六五
出羽の國小野の良實　雷一五
出羽の郡司小野の良實　卒一七三五
手拍子囃し　内三三二
手拍子人に囃させ　雨六六〇
蝶
　花前に——舞ふ紛々たる雪　十六二八・胡一一五一
手ぶさ（[illegible]）を目よ　熊野三三五〇
蝶鳥
　さながら——の如く　呉三五一〇・鳥三四三四
蝶鳥稲妻石の火の見あへぬ程に　關原一六三〇
蝶鳥の如くに飛び翔り　来殿一九〇〇
出船
　風に——の習ひ　雷二〇三四
出船の障り　唐一八二〇
出船の習ひとてはたと忘れてある　唐一八一七
手振
　都の——なりとても　谷二八〇三
手まづ遮る菊衣の　梛七八五
手まづ遮る曲水の　西王一五七五・曲三一七六
手まづ遮る盃の　千一七〇七
手まづ遮る盃も　寶一三一八
手まづ遮る袖ふれて　半一〇三三
手まづ遮る花の一枝　草子一一九七
手まづ遮れる心なり　楊貴八六四
手枸　寶九五一
寺
　蒼苔滑かにして僧——に歸り　項五九〇
照らさざらめや日の光　十動シテ一九六六
寺は[illegible]の[illegible]　佐野二二五一
寺井
　古き——は水澄みて　金一三八九
寺井に澄める月ぞさやけき　井筒一一
寺井の底の心も澄める折から　芭二五三五
照りもせず曇りも果てぬ春の夜の　八島三二五〇
照日の前　花筐シテ二五七九
照日の前子　葉一五五
照日の前子とて隠れなき神の上手　蘆一五七
照る紅葉の土岡の里　富一八六六
手をおして
　身體わななき——　咸七九八

手を砕き忠勤まことを致らすには　盛一六六五
手をさゝし
　出家には——　大江五五九
手を摩る　自一二四二
天（アメをも見よ）
　清く明らかなるは——となり　蔵一四七
天運の極まり　楠九一四
天下安全に国土も豊かなり　鳴察四一七
天下一統
　君の神徳——と守る　弓三三四
天下御祈禱のため百座の護摩を焚き　雷三三三
天下第一の二つ銘の御劒にて　小鍛一一三
天下泰平国土安穏　[illegible]八
天下泰平の忠勤　田一九九七
天下泰平集　代一四八八
天下に三つの鐘　三井△二九九八
天下の春
　一花開けては——　熊五一三
天下の春を知ろしめせば　[illegible]二三一
天形星王　皇九九七
轉經の儀式をあらはし　輪一一八三
天狗（大天狗・小天狗・木葉天狗・鼻高天狗をも見よ）
　大山の——もわれに親しき　大江五六四
　御供の——はたれたれぞ　鞍九五八
　白峯の相撲坊に従ふ——ども　松山天二八八九
　大唐の——の首領善界坊　[illegible]一五九七
天狗おのおの騒ぎ恐れをなし　大会一七八六
天狗倒しはおびたたしや　[illegible]九五九
天狗にとられて　花一〇〇七
電光
　憂き世は——胡蝶の夢の　俊成一四四三
　世の中は——朝露石の火の　葛六九五・元一〇八九
電光石火の影のうちには　柏六六一
電光石火の光の陰　草薙八八一
電光朝露猶以て眼にあり　求三〇七二
天窓の間に花の光かかやき　姨三四八三
傳教大師桓武天皇と　[illegible]七三〇
傳教大師と生まれ替り　白鬚△一四七一
〔天鼓〕　二一三一
天鼓　天シテ二一三一
天鼓
　かれを——と名づくることは　天二一[illegible]
天鼓が鼓内裏に召されて後　天二一三五
てんごく　咸七九九
田作の翁
　その時の——は今の興玉の神　[illegible]九六[illegible]
轉じかへ
　御命を——て参らせう　鐵七〇九
天子業魔
　煩悩の悪魔陰魔死魔——　第一七七四
天子の御身を賞翫と名づけ奉り　[illegible]一三六八
天子の御座所にこそ楽実は立つと　[illegible]八九五
天上　[illegible]一七六
　一枝手折り——へ歸らばや
天上清しと見る處に　巻一七四〇
天清淨地清淨　雪一五八
殿上にての元服の事　杜六二六
殿上の御遊の折々は　小督一一〇三
天上の五衰より　羽三一二
天上の菓果を受く　江口四八四
天上の樂しみに明けぬ暮れぬと　西王一五七三
天上の樂しみも身に白露の　大[illegible]五四七
天上の力を得る故に大勢至とは號す　姨三四八三
殿上の交はりたりし身の　[illegible]一六二七
天井を蹴破り　舎一一九三
田舎にて御手に馴れし　花筐二五九四
田舎にて心をも慰めよかしと　關寺一六一六
田舎の者の下人も通はぬ御廟所の　松山天二八八八
天衆龍神水火雷電　江島四九四
天神
　天満大自在——と贈官　雷[illegible]四[illegible]
　土師寺は——の御在所なり　道明一八二九
　松梅は殊に——の御慈愛　老五二八
天神七代地神四代に至り　玉井一九七三
天神七代地神二代の御神　[illegible]世九二三

天神同位の御結縁　道明一八三〇
天神の彌陀一體の御值遇　道明一八三〇
天水氣氳たり　江口四九四
天照皇大神宮（アマテラスオホミカミをも見よ）
南無や―天長地久と稱へ　花筐二五九〇
天照大神その時に岩戸を少し開き　三輪二九八七
天照大神に御暇申させ給ひ　[illegible]二六〇
天照大神の兒　源太一〇六八
天照大神を始め奉り　正一三六四
天仙尙し死苦の身たり　歌占六五
天仙の住家　一角二八〇
天仙理王の來臨　西王一五七四
天祖の御敎へ直たる道を　[illegible]一三〇七
天祖の詔末明らかたる御國　逆一三〇六・龍田一九三一
天孫地神四代　玉井一九七七
天台
織るが如くにして―に掛く　三笑一二八五
天台山
比叡山あれこそ日本の　善界一六〇〇
天台山と號するは震旦の四明の洞　[illegible]七一九
天台山を拜むべくは比叡山に　春日六七三
天台の佛法は權實二敎に分ち　善界一六〇〇
天道にかなふ詠吟　東北二一九九
天道に通じて忽ちに諸佛も感應　張二〇五〇
顚倒迷妄して来た解脱の種を　江口四八四

天地陰陽
弓矢は―を象り七德五行の姿なり　[illegible]四五一
天地陰陽の通道として　富士山二六九〇
天地開闢
幾久方の―　住一五四二
天地開闢のこの方　石一三七八
天地開闢の昔　[illegible]一四六
天地開闢の昔より　佐一三七二
天竺五臺山の文殊を勸請の地　[illegible]九二〇
天竺震旦わが朝三國に渡り　百二六七九
天竺の靈文を唐土の詩賦とし　白樂二四七五
天地人
上下は卽ち―の三才　[illegible]三三六
天地人の三才となる　逆一二一三
天地人の三才にも君をもつて主とし　[illegible]二六五八
天地既に分つて後　白鬚一四六七
天智天皇の御宇　上東二〇七四
天智天皇の御願　誓一五六三
天地の惠み　[illegible]三七六
人は―を受け
天地の兩燈現れて　白鬚上歌一四七四
天地の兩燈一つになりあひ　[illegible]九二九
天長地久（アメナガク・テンナガクをも見よ）
南無や天照皇大神宮―と　花筐二五九〇

天長地久嘉辰令月の　[illegible]
天地を動かし鬼神も感をなす　[illegible]二二九八・俊寛一四三〇
天地を動かし鬼神を感せしむる　東北二一九九
天地を動かし鬼神を感せしめ　野守二四三三
天地を動かし目に見えぬ鬼神の　綸三四四六
手ん手に　[illegible]八一九
樂器を―携へて
天童部
明王部―　鐵七一〇
天燈龍燈神前に來現の時節　白鬚一四七〇
天燈を松の枝に捧げ　九世△九二七
轉讀　海一八六
天長く地久しくて盡くる時も　[illegible]九九五
天長く地久し漆膠の約と聞えしに　[illegible]八六五
天に仰ぎ頭を地につけ　小鍛[illegible]
天に在らば願はくは比翼の鳥　[illegible]
天に僞りなきもの
疑ひは人間にあり―を　羽二四九一
天に色めき地に響く禮の聲　邯七八三
天に浮かめる波の一滴の露の始め　[illegible]七九八
天に輝き地に滿ちて　西王一五六九
天に輝く稲光大地に響く雷　善界一六〇四
天に口なし人のいひ事　[illegible]
天に五行の神まします　[illegible]
天に靡あり地に響く　[illegible]

天に叫び地に倒れて　歌三六七
天にもあがる心地して　[illegible]一七八二
天女　大社ツレ五七三・賀ツレ七三一・国ツレ八九一・九世ツレ九一九・道ツレ一二〇一・日比ツレ一四六一・[illegible]ツレ一七三三・道明ツレ一八二三・玉井子方一九七一・寝ツレ二三九三・羽衣シテ二四八三・氷ツレ二六五一・富士山ツレ二六八三・和ツレ三〇二七
天女
　島の雲上に——現れ給ふ　江島四九一
天女と現じ　竹生二〇三八
天女は天路に又立ち歸れば　白鬚一四七五
天女は御殿の扉を開き　嵐四五六
天女舞　[illegible]三二〇・大社五八三・賀七四三・道一二二一。道明一八三五・玉井一九八三・竹生二〇四〇・[illegible]二二三七・寝二四〇一・氷二六六三・富士山二六九四・和三〇三六
天人　吉天シテ三三八九
天人
　上界の——下界の龍神　江島四九五
　白衣黒衣の——の數を三五に　羽二四九二
　らく天下天の——が手折りつる　泰一七四〇
天人返す返すも幾生の善を悦ぶ　山三一七
天人雲に連なり　大會一七八五
天人所戴仰　海一八六
天人聖衆菩薩の舞も　[illegible]
天人の五衰も目の前に見えて　羽二四八九
天人の羽衣とてたやすく人間に　羽二四八八
天人の舞樂　羽二四九〇
天人も羽なき鳥の如くにて　羽二四八九
天人も影向菩薩もここに天降り　天二一四四
天の與ふる事なるべし　邯七八〇
天の與ふる所　[illegible]一〇四七
天の憐み
　親に孝あるにより——深ければ　[illegible]一七六三
天の恐れも如何ならん　[illegible]三一
天の濃漿とはこれ仙家の酒の名　邯七八四
天の濃漿や流溢の盃　邯七八四
天の七代地の二代をこれ九世の戸　九世九二三
天の咎めも忽ちに罰あたり　花[illegible]五八九
天の燈火神神の御燈　[illegible]
天の道
　功成り名遂げて身退くはこれ——　六浦三〇一三
　功成り名遂げて身退くは——　船辨二七七一
天罰
　君を悩ますその——　土蜘二〇六五
　主君を打つ杖の——に　安宅九八
　王意を背く——にて　田[illegible]
　王地を犯すその——は遁るまじ　[illegible]二二五五
天罰の報いの程を思ひ知れ　一角六八三
傳法輪（[illegible]）
傳法院（和歌山）
　花壇場月——　高野六一五
天に陽を以て[illegible]とし　[illegible]八四六
田夫
　職を營む——　岡三〇
天部と夫婦の御神　江島四九六
天部の影向　江島四九六
天部を拝み申すことも　[illegible]八
天魔鬼神
　如何なる——なりとも　熊坂九四四・土蜘二〇六四・橋二五一六
　たとへば——なりとも　鞍九五八
天魔鬼神たりとも大勢には叶ふまじ　[illegible]
天魔鬼神も恐れつべうぞ　[illegible]
天魔鬼神も面をむくべき様ぞなき　[illegible]
天満大自在天神
　常は——と[illegible]官か　[illegible]
天満大自在天神と現れ　老[illegible]五三〇
天満天神　[illegible]
天満天神
　南無——心中の願ひを　谷[illegible]六〇四
天満天神廣く[illegible]里を[illegible]って　[illegible]
天武天皇　國[illegible]八九一
天武の聖代　國[illegible]
天命かと思へば　[illegible]

天命に沈みし平氏の一類　船辨二七八三
天命の蓮の極め　熊坂九四五
轉妙法輪の音聲　當一八五二
天も花に醉へるらん　小鹽三四六二
天も花に醉へりや　大江五六五・田一九九三
典藥の頭より御藥を持ち　土蜘二〇五七
天より眞の鼓降り下り　天二一三三
天龍八部　海一八六
轉輪聖王
　四者——　梅枝四四四
天王記別
　五逆の達多は——を蒙り　海一八五
天王寺(大阪)　弱所三三一五
天王寺
　佛法最初の——の石の鳥居　弱三三一九
天王寺に淺間と云ひし伶人　梅枝四三九
天王寺にて一七日施行を引き　弱三三一七
天王寺に參らす候程に　江口四七四
天王寺の西門を出でて極樂の東門に　弱三三二四
天王寺へ參らばやと　雪三一八六
天王寺より淺間と申す樂人　富士太二六九九
天を得れば清く地を得れば安し　卷二八〇九

と

東夷西戎南蕃北狄の恐れなければ　[illegible]八七七
同一體
　神も佛も——　道明一八三〇
　三世利益——　高野六〇三・誓一五六三・道一八三〇・朝三三六八
〔藤榮〕　二一四七
藤榮　藤榮シテ二一四七
藤榮
　叔父御の——に跡を横領され　藤榮二一五一
洞煙谷雲の内より　三笑一三八三
陶淵明　三笑ツレ一三八一
同音
　鐘うち鳴らし——に　誓一五六一
東海道に下向仕り　江島四九一
東海道の旅人を守らん　源大一〇六九
東海の波路遥かに行く船の　白樂道行二四七一
同號同名阿彌陀佛　[illegible]一五三二
〔東岸居士〕　二一六五
東岸居士　東岸シテ二一六五
東岸西岸の柳の髪の　東岸二一六九
童形
　源平兩家の——達　[illegible]九五二
　さも——の御身なれば　大江[illegible]
鐘聲が詩に　[illegible]五六八
東光坊の阿闍梨祐慶　安達一〇七
等活黒繩衆合叫喚大叫喚　[illegible]七五
同業相妬む習ひ　梅枝四四三
同穴の跡夢もなし　[illegible]六〇六
冬夏をも結ばばや　[illegible]一六三五
洞口には朝一片の雲を吐く　三輪二九七八
東國行脚と志し　高野六一九
東國方より出でたる僧……(僧を見よ)
東西南北十方世界の虚空に飛行し　國九〇六
東西南北十方を治め　[illegible]
東西を辨へず　山[illegible]八七
動ざる形
　山は——を現じて　春日六七〇
藤左衛門
　蘆屋の先地頭——　藤榮二一五一
東三條の森の方より　[illegible]六八五
童子　岩シテ二六八五・江島子方四八九・合シテ六八一
　小鍛シテ一二二一・石シテ一三七三・大瓶シテ
　一七五九・田[illegible]一九八五
童子
　いと美しき——あり　[illegible]八一七
　數々の——神樂の役々　[illegible]四五五

十五——　江島五〇二
天女雲上に現れ——左右に侍り　江島四九四
童子數多來り　大瓶一七六〇
童子の住家　大江五五七
東寺の前をうち過ぎて　[illegible]
銅汁
湯しては——を飲む　歌六六
童子らさすが山育ち　大江五六三
同性
五十二類もわれ——の　[illegible]三三九〇
同宿の太刀を盗み取り　[illegible]三三二五
同宿も思ひ申しませば　小袖一一三六
洞樹絲に風を含む　櫻一二三六
同所の人なれば[illegible]絲に弔はせ給へ　巴二三八四
銅杵を以て打ち碎き　江島四九五
同心なく　賴△三三〇五
同心にて申さうずる　小袖一一三四
動静
明月清風唯——の内　放下二四四五
同井の流れを汲むも昔前世の　元一〇七八
同體
木守勝手藏王權現——異名の姿　嵐三二一
東大寺建立　安宅八九
東大寺俊乘坊　大佛△一七五〇
とうとうたらり　翁六
童男來り給ふ　[illegible]一五〇二

東南雲收まりて西北に風靜かなり　[illegible]八三
東南西北も治まる波の　[illegible]三五〇
童男壇の上にあがり　小鍛一一三三
東南に風立つて西北に雲靜か　[illegible]九四〇
東南に雲晴れ西北の風も　[illegible]四〇三
東南に雲收まつて西北に風靜か　[illegible]三二二〇
東南に雲收まり西北に風靜かにて　[illegible]三九八
東南の雲を起し　安宅九九
東方降三世南方軍荼利夜叉　船辨二七八五
〔東方朔〕　三二七七
東方朔　東方三二七七
東方朔と聞えしは　東方三二八三
東方に降三世明王　道成一八〇一・[illegible]三六一九
東八箇國の大名小名思ひ思ひの　[illegible]三五六四
東八箇國の兵ども　小[illegible]一一一八
童舞
雪を受けたる——の袖　[illegible]六三二
東風
春の林の——に動き　高砂一八六六
〔東北〕　三二八九
東北陰陽の時節　東北三三〇〇
東北の靈峯これ大和の金剛山　代一四八三
東北院（京都）　東北三二八九
東北院のあたりにて　大會一七八一
洞門開けて翠屏現れ　江島四九八

東門を拜み南無阿彌陀佛　[illegible]
東籬
菊を——の下に採つて　三笑一三八六
凍裂の裂の如し　[illegible]六
科
心に知らぬ——なれば　[illegible]
とかく忍ばば惡しかりなん　[illegible]
戸隱山（長野）　[illegible]
とかくの事はあるまじ　忠信一八九六
富樫何某　安宅リキ七七
科たうして隠所の月を見る　[illegible]
科たかりしも科ありけるかと　[illegible]七一九
科の中の殺生　[illegible]
栂の尾の明慧法師　春日六六九
科は十の道多し　[illegible]
十廻り
松花の色——ともいへり　高砂一八六五
松の葉色も時めきて——深き緑　[illegible]七五四
松は——千代の秋　[illegible]八六七
科も例も波の底に　[illegible]
尖矢
山鳥の尾にてはいたりける——　[illegible]八五
時
得難きは——逢ひ難きは友　西行二二七八
得がたきは——去り難きは貴命なり　[illegible]

時ある春の花　三山二九三
時移り事去つて　歌二六四
讀き置きし御法の花も色々に　輪上歌三三七八
時員　通盛二九〇四
時去り時來りけるにや　猩一三五〇
時しも二月上旬の　猩々セ五一三
時しも頃は二月の　安宅上歌八二
時しも頃は建久四年　小袖一一二八
時知らぬ山は富士の嶺いつとてか　富士山二六八九
時知らぬ山は都の富士なれや　竹生二〇三六
時知る風にたち渡る　班一〇一三
時つ風
　潮の――治まるは波の　代一五三
　四海波靜かにて國も治まる　高砂一八六四
　八洲に治まる――　佐一三七三
時に從ふ世の習ひ　三山二九一八
時にとつての祝言たり　小鍛一二一九
時にはたり逢ぬ君は遲くて　篇三九四
時の移るをも覺えぬ程　土蜘二〇五九
時の移るをも辨へす　景六三四
時の運
　二の松明は――　烏三四三五
讀きを殘す御法はこれぞ一聲の　當上歌一八四三
鬨の聲
　あとは――絶えて　八島三一五三
　虚空に――聞ゆ　當二六〇
　四面に――を上ぐれば　項五九三
鬨の聲と聞えしは浦風なり　八島三一六三
鬨の聲矢叫びの音　攝三三一〇
時の鼓
　明暮の――の現とも思はれぬ　天二一三八
　すはや數添ふ――　西行一一七八
時の鼓も數々に　佐一三七八
時の鼓を打たうよ　綾一九二
時の調子にうつりくる　忠一三〇三
時の調子も如何ならん　絃二〇八九
時の調子をとりあへず　鶴龜二七七六
時の調子を取るや　山三一七四
時の鳥　飛鳥七二
時の花たり　誓九五四
時の花の如く　鶴三三一
時の面目畏つて　小督一一〇〇
常磐御前　伯シテ二五二一
常磐なれや楠の　雲雀二六四四
常磐の御腹には三男　伯二五二二
常磐の里(長野)
　松風遠く寂しきは――　内六五七
常磐腹には三男　誓九五四・烏三四三三
時は人をも待たざるものを　當一八五三
常磐山(京都)
　松の葉色も――　弓二二二四
時人を待たざるのみ　高野六一三
時人を待たぬ蘆の屋の　草薙八八一
時人を待たぬ浮世の習ひ　朝三三六九
時人を待たぬ習ひ　雲二二四
時平の大臣の讒言により　是ヘ五三〇
時風秀行　春日シテ六六七
時風秀行ぞとて　春日六七五
時政　鱗ワキ四四九
時政
　北條の四郎――　鱗四五一
時致(箱王參照)　小袖ツレ一一三五・夜シテ一二五七
時致は箱根にありしるしに　小袖クセ一一三六
時致は母にて候者の勘當にて　小袖一一二八
時致は不與の身なれど　小袖一一三一
時致を法師にならぬとの御勘當　小袖一一三五
時も名も花の都を立ち出でて　源氏直行一〇一九
時守
　かけし鼓も――の眠り　天三三三八
　眠りをさます――の打つや鼓の　綾一九三
時守の打ちます鼓聲聞けば　籠三三九四
時や遲きと行く程に　難一〇四六
時世
　直に治まる――かた　佐一〇一三
時代に變る習ひ　景一四二六

時積　藤栄ワキ二一四七・鉢ワキ二五四五
時を感じては花も涙をそそぎ　俊寛クセ一四三〇
鬨を作つて騒ぎけり　兵三四三
兜巾
兜にかはる――を着　大江五五六
山伏の――篠懸者の衣　谷一九四四
兜巾篠懸をとく拵へて　摂一六六六
兜巾といつぱ五智の寶冠　安宅九一
[木賊]　三〇三
木賊
園原山の――は名所といひ名草　木賊二三〇八
木賊色の狩衣　鵜三三・雲林四六九
木賊刈る木曾の麻衣袖濡れて　木賊二三〇七
木賊刈る園原山の木の間より　木賊二三〇七
木賊刈る山の名までも園原や　木賊一聲二三〇六
毒蛇
惡魚――となつて　阿三九
一念の――となつて　道成一八〇〇
虎の尾を踏み――の口を遁れ　安宅一〇三
徳叉迦龍王　春日六七八
毒酒に醉ひ伏し通力失せて　大蛇三五一三
讀誦の聲を聞く時は惡鬼心を和らげ　葵一六七
通盛二九〇九
讀誦禮讃を怠らず　現一〇一三
讀誦をわれらが船賃　碇二五三

得大智慧　安達三三〇・葵一六七・善界一六〇五
聽我說者――　道成一八〇三・飛雲三六三〇
とくとく召され候　碇上歌二五三
徳用
この經の――にて　海一八六
とけつといひし旅人
古里を鏡に映ししは――　[illegible]一八七
解けても寝ざれば夢にだに　朝三六〇
解けや手補の亂れ髪　卷二八〇六
渡口の郵船は風靜まつて出づ　船辨二七七六
床冴えぬれば我妹子が　合六八四
とことは
草の假寝の――に　松蟲六八六二
常寝の眠りいつまで　東九六四
との國
根の國――に赴く　大蛇三五〇八
常闇の世とはやなりぬ　三輪二九八七
常闇の世のさていつまでか　綾二四五二
常世の臺に伏し沈み　岡三一二五
常世の國　鳥三一六
常世の國まで行きしぞかし　雲雀二六四二
常世の木の實の名をとめて　草薙八八四
野老がなる　山姥三一七五
所から心に叶ふ稱名の　六浦待謡三〇一四
所せくすむ月の　大佛一七四九

所千代までおはしませ　鶴六
所の名さへ小野なれば　[illegible]
所は海の上　竹生上歌二〇三六
所に同じ名の佐野のわたりの　[illegible]
所は九重の東北の靈地にて　東北二二九
所に信濃路や　[illegible]
所は高砂の尾上の松も　高砂上歌一八六一
所は草衲の　和上歌三〇三一
所は陸奥の奥に海ある松原の　[illegible]
所は山陰の松吹く風も涼しくて　[illegible]八四七
所を知るも蟾蟻の山　[illegible]
十聲一聲數分かで　誓一五五六
十聲も一聲ぞ　當一八五四
戸ささぬ御代は行きかふ人の　[illegible]四一五
戸ざし
四海治まりて人家――を忘れ　小鍛二一二八
[土佐正尊]　[illegible]
土佐正尊　正一三五九
土佐坊(正尊參照)　七騎ツレ一三〇五・正一三六〇
土佐は聞ゆる文者にて　正一[illegible]
刀自
祇王祇女佛――　佛一七九[illegible]
俊家　佐リキ一三六五
俊家
藤原の――　佐一三六六

年かへる春にもなり　雑三三二七
年毎にもみぢ葉流る龍田川　龍田クセ一九三三
年寵り住り　雑三三二七
年去り時は來れども　綾クセ一九三三
年たけたる老人　小鱸三四五九
年立ち返る春なれや　東北次第二一九〇
年月を古き軒端の梅の花　東北上歌二一九四
俊成の和歌の友とて淺からぬ　忠度一九一一
年に一夜はあだ夢の　船橋二七五四
年に一夜は心せよ　項五九一
年に稀なる人も待ちけり　井三四一〇
年の極めの御祭　和三〇三〇
年の矢の早くも過ぐる光陰　賀七三八
年久しき夫婦の者あり　三輪二九八五
年古り增さる朽木櫻　熊野三三四四
年ふれば齡は老いぬしかはあれど　小鱸三四五八
年ふればわが黑髮も白河の　檜二六二七
年經ぬる身は老か身の　志一三〇三
富島の磯（兵庫）　絃一〇四八
年も經ぬ祈る契りは初瀨山　玉葛一九六三
土砂山河草木も一佛成道の法味に　野守二四三三
年を經し美濃のお山の松蔭に　養老三一三〇
年を經て花の鏡となる水は　櫻一三三六・昭一八八七
抖擻
捨身——の行體　安達一〇七

抖擻行脚に身をやつし　朝二三六一
都率
執心晴れて——に生まるる　浮三三四
都率天に住し給ひ　白髭一四六八
都率天の樂
萬秋樂と申すは——にて　代一四八九
都率の天に住み給へば　須一四九八
兜率の内院にして高貴徳王菩薩と　雨三三七
兜率の内院にもたとへ　國九〇一
十握の神劍を拔き持ち　大蛇三五一二
戸津坂本の人家まで　兼七一九
とても歸らぬ道芝の　清八四三
とても世を背くとならば　最上紅葉六三四
渡天
入唐——　春日六六九・石橋一三七五・道成寺三三六二
とどめくは何事ぢや　放下△二四四一
とどろ
駒も——に踏みならし　烏三四一七
轟の橋うち渡りて危き心は隙も　草子一一九一
とどろとどろと踏みとどろかす　賀七四四
ととろととろと踏み鳴らし　橋二五一五
戸無瀨（京都）
嵐の底の——なる　賀七三九
戸無瀨に落つる白波　嵐二〇五
戸無瀨に落つる瀧つ波　西行一一七八

刀禰美の關（富山）
さざぬ——越えて　善二七三五
礪波山（富山）　山三一六八
礪波山まで押し寄する　木曾八一八
礪波山や俱利伽羅志保の合戰　巴三三八四
戸に水晶を連ね　關寺一六一八
とにもかくにも佞人の　百二六七七
とにもかくにも古里の　雲雀二六四六
利根の信俊　放下二四三六
舍人をも連れず　羅生門三五五
とのいちつうげん道場　清八四四
殿御
いかに——と珍しや　鐵七一一
殿の御歸りありたるか　内六五三
殿ふれば佛もわれもなかりけり　最上紅葉一五五六
主殿の舍人　當一麻一八四二
鳥羽（京都）　梅四三三
木幡山伏見野竹田淀——も見え　[illegible]二三九
駑馬
騏驎も老いぬれは——に劣る　景六四
とは思へどもあだし世の　大佛一七四九
間はず語りの夢をさへ　源氏供養一〇三
鳥羽田（京都）　須一四九七
都邊に植ゑしは伏見田——　[illegible]

訪はぬ程經る思ひさへ　存三一九
鳥羽の戀塚（京都）
　白鳥の――秋の山　佐一五四〇
鳥羽の戀塚秋の山　李一七三一
鳥羽の細道うち過ぎて　敦盛三四五六
鳥羽の院の上童に玉藻の前と申し　實一六五七
鳥羽の院の北面　[illegible]三九六
問はばこそ獨りわぶとも答へまし　敦一三七
訪はれてそ身に白玉の　小督一一〇六
訪はんともせぬ人を待つ　江口四八三
土肥（實平參照）　敦八一三三・七騎一三二二
都鄙安全にたすへし　田一九九八
飛梅　老五三六
都鄙の隔き　正一三六三
土肥の次郎實平　七騎一三一七
都鄙圓浦の雲の下　忠一三九八
飛ぶ雲の光の中に現れ出づる　飛雲三六一九
とふこそ涙なりけれ　小督一一〇六
とぶさ
　花鳥の――に及ぶ雲の袖　采四〇八
とぶさに翔り雲に傳ひ　右三五〇
とぶさに散るか花鳥の　東北三一九五
飛ぶ鳥までも地に落ち　葛一三二一
飛ぶ鳥も地に落ち武士も和らぐ　咸八〇一
飛ぶ鳥をも落すばかり　國三一六八

訪ふにつらさのまさり草　楊三一三〇
十符の菅薦　藤榮二一五〇
飛火
　問に――の名を問かず　[illegible]八八
飛火の野守
　春日野の――出でてたに　小袖一一三一
　春日野の――出でて見よ　佐一三七七・求三〇六
　春日野の――出でて見れば　野守二四四四
飛ぶ螢の雲の上まで往ぬべくは　[illegible]六七
都府樓の瓦　道明一八三三
問へどもいはぬ口なしの　仲三三一〇
問へとも答は答へず　[illegible]一四五三
遠く鳴尾の沖過ぎて　高砂一八七一
遠里（大阪）
　松原見えし――のここ住の江や　關三八〇
遠里ながら程近き　松風二八五四
遠里人も眺むらん　住八三三
遠里小野の嵐やらん　雨[illegible]三三
遠里小野の草葉まで　岩[illegible]三八七
樞
　軒も――もまばらなる　[illegible]一六八五
　瑠璃の――　鶴三〇九八
樞落ちては月も又常住の燈火を　大原五四一
樞に立ち出でて　大佛一七四七
遠々と御目にかくるならば　仲三三一四
遠平　七騎子方一三〇五・七騎一三一〇

遠山霞
　煙る霞の――　小督一四三
遠山寺
　すは――の鐘の聲　通盛二八九七
遠山伏の拂衣　飛雲三六一四
遠山櫻の色に　[illegible]三四
遠山もとの若竹の葉こめたる　龍虎三三六一
〔融〕　三二一九
融　[illegible]一[illegible]九
融の大臣住み給ひし所　[illegible]二二
融の大臣千賀の鹽竈を都の内に　融[illegible]三
苫屋形
　蘆が島の――　[illegible]九
苫よりくぐる夜の雨の　通盛二八九九
泊り定めぬ海士の釣舟　通盛二八九九
とまり定めぬ海士小舟　[illegible]七三
泊りも果てぬ旅の習ひ　忠度一九〇六
とまるや涙なるらん　[illegible]三六八
富草の種も榮ゆく秋の空　花筐二六八四
富草の村早稻　淡一四六
訪ひ來ませ杉立てる門　三輪二九八〇
都名
　聖教の――にて　[illegible]一〇
友
　惡しき――あらば拂ひ除けて　[illegible]二九四[illegible]

得難きは時逢ひ難きは―― 西行二一七八
變らぬ――こそは買ひ得たる市の 松蟲二八五七
[illegible]は――を忍ぶ 檀二〇一〇
月の前にも――待つや [illegible]一三五〇
月の前の一夜の―― [illegible]九五三
[illegible]月の――に誘はれて 松蟲一八六四
松蟲の音にもや――をしのぶ 松蟲[illegible]二八五四
夜遊の――に馴衣の 松蟲一八五六
〔知章〕 三三三七
知章 [illegible]シテ二三三七
知章
物故平の―― [illegible]二三四〇
知章とは相國の三男 [illegible]二三四一
友鳥
胡蝶にふける―― [illegible]九五一
友鳥の御物笑ひの種蒔くや 鞍九五三
燈火
跡のしるべの――は[illegible]の秋の [illegible]八三七
闇夜に――暗うして [illegible]一六七四
風破窓を射て――消えやすく [illegible]三五三三
耿々たる――も壁を背けたる影 采三九八
[illegible]りそ薄き――の[illegible]りてこふる [illegible]三九三
月常住の――をかかぐ 大原五四一
[illegible]室に――消えて秋の夜[illegible]長し [illegible]二六四〇
[illegible]火暗うして月の光にさし向ひ [illegible]二九〇七
燈火暗うしては數行虞氏が涙 [illegible]二一六
燈火暗うしては數行虞氏が涙の [illegible]一七〇〇
燈火を背く
消えずはいかで――なよ 朝二三六九
燈火を背けては共に憐む深夜の月 俊寛一四四六
燈火を背けて向ふ月のもと 經二〇九一
友達語らひて [illegible]二五三五
友千鳥 井三四〇六
雁の姿や―― [illegible]二八〇七
早鞆の――沖の鷗も群れ立つや 和三〇三三
友と交はり信あり 内三七七
〔朝長〕 三三五五
朝長 [illegible]二三五五
朝長
太夫の進――は美濃の國 [illegible]二五七
朝長の御傅何某と申す者 [illegible]三三六〇
伴ふものは月の影 [illegible]一八七九
友成 [illegible]一八五七
友成
阿蘇の宮の神主―― 高砂一八五九
共に憐む深夜の月 [illegible]二九八・俊寛一四四六・[illegible]九一
共に[illegible]き夜の [illegible]二五三五
ともに[illegible]の[illegible]しげき [illegible]二九四
友[illegible]
夕霞千鳥――して [illegible]四六
共音に鳴きて過せしに [illegible]九九
ともねの千鳥も聲々なり [illegible]五一[illegible]
伴の里(長野)
捨つる身になき―― [illegible]二五四八
友の物狂といはれさせ給ふな 花筐二五九〇
友治
安田の莊司――の妻や子 望三〇四一
友治の妻 望ツレ三〇三九
友人
琴詩酒と聞くも隔てぬ――の 大般一七六一
友房 望シテ三〇三九
友房
小澤の刑部 [illegible]
[illegible]に立ち渡り [illegible]
知盛 [illegible]二四七・[illegible]二七六七
知盛
[illegible]武天皇九代の後胤平の [illegible]二七八四
新中納言――[illegible]なる[illegible]の[illegible] 大[illegible]五四九
新中納言――二位殿に向ひ 碇二五九
新中納言――の御子息 知二三四一
知盛その時に [illegible]
[illegible]盛の御最期は [illegible]
友呼びかはす海士少女 [illegible]
友呼ぶ聲も[illegible]に [illegible]

友若
友若の母　[illegible]六五
友若シテ六五
[巴]　三三七五
巴　巴シテ三三七五
巴といひし女武者　巴三三八三
巴波の紋あたりを拂ひ　船辨二七八四
鳥居の大明神
第四には——信濃の諏訪の明神　大社五七九
外山
霞む——の櫻狩　雲雀二六四一
豐葦原千五百種の國あり　逆一二〇七
豐葦原の國つ神　善界一五九七
豐葦原の國治まりて　逆一二一四
豐葦原を採り給ひし御矛より　小鍛一二二一
豐玉姫　玉井シテ一九七一
豐玉姫と契りをなし　和三〇二三
豐玉姫は龍宮に入り給ふ　和三〇三四
豐成　雲雀ワキ二六三七
豐成
横佩の右大臣——　當一八四六・雲雀二六三八
豐の明
初春の七日の——　梅四三三
豐の明の五節の舞の冠　杜六三三
豐の明の五節の舞姫の袖　關寺一六二一
豐の明の節會にも逢はでぞ　卒一七三九
豐姫もただならぬ春有明の　[illegible]一九八〇
とよりかくより行きかふ猶の　[illegible]五一三

虎
虎　龍虎シテ三三五九
頭は猿尾は蛇足手は——の如く　鵺二三八六
千里を驅ける——は一毛を惜しみ　[illegible]一三八九
竹林の巖洞は——の栖にて　龍虎三三六五
手飼の——の引綱も　遊三三〇三
無常の——の齋肝に銘じ　[illegible]六三
尾を履む峯の竹には——や住む　竹雪一八八五
虎嘯くや風早衲の　和三〇三六
虎嘯けば風生ず　龍虎三三六七
國栖
獅子——に村上の天皇も　鷺一〇九七
獅子——の舞樂のみぎん　石一三八〇
獅子——は時を知る　[illegible]三〇四
虎と思へば石にただに立つ矢　[illegible]一一九
虎に似たる大石のありしを敵虎と　放下二四三八
寅の時
風も嘯く——　七五三一・[illegible]八七五・[illegible]九八六
虎の尾を踏み毒蛇の口を遁れ　安宅一〇三
とら臥す野守の鏡　野守二四三三
虎まだらのゑのころ　[illegible]九五一

鳥
俺かぬ別れの——はものかは　三井三〇〇三
春の花咲鐘[illegible]——の　[illegible]
[illegible]鼓苔深うして——も[illegible]　[illegible]二八〇
空飛ぶ——も地に落ちて[illegible]に　[illegible]四一
魂は籠中の——開くを待ちて　[illegible]四
月落ち——啼いて霜天に滿ち　[illegible]
月落ち——鳴いて霜天に滿ち　道成一七九五
花は根に——は古巢に歸れども　[illegible]一八八五
わが鶏ならば——もよし啼け　通小七七一
取り入るるこのうろくづを　[illegible]四六〇
鳥驚かぬこの御代　梅枝四一
[鳥追舟]　[illegible]六八九
鳥追舟をかざり　[illegible]三九一
鳥が鳴く
木綿附の——東路さして　熊野[illegible]四
鳥貝
鶯の——　[illegible]一九八
鳥甲
誠にしるき——月日も變らぬ　[illegible]七四
物の具なれや——　[illegible]六
鳥上の嶽にうち上り　大蛇三五一
鳥獸も心あるや　[illegible]八六八
鳥三寶を念じて國常樂と音するる　大會[illegible]
鳥飛ぶが如くに倦んで　[illegible]一六八三
鳥ならでは翔り難く　通盛[illegible]九六
鳥の跡
歌の文字あらば——も盡きせじ　關寺一六一五

書き置く文字の姿まで——とて　初二五七五
鳥の跡あらんその程は　俊成一四四四
鳥の跡絶えず　朱四〇九
鳥の老いて歸る時薄暮くもれる雲林四五九・暴一五一三
鳥の羽にて織りたる布　錦木三三四六
鳥の林に遊ぶに巣ならず　土車二〇七八
鳥の林に遊ぶに似たり　江口四八三
鳥は宿す池中の樹　東北二三〇〇・鵜三三四
鳥は無し
取り放し又——と二流に讀まれ　船橋二七五九
取り放し又鳥は無しと二流に　船橋二七五九
鳥は古巣に歸る　西五二〇・東北二三〇一
鷄は八聲のほのぼのと　天二一四五
鳥部山（京都）　熊野三三四八
鳥も驚く夢の世に　鳥二三九六
鳥も通はぬ體　安宅△八六
鳥も心を動かせり　俊寛一四三〇
鳥林下に鳴いて涙盡きがたし　西行一一七七
鳥居の笠木にたち隱れ　雲雀二六四四
鳥居の二柱　蟻二二三
十日の雨（ジフジツノアメをも見よ）　蟻二一八・野宮二四一四
五日の風や——　内三七八・養三一三九
十の道
身三口四意三の——　柏六六二

科は——多し　船橋二七五六
團栗
目には——がなり　山△三一七五
頓證菩提
南無幽靈出離生死——　善知三八八・女三四九八
南無幽靈成等正覺出離生死——　通小七六六
遁世　求三〇七二
元結切り——せばや　松山鏡二八七二
貪著
色に染み——の思ひ淺からず　江口四八五
富んでは驕りを知らざるなり　敦一三五
どん一つよ　籠△三三九一
貪欲瞋恚愚癡は又心に於て　東岸二一七

な

名
身は土中に埋むと雖も——は留り　江口四七五
弓筆の——こそ妙なれ　熊五一一
弓矢に——を揚げ　俊成一四四一
内恩外忠の威儀未練なり　雷三四一
内外清淨にて御田を作り　淡一四四
内外清淨の信心私なく　御三九五九
内外清淨六根清淨　葵一五八
内侍所
大納言の局に——を戴かせ　大一九九
内陣
御堂の——へは叶ふまじ　内六九八
内身三昧
大師の御身は——目前たり　高野六一一
内心慈悲の御惠み　善界一六〇一
内陣に入らせ給ひ　田一九九四
内陣に納めよ　木賊八三三
内心は夜叉
女人は外面菩薩に似て——　現一〇一七
内大臣

雲居に——　[illegible]一四九七
内裏
下は——も宿直の　石一三七七
内院に入らせおはしまし　富士山二六九五
花園禪樹の苔の庭　[illegible]一三九〇
ならなうられたる錦に　[illegible]二五一
なかえ(香)
輿車の花の——をかざし　小鍛三四六二
小車の——も續く雲路の　[illegible]一五四〇
轅や北に續くらん　[illegible]四[illegible]
長江の里(石川)　[illegible]三七二五
長柄の酒杓の酒を　大般一七六五
中垣
知られ知らるる——の　錦木二三五六
隔て給ふや——の　小督一二〇四
中川の荘(岐阜)　關原一六二七
中賀茂の御手洗川に集ふ君　水無月三九四〇
長き命を汲みて知る　玉井上歌一九七五
永き闇路を照らしつつ　身[illegible]二九五五
ながき別れとなりやせん　[illegible]野三三四五
[仲國]　小督異本一〇九五
仲國　小督シテ一〇九五
仲國
彈正の大弼——　小督一〇九八
中差取つてうち番ひ　忠信一八九九

流され人の行方や　[illegible]
中宮
浦波の歸らば——にならんも　住一五四五
中宮になすた[illegible]
[illegible]わか——　[illegible]
中務頼澄宰府の神主　藍二四〇
長月七日の今日は又昔を思ふ　野宮三四九
長月の色も昔の秋を得て　[illegible]
中つ國
蘆の葉の島となりし——　白鬚一四六八
仲綱　賴△三三〇五
長門の浦(山口)
平家の一門は——に果て給ひ　碇二五〇
長門の關路(山口)
菅の根の——程もなく　藍二三七
たかたか
申すも——愚かなり　盛三〇九九
[illegible]に逢ふ時は——夢の心地し　[illegible]
なかなか俗には劣るべし　小袖一一三六
たかたかにはかなかりける　[illegible]
たかたかの事　[illegible]二六八・[illegible]三五一・[illegible]
中の君　[illegible]
中の御前は藥師如來　[illegible]六八一
中の緒
よその調めの——の　住一五四六

長階
清[illegible]や——の出[illegible]　[illegible]
中[illegible]の月
[illegible]——　[illegible]
長瀬
寄り人に今ぞ寄りくる——の　[illegible]
長松と申す所　竹雪一八七六
仲麿がわが日の本を思ひやり　野守二四二四
[仲光]　二三〇七
仲光　仲シテ二三〇七
仲光
藤原の——　仲二三〇九
ながめ暮らして花にまた　項次第五八九
長安[illegible]王　[illegible]
中宿
日はまだ殘る——に　[illegible]七八一
又立ち出づる——の　[illegible]
夢の浮世の——の宇治の　[illegible]
よすがに寄りし——に　夕三二四
中山寺(兵庫)
美女御前はあたり近き——に上せ　仲二三〇九
長柄の橋(大阪)
君が代の——も消えたり　[illegible]
[illegible]なる——の徒らに　[illegible]
ながらへて生けるを今は歎くかな　[illegible]

亡からん父が名殘には　柏六五五
流れ蘆　海一七四
流れ洲　飛鳥七〇
流れ絶えせぬ御裳濯川　國九〇四
流れては妹背の中の川を聞く　錦木二三四五
流れては妹背の山の中に落つる　鵜三三一八
流れて早き月日かな　東五〇八・錦木二三四五
流れに浮かむ泡沫は　養三一三五
流れの君
　江口の――とや見えん　江口四七八
流れの身
　憂き節しげき河竹の――　班二五九九
流れ久しき湊川　楠九一七
流れもやらず漕ぎもせず　碇二五七
流れもやらぬもみぢ葉を　紅三〇八一
流れを汲むとよも絶えじ　養三一三一
流れをたつるは同じ事　祇八六〇
流れを枕とし岩に口を漱ぎ　三笑一六八三
流れん武者には弓箭を取らせ　頼三三一一
長井(埼玉)
　武藏の――に居住仕り　實一三六〇
長井の齋藤別當實盛　實一三四九
長居は恐れあり　盛三一一〇
長居もめでたき住吉の岸　岩二九四
長岡に住み給ふ老母の　熊野三三四五

渚の千鳥　俊寛一四三〇
渚の森(大阪)　蘆四五
長刀
　錆びたりとも――を持ち　鉢二五六〇
　三尺の――指しかざし　禪一六九六
　白柄の――　鞍九五八
長刀柄長くおつとり延べて　巴三三八六
長刀投げ捨て　碇二五五
長刀一えだ
　物の具一領――　鉢二五五〇
梛の木の坊
　今熊野――に帥の阿闍梨　谷一九三八・檀二〇〇六
亡き人の名をも朽たし　攝一六五四
泣く涙雨と降らなん渡川　船橋二七六三
鳴くなる聲はうとうやすかた　善知三八八
泣く音そらなる戀やする　飛鳥七二
鳴くや五月のあやめ草　草薙八八一
鳴くや關路の夕鳥　蟬一六八六
嘶くや牡鹿の津の國の　千一七〇九
泣くより外の事ぞなき　大蛇三五〇六
歎きてもかひなき世　柏六五四
歎きても又餘りあり　熊野三三五〇
歎きの中の歎きとかや　陽三一二三
歎くとも戀ふとも逢はん道やなき　定二一一〇
投松明の影より　烏三四三四

鳴けども雪はふるき鼓の　鸚一三三七
なげの花の蔭
　暮れたば――　志一三〇二
夏越の祓　水無月二九三八
夏越の祓
　今日は――なるらん　水無月二九四二
　水無月の――する人は　水無月二九四三
夏越の祓のいはれ　水無月二九四二
名こそ上なき富士なりとも　富士太三六九九
名こそ龍田の山風も：かなり　龍田一九三三
奈古の浦わも程近く　藤二七三三
なごはしみ
　蘆の若葉の――　梅四三五
なごめ拂ひ
　事代主の神――給ひしこそ　水無月二九四二
名殘ある都の空は遠ざかり　横道行二〇〇六
名殘の一曲　敦三六三
名殘の袖は濡れけり　高野六〇五
名殘の月も山藍の羽袖　雲林四六九
名殘小鹽の山深み　小鹽上歌三四六一
名殘を殘すわが宿の　夜上歌三三六〇
情内に籠り言葉外に現るる　采四〇七
情置きける言の葉の　夕三二一四
情こそ都なれ　千一七〇五
情の末も深見草　俊成一四四三

情の道に誘はるる　小町三四五八
情の道も淺からず　夕三二四
情は人のためならじ　仲三三五
情は人の爲ならず　葵一六一
情も知らぬ舟子ども　俊寛一四二二
情を思ふ涙の袖　[illegible]一〇七八
梨
　櫻麻の苧生の浦——　通小七六五
　凍梨の——　鸚一六
梨打烏帽子同じくかしこに脫ぎ捨て　巴二八七
梨壺梅壺　雷三五四二
梨壺の女御
　村上天皇　夫婦なり　紋一〇五六
梨の杖
　たより——に縋り　鸚一八
那須野(栃木)　[illegible]一六三三
那須野の殺生石　殺一六三七
那須野の殺生石その石魂にて　殺一六四一
那須野の原　殺一六三六
那須野の原に立つ石の　殺上歌一六三八
なぞの翁ども
　在原や——　翁八
灘の汐汲む憂き身ぞと人にや誰も　松風六八九
灘の鹽燒き
　蘆の屋の——暇なみ　[illegible]
那智(和歌山)　[illegible]一〇〇七
夏
　九夏三伏の——閑けて　東北三三〇〇
　はや三伏の——閑け　天三二四二
　夏陰いづくたるらん　歌[illegible]五四
　たつかしき色のゆかりと　[illegible]三七三三
夏河
　その心更に——に　鵜飼三〇一
夏草
　露結ぶ庭の——繁りあひ　大原五四〇
　夏草のしげみが原の　大原五四六
　夏草の茂みに交る姫百合の　[illegible]二六四八
夏木立
　青葉にまじる——　大原五四五
　唯——の如くにて一葉も紅葉せず　六浦三〇一〇
　糺の森の緑も——　賀茂物七五〇
　時を得て早くも育つ——　春榮一四〇八
　鳴らさぬ枝も——　代一四八〇
夏衣
　波もて立つや——　江島四九一
　夏衣薄き契りはいまはしや　[illegible]八三三
　夏衣重ねの袖は碓氷山　[illegible]八八一
　夏橘の匂ふにぞ見ぬ世の人も　藤三七三三
　夏と秋行きかふ空の通ひ路は　水無月上歌二九四一
　撫づとも盡きせぬ巖もわが君が代の　梅四三三
　撫づとも盡きぬ巖ぞと　[illegible]
　撫づとも盡きぬ巖ならたん　[illegible]四〇九・[illegible]九八六
なづな
　長安の——からなづな　[illegible]三〇六七
夏野の鹿たりとも　[illegible]
夏野の深緑　[illegible]六八七
夏の日になるまで消えぬ冬氷　[illegible]
夏の蟲
　愚人——の火を消さんと飛び入り　經二〇九二
夏の夜の雷
　月平沙を照らせば——　[illegible]八六
夏は生田頓　[illegible]
夏は涼しき浮草の　[illegible]二一九一
夏果つる扇と秋の白露と　[illegible]
夏引の絲毛の花車　代一四八四
夏引の絲筋なき人のいひごと　[illegible]三三四
菜摘川(奈良)　二人靜七二一
菜摘川より若菜を摘ませ　二人[illegible]七二三
菜摘の川(奈良)　[illegible]
菜摘み水汲み薪とり　大原五九九
菜摘女　二人[illegible]七二一
夏蟲の心のうちも明らかに　雷三三七
夏蟲の身を焦がすべき火を取らん　[illegible]一〇三二
撫子
　あはれをかけよ——の花　[illegible]

頼む木蔭も—の　望三〇四一
忘れ形見の　の　生二七〇
撫子の形見　玉葛一九六二
撫子の弔ふ法の結縁に　水無瀬一九三二
などか雲居に歸らざらん　八島三一五〇
名所多き數々に　竹生上歌二〇三四
七面の池(山梨)　現一〇一八
七返し
七夕の手向の袖ならば—にて　關寺一六二一
七草の生田の若菜　求三〇六四
七車
戀草の力車に　百三六七二
七つ五つの神の代　淺一五二
七つの年天狗にとられて　花一〇〇八
七つの道も末すぐに　羅三三四七
七つの道も猶末すぐに　代一四八二
七つの都路
國々の末は　を　逆二〇三
七手
勢を—に別ちつつ　木曾八一八
七拍子
七德雙調—　道明一八三七
七重の注連
不淨を隔つる—　小鍛一一三一
七まとひ繩ひ

龍頭をくはへ　首成一八〇〇
なに祈るらん心づくしに　清八五一
名に負ふ隅田川　隅一五二〇
名におふ宮の古ことを　玉葛一九五八
何かあやなくわきていはん　百三四四
何某の院とばかり書き置きし　夕三一三
何某の院にも常はさむらふ　半二五〇〇
何か難波の浦には住み憂き　蘆五七
何か別れのもの憂かるべき　俊成一四四二
何事のおはしますとは知らねども　巴三三七八
何事も心に叶ふこの時の　岩道行二八七・光道行五三三
何事も前世の事と思ひ　藤戸二七四四
何事も道ある御代の旅とてや　源太道行一〇六三
何事も皆うち捨てて南無阿彌陀佛　誓一五五六
何事も見殘す夢の浮橋　船橋二七五六
何事も昔なりけり　烏三四二一
何事も報いありける浮世かな　蟬一六七四
何事も夢の世の　嫉三四八二
名にし負はばいざ言問はん都鳥　隅一五二三
名にし負ひたるやさしさよ　巴三七九
名にし負ふ豐葦原の國つ神　善界道行一五九七
名にしおふ比叡の御嶽の秋なれや　雪上歌三三三四
何と唯雪や氷と隔つらん　東岸二一七五
何ともなや
あら　熊坂九三四・船辨二七七三

何によつて平生この身を愛せん　生二六八
何によつて平生の身を愛せん　松山天狗八九〇
〔難波〕　二三二五
難波(大阪)　[illegible]四八・[illegible]四三・[illegible]
難波入江
おしてるや—に寄するなる波　住一五四四
難波江(大阪)
足引の山こそ霞め—に　蘆四八
浮寢忘るる—の　藏六三
それは—これは又隅田川の　隅一五三五
難波江のあしやよしやも辨へで　梅四二八
難波潟
ここ住の江や—　劉二三八〇
道もすぐなる—　巴九七七
難波田のふし水　[illegible]七三
難波津(大阪)　梅四二四
難波津淺香山の影見えし　忘々セ一三九八
難波津淺香山の道は夫婦の媒　[illegible]五八
難波津に咲くやこの花冬籠り　草ヶ七六〇
雲林四五九・雜三三三〇・雜上歌二三三一
難波津に名を得て咲くやこの花を　[illegible]
難波津の歌は帝の御始め　[illegible]
難波津の歌を以て手習ふ人の始め　關寺一六一四
難波津の歌を借りて　關寺一六一四
難波津の春ならばただこの花とこそ　[illegible]

難波津の春たれや　蘆六四
難波寺名所多き鐘の音　三井二〇〇一
難波なる見つとはいはじ　蘆一〇四八
難波の蘆の浦風も　蘆上歌三
難波のあしに伊勢のはまぐり　蘆八五九
難波の蘆を御賞翫こそ　阿五〇
難波の海
　櫻花今盛りなり——　梅四六
難波の海の底ひたく　弱三三一八
難波の海山の　蘆五九
〔難波梅〕　[illegible]二三一五
難波の梅
　そへ歌にも——こそ詠まれ　難二三三〇
難波の浦
　いとど——は住み憂き　蘆五七
　月もおしてる——　梅四三三
　何か——は住み憂き　蘆五七
難波の浦のよしあしも　蘆五一
難波の鐘も明方の　松蟲二八六六
難波の鐘も響き　難二三三八
なにはの事
　數ならで——もかひなきに　住一五四七
　津の國の——に至るまで　難三三三
　津の國の——も忠度なり　俊成一四四三
なにはのことか法ならぬ　難二三三七・山三一七九
難波のことのよしあしも　弱三三三一
何はの事も愚かならじ　松蟲二八六四
　諸佛乘の心ならば——　賀茂物七五一
難波の事も問ひ給へ　歌三五六
難波の里　難二三三七・松蟲二八六三
難波の寺の鐘の聲　弱三三三三
難波の法によも洩れじ　弱三三三三
難波の春
　津の國の——は夢なれや　蘆六一
難波の春も幾久し　難二三二八
難波の御子
　仁徳天皇と聞えさせ給ひしは——　蘆六〇
難波の御子は皇子ながら　難三三三一
難波の御津の浦よりも日毎に潮を　難三三三六
難波の皇子菟道の皇子と互に　蟬一六八四
難波人
　妻や重ねし　蘆五七
難波人蘆火焚く屋も市館も　松蟲二八六三
難波人は蘆といふ
　伊勢人は濱荻といひ——　蘆五一
難波舟の出で浮かみたる　蘆四八
難波女のかづく袖笠肘笠　蘆五四
難波わたりにてこそ異浦なんどと　紋一〇五〇
難波わたりの春の景色　蘆五三
なに身をづくし思ひ初めけん　住一五四七
名にめでて折れるばかりぞ女郎花　女四九一
名にも似ず月こそ出づれ朝日山　雷三〇二
なに山姫の布晒すらん　住三七〇・室三〇三
何をかくるる女郎花　小督一一〇一
何を引かまし姫小松の　鶴二〇九九
七日七夜の御神拜　弓三一九
七日七日に參り　朝二三六〇
七日に限る櫻の盛り三七日まで殘り　泰一七四一
名のらずはいかでそれとも夕暮の　竹雪一八七九
名ばかりは在原寺の跡古りて　井上歌二四〇五
苗代小田の種蒔きにけり　淡一四四
名は人めきて賤しき垣ほにかかり　半四九九
名は末代
　身は一代——　元一〇八九
　弓取る——にあらずや　八島二三六一
靡かぬ草木もなき時なれや　石一六八〇
靡く稻葉の色までも千年の秋の　東方三一八〇
納受
　ありがたき神慮の——もかくやと　住一五四二
　かくばかり——あれば今ははや　卷二八〇八
　神明——垂れ給ひ　木賊八三三
　などか——なかるべき　蟻三三〇
直實（蓮生參照）
熊谷の次郎——　實二二五

なほざりに頼め置くその一言も　住一五四六
直衣
　形見の――身に觸れて　井三四一一
　玉の冠――の袖　國八九六
猶照らせ代々に變らぬ男山　放生川三四六四
猶も思へば腹立ちや　富士太上歌二七〇六
猶もその身は迷ふとも　通小上歌七六八
直井後妻　竹生狂言一八七五
直井左衛門　竹雪ワキ一八七五
なまうだ　百二六七二
曩謨三曼多嚩日羅赦　葵一六六・道成一八〇一
なまじひに弓馬の家に生まれ　盛三〇九六
なまめきたてる女郎花　女八六四・女上歌二四九二
なまめきたる若武者の　仲二三四七
波
　雲の――煙も見えし松原の　熊五〇八
　四海――靜かにて國も治まる　高砂一八六四
　四海の――も靜か　内三七六
　東南西北音せぬ――の　百三五〇
波風も靜かを留め給ふかと　船辨上歌二七七五
波返し
　青海波の――　梅枝四四六
波ここもとや須磨の浦　兼一三五・知二三四七・松風二六二六
波越す袖の涙川　紅上歌一〇四六
涙
　愁ひを弔ふ――は問はざるに先づ落つ　雷三三三六
　落つる――は百千行　道明一八三三
　風結ぶ――の袖の玉だすき　昭一五八二
　かたじけなさに――こぼるる　巴三三七八
　黄なる――を流せば　項五九四
　鳥林下に鳴いて――盡きがたし　雲雀二六四四
　降るは――か櫻花　熊野三三五三
涙かすみの悲しやな　松山鏡二八七五
涙かたしく小筵に　砧八三一
涙川
　亡き影の絶えぬも同じ――　浮三三三
　身になす事は――　錦木二三四五
涙川水上はわれなるものを　俊寛一四二七
涙曇りの顏ばせ　檜二六三一
涙越す袖の柵隙なきに　百二六七七
波ただここもとに聞え來て　鼓一〇五一
涙玉を貫く思ひを善途に標し　安宅九三
涙の雨
　落つるはさたから――の　項五九八
　袖に餘れる――　砧八二八
　花の葛もしぼむ――より　泰一七四一
　人を見ぬ目の――　關寺一六一七
　身ひとりに降る――か　通小七七一
涙の雨さへしきる夜の空　千一七一〇
涙の雨とのみしをるる袖の花薄　朝二三五九
涙の雨は後の世の障り　夕三三一三
涙の雨や増りけん　浮三一九
涙の色にも見ゆらん　鵜二一四六
涙の色も紅の　雲雀二六四八
涙の露の玉鬘　皇九九三・羽二四八九
涙の露の玉章　東八〇二
涙の露の月の影　昭一五八三
涙は却つて火焰となつて　砧八三七
涙もよしや星合の　小督一一〇八
涙を抑へて宣へば　花クセ二三五九
涙を文に卷き籠め　夜三三六九
波ならで乾す隙もなき海士衣　阿一薦三〇
波にうき寢の夜となく　項五九六
波の浮島住む程も　望次第三〇四一
波のうねうね生ひ茂るらん　草子一一八四
波の音
　鼓は――笛は龍の吟ずる聲　白樂二四七八
波の聲
　常住無有變易の――　白髭二四六八
波の聲萬歲の響は　志一二九八
波の底にも都ありとは　大原五五〇
波の柵
　陸には――　八島三一六二
波の鼓
　寶を寄する――　岩二九四

波の鼓どうと打ち　提一三五三
波の鼓の無案にゝれて　毛一八二一
波の鼓も磨うち添へ　内二七九
波の鼓や風の響　東岸三七三
波の鼓を打てば　絃一〇五七
波の花こそ盛りなりけれ　大原五四一
波の花こそ間なく寄すらめ　攝一二三三
波の花さへ色に出でつゝ　藤二七六
波の花散る白衣の袖　須一五〇三
波の雪も時知らで　元一〇七九
波は音なき朝なぎに　羽三四八七
波は礒の礒がくれ　高砂一八六一
波も音なき四つの海　岩二八七・老五三四
波もて立つや夏衣　江島四九二
波もて結へる淡路潟　梅枝四四六
波もて結へる淡路島　淡一五一
波をかざしの手向草　和三〇三一
波を返し雲を穿ち　白鬚一四七五
波を收むるも氷水を鎭むるも氷　米二六六五
波小舟　通盛二八九八
南無阿彌陀佛　敦一三〇・大原五四四・柏六五九・實一三四八
　隅一五三二・檀二〇一七・土車二〇七七・百二六
　七一・三山二九二〇
南無阿彌陀佛
　心ゆるすな　當一八四二

　何事も皆うち捨てて　誓一五五六
南無阿彌陀佛と二聲宣ふ　朝二六六三
南無阿彌陀佛の聲ばかり　隅一五五六・當一八四一
南無阿彌陀佛彌陀如來　清八五三・初二五七七
南無歸依佛　野守二四三一
南無歸命月天子本地大勢至　羽三四九四
南無歸命彌陀尊　田六六一
南無三寶　田七八九・東岸三一七四・放下三四四八
南無釋迦彌陀佛　百二六七四
南無當來導師彌勒佛とぞ唱へ　雲二五三四
南無といつぱ即ちこれ歸命　春一一五五
南無佛敵を討たせ給へや　雷三〇五
南無佛無慙やな　禪一六九七
南無や大慈大悲の觀世音　三井一九九〇・盛二〇九六
南無や天照皇大神宮天長地久と　花筐二九九〇
南無や八幡山王權現　大江五六八
南無や八幡大菩薩と心に念じ　紅三〇九一
南無幽靈成等正覺　通小七六・水無瀬二九三三・求三〇七二
南無幽靈出離生死頓證菩提　善知三八・女三四九八
名も清き水のまにまにとめくれば　熊野三二四六
名もことわりや秋風の　罪一五五一
奈良（春日の里參照）　大佛所一七四三
奈落
　いふならく——の底に入りぬれば　錦木三三五三
　いふならく——も同じうたかたの　清八五四

　浮かむべき便も——に沈み　松山鏡二八七三
奈落に沈む身へ　雲二三三
奈落の底にぞ入り　野守二四三四
奈落の底の白魚なれども　合六八七
奈落の底の水屑　鵜二七四
奈良坂
　南無月時雨降りおく——や　千二七三
奈良坂越えて　春日六六九
奈良坂の兒の手柏の二面　百々二六七七・三二四六
奈良坂のこの手を合はせて　春日六七三
奈良坂や春日の里　二八九七
奈良坂やかへりみすれば　二七一
奈良坂や龍田の山に　三三三
鳴らさぬ枝ぞのどけき　金八七〇・護三三三七
鳴らさぬ枝も夏木立　代一四八〇
楢の葉
　風も靜かに——の　金八七〇
　三笠山茂き楢も——の　胡一一四三
楢の葉の時雨降りおく天が下に　大佛一七五三
楢の葉の昔し作らふ程もなく　三二五
楢の葉の名におふ宮の古ことを　玉葛道行一九六八
楢の葉守
　青丹よし——の神心　金八七一
奈良の都の八重櫻咲きかへる　雲雀二六四九
奈良の都の代々を經て　采四〇七

奈良の都を立ち出でて　龍田一九三三
習はぬ旅の疲れ　谷一九四五
習はぬ業も父の爲　望三〇四八
習はぬ業を營業は　竹雪上歌一八八四
雙の岡(京都)
　月に　・の松　春日六六九・經二〇九〇
なりあひ(京都)
　天地の雨燈一つに――　[illegible]世九三九
成經　俊寛ツレ一四三一
成經
　丹波の少將　俊寛一四二三
業平　雲林シテ四五七・小鹽シテ三四五五
業平
　在原の跡は昔に　・の　水無月三九四一
　在原の――供奉し給ひ　小鹽三四六一
　在原の　・のその身は朝に隙なき　熊野三三四五
　伊勢物語の根本在中將　雲林四六三
　わが身の上に――の　右三三四
業平紀の有常の息女夫婦　井三四〇二
業平玉津島にて法樂の舞　鸚二三
業平の結縁の衆生に契り結ぶの神　賀茂物七五六
業平の心には神代も聞かずと　飛雲三六一六
業平のこの杜若を詠みし歌　杜六三一
業平の花に映じて衆生濟度の姿　小鹽三四六四
業平は極樂の歌舞の菩薩の化現　杜六三四
業平もこの渡りにて　隅一五七三
業平も世人定めよといひ　錦木三三五四
鳴る雷となり内裏に飛び入り　雷三三三七
鳴る神
　雨雲迷ふ　のとどろとどろと　自一三四四
　藤榮三三六一
鳴神稻妻天地に滿ち　安達二一八
なる神も思ふ中をばさけぬ　表一九四
鳴る神も思ふ中をば避けられし　鐵七〇七
鳴子田
　賤が――引き連れて　鳥三三九四
鳴子の群雀　鳥三三九九
なるさの大將
　富士の　・や　[illegible]一一九〇
鳴門(德島)　通盛所三八九五
鳴門
　阿波の――に一夏を送る僧　通盛三八九七
鳴門の沖
　誰そやこの　・に音するは　通盛三八九九
鳴門の沖に音するは　海一七[illegible]
鳴るは瀧の水
　扇おつ取り――　田六六〇
鳴るは瀧の水日は照るとも　第七・安宅ワカ一〇二二
鳴海(愛知)
　近く　・の磯の波　源太一〇六七
鳴海潟
　汐路や遠く　松風六八三九
　廻れば野邊に　・　[illegible]〇九七
鳴尾(兵庫)
　ここは　・の松陰に　松風六八三九
遠く――の沖過ぎて　高砂一八七一
鳴尾潟
　難波は跡に　・　[illegible]三四九
鳴尾潟沖波遠き小舟かな　忠度一九〇七
鳴尾殿の御酒迎ひと申すか　藤榮三一五三
鳴尾何某　藤榮ツレ三三四七
馴れし東の花や散るらん　熊野[illegible]
馴れつつもつま木の道の　飛雲一藏三六一五
馴れてつはいは山伏　大江五六四
馴れて臥す猪の床の上　砧八三一
馴れぬ親子を悲しみ　景[illegible]
馴れはまさらで戀のまさらん　[illegible]九五四
馴れもせぬ人なれども　右三四四
馴れも馴れぬに遠旅の　蟬三三七
名をとめし主は花の景季の　芦上歌五二一
名をば埋まぬ苔の下　源氏[illegible]
名をば朽たす　[illegible]一七八
名をば沈めぬ武士の　二人三七三一
名を富士の嶺にあげばや　[illegible]一一九
名を末代に留め　放下二四五一

名を末代の家に惜しみ一命を輕んず　[illegible]一〇八九
名をも朽たし　烏三九八
名をや埋まん苔の下　元一〇八九
名を惜しむ武士の　通盛三九〇一
名を惜しむ弓取　實一三五九
南海道　熊五一一
難儀の所勞なれども　歌三九九
難儀の折なれば　鵜三七二
難行
　樣々に——し仙人に仕へ　大原五三九
難行苦行し給ひしも　自一三四三
難行苦行捨身の行にて　石一三七六
難行捨身の行體　谷一九四一
難行の法の薪と思し召し　鉢三五九七
南山を見る　室一三八六
男子
　一切の——をば生々の父と頼み　鵜三七一
南枝
　越鳥——に巣をかけ　鵜三二一・知二三四三
南枝花始めて開く　高砂一八六五・難三三三六
南枝北枝の梅の花　東岸二一六九
難信之法
　爲一切世間說此——　當一八五三
南贍僧伽陀國波斯彌陀尊者　小鍛一一三一
南贍部洲の草木緣なり　歌三六八
南贍部洲を普く遊行し　白鬚一四六八
難陀龍王　春日六七七
汝一人おろかなる　卷三八〇五
汝元來殺生石問ふ石靈　殺一六四三
汝知らずや我が心　鐘一四五七
南殿
　夜は又——の床に明かさせ給ひ　小督一〇九八
南都七堂に參り　井二四〇一
南都に參らばや　采三九七・賴三三九九
男女の差別は知らず　海一七三
男女夫婦の語らひをなし　鐵七一〇
男女夫婦の妹ともこの歎の情　俊成一四四五
南方に軍荼利夜叉明王　清成一八〇一・舎靈三六一九
南方無垢世界
　八歳の龍女は——に生を受く　海一八六
南方無垢世界に生まれん事　采四〇七
何番
　烏帽子は——に折り候べき　烏三四一九
南蠻北狄
　東夷西戎——の恐れなければ　金八七七
なんぼうあさましき御有樣　松山天二六八七
なんぼうありがたき御諚　綠二一五七
なんぼうありがたき御夢想　道明一八二九
なんぼういみじき御威光にて　調二二三
なんぼう奇特なる事　盛久三二〇五
なんぼう見事の男になり　元一〇九一
なんぼう無念の事であらう　鉢三五六一
南門
　都の——　羅三三五〇
南陽の酈縣の山より菊の水流れ　枕二八一六
南嶺の柴を焚く
　後夜の爐には——　梅三六三三
南鐐と申す名馬　賴三三〇六

に

似合はぬ所望　八島三一五一
似合はぬ僧の腕立て　熊坂九三七
似合はぬ申し事　碇二五三
柔和の姿引きかへて　矢四〇三
二階堂承りにて　鉢△二五六二
二階堂某　鉢ノキツレ二五四五
二河の流れはありながら　鵜羽二七五六
二句の偈を書き添へ　菊八一〇
二君に仕へず
　賢人——貞女兩夫に見えず　錦戸二三六八
二月に臨んで魂を消し　金一三九〇
二月の雪衣に落つ　高砂一八七二
二月の雪は衣に落つ　弱三三一〇
濁り江
　心の水は——に引かれ　夕三二八
　誠少き——のすまで頼まば　班二六〇三
濁りたくぞ水むすぶの神の　賀七四〇
濁りにしまぬ蓮の絲　當次第一八四三
濁る心の罪あらぜ重き罪科にも　井戸二七四九
濁れる世には住み難し　園九〇四
荷前の運ぶたる　戀二一六〇

西
　心は——へと一すぢに　隅一五三三
虹
　雨の後に——をなせる姿又弓を　石一三七九
西川（京都）　大江五五五
西河の瀧（奈良）
　櫻木の宮神の宮瀧——　二人二七二〇
錦
　五百重の——や瑠璃の樞　鶴二〇九八
　故郷へは——を着て歸る　實一三六〇
　山花開けて——に似たり　櫻一三三六
　蜀人文を洗ふ——　松山鏡二八七八
　誰が爲の——なればか秋霧の　佐一三七三
　龍田川——織りかく神無月　龍田一九二六
　千草もさまざまに——を彩る　身二九五一
　野邊は——の小萩原　項五八八九
　もみぢ葉を分けつつ行けば——着　實一二六〇
　柳櫻をこきまぜて——をさらす　賀茂物七五五
　闇の——のたとへても　祇八六一
〔錦木〕　二三四一
錦木
　戀の染木ともこの——を詠み　錦木二三五七
　男女の媒にはこの——を作り　錦木二三四八
錦木とて色どり飾れる木　錦木二三四六
錦木の數積り　阿三四

錦木の千度百夜いたづらに　錦木二三四五
錦木は立てながらこそ朽ち　錦木上歌二三四八
錦木は千束になりぬ今こそは　錦木二三五七
錦木や名たてなるらん　錦木二三四四
錦木を日毎に立てて千束とも詠み　錦木二三四七
錦塚　錦木二三四九
〔錦戸〕　二三六一
錦戸太郎　錦戸ワキ二三六一
錦と見ゆる故郷の空　塵三〇九六
錦の衣玉鬘　梅四三〇
錦の袂なるらん　現一〇一八
錦の袂を會稽山に飜し　實一二六〇
錦のはた薄　岡寺一六一三
錦の濱（和歌山）　安達一〇一八
錦の直垂
　赤地の——に　八島三一五一
　侍かと思へば——を着たり　實一二五八
　村紅葉の——　忠度一九一八
錦の袋に入れて持ちたるは弓　弓八三三五
錦を色どる夕時雨　紅三〇八二
錦を飾る花車　花三四二
西くれなゐの蘇命路の山　歌三五七
西ぐれなゐの峯續き　松山鏡二八四五
西谷の花今を盛りと見え　致九五〇
仁科　舎ノ七三三

西に生まるる一華の御法　三山九五
西に傾く月を見ればいざやわれらも　滿八三
西に向ひてうち招けば　杜上歌六八九
西の海あをき原の波間より　岩三九〇・雨三三六
　高砂一八七一・白樂ワカ二四八〇
西の大寺月澄みて　春日六七五
西の大寺の柳陰みどり子の　百三六七八
西の大寺をよそに見て　龍田一九三三
西の宮（兵庫）　昆九七七
西はと問へば月の入る　通盛上歌二九〇三
西は法輪嵯峨の御寺　放下三四五〇
二十一社
　麓に山王——　飛七一九
二十五有
　十二因緣より——の沈淪　春榮一四一三
二十五有のうち　楊三一一三
二十五菩薩
　鼓の聲や——の　源太一〇七三
二十五の菩薩聖衆のみのりには　誓一五六二
二十八部衆　攝三〇二七
二十八宿
　九曜七星——　鐵七一〇
尼上の獄
　尼が上りし山なる故——とは　當一八四九
二上の嶽とは二上の山とこそ人は　當一八四九

二者常釋二者常住　善四四四
西山本（京都）　土九六五
二乘闡提惡人女人おしなべて成佛す　現一〇二五
二所宗廟の御惠み　御二九六六
西より西の秋の空　雨三三九
二神
　天の浮橋に——育み給ひて　一〇〇七
二神出世の古十方世界を定めしに　羽二四九三
二親精靈頓證佛果　白一三二八
二世安樂の緣深き親子の道ぞ　攝一三四〇
　竹雪一八八八
二世安樂の國にはや生まれ　誓一五五七
二世安樂の心を得るに　舍一三六八
二世安樂のこの島に　江島四九八
二世安樂の神德　放生二四六三
二世安樂のため　弱三二一七
二星に誓ひし言の葉　楊三三二一
二星の館の前に風　天三一四五
二聖六歌仙を始めとし　志一三九七
二世とかねたる契り　錦木三三五三
二世の緣　籠三三九七
二世のかひ
　身代りに立ちてこそは——　籠三三九六
二世の願望もし空しくば　雁三一〇〇
二世の契り　朝三三六一

二世の願ひも成就なるべし　三七
二世の願ひも滿つ月の　四三八
二世の願ひをするは二世の契りとかや　三六四
似せ繪
　賢聖の障子に——にこれを　昭一五八五
二千人の后　皇九九〇
二千里の外
　三五夜中の新月の——まで　雨
二千里の外の故人の心　三井二九九七・班三四八〇
二千里の外も遠からぬ　小督一一三
二諦
　忍辱——の衣を着　放下三四四四
二體の義
　君親二つは——　錦戶二三三三
似たりや似たり杜若花菖蒲　杜六三八
日月はまた地に墮ち給はず　大會九八
日月は四洲を照らすと雖も　鵜九六五
日月は地に墮ちず　花筐三五八九
日月は地に墮ちぬ習ひ　一六八五
日神月神蛭子素戔嗚と申すは　養一四〇七
日神月神を崇め申す　第七七三
日神の御湊ありがたや　養四五一
日神の御影照らし給へば　內一七九
日夜朝暮參會申し　蟬三四〇七
日夜の勝劣見えざりけり　白鬚一四七四・西王一五七〇
日輪

銀の山を築かせては黄金の――を　蘭七八三
日輪月輪照り輝いて　竹生二〇三九
日蓮　鶴羽ツキ二九七・現ツキ一〇二一・身ツキ二九四九
日域
西天唐土――に　舍一三八九
日域朝廷の本主
八幡大菩薩は――累世明君　末眘八三一
につくい山伏　安宅八五
につくき者
この所にては翁も――ござかし　國九〇三
入唐渡天し　石一三七五
入唐渡天の志あるによ〻り　春日六六九
入唐渡天の望みあつて　龍虎三三六一
入唐の商人持てる笛なるに　笛二五二六
入唐の御望み　鼓一〇四六
入唐の沙門　龍虎三三六三
新田の四郎と戰ひ給ひしか　夜三三七四
日本
伏見とは總じて――の名たり　金八七四
日本一
それこそ――の事　関八九七
日本一の追風が吹き　花二〇三三
日本一の剛の者とくんでうずよ〻へ　實二三六一
日本一の御機嫌　小袖一二三一
日本一の事にて候　身二五五四
日本一の夜にて　輝二〇二〇
日本一烏帽子が似合ひ申して候　烏四二三
日本第一の鉾の御矛を納めしは　逆二二〇六
日本第三の社壇　富嶽四一七
日本には歌を詠みて人の心を慰め　白樂二四七五
日本に渡り佛法をも妨げばや　善界一五九七
日本の智慧を計れとの宣旨　白樂二四七一
日本は粟散邊地の小國なれども　善界一五九七
二條大宮を南がしらに歩ませ　羅三三五三
二條の后　小林四六三
二童子
普建普成の――に持たせ　輪二三八一
二度の懸　通△五一五
二人の僧は巖の上　通盛二八九九
二つ刀をばこの客僧仕るべし　檀二〇二〇
二つ松明は時の運　烏四三五
三の宮（兵庫）　淡所一三九
二八の春
生年――たれば　知三三五一
鶏の時をもかへず　卒一七二九
鶏はまた鳴かずや夜長なり　烏九八四
鶏を使者となし給ふ　龍田△一九二九
庭には金銀の砂を敷き　邯七八三
庭の砂は金銀の　鶴上歌二〇九七
庭のもせ　芭二五四〇
庭の雪
跡をつけぬ――　伸二一〇
庭の萩原まづそよぎ　西二五四一
庭燎の影　通盛一八二六
庭燎の光椰葉を　松尾二八四八
二百餘歳の程は經れども　實一三五一
新山と名づけ　富士山二六九一
鈍色の二つ衣に練袴の　大原五四九
入道相國　祇八五九
入定と申すことは　高野六一〇
二佛東西に去り給ふ　白鬚一四七〇
二佛の中間の衆生として　木賊三三一四
二佛の中間われら初きの迷ひある　百二六七九
入部　関原一六三七・關原二七四〇
入滅
鷲峰の説法雙林の　春日六七五
贊
荒鵜をとりて――に供ふ　鵜祭四一六
鳥類畜類までも――に供はる　鵜祭四一六
鷺の羽　鷺八
鳰照る比叡の山高み　三井二九七五
鳰の海とは　
近江路や――とはこれかとよ　巴二二七七
影もあたたに　竹生二二三九

影も涼しき――　江島四九一
月は山風ぞ時雨に―　三井二九七
鳰の浦　竹生二〇[illegible]
鳰の浦風さえかへり　[illegible]一四六四
鳰の浦波靜かなる　巴三三七
匂はざりせば誰か知るべき　[illegible]六〇八
匂はぬ袖ぞ悲しき　通小七六四
日本（ニッポンを見よ）
若有聞法者無一不成佛　梅枝四四四・現一〇一五
若我成佛十方世界　敦一三〇・三山二九二〇
若我成佛十方の世界　柏六六三
若我成佛の光を受くる　誓一五六三
若作障碍即有一佛魔境　善界一六〇五
如意が嶽（京都）　[illegible]九五九・善界一六〇二
如意の寶珠
月も照り添ふ――の光　江島五〇一
龍女は――を釋尊に捧げ　合六八七
如意寶珠を君に捧げんと　江島五〇三
如意寶珠をわが君に捧げ奉る　岩二八九
如意輪の佛像救世觀音とも申す　弱三三二
女御　綾ツレ一八九・[illegible]ツレ一一五三
女御更衣の聲と聞きしは松風の音　部七八八
女御の御姿を見參らせ　綾一九〇
女御の御姿を拜み申し　戀一一五五
女房
局々の――達も　草子一一九一
女院の御庵室　大原五四一
女院は六道の有様正に御覽じ　大原五四七
女院も御身を投げさせ給ひ　大原五五七
如我昔所願　通盛二九〇五
如我等無異の身となれば　現一〇三一
如子得母如渡得船　碇二五三
女身
五者佛身云何　梅枝四四四
如是觀
應作――の心をも　谷一九四八
女體の神とおぼしくて　葛七〇〇
如渡得船
御經にも――　碇七一八
如子得母――　碇二五[illegible]
如渡得船の海の面　[illegible]二九五一
女人
二乘闡提惡人――おしなめて　現一〇一五
萬の――を生々の母と思へ　朝三七一
女人禁制とこそ承りて　竹生二〇三七
女人禁制にてあるぞ　道成一七九二
女人成佛疑ひあるべからず　梅枝四四三
女人の惡心は煩惱の　富士太二七〇七
女人の參るまじきとの御制戒　柏六五九
女人は外面は菩薩に似て内心は　現一〇一七
如夢幻泡影如露亦如電　[illegible]二九四、
如來
逢ひ難き――の佛教に逢ひ　[illegible]七九
五智の――に五體を投げ　[illegible]三三八
來世一代教主の――も　熊野三三四
如來肝心の法門を說き給ふ　大會一七八五
如來堂
毎日――へ伴ひ　[illegible]六五六
如來の御前に　[illegible]三七八
如來の教法
逢ひ難き――に逢ふ　高野六〇四
二流に讀まれ
取り放し又鳥は無しと――　[illegible]七五九
仁王にならう　大會△一七八四
二位殿　碇二五九
二位殿
主上――を始め奉り　[illegible]四九
先帝――を始め奉り　大原五三六
二位尼　碇ツレ二四七
人衣の姿　[illegible]五七九
人界
今――に至るまで　[illegible]一四[illegible]
受け難き身の――を受く　[illegible]五六
受け難き――をたまたま受くる　[illegible]四九
假に――に生まれ來て　楊三二四

わづかなる——急いで來迎の　春榮一四一四
人界に生を受くとはいひながら　土車二〇七八
人界に生を受けながら　安達二一三
人界をいつかは離れはつべき　鐘一四五三
人牛の道　車九七一
人化
神僊——の境界として　富士山二六九〇
人間
罪科は——にあり　輪二九八四
佛性同體の——　天二三六八
人間憂ひの花盛り　隅一五三二
人間有爲の轉變はげんしの中に現れ　俊五〇九
人間有爲の身となりて　弱三三一八
人間界に生まるれば八つの苦しみ　春榮一四一三
人間個々繼生の觀念　俊五〇八
人間長久の靡滿てり　春日六七〇
人間に遊ぶ事　山三一八一
人間にありながら佛道をも願はず　□七七八
人間に交はらず　東方二一八一
仙鄕といつぱ——
人間に交はり心を遂はし　一角二八三
人間の織る衣にあらず　佐一三七〇
人間の御遊のかたみの舞　羽二四九一
人間の定相を守り　□一七三九
人間の变はりあるべき所ならず　一角二七九
人間の妙奇仙境の祕跡　□島四九三
人間の水は南星は北にたんたくの　天二一四五
人間の容貌は朝に榮え夕に衰へ　草□八八一
人間の業なりとも感應などか　源大一〇七三
人間の渡せる橋にあらず　石一三七八
人間萬事塞翁が馬　綾一九三
人間萬事樣々の　志一三九四・石一三七五
人間目前の境界なり　蟬一六八〇
人身
受け難き——を受け　盧二四五・卒一七一九
人尺
茅の人形を——に作り　鐵七一〇
人壽圓長たる事を求む　草薙八八三
人代に及んで甚た興る風俗　□二三一
人道
見聞くも同じ——の苦しみ　大□五四八
人中上上妙好華　□一五五五
人中天上の善果を受く　□□四八四
人天
梵釋四王の——に降り給ふ　須一五〇三
仁德天皇この難波の浦に大宮造り　藏五二
仁德天皇の御宇　氷二六五六
仁德の御宇　雖二三三七
仁和寺(京都)　經所二〇八三
仁和寺御室に仕へ申す僧都行慶　經二〇八五
忍辱慈悲の姿　□一六七・□□一九〇九
忍辱二諦の衣を着　□下一四四四
忍辱の袈裟
不淨を隔つる——　□一六六
忍辱の鎧
墨染の下に——　禪一六九六
人々同じ佛性なり　采四〇六
人皇末代の子孫まで　給三四四五
人馬に息をつがせ　關原一六二九
仁平の頃ほひ　□二□八四
人佛不二の御心にて　放生三四六一
人佛不二の道　高野六一〇
仁明天皇御在位の御時　□□一五一〇
仁明天皇の御宇　□六二五
人與非人皆遙見彼龍女成佛　海一八六
仁王會を執り行はばや　□□□□

ぬ

〔鵺〕 二三七七
鵺 鵺[illegible]七
鵺
頭は猿：鳴く聲——に似たり 鵺二三八六
鵺の亡心 鵺二三八四
幣
この度は——とりあへぬ折なるに 龍田一九二八
われもその——に涙ぞかかりにき 賀茂物七五四
盗みも命のありてこそ 葉抜九四三・烏三四三五
塗稚兒 鞍△九五一
濡るとも花の蔭ならば 有三四一
濡るる顔
月影も——なる袂かな 楊三一八
濡衣
池の玉藻の—— 三山二九一九
行方も知らで—— 典[illegible]五九九
濡れて干す山路の菊の露の間に 俊寛一四三七
濡れてや鹿のひとり鳴く 紅三〇八二

ね

願ひの絲はへて 岡寺一六二三
願ひの絲の色見えぬ [illegible]八六一
願ひも三つの船 [illegible]
願ひも三つの山ならん 俊寛一四二四
ねぎこと
弓取の子は胎内にて——を聞き 烏二[illegible]〇三
寝くたれ髪
吾妹子が——を猿澤の 采四〇二
塒をたたぬ鶴の翼をつらぬる 熊五一三
〔寝覺〕
寝覺の里(長野) 二三九三
寝覺の里 [illegible]
松風の聲—— 源太一〇六七
寝覺の床(長野) 寝三三九五
寝覺の枕より 八島三一五七
寝覺も須磨の關守 [illegible]
根じろの柳
川岸の——あらはれにけり 常栄二一五六
根芹 岡八九七
ねそ〳〵と何事ぞといはれた 車△九六八
[illegible] [illegible]
佞人
とにもかくにも——の [illegible]
熱鐵の箸を振り上げて [illegible]
熱鐵の桶
三瀬河に——を[illegible] [illegible]
寝てか覺めてか春の夜の月 小鍛冶[illegible]
音取を吹かう [illegible]
子に臥し寅に起き隠れし 野守二四三三・攝上歌一六四九
根の國とこの國に住く 大蛇三五〇八
根の井の大鋼太 [illegible]
涅槃
姑蘇臺の秋の月に——の雲に隠れぬ [illegible]
生死——に入り定まれる 吉野六二一
大慈教主の秋の月に——の雲に隠れ [illegible]
方便現—— [illegible]
菩提——に至らず 嵐二四五
涅槃に引かれ [illegible]
念彼觀音(ネンピクワンノンを見よ)
寝亂れ髪
黒髪の飽かぬやいつの—— 玉葛一九六七
ねもせず起きもせず 梅枝四四五
閨の扇の色ことに [illegible]二四
閨の内
人に知られぬ——見め 錦木二[illegible]八
寝られぬままに思ひ立つ 富士太上歌[illegible]

寢られねば夢も見ず　鉢二五五五
寢られんものか面白や　六浦三〇一五
寢られんものか下枕　春一七三七
練袴の稜高く挾んで　大原五四九
ねをこそ絶ゆれ浮草の　檜二六三五
音をこそ泣かめ世をば恨みじ　阿三七
音をこそ泣かめ世をばげに　藤戸二七四一
根を離れたる草
　身を觀ずれば岸の額に――　大原五四七
年行の功を積むこと　檜一〇二五・野守二四三三
年行の功を積める　野守二四三一
念願の勤め事終り　源氏一〇三三
念なう敵をば討つて　籠三三八六
念なう富士を討ち　梅枝△四四二
念々毎に往生す　實二三五五
念々相續する人は念々毎に往生す　實二三五五
念彼觀音の力を合はせて　田二〇〇一
念彼觀音力刀尋段々壞　盛三一〇〇
念佛
　一遍の――を回向申して　知三三四一
　融通――を國土に弘め　三山二九一三
念佛三昧
　一向に――の定に入り　當一八四七
念佛三昧の道場に出て入る人の　誓一五五[illegible]
念佛衆生攝取不捨　敦一三〇・忠度一九一八・三山二九二〇
念佛衆生無量壽如來　水無瀨二九三三
念佛稱名の聲　高野六〇八
念佛の行者　當一八四[illegible]
念佛の行者一遍と申す聖　誓一五五三
念佛の功力にひかれ　朝三五七八
念佛の拍子
　あら惡の――や　百二六七一
念佛百萬遍申さば往生疑ひあるまじ　道明一八二九
念佛申し鼓を打ち　土車二〇七三
念佛往生の志　道明一八二八
年來の敵本望を遂げんと　小袖二一三八
念力　女三五〇一
念力のその期にありて　放下三四五一

の

膿血忽ち融滌し　安達一[illegible]七
農識なから昔より　道二三〇四
能力
　安達狂言一〇五・鞍狂言九四七・現狂言一〇[illegible]一
　元狂言一〇七五・元一〇八三・西行狂言一一六七
　舍狂言一三八三・[illegible]界狂言一五九五・鞍狂言一六[illegible]
　[illegible]・禪狂言一六八九・大佛狂言一七四三・道成狂言
　一七八九・道成狂言一七九二・調狂言二一一九・藤
　榮狂言二一四七・三井狂言二九八九
能力
　鞍馬の西谷の寺に仕へ申す――　鞍△九四九
　日蓮上人に仕へ申す――　現△一〇一九
　比叡山飯室の坊に仕へ申す　[illegible]界△一六〇[illegible]
野風山風吹き落ち　安達一一八
野飼の牛の聲々に[illegible]ゆゑに物や　皆一八一二
野飼をさせ　皆一八〇七
野上の里を立ち出でて　[illegible]上歌二五九九
野上宿(岐阜)　班所二五九七
逃れかねたる涟甸の生捕られ　千一七[illegible]九
軒
　雲の垣[illegible]の――[illegible]玉[illegible]　[illegible]八七一

軒と等しく積み置きたり　[illegible]二一七
軒には蔦朝顔這ひかかり　大原五四一
軒の草
　馴れて程經る――　小督一一〇一
　忘れ忍ぶの――　砧八三二
軒の忍にうつろひて　三山二九一八
軒の玉水とくとくと　卒一七二九
〔軒端梅〕　東北異稱二一八九
軒端の梅
　和泉式部の植ゑ給ひし――　東北二一九三
軒端の忍ぶ草忍ぶ方々多き宿　夕三二一二
軒も樞もまばらなる　蟬一六八五
野暮れ山暮れ里暮れて　邯七七八
野くれ山くれ露分けて　花筐二五八七
残りてもかひあるべきは空しく　隅上歌一五二一
のさげなるによつて　籠三三九〇
野澤の若菜今日摘まん　求三〇六四
野田の里(大阪)　雪三一八七
野田渡(大阪)　雪所三一八五
野田の渡り　雪三一八六
野路篠原(滋賀)　熊坂九三三
野路篠原の草枕　給三四四三
後瀬
　賀茂川の――しづかに後も逢はん　水無月二九四五

後瀬の山(福井)
　津田の入江青葉――々　[illegible]
後に生まれしばかりなり　小袖一二三一
後の暮ぞと頼め置く　[illegible]第一九二二
後の心ぞはてしもなき　[illegible]三二〇九
後のと[illegible]め
　判官の――も恐ろしや　[illegible]八[illegible]
後の春
　作園まさに身を捨てて――を　秦一七四〇
後の堀河の御宇に逢はば　求三〇七三
後の闇路をいかにせん　鵜飼三〇一
野路の夕露守山の　烏二四七
後の世
　過去の業障を果し――を助けん　蟬一六七六
　罪も報いも――も忘れ果てて　鵜飼三〇六
　餘經の――も彌陀一教　誓一五五七
後の世かけて車僧　車僧第九六四
後の世の門出なるらん　盛三一〇三
後の世の障り
　涙の雨は――　夕三二一二
後の世の便りともなるべけれ　鉢二五五二
後の世の迷ひ
　月の夕の浮雲は――なるべし　歌三六三
後の世の闇を弔ひ給へ　知三三四四
後の世の闇をば何と照らすらん　歌三六六

後の世の闇を晴らさずは　[illegible]一〇一五
後の世を[illegible]なり　[illegible]
後の世を待たで鬼界が島守と　俊寛一番一四二五
祝詞を奏らせうずる　[illegible]
祝詞を奏らせ候へ　内三七五
祝詞を奏らせられ候へ　住一五四一・巻三八一〇
祝詞を讀うて神慮をすずしめ　[illegible]
のどかに通ふ舟の道　竹生一番二〇五四
能登殿
　せんなき――の振舞かな　[illegible]二五四
能登の守教經　[illegible]二五四・大原五四九・碇六四四・[illegible]一六六一
　八島三二六一
能登の守はや甲冑を鎧ひつつ　通盛二九〇七
野中の草の露ならば　[illegible]八六七
野に臥し山に泊る身の　草一七一九・花一二〇一
野に臥し山を分け過ぎて　雪三一八六
ののしりて詣づる人影　住一五四四
〔野宮〕　二四一五
野の宮
　假にうつります――　野宮二四〇九
野の宮の舊跡　野宮二四〇七
野の宮の月も昔や思ふらん　野宮二四一八
野の宮の森の木枯秋更けて　野宮上歌二四〇九
野は夕立の富士颪　富士山二六八七
箆深

首の骨——に射させ　知三三五二
信高
　三條の吉次——　熊坂九四一・烏三四一五
信綱（田代）　七騎ツレ一三〇五
信俊　放下ワキ二四三五
信俊
　利根の——　放下二四三六
野邊の葛のはひ廣ごり　志一三九七
野邊は錦の小萩原　項五八九
上り下るや雲水の身は定めなき　船弁二七七〇
上り瀬の清き流れや　水無月二九四〇
のぼりての世の物語　小塩三四六一
上れば下る事もいさ　正一三六一
のぼれば下るや稲舟の　住一五四七
登れば玉の階の　成上歌七九四
野間の内海にて果て給ひし　烏三四三三
野間の内海へ御落ちある　朝三三六三
飲むからにげにも薬と菊水の　俊寛上歌一四二七
飲む心よりいつしかに　養三一三三
飲む酒は數そひぬ　大江五六四
飲むとも盡きじ汲めや掬べや　枕二八二〇
飲めどもかはらぬ
　酌めども盡きず——　猩一三五三
〔野守〕　二四二一
野守　野守狂言二四二一

野守
　紫野行き標野行き——は見すや　右三四六
野守の翁　野守二四二四
〔野守鏡〕　野守異稿二四二一
野守の鏡
　はし鷹の——得てしがな　野守二四二八
野守の鏡とは昔鬼神の持ちたる鏡　野守二四二五
野守の鏡と申す水　野守二四二五
野守の水鏡　野守二四二六
法（御法をも見よ）
　逢ひ難き——に逢ひ受け難き身の　芭二五三六
　花心の——の潤ひ種添へて　當一八四五
　妙なる——の三つの心　西王一五七〇
乘りうち叶ふまじ　紅三〇八四
憲方の御女上西門院　通盛△二九〇三
乘替中間きらびやかに　鉢二五六四
乘替にかき乘せられ　朝三三七三
乘替に召させ參らせ　巴三三八五
憲清
　佐藤兵衞——出家し西行と　西三一九七
憲清と聞えしその歌人　西三〇四
乘り力なければ追ひかけたり　鉢二五六五
敎經
　門脇殿の次男能登の守——　實二五四
　なに能登の守——とや　八島三一六一

能登の守——と名乘つて小船に　攝一六六一
能登の守、宜ふやう　景六四四
能登の守——は安藝の太郎兄弟　大原五四九
敎經の御供申さずして　大佛一七四九
法に心や急ぐらん　道三一九三
法に引かれて佛果に至る　胡一一五三
法による道ぞと造る船橋は　船橋二七五六
法の岩橋架けさりしその咎めとて　葛六九七
法の色
　草木も——を見せ　舍一三九〇
法の門
　日々夜々の——貴賤の道も普しや　當一〇八六
法の車
　門の外——の音聞けば　東北二一九八
法の結縁　芭二五三三
法の心も三つの名の　三山次第二九一三
法の衣の玉ならば　千手一九六四
法の聲
　鳴く音も——立てて　藤二七三九
　松吹く風も——　身九五一
法の御水と思し召して　木賊三三一三
法の薪
　難行の——と思し召し　鉢二五五七
法の力
　捨小舟——を頼むなり　實三三八四

母諸共に廻り逢ふ——ぞ　百二六八一
不思議に逢ふことも唯——ぞと　現一〇一九
迎への船——と覺えたり　竹生二〇三五
法の力ぞと念ひの珠の　朝三六九
法の力を頼むなり　千三二三
法の値遇
　逢ひ難き——のありがたさよ　錦木二三五二
法の咎めの呪詛を負ひ　葛六九六
法の友　敦一三四・知二三五二
法の燈火明らかに　玉葛待宵一九六六
法の燈火おのづから　雪三三四
法の燈火曇りなく　九世九三
法の友人なれば　輪三三七
法の場
　おのおの歸る——　實二三四七
法の場人
　おのおの歸る——　譬喩一五六四・佛二七九八
法の華心
　開くる——菩提の種となり　砧八三九
法の船
　彼の國へ行く——　實一三四七
法の人
　心を知るも——の　芭三五三五
　ただ頼むぞよ——　玉葛一九六四
　漏らさじの誓ひの船に——　碇二五三

法の人同じ道にと頼むなり　大原五四五
法の人にてましませば　會七一八
法の御聲を耳に觸れ　舍一三八八
法の道
　荒磯海深きは——　兼三七三一
　狂言ながらも——　自一三四四
　この船に——　[illegible]二五三
　玉の御輿に——　邯七八二
　竹馬にいざや——　百二六六九
　三つの車に——　葵一五八
法の道千里の外まで上もたき　西王一五七一
法の道にと思ひ立つ　龍虎次第三三六〇
法の道のべ遊行して　車九七二
法の水
　篠原の池のほとりの——　實一二五四
法の御舟
　安く到らん——　源太一〇六五
法の筵のとことはに　葛七〇〇
法の教への道すぐに　野宮二四〇八
法の教へを身に受けて　現次第一〇一四
乘りも得るべきわがあらばこそ　車九六六
乘りも習はぬ身の行方　邯七八二
範頼
　三河の守——　大原五三七
範頼義經押し寄せ給ひ　碇△二五六

範頼義經の大手搦手の　[illegible]
範頼義經のその勢　[illegible]
野分
　秋毎に——を船の追風にて　[illegible]
野分汐風いつもげに　[illegible]
野を分け山に出で入れども　[illegible]

は

誹諧
梅花(ウメをも見よ)
　色殊なる――の今を盛りと　鷺二
梅花に緣なき事を歎き　胡一二四四
梅花を花の兄ともいへり　胡一二四六
梅花を嘉して木の花といへり　難三三三〇
梅花を折つて頭に挿し　梅四三一
梅花を折つて頭に挿せば　弱三三二〇
敗種の二乘闡提も皆々同じ悟りを　高砂一八七三
配所の月　現一〇一七
　科なうして――を見る　柿二〇一〇
配所はさてもいつまでぞ　俊寛一四二七
配所も同じ配所非常も同じ大赦　俊寛一四二九
廢帝天皇の御宇　富一八四六
履いたる足駄を踏ん脫いで　花一〇〇四
履いたる沓を馬上より　雲上歌二〇五一
拜をすすむる萬戶の聲　鶴二〇九七
草雲雕といふ馬は　項五九三
〔放下〕　放下異稱二四三五
放下

この頃人の翫び候は――　放下二四三九
〔放下僧〕　二四三五
放下僧　放下二四三九
放下の姿に出で立ち　放下二四四〇
伯耆坊
　大山の――　鞍九五八
判官(義經參照)　安宅八〇
判官
　九郎――を尋ね給ふ　道二五四
判官お馬を汀にうち寄せ　八島三一五三
判官殿十二人の山伏となり　攝一六五三
判官殿に仕へ申せし　二人二七一六
判官殿の御內に　忠信一八九三
判官殿は親にて候者を賴み　錦戶二三六三
判官殿は鎌倉殿より大名十人　正一三五八
判官殿は賴朝の御代官として　船辨二七六九
判官なればとて鬼神にても　景六四四
判官の後のとがめも恐ろしや　吉靜三一八三
判官は神道を重んじ朝家を敬ひ　吉靜三三八五
判官弓を取り落し　八島三一五九
寶劍を腰にさし　土二一五九
保元のその以後は平家一統の世　俱三四二一
保元の春の花壽永の秋の紅葉　清八五二
保元平治の世の亂れ　鵺二二七〇
亡骨

　草徑が――とたつて　鵜三三六四
亡魂幽靈もさこそ嬉しと　朝三三六四
亡魂を弔ふ法の聲　女四九八
寶藏を開き見れば　二人二七一八
寶座をなし　舍一三九一
寶山
寶山倶利迦羅御嶽　龍田一九二三
寶山への道しるべ　道一一二
褒姒
　幽王の后――と現じ　殺一六四四
方士　雨ノキ三一一三
方士
　玄宗皇帝に仕へ申す――　楊三一一五
方士といひし者日本に渡り　富士山三六八五
保昌　大江ニツレ五五三・羅ニツレ三三四五
保昌
　藤原の――と連れ添ひ　東北八二一九六
保昌が館に獨武者　大江五六九
〔放生川〕　女四五三
放生川に身を投ぐる　女四九九
放生の御願を起し給ふ　放生二四五九
〔放生會〕　放生異稱二四五三
放生會とは生けるを放つ祭　放生二四五八
寶尺を疑ふ事をやめよ　二人二六八五
報謝の舞　現一〇三一・東二九五五・春三三〇四

寶珠
曇らぬ——を君に捧げん　江島五三二
如意の——　(→その項を見よ)
龍女が——とも思し召され　[illegible]六八九
寶珠を盗み取つて　海一八〇
亡心(幽霊・亡霊参照)
小竹田男の——　求二〇七三
鐘馗といひし者…その——　皇九九二
鐘馗の法事は…その——　第一四五二
鵺と申しものの——　鵺一二八四
傍臣語りて曰く　海一七七
亡心何に殘るらん　鵜三三八二
謀臣は有無に醉へり　貴八〇二
紡績の宿に身を置き人を助くる　山三一八二
寶刹
聰——の耳に充てり　當一八五二
茫然とあきれ　盛三一〇四
彭祖が菊の水　養三一三六
彭祖が七百歳を經しも　俊寛一四二七
寶祚を守らんが爲　木賊八二一
芳態あらたに眠り　熊二四三
彭澤の令　三笑一三八六
坊中へ案内申し　忠信一八九八
方丈
あの——は和泉式部の御休所　東北二一九三

寶殿　生二六七
茅店の月に嘯き　豪三一三〇
方等
五時といつぱ華嚴阿含——般若　大會一七八〇
茫々
風——たる野の宮の　野宮二四一九
草——として露深々と古塚の　井二四〇五
岸うつ波は——たり　岩[illegible]九一
草——たるあしたの原に　松蟲二八六六
心も——と起きあがり　舍一三九六
塚の上の草——として　隅一五三四
波の聲——たり　東岸二一七三
茫々と狂ひさめて　歌三六六七
褒美の詞にて妙なる法と　朝[illegible]三一一〇
亡婦魄靈の姿は凋める花の　井二四一二
方便
色々の御——を廻らし　一角二七七
極重惡人無他——　大原五四三・柏六五八・土車二〇七九
品々の——を語るも　第一七七二
衆生濟度の——の聲　養三一三九
大蛇を從へんその御——　大蛇三五〇九
方便機に隨ひ　現一〇一六
方便現涅槃　身二九五〇
方便の殺生だに菩薩の萬行に　放生二四五九
方便の殺生は菩薩の六度に優れり　熊坂九三七
方便の矢をつまよつて　放下二四四五

方便品
一人も漏らさじの——を讀誦す　通盛二九〇五
寶棒にて疾鬼を大地に打ち伏せ　舍一三九六
寶棒を取り直し打たんと　第一七七五
泡沫([illegible]を見よ)
芭蕉——の世の習ひ　[illegible]一五九
坊門殿のささへにて　楠九一四
蓬萊山
池の汀の鶴龜は——もよそならず　鶴二〇九八
亡靈(幽霊・亡心参照)
天鼓が——　天二一四三
亡き跡の——ここに來りたり　松蟲二八五九
破戒
持戒——を選ばず　放下二四四八
怨敵——を亡ぼして　[illegible]四五一
破戒闡提
彌陀の悲願には——をも洩らさず　土車二〇七八
破戒無慙の罪を恐れ　俊成一四四一
佩刀　正一三六七
羽風
袖の——天つ空の衣ならん　西王一五七四
羽風の舞
青柳に鶯傳ふ——　道[illegible]〇四
博多(福岡)
香椎——をうち過ぎ　[illegible]二二七
博多の海も程近く　和[illegible]

博多の津(福岡)
はかなかりける蜉蝣の命懸けたる　龍虎三三六一
はかなき程に羨まれ　夕三三一五
はかなきものはかげろふの　右三四五・櫻一三三七
はかばかし　鐘一四五三
あら──や盗人よ　鳥三四三七
袴
淨衣の──かいとつて　卒一七三九
袴は精好　二人三七一八
量りなき命の仙人　東方三一八二
量りなき命の佛　柏六六三
はかりなき齢を延ぶる明暮の　玉井一九七五
玻球迦寶
金銀碧瑠璃──の影　歌三五八
萩の戸
畫圖の屛風──闇の夜の錦なり　殺一六四〇
萩原の院に仕へ奉る　富士太三六九八
萩原の院の御宇に　梅枝△四四三
破鏡二度照らさず
落花枝に歸らず──　八島三一五七
波木井(山梨)
大白──の河風に　現一〇一四
魄
魂は陽に歸り　は陰に殘る　佃五一六
白雲帶に似て山の腰を圍る　白樂二四七五
白雲青山に藏ふ　放下二四四二
白雲深き所金龍躍る　放下二四四七
白衣
月宮殿の──の袖　融三三三
月宮殿の──の袂　鶴二〇九九
波の花散る──の袖　須一五〇三
白衣にて眞砂をとりて　俊寛一四三五
白衣の女人現れ給ふは　[illegible]三四八〇
幕下
廣く舊里を去つて遍く──を兼ね　藍二四四
博雅の三位　蟬狂言一六七一・蟬一六八三
白汗
面には──を流し　歌三六七
白魚
奈落の底の──なれども　合六八七
白居易は子を先だてて枕に殘る藥を　天三二一四
白魚となつて　合六八五
白虹地に滿ちて　伯六六一
白骨
夕には──となつて郊原に朽ちぬ　朝三三七〇
檜三六三〇
白沙
骸を──に埋んで日月の算を經　海一八五
百濟
新羅──の兇賊を皆盡く亡ぼし　[illegible]四一七
百濟國の王仁　[illegible]三三三四
白刃骨を碎く
紅波楯を流し──　賴三三〇七
白刃骨を碎く苦しみ　旅五二六・箙七三四
百節皆落す
手に劍の樹をよどれば──　歌三六五
白桃　昭シテ一五七七
白桃王母と申す夫婦　昭一五七九
白頭の雪
昨日は少年今日は──　龍虎三三六三
白頭の雪は積れども　樂三一三一
魄はこの世に留まり
魂は冥途にありながら──　實一三五一
魄は修羅道に殘つて
魂は善所に赴けども──　朝三三七三
白髮の老人　西行一一七五・遊三三〇〇
薄氷を踏む心地して　盛七九八
薄氷を履む如くにて　天二一三九
瀑布
萬假名を得て──といふ　三笑一三八五
伯父何某の連に襲はれ給ひ　國八九四
伯父の御時　皐九九二
瀑布の瀧　三笑一三八三
白粉を絶えさず　卒一七三六
薄暮くもれる御氣色　[illegible]一五一三

白楽天 白楽二四六九
白楽天
　唐の太子の賓客—— 白楽二四七〇
白楽天が酒功賛を作りし琴詩酒の友 松蟲六八五六
白鷺 羽ノ二四八三
白鷺と申す漁夫 羽二四八六
魄霊
　郊原に朽ち残る—— 松蟲二八六三
　法味を得んと——の 旅五一七
　亡婦——の姿は凋める花の 井三四一三
魄霊にひかれて来りたり 知二三四七
魄霊の影は失せ 錦二〇九三
羽黒山(山形) 葛六九一・飛雲二六一四
羽黒山より出でたる客僧 攝一六五七
羽黒山より出でたる山伏 葛六九一・野守二四三三
馬嵬が原にて失ひ申し 楊三一一六
巴峡秋深し五夜の哀猿月に叫ぶ 張二〇四九
百王(ヒヤクワウを見よ)
箱崎(福岡) 唐所一八〇五
箱崎
　松浦——の誓ひも 夕三三一〇
箱崎の神も納受し給ふ 唐一八一七
箱崎何某 唐ワキ一八〇五
箱崎の波立ち出でて 櫻一三三〇
葉毎に影やどる月をや船に 項五九一

運ぶ歩みの数よりも 采上歌三九八
運ぶは浅き陸奥の 巴風二八二八
箱根(神奈川)
　足柄——うち過ぎて 十一七一〇
　足柄——玉津島 東二六〇三
　伊豆——富士浅間 正一三六四
　伊豆——富士権現も御覧ぜよ 小袖一一三三
　時致は——にありしるしに 小袖一一三六
歯鐵漿(はごね)
　女たれとも——をつけす 松山鏡二八七六
箱根権現(神奈川) 調所二二一九
箱根権現
　弓矢八幡——も照覧あれ 調二二二四
箱根寺(神奈川) 元所一〇七五
箱根寺
　浦島が子の——にて 小袖一一三六
箱根の寺に参らん 調二二一〇
箱根の御寺
　箱王は幼少より——に上せ 元一〇七八
箱根別当 元ツレ一〇七五・調ツレ二二一九
箱根へ人を御上せ 禅一六九三
歯根も眉も亂れ髪の 水無月二九四六
箱根山(神奈川)
　梢に波を湖や——に 調二二三一
　月影は雪にて明くる—— 元一〇七八

箱根山なほ明け行くや 攝三〇九八
箱根を寝り御名も箱王殿とつけ 元一〇八四
箱根を越えさし先に 春一四三〇
箱の底に側の影 [illegible]八〇〇
〔羽衣〕 二四八三
羽衣
　天つ少女の——なれや 芭二五四三
　天つ少女の——の花の葛の 春一七四〇
　天つ少女の——よ 翁七
羽衣なくては飛行の道も絶え 羽二四八九
羽衣の袖も裾もにほやかに 佐一三七一
箱王 元子方一〇七五・調子方二二一九
箱王(時致参照)
　一萬——が親の敵を討つたる所 曾三〇九〇
　箱根を寝り御名を——殿と 元一〇八四
箱王といひしえせ者か 小袖一一三三
箱王は幼少より箱根の御寺に上せ 元一〇七八
箱王もかたへの稚児に誘はれ 調二二一三
破窓
　風——を射て燈火消えやすく 芭二五三三
嚩曰羅赦 道成一八〇二
鈸
　鐵の——を鳴らし 善知三九三
橋
　人間の渡せる——にあらす 石一三七八

瑪瑙の―― 鶴二〇九八
はし
　綱を――引くか 藍二三七
橋桁を二三間しさつて 橋二五一八
橋興立の志 船橋二七五七
はした
　下女や――の者までも 熊坂九三六
はし鷹の野守の鏡得てしがな 野守二四二八
はし鷹の野守の鏡と詠まれたる 野守二四二七
橋立(京都)
　踏みも見ぬ――や 九世九二一
土師寺(大阪) 道明一八二五
土師寺は天神の御在所なり 道明一八二九
橋殿(滋賀)
　大宮の御在所―― 箙七二〇
　大宮權現の―― 白鬚一四六八
〔半蔀〕 二四九七
半蔀
　草の――おし上げて 半二五〇四
〔半蔀夕顔〕 半異本二四九七
橋に置く霜の白きを見れば 張二〇四九
橋の板を取り放す 船橋二七六〇
土師の里(大阪) 道明一八二六
橋の勧めに入りて 船橋二七五二
橋の德
　水波の雜を遁れ：：即ち―― 石一三七八
橋のとだえのありけるを 船橋二七六四
橋本の宮居(京都) 賀茂物七五二
橋の行桁を隔てて戦ふ 頼三三一〇
〔橋辨慶〕 二五〇七
波斯彌陀尊者 小鍛一一二一
始めて旅に行く雲の 大蛇次第三五〇三
始めて旅を信濃路や 箙次第七一六
橋本の濱名の橋をうち渡り 盛三〇九七
馬上
　一人の老翁――にて行き逢ふ 張二〇四五
馬上に琵琶を弾く事もこの時より 昭一五八一
馬上に折り殘す江北の柳蔭 蟻二一八
馬上のなき所か 蟻二一七
馬上をあらため海士の小舟に乗り 通盛二九〇一
杜を戴く磐石の苔息 船橋二七六四
走井(滋賀)
　名も――の水の月 竹生二〇三三
　水も――の影見れば 蟬一六八一
蓮(ハチスをも見よ)
　濁りにしまぬ――の絲 當一八四三
蓮の絲を染めて掛けて乾されし櫻木 當一八四五
葉末の露と消えもせば 葵一六三
〔芭蕉〕 二五二九
芭蕉
　非情の精――の女と現れ 芭二五四〇
　雪のうちの――の僞れる姿 芭二五三九
芭蕉に落ちて松の聲 芭次第二五三一
芭蕉の扇の風茫々と 芭二五四三
芭蕉の僞れる姿の眞を 芭二五三六
芭蕉の精 芭二五三九
芭蕉泡沫の世の習ひ 葵一五九
芭蕉葉こそ破れたるは風情なれ 竹雪一八八〇
芭蕉葉の脆くも落つる露の身は 芭二五四三
芭蕉葉の夢のうちに 芭二五四三
芭蕉葉の夢も破れて 井三四一二
羽袖
　五節の舞小忌の衣の――を返し 吉天二二九三
旗
　紅焔の――を靡かし 熊五一八
　くれなゐ靡く――のあし 知二三四九
波濤海邊の大宮 蘆五三
波濤野火に似たり
　月海上に浮かんでは―― 八島三一四七
波濤を凌ぐ萬水
　苔の露より滴りて―― 山三一八〇
機織り添ふる音しげし 呉九七八
機織松蟲きりぎりす 錦木三三五五
機織る音のきりはたりちやう 松蟲一八六五
機織る蟲の音に立てて 錦木三三五六

はだかなる者の衣を得たる如く　身二九五一
畠のうねをまろぶころびありく、　言子△二八四
旗さしの名お久方の　鸞四五五
はた薄
　織るや錦の――　闘寺一六一三
はたと忘れてあるぞ　唐一八一七
秦の氏女
　賀茂の里に――といひし人　賀七三六
肌の守
　小袖――を置き給ふ　巴三八七
肌の守を取り出だし　夜三三六八
旗の紋定まらず　鸞四五一
旗は白雲紅葉の散り交り　朝二三七二
機ばり
　細布とて――狹き布　錦木二三四六
膚は読骨と衰へたり　景六三四
膚は金色
　頭に玉釵――兩臂をかがみて　松山鏡二八八一
膚は凍梨の梨の如し　鸚一六
旗矛
　我慢の――の靡きもやらで　善界一六〇二
　五丈の――龍車の雲居　咸七九三
機物の音秋の蟲の音　錦木二三五五
機物の音聞えじと思ひしに　呉九七九
働　鵜祭四二一・江島五〇三・楽一七四一・氷二六六五
働き
　匆體なき御――　藍二三六
はたる
　もとの鈎を――　玉井一九七三
旗を靡かし鉾を横たへ　西王一五七〇
婆稚阿修羅王　春日六七八
恥ぢがはしく
　おとなしく――　井三四〇六
八葉
　頂上は――にして　富士山二六九〇
　紅葉の色も――の葉即ち矛の刃先　龍田一九三一
八葉の峯
　眞如平等の松風は――を　高野六一三
八葉の蓮華
　八目の藁鞋は――を踏まへ　安宅九一一
八億四千の思ひあり　求二〇七三
撥音氣高き琵琶の音聞ゆ　蟬一六八二
撥音爪音ばらりからり　絃一〇五四
八巻
　歸命妙法蓮華經一部――四七品　身三九五四
八月九月げに正に長き夜　砧八三四
八月十五夜　小督一〇九九
八月十五夜明月にて　三井二九九三
八相成道は利物の終り　龍田一九二七
八座七辨　鵜△三三八八
八十三萬六千八百餘歳
　天下を保ち給ふ事すべて――　放一四八
八十種好
　具相三十二相――　海一八六
八邪
　十惡――の迷ひの雲も空晴れ　巻一五六四
八尋王殿神　鵜祭ツレ四二一
蓮(ハスをも見よ)
　泥を出でし――一乗妙典の題目　半蔀四九九
蓮の緣
　釋教の歌の數々は――ぞ亂る　言子一一九五
蓮の臺
　寶の池の――　實一三五七
蓮の臺に坐せん　朱四〇六
蓮の緣
　同じ――となるべきに　松山鏡二八七三
蓮の花の宴は頼もしや　源氏一〇四〇
蓮葉の臺
　安く生まるる――の緣　巻一五五七
蓮葉の濁りにしまぬ心もて　督一五五四
八大金剛童子
　三に倶利伽羅七大――　野守二四三三
八大地獄の數々　求三〇七五
八大龍王
　すは――よ　春日六七七

八大龍王は海上に飛行し　岩二九四
八大龍王は八りんの曲を奏し　白樂二四八一
八大龍王も絃管の役々　絃一〇五七
八軸の誓ひにて一人も漏らさじの　通盛二九〇五
鉢附の板より引きちぎつて　八島三一五二
鈸鼓
　眠りを覺ます——　朝二三六七
八難
　三途——の惡趣に墮し　江口四八四
〔鉢木〕　二五四五
鉢の木に好き數多木を集め　鉢二五五六
八の宮の三番目の御息女　浮△三二一
八駿の駒に召され靈鷲山に至り　西王△一五六九
八病
　四病——　草子一一九〇
八部
　三代——　草子一一九〇
八幡（ヤハタとも見よ）
　諏訪——も御知見あれ　籠三三九六
　南無や——山王權現　大江五六八
八幡宮（男山）　女三四九三
八幡宮
　宇佐の郡蓮臺寺の麓に——と現れ　弓三三二八
　埴生の——　木曾八二〇
八幡三所　正一三六四
八幡三所の神託　弓三三二九
八萬諸聖教皆是阿彌陀佛　誓一五五七・當一八四二
八幡大菩薩
　南無——と心中に祈念し　鐵三三八六
　南無や——と心に念じ　紅三〇九一
八幡大菩薩の御神託　弓三三三〇
八幡大菩薩の御告と思ひ　藤戸二七四三
八幡大菩薩は日域朝廷の本主　木曾八二一
八幡太郎義家安倍の貞任宗任を御追罰　烏三四三〇
八幡の御託宣　安宅九七
八幡の御託宣あらたに心魂に殘る　満八五二
八幡の神託
　示現大菩薩——　弓三三三四
八幡の神木と敬せしより　熊五一〇
八幡も御知見あれ　唐一八三〇・烏三四三六
八面玲瓏と明らかに　野守二四三三
撥も數ある樂拍子　源太一〇七三
八龍並み居たり　海一八〇
八りんの曲
　八大龍王は——を奏し　白樂二四八一
八王寺（滋賀）
　茂りたる峯は——　飯七一九
撥をば劒と定め　富士太二七〇七
初秋の七日の夜　楊三一三一
初午の御祭禮　鵜祭四一三
初卯八幡の御神事　弓三三三三
八講　海一八七
羽束師の森（京都）　雲六〇
はづかしの森
　影も——の下草　草薙八八二
恥かしのもりて餘れる　三井三〇〇五
恥かしのもりてやよそに　野宮二四一三
羽束師のもりて餘所にや知られなん　二靜二九八六
羽束師の森の木隱れもよもあらじ　岡寺一六二三
羽束師の森の下草咲きにけり　雲雀二六四三
恥かしや古を語るも　阿古屋三三四・女上歌三四九五
恥かしや人は何とも白波の　水無月祓二九四〇
八功德池の汀に遊び　初三五七八
拔群成人仕り　元一〇八三
拔群に年たけ　鵜飼二〇三
拔群にのび來りて　巴二〇二三
拔群に程隔たり　安宅九六
八敎
　一代の教法は五時——をけづり　大會一七七九
　世尊の教法は五時——を建立し　現一〇一一
白黑の慈姑あり　卒一七二七
八歲の童女は南方無垢世界に　海一八五
八相成道の後遺教流布の地　白鬚一四六八
八相成道は利物の終り　蟻三三三・松尾二八四六
八相成道は利物の終りを見せ　代△一四八六

八相成道の利物のはたしなき　住一五四一
初櫻
　愛宕高雄の—　叢九五五
　花さもらぬ　祇園林下河原　熊野三三五一
初申
　二月の—　佐一三七七
八正道を顯し　放生二四六一
八句に及ぶ母　拾一六六四
八旬にたけ給ひぬと見えさせ給ふ　盛三一〇七
初瀬(奈良)　浮三一五・玉葛所一九五七
初瀬
　憂かりける人を—の山颪　玉葛一九六八
　龍田—の紅葉　代一四八一・求三〇六五
　月もこもりくの—も遠し　三井三〇〇一
　吉野—の名所　叢九五五
初瀬川　玉葛一九五八
初瀬川早くも知るや淺からぬ　玉葛一九六四
初瀬寺に詣てくる者　玉葛一九六〇
初瀬に參らばやと　井三〇〇一
初瀬の便りに　存三三四
初瀬の山は檜原が木の間に　飛雲三六一六
初瀬詣て　玉葛一九五八
初瀬山
　年も經ぬ祈る契りは—　玉葛一九六三
　ほの見えて色づく木々の—　玉葛一九六一

初瀬山夕越え暮れし宿もはず　[illegible]三一五
跋提の波と消え給ふ　白鬚一四六八
はつたと失念してあるぞ　元一〇九二
跋難陀龍王　春日六七七
初子
　初春の—の今日の玉箒　氷二六五九
初音ふり行く時鳥　賀七三五
八方拂ひ
　四方を拂ふ—　巴三三八六
八方拂ひや腰車　烏三四三七
初春のあした毎には來れども　白樂二四七七
初春の七日の豐の明　梅四三三
初春の初子の今日の玉箒　氷二六五九
初花車廻る日の　右三四二
初花薄露重み穗に出でかたき身　祇八六五
八百歲
　その身も變らず—を既に經　枕二八一九
伐木丁々として山更に幽か　山三一八〇
初元結　元一〇九〇
〔初雪〕　三五七三
初雪(雜)　初雪二五七三
はてしな
　東の—の人の心や　小鹽三四六七
はてしはあらじ人心　龍虎三三六四
撥頭の曲はかへり打つ　[illegible]三三三九

波頭の通所は日晴れて見ゆ　[illegible]二七七六
撥頭の舞をまふさましよ　[illegible]一六八一
鳩に三枝の禮をなし　[illegible]三五四
鳩の杖にすがりつつ　[illegible]三二七
鳩の杖にすがりて　放生二四六三
鳩の嶺(京都)　放生二四六五・弓[illegible]三三五
鳩の嶺越し來て見れば　[illegible]二四九四
花
　入相の鐘に—ぞ散りける　[illegible]一七九五・井三〇二
　色に染み—に馴れ行くあだし身　[illegible]一三四七
　薄くも濃くも—は花　唐一八一八
　枯れてただ二度—や咲きぬらん　春榮一四一四
　消えずはありと—と見ましや　小鹽三四六六
　香は香ばし建地の—　葛六九三
　故郷の—といふ題　俊成一四四一
　梢は—に纍らねど　春一七三八
　言葉の—も咲き　野三三四九
　佐國は—に身を捨てて　二人三七三〇
　三千年に—咲き實なる桃花　西王一五七一
　四種の—降り　現一〇二一
　眞如の—の色香　西王一五七〇
　水流—落ちて春とこしなへに　櫻一三三六
　撥頭の柴には不香の—を手折り　葛六九三
　誓ひの—　道明一八三三
　散りぬれば後は芥になる—と　櫻一三二七

月にめて——を詠めし古の　賀茂物七五六
出船も心ひく——ぞ綱手なりける　室三〇二一
天も——にや醉へるらん　小町三四六二
天も——に醉へりや　田一九九三
波の——こそ今盛りなりけれ　大原五四一
南枝——始めて開く　雜二三三六
野草——を帶びて蜀錦を連ね　女三四八九
春風は——のあたりをよぎりて吹け　雲林四六一
遥かに人家を見て——あれば卽ち入る　右三四三・雲林四六〇・藪九五三
春の——の樹頭に榮え　千一七〇三
春の——の樹頭に上るは　數一三四
春の——は上求本來の梢に　西行一一七一
人にて——を戀衣　雲林四六二
人の心の——ならば風の狂ずる　鏡三三九二
道もさりあへず散る——の　志一三〇四
三吉野の——をも雲と思ふ　二人三七一六
蟲の音も——を惜しむか心あれ　頼五八九
六十の——　養三一三〇
百千鳥——に馴れ行く　右三四五・後一三三七
百年は——に宿りし胡蝶の舞　閑寺一六三三
餘情の——　鷗三

鼻

隆準の——胡髯の腮　江島四九八

花菖蒲

似たりや似たり杜若——　杜六三八

花色

移ろひやすき——の　源氏一〇三四
花色衣の袂には梅の匂ひや　草子二一九四
花色の朝じめりして　吉天三三九一
花色もなつかしく　女三五〇〇
花籠を君の御花筐とて　花筐二五八八

花笠

梅の——縫ふてふ鳥の　蘭五四
梅の——春もきて　老五二四
花重ね（繍法）　鳥三四三七
〔花筐〕　二五七九

花筐

御——とりどり綺山深く　大原五三九
御手に馴れし御——を參らせ　花筐二五八一
花筐臂にかけさせ給ふは　大原五四四

花がつみ

陸奥の淺香の沼の——　花筐二五九〇

花鬘

同じかざしの——　源八六一
亂れ心の——　紅三〇八七
紫匂ふ——心にかけて　源二七二七
花檻前に笑んで聲未だ聞かず　西行一一七七
雲雀二六四四
花塢上に散りぬれば雪を聚めて春を　百二六〇五
花曇りして失せにけり　黒一五〇九

花車

秋の千草の——　野宮三四一七
絲毛の——　代一四八四
內外に通ふ——　黒二〇五
錦を飾る——　右三四三
花車おりゐの衣播磨潟　熊野三一四八
花車の榻立てて　右三四五

花子　東シテ二五九七

花心

色香に染める——の　當一八四五
色に染む人——に似たれども　春一七三九
老な厭ひそ——　小町三四五八
この春は妹に櫻の——　吉天三三九一
盛りとて光を埋む——　三山二九一三
三千年に咲く——の　西王一五七〇
美景によりて——　右三四五・吉天三三九三
よそ目に餘る——理過ぐる　三山二九一三
男うつろふ——　三山二九一七
花こそ綻びたるなれば愛すれ　竹生一八八〇

花衣

いつしか馴れて——の袖觸れて　吉天三三九三
色めく——袖を列ねて　熊野三一四七
采女の——の　采四〇七
かざしぞ多き——　百二六七八

暮れなばなげの——　雲林四六六
月にひるがへす——　雪三一八九
深見草のしげみの——　雲雀二六四六
花衣きにけりな　小塵三四六〇
花衣さす手も引く手も　富士太鼓七〇七
花衣の春の形見殘さん　櫻一三三一
花衣を重ねつつ　雲林四六三
花咲かば告げんといひし山里の　鞍上歌九五〇
花盛り
　人間憂ひの——　隅一五三一
花盛り三春たに經すして唯一七日　泰一七三五
花咲きし木は隠れなし　卒一七三三
花咲き實なる理　養三一三六
花咲く春に逢ふことも　西王一五七二
花咲く世
　埋木の——にあはん事　鉢三五五七
花誘ふ比良の山風吹きにけり　白鬚上歌一四六五
花上苑に明らかにして　右三四九
花萎れたる身の果　關寺一六一七
花好かずの人々や　雲雀二六四五
花好き
　心なき山賤の身にも應ぜぬ——　小塵三四五九
花薄穗に出だすべき言の葉も　朝三三五九
花薄穗に出だすべきにしもあらず　關寺一六一三
花薄穗に出て初めし契りとて　定二一〇九
花薄穗に出でそめて　鸚一九
花摺衣の色襲　通小七七三
花園(志賀)
　志賀の都——昔ながらの山櫻　竹生三〇二四
花園の胡蝶をさへや下草に　胡一一四八
花園の里(志賀)　志一三〇三・三井一九九七
花園の志賀の山越　白鬚一四六四
花染
　人の心は——の移ろひ易き　賀茂物七五〇
花染衣の色襲　源氏一〇三七
花橘
　五月待つ——の香をかげば　雲雀二六四二
　匂ひ求めて尋ねくる——や　雲雀二六四三
　時鳥——の香をとめて　草薙八八一
　ますらをの——の匂ひぬるかな　楠九一七
　昔の戀しきは——の一枝　通小七六五
花橘の匂ひうつる　杜六二八
花田の帶
　人は何とも——の　祇八六七
花壇場月傳法院　高野六一三
花散りし嵐も寒き秋風に　水無瀨一響二九二九
花散る里に住むとても　源氏一〇三八
花散れる水のまにまにとめくれば　櫻一三三〇
花盡し
　水干は世を秋の野の——　二人二七一八
花摘む人の跡たにもなし　東北九六九
花といはんとすれば野人之を責むる[illegible]　松山鏡二六七八
花と散り雪と消えし金谷の春　松山鏡二六七一
花鳥
　色香に移る——の　梁四〇八
　枝に木傳ふ——の　右[illegible]
　雲の——春風に和しつつ　西王一五七六
花鳥の同じ道にと歸るさの　東北三一九五
花鳥の立ち別れつつ親と子の　櫻上歌一三二一
花鳥の音にだに立てよ　小督一一〇四
花なき里に住みや習へる　雲雀二六四五
花ならば梅と櫻木　鳥[illegible]四二一
花に憂きは嵐　雲林四六一
花にうつろふ貌の雲　小塵次第三四五六
花におり立つ白雲の　泰一殘一七三五
花に襟ある嵐かた　東岸二一六八
花に三春の約あり　[illegible]九五四
花に清香月に陰　雲林四六一・西行二一七八・泰一七三六・田一九九二・山三一七八・小塵三四六六
花に戯るる秋草の　姨三四八四
花に戯れ枝に伏し轉び　右一三八〇
花に戯れ百囀りの囀立て　[illegible]
花に飛びかふ胡蝶の舞の　胡一一五一
花に鳴く鶯水に住める蛙まで　白樂二四七六

花に馴れ来し野の宮の　野宮次第二四〇八
花に馴れ行くあだし身は　胡一一四七
鼻には胡桃がたる　山△三一七五
花に又宿かる草を尋ねん　項五八九
花にめでて月にそみて　姨三四八二
花にめでて鳥を羨む人心　雲雀二六四六
花の跡
　松の嵐もいつしかに——とて　花筐二五八三
　松の風終には——とはん　奈一七三七
花の跡訪ふ春の風　藤二七二九
花の跡訪ふ松風や　朝次第二三五九
花の兄
　梅花を——ともいへり　蘆二三三〇
花の間
　西樓に月落ちて——も　籠三三九三
花の新に開くる日初陽潤へり　雲林四五九
花の新に開けし日は初陽潤ふ　巣一五一二
花の主と思し召さば　賀五一三
花の命を延べばや　奈一七三五
花の色
　紫藤の露のもとに殘る——　藤二七三一
花の色は蒸せる粟の如し　女三四九〇
花の打衣風折烏帽子　草子一一九七
花の臺
　妙なる法の蓮葉の——　胡一一四七

花の臺に和泉式部が　東北二三〇一
花の臺に坐し給へ　忠度一九一一
花の枝
　薪になほ——を折り添へ　志一三九五
花の緣
　妙なる御法の——　身二九五二
花の宴
　雲上の——　葵一六一
　蓮の——は頼もしや　源氏一〇四〇
花の宴の春の夜の　須一四九七
花の鏡
　年を經て——となる水は　櫻一三三六・昭一五八七
花の蔭
　薪を負ひて——に休む姿は　志一三九六
　濡るとも——ならば　右三四一
　山賤の樵路に通ふ——　山三八一
花の影杯を動かす　西行一一七六
花の蔭行く山賤の　草子一一九〇
花の貌輝き桂の黛青うして　卒一七二五
花の葛もしぼむ涙の雨より　奈一七四一
花の冠を傾けてやうこくよりも　放生二四六七
花の顔ばせ
　雲の鬢づら——　[illegible]三一一九
　月影の移ろふ——　松蟲二八五六
花の顔ばせたをやかに　松山天二八九一

花の作例といひ　[illegible]
花の曲舞樂を奏し　[illegible]
花の雲路をしるべにて　吉大夫第三三九〇
花の供養を執り行はばや　半二四九八
花の暮
　煙霞跡を埋んでは——を惜しみ　奈一七四〇
花の木蔭
　薪を負へる山人の——に休む　紫雲二六一六
　濡るとも——に宿らん　雲雀二六四一
花の衣
　所は名に負ふ洛陽の——の　[illegible]一五五三
　昔人は——になりぬなり　巣一五一三
鼻の先の落花仕りたる　八島△三一五五
花の梢　櫻一三三七
花の時雨
　夕日や——なるらん　[illegible]田一九三二
花の下伏して　西行一一七四
花の下臥に衣かたしく木蔭かな　[illegible]一一五〇
花の下臥に待ち給へ　[illegible]三三一四
花の袖
　雪を廻らす——　井[illegible]
　昔を思ふ——月にと返す　野宮二四一八
花の袖をやかへすらん　[illegible]七五三
花の精　西行一一七六・巣一五一〇・藤二七二七
花の流波

嵐も落つるや――　巴三三八六
花の種は地に埋もつて千林の梢に　蟬一六八〇
花の時
蘭省の――錦帳の下とは　巴三五二四
花の友
見ずもあらず見もせぬ人や――　右三四五
身には待たれぬ――　西行一一七四
見もせぬ人や――　吉天三三九二
やよ留まりて――　西行一一七〇
花の友に馴れてさらば交らん　小鹽三四六二
花の友人は他生の緣　吉天三三九二
花の名の白玉椿八千代經て　氷室行三六五三
花の錦の褥の起き臥し　關寺一六一九
花の春の翠曲は和風樂に柳花苑　鷺八〇一
花の春紅葉の秋誰が思出となり　千一七〇五
花の紐
八卷の法の――　現一〇一三
花の開くること早し　熊野三三四七
花の吹雪と詠じけん志賀の山越　三井二九九五
花の吹雪の志賀の山越　志一三〇二
花の父母
養ひ得ては――たり　熊野三三四一
養ひ得ては――たる雨露の　養三一三六
花のふり鼓　土車二〇七六

花の外
長樂の鐘の聲は――につきぬ　三井三〇〇一
花の外には松ばかり　道成寺第一七九四
花の祭　[illegible]一七二五
花の都を立ち出でて　[illegible]一六八一
花のもとに歸らん事を忘るるは　右三四五
花の下に歸らん事を忘れ水の　松蟲二八五七・吉天三三九三
花の下の半日の客　櫻一三三六
花の雪　[illegible]九五三
思ひも深き――　櫻一三三〇
花の雪をも集むらん　氷三六五四
花の行方
誘はれし――を尋ねつつ　高野六〇六
花の若枝　元一〇八五
花は雨の過ぐるによつて紅まさに　關寺一六一三
花は紅
柳は綠―　東岸二二六八・放下二四四八・巴三五三六・山三二八一
花は梢の白和幣　志一三〇四
花はさながら白雪の　竹生二〇三六
花は斜脚の暖風に開け　鐵七一一
花は二度咲かめや　夕三三一五
花は主ある女郎花　女三四九二
花は根に歸るなり　忠度一九一九
花は根に歸れ　三山二九二五

花は根に鳥は古巣に歸るさとて　[illegible]
花は根に鳥は古巣に歸る春の　[illegible]
花は根に鳥は古巣に歸れども　竹雪一八[illegible]
花は春あらば今に限るべからず　熊野三三四五
花はよも散らじ　[illegible]三二七
花は流水に隨つて香の來ること疾し　熊野三三五一
花一時の榮花の櫻　[illegible]一七四二
花一時の盛り　佛三七九三
花降り異香薫じ音樂の聲す　常一八四九
花降り下り音樂の聲する　[illegible]二五六一
花見禁制と相觸れ　西行八二二六九
花見車の八重一重見えて櫻の　右三四[illegible]
花見車ややごとなき　小町[illegible]四六五
花水
庭の板井を掬びあげ――とし　井三四〇三
われら姉弟――を手向けの爲に　水無瀬[illegible]九一九
花見月
道ある御代の――　志二一九三
花水を佛に捧げ　現一〇一五
花見の車同車にて　熊野三三四六
花見の友
この春ばかりの――　熊野三三三九
花見の人々と見えて　右三四二
花見の御幸
青陽の春になれば所々の――　鷲一三一七

はなみ

花見んと群れつつ人の來るのみぞ　西行一一七四
はなむけ
　東路のお――　烏三四二六
花紫の藤枝の　賀茂物七五五
花もたを慕ふかと　東北二一九四
花も憂し風もつらし　櫻一三三八
花も千草もちりぢりに　芭二五四三
花も散りなば青葉ぞかし　三山二九二三
花も常磐の山松の　志一三九八
花も涙をそそぎ
　時を感じては――　俊寛一四三〇
花もの言はずと聞きつるに　三山二九二四
花もの言はぬ色なれば　雲林四六二
花もの言はぬ草木なれども　西行一一七六
花も一木われも一人と見るものを　西行一一七二
花も一時
　紫の色ある――の　源氏一〇三四
花も醉へるや盃の　西王一五七五
花紅葉
　吉野龍田の――　藤榮二一五七
花紅葉を散らせる如くなる　住一五四四
花守　葵徃言一七三三
花守
　嵐山の――　嵐二〇七
　今は散り行く――の頼む木蔭も　高野六〇六

色も若木の――までも　老五二六
　この野邊の――　女三四九〇
　見る目隙なき――の　㭊一七三六
花守とや申さん　田一九八九一
花守の姥　嵐ツレ二〇一
花守の尉　嵐シテ二〇一
花守の住むぞ嵐の　嵐一聲二〇四
花も搖がず治まる風ものどかなる　右三四九
花やあらぬ初櫻の祇園林下河原　熊野三三五一
花や今宵の主ならまし　俊成一四四一・忠度一九一〇
花故ありかを知られんこと　西行一一七二
花よ月よと爭ひしに　三山二九一七
花より外は知る人もなき庵　現一〇一五
花より外は夢もなし　㭊一七三七
離坂（長野）
　今ぞ浮世を――　鉢二五四八
花若　角子方六四九・烏子方三三八九・望子方三〇三九
花若の母　角シテ六四九
花を乞ふも盜むも心あり　雲林四六一
花を肴に立ち舞ふ袂　三笑一二八七
花を捧げ禮をなし結緣をなす　芭二五三三
花をさへ受くる施行の色々に　弱上歌三三二一
花をし思ふ心ゆゑ　雲林四六四
花をし見れば物思ひもなし　小鹽三四五八
花を尋ねて山廻り　山三一八三

花を散らすは鷲の羽風に落つるか　雲林四六〇
花を友として山野に暮らす　吉[illegible]九二
花を踏んでは同じく惜む少年の春　俊成一四四六
花を見捨つるかりがねそれは越路　西行一一七九
　[illegible]
花をも憂しと捨つる身の　[illegible]
花をや風の誘ふらん　[illegible]一九〇六
埴生（富山）　春榮一三九九
埴生に陣を取りにける　木曾所八一五
埴生のこやに臥を敷きし　木曾八一八
破坎の返し　[illegible]四三七
埴生の小屋に小雨降る　[illegible]一六一九
埴生の小屋のいぶせくて　合六八四
埴生の八幡宮（富山）　[illegible]四二八
はにふの小舟の棹のさして猶　木曾八二〇
羽抜鳥の嫐い　大蛇三五〇五
羽田の十郞秋長　[illegible]九二
羽なき鳥　笛二五三三
　天人も――の如くにて　羽二四八九
羽をのし嘴を鳴らす　[illegible]九一六
破舞　右三五〇・二八六七・野宮二四一九・羽二四九四・松風二八三八
母
　いとけなき身の――に逢ひ　身二九五一
　親心かたしお――の門送り　[illegible]一七五〇

敵を討つは父が爲――をば思はず　曾一六九三
かなしみの――は空しくなり　上車二三七
この身殘りて――知らず　海一七七
彌陀は――にてましませば　上車二〇七六
萬の女人を生々の――と思へ　朝三七一
母上の現世安穩後生善所と祈念　小袖一一三六
母海士人の幽靈　海一八二
母が心の變るべきか　[illegible]三四
母が姿を殘す形見　松山鏡二八七三
憚りある身として　鳥一六五四
腰巾
臙脂黒色の――をはき　安宅九一
帚木
あるはかひなき――の　鳥一五二一
園原や伏屋に生ふる――の　柏六六四・木賊二三〇九
伏屋の森に――と申す木の　木賊二三〇九
帚木に暫し宿るも　海一七八
帚木のながらへて　大佛一七四六
帚木の卷に中將　須一四九七
帚木の見えつ隱れつ面影の　隅一五三一
帚木の夜の言の葉は　源氏一〇三八
帚草に似たる木　木賊二三〇九
ははこきの緣より　朱四〇〇
母御の御形見　蟻二三三九
柞
同じ子に同じ――のちりめのと　小袖一一三二
柞の紅葉かたしきて　[illegible]三二一
柞のもみぢ葉
天照らす神の――の　佛二七八九
柞の森(京都)
秋果になれば――積むかたく、　竹生八七八
柞の森の露消えても殘る　水無瀬一九一九
柞の森の雨露の　大佛上京一七五〇
母にかくとも申さず候程に　夜三六二
母の誓を申さん　熊野一三四九
母の現世を祈らんと　谷一九四二
母の命日　松山鏡二八七一
母御子も神となり　賀七三七
母諸共に廻り逢ふ法の力　百三六八一
母もわれらも捨小舟の　水無瀬一九一九
母よと名のる事わが子の面伏　三井二〇〇五
母をはごくみ
ていたいは薪を採り老いたる――　木賊二三二四
母を惡處にとられ　放下二四三八
はひ參らせ
常の御歌を　て詠む時は　鸚二
法印
安居院の――　源氏一〇二八
法界
一佛成道觀見――　鵜三三八九
常住不滅――の妙體　田村二四三八
法界衆生平等利益　熊坂九三四
法界無緣の功力を以て渡し給ひし　東岸三一六八
法界無緣の衆生を[illegible]に[illegible]し[illegible]　賀七四二
法界無邊の御慈悲　[illegible]三一九
法儀の事
阿鼻の苦しみ等に――に[illegible]す　[illegible]九五
法喜菩薩　大會△一七八四
法基菩薩の御說法　代△一四八六
法藏比丘は御子の太子を悲しみ　[illegible]一六八八
法師
直實出家し蓮生と申す――　[illegible]一三五
法師の切るとて袈裟がけなり　[illegible]一六七七
法成寺(京都)
法勝寺――唯喜見城の春の花　[illegible]二四七
法水には勝たじ
焦熱大焦熱たりとも――　[illegible]八八
法敵
佛敵――となれる　[illegible]二六二
法然上人
黒谷――　生三六五
法味
一佛成道の――に引かれ　野[illegible]四[illegible]
劒の驗偕の――に引かれて　盛田一九[illegible]
開法祕密の――に預かり　[illegible]四[illegible]

法味を得んと魄靈の　熊五一七
法味をなし　葛七〇〇
法樂の舞
業平玉津島にて——　鷺二三
法樂の舞の由來り　吉静三三八三
法樂の舞を舞ふべきなり　百二六七六
法力の誠あらば　野守二四三一
法力を頼み給ひつつ　脊三三〇
祝子が着すなる烏帽子狩衣　三輪二九八四
法輪(京都)
西は——嵯峨の御寺　放下二四五〇
法輪常に轉せり
佛日彌ますますにして　氷二六五八
法輪に參れば琴こそ聞え來にけれ　小督一一〇二
法皇御幸をなされ　大原五三七
法會舞　翁一一
濱市　蘆八四七
濱川
刈らでも運ぶ——の　海一七四
蛤　玉井狂言一九七一
濱千鳥
われは外の——音に立てて　善知三九〇
濱名の橋(備前)
橋本の——をうち渡り　盛三〇九七
濱の市

住吉の浦に始めて——を立て　岩二八七
濱の上野　杼二〇〇五
濱の眞砂
ありそ海の——の數々に　奉一七三五・白樂二四七
荒磯海の——の數ならぬ　鵜四九
功德池の——數々の玉の　柏六六三
濱の眞砂の數積りて　鸚二三三
濱の眞砂は盡くるとも詠む言の葉　關寺一六一五
濱の眞砂はよみ盡し盡すとも　鶯六一
濱の眞砂はよみぬとも歌の言葉の　梅四八
濱の眞砂も吹上の浦傳ひ　蟬二三七
濱の眞砂より數多き言の葉の　志一二六八
濱の眞砂を數へても　錦三四四五
濱木綿
浦の——一重なる　俊寛一四二五
濱荻
伊勢人は——といひ難波人は蘆と　蘆五一
濱荻の風に秋を知る　海一七三
刈むいたる兵　景六四五
刈向になし　熊坂九四五
葉守の神
姫小松の——となり　總一一六五
葉守の松
年の——の戸に　老五三五
早打　春榮ワキツレ一三九七・關原狂言一六二五・馬狂言三四一三

早打
鎌倉より——立つて　春榮一四三〇
唯今の——をよくよく聞き候へば　關原一六七
六波羅の——　馬八三四六八
林に繁き木の葉の露の　志一二九七
囃子物
思ひ思ひの——　鳥二九九
囃子物をして神前に參る御神事　寄二〇二〇
早瀨の瀧川　國九〇〇
早玉
結ぶや——のおのが力に　三輪二九八六
速玉の神
第三は伊奘作の——　大社五七九
早鞆(山口)
長門の國——とやらんにて　大原五四九
門司赤間や波風の——　碇二五一
早鞆の海
とも——なれども　碇一五七
早鞆浦(山口)　碇四七
早鞆の沖
長門の國——にして悉く果て　大原五六六
早鞆の友千鳥沖の鷗も群れ立つや　和三〇二三
早鞆明神(福岡)　和所三〇二七
早鞆の明神に仕へ申す神職　和三〇二九
早船

契りほどなき――を　七騎一三一五
由良の戸渡る――も　紘一〇四八
早船に乗り後れじと　玉葛一九六三
早船の心にかなふ追風にて　俊寛一一四二八
早船を揃へ　東二〇一七
葉山の枝茂み　氷二六五九
端山の蔭浅く　采三九九
早舞　海一八六六・紘一〇五八・須一五〇二・定一八五四・鐵二二二四
　錦木二三五八・松蟲二八六五・松山天二八九一
腹一文字にかき切つて　朝二三七三
波浪金を沸かす　江島四九五
腹十文字にかき切り　錦戸二三七四
波羅奈國（印度）　一角仙一七五
拂はぬ塵の芥川　住一五四〇
祓ひ
　桂の御――白木綿かけて川波の　野宮二四一三
祓殿の神　内三七五
拂へど拂へど執心のながき闇路や　玉葛一九六七
掃へども又生ず
　月光地に鋪いて――　三輪二九七九
腹巻
　白絲の――白柄の長刀　鞍九五八
婆羅門僧正は行基菩薩の御手を　巻一八〇九
ばらりからり
　撥音爪音――からりばらり　紘一〇五四

腸を斷つ
　遺蹟を聞いて――　金一三九〇
波瀾の袖
　龍女が立ち舞ふ――　春日六七八
張子の顔　鞍八九五一
玻璃の鏡のいさぎよき面前に　松山鏡一八八〇
播磨潟（兵庫）　高砂一八六〇
播磨潟室の樞の曙に　[illegible]
覇陵原の秋の月　[illegible]
春
　一花開くれば天下皆――　[illegible]
　婆婆の――をあらはし　砧八三七
　すむ水の――にも秋や通ふらし　誓一五五九
　山にも――はなくなりにけり　櫻一三三〇
春秋の雲居の雁も留め得ぬ　和三〇三
春霞浮き立つ波の沖つ舟　[illegible]
春霞立ち出て見れば深山邊の　[illegible]一七
春霞立つを見捨てて行く雁は　雲雀一六四五
春霞たなびきにけり久方の　羽衣二四九三
春風
　船路のどけき――の　高砂一八六〇
春風は花のあたりをよぎて吹け　雲林四六一
遥かに人家を見て花あれば即ち入る　右三四三
　雲林四六〇・鞍九五三
遥かに照らせ山の端の月　鵺三三九二

春來つては遍くこれ桃花の水　草子一一九七
春草はさながら秋の淺茅原　[illegible]
遥けき國を三熊野の　[illegible]
春雨
　木の芽――降るとても　二人二七一三
　晴れ間も見えぬ――にて　羅生三四七
　降るは――か落つるは涙か　雲林四六九
春過ぎて夏來にけらし白妙の　[illegible]
春過ぎ夏闌けて　飛鳥七一
春雨の音も頻りに更くる夜の　[illegible]
春雨の降るは涙か　熊野三三五二
春立ちてあしたの原の雪見れば　求三〇六七
春立つ風やよぎて吹くらん　氷二六五九
春立つ今日の風や解くらん　氷二六五八
春立つ空の旅衣　胡次第一一四二
春立つといふばかりにや三吉野の　[illegible]
春立つや霞の關を今朝越えて　東北[illegible]一九一
春立つやげにものどけき風凪の　[illegible]
春立つや矢橋の浦の朝霞　[illegible]
春としなへにあり
　水流花落ちて――　[illegible]
春夏秋冬萬木千草も一日に　東北七八七
春に逢ふ事易き
　陽に向へる花木は又――　[illegible]一五四一
春に開けばや音すごき　東岸一九一四

春の色
誰かいひし――は東より來る　雜二三三六
春の色たなびく雲の棚ぼらけ　志道行一三九三
春の鶯の舞の曲　雜二三三四
春の歌を洗ひては霞の袖を　草子一一九四
春の風
樽の前に醉を勸めてはこれ――　松蟲二八五七
花の跡弔ふ――　藤二七二九
楊柳の――に靡くが如し　[illegible]一七二〇
春のかたみ
朝霞暮れ行く――こと　[illegible]二七三三
春の興
酒宴半ばの――　[illegible]三一〇九
春の草
道の邊の土となりて――のみ　[illegible]一五三〇
春の園
驪山の――にともに眺めし　楊三二一八
春の手向
おのづから――となりにけり　田一九八八
春の田を人に任せてわれは唯　淡上歌一四三
春の月
梅が香に昔を問へば　[illegible]一一四六
春の眺めも如何ならん　錦木二三四五
春の習ひ　[illegible]九五三
春の野
君がため――に出でて若菜摘む　[illegible]三〇六六
春の野に出でて摘む若菜　和上歌三〇三〇
春の野に菫摘みにと來し人の　求三〇六七
春の花
大慈大悲の――十惡の里に芳しく　花一〇五・田一九八八
春の花盛り
物思ふ――　夜三三七四
春の花の樹頭に榮え秋の月の　[illegible]一七〇二
春の花の樹頭に上るは上求菩提の　[illegible]一一三四
春の花は上求本來の術にあらはれ　西行一一七〇
春の林の東風に動き　高砂一八六六
春の日
遲々たる――も所作足らねば　[illegible]三九一
春の日いとと暮らしかたう　[illegible]二六四〇
春の光
老の身の――にあたれども　龍虎三三六三
春の日の三笠の山に影高き　大佛一一五三
春の隣行く野の道　熊野三三四八
春の末
行くことやすき――の　櫻一三三〇
春の湊の行く末や藤戸の　藤戸次第二七三九
春の物狂　百二六七三
春のものとて長雨降る　三山二九一八
春の山邊
梓弓――を越えくれば　志一三〇四
いざ今日は――に交りなん　志一三〇二
春の夕暮來て見れば入相の鐘に　[illegible]一七九[illegible]
春の夜
心づくしの――の行方も知らぬ　關原一六三六
春の夜の朧月夜にあらはれて　[illegible]一五九〇
春の夜の月待ちがての枕さへ　[illegible]上歌[illegible]
春の夜の一時胡蝶の夢の　[illegible]二七六四
春の夜の一時の千金をなす　岩二九一
春の夜の一時を千金にかへじ　雲林四六二・山三二七八
春の夜の闇はあやなし梅の花　[illegible]二三〇一
春の夢の内胡蝶の遊び色香にめで　[illegible]二六四五
春は霞の和歌を上げて萬春樂を　[illegible]二四六六
春は花山の木を伐れは　[illegible]上歌八七二
春は佐保姫夏は生田姫　[illegible]一七五・[illegible]一九七〇
春は春遊に入つて夜は夜を專らとし　[illegible]九九一
春は花夏は瓜　[illegible]一〇三一
遙々來ぬる唐衣　[illegible]六二五
遙々來ぬる旅をしぞ思ひの末も　[illegible]二六二四
遙々來ぬる旅をしぞ思ふ　[illegible]六二一・[illegible]一七〇七
小鹽三四六七
遙々と越の白山知らざりし　佛道行二七八八
春見しは花の都の雲霞　松尾上歌二八四四
春や繼るらん絲柳の思ひ亂るる　[illegible]一五八一
春や昔

月やあらぬ——と詠めしも　井三四一
月やあらぬ——の春ならぬ　賀茂物七五六
　小督三四六五
春や昔の春ならぬわが身ひとりぞ　東北二一九四
春を得て咲く花を見る人もなき　松山天六八八
春を迎ふるに舟車を動かす事を　[illegible]七二一
春を心のしるべにて　熊次第六〇七・知次第三三九
春を守る神といつぱこの山姫の　佐一[illegible]七[illegible]
春を惜しむ
　雪を聚めて——　班二六〇五
晴れたる空に向へば　春日一聲六七〇
晴天の雨
　風枯木を吹けば——　[illegible]二〇八六
晴れぬながめとありしにも　[illegible]三一九
晴れ間も見えぬ春雨にて　羅三三四七
攀於期が首を持ちて　成七九五
萬機の政穩かにして　[illegible]
萬機の政すなほなりしに　[illegible]
萬機の政すなほにして　鷺三三一七
萬機の政を治め給ふ　志一三九七
萬行離念一遍證　誓一五五五
萬境を映す鏡の如く　水二六六五
攀噲が怒りをなし　夜三三七四
攀噲が母の衣を着替へしは　夜三三六七
板橋
　身は——の霜に漂ひ　[illegible]三一三〇
半月の山の端にうち傾いて　松山[illegible]六八七九
萬古心のうちたり　檜二六三四
萬簡目前の境界　山三一七七
反魂香
　九華帳の内にして——をたき　花筐二五九三
反魂香を焚き給へ　松山鏡二八七四
萬歳(バイゼイを見よ)
萬歳樂(バイゼイラク・マンザイラクを見よ)
盤涉
　雨の音は——　[illegible]一〇五三
半日の客
　謬つて——たりしも　志一二九四・右一二七五
　謬つて仙家に入つて——　木賊二三一三
　謬つて仙家に入りて——たり　[illegible]二〇四
　花の下の——　鞍九五三
鐘字の明を唱へ　[illegible]八
萬事は皆空し　[illegible]
萬事は皆目前の境界なれば　東岸二一六八
萬事は皆夢のうちのあだし身　景六四〇
萬事は皆夢の如し　道明一八三三
萬死萬生
　一日のその中に——なり　歌三六五
磐石四方に破れ砕け　一角二八三
磐石に押され　船橋二七六〇
磐石の苦患　船橋二七六四
磐石は骨を砕く　[illegible]
〔班女〕　二五九七
班女
　扇に子細ありとて花子を——と　[illegible]
班女が閨の中には秋の扇の色　[illegible]
班女の扇　班二六〇五
萬仞名を得て瀑布といふ　[illegible]一八五
萬水
　一滴も降らず——も昇らず　[illegible]
　苔の露より滴りて夜濤を[illegible]——　山[illegible]
　月の影は天にかかつて——の底に　[illegible]一六八〇
萬歳
　千秋——　(その項を見よ)
　なほ——を呼ばふなる　江島四九六
　波の聲——の響は　志一三九八
萬歳千秋と舞ひ納め　右一二八〇
萬歳の末を祈るなり　代一四八〇
萬歳の道に歸りなん　[illegible]一三四〇
萬歳の四方の國　代一四八九
萬歳の小忌衣　高砂一八七三
萬歳樂(マンザイラクをも見よ)
　天下を守り治むる——　[illegible]二三三九
萬歳樂はよろづ打つ　[illegible]二三[illegible]九
萬歳樂を舞ひし事　[illegible]四三〇

萬歳をうたふ松の聲　淡一五三
萬歳をよばふ三笠山　佐一三七三
班足太子
　天竺にては――の塚の神　[illegible]一六四四
半田(奈良)　[illegible]六九八
萬代の池の龜は甲に三極を備へ　翁八
坂東聲にて　會一三五八
萬德
　知れるはいよいよ――を得　[illegible]三四五〇
發得が愚鈍も文殊の智慧　[illegible]一三三四
萬德の妙花を開く事　[illegible]三一七一
萬德圓滿釋迦如來　[illegible]一三八〇
般若
　華嚴の間より――の々に至る　[illegible]一〇一六
　華嚴の御法より――に及ぶ四十餘年　身三九五四
　五時といつぱ華嚴阿含方等――　大會一七八〇
般若[illegible]　[illegible]一六〇
般若心經
　總神分に――　自一三三八
般若臺
　育王山青龍寺――に至るまで　善界一五九七
般若の眞文を講じ　松尾三八四三
般若の語のおのづから　須五九七・[illegible]二七四八
番の[illegible]は[illegible]の袋を　[illegible]八〇三
番の事かたく申しつけばや　[illegible]三三八七
萬法皆一如たる實相の門　[illegible]三一七五
盤々
　宮殿――として更に邊際もなく　楊三一一七
萬物悉く成佛して　[illegible]一三七三
萬物出生する所を伊弉冊と申す　淡一四七
萬物のこもる心
　草木土沙風聲水音まで――あり　高砂一八六六
萬目(マンモクが見よ)
萬木千草も一日に花咲けり　邯七八七
萬民業しむ世となさん　[illegible]三四四七
萬民を[illegible]せしむ　[illegible]八三一
半夜の鐘の響は客の船にや通ふらん　三井三〇〇三
斑狼が涙にても留むべき　富士太鼓二〇四
萬里
　惡神は――の禍を拂ふ　江島四九七
　一葉――の船の道　八島三一四七
　風帆を添ふる――の程　白髭一四六五
萬里の好山に雲忽ちに起り　羽三四八六
萬里の客も猶にたく　[illegible]四七四
萬里の南國に至り　砧八三八
萬里の波濤を凌ぎ　白[illegible]二四七三
斑[illegible]に乘じ　東方三一八五
蟠龍の雲居　[illegible]九〇四
范蠡
　越を辭せし――が扁舟に棹を　白[illegible]二四七二

ひ

日
　その御威光は――の如く　[illegible]一五六九
未央の柳の緑もこれにはいかで　楊三一一九
未央の[illegible]もなし　皇九九一
日向とは日に向ふ　景上歌六四〇
日向の勾當と名をつき　[illegible]九
燧が城(越前)
　平家は越前の――を攻め落し　木曾八一八
〔飛雲〕　[illegible]
飛雲と申す惡鬼　飛雲△三六一七
比叡坂と尋ね給ふべし　[illegible]
比叡山(近江)　[illegible]七一九・大會[illegible]一七七七・[illegible]一
比叡山
　天台山を拜むべくは――に　春日六七三
比叡山あれこそ日本の天台山　[illegible]一六[illegible]
比叡山延暦寺の座主　[illegible]
比叡山西塔　[illegible]所三五〇七
比叡山に住む[illegible]心の僧都　[illegible]八八[illegible]
比叡山に遁世　[illegible]一五〇六
比叡山の[illegible]　[illegible]二四六九

比叡山[illegible]　[illegible]一五九五
比叡山悪心の僧都　[illegible]三三一八
比叡の大嶽　花一〇〇九
比叡の山
得照る・高み　三井二九九五
われ――を出でしより　大江五五九
比叡の山を重代の住家とし　大江五六〇
[illegible]　[illegible]九六八
火置の島（京都）　九世九二六
日本[illegible]を[illegible]して[illegible]をなす　[illegible]一[illegible]五
［権現］　二六二三
[illegible]
太宰府に庵に――しつらひ　[illegible]二六二七
[illegible]の女　[illegible]二六二三
[illegible]　[illegible]一二一五
[illegible]て　[illegible]四二
[illegible]
物に狂ふは――か　[illegible]三三九二
[illegible]の道　[illegible]第二二七四
東にげ[illegible]清水　[illegible]下二四五〇
東の國に至りても　富士山二六八六
東山
東路とても――せめてそなたの　[illegible]野三二四七
都なれや――　小[illegible]三四六七
東山地主の櫻　西行一二六九
東山[illegible]　[illegible]
東山の方へ輿を立てられ　[illegible]三〇九五
東より来る
誰かいひし春の色は――　[illegible]三三六
[illegible]に[illegible]射る時は　[illegible]
筏上の羽衣はその時の[illegible]姫　源太一〇六九
[illegible]　一[illegible]
[illegible]を[illegible]立てて　[illegible]一
光[illegible]　[illegible]一五七五
光にあたる春の[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]一二七五
光の陰を惜しめども　[illegible]三二五九
光ののどけき日の本や　内大第三七二
[illegible]　[illegible]
[illegible]
楽しみを極めて――とは申す　須一四九八
[illegible]にたしに　[illegible]一五四四
[illegible]　[illegible]一六二
[illegible]に　[illegible]二二三
光源氏　須シテ一四九一・住ツレ一五三七
[illegible]氏
[illegible]なき――　[illegible]一五五八
光源氏この所に詣で給ひ　野宮二四一〇
光源氏の[illegible]　[illegible]一二六八
光[illegible]氏の[illegible]　[illegible]一六〇二
光源氏の[illegible]　[illegible]
光源氏の[illegible]　[illegible]一四九四
[illegible]　[illegible]一五〇二
光源氏の物語[illegible]くにつけても　源氏一〇三四
光源氏の物語言葉[illegible]をもととして　[illegible]
光源氏の[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]にぞ　[illegible]二二〇九
疋田小三郎　[illegible]一六八九
疋田の小三郎が進んでかかるを　[illegible]
[illegible]に　[illegible]
[illegible]　[illegible]一三一
[illegible]　[illegible]一
ひき留むべき言の葉もなし
引きはかへさし　[illegible]一二二[illegible]
[illegible]　[illegible]三五三
[illegible]　[illegible]
引き[illegible]　[illegible]九一五
[illegible]多し　[illegible]九四二
[illegible]を[illegible]　東方二一八一
[illegible]を現して　[illegible]九九六
飛行の車
[illegible]に[illegible]　[illegible]一三五八
[illegible]行の[illegible]

羽衣なくては——も絶え　羽二四八九
飛行の道に行脚して　大江五六二
飛行[illegible]　檀二〇二七
[illegible]を責め　花筐二五八七
飛行をなして上らんとすれども　飛雲二六二〇
飛脚
鎌倉より——立って　[illegible]二〇〇五
秘曲
[illegible]に——の面目さに　[illegible]二〇五五
絲竹の役々——を盡し　[illegible]一四七[illegible]
[illegible]にて[illegible]　[illegible]二五八
秘曲口傳を残さず傳へ　[illegible]
秘曲傳へし[illegible]の　[illegible]九四
秘曲を奏し給へ　[illegible]八〇二
引き別れにし[illegible]の　[illegible]八[illegible]六
樋口の次郎は見知りたるらん　[illegible]二五八
引く手
大幣の——あまたの心かな　[illegible]一[illegible]八
大幣の——あまたの人心　水無月二九四一
引くも引かれぬ　東九六七
引くや[illegible]の名は[illegible]と　大江五八〇
茅蜩（ひぐらし）
つづりさせてふ蟋蟀——　[illegible]六[illegible]
日暮の川（日暮し）　[illegible]八九
日暮の里と申すは前には大河流れ　[illegible]二[illegible]

日暮[illegible]　[illegible]
日暮の[illegible]　[illegible]三六九
飛花落葉の嵐まで無常觀念を勸む　[illegible]六三
飛花落葉の風の前には有為轉變を　[illegible]六一
飛花落葉の無常に又常住不滅の體　[illegible]
飛花落葉の折々は好ける道とて　[illegible]一六[illegible]
飛花落葉を觀じつつ　[illegible]二七[illegible]
悲願
[illegible]
藤垣の——　[illegible]三一〇〇
超世の——　富一八四三・[illegible]三三〇三
悲願を起して[illegible]年久し　[illegible]三[illegible]八
悲願を[illegible]の時に　源氏一〇三七
鬚
舊苔の——を洗ひしは川原に　[illegible]
氷消えては波舊苔の——を洗ひ　[illegible]
[illegible]にて花心　[illegible]・[illegible]
美景に因る
花の下に歸らん事を忘るるは——　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
ひこさ
[illegible]の——の昔とかや　[illegible]八
彦山（福岡）
筑紫——の客僧　[illegible]

筑紫——の麓に住居する　[illegible]
彦山の豐前坊　[illegible]
非業の命を取らんとや　鎌七一〇
彦の山
[illegible]には　[illegible]二八
[illegible]　[illegible]
ひこ[illegible]
澤邊なる——は薄く残れども　[illegible]六
日頃經て待つ日は聞かず時鳥　草[illegible]八八二
非[illegible]
上は——[illegible]上　[illegible]
[illegible]
よりより——[illegible]　[illegible]
[illegible]
進那數主の——を受け　大會一七八〇
某が——にて候へども　[illegible]二五五六
秘藏に思せし御内の人　[illegible]一六六三
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
久方の天といつぱ　[illegible]
久方の空とは名づけ　[illegible]
空は限りもなければとて　[illegible]
久方の月の桂の[illegible]　[illegible]

久方の月の明らけき　第二軍一三二七
久方の月の桂も手に取るばかり　盛四五五
久方の月も落ちくる瀧祭　島田一九二三
庇護
　家櫻切りくべて——になす　鉢二五五八
　因果の婿の——子　三山二九二五
　迷ひを離すは——の　雪一八四六
久しき代々の神かぐら　高砂一八七一
久しき世々のためし　岩二八
膝の口
　都大崩にて——を射させ　弓三六三
膝丸
　枕にありし——を抜き開き　土蜘二〇六一
膝丸を蜘蛛切と名づくべし　土蜘二〇六三
非情草木の類までも誰もしら　芭二五三四
非情の精芭蕉の女と現れ　芭二五四〇
非常の大赦行はるるにより　安宅一四三三
非情無心の草木　西行一一七六・遊柳二三〇一
毘沙門
　韋駄天と申すは——の弟にて　舎利一三九一
毘沙門堂の花盛り　西行一一七八
毘沙門の沙の字をかたどり　鞍九五四
毘首羯磨が造りし赤栴檀の尊容　百万一六九七
聖
　この——も同じ便りに　浮三三四

六十餘州に御經を納めん——　盛一九三
〔美人草〕
美人草と申して妓ある花　項羽一五八七
翡翠の簪花しをれ　項羽一五九一
翡翠の髪ざし嬋娟の鬢　楊貴六[illegible]
翡翠のかんざしは婀娜とたをやか　采四〇三
翡翠の帳の内には有明の月あり　草[illegible]七[illegible]
日高川原の眞砂の數は盡くるとも　[illegible]四五[illegible]
日高の寺（和歌山）　道成一八〇一
火燒屋のかすかなる光は　道成一七九三
直垂　野宮[illegible]四[illegible]
　浮織物の——につま匂ひの鎧　知三三四八
　顯紋紗の——　鞍九五八
　錦の——　[illegible]の項を見よ
　烏帽子——　[illegible]五八・烏六六〇・船辨[illegible]七七八
常陸帯のかごとばかりに　櫻[illegible]三三七
常陸坊　[illegible]六八[illegible]
ひたふるに讀誦をなして　田一〇三〇
左巴は宇都宮の彌三郎　調三一三
左折の烏帽子　烏[illegible]四[illegible]
肘笠
　難波女のかづく袖笠——　蘆五四
ひぢ笠の雨は降り來ぬ雨宿り　合上[illegible]六八四
琵琶
　琵琶琴和琴笙——　吉天三三九五

扇——紅葉とともに　東[illegible]
[illegible]笙の曲和[illegible]　[illegible]
[illegible]に懸けたる簪には　岩一七七
美女御前は名高き中山寺に　仲[illegible]〇七
美女丸　仲光二三〇七
武調の樂　[illegible]
身命を助として　西[illegible]四七
必滅
　誰か——を期せさらん　檜三六三一
羊の歩み隙の駒　合上[illegible]八七・[illegible]六七八
筆者の誤りか　俊寛一四[illegible]九
必得往生
　衆生稱念——の功力　遊三三〇〇
飛鳥
　雲上の——は弓の影とも驚く　鳥[illegible]一四
　夕には——に離つて一時に歸る　西行[illegible]七
飛鳥の翔りの手を碎き　松[illegible]八六四
秀郷とやらんの龍宮より取りて　俊[illegible]四[illegible]
秀衡　三井[illegible]九八
秀衡が手に　[illegible]八九
秀行　[illegible]一六三
　われは時風——とて　春日[illegible]五
祕傳道に入りたる法文　東[illegible]九六八
人商人　櫻リキツレ一三三三・自リキ一三三五

人商人
　東國方の――　櫻一三三四。自一三三九
人商人に誘はれて　鷗一五三三
人商人に身を賣りて　櫻一三三六
人商人の手に渡り　三井三〇〇四
人失ひし有様
　氣疎き物の氣に――　夕三二八
一打に打ち落し　鳥三四三四
ひとかいといふ濯にたきに　自一三三四
一櫂舟とは僻事か　自一三三四
一霞
　水の煙の霞をは――二霞　自一三三四
　夕の空の――　雲林四六四
人形
　茅の――を人尺に作り　鐵七一〇
一方ならぬ思ひ草　自二六七八
一方ならぬ嘆み　小袖一二三六
人が人に似たる　安宅九五
人買舟　自一三三三
人がひもなき今の身　鳥三四三五
一返り
　今――もお汐汲めや　絃一〇四八
人がましくや思しめされん　胡一一四六
人がましきた名もなき者なり　自樂二四七六
人がらもなつかしく　浮クセ三一八

人こそ變り果て給ふとも　砧八二九
人こそ知らね今日毎に　野宮二四〇九
人こそ見えね秋の來て　紅三〇八一
一言葉にて止むまじや　船橋二七五八
人戀しや　卒一七二八
人心
　あだし言葉の　班二六〇六
　扇より猶裏表あるものは――　班二六〇八
　さだはたるべき――　和三〇二三
　とにしはあらじ　龍虎三三六四
　深き紅に面もめでて――隔てぬ中　羅三三四九
人心うつればかはる習ひ　[illegible]八六六
人心頼むかなたきかねことかた　水無月二九四一
人心なし
　落花心あり――　鳥二三九七
人心引けば引かるる梓弓　歌三五六
一聲
　十聲――數分かて　誓一五五六
　數への道も――の　誓一五五一
一聲だにも足りぬべき　敦一三〇
一聲のうちに生まるる蓮葉の　誓一五五四
一聲のうちに生まるる彌陀の數へ　京三二〇一
一聲の彌陀の數へを賴ますは　當一八四三
一聲の御法
　西に生まるる――　三山二九二五

一盛り
　いざ櫻われも散りなむ――　[illegible]一七六
一さし御舞ひ候へ　[illegible]六二・安宅一〇三
一さし舞ひ候へ　熊野三三五三
人更に若きことなし　安達一二三。門寺一六一三
一入二入なんどといへば　自一三三四
人知れずこそ思ひそめしか　[illegible]六〇三
人知れず契り給ひし言の葉　鷗三一三一
人知れぬ大内山の山守も　小督一一二九
人知れぬ心の色はおのづから　小督一四六六
人知れぬ心は重き小夜衣の　土蜘二〇五八
人知れぬわが通ひ路の關守は　[illegible]一七二六
一筋に頼む佛の御手の絲　井筒四〇三
一筋を千筋と撫で　木賊一四一二
人樂しみ人愁ふこれ皆世上の有様　鵜飼三二四七
一度この經を聞く人成佛せずと　[illegible]四四四
一度は榮え一度は衰ふる理　杜六二六
人たまひの魂に押しやられ　野宮二四一七
一つ淨土の縁となし　柏六六三
一つ世(一世をも見よ)
　もとよりも契りあだなる――の　隅一五三三
一つ世に二道かけて三山の　三山二九一六
人手にはかかるまじ　[illegible]
一時一つ時を打つて　[illegible]九〇
一時をくねる

女郎花の——と書きし　女三五〇〇
一通り降る村時雨　柏六五一
人留まりわれ往く／＼誰か又常ならん／　歎三六四
人な咎めそ
　待こそ——かりそめに　會一二五一
人並に迷ひ出て　夜三五九
人に知られぬ闇の内見た　錦木二三五八
人にて花を[illegible]　雲林四六二
人にはいはで若代のまつことありや　滿八五三
人に一夜を馴れそめて　[illegible]九五四
人の拔び草も繁きもの　[illegible]二七四二
人の上
　昨日は——今日はわれをも　[illegible]三二四三
人の思はく一言のうちに知る　量六四一
人の親としていとほしかなしと　三井二九八九
人の親の心は闇にあらねども　[illegible]一五[illegible]・本融三二一四・藤戸二七四五
人の親の迷ふ事まことの闇には　元一〇八八
人の國まで訪ひの　小督一一〇七
人の國まで靡く世の　呉九八三
人の國まで日の本の　磨三一〇九
人の國よりわが國　故生ケ七二四六一・弓三三三三
人の教戒にて　竹雪一八八七
人の心
　俺かぬは——かな　小督一一〇一

東のはてしまで——の奥深き　下一七〇五
頼みても頼みなきは——なり　[illegible]
地獄の有様見にも恐れぬ　善知三八三
人の心の花ならば風の狂ずる故も　[illegible]
人の心の花や見ゆる　關寺一六一七
人の心は花紫の　賀茂物七五〇
人の心を種として詠み出づる　梅四二八
人の心を陸奥の　[illegible]二五一
人の言の葉媚しから／＼　[illegible]八[illegible]
人の死骸は數知らず　[illegible]一一七
人の[illegible]
　五大五輪は——　卒一七三三
人の契りの色に出でけるぞ悲しき　定二二一〇
人の罪科は皆報いぞと　[illegible]二七四[illegible]
人のつらからじ
　生きてよも明日まで——　三山二九一九
人の歎きには形見に過ぎたる　富士太鼓二七〇三
人のなげきは生ふたるに　鐵七一三
人の歎きを身の上にかかる　朝三三五九
人の情
　心言葉は——　元一〇九三
人の情の盃にうけて心を　[illegible]二〇一
人の情の盃に醉ひ臥したり　一角二八三三
人の情の盃の深き契りのためし　紅三〇八六
人の番の日を某が儘にせず　[illegible]五九五

人の番を某が儘にせず　[illegible]
人の申しなし　[illegible]
人の身の[illegible]　[illegible]
人の代となりて　關寺一六一四
人の代に至るまで　邯二九六〇
人は鶴鑑を着て立つて[illegible]　鉢二五五〇
人は神の加護にされり　養二八〇八
人は隠し申すとも　吉祥三三八五
一葉散る
　禍はいづれ——　[illegible]八[illegible]・木曜三三六
人は天下の寶物たり　邯二九六五
人は天地の恵みを受け　内[illegible]七六
一葉の上に乗りつつ　自一三四一
一葉も散る
　風の誘へば——なり　[illegible]四
人々時によりつきつつ　野宮上歌二四一七
人々眠ればよき障ぞと　[illegible]七九五
單
　薄花櫻の——　[illegible]九五八
一重山（吉野）
　秋の葉のはや色づくか——　姨三四一六
　紅葉のはや色づくか——　大瓶一七六三
一重なれども合はすれば　善知三八七
人待つ女ともいはれ　井二四一〇
人待つ女物病み玉簾の　杜六二七

人までもあるまじ　砧八二九
人までもなし　清八四四
人丸　景ツレ六三一
人丸
鎌倉亀が江が谷に——と申す女　景六三三
人丸赤人の御影を掛け　草子一一八六
人丸の垣ほの柿　通小七六五
人丸世に亡くなりて　俊成一四四四
人まを眞と思ひ　女三四九九
一村雨の雨宿り　合六八四・郡上歌七八〇・紅三〇八五
一村薄の穂に出づるは　井三四〇五
人めきて
名は——賤しき垣ほにかかり　半二四九九
人目忍ぶの通ひ路の　卒一七二九
人目つつましや　卒一七二〇
人目づつみも洩れ出づる　小督一一〇三
人目稀なる木の下に　蝉一一四八
人目稀なる古寺の　井三四〇三
人目も草も枯れ枯れの　砧八二九
人目も包まず逢ひ見まほしくは　住一五四七
人目も分かぬわが姿　柏六五七
火ともしの上手　鐵拐九四一
人宿り　元一〇八七
人やりならぬ心々の　賀茂物七五〇
一夜妻

年に——逢ひもやすると天の川　鳥二三九七
一夜泊りと聞くからに　白樂二四七二
一夜寝て又立ち歸る旅衣　飛鳥道行六七
一夜の契り
笹の——だに　楊三一三四
一夜の契りも他生の縁ある　遊三三〇五
一夜ばかりの狩衣　佶八三三
一夜伏見の夢にだに　羅上歌一五〇七
一夜臥す牡鹿の角の塚の草　求待謠三〇七一
女待謠三四九八
一夜臥す牡鹿の角の束の間も　熊坂待謠九三九
一夜二夜三夜四夜　卒一七二九
一夜松も見えたり　右近四六六
獨りなほ佛の御名を尋ねみん　富士詣二三四七
善ワカ一五六四・佛ワカ二七九八
一人に離かば一人の恨み深かるべし　求三〇六九
獨寝ならば辛からじ　通小七七一
獨寝のふしぶしなるぞ悲しき　蒲八四九
獨寝の枕詞ぞ恨みなる　砧八〇八
ひとり伏屋の草の戸の　櫻上歌一三三六
獨武者　大江ワキツレ一五五三・土蜘ワキ二〇五五
獨武者
名を得たる——　大江五五六
保昌が館に——　大江五六九
賴光の御内にその名を得たる——　土蜘二〇六四

人をえらばせ給ふ　[illegible]八六一
人を見ぬ目の涙かな　盛三九一
人を見ぬ日の涙の雨　關寺一六一七
人をも恨むまじ　巣二六〇七
鄙の思出と思ふべし　山三一七一
鄙の住居に秋の暮　砧八二九
鄙の長路におちぶれて　賀茂物七五四
鄙の長路に衰へば　櫻一三三一
鄙の長路の旅衣　求次第三〇六三
鄙の長路や遠山舎　大江五六一
鄙の都路隔て来て　田次第一九八七
鄙人なれとかくはかり　松山天上歌六八八
日に磨き風にさらせる玉衣の　作一筆一三六八
日に向ふ國の浦舟漕ぎ出でて　河水行二九
日の入る國を尋ねん　春日六六九
簸の川上(島根)　大蛇前二五〇三
簸の河上に隠れて　源太一三六九
簸の川上の大蛇に住まれ　大蛇三五〇九
日の下に於て隠れましますす　攝一六六二
日のたてぬき
天ざかる——に　大江五六一
緋の袴踏みしだき　雲林四六八
火の柱を抱く　[illegible]
火の御子　富士山シテ二六八三
火の御子

惡魔を拂ひ國土を守る――　富士山二六九四
日の本――ホンをも見よ
いづくも同じ――の　岩二八八
月も曇らぬ――や　羽二四九三
光のどけき――や　内三七二
人の國まで――の　富三一〇九
豐かに照らす――や　代一四八〇
日の本のうちに名所といふ事　雲林四六八
日の本の影豐かなる　難三三九
日の本の神の誓ひはおしなめて　住上東一五四一
日の本の君に御調物こそめでたけれ　氷二六六六
日の本の國豐かなる　岩二八七・老五三三
日の本の名もあひにあふ　花筐二五八四
日の本の始めなる淡路　海一七二
氷の物の供御拜みは仕れども　氷二六五五
飛馬
師長も――に鞭を打ち　絃一〇五八
悲魂
塚を守る――は松風に飛び　求三〇七二
悲魂の鬼となつて　求三〇七四
檜皮
古宮の軒の――も苔むして　胡一一四三
日は照るとも絶えずとうたり　翁七・安宅一〇三三
火花を散らして戰ひしが　生二七三
祕法
大法――隔て様々の御事　第一五〇七
檜原（奈良）
初瀬の山は――が木の間に　飛雲三六一六
檜原の奧を尋ねん　三九七八
檜原のよそに三輪の山しるしの杉　誓三一五
雲雀落ち來る粟津野の　兼二四四
〔雲雀山〕　二六三七
雲雀山（奈良）　雲雀山二六二七
雲雀山
大和紀の國の境なる　雲雀二六二九
雲雀山に捨てられ　當△一八五〇
日晴れて見ゆ
波頭の名所は――　舩辨二七七六
響の灘も過ぎ　上島一九六二
美福門院の御計らひにて　松山△二八〇
火振の親方
磨針太郎兄弟これは――として　鳥三四三四
比目の枕の上には波を隔つる愁ひ　鵺八二八
比目の枕敷波の　弱三三一八　百二六七七
隙の駒
羊の歩み――　砧八三七・百二六七八
隙行く駒の法の道　西王一五七一
隙行く駒の道　熊野三三四八
隙行く駒の道行かじ　錦三四四七
祕密
佛法――の法味に預かり　富士三
氷見の江（富山）　藤二七二五
〔氷室〕　氷二六五一
氷室の謂れ　氷二六五五
氷室の神　氷二六五一
氷室の御調守るなり　氷二六五五
氷室守　氷二六五一
氷室守春も末なる山陰で　氷二六五四
氷室山（京都）　氷二六五一
姫
忘れ形見に――を一人持ち　松山鏡二六七一
其名をあらはす姫あり　鵜二五〇〇
微妙の相好莊嚴まのあたり　當七四一
姫垣
高垣――圍にり　土井一九七九
姫小松
何を引かまし――の　鶴三〇九
二葉よりわがしめ結ひし――の　代一四八四
姫小松の葉守の神となり　鸚一一六五
姫松
岸の――幾代經ぬらん　住一五四三
姫百合
夏草の茂みに交る――の　雲雀二六四八
日も數添ひて練衣　鐵次第七〇五

日も暮れぬ舟に乗れ　隅一五二三
日も夕暮に程もなく　寝上歌二三九八
ひもろぎ
　あらぶる神も祓への——　金八七六
神籬のをかたまの木の枝に　弓三三三九
祕文　皇九九七
病鬼　皇ツレ九八九
病氣も歎きも同じ事　谷一九五〇
兵具に對する笈を負ひ　大江五五六
兵庫の頭(範政)　鵜二三八五
兵庫の津(兵庫)　楠所九〇九
拍子
　筋なき——とも人や聞く　烏二三〇〇
拍子を進めけり　道成一七九四
拍子を揃へ袂を飜へし　采四〇八
拍子を揃へてえいやえいや　岩二九四
兵船一艘見えて　七騎一三一七
兵船はさながら天の鳥船も　熊五一三
平等說
　佛——如一味雨　定二二一四
平等大慧の功力　賴三三〇九
平等院(京都)　賴所[illegible]九七
平等院の邊へ捨て置き　[illegible]二
飛揚の魂いづくにか獨り赴く　藍二四三
兵法の奧儀を傳へ　鞍九六一
兵法の師といはれん　[illegible]二〇四七
兵法の術
　年月習ひし——を　[illegible]三四[illegible]九
兵法の大事を傳ふべき　[illegible]二〇四六
兵法の大事を傳へて平家を滅ぼし　[illegible]九五六
屛風(ヘイフウをも見よ)
　幕うちまはし——を立て　紅三〇八四
兵部卿の宮なん忍びて　[illegible]三一九
兵部の輔
　家持の卿未だ——なりし時　[illegible]四[illegible]六
屛風を立てたる如くに別れて　和三〇三七
兵衛の佐賴朝　七騎一三〇八・調二二二〇
兵衛の佐をば彌平兵衛が手に渡り　朝三三七〇
白衣黑衣の天人の數を三五に分つて　羽二四九二
白毫の秋の月を禮す　舍一三九〇
百官卿相雲客や　西王一五七〇
百官卿相に至るまで　鶴二〇七
百官卿相にいつかれ給ひし御身の　松山天二八八八
白牛
　路地の——を打つて見せん　車七七[illegible]
白象
　舟は——となり　江口四八六
百座の護摩を燒かばや　[illegible]一六〇四
百座の護摩を焚き　[illegible]三[illegible]三
百姓も萬民も皆朝恩に誇り　藤榮二一六二
百節[illegible]落ち　歌三六五
百千劫の齡を守らん　江島五〇四
赤栴檀
　毘首羯磨が造りし——の尊容　百[illegible]六七九
百年の榮花は塵中の夢　[illegible]三九、
百年の齡
　誰か——を期せん　歌三六三
百年の歡樂も命終れば夢ぞかし　[illegible]七八九
百八の數珠
　彭の歌には——　自一三四三
百八煩惱の眠りの　三井三〇〇一
百八煩惱を象る數珠の　[illegible]一[illegible]七
ひやくま山姥とて隱れなき遊女　山三一六七
(百萬)　二六六七
百萬　百[illegible]六六七
百萬の子　百子方二六六七
百萬遍
　念佛——申さば往生疑ひあるまじ　[illegible]一一九
白龍
　謹請西方白體——　[illegible]一八[illegible]
白蓮社を結び十八の賢あり　[illegible]一八[illegible]
百王守護の神山　[illegible]一〇八四
百王守護の神明として　[illegible]九[illegible]
百王守護の日の光　[illegible]四六五
百王の理亂は心の中に懸けたり　[illegible]二四七

譬喩品　東北二九七
比翼の鳥
　天に在らば願はくは――　鳥三一三一
比翼も友を戀ひ獨り翅をかたしき　鳥一三一
比翼連理の語らひその驪山宮の　東二六〇六
比翼連理の言の葉　楊二一二四
比翼連理のその契り　景八六五
日吉（滋賀）
　影も――の年古りて　雷三三四
鵯越（兵庫）
　上は嶮しき――誠に鳥ならでは　通盛二九〇六
判官殿――とやらんを通り　攝一六五七
水島――に至るまで一度も　景六四四
比良（滋賀）
　邊土に於ては――横川　鞍九九九
平泉（岩手）
　松島――を見ず候程に　船橋二七五五
開き
　一光都を御――あつて　船辨二七六九
開くる法の華心菩提の種となり　砧八三九
平に一夜を明かさせて　松風二八三一
平野（京都）
　北野――や賀茂貴船　松尾二八四七
　松の尾――　正一三六四
比良のの峯の次郎坊　花一〇〇八
比良の嶺おろし吹くとても　竹生二〇三六
比良の山風
　花誘ふ――吹きにけり　白鬚一四六五
平砂（茨城）　高野[illegible]六〇一
平松殿　高野六〇三
比良や横川の[illegible]櫻　[illegible]九五五
枚岡（大阪）
　河内の國――よりこの春日山　采三九九
飛瀧權現　檀二〇二六
飛龍の戰ひ隙もなし　龍虎一三七〇
晝かと思へば月またさやけし　[illegible]七八六
蛭子
　日神月神――素盞嗚と申すは　淡一四七
蛭子素盞嗚は枝を連ぬる御神　第一七七
蛭子の浦（兵庫）
　西の海汐の――遠し　雲林四五九
蛭子の御前の腰掛の石　大社八五八
晝は夜の大殿に入り給ひ　小督二〇九八
晝の間夜の御殿を行き違ひ　雷三三四三
ひれふして泣きゐたり　隅一五三三
鰭ふるや水を穿ちて　放生二四六〇
披露
　御下向の由を――申し　盛三〇九九
披露の縁になり申さん　鉢二五六三
廣き御影の道直に　胡一一四三
廣く萬里を去つて遍く麾下を兼ね　[illegible]二四四
拾ふ木の實は何々　[illegible]六六四
拾ふ爪木もたき物の　通小次第七六四
琵琶
　青山と申す御――　[illegible]八六五
　蟬丸は逢坂の藁屋にて――を　[illegible]
馬上に――を彈く事もこの時より　昭一五八一
撥音氣高き――の音聞ゆ　蟬一六八二
琵琶琴持たせて參りたり　千一七〇四
琵琶琴和琴笙篳篥　[illegible]九五
琵琶琴和琴笛竹の　道明一八三五
琵琶の威儀を極めつつ　[illegible]二五五
琵琶の秘曲
　神泉苑にして――を遊ばされ　絃一〇五〇
琵琶を抱きて杖を持ち　蟬一六七八
緋縅の鎧
　伊勢武者は皆――着て　賴三三〇七
ひをりせし右近の馬場の木の間より　右三四三
ひをりの日
　右近の馬場の――　右三四四
　賀茂の御あれの――　綸三四四八
貧
　家――にしては親知少く　[illegible]四六・實盛二六四〇
嚬
　嬋娟の――　[illegible]四〇三

賓客
　松風蘿月に言葉をかはす――も　江口四八五
貧家には親知少く賤しきには故人　檜二六二五
鬢髪
　前なる池水にて――をも洗はれ　實一三五〇
鬢髪白き老武者　實一三五六
鬢髪を墨に染め　實一三五八
便船　敦一五一一・須五八九・俊七一七・西二〇三三・竹生二〇三三
貧女
　西天の――が一衣を僧に供ぜし　自一三三八
鬢づらにさし給ふ　大蛇三五〇九
賓頭廬にならう　大會△一七八四
便なう候へども　熊野三三四三
便なき事
　例は――なれども　大原五三九
便なや　海一七七
鬢の髪を遺し置かれ　清八四三
頻婆娑羅
　阿闍世太子は――を害せずや　仲二三一三

ふ

蜉蝣
　命は――の定めなきに似たり　千一七〇三
風雨随時の御空の雲居　賀七四四
風月の友に誘はれて　松虫一八六四
風月の窓に月を招き螢を集め　雷二三三七
風枝蕭颯として秋の聲よりすさまし　龍虎三三六九
風聲水音まで萬物のこもる心あり　高砂一八六六
風病の身色　歌三五八
夫婦
　相生の松の精――と現じ　高砂一八六七
　嵐山の花を守る――の者　嵐二〇五
　伊勢の二柱――と現じ　綸三四四八
　手摩乳脚摩乳　これまで顕れ　源太一〇七〇
　年久しき――の者あり　輪二九八五
　業平紀の有常の息女――　井三四〇二
　白桃王母と申す――　昭一五七九
　村上天皇梨壺の女御――なり　絃一〇五六
　女郎花花の――は現れ　女三四九九
夫婦兄弟朋友子孫家人に至るまで　内二七七
夫婦男女の語らひ
　三輪の明神は――を守らんと　輪二六〇三
夫婦二つの星となる　鵜飼三〇一
夫婦の御神
　龍の口の明神は天部と――　江島四九六
夫婦の神
　勝手木守とて――　嵐二〇七
夫婦の契
　難波津淺香山の道は――　蘆五八
夫婦の契とふこの歌の情　俊成一四四五
夫婦の情知る事　蘆六一
夫婦の者　錦木二二四九
夫婦の老人中に少女をすゑ置き　大蛇三五〇八
浮雲
　其は――あれなる者は流水　放下二四四一
浮雲流水　放下二四四二
笛
　葦の葉の――を吹き　皇一一五三
　汀の蘆は――を吹き　梅四三〇
笛太鼓の音　藤榮二一五三
笛竹の壽なれや　皇九九四
笛仕れと召し出だされて　小督一一〇四
笛鼓の音　烏三九五
笛鼓を鳴らし田歌をうたひ　雲林六七
笛に得たる便りのあるぞとは　笛二五二五
笛の音

木枯に吹き合はすめる――を　小督一一〇九
〔笛之卷〕　二五二一
笛竹聲　東北二一七四
深入りし　春榮一四〇〇
不孝
　親の敵を討たぬ者は――　放下二四三八
不孝の罪に沈む故　弱三三一八
不孝の科は數多あり　鵜戶二一六六
舞歌音樂の妙音の　山三一七三
深き情の色香をも知る人のみぞ　小督一二〇四
深き情を人や知る　熊野三三五二
不覺
　ああ――なりとよ　咸七九八
　剛なりとも申し又――なりとも　攝一六六〇
舞樂
　月の都の――まで學び　皇九九四
　波の鼓の――につれて　唐一八二一
深草の里(山城)　墨所一五〇五
深草の四位の少將　卒一七二八
深草少將　通小シテ七六一・土車ワキ二〇六九
深草の少將がなれる果て　土車二〇七〇
深草の少將の一子　土車子方二〇六九
深草の少將のその怨念が　卒一七三〇
深草の野邊の櫻し心あらば　墨一五〇七
深草野邊の墨染櫻　墨一五一三
深草の花は昔や薫ふらん　墨一五〇七
深草の者　土車二〇七一
深草や木幡の關を今越えて　賴三一九九
深草山(京都)
　鶉鳴くなる――　融三三一八
深草山木幡の關をうち過ぎて　山月行二九一一
深草山に分け入りて　墨一五〇七
深草山の末續く　采三九七
不覺なる者の心かな　項五九四
舞樂に引かれて月の夜汐の波　錦一五〇一
舞樂の曲ぞ面白き　一角二八三
舞樂の曲を奏し　白鬚一四七三
舞樂の曲を盡し　源太一〇七三
不覺の涙せきあへず　夜三三六七
不覺の涙とや思しめさるらん　七騎一三三三
不覺の涙に袖をしほる　大原五五〇
不覺の涙を抑へ　忠信一八九七
舞樂の秘曲も度重なりて　墨二一〇
舞樂のみぎん
　獅子團亂旋の――　石一二八〇
舞樂を奏し　鷺一三三一・玉井一九八三・[illegible]三三四・[illegible]二四〇〇
舞樂をそなふる宮寺の　老五三三
深澤(神奈川)
　鎌倉海月の間に――といふ湖　江島四九八
深しいこともあるまい　吉靜△三二八一
深芹かき分けて　[illegible]
深立つ空も凄しく　東九六七
舞歌の曲　[illegible]四八・[illegible]二〇七三・[illegible]一八〇七・[illegible]三四八
舞歌の聲　[illegible]
舞歌の袖　[illegible]
舞歌の道こそすたれ　[illegible]
深田
　薄氷の――に駈け込み　巴[illegible]八五
深田に馬を駈け落し　[illegible]七八
深見草
　思ひの露も――の　[illegible]二六四六
　情の末も――　[illegible]一四四[illegible]
　深百合――御心寄せに　[illegible]二六四四
　分け行く露も――　大原五四〇
深綠絲捻りかけて青柳の　吉天三三九一
深海松の英遠の濱風　藤二七三三
深百合深見草　[illegible]二六四四
舞歌を手向けて　[illegible]七五一
鳧雁鷗鷺に翅をならべ　[illegible]三五六八
吹上(和歌山)
　汐吹風の――や　[illegible]二〇八
　和歌――にさしかかり　[illegible]二三
吹上の浦
　波――風に跡遠ざかる　[illegible]一四[illegible]
　濱の眞砂も――傳ひ　[illegible]二三二七

吹きしをり散るもみぢ葉の　六浦三〇一七
不吉の例
主從八騎思へば—なり　七騎一三〇九
奉行
囚人の—　春榮一四〇〇
不香の花を手折り
搔頭の柴には—　葛六九三
不興
この三年—蒙る　小袖一一二六
時致は—の身なれば　小袖一一二一
永く—とのたまへば　巴三三八六
不興をも勘當をも許すぞ　小袖一一三七
舞曲
溫顏—花めきて　佛二七九二
舞曲の酒宴の戯れ　木賊三三一三
吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをささず　岩二八七
吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをせず　皇△九九〇
鸞△二二六・西王△二五六八・鶴△二〇九六・東方二一七八
吹く風の枝を鳴らさぬ　御二九六一
副將軍
佐那田の餘一義忠は—を　七騎一三一三
福壽圓滿
諸人快樂—　住一五四三
福壽圓滿の願ひ　江島五〇三
福壽圓滿の靈地　江島四九一
福聚海無量是故應頂禮　菊八一〇
福部の神　輪狂言三三七三
福部の神
北野の末社—　輪△三三八〇
ふくら雀は風に揉まるる　放下二四五〇
袋
粟豆の乾飯を—に入れ　卒一七二六
梟
松桂に鳴く—　錦木二三五〇
梟松桂の枝に鳴きつれ　[illegible]一六三八
不會
頼朝義經—の由　船辨二七六九
更け行くや在原寺の夜の月　井筒三四一〇
普建　鶴子方三三七三
普建
傳大士—普成　輪三三七七
普賢
十萬—滿山護法　卷二八一三
普賢菩薩と現れ　江口四八六
普賢文殊左右に居給へり　大會一七八五
扶桑
西天唐土—にも並ぶ山なし　富士山二六九二
名にも—の國を引けば　弓二三二七
和光守護神の—の御國　淡一五三
不遭還本栖
初陽毎朝來—　白樂二四七七
房崎(香川)　海一七二
房前　海子方一六九
無沙汰の宮守どもや　蟻二一七
巫山の雲は忽ちに陽臺のもとに消え　夕三二一
富士
伊豆箱根—淺間　正一三六四
住吉にも—と申す伶人　梅枝四四〇
住吉より—と申す樂人　富士太二六九九
ほのぼのとうつろふ—を湖の　元一〇七九
都の—　竹生二〇三六
富士颪
野は夕立の—　富士山二六八七
胸の煙を—に晴らし　小袖一一三八
富士颪に絶えずもまれて　富士太二七〇七
富士が妻夫の別れを悲しみ　梅枝四四〇
不思議なる事を申すものかな　夜三三六四
不思議や異香薫じつつ　[illegible]一五五九
不思議や今までありつる女　紅上歌三〇九〇
不思議や雲のうちよりも　善界上歌一六〇五
不思議や社壇の内よりも　白鬚上歌一四七二
不思議や虚空に音樂聞こえ　大會上歌一七八四
不思議や早く日も暮れて　[illegible]二六三〇
富士權現
伊豆箱根—も御覽ぜよ　小袖一一三三

〔富士山〕　二六八二
富士山(静岡)　富士山所二六八三
不死山
　本意は――なりしを　富士山二六八八
富士山に至り不死の藥を求め　富士山二六八五
伏柴の露の命もいかならん　皇九九一
富士淺間の唯今の影向　富士山二六九四
〔富士太鼓〕　二六九七
富士太郎　狂九九九
臥したる男の枕に寄り添ひ　鐵七一一
ふしづけ
　波の底に――にし給へば　鵜飼二一五
不死の藥
　富士山に至り――を求め　富士山二六八五
富士の煙
　藥を燒きしより――は立ち　富士山二六八八
富士の煙のかひやたからん　梅枝ヘ四四二
　富士太二六九九
富士裾野(静岡)　夜所三五七
富士の裾野を狩らうよ　小袖一一二八
富士の高嶺にあがりつつ　花一〇〇九
富士の高嶺の月影も　江島四九一
富士の高嶺の程を知る　調三一二一
富士の妻　梅枝シテ四三五・富士太シテ二六九七
富士のなるさの大將や　草子一一九〇

富士の鳴澤(山梨)　富士山二六八七
富士の嶺
　上なき思ひは――の　竹雪一八八四
　高き名を雲居にあげて――の　小袖一一二八
　時知らぬ山は――いつとてか　富士山二六八九
　名を――にあげばや　小袖一一二九
　胸の煙もその名をも――に上げ　元一〇八二
　雪の――。　盛三〇九八
富士の嶺の煙見えたる東屋に　雪一六九一
富士の嶺のゆきて都に語らん　身二六〇〇
富士の根や裾野に　富士山二六八六
富士の卷狩　夜三三五九
富士の御狩　小袖一一二八
富士の御嶽　大江五六三
富士の山
　郡の名に寄せて――とは申す　富士山二六八八
富士の山神　富士山二六八三
富士の雪
　五月半ばの――　小袖一一二八
　月清見潟――。　羽二四九三
富士の女　富士太子方二六九七
富士は雪山なれば　富士山二六八九
伏見(京都)　[illegible]所八六九
伏見
　一夜――の夢にだに　雪一五〇七

伏見田
　都邊に植ゑしは――鳥羽田　飛鳥七三
ふし水
　入江まかせし佐野の――。　[illegible]
伏見とはこの秋津洲の名　[illegible]八七四
伏見とは總じて日本の名なり　[illegible]八七四
伏見の大宮造り　[illegible]八七二
伏見野(京都)
　木幡山――竹田淀鳥羽も見え　[illegible]
伏見の里
　木幡山――も遠からぬ　放生二四五
　菅原や――の宮造り　[illegible]八七一
伏見の里に大宮造り　金八七〇
伏見の澤田見え渡る　[illegible]二〇〇
普戒　帽子り[illegible]
普成
　傳大士普建――。　[illegible]
不淨を隔つる七重の注連　小鍛一一三
不死藥
　形見の鏡に――を添へ　富士山二六八八
ふし柳　[illegible]
　倒れ――かり寢の床の　自一一八
諷誦　[illegible]
不取正覺の御誓ひ
梵鐘の普稱名の妙音　[illegible]一八四

鳧鐘の御聽衆の人音　誓一五五三
鳧鐘鈴の聲　高野六〇八
鳧鐘を取りあげ　隅一五二三
鳧鐘を鳴らし聲々に　初二五七七
鳧鐘を鳴らし法事をなし　敦一三三
衾
　鴛鴦の―の下には立ち去る思ひ　砧八二八　弱三三一八
臥す猪の床の上　砧八三一
布施　源氏一〇三五
布施一襄
　三寶衆僧の御―　自一三二八
防ぎ矢射られ給ふたと　吉靜三三八六
伏屋
　ひとり―の草の戸の　櫻一二三六
伏屋の里(長野)
　園原や―も秋ぞ來る　木賊二二〇六
伏屋の物語　木賊二二一七
伏屋の森に帚木と申す木の　木賊二二〇九
豐前坊
　彦山の―　鞍九五八
豐前の禪師
　別當の御弟　春榮一四一五
不增不減　車九七〇
不足の者
　われには―たれども　正一二七〇
不退
　所は―の所　實一二三五
傳大士　輪藏三三七三
傳大士普建普成　輪三三七七
不退轉
　一期生の後に早く―の位に至る　江島四九三
　譜代召しつかひ候家人　春榮一四〇五
不到の所
　いづく―ならん　盛三二〇六
二上の山(奈良)
　二上の嶽とは―とこそ人は　當一八四九
二上山の麓なる當麻の寺　當一八四一
二心あらずは末は榮えなん　内三七四
二つ衣
　鈍色の―に練袴の　大原五四九
二つの影
　峯も―添ひて　元一〇七九
二つの星
　夫婦―とたる　望月三〇一
二度歸りくる道と聞くからに　砧八三六
二つの命
　親子は一體―ならずや　七騎一三一三
二つの色の爭ひ柳櫻を　雲林四六二
二つ銘の御劔　小鍛一一三三
二つもなく三つもなき　定二一一五
二つもなく三つもなく唯一乘の德　鵜飼三二〇
札の御所望　遊三一九四
二柱の神
　名も―ここに八洲の國を作り　[illegible]八七一
二柱の社　淡一四五
二葉の琴
　神山の―年ふりて　水無月二九四四
二葉の松の末かけて　養七一二
二葉よりわがしめ結ひし姫小松の　代一四八四
二重の狩衣に山鳥の尾にて　錦一三八五
二股の竹　竹生一〇〇九
二道かけて通ひしなり　三山二九一六
二道かけにたかなか恨みしには　綸三四四八
二道かくるあた人を頼まじ　鐵七〇五
二道に忍び通ひ給ひしに　井三四〇六
二見の浦(三重)
　伊勢の海の―二度世にも　松風一八一八
二見の浦石の籠をも一見し　御二九五九
二見の浦におかり裳裾の風れ　第一七七二
二見の浦の神藏　東二五七
二見の太夫渡會の何某　歡一六一
二村山(愛知)　草薙八八七
二村山
　呉織あやに戀しくありしかば―と　呉九八一

二本の杉　玉葛一九六一
二本の杉の立所を尋ねずは　玉葛一九六二
二世
　思ひ夫の——と契りてもなほ　砧八三八
二世とかけし中の契り　百二六七七
補陀落山もこのあたり　玉葛一九六一
補陀落の南の岸に在り　[illegible]四〇七
〔二人祇王〕　祇異稱八五七
〔二人靜〕　二七一一
二人の親の悲しみの　竹雪上歡一八八八
二人見るだに悲しきに　通小七六七
札を取り出て賜ひければ　羅上歡二二五一
不斷の香
　甍破れては霧——を燒き　大原五四一
〔藤〕　二七二三
藤
　多祜の浦や汀の——の咲きしより　藤二七二六
淵
　幾代積りて——とならなん　郁七八五
扶持
　御——ある方々に憎まれ　景六四〇
不知案内の事にて　大社五七八
不忠なし給ふな　吉備三二八六
藤生野（京都）
　花の——も隔てぬ色も匂ひも　藤二七三三

藤枝（同）
　花紫の——の　[illegible]七五五
藤咲く門　海一七八
藤咲く多祜のうらめしの身ぞ　藤二七三五
藤咲く松も紫の　雲林次第四五八
扶持し給はば　[illegible]二四三
扶持し申したる左近の尉　[illegible]二九三
〔藤戶〕　二七三七
藤戶（岡山）　藤戶所二七三七
藤戶の先陣を仕りし御恩賞に　藤戶二七二九
藤戶の渡り
　春の湊の行く末や　たるらん　藤戶二七一九
藤波
　池の——夏かけて　大原五四六
　盛り久しき——の　藤二七二三
　多祜の浦底さへ匂ふ——を　藤二七二七
　松風の上の——　繪[illegible]四四八
藤波のかかれる木々の梢をば　檀風一六九四
藤波のかかれる松の梢をば　[illegible]二七一
藤波の影なる海の底淸み　藤△二七二九
藤の裏葉に太上天皇　須一四九七
藤の裏葉に置く露の　源氏一〇三九
藤の衣の玉襷　鵜飼三〇六
藤の花の精　藤シテ二七二三
藤の森（京都）　融二三二八

藤袴
　うら紫の　[illegible]七七二
　紫磨忍辱の——　源氏一〇三九
　關法に織れる——　[illegible]一八七
　紫の一本ゆひの——　雲林四六八
藤原の朝臣一首の歌を書き　[illegible]二〇七九
藤原の興範通りし時　[illegible]六三七
藤原の俊家　住一三六六
藤原の仲光　[illegible]二三〇九
藤原何某　[illegible]四三三
藤原や氏人よりて　[illegible]三九
藤房の卿は世を遁れ　楠九一五
不定の雲霞へり　[illegible]一五二一
藤山（[illegible]）　住一二七七
舞女の譽れ世に勝れ　佛[illegible]六三・佛二七九〇
文月七日の曉や　碁八四
富貴の家
　孝あるにより次第次第に——と　大佛一七六〇
富貴の身
　次第次第に——となり　現一三五〇
ぶつきやうや　大江△五六七
佛果
　鳥類の身を轉じ——に至れ　[illegible]四三三
　法に引かれて——に至る　胡一二五三
佛果に至る花の色　胡一二五〇

佛果の緣 安達一一三
佛果菩提に到るべし 鵜飼三一一
佛果を得しめ給へや 六浦三〇一七
佛果を授け給へ 身三九五二
物詣とて御出て候 唐一八一〇
佛敎
逢ひ難き如來の——に逢ひ 卒一七一九
佛骨を納め奉り 舍一三八九
佛在世に佛の說きし法の場 蟬三三〇八
佛在世の淨藏淨眼の如くに 鐘一四五四
物騷
けしからず——に候 隅一五三一
佛像
父命によりて——を亡ぼし人壽を 千一七〇六
佛性
一切衆生悉有—— 籠七三〇・白鬚一四六八
人々同じ——なり 采四〇六
佛性同體の人間 天三一三八
佛舍利 舍一三八五
佛舍利の御寺ぞ在世なり 舍一三九〇
佛衆生通する身 籠七三〇
佛種の緣となり 竹雪一八八八・木賊三三一七
佛所
急ぎ——に逢らん 鵜飼三〇九
佛所に到るべし 梅枝四四五
佛心
五者——云何女身 梅枝四四四
一時も結緣せばそれこそ即ち——. 身三九五三
佛神三寶も捨て給ふと 靑八五一
佛神の御加護もやありけん 實盛三三六一
佛身を得たりしに 舍一三九〇
佛說
神力も——も同じ和光の影 道明一八三一
佛陀
神明——の冥感に至る 東北三一九九
佛體
草も木も——となる 春日六七七
佛體色性の卒都婆 卒一七三三
佛體眞如の善心となさん 殺一六四三
佛體に刻める木 卒一七三三
佛道
有情非情皆俱成—— 鸚三三八九
佛道修行のためなれば 自一三三三
佛陀の御誓願 百三一二七
佛陀の聖衆 朝三三六四
ふつつと罷り歸るまじ 夜三三六四
佛敵法敵となれる 善界一六〇一
佛日西天の雲に隱れ 弱三一三三
佛日の光晴れ難く 東岸三一七一
佛日輝ますますにして法輪常に 氷三六五八
佛法
後五百歲の—— 舍一三八九
神國として——今に盛んなる 善界一五九七
日本に渡り——をも妨げばや 善界一五九七
佛法あれは世法あり 東九六九・舍一三八九・山三一八一
佛法結界の地となすべし 白鬚一四六九
佛法最初の御寺 雷電三三三四
佛法最初の御本尊と顯れ 弱三三二三
佛法最初の天王寺の石の鳥居 弱三一一九
佛法東漸
日の本の——を振り捨て 龍虎三三六三
佛法東漸とて三如來四菩薩も 舍一三九〇
佛法東漸にあり 春榮一四一四
佛法東漸の都の北の宮寺に 嵐三三七九
佛法の仇王法の敵 木曾八三一
佛法の力とて貴賤群集の色々に 野一五五三
佛法の名字を人知らず 白鬚一四六九
佛法繁昌の靈地 海一八七・嵐三三八四
佛法流布の跡を尋ね 雷電三三六〇
佛法流布の國 道三三一三
佛法流布のしるしとて 舍一三八九
佛法流布の種久し 采四〇〇
佛法流布の寺となし 木賊三三一七・竹雪一八八八
佛法流布の時 春榮一四一四
佛法流布の世となして 弱三三三三

佛法王法のかしこき時の例　鷲一三三一
佛法王法の障りとならんと　[illegible]三九〇
佛法王法の靜かなる國　[illegible]四五一
佛法王法を守りの神　大[illegible]五八[illegible]
佛法を護卸する第六天の魔王　第一七七四
佛平等慈如一味雨　[illegible]三二四
佛菩薩ならでは見拾ふ事なきに　大原五四七
佛力
　かほどに妙たる　神力　善界一六〇六
　神變——にあらずは　石一三七九
　身命を——にまかせて　石一三七六
佛力といひ神力も　田一九九九
武帝
　漢の——の后李夫人なくならせ　松山鏡二八七一
不調法な者　草子ヘ二八五
筆に書くとも及ばじ　放下二四五〇
筆の立てども覺えねば　禪一六九三
筆の林も枝茂り　雷三三三七
筆を和し
　墨すり——けるが　木賊八二二
普天率土の勅命　小鍛二二二
普天の下率土の中　國九〇六・鷲一三三〇・田クセ一九九八
不動
　凝念——の理を顯し　善界一六〇二
　自性清淨天然動きなきこれを——　善界一六〇五
　大日大聖　[illegible]八三
　佛をば——と申、敵を[illegible]　[illegible]
不動の慈救の偈　[illegible]八〇[illegible]
不動はさつくの繩にて祐經が形代を　[illegible]二三〇
不動明王　[illegible]一二九
不動明王
　大聖——、　[illegible]六〇・谷一九五〇・[illegible]三八
　大日大聖　安達二一九
　中央に大日大聖　飛雲二六三〇
不動明王の索にかけて　[illegible]二〇五・舟[illegible]二七八五
不動明王の尊容を象り　安宅九一
不得心たる事　草子二一八四
不得心なる者　葵三三八・鳥二三〇三
武德年中　皇九九七
懷紙
　この文を——と人や見ん　高野六〇八
舟遊び
　遊女の謠ふ——　江口四八一
船軍
　思ひぞ出づる壇の浦の——　八島三一六一
舟競ふ堀江の川の水際に　隅一五三五・船橋二七五六
舟子
　情も知らぬ——ども　俊寛一四三三
舟子ども棹のさす手も　唐一八三二
舟子どもはや纜をとくとくと　船辨二七七八
[illegible]　高砂一八六〇
舟出せし後の山の[illegible]　住上歌一五四四
[illegible]　[illegible]
[illegible]
　生死の海を渡る——　[illegible]
船橋の主　船橋二七五八
舟人も誰を戀ふとか大島の　[illegible]九九
[illegible]　二七六七
不二
　人佛——の御心にて　放生二四五七
[illegible]　安達一一七
舟
　明石潟月待つ方に行く——の　住一五四四
　江のほとりに繋がるる——　[illegible]八・大[illegible]四七
　羯鼓と囃子を飾りたる　[illegible]
　詩歌の——を浮かめ　鷲三三八
　島隠れ行く——をしぞ思ふ　草子三三八七
　島隠れ行く——を惜しとぞ思ふ　知三三四八
　月の御——に棹さして　室三〇二
　三日月の影を——にも譬へ　融三三三四
　御法の——　當一八五四
　御法の御——　[illegible]五六[illegible]
　船漕ぎ出でて日の本の　白樂天[illegible]四七一
　舟こぞりて狹くとも　隅一五三五
　船棹だにも忘るるは風に出船の習ひ　[illegible]

舟と橋
　宇治の川に――とはありながら　頼三三〇一
船の爭ひ
　唐土と日本と――あつて　曹一八〇六
舟の起りを尋ぬるに　自一三四〇
船のせがい　七騎一三一〇
船のせんの字を公にすすむと書き　自一三四一
　藤榮二二五八
舟の道
　一葉萬里の――　八島三一四七
　工み出だせる　これも柳の徳　遊三三〇二
舟は白象となり　江口四八六
舟引き起し艀體の　國上歌九〇三
船待ち得たる旅行の暮　俺七一八
船も道ある浦傳ひ　藤戸二七四〇
船呼ばひ
　眞野の入江の――　竹生二〇三四
舟を一葉といふ事　自一三四二・藤榮二二五八
船を組み駒を並べ　八島三一五九
舟を捜されたるも家を捜されたるも　國九〇二
船を作する楊柳　金八七三
不萌の枝
　金鷄夜宿す――　俊寛一四一五
不破の關路（[illegible]）　[illegible]三五七
布帆

行進安穩に――恙もなく　維盛三三六一
不便
　あら――や　籠三三九一
　かかる――なる事こそ候はね　藤戸二七四二
　かの者の心中――に存じ　曹二〇一三
不便なりし業　浮三一九
不便には存じしかども　藤戸二七四三
不便の者や　戴二四〇
ふふみて
　花未だ　梅四二六
ふふめりし花のはじめに來しわれや　梅四二六
不分佛多法佛道　江口△四八〇
父母（ブモを見よ）
文
　あなたの玉章こなたの　卒一七二八
　雁の翼につけし蘇武が　高野六〇七
ふみかへされて濡るる袖かな　通盛△二九〇四
ふみ返しては落ちざらめやは　通盛△二九〇四
踏木の足音きりはたりちやう　呉九八七
文の干ぬ間にと詠ぜし人の　夜三三六九
文の段　熊野三三四三
踏み迷ひたる旅人　一角二七七
踏みも見ぬ橋立や　九世九二一
父命により佛像を亡ぼし人壽を　千一七〇六
父母（チチハハ・カゾイロをも見よ）

いづれか――をかなしまざる　春榮一四一三
　代々以て――の數々なり　春榮一四一三
父母の胎内を出でしより　[illegible]三七九
父母の重恩
　神君――言葉に盡し難かるべし　内三七六
　父母の身を分け生まれ來て　内三七六
普門品の二句の偈を授かり　西王△一五六九
普門品を唱へければ　雷三三四〇
舞陽（秦舞陽）　咸七九九
冬梅の匂ひの聞え　冬二八〇四
冬木より咲きそむる窓の梅　鉢三五五七
冬氷
　夏の日になるまで消えぬ　氷二六五九
冬ごもり
　難波津に咲くやこの花　芦林四五九・[illegible]
　雪にも梅の――今は春べの　雜三三二八
冬ごもり今は春べと　[illegible]
冬立つや旅の衣の朝まだき　[illegible]
冬鶯　小[illegible]△二四五三
冬の讃を迷へば袖も寒き水鳥の　草子一一九四
冬野の蘭草の如し　[illegible]二六五六
冬は慈悲萬行　[illegible]△一九七〇
芙蓉
　太液の――の紅未央の柳の綠も　[illegible]一一九
　昔は――の花たりし　鵺一六

芙蓉の紅色かへて　皐九九一
不老不死の藥となつて七百歳を　菊八一〇
不老不死の藥の與　三笑一三八七
不老不死のこの身　一角二八一
不老不死の仙藥　富士山二六九四
不老門にて日月の光を　鶴二〇九七
不老門の前には日月遅し　邯七八四
降り積る空は小倉の峯の雪　中上歌九六五
ふりさけ見れば伊勢の海　田二〇〇〇
ふりさけ見れば春日なる三笠の山　谷一九四四
古りたる烏帽子引きかづき　百二六七三
振り鼓　鞍へ九五一・十車二〇七六
ふりにける岩のひまより　大原上歌五四一
古りにし跡を改めて　船橋待謡二七六三
古りはつるこの一本の跡を見て　六浦三〇一一
降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ通ふ　忠度一九一八
武略の達者
盛久は平家譜代の侍――　盛三一〇九
武略の譽れの道　鞍九六一
振分髪
くらべこし――も肩過ぎぬ　井三四〇七
振分髪の玉葛　飛鳥七三
降る雨も時をたがへぬ　鱗四五三
降るか殘るか時知らぬ　竹生二〇三六
古川野邊に君を見ましや　玉葛一九六三

古川野邊のさみしくも　玉葛一九五九
ふるき鼓の苔むして　[illegible]三五七
古き流れを汲んで水上を正す　[illegible]二〇
古き名の奈良の都を立ち出でて　龍田道行一九二
古き人
取りて歸り――にも見せ　[illegible]二四八八
古き衾古き枕ひとり袂をかたしく　花筐二五九三
古き枕
古き衾――ひとり袂をかたしく　花筐二五九三
古き都の道なれや　[illegible]次第四四
古里に住みしは同じ難波人　松蟲上歌二六六三
古里の名殘もさぞな有明の　放下上歌二四四〇
古里を鏡に映ししはとけつといひし　昭一五八七
古巣
花は根に鳥は――に　芦五三〇・竹雪一八八三・東北二三〇一
古簾つれづれもなき　盧五五
古塚
草茫々として露深々と――の　井三四〇五
古塚に朽木の柳枝さびて　遊三一九六
古寺
身は――の軒の草　芭二五四三
降るに思ひの積る雪　竹雪次第一八八三
布留の神杉過ぎがてに　谷一九四四
降るは涙か櫻花　熊野三三五
降るは春雨か落つるは涙か　雲林四六九

古腹巻
横縫のちぎれたる――　[illegible]五六八
古宮の軒の檜皮も苔むして　[illegible]二四
古居五郎　[illegible]
降る雪の蓑代衣袖さえて　鵜祭一[illegible]四一三
武烈天皇の御代を味眞野の中子に　花筐二五八〇
無傷の儀　[illegible]八五
文學盛んたれば花の色を増し　[illegible]五六八
分國
洛陽の西南はこれ――とたるべし　[illegible]三六八五
豊後の國より出でたる僧　[illegible]三一〇
豊後の次郎　春榮一四一五
分身
一體――現れて衆生濟度の　[illegible]一五六三
西王母の――　西王一五七[illegible]
文道の大祖　天三二四
分段同居
法性の都を出でて――の境に　[illegible]四五
分段同居の塵に交はり　嵐三一一
文帝
魏の――に仕へ奉る　菊八〇七
分捕功名數を盡す　春榮一三九八
忿怒
外には――の相を現す　[illegible]界一六〇一
文筆の堪能上人も悦び思し召し　雷[illegible]三七

文武二道
　忠度は――を受け給ひ　忠度一九一六
文武二道の忠度の　俊成一四四一
文武に名を得し人　賴三三〇四
文武の達者　木曾八二三
文武二つの道廣く　放生二四六一
紛々たる雪
　花前に蝶舞ふ――　杜六二六・胡一二五一・熊野三三五〇
芬芳しきりに亂れたり　婕三四八三
文屋の康秀が三河の守になり　關寺一六一六
文を好む木　老五二八

へ

平安の衢
　里は――を見せ　春日六七〇
平安の都
　愛宕の郡に――を立て置き給ひ　金八七〇
平家一統の世　烏三四一九
平家の一門各々浮かみ出で　船辨二七〇三
平家の公達舳艫にまはり　碇二六一
平家のゆかりの者　碇二五〇
平家は船源氏は陸　景六四四
平沙
　日――を照らせば夏の夜の霜　雨三三〇
平沙に子を生み　善知三九二
陪従　弓ワキ三三二
陪従の參詣仕れとの宣旨　弓三三三
弊室に燈火消えて秋の夜猶長し　雲雀二六四〇
平相國　木曾八二一
平相國淸盛の朝臣　祇八六五
平相國の御時　佛二七九二
平城天皇の御子阿保親王の五男　雲林△四六五
平城天皇の御宇　田一九九七

平生の顏色は草葉の色に異ならず　藍二四二
平生の身
　何によつて――を愛せん　松山天六八九〇
平地に波浪を起し　大社五八六
平地に波瀾を起し　九世九二九
平治の亂れに義朝都を御開き　朝三三五七
瓶には谷漣一滴の水を納め　一角二七九
幣帛
　臨時の――を捧げ　藍二四三
平判官康賴　俊寬一四二三
屛風（ビヤウブをも見よ）
　七尺の――の上になほ餘りて　紅三〇九〇
　七尺の――は躍らば越えつべし　咸八〇二
平々
　海底の砂は――たり　和三〇三七
閉目郎疾とて目を塞ぎ得心あれば　江口△四八〇
壹簞しばしば空し草顏淵が巷に滋し　半二五〇二
壹簞に宿る山雀　[illegible]九一一
潭滿依揚として　花[illegible]二五九三
標梅花の光を竝べては婆娑の春を　高八三六
碧玉の寒き蘆葉に戲す　梅枝四四四
嬖妾
　李夫人は本はこれ上界の　花[illegible]五九二
碧潭
　誰が家にか――の色を染め　山三一七七

碧漢
　巨水漫々として——天を浸し　白楽二四七
碧落
　上——下黄泉まで壊れ　湯三一六
霹靂雨を裂く、か如し　江島四九五
隔てなき友　松若六六四
隔てぬ心は神そ知るらん　正一三六五
隔てぬ誓の頼まん　放下二四〇
隔てぬ中の戯れ　[illegible]三四九
別行の子細　葵一六四・禪一六九四
別時の稱名　實一三五四
別當　元一〇七九
別當
　權現の社官——なれば　元一〇八四
　若宮——の申しにより　春榮一四一五
別當の坊に歸りけり　望三二六
別の御利益　衾七一八
へりぬり取つてうちかつぎ　伯六六〇
邊淮一片の風より起つて　歌三三八
卞和か玉も何ならず　江島五〇三
變化
　悪心外道の——となつて　鵜三九〇
辨慶　安宅ニテ七七・正ワキ一三五五・攝ワキ一六四七・橋シテ二五〇七・笛シテ二五三一・船辨ワキ二七六七

辨慶
　西塔の傍に住居する武藏坊——　船辨二七六九
　西塔の傍に住む武藏坊——　橋二五〇九
　西塔の武藏坊——　正一三五八
辨慶か杖にもあたらせ給ふ　安宅九七
變化の者なるへし　鵜三八五
變化のものの業とて　[illegible]三三一
邊際
　宮殿巍々として更に——もなく　湯三一一七
辨才天　江島ツレ四八九・竹生ツレ二〇三一
辨才天
　江の島の——　島四五一
　神を敬ひ國を護る——　竹生二〇四〇
　聰明勇進——の　江島五〇一
　胎藏界の——　[illegible]四五五
辨才天影向の地　江島四九一
扁舟
　范蠡か——に棹を移す　白楽二四七三
片時離るる事もなく　[illegible]三〇七
片時の暇とありつるに　生三七三
片時の暇といひつるに　松山鏡三六八〇
片時の暇をくれよ　唐八〇〇
片時も忘るる事はなく候　[illegible]三六一
變成
　龍女——と聞く時は　通盛二九〇〇

變成就の法かなし　[illegible]
變成男子
　龍女の如くわれもなす——　[illegible]
變成男子の姿　[illegible]
變成男子の願ひのままに　々三二九
變成男子われなりと　[illegible]
變身失せて　[illegible]
遍照於十方　[illegible]
遍照かつらねし　[illegible]
遍照か詠みし杖か　[illegible]
遍照僧正の浮世を厭ひし華頂山　[illegible]
邊土に於ては比良横川　[illegible]
邊土遠境の狂人となつて　[illegible]
辨の藏人
　宰相三位——　[illegible]
返報　七騎一一三三
片々たる金
　柳上に鶯飛ぶ——　熊野三三五一
變易
　常住無有——の波の讃　[illegible]

ほ

穂
　包めどわれも——に出でて　通小七六八
鳳管
　一聲の——は秋秦嶺の雲を　經三〇九〇
封漢といふ所にて　大瓶八一七六二
蓬窓雨したたりて　三井三〇〇二
北條殿
　鎌倉殿の御舅——　調二一三三
北條の四郎時政　[illegible]四五一
豐年
　雪落ちてげに——を見する御代　氷二六五四
　雪は——の御調物　[illegible]二三三
蓬莱界の勢ひを傳へ　江島四九二
蓬莱宮　楊所三一一三
蓬莱山
　龜鶴——と名づく　鶴龜四一七
蓬莱島の鬼　[illegible]四四一
蓬莱の秋の洞にひとり眺むる月影　[illegible]三一一八
蓬莱の島よりも鬼こそ出でて　[illegible]八三四四九
蓬莱の仙鄕　富士山二六八八

鳳凰
　孔雀——迦陵頻伽飛び廻り　西王一五七四
鳳凰もこれにめでて梧竹に飛び下り　[illegible]三〇九〇
外には仁義を旨として　元一〇八五
外には忿怒の相を現ず　[illegible]界一六二
北闕
　昨日は——に悲しみを被る士たり　道明一八三三
　昨日は——に悲しみを蒙る身　[illegible]二四五
北洲の千年終に朽ちぬ　[illegible]三一三三
木神
　山神——の氷室を守護し　氷二六六〇
北辰の拱ずる數々の　西王上歌一五六九
北辰は動かず　輪三三七八
木石心なしとは申せども　[illegible]一六四三
木石に異ならず　唐一八三〇・木賊三三一四
北庭樂を舞ふとかや　放生二四六七
牧笛の野人　木賊三三〇七
北斗の星の曇りなき　熊野三三四八
北方に金剛夜叉明王　道成一八〇一・[illegible]三六一九
北邙の煙を免れず　歌三六四
北邙の夕煙一片の雲となり　朝三三六三
北風
　胡馬——に嘶え　蟻三三一・知三三四三
北露
　秋の蟲の——に鳴くも　高砂一八六六
穆王
　周の——に仕へ奉る官人　西王八一五六八
　周の——に召し使はれし　菊八〇九
法華經　[illegible]三五二
法華經
　草木國土悉皆成佛の——　現一〇一六
法華經一部讀み覺え　小袖一一三六
法華經の譬喩品を高らかに讀み　東北二一九八
鉾
　多聞は——を横たへて　熊坂九三七
　旗を靡かし——を横たへ　西王一五七〇
矛のしただり凝り固まつて國と　逆三二二三
鉾の滴り露凝りて一島となり　[illegible]一五三
矛の露　逆三二〇八
矛の手風はやてとたつて　逆三三一三
矛の刃先
　紅葉の色も八葉の葉即ち——　龍田一九三一
菩薩
　歌舞の——（その項を見よ）
　極樂のお——の遊びと聞くものを　東岸二三七四
　天人も影向——もここに天降り　天三二四四
　二十五の——聖衆のみのりには　[illegible]一五六三
　女人は外面は——に似て内心は　現一〇一七
菩薩聖衆雲霞の如く　大會一七八五
菩薩の像體もこれ帝釋の御作　[illegible]九三
菩薩の坐像かと　松山鏡一六八一

菩薩の直道
　定業亦能轉は　盛三一〇〇
菩薩の舞
　天人聖衆——も　江島五〇三
菩薩の萬行
　方便の殺生だに——には超ゆ　放生二四五九
菩薩の六度
　方便の殺生は——に優れり　熊坂九三七
菩薩もここに來迎す　葵一六七・通盛二九〇九
星
　滿天に廻る——の如く　西王一五六九
星合
　涙もよしや——の　小督一一〇八
星月夜鎌倉殿の　小袖一一二八
星月夜鎌倉山に入り　千一七一〇
星月夜鎌倉山を朝立ちて　[illegible]三一三一
星月夜鎌倉山を越え過ぎて　六浦三〇〇九
星月夜はや鎌倉に　盛三〇九八
乾しぬべき日影も袖や濡らすらん　柏道行六五一
星の國にと行く雲の　龍虎上歌三三六四
星の祭
　七夕の——を急ぐなり　東方二一七八
星の祭を急がん　關寺一六一一
星は北にたんだくの　天二一四五
星も相逢ふ空なれや　天二一四五

暮春の風
　款冬[illegible]つて——に結び　雲[illegible]六四五
墓所（[illegible]を見よ）
細首
　兄弟の者の——を　[illegible]四三四
細谷川
　わが戀は——の丸木橋　通盛△二九〇四
細布
　狭布の——　錦木三三四四
細布衣陸奥のけふの寒さを　鉢二五五〇
細布とこ機ばり狭き布　錦木三三四六
細脛
　鶯の花踏み散らす——を　花一〇〇四
菩提
　上求——（その項を見よ）
　煩惱あれば——あり　東九六九・舍一八九・山三二八一
　煩惱といふも——なり　卒一七二四
菩提樹の木蔭　采四〇一
菩提心
　一念發起——　鐘一四〇七
　見我身者發——　安達二三〇・飛雲二六三〇
　心——を勸めて義珠に深し　夕三三一四
菩提涅槃に至らず　藍二四五
菩提の岸に寄せ來る　白一三四四
菩提の種
　開くる法の華心——となり　砧八三九

菩提の道
　蓮生の宿なから　[illegible]ふべし　[illegible]
菩提の道の鐘の聲　三井三〇〇〇
菩提もと植木にあらず　卒一七三四
螢
　刑鞭蒲朽ちて——空しく去る　山三一八〇
　飛ぶ——の雲の上まで往ぬべくは　[illegible]六一七
　風月の窓に月を招き——を集め　雷三三三七
　水暗き澤邊の——の影　葵一六三
螢に亂れつつ影もよしなや　[illegible]一九六、
螢火
　あらぶる神は飛び滿ちて——の　[illegible]月二九四三
　貴船の川瀨の——　鐵七一一
牡丹の花房にほひ充ち　石一三八〇
牡丹芳
　打てや囃せや——　石一三八〇
發願の鐘の聲耳に染みて　舊一五五六
發願の鉦うち鳴らし　白一三一七
法華
　五時といつぱ華嚴——般若——　大會一七八〇
　昔在靈山名——　高野六〇二・道明一六八〇・舍二三六八
　昔在靈山の御名は——一佛　[illegible]一五六三・盛三一〇三
　開くる——の花房も　夕三三一九
北溪
　殘星の影には——の水を汲み　檜三六三三

法華修行の身　現一〇一三
法華持經の身　芭二五三〇
法華讀誦の聲絶えず　夕三一七
法華讀誦の力にて　砧八三九
法華の御法の助け舩　鵜飼三〇九
法華はこれ最第一　梅枝四四三
法華は利益深き故　鵜飼三一〇
法性
　無明も――も亂るる敵　滿八五四
法性國の巽　卷二八一〇
法性眞如の寶の山　葛七〇〇
法性隨緣の月の影は八つの谷に　高野六一三
法性の空に至り　源氏一〇三八
法性の都を出て分段同居の境に　藍一四五
法性坊　雷ワキ三三三一
法性坊の律師僧正　雷三三三三
法性峯聳えては上求菩提を現し　山三一八〇
法勝寺法成寺唯喜見城の春の花　俊寛一四二七
發心　黒一五〇九
法身
　草木も――の姿を現し　放下二四四八
法身如來の法味　當一八五三
發心初讀の形　高野六一〇
法身說法の妙文　井六二四・東北二一九九
發心人に越えたり　座三一〇八
拂子を上げて虛空を打てば　東九七一
拂子をうち振つて世上に眼を　養一六三五
法體の身にて甲冑を帶し　賴三三〇八
發菩提心
　見我身者――　安達一三〇・飛雲二六三〇
缶の役者　道明一八三五
佛
　祇王祇女――刀自　佛二七九二
　稱ふれば――もわれもなかりけり　誓一五五六
　當一八四一
佛あれば衆生あり　山三一八一
佛あれば衆生もあり　東九七〇・合一三八九
佛御前　[illegible]シテ八五七・佛シテ二七八七
佛御前と申し白拍子　佛二七九〇
佛在世の御時は　合一三八八
佛在世よりは東北の靈峯　代一四八三
佛と現じ神となり世を守り給へる　巴三八〇
佛の供養怠くなり　大佛一七五一
佛の說きし法の場　輯上三三〇九
〔佛原〕　二七八七
佛の原(石川)　佛所二七八七
佛の原の草木まで　佛上二七九一
佛の舞
　一歩擧げざる先をこそ――と　佛二七九九
佛の御手の絲　井三四〇三
佛の御名
　ひとりなほ――を尋ね見ん　寶一三四七・誓一五六四
　佛二七九八
佛の道もよそならぬ神の惠みを　源太一〇六五
佛の昔神の今　道明一八三一
佛の會座に出來して　春日六七八
佛は常住不滅法界の妙體なれば　白髭一四六八
佛は衆生を一子と思し　土車二〇七五
佛は又常住不滅の相を顯し　松尾二八四六
佛はもとより舞の上手　祇八六七
佛佛を顯すも和歌の德　卷二八〇九
佛も成めの道は樣々多けれど　紅三〇八七
佛も神も同一體　大佛一七五三
佛も衆生も隔てなし　卒一七一四
佛も元は捨てし世の　熊野三三五一
佛も羅睺羅長子と說き　百二六七六
時鳥
　天つ空音の――聲鳴くか　[illegible]一九六七
　いくばくの田を作ればか――　飛鳥七三
　鶯のかひこの中の――　歌三五九
　五月山梢を高み――　[illegible]七三
　五月雨に物思ひ居れば――　飛鳥七一
　死出の山田の――　飛鳥七三
　月に鳴け同じ雲居の　[illegible]一四〇九
　初音ふり行く――　賀七三五

日頃經て待つ日は聞かす——。 [illegible]八八三・雲[illegible]六四[illegible]
時鳥名をも隱さで鳴く音かな 満八四六
ほととぎす名をも雲居にあぐるかな [illegible]三九一
子規の程經て今ぞ廻り逢ふ 歌三六二
時鳥花橘の香をとめて 草薙一聲八八一
程もなき舟の泊りや初瀬川 [illegible]一九九九
程もなく歸り紀の路の關越えて 當道行一八四一・鷗道行三三七九
穗波につれて浮き沈み 鳥二三九七
穗に出てそめし言の葉の 山三一七七
穗に出でぬれば尾花ともいへる 蘆五一
骨
　紅波骨を流し白炭——を碎く 蝉三三〇七
火闌降の命の釣針をかり 玉井一九七三
ほのぼのと明石の浦の朝霧に 草子一一八七
ほのぼのと明石の浦わの舟をし思ひ 作一五四七
ほのぼのとうつろふ富士を湖の 元一〇七八
ほのぼの見えし花の夕顔 半三五〇五
ほの見えて色づく木々の初瀬山 玉葉上歌一九六一
ほのめかし聞えしを 春三一九
火火出見の皇子（彥火火出見尊をも見よ）
　地神第四の—— 淡一四八
火々出見の尊
　地神第四の御代·——豐玉姫と 和三〇三三
　地神四代に至り——。 玉井一九七三
法螺貝 玉井△一九八一
堀江の川（大阪）
　舟競ふ——の水際に 隅一五三五・船橋二七五六
堀の埋草
　結ぶや——。 [illegible]三七三
母衣
　當代の弓取の——とはこれを名づけ 夜三六七
ほろほろ
　雨の足音——と歩み行く 大會一七八二
ほろほろとどろとどろと踏み 賢七四四
ほろほろはらはらいづれ砧の音 砧八二四
本意
　罷り歸れば——にあらず 夜三三六六
本有の靈光忽ちに照らし 卷三八〇九
本號は不死山なりしも 富士山三六八八
本覺眞如の都を出て和光同塵の 逆一[illegible]
本覺眞如の身をわけ陰陽の神と 杜六三七
本覺眞如の圓月に坐せり 當一八五三
本覺の都を出て分段同居の 嵐三一
本覺の和光に交じる塵の世を 御二九六七
本宮證誠殿阿彌陀如來の誓ひ 標二〇[illegible]六
本宮の峯
　春日山——に影向 [illegible]九九
本光普き燈火の 九世九[illegible]九
本願
　五劫思惟の——たり [illegible]七九
　この寺の——在家の[illegible]下は [illegible]四[illegible]
本願誤り給はずは 柏六六三
本願僞りましまさず [illegible]
本山
　わが——を立ち出でて [illegible]二二八
本山三熊野の山伏 [illegible]六四
本性にぞたり 卷二八一三
本性になりすまして [illegible]月[illegible]九四四
凡聖不二 [illegible]一六三五
本社賀茂の社頭· 代一四八一
梵釋十王閻魔宮 奉一七四一
梵釋四王の人天に降り給ふ [illegible]五[illegible]
焚燒
　一切の魔軍を——せり [illegible]一六三
本尊
　四方に——を懸け奉り 小[illegible]一二[illegible]
本尊は大悲多聞天 [illegible]九五[illegible]
本尊をつくづくとまもりて 望一〇五[illegible]
本堂の庭に楓の候が 六[illegible]二〇[illegible]
本宅 雨三二八
本地
　社々の御——を猶々敦へ 右三四六
本地覺王如來寂光の都を出て 藍二四四

本地救世觀音にて 道明一八三〇
本地十羅刹女の化現 大社五八三三
本地寂光の都を出て給ひ 松尾二六四六
本地寂光の都を出でて 日六三四
本地垂跡とあらはれ 松尾二六四七
本地大勢至
　南無歸命月天子 羽二四九四
本地大通智勝佛
　三島の明神 春栄一四一四
本陣 楠九一三
梵天
　修羅王の――に攻め上るを 俊成一四四五
梵天帝釋四大天王 江島四九五
梵天帝釋四天王 正一三六三
梵天帝釋の御憐みを蒙り 雷三三三七
梵天に誓し給へば閻王憐み給ひ 松山鏡二八七四
梵天王
　一者不得作 梅枝四四四
煩惱
　苦海の――を拂ひ 嵐三一一
煩惱あれば菩提あり 東九六九・金一三六九・山三一八一
煩惱業苦の三つの綱に繋がれ 春栄一四一三
煩惱といふも菩提なり 卒一七三四
煩惱の惡魔陰魔死魔 第一七七四
煩惱の犬となつて打たるると離れじ 通小七六八
煩惱の雲あつうして 東岸二一七一
煩惱の雲晴れて五常樂を打ち 富士太二七〇七
ほんのくぼに石踏が出來たる 八島△三一五五
本坊にぞ歸りける 道成一八〇三
本間三郎 檀ワキツレ二〇〇三
本文
　明鏡に――を思ふ心 元一〇八九
本文の心 實一三六〇
本來一物なき時は佛も衆生も 卒一七三四
本來空
　諸佛出世の―― 放生二四六一
本願
　常世か――佐野の庄 鉢二五六九
本領に立ち歸り 望三〇五六
梵王天より出でてあひ 金一三九五
本院
　新院――位を爭ひ 松山天二八八五

ま

盲龜の浮木優曇華の花 現一〇一五・實一三四八
盲龜の浮木ただ闇中に埋木の 觀二三八一
盲龜の闇路たどり行く 蟬一六七四
盲龜の我等まで 弱一三三一
猛火（ミヤウクワを見よ）
まうけで詠み出づる歌の道 梅四三八
設けたとしたりけれど 采四〇八
妄語
　飲酒を破りたは邪婬 ――諸共に [illegible]一〇八七
妄語綺語惡口兩舌は口にて作る罪 東岸二一七三
猛虎深山に風を起す [illegible]
妄語は申さず [illegible]八七三
妄語を仰せ候か [illegible]八五九四
妄想の雲 [illegible]二〇八
猛獸
　屍を爭ふ――は禁ずるに能はず [illegible]四九八
　骸を爭ふ――は失つてまた燒る [illegible]
申し請け
　箱王を――元服せさせばや 元一〇八〇
　某――遺跡を繼がせ申したき 春栄一四一〇

申し談すべき子細　草子一五九九
申し直し　小袖一二六八
妄執
因果の・・――　砧八三七
閻浮に歸る――の　熊五〇九
執心却來の修羅の――　熊五一六
娑婆に纏る――愛着　水無瀬二九三四
なほ――は有明の　三山二九二三
妄執多き娑婆なるに　忠度一九一五
妄執といひ因果といひ　船橋二七六〇
妄執の緣こそつたなけれ　經二〇八六
妄執の闇浮の世　大會五四四
妄執の雲霧を拂ふ　梅枝四四六
妄執の雲も晴れがたし　源氏一〇三七
妄執の瞋恚とて　八島二一五七
妄執の雪消えなん　雪三八七
妄執を晴らし給へ　野宮二四一八・山三一七二
亡者の來りたり　巴三三八〇
亡者の貴み給ひし觀音懺法　朝二六六七
亡者の爲に手向けつつ　經二〇八五
亡者は子供の手を取りて　水無瀬二九三三
亡者は誰にて　佛二七九〇
亡者は泣く泣く見送り　善知三八八五
亡者もや見ゆらんと　藤戸二七四九
亡者も喜び給ふべけれ　隅一五一二

妄言
心に思ひ口にいふ――の緣　江口四八五
孟宗は親のため雪中に入り筍を　曾一八八五
大臣融の大臣とは　融三三三
舞うては數へ　花一〇〇九
まうとの君の命に隨ひ　玉井一九八二
妄念
有相執着の――より起れり　土車二〇七八
起り易きは――　東北三二七
盲目とさへなり果てて　弱二一二八
盲目なる乞食　景六三八
盲目の足弱車の片輪ながら　弱二二三〇
盲目の暗き所の燈火　景六四六
盲目の身の習ひ哉　蟬二〇四九
魍魎鬼神妨げをなし　鐵七一〇
魍魎鬼神に至るまで汝の光に　小鍛二一一七
魍魎鬼神は穢らはしや　鐵七一二
蒙籠
燐業――として夜の色を使す　龍虎二三六九
魔緣
逆緣の餘りなれば――普近づき　松山天二六八九
さす腕には――を拂ひ　道明一八三七
離か島の苫屋形　善知三八八九
離が島の森の梢に鳥の宿し　鵜二三三四
離の荻花は林葉の秋を汲む　善二二一五

まかせ入れ
河水を水口に――　鵜二九六二
儚かなくに何を種とて浮草の　草子一二八四
儚かなくに何を種とて瓜蔓の　草子一二八四
罷り歸れば本意にあらず　夜三三六六
〔卷絹〕　二八〇一
卷絹
千疋の――を三熊野に納め申せ　卷二八〇二
眞の島(京極)　[illegible]三〇一
牧野の左衛門何某が子　[illegible]二四三六
眞木柱
七寶莊嚴の――のもとに行かん　源氏一〇三九
卷物に寫し　源氏一〇三七
卷物を又引き披き　俊寬一四三〇
魔境
若作障礙即有一佛　善界一六〇九
魔境に沈むその歎き　善界一六〇二
魔境の鬼　[illegible]一九七
幕うちまはし屏風を立て　紅三〇八四
眞葛が原の露の世に　隅一五一二
幕の内
打ち竝べたる――　夜三三六一
幕の内には矢を負ひ弓を張り　正△一三六七
枕
琴を――の短夜のうたたね　千一七一二

流れを——とし岩に口を嗽ぎ　三笑一二八三
比目の——の上には波を隔つる愁ひ　砧八二八
弱三三一八
枕刀をおつ取つて　夜△三三七一
枕詞
獨寝の——ぞ恨みなる　菊八〇八
枕定めぬ
君とわれとわれと君と　草紙二一五六
〔枕慈童〕　菊慈童八〇五
〔枕慈童〕　二八一五
枕づく
敷妙の——妻屋の内に　岡寺一六一九
枕に殘る薫を恨む
自害場は手を先たてて　東二一二四
枕の要文承ひたく　賀八一〇
枕の鐘や響くらん　三井三〇〇二
枕の夢
醉に臥したる——の　猩一三五三
枕や恋を知らすらん　[illegible]八四七
枕よりあとより恋の責めくれば　松風二八三六
枕を推すべき力もなく　皇九九三
枕をたたんで戦ひければ　巴二三八六
魔軍
一切の——を焚焼せり　善界一六〇一
眞か僞りか御覧候へ　羅三三五〇

眞か眞實か　[illegible]△二四一七
誠少き[illegible]江のすまで[illegible]　[illegible]二六〇二
誠少し
誠の[illegible]は得たれども　給三四四八
眞の淨土はいづくぞ　春日六七三
誠の友をしのぶぞよ　松蟲二八六〇
誠の友を尋ねん　百二六六九
誠の道
心たに——にかなひなば　[illegible]二六〇四
讃佛轉法輪の——にも入る　東岸二一七〇
誠の道に入らうよ　[illegible]一〇一四
誠は正直の頭を照らす　内三七七六
誠を致す志　[illegible]一〇六五
誠を[illegible]す[illegible]　昭一五九二
孫もあり曾孫もあり　[illegible]九〇二
眞拆
散るか——の葛城の　紅三〇八七
眞拆の葛青つづら來る人稀になり　大原五三八
眞拆の葛くる人もなく　[illegible]四三八
眞拆の葛長き代の　呉九八六・高砂一八六七
眞拆のかづら長く傳はり　[illegible]四〇九・[illegible]一四四四
眞拆のかづら長居に忘れあり　盛三一一〇
正清
鎌田兵衛——の嫁　烏三四二三
正清嫁　烏ツレ三四一三

正清とりつきて　[illegible]二六四
眞砂をとりて散米に　[illegible]四二五
正しき子にだにも[illegible]はれしと　[illegible]六四二
正成　楠ツレ九〇九
正成
楠——　楠九一一
正行　楠子方九〇九
正行を古里へ歸さばや　楠九一一
まさり草
盃に向へば色も[illegible]　松蟲二八五六
訪ふにつらさの——　楊三一二〇
猶喜びは——の菊の盃　[illegible]七八五
勝るも[illegible]　[illegible]一六八・[illegible]一三九六
呪ひの[illegible]　[illegible]八[illegible]二五一
眞柴
思ひ——を焚かうよ　葛六九五
眞柴の影　[illegible]一四九四
交はる塵の浮世にも　[illegible]四一四
眞清水
勇む心は——の　[illegible]一一三
魔障を和らげ　車九七三
魔[illegible]
數千の——をあまさずになさせけ　大會一七八六
増尾
片岡——常陸坊　安宅八二

片岡― 鷲尾さて忠信は　吉野三八六
鷲尾の十郎□□の頭義房　□一六五七
鷲尾の春栄も　春栄一四一六
鷲尾の太郎祐直　春栄一四〇〇
ます鏡
　いよいよ思ひは――　隅一五三四
　思ひは――　葵一六三
　思ひはいとど――　昭一五八七
　しんやうが持ちし――　昭一五八七
　底より曇り――　松山鏡二八七五
　見る度に變る姿や――　□虎二二六四
眞菅の笠　蘆五四
ますらをがやたけ心の梓弓　□上歌三〇八三
ますらをの花橋の　□九七
ませ垣
　間近に結へる――や　大原五三八
眞麻苧の絲を繰り返し　安達次第一一一
眞袖
　返す――を月や知る　雲林四六九
魔道
　悟りの道やそのままに――の巷　□□一六〇五
魔道に沈む群類を救はん　鵜飼三一〇
魔道にも心を寄せよ　車九六九
まだき時雨の秋なれば　融二三二八
又越ゆべしと思ひきや　賀茂物七五五
又ぬぎかへて夏衣　賀茂物次第七五三
また寝の夢を待ち給はば　雲林四六□
股野と組んで討たれ　七騎二二一
またふる年の心地して　□□三〇六七
又わが朝のその始め　小鍛クセ一二一七
まだ輪のうちにありとこそ見れ　車九六五
待ち得て今ぞ秋に逢ふ　關寺次第一六一一
間近き人に妻はれ給ひ　同八九六
間近く參れ老人よ　同八九八
松
　あの――こそは行平よ　松風二八三六
　相生の――　高砂一八六三
　おとづれは――にこと問ふ浦風の　高砂一八六一
　鶯の居る池の汀に――ふりて　鶴□三一八
　千秋の――が枝には萬歳の緑　松尾六八〇
　高砂の――の春風吹きくれて　高砂一八六〇
　千年の――は代るまじ　金八七三
　間へとも――は答へず　鐘四五□
　花の外には――ばかり　□歳一七九四
　様ありげなる――　松風二八二三
　尾上の――　高砂一八六一
松梅は殊に天神の御慈愛　老五六八
松蔭に煙をかづく尼が崎　雲林上歌四五九
松蔭に千代をうつせる緑かた　□□カ二二四〇
松が崎(京都)　氷二六五六
〔松風〕　二八二一
松風　□□一八二二
松風
　眞如平等の――は八葉の峯を　□□六一
　花の跡訪ふ――や　朝二三九
　峯の嵐か――か　小督一一〇三
松風慣なし　岩二九一
松風寒きこの原の　佛□□二七九六・□□□三八六三
松風ともに吹く笛の　山□□□□六
松風にも岩越す波にも　碇二三八
松風の上の□波　□□四八
松風の花を薪に吹き添へて　石□□一三七五
松風の吹くとても業障の薄雲に　源氏一〇□九
松風は琴を調め　白□四七四
〔松風村雨〕　松風□□八二一
松風村雨とて二人の海士の舊跡　松風二八二四
松風村雨二人の女の幽靈　松風二八二三
松風も散れば形見となるものを　源氏一□〇二四
松風ものどかに立つや　岩□八七
松風をのみ聞き馴れて　高砂一八六一
松が根の岩間を傳ふ苔筵　□上歌五二五
松が根枕敷にて　八島二一五六
松皮は小笠原　□二三二
待つかひもなしはや歸れ　□上歌二〇四七
松柏背に生ひ伏して　大□二五一三

松君子の徳を彰す　高砂△・八六九
末後
　因果の果をば――まで一句の　花一〇〇三
末期
　既に――と見えし時　隅一五二七
待つことありや有明の　右上歌三四七
松坂（京都）
　粟田口――　烏三四一七
　今は誰をか――や　蟬一六八一
　ここは誰そか――や四の宮河原　盛三〇九七
　身は一人われは誰をか――や　鸚一六
松寒うしては風旅人の夢をも破る　一角二七八
松島（宮城）　晋一六四九
松島平泉を見ず候程に　船橋二七五五
松島や小島の海士の月にだに　松風二八六八
松島や小島の苫屋うちゆかし　寺知三九〇
末社
　神の――と現れ　右三四六
　北野の――福部の神　輪△三八〇
　紅梅殿も老松も皆――と現じ　老五五八
末社神
　嵐狂言三〇一・鵜祭狂言一四一一・[illegible]狂言四四九
　賀狂言七三一・源太狂言一〇六一・白髭狂言一四六一・第狂言一七六七・道明狂言一八二三
　白楽狂言二四六九・飛雲狂言二六二三・富士山狂言二六八三・紅狂言三〇七九
末社の神
　熱田明神に仕へ申す――　源太△一〇七〇
　伊勢大神宮に仕へ申す――　第△一七七三
　江の島の天女に仕へ申す――　鱗△四五四
　賀茂の明神に仕へ申す――　賀△七四一
　氣多の明神に仕へ申す　鵜祭△四一九
　七社勸請の靈神に仕へ申す――　道明△一八三四
　白髭の明神に仕へ申す　白髭△一四七一
　住吉大明神に仕へ申す　白楽△二四七八
　淺間大菩薩に仕へ申す　富士山△二六九二
　武内と申す――　紅△三〇八八
　三熊野の權現に仕へ申す　飛雲△二六一七
　三吉野の藏王權現に仕へ申す　嵐△三〇八
末社は各々出現して　放生二四六五
末世一代教主の如來も　熊野二二四四
末世相應の御誓ひ　弱三三三
末世といひながら神の威光は　弓三三三
末世にてはなかりけり　盛三一〇四
末世の隱所　高野六二一
末世のかうそ　花一〇〇三
末世の奇特ぞと思ひながらも　檜二六二九
末世の奇特に留め置き　羽二四八八
末世の衆生濟度のため　[illegible]一五六六・鵜三二七六
末世の衆生の願ひをかなへ　三輪二九八四
末世の折を得て　舍一三八九
松高うしては風旅人の夢を破る　晋七九四
松高き枝も連なる鳴の嶺　右上歌三二五
末代値遇の御結縁　道明一九三一
末代の御恥辱　箙七二七
松竹鶴龜の齢を授くる　老五三三
まつとし聞かば今歸りこん　松風二八三七
待つとは知らでさを鹿の　田一九九九
松とは盡きぬ言の葉の　高砂一八六四
松ならでまた煙と見ゆる　須一四九四
松に音する習ひあり　隅一五二一
松にたぐへて千代までも　岩二八八
松に殘る白雪の　泰一七三六
松に吹き來る風も狂じて　松風二八三八
松の嵐もいつしかに花の跡とて　花筐二五八三
松の風
　澗底の――一聲の秋を催し　東北三〇〇
　澗底の――一聲の秋を催す　西行一一七一
松の風千代の聲のみいやましに　放生二四五七
松の風終には花の跡とはん　泰一七一七
松の木柱に竹の垣夜寒さこそと　松風二八三一
松の梢
　藻波のかかれる――をは　錦戸二七一
松の聲
　衣に落つる――夜寒を風や　砧八二三
　萬歳をうたふ――　養一五三

松の小枝は琴を調め　樂四二〇
松の精
　相生の——夫婦と現じ　高砂一八六七
松の葉白き吉野山　二人三七一三
松の葉色も常磐山　弓三一二四
松の葉色も時めきて十廻り深き　呉五一四
松の葉色も春めきて　楊一一一八
松の柱や竹編める垣　紅一〇五一
松の葉の千代萬代の末かけて　難波四一四
松の葉の散り失せずして色は猶　呉九八六
　高砂一八六七
松の葉の散り失せずして石橋の　石四〇九・藤二一一〇
松の葉の散り失せず末の世までも　雲林四六九
松の葉の散りも失せず石橋のかづら　俊成四四四
松の葉の散り失せぬ　關寺一六一五
松の葉を好き者を身に着て　角六八一・東方二一八一
松の響か人か　雲林四六〇
松の隙
　住吉の——より眺むれば　梅枝四四六・富士太二七〇一
　弱三三二五
松のひま行く捨小舟　岩二九一一
松のむら立ち霞む日に　松風二八二九
松の山家(新潟)　松山鏡所二六六九
松の山家と申すは無佛世界の所　松山鏡二八七六
松の雪だに消えなくに　二人三七一三

〔松尾〕　二八四一
松尾(京都)　松尾所二八四一
松の尾北野や賀茂の　雲雀一六〇六
松の尾の嵐山　嵐三三九
松の尾平野　正一三六四
松尾明神　松尾二八四一
松の尾の明神は客神にて　松尾二八四一
松の尾小倉の里の夕霞　百二六七八
松は變らぬ習ひぞかし　春榮一四〇八
松はしるしもなかりけり　三輪二九八三
松は立枝の青和幣　志一三〇四
松は千代まで　草子一一九八
松は十かへり千代の秋　道明八一七
松は常磐の聲ぞかし　羽三四八七
松は久しき例なり　三笑二六八八
末法に生を受けたり　東岸二一七一
松は萬木に勝れて　高砂一八六六
松はもとより常磐にて　鉢二五五八
松原の深緑なる木隙より　住一五四四
松吹く風も法の聲　身次第一九五一
〔松蟲〕　二八五三
松蟲
　秋の野に人——の聲すなり　松蟲二八六〇
　機織——きりぎりす　錦木二三五五
松蟲鈴蟲きりぎりすの鳴くや　蟬一六八一

松蟲の聲りんりんりんりんりんとして　松蟲二八六六
松蟲の音に誘はれて市人の身を變へ　松蟲二八五九
松蟲も音にだに立てぬ深山櫻　雲九五三
松蟲の音にも友をしのぶらく　松蟲二八五四
松蟲の音はりんりんとして　野宮一四一九
松も椎もまじる木の　雲一四七六
松も千歳の緑にて　花筐五八四
松本(滋賀)
　風は上なる——や　鸚四四一
松も檜原も多けれども　志一三九五
松も昔の友ならで　高砂一八六一
〔松山〕　松山天狗所二八八二
松山(香川)　松山天狗二八八三
松山
　讃岐には——　花一〇〇八
〔松山鏡〕　二八六九
〔松山天狗〕　二八八三
松山や袖に涙の波越えて　現一〇一七
待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば　三井一〇〇二
松浦(佐賀)　籠所一八八五
松浦潟(佐賀)　白樂所二四六九
松浦潟
　佐用姫が——　江口四八三
　忍びし夫を——　唐一八〇八
松浦潟西に山なき　白樂二四七二

松浦潟唐土船を慕ひしに　玉葛一九六三
松浦佐用姫が唐土船を慕ひ佗びて　七騎一三一五
松浦佐用姫もわが身には　俊寛一四三三
松浦の川や西の海　籠三三九七
松浦の里を立ち出でて　女三四八九
松浦何某　籠[illegible]二三八五
松浦箱崎の誓ひも　夕三二一〇
松浦舟
　今や今やと―　白楽二四七四
待つらんものをあら急がしや　通小七七三
まつりごと
　神を齋ふや―げに神感も　巴二二七八
祭事
　神徳長久の恵みを仰ぐ　御二九六三
松若　谷子方一九三七・木賊子方二二〇三
松若
　[illegible]生の　[illegible]九四二
松若の母　谷[illegible]一九三七
松井田(群馬)
　上野の―　鉢二五六九
松をさへ皆櫻木に散りなして　東北[illegible]二一六八
松を大夫といふ事　老五二八
松を大夫と申す　老五二八
松を擁つて頭顧深く[illegible]　[illegible]一六八二
[illegible]

櫟香椎――　通小七六五
萬里小路中納言　大原ワキ五三五
窓
　一念の――の前　大原五四五
　九識の――の前　[illegible]一六四
　心観の――に向ひ　身二九五一
窓の雨
　打つ音は――の　歌三六七
窓の梅
　身を知るや住む蘆の屋の――　富士山二六八七
　庭の椎木　水無瀬二九三一
　匂ふや――も咲き　小塩三四六〇
窓の梅の北面は雪封じて寒きにも　鉢二五五七
窓の梅園の桃　通小七六五
窓の雪夜學の人の燈火も　竹雪一八八五
まとはされ
　花鳥酒宴に　十車二〇七三
間遠に織れる藻衣　[illegible]三八七
間遠に結へるませ垣や　大原五三八
眞鳥
　生贄の――もここに現れ　[illegible]四二一
眞鳥にと罷り出で　江島一五〇一
まどろむ夜半ぞ命なる　安達一〇九
圓居
　木蔭に――して　蘆五八
　山陰の一宿りにさらりと――して　安宅一〇一

間なく時なく思ひはゆるかな　葛六九五・代一四八八
眼高し
　世上に――　忠度一九一六
まなごの莊司といふ者　道成一七九九
眼の光
　邪見の――　満八五四
眼はさながらあかがちの　大蛇三五一二
眼は日月
　角はかぼく――　紅三〇九〇
眼もくらみ心も亂れて　[illegible]二七八四
無目籠　玉井一九七四
眞鶴
　埒をたたぬ――の翼をつらぬる　[illegible]五一三
眼蓋を開く事なし　[illegible]二四二
招かれて山のかせき　小袖一一三
招き返す舞の手　富士太二七〇八
招くも追風　[illegible]八二一
眞野の入江の鶉呼ばな　[illegible]〇三四
眞野の入江の道すがら　白鬚一四六四
廻らば廻れ水車の[illegible]の　放下一四五〇
舞　[illegible]一三二一
舞
　移り――　(その項を見よ)
　戯れの――　[illegible]一五四六
舞延年の時の若　[illegible]一〇三

舞の衣裳　梅枝四三九
舞の臺の飾らひ　梅四三三
舞のかざしのそのひまに　小袖一一三八一
舞の装束
　これこそ富士の―　富士太鼓七〇三
舞の装束ひきつくろひ　吉備三三八三
舞の装束など勝手の御前に納め　[illegible]二七七
舞の袂
　千代萬代の――。　仕一五四[illegible]
舞の手
　擧足下足の――を盡し　[illegible]八一[illegible]
　よそ目は――交るは袖の　仲三三三
舞の拍子　長生二四六七
舞働
　角八[illegible]・大江五七[illegible]・大社五八五・頼五九八
　春日六七九・合六八七・賀七四三・金八七七
　[illegible]九[illegible]九・[illegible]九六一・皇九九七・[illegible]一[illegible]三
　[illegible]一一[illegible]・[illegible]一二九五・白[illegible]一四七四・[illegible]一[illegible]六
　[illegible]六・第一七七五・大會一七八六・玉井一九八[illegible]
　竹生二〇四一・張二〇五二・土蜘二〇六六・寢二四
　〇三・飛雲二六一九・船辨二七八四・松山鏡二八
　八〇・松山天二八九二・和[illegible]〇三七・紅三〇九一
　[illegible]三三五五・[illegible]三三七〇・[illegible]三三八三
舞人はこの尉　白樂二四七八
舞姫
　薄紫の雲の羽袖を返す――。　[illegible]七三三
[illegible]の舞も立たでや　[illegible]六八七
舞姫の小忌衣　[illegible]二一[illegible]六
[illegible]傳一如　[illegible]六[illegible]五
前は海後は山　[illegible]五一[illegible]
前輪
　鞍の――に押しつけ　實一三六一
幻
　尋ね行く――もがなつてにても　楊三二一六
幻に生まれ來て別るれば　[illegible]七四二
まぼろしの常なき身にて經政の　經上歌二〇八七
幻の夢も幾度ぞ　[illegible]八六五
繼母御　竹雪一八七九
まめなる所とて初花薄露重み　祇八六五
まめ男
　誘ひ出づるや――。　雲林四六八
まめ男言葉の露の玉章の　井[illegible]四〇七
守刀
　御――にとて　烏三四二三
守小袖を木曾に屆けよ　巴三三八六
守の神
　草の蔭にて――となる　[illegible]二四〇
守佛の觀世音　春榮一四一三・夜三三六九
摩耶の誕生伽耶の成道　春日六七五
摩耶夫人の孝養のお爲たれば　百二六七九
黛
　[illegible]輔[illegible]　[illegible]
　柱の[illegible]　[illegible]二七[illegible]
　柱の[illegible]丹花の脣　[illegible]
　玉のかんざし柱の[illegible]　[illegible]一九八[illegible]
黛も亂れ[illegible]みて　[illegible]一六八[illegible]
眉根黑き亂れ髮　[illegible]
眞弓槻弓年を經て　[illegible]四一二
迷は[illegible]行かん　[illegible]三二〇四
迷は[illegible]　[illegible]七四
迷ひ
　悟りをも――なき道へ[illegible]　[illegible]一五五六
　十惡八邪の――の雲も空晴れ　[illegible]一五六四
迷ひの雲も晴れ難き　[illegible]七九[illegible]
迷ひも照らさせ給ふ御誓ひ　井上歌三四〇三
迷ふも悟るも心　熊坂九三七
稀に逢ふ時はなかなか夢の心地し　雷三三三五
客人（まれびと）
　御――を慰めん　[illegible]一四八
　影珍らしや――の　雷三三三五
　金銀珠玉をかの――に捧ぐる　竹生二〇四一
　今夜の――をば　[illegible]五三一
客人も御覽ずらん　[illegible]一[illegible]五一
まれ人を慰めん　[illegible]六八一九
まろがたけ
　筒井筒井筒にかけし――。　井[illegible]四〇七

まろ寢
　百夜も同じ——せんと詠み　鉢木二三五七
魔王
　二者帝釋三者——。　梅枝四四四
　第六天の——。　第一七七四
參り下向の人々　竹生△三三九
參り下向は夥しき事にて　百△三四八
萬葉
　古今——の勅撰　草子二一八九
萬葉集
　かの歌は——にありつるを　梅四二六
　高砂といふは上代の——の古の義　高砂一八六三
萬葉集の讀に東路の　船橋二七五七
萬葉第一に出だされたる三山の　三山二九一五
萬葉に入筆したると　草子二一九二
萬葉の草子　草子二一八四
萬葉は奈良の天子の御宇　草子二一八九
滿月眞如の影となり　羽衣二九四
滿月の山を出で碧天を照らす　松山鏡二八八〇
萬行
　拜をすすむる——の際　鶴二〇九七
萬歳樂(バンゼイラクをも見よ)
　祝ふ心に——。　春榮一四一八
　千年の鶴は——と謠うたり　翁八
　行く末の幾久しさぞ——。　岡寺一六二一
萬歳樂には命を延ぶ　高砂一八七三
萬歳樂には命を延ぶる　道明一八三七
滿座の輩一同に　譽三三五一
滿參　生二六五・吉三三三
滿山護法
　十萬普賢——。　卷二八一二
滿山護法一列し　吉三三三四
萬秋樂と申すは兜率天の樂にて　代一四八八
慢心の心路跡たからんや　車九六九
慢心の幕をば昔わか道に誘引　早一五九七
曼荼羅
　胃穴道にも九曜の——の　弱三三一九
　九會——の種の縁起　安宅九一
　當麻の——の謂れ　雪一八四六
　御嶽は金剛界の——華藏世界　卷二八一〇
〔滿仲〕　仲異本三三〇七
滿仲　仲ツレ三三〇七
滿仲
　多田の——。　仲三三〇九
滿天に廻る星の如く　西王一五六九
萬年の齡
　龜は——を經　鶴二〇九八
まんまと御側を拔けた　安達△一一七
まんまと續いた　烏△一四三九
滿目青山動搖せり　田一九九九
滿目青山は心にあり　鶴二二三六
漫々
　海雲——として　檜三六二四
　巨水——として碧浪天を浸し　白樂二四七二
　漫々とある大海の上　白鬚一四六八

み

御あれ
賀茂の――のひをりの日 綺三四四八
三色組の烏帽子懸緒取り出たし 烏一四一一
御内
祕藏に思せし――の人 揺一六六三
我等もその――の者 賞三二八
御内方の古屋五郎 夜三二七四
三浦の介上總介兩人に綸旨をなされ 袈一六四五
御影
人丸赤人の――を掛け 草子一一八六
見え隱れなる川隈に 江口四七八
見えつ隱れつ面影の 隅一五三一・朝三三六九
御祖の神德仰ぐべしや 賀七四二
磨かぬ露の玉ぞ散る 木賊三三〇七
磨かれ出づる秋の夜の月 木賊三三〇七
御垣もつづく片そぎの 岩二九一
御垣守
大内の―― 源太一〇六六
行末久に―― 老五三九
御垣守衞士の焚く火はおためなり 鉢三五五八

水隱れて住む 知三三四四
御影山(奈良) 鳥三〇五
御影山
雲居はいづく―― 花筐三五八六
御代を守りの―― 松尾六八五〇
御影曇らで君守る 鵜祭次第四一三
御影を仰ぐこの君の 放生次第三四五五
三笠の森に花降りて 佐一三七四
三笠の森の蔭頼む 大佛上歌一七四六
三笠の森の草木の 春日上歌六七三
三笠の森の松風も 春日六七一
三笠の山(奈良)
慈悲萬行の日の影は――に 采四〇〇
春の日の――に影高き 大佛一七五三
ふりさけ見れば春日なる― 谷一九四四
三笠の山陰の月かも 野守三四三四
三笠の山にのどかにて 野守三四三四
三笠山(奈良)
影さす月の―― 佐一三七七
奈良坂越えて――春日の里 春日六六九
萬歲をよばふ―― 佐一三七三
三笠山今ぞ榮えんこの岸の 海上歌一七三
三笠山佐保の川をうち渡り 百三六七八
三笠山茂き梢も楢の葉の 朝一一四三
三笠山に五天竺を寫し 春日六七五

味方の勢はこれを見て 軍上歌一一六八
三日月
出づるぞ名殘――の 海一七一
三日月の影を舟にも譬へ 屋一三三四
三日月の曇らぬ人の心 屋一五九三
三日月の宵に待ち明けて恨み 松山鏡一八七九
帝深く歎かせ給ひつつ 花筐一三五九三
みかの原(京都)
都出て今日――泉川 谷一九四四
三河の守
文屋の康秀が――になりて 關寺一六一六
三河の守範頼 大原五三七
御溝の水に戲れ戲るる 西王一五七五
身代り
弓矢取る身の御――に立つ事 揺一六六四
身代りに立ちてこそは二世のかひ 籠三三九六
三歸の翁 寝シテ三三九三
三歸の翁
三度若やぐ故により――と名つけ 寝三三九九
三歸の翁と申す者壽命めでたき 寝三三九五
三上山(滋賀)
都の富士と―― 雷三三三四
御狩の御遊をすすむ 草薙八八七
御狩場
餘の御字――を始め給へり 小傳一一一七

見聞く人心空たる雲水の　東上歌九六七
見聞くも同じ人道の苦しみ　大原五四八
御酒と聞く名もことわりや　猩一三五一
御酒と聞く名もすさましく　大瓶一七六三
右巴は小山の判官　朝一二一三
汀に落ち来る風の音　白鬚一四〇七
汀の蘆は笛を吹き　梅四三〇
汀の氷
　峯の雪——踏み分けて　雪三一八八
汀の氷踏み分けて道は迷はずと　采三一九
汀の千鳥鳴く田鶴も和光の影の　嵐四五三
御酒を愛せん　松蟲一八五六
水草
　池は——に埋もれて　夕三一八
三國の九郎　熊坂九四二
三國の湊(福井)　安宅八三
三熊野(和歌山)(クマノ・ユヤ・ミシゲンをも見よ)
　千疋の巻絹を——に納め申せ　巻二八〇二
　本山——の山伏　飛雲三六一四
三熊野三所権現　飛雲三六一八
三熊野に参り　皆一八四一・朝三三七九
三熊野に参り一七日参籠　柏一五五二
三熊野の御夢想に四句の文あり　柏一五五四
三熊野の権現へ歩みを運び　柏二〇二五
三熊野より出でたる客僧　船橋二七五五
三熊野を勧請申し　俊寛一四二四
三熊野を信じ　同二一七
御教書
　安堵の——を賜はり　望三〇四五
　頼朝より——をなされ　錦戸三三六四
みけしの綾の鼓　綾一九三
未顕真實の方便　身延二九五四
神子　内ツ——三七一・大社五七三・巻二八〇一
三越路
　雪——の白山は　歌三五四
御輿岡(京都)　右三四六
みことのりの御名を日本武と申し　小鍛一二一七
神子物狂　巻二八一二
御崎(島根)
　出雲の——に跡を垂れ　大社五八二
御先を拂ふ　梅四三三
御侍御笠と申せと詠み置きつる笠　鉢一六七七
實さへ花さへ常磐に賣る　草紙八八一
操
　宮君の——を知るもただ　水無月二九四七
見しだにも覺えぬほどに　東岸四八〇
見し玉だれの内やゆかしき　關一九
見じといふ人こそ憂けれ山里の　鉄二五五七
見しにもあらぬ面影の　賀茂物七五二
見しにもあらぬ面忘れ　田六六四
見しは程なきあはれの色　小督一一〇七
三島(静岡)　春栄付一三九七
三島
　鹿島——諏訪熱田　白楽二四八〇
三島(神奈川)
　瀬戸の——へ参らばやと　放下三四四一
三島の里(静岡)
　伊豆の國府　春栄一四〇〇
三島の明神(愛媛)
　出雲路の大明神伊豫の——と　大社五七九
三島の明神本地大通智勝佛　春栄一四一四
三島の宮の御利生　春栄一四一九
御注連
　引くや——の名は誰と　大社五八〇
御注連縄長くも代々を守るなり　鶴四五二
御注連縄長くや世をも暮らまし　采一一六
御注連の縄の引き立て解かん　巻二八〇六
御簾几帳も下りたり　小督一二三
御簾の追風匂ひ来る花の都人に　千一七〇五
見すもあらず見もせぬ人の戀しくは　右三四四
見すもあらず見もせぬ人や花の友　右三四五
御幣
　戀せじとかけし——も大幣の　水無月二九四一
　白木綿の——も頼もしや　大江五五六
　白木綿花の——して　俊寛一四二五
御裳濯川
　秋津洲もたき　賀七四

木綿四手かくる　[illegible]一九四〇
御祓川水も緑の山かげの　水無月ツカ三九四五
禊[illegible]　三輪ハ九八一
禊[illegible]大祓　[illegible]一九六二
禊祓大祓
愛宕山の傍に住む――　[illegible]九六八
三十一文字の詠歌の始め　大蛇三五〇九
三十一文字の神も守護し給ひ　[illegible]二九八
みそぎ池(京都)
思ひに沈む――生けるかひなき　鐵七〇六
彌陀
己心の――の國　實一三四六
釋迦は遣り――は導く一筋に　柏六五九・當一八四二
天神の――一體の御値遇　道明一八三〇
唯稱――得生極樂　大原四三・柏六五八。土車二〇七九
彌陀一教　當一八四五
彌陀一致
餘經の後の世も――　誓一五五七
彌陀有緣の教主　江島四九八
御堂關白道長の息女　藤氏△一〇三三
御堂の關白この門前を通り給ひ　東北二二九八
御堂の內陣へは叶ふまじ　柏六五八
彌陀光明にしくはなし　姨三四八二
御獄精進
三吉野や――の御嶽にて　半二五〇四

彌陀は金剛界の曼荼羅[illegible]世界　[illegible]八二〇
彌陀誓願の誓ひかや　[illegible]九七
彌陀頼む心に誰も一[illegible]の　[illegible]一五五四
彌陀頼む頼みある三つの御山を　[illegible]一五五二
彌陀頼む人は雨夜の月なれや　[illegible]二六七[illegible]
深谷の水
心を汲みえし　[illegible]一四[illegible]七
彌陀如來
今西方の――　[illegible]一六六
生身の――　[illegible]六五八
南無阿彌陀佛――　清八五三・誓一五六一・刈二五七七
彌陀の國
聲清光に――　春榮一四一四
彌陀の國涼しき道ぞ頼もしき　誓一五五七
彌陀の誓ひを頼みつつ　鉢二五七六
彌陀の力
一度に頼む――　百[illegible]六七[illegible]
彌陀の劍
罪を斬る――の　山三一六八
彌陀の悲願には破戒闡提なきも　土車二〇七八
彌陀の悲願を頼ますは　[illegible]三〇二
彌陀の御國も極樂の東門に　[illegible]三三五
彌陀の御國もそなたぞと　佛二七九三
彌陀の來迎　實一二四八
彌陀の利劍　[illegible]九[illegible]七

彌陀の教へ
ただ一聲のうちに生まるる――　[illegible]三〇一
直に導く　[illegible]
春の夜の闇をも照らす　誓一五五五
一聲の――を頼ますは　當一八四三
彌陀は母にてましませば　[illegible]六
三度着やぐ故にこの三歸の[illegible]し　實三三九九
彌陀佛
一念――即滅無量罪　實一三五七・當一八四二
一念　即滅無量の罪障　教一三三
彌陀佛助け給へと一念して　錦戸上歌三三七〇
彌陀佛の御影も普く拝ませ給へ　[illegible]七[illegible]
御田居守今日は五月になりにけり　飛鳥夕七七二
彌陀來迎の直路　山三二六九
御手洗江の里(山口)　[illegible]四八[illegible]
御手洗
賀茂の――いさぎよき　代一四八三
賀茂の山蔭[illegible]の影映り映ろふ　賀七四[illegible]
心も澄める――の　生三六六
御手洗川
中賀茂の――に集ふ君　水無月三九四二
御手洗川に禊せじと誰かいひけん　[illegible]六〇三
御手洗の聲も涼しき夏陰や　富士歌七一五
御手洗や清き心に澄む水の　賀一聲七三四
亂る心
御劍の刃の――なりけり　小鍛一一一四

亂るる戀の淵はありけり　松風六八六
亂るるは柳の髮か春雨の　籠一聲三三九四
亂　蘆一三三三
亂れ笠亂れ髮かかる思ひは　富士太二七〇八
亂れ心の花かづら　紅三〇八七
亂れ心は君の爲　花筐二五九〇
亂れ戀
　心もともに――の　葵三六〇四
　何をしのぶの――　綾一九三
亂れ戀になして思ひ知らせ　戀一一六一
亂れ墨
　眉根黑き――　百二六七三
亂れそめにしわれからと　錦木三三四五
亂れんと思ふわれたらなくに　小鹽三四六七
道ある心　木賊三三一〇
道ある時代なりけり　杜二六一六
道ある友
　世もたけ心さえて――の　松蟲二八六五
道ある御代ぞめでたき　代一四七八
道ある御代の花見月　志次第一三九二
道あるや旅の關の戸明け暮れて　木賊道行三三〇五
道あるや時代なるらん　菊八〇七
短き袖
　麻衣――を返し得ぬ　橋二六三四
短夜
　琴を枕の――のうたたね　千一七一三
短夜の夢かや見れば驚くは　竹生上歌一八八〇
道窮まりなし
　路中に路多うして――　熊野三三四七
道眞　雷シテ三三三一
道之
　とても歸らぬ――の　清八四二
道之の露
　心の奥の信夫山忍びて通ふ――の　定二〇九
　誰に問はまし――の世の　東北三一九五
道之の露の命　綾一九三
道之の露の憂き身の置き所　泊六六一
道之の露も草葉も五月雨の　飛鳥六七
道之の露踏み分くる通ひ路の　松山天・蟬二八八六
道芝の露をば誰に問はまし　錦木三三四九
道之を誰踏みならし通ふらん　蘆一三一七
道せばからぬ大君の御影の國　土車二〇七五
道狹き御身となりてこの山に　二人二七一九
道せばきたは安からぬ龍の中　籠三六九二
道せばくたらぬそのさきに　船辨二七七〇
通俊　[illegible]一三一五
通俊
　高安の里に左衛門の尉――　弱三三一七
三千年に咲く花心の　西王一五七〇
三千年になるてふ桃の今年より　西王上歌一五七二
三千年に花咲き實なる桃花　西王一五七一
三千年に一度花咲き實なるこの木　東方二八三二
道長の息女　藤氏へ一〇三
道なしとても踏み分けて　求上歌三〇六四
道成　小鍛ワキツレ一二一二
道成
　一條の院に仕へ奉る橋の――　小鍛一二一三
道成興行の寺なればとて道成寺と　道成一七九五
道成の卿うけたまはり　道成ワカ一七九五
陸奥紙に書き殘す　高野六〇七
陸奥の淺香の沼の花かつみ　花筐二五九〇
陸奥の安達が原にあられとも　黑三三五一
陸奥の安達が原の黑塚に　安達一一八
陸奥の安達が原の黑塚や　現一〇一七
陸奥の安達が原の塚にこそ　大江上歌五六三
陸奥の狹布の細布胸合はず　橋二六三四
陸奥の忍ぶに堪へぬ雨の音　下上歌一七〇三
陸奥の忍ぶもぢずり誰も昔　千四〇八
陸奥の忍ぶもぢずり誰ゆゑ　錦木三三四五・小鹽三四六七
陸奥の外の濱なる呼子鳥　善・蟬二六八
陸奥にいづれはあれど鹽竈の　融三二三
道のへに清水流るる柳蔭　遊上歌二一九七
道のべの便りと頼む木蔭さへ　藍三三三
道のべの便りに立ち寄り給へ　紅一〇八五
道のべの便りの櫻折あらば　高野六〇八

道のべのたよりの櫻折り添へて　山一七九五
道の邊の土となりて春の草のみ　同一五一〇
道の道たる時とてや　小督九七七
道の道たるは常の道にはあらず　草子二一八四
道橋
　惡しき——と頼むべし　景六四六
道は洗はず
　汀の氷踏み分けて——　新三一九
道道たらば位山　同八九二
道もさりあへず散る花の　未一二〇四
〔通盛〕　六八九五
通盛　通盛三三六八九五
　越前の三位——　通盛二九〇六
通盛は討たれぬ　通盛二九〇三
御帳の内にぞ入り給ふ　同四五六
道行人
　いかにあれたる——　櫻一三九・上東二〇七一
　自筆の——に言傳てて　同一五一一
道を變へ人目を忍び　同三八
道を極め名を立てて　山三一七
道を嗜む志誰もかうこそ　草子二一九六
道を願ひの絲はへて　關寺上歌一六一三
微塵になさんと　紅三〇九一
水

秋の月下化冥闇の——に宿る　西行一二七一
誇ふ——あらばいたむとこそ思ふ　一六一六
石に精あり——に音あり　一六四
因果の——を汲み　三六三
岸花紅に——を照らし　櫻一三六
五濁の——に影清し　花一〇〇五・田一九八九
雅頌の聲には北溪の——を汲み　三六三
年を經て花の鏡となる——は　一九八七
人間の——に南滄は北に　天三四五
　身は浮草を誘ふ——たきこそ　草一七三〇
水至つて淸ければ魚住まず　竹生人二四六四
湖の七度まで蘆原になりしをも　白鬚一四六九
湖向ふ鏡山　第一七六九
水——回として露潤す黄菊　花六八一七
水鏡
　左に影を——　井四〇六
水鏡を見給へ　野守二四二八
瑞垣の年も經にけり白髭の　白鬚上歌一四六七
瑞籬の久しき御代を守り給へ　住一四四一
瑞籬の久しき世々のためし　岩六八八
瑞籬の久しき世より仕へ來ぬ　源大一〇六四
瑞籬の久しき世より仕へてき　弓三三〇
光景
　姉和の平次——　正一三六九
水陰草ならば波うち寄せよ　八三三

水陰草に舟寄せて　三九七
水かけ草の種とりて　九六
三つ頭より水を出だし　四〇七
霜一〇き　二九九
水かへつて日高川原の　道成一八〇一
御調
　今に絶えせぬ——　弓三三八
　高麗唐土も殘りなき——の道の末　岩六八七
　三年の——ゆるされし　二三
　萬代に絶えせぬ——　草九八
御調の道の末ここに　老五四
御調の道も直なるべし　東三六五五
貢船
　帝の——四海の波も　竹生二四六一
御調物
　天つ日嗣の——運ぶ巷や　三九
水莖の跡
　書き置き給ふ——に殘るぞ　花筐二九八
水莖の跡さへ濃き御情　小督二〇六
水莖のあとの世までも　左三五〇
水莖の筆の跡かき消すやうに　二人三七一五
水暗き澤邊の螢の影　一六
水車
　廻らば廻れ——の輪の　放下二四五〇
水子赤子の別れてさへ歎き申す　藤戸七四

密嚴淨土
熊野は胎藏界――　巻二八一〇
御厨子の御戸を開き　道明一八二八
滿つ汐
影は二つ――の　松風二八二九
水島(岡山)
播磨の室山備中の――二箇度の合戰　位五一一
播磨の室山備中の――鵯越に　景六四四
密宗の奥儀を傳へ顯密兼學の所　菅界一六〇〇
三瀬川
重ねて憂き目を――に沈み果て　通小七六七
三瀬川沈み果てにしうたかたの　砧八二六
三瀬川絶えぬ涙の憂き瀬にも　松風二八二六
三瀬川に浮かむ便りの　船弁二七五七
三瀬川に熱鐵の桶を擔ひ　檜二六三二
水滔々として波悠々たり　天二四二
水鳥
生田川の――をさへ二人の矢先　求三〇六九
いはじや――のお主の名をば　海一七八
浮き寢に明かす――の　水無月二九四一
憂き目を――の陸にまとへる心地　玉葛一九六二
うきめを――の沈み果てんと　鳥八五二
蒼波のうねに浮き沈む――の如し　知三四九
水鳥の浮寢定めぬ波枕　鳥三九七
水鳥の上毛の霜に逢はん　草子二一九五
水鳥の鴨の羽色や　代一四八四
水なき空に波ぞ立つ　櫻一三三〇
水に誘はれ
寄るべなき心の――に　野宮二四一三
水に住める蛙
花に鳴く鶯――まで　白樂二四七六
水に戲れ波を穿ち　天二一四五
水に近き樓臺はまづ月を得る　芭クセ二五四一
躬恒　草子ツレ二八一
躬恒
河内の――　草子二一八七
紀の貫之も――もかくこそ　俊成一四四四
水の泡
草の露――はかなき心のたぐひ　朝三二五九
ここに消えかしこに結ぶ――　土蜘三〇五八
よしなき――と消えて　女三五〇〇
御津の浦(大阪)
大伴の――　蘆六一
難波の――傳ひ　雨三一九
難波の――よりも日毎に潮を　融三三六
水の面に照る月なみを數ふれば　融三三三
三つの御山(和歌山)　三井二九九七
彌陀頼む願ひも――を　誓一五五二
三角柏にあらばこそ　朝二三八七
三つの絆も悉く得脱成佛の御法　身二九五五
三の君　浮△三一一
三つの車
火宅をば出でたる――僧　車九六七
願ひも――の薦火は淸くあかす　通盛二九〇〇
願ひも――路を　百二六八一
三つの車に法の道　葵一〇一五八・東北二一九九
水の煙の霞をば一霞二霞　自一一一四
三つの心
妙なる法の――　西王一五七〇
三つの衣
光も――手に映り給へり　放生二四六一
水の逆卷く所をば岩ありと知るべし　鵜二三一一
三つの寶(華嚴經曰若右面向不背の葉)　海一七六
三つの袂に影うつる　女二四九四
水の月
名も走井の――　竹生二〇三三
水の月かや見れども手には取られず　頼政九四五
水の月取る猿澤の　栗四〇三
水の月を望む猿の如く　花筐二五九
三つの綱
煩惱業苦の――に繫がれ　春榮一四一三
三吉野の原(京都)
淀舟や――の曙に　蘆四五
御津の濱(大阪)　蘆五六

三つの船
　願ひも――　碇二五三
水のまにまにとめくれば　熊野三四六
三つの山
　願ひも――ならん　俊寛一四二四
三つの輪は清く浄き唐衣　三輪二九八三
みつはぐむ
　老いてかがめる姿をば――と申す　檜二六一八
みつはぐむまで老いにけるかな　檜二六二七
水は逆さまに流るるものか　錦戸二二七一
水は山の影を含み　江島四九七
瑞穂の國
　君は船臣は――　弓三三七
瑞穂の國も豊かに治まる代　金八七七
水増りなば踊り来るかに　船橋二七六三
水また水誰か家にか碧潭の色を　山三一七七
水又水はよも盡きじ　養三一三四
水掬ぶ薗の縄の繰り返し　檜二六三五
水も影を濁すな　優一一三七
三物
　弓は――とやらんを射そろへ　箙六六〇
光盛
　手塚の太郎――　實一二五八
水屋
　澄める――の御影まで　春日六七〇

水や空空行くも又雲の波の　八島三一六二
水屋の御影（奈良）　佐一三七七
〔三山〕　二九一一
三山
　萬葉第一に出だされたる――　三山二九一五
水行く河の蜘蛛手なれば　杜六二一
水行く川の八橋や　千一七〇七
水よく船を浮かむ　内三七六・難三三三
水よく船を浮かめ浮かめて　[illegible]二四〇
水よく船を浮かめつつ臣よく君を仰ぐ　代一四八三
水よりも寒く
　氷は水より出でて――　檜二六三三
御劔の刃の亂るる心なりけり　小鍛一二一四
水を出だす
　火焔を放ち――　[illegible]二六六四
水桶
　心も澄める――のもち顔ならぬ　賀七三四
水を鎭むるも氷　氷二六六五
水を生ずる德
　櫻は諸木に勝れ――あり　櫻一五一三
水を踏む事陸地の如く　鐵一四五四
水をも野守の鏡といふ　野守二四二六
滿て
　千手陀羅尼を――給へば　雷三三四二

水口に――を立て　淡一四四
見て暮らす花の下風更くる夜の　雲林院二三三六
御幣に三十番神ましまし　鐵七一三
みての袂
　かなぐりすつる――　蟬一六八一
見てのみや人に語らん櫻花　雲林院六一
御戸代
　末の王垣――の錦　[illegible]四九四
みとしろ錦被衣　岩三九一
みとしろの錦のうちとより　滿八五一
三年の秋の夢ならば　[illegible]八六九
三年の御調ゆるされし　難三三三
三年まで立て置く數の錦木　錦木二三四七
三年三月の苦しみ果てて　[illegible]七五
みとのまくばひ
　天の岩座にして――ありしより　[illegible]七一二
みどり子の類ひならば松風に　三井二九九六
緑子の行方を知らで　飛鳥七二
緑の絲はへて　佐一二七
緑の髪は容さまに生ひのぼつて　蟬一六七九
緑の龜も舞ひ遊べは　鶴一三九九
緑の衣
　天つ御空の――　羽一四九四
水上を正す
　古き流れを汲んで――　鵜三〇

漲る水の淀ならば　鵜飼三〇六
水口に幣帛を立て　渋一四三
みなし山(奈良)
　耳なし山とも――とも　三山三九一五
〔水無瀬〕　二九二七
水無瀬(大阪)　水無瀬所二九二七
水無瀬川(大阪)
　霧立ち渡る――　生二六七
　山本霞む――　[illegible]四五
水無瀬の川の捨小舟の　水無瀬二九二九
水無瀬の里に爲世といはれし者　水無瀬二九二八
水無月の夏越の祓する人は　水無月二九四三
〔水無月祓〕　二九三七
湊川(兵庫)
　流れ久しき――　楠九一七
　波越す袖の――　紘一〇四六
湊田
　由良の――の早苗　[illegible]七三
みなとの大明神
　第二には――九州宗像の明神と　大社五七九
湊や秋の泊りなる　龍田一九三三
昔人は花の衣になりぬなり　墨一五一三
南がしら
　二條大宮を――に歩ませ　[illegible]三三五三
南の岸

補陀落の――に至り　采四〇七
南の山に澄む月の　放生二四六一
南祭　放生二四五五
御名も同じ今熊野　熊野三三五一
源の頼光　大江五五五五・土蜘三三四七
水馴れ棹の歌謡はん　室三〇二二
身に思ひあり　小袖一一三五
身に着る衣はただ鵜の所々もつづかねば　竹雪一八八〇
身に添ふ時だに見ぬ隙は露程だに　谷一九四二
身には寒からじ　猩一三五一
身には纐纈には錦の[illegible]をはめ　自一三三五
身にも應ぜぬ花好き　小鹽三四五九
見ぬ色の深きや法の花心　芭上歌二五三二
見ぬ世の人も忍ばるれ　[illegible]三七三二
峯入り　葛六九二・谷一九三九
峯入りとやらんは大事の行と　谷一九四〇
峯に木傳ふ猿の聲　弱一六八五
峯の嵐か松風か　小督一一〇二
峯の嵐や谷の水音滔々と　養三一三九
峯の松風
　音羽山――通ひ來て　夕三三一九
峯の松風通ひ來にけり　千一七二一
嶺の松風通ひ來る　國九〇五
峯の雪汀の氷踏み分けて　雪三一八八

讃も尾上も花にて候　吉天三三九一
峯雄　墨ワキ一五〇五
峯雄がたれる果　墨一五〇六
蓑
　田蓑の島と詠み置きつる――　[illegible]一六七七
身の秋いつと限らまし　雨三一〇
箕面の瀧つ波も　善知二九〇
蓑笠を隔てなりけるや　善知三九〇
蓑笠手向けてくれよ　善知三八四
身の毛もよだちて　[illegible]三三〇・[illegible]九五
身の毛もよだつばかり　昭一五九〇・[illegible]
身の代　[illegible]一三三四
蓑代衣　善知三八七
蓑代衣
　降る雪の――袖さえて　鵜祭四一三
身の代衣恨めしき　自上歌一二一九
蓑代衣日も出でて　松蟲二八五四
身の代衣一襲　自一三三八
身の科のたき山を歎き給はば　[illegible]七七七
身の習ひ
　心に任せぬこの　[illegible]八八七
身のなるはてはあはれなりけり　賴三三一二
美濃のお山(岐阜)
　年を經し――の松陰に　養三一三〇
身の後の世の逆緣　自一三二八

美濃の中道世路さして　関三六二
美濃の中道程なく　[illegible]
身のはて如何になりぬらん　紙八六一
已の日の歳や木綿四手の神の助けも　松風八四
〔身延〕　二九四九
身延山（山号……を見よ）　現上一〇一
　身延九四九
身延の山に引き籠り　現一〇一三
御法に後るなよ　身二九五一
御法に値遇の優曇たり　身二九五
御法の功力に草木國土も　巴三八三
御法の庭も蒲波も　[illegible]二六九
御法の障得あるべし　[illegible]一七七
御法の船に積みしまゝに　[illegible]八五四
御法の船の水馴棹　富一八五四・東山分第二一七〇
御法の舟橋を渡りもせぬ　春栄一四四
御法の御船にのりを得て　[illegible]二五一
御法の御舟の水馴棹　[illegible]二五六
御法を四方に弘めん　誓一五五二
身の業の好ける心に寄竹の　[illegible]上歌一二九
美濃尾張
　同じ憂き寝の――　杜六一九
　思ひ立つ日も――　巴三三七
　月の霞むや――老を知れとの　[illegible]二五五
蓑をも脱ぎすて花摺衣の　通小七七[illegible]
身は一代名は末代　[illegible]
身は浮草の寄るべきたき心の水に　[illegible]
身は浮草を誘ふ水　[illegible]
身は恩のため命は義による　巴三八四
身はかくて流されぬれど君があたり　[illegible]
身はこれ槿花一日の榮　千一七〇三
身は定めなきうたかたの　關原次第一六六六
御階のもとに　[illegible]
御階のもとまでも　鐘四六
身は籠鳥のかひぞなき　国上歌九四
身は知らず
　ここぞ寶　[illegible]一〇八
身は白雪の面忘れ　歌三六一
身は捨小舟恨みても　七騎落第二〇八
身は板橋の霜に漂ひ　[illegible]
身は土中に埋むと雖も名は留まりて　[illegible]
身は一人われは誰をか松坂ぞ　[illegible]
身一つの歎いの罪や　[illegible]
身一つを助けやせんと　竹生[illegible]
身ひとり
　かかる恨みは――かや　紙八六一
身ひとりに降る涙の雨か　通小七七一
御札
　六十萬人決定往生の――　[illegible]
壬生の小猿　熊坂九四一
壬生の大納言忠岑　[illegible]
三重がされ
　取る袖も――　[illegible]
三重の帯廻り達はんも　[illegible]
三保が崎（[illegible]）
　この松原の春の色を――　[illegible]
御矛
　[illegible]――より　小鍛一二二
　日本第一の鏡の――を　[illegible]
　御代を守りの――を守護し　龍田一九三二
御府の手風　[illegible]
御矛の主たりし　[illegible]
御矛を守りの[illegible]明王　[illegible]
身ほど
　数ならぬ――の山の奥に来て　紅[illegible]
三保の入海（[illegible]）　盛三〇八
三保の浦（[illegible]）
　風早の――わを漕ぐ舟の　羽一四八六
三保の関（[illegible]）　[illegible]
三保の松原（[illegible]）　羽所一四八三
三保の松原田子の海　富士山上歌[illegible]
三保の松原に白龍と申す漁夫　羽一四八六
三保の谷が着たりける兜の錏　景[illegible]
三保の谷が頸の骨こそ強けれ　景[illegible]
三保の谷の四郎と名乗つて　八島三二二

御孫の尊
　天の御神の――　玉井一九七七
見みえ
　姿――双親と子の　[illegible]二〇一四
　恥かしながら――ん　千一七〇五
　母に姿を――んと　[illegible]六五五
耳成の池の玉藻の濡衣　三山待謡二九三三
耳なしの池も恨めし吾妹子が　三山∧二九三一
耳成山(奈良)　三山所二九一一
耳成山
　香久山は夫畝傍――は女なり　三山二九一五
耳なし山ともみなし山とも　三山二九一五
耳成山の女の名をば桂子といはれ　三山二九一六
耳には菲がたり　山△三一七五
耳には鎖を下げたれば鬼神と　昭一五九一
御室の岸(奈良)
　神南備の――やくづるらん　逆一三〇五・龍田一九三三
微妙安樂の結界の棠となり　雪一八五一
微妙淨法身　海一八六
身もがな二つ箱崎の　唐一八一九
〔御裳濯〕　二九五七
御裳濯川(三重)
　今ぞ知る――の流れには　大原五五〇
　神路山――のその上に　第一七七〇
　流れ絶えせぬ　國九〇四
　和光利物は――の　[illegible]四五一
御裳濯川と名づけし事は　御二九六三
御裳濯川の御流れ　國八九三
御裳濯川の澄まん限りは　御二九七〇
御裳濯川の流れ絶えせず　[illegible]八七三
御裳濯川の水たらん　御二九六〇
見もせぬ人
　見すもあらず――の戀しくは　[illegible]四四
見もせぬ人や花の友　右上歌三四五・吉天三三九二
宮軍のありしに　賴三三〇三
明
　鑁字の――を唱へ　[illegible]八
名號
　六字――一遍法　[illegible]一五五五
名號智火には消えぬべし　[illegible]知三六八
冥加もなき事　安宅八六
冥感
　神明佛陀の――に至る　東北二一九
明鏡
　横道を正す――の寶たれ　野守二四二四
明鏡また臺になし　卒一七三四
猛火雲を燒くかと見え　熊五一三
猛火の箭瓶を提げ　[illegible]
猛火は却つて敵を燒けば　小鍛二一一八
猛火を放ち劍を降らし　生[illegible]七三
冥官怒りをなし給へば　[illegible]八八〇
冥見私なきままに　[illegible]九四八
命魂を[illegible]たん　[illegible]
名字
　佛法の――を人知らず　白鬚一四六九
明州河を押し渡り　唐上歌一八〇八
明州の月　野守二四二四
明州の津にぞ[illegible]しそいう　[illegible]一八〇八
名字もなき者　鉢二五五九
名字を隠して相訪ふことを　[illegible]二五八
明神憐みおはしまし　生二七〇
明神氏の神も御照見あれ　[illegible]三二一
冥道
　大小の神祇・――請じ驚かし　正一三六四
名帳に入れて給はり候へ　三山二九一九
明朝の雨
　舟子は解くこれ――　白鬚一四六五
冥々とある苦海に沈み　[illegible]四五
名利身を扶くれともまた北郎の煙を　[illegible]
明王鏡をかの御牀に立て置き　[illegible]九[illegible]
明王の火焔の黒煙を立て　[illegible]一八[illegible]
明王の羂索にかかる　[illegible]六[illegible]
明王の羂索にかけて　[illegible]一[illegible]
明王の索にて身を[illegible]め　[illegible]九[illegible]
明王の誓約たちまちなりと[illegible]　[illegible]二[illegible]
明王の照覽　安宅九[illegible]

明王部天童部　鐵七一〇
〔明慧上人〕　春日異稱六六七
明慧上人　春日〃〃六六七
明慧法師
　楢の尾の―　春日六六九
都出て今日みかの原泉川　谷一九四四
都大崩にて膝の口を射させ　曾二六二
都方に住ひする者　吉大三三九〇
都方より出でたる僧……僧も見よ
都住居を心の外とや　砧八二九
都道者　吉歸二六八二
都鳥
　來居つつ鳴くは―　隅一五二五
　名にし負はばいざ言問はん―　隅一五二三
都に踊り神勅を　弓待謠三三三二
都にはげにも嵐の山櫻　嵐道行二〇三
都の秋を捨てて行かば　三井二九九六
都の方の音づれは間遠に結へる　大原五三八
都の巽
　わが庵は―しかぞ住む　頼三三〇一
都のつてに訪ひ給へ　存三二〇
都の手振なりとても　卷二八〇三
都の南門
　羅生門は―　羅二三五〇
都の花盛り慰み多き折々にだに　砧八二九

都の春
　いかにせん―も惜しけれど　[illegible]
　昨日に―と榮え今日は東の都に　千一七六
都の人の足手影もたつかしう　[illegible]
都の富士
　時知らぬ山は―なれや　竹生二〇三六
都の富士と三上山　[illegible]
都は野邊の若菜摘む　二人七一三・求三〇六三
都は春の錦燦爛たり　西行一一七七
都は人目つつましや　卒一七三〇
都人如何にと問はば山高み　祇八六一
都邊はなべて錦となりにけり　小鹽上歌三四六〇
都をば霞とともに立ち出でて　[illegible]
都をばまだ夜深きに旅立ちて　江口道行四七四
宮崎(宮崎)　景所六三一
宮崎
　日向の國―とかやに流され　景六三三
宮崎の社官藤原の興範　須一四九二
御社の誓ひもさぞな四所の　春日上歌六七〇
御息所
　六條の―の怨靈　[illegible]
御息所とりあへず　野宮[illegible]四一〇
宮瀧(奈良)
　神の―西河の瀧　二人二七三〇
宮路正しき春日野の　采次第三九八

宮づかへ
　御―も隙もなくて　[illegible]
　御僧に―申し候へ　[illegible]
宮仕へ申さう　[illegible]
宮つこ　春日六七一・東大一〇六五・大佛一七五三・[illegible]一九八九
宮つこ[illegible]　[illegible]
宮寺
　天滿神の―に　道明一八二七
　歩みを運ぶ―の　[illegible]
　神たにも膝に交はる―の　大佛一七五三
　何となく―は深夜の鐘の聲　[illegible]
宮主
　わたつみの―伴ひて　[illegible]
宮のうち
　住みあかざりし　[illegible]
宮柱
　下つ岩根に―太敷き立てて　第一七七三
宮柱ふとしき立ちて敷島の　大社五七八
宮柱太しく立ちて秋津洲の　内[illegible]七四
宮は六度まで御落馬にて　頼三三一〇
宮人　内三七四・道明一八二七
宮人
　もとの―となり　[illegible]
宮人多き往來かな　大社五七七
宮人の姿を暫し待衣　大佛一七五三

宮人の烏帽子を暫し假に着て　道成一七九四
深山
　程なくかやうに――となる　宝四〇〇
深山鳥の聲澄みて　高野六·二
深山木のその梢とは見えざりし　實一·五〇
　春栄一四〇八
深山櫻
　松蟲の音にただに立てぬ――　鞍九五三
深山には松の雪だに消えなくに　二人二七一三
　求二〇六三
深山の奥
　思はずも――の住居して　大原五四七
深山の朽木なりとも　草一七二·
宮廻り申さうずる　龍田一九二六
宮守一人もなき　蟻二一七
宮も藁屋もはてしなければ　蟬一六八·
宮居の二柱立つや　大蛇三五〇九
深雪
　朝日さす高嶺の――空晴れて　富士山二六八七
　高嶺の――解けぬべき　賀七三九
御幸に狂ふ囃こそ　花筐一聲二五九一
御幸の車早めん　花筐二五八四
見よかし顏に櫻子の　三山二九二三
三吉野(奈良)
　昨日入りにし――の　飛鳥六六

　雲と見しは――の　櫻一·三八
　月雪の――たれや花鳥の　國九〇四
　春立つといふばかりにや――の　二人二七一四
三吉野勝手の御前に仕へ申す　二人二七一二
三吉野の奥に　胡一一四二
三吉野のかつて知らずた　吉静三三八四
三吉野の岸の山吹風吹けば　松山鏡二六七七
三吉野の志賀の山櫻　求三〇六五
三吉野の高嶺の深雪また冴えて　胡道行一一四三
三吉野の續む木蔭の花の雪　二人二七二〇
三吉野の千本の花に如くはなし　六浦三〇一六
三吉野の花に雲かと詠めける　嵐二一四
三吉野の花をも雲と思ふ　二人二七一六
三吉野の者　百二六六九
三吉野や御嶽精進の御願にて　牛二五〇四
御代千秋の君が住む都は間近き　松尾二八四五
御代の鏡の影をうつし　嘯三三·七
三世の契りの主從と　望三〇四四
三世の佛に花奉る　牛二四九九・女二四九一
御代も榮ゆく男山　弓次第三三三
身より出だせる科なれば　歌三六六
御代を守り國家を助け　放生二四六一
御代を治め國家を鎭めて　賀三三七〇
未來永々の流轉　楊三一三三
未來永々を經るとても　葉一六〇一

見るからに袂ぞ濡るる櫻花　大蛇一五〇六
見る度に變る姿やます鏡　龍虎上歌三三六二
見る度に心づくしの髮なれば　藩八四七
みるめ
　人は何とも――をかりの夜の　藩八五三
海松藻浮藻の花も咲く　和三〇三一
みるめ刈らうよ　海一七四
見る目も輕き身　同三一
見る目も恥かし　景六四五
見る夢の別れ留まるものならば　水無瀬二九二九
彌勒
　釋迦既に滅し――未だ生ぜず　道三三〇三
彌勒佛
　南無當來導師――とぞ唱へ　牛二五〇四
〔三輪〕　一九七五
三輪(奈良)　三輪所二九七五
三輪
　綠の三わげ殘りしより――の　三輪二九八七
三輪が崎たる佐野のわたり(奈良)　鉢二五五三
三わげ
　その綠の――殘りしより三輪の　三輪二九八六
見渡せば海霧まがふそなたより　住上歌一五四〇
見渡せば松の葉白き吉野山　二人一聲二七一三
見渡せば柳櫻をこきまぜて　右一聲三四三
　西行クセ一一七・盛三〇九六

見渡せば八重一重げに九重の春の空　田一九八九
三輪の神
　伊勢と——一體分身の御事　三輪一九八八
　女姿と——　三輪一九八四
三輪の里に住居する女　三輪一九七八
三輪の杉
　法のしるしや——　玉葛一九五八
三輪明神　三輪シテ一九七五
三輪の明神の神木は杉なり　龍田一九二七
三輪の明神は夫婦男女の語らひを　〃一六〇三
三輪の山(宗旨)
　檜原のよそに——しるしの杉　[illegible]一二二五
三輪の山陰に住居する　三輪一九七七
三輪の山もと
　わが庵は——戀しくは　三輪一九八〇
三輪の山もと道もなし　三輪次第一九七八
三輪の山もとよそに見て　谷一九四四
〔三井寺〕　二九八九
三井寺(近江)　三井所二九八九
三井寺さして落ち給ふ　賴三三〇九
三井の古寺
　さゝ波や——鐘はあれど　三井二九九八
身を恨み人をかこち　綾一九五
身を觀する時は岸上の草　碇二五八
身を觀すれば——根を離れたる草　大原五四七
身をこくかに砕きても　自一三四三
身を知る雨の晴れぬ心や　[illegible]一六四四
身を知る門出の世の試み　杜七八〇
濡標(みをじるし)　飛鳥六九
身を知る袖の涙　富士太鼓七〇一
身を知る袖は乾されず　菊八〇八
身を知るや住む蘆の屋の窓の雨　富士山二六八七
身を捨ててこそ名は久しけれ　熊五二一
濡標(みをづくし)
　四智圓明の明石の浦に——　[illegible]一二六八
身をづくし
　なに——思ひ初めけん　住五四七
身をづくし戀ふるしるしに　住一五四七
濡標に内大臣　須一四九七
身をつゞめ　安達一二〇
身を轉じ
　鳥類の、佛果に至れ　鵜祭四三三

む

無異
　如我等——の身となれば　[illegible]一三三一
無一不成佛
　若有聞法者　梅枝四四四
無縁の慈悲を垂れ　[illegible]
無縁の沙門　梅枝四二八
無縁の衆生を利益せん　[illegible]一二二七
無縁の僧　[illegible]二五
無縁の利益をなす　[illegible]一四二一
昔かな花も所も月も春　小[illegible]四六八
昔この國に住む人の　井[illegible]四三六
昔戀しき時の和歌賤や賤　大[illegible]七三二
昔忍ぶの忘草　[illegible]四[illegible]
昔仲麿がわが日の本を　野守上[illegible]四三四
昔ながらの山櫻　[illegible]九四・竹生[illegible]
昔ながらの山櫻かた　伏見[illegible]
昔ながらの山櫻は青葉にて　箙七三二
昔に歸る秋はたし　関寺一六一三
昔に歸る聲は聞えず　三井一九九八
昔に歸れ白河の波　[illegible]五

昔の春
　心も――老の姿もさざかにの　明一六八
昔の人の袖の香ぞする　雲雀三六四二
昔は南鐐今は平の宗盛　類△三三〇六
昔は芙蓉の花たりし　曾一六
昔は物を思はざりし後の心ぞ　[illegible]一〇九
昔忘れぬ物語　景六四六
昔を今にたださばや　安[illegible]二一
昔を今になすよしもがな　人三七三。古[illegible]三八六
昔を返す衣手に夢待ちかぞへに　井三四一〇
昔を返す袖たらめ　梅四三一
昔男
　語るも――あはれふりぬる　小[illegible]三四六一
　その様年の古事やう――と　雲林四六四
　その時だにも――といはれし身　井三四〇四
　業平の――の舞の姿　[illegible]六[illegible]四
昔男初冠して奈良の京　松六三五
昔男に移り舞　井三四二一
向ひたる名　景六四〇
迎への御車　[illegible]吉一二〇八
迎への船法の力と覚えたり　竹生三〇五
報い
　何事も――ありける憂き世　伸三三二
報いの請
　うてやうてやと――　私八三七

報いの罪
　身一つの――や　[illegible]一九六八
報いの罪にとも洩れじ　野宮三四一八
報いは常の世の習ひ　戀一一六三
報いは人の科ならじ　伸三二一三
報はばそれぞ人心　[illegible]二一六一
昔蓬生刈萱も亂れあひ　[illegible]二九五
葎の宿はうれたくとも　梅枝四三八
無官の大夫敦盛　[illegible]一三二一
無見頂相の如来　志一三九八
無間の底
　炎熱酷熱――に　[illegible]一〇五
無間の底に堕罪すべかりしを　鵜飼三〇九
夢幻泡影いづれならん　[illegible]七三六
武庫山颪[illegible]が嶽より　船[illegible]七八三
無相真如の體　[illegible]五四
夢想の如くなるべし　鐵七〇七
武藏(武藏守)　正一三五九
武藏鐙隠れにあらじ　[illegible]一四四[illegible]
武藏野(東京)
　ここにありけり――を分け暮らし　東北二九一
武藏の守も討たれぬ　知三五〇
武藏野のはてしなの心や　春日上[illegible]六七[illegible]
武藏野は今日はな焼きそ若草の　小[illegible]三四六七
武藏坊辨慶

西塔の――　正一三五八
西塔の傍に住居する――　船辨二七六九
西塔の傍に住む　[illegible]三五九
むさとした事をいふ　[illegible]九〇二
無差別
　心佛及衆生是三――　柏六六三
無慙の罪
　破戒――を恐れ　俊成一四四一
無慙やな[illegible]の執とて　[illegible]一五二〇
無慙やなこの鳥の　初クセ二五七五
無慙やなさこそ便りも[illegible]　[illegible]四
無慙やなたとひ知らずして[illegible]は　[illegible]九〇
無慙やな[illegible]形見の　生二七〇
無色界
　欲界色界――　[illegible]一九五・[illegible]一四〇
蟲喰
蟲喰の一萬五千三百餘歳を　[illegible]五二七
蟲の音
　いとどしく――しげき浅茅生の　[illegible]四九七
　悲しみの聲――交りて落つる　[illegible]八四
　枯野にすだく――も花を惜しむか　[illegible]六九
　[illegible]も枯野の――の　[illegible]八三五
　草葉に[illegible]――も枯れたり　[illegible]二六六
　さりともと思ふ心も――も　[illegible]八五一
　秋霜に枯るる――聞けば　松風二八六三

鐘の音――もかれがれの契り　大二六〇八
鐘の音までも薩佛事をやたし　鳥二七九一
無慚が萌む　鳥△三四三
無常
　飛花落葉の――にて　徳五〇八
無常音を聞くたより　山二六八〇
無常觀念
　飛花落葉の嵐まで――を勸む　吉野六二〇
無上正覺
　五蘊の闇りを――の月に曉まし　葛七〇〇
草菁八八六・松風六八四六
無常といつぱ目の前たれども　源氏一〇七七
無常の嵐き風　竹生一八八
無常の嵐音添ひ　[illegible]五二
無常の値
　有爲の有様　梅[illegible]六〇
無常の虎の牙に懸ど　敦六七
無上の道
　正直捨方便――に到るべし　身二九五四
墓所　舟二六〇
墓所へ參り　定二一〇七
墓所を見せ申し候べし　隅一五二〇
結び定めし小夜の手枕　淡一四九
結ぶの神
　業平の結緣の衆生に契り　賀茂物山八六

濁りたくぞ木――の　[illegible]七四一
六十の花
　夢は――に過ぎ　峯三二三〇
無道心たる僧達　[illegible]五二
夢中に道あつて壇坂を踊つ　[illegible]九八
夢中の翁　西行一〇七五
夢中の對面顔をたす　[illegible]五七
無着法欲心　東九六九
無知は又惠みに叶ひ　賓生四五七
おつかし
　あら――と問ひ給ふぞ　[illegible]六九
　あら――の問答は無益　宗[illegible]九〇
おつかしげたる旅人　[illegible]三二
おつかしの事を問ひ給ふぞ　[illegible]三七
おつかしの僧の教化や　卒一七五
おつかしの旅人や　[illegible]一三八
おつかしや　[illegible]五一
おつかり候よ　土車三七一
朧月の空なれば　円三八五
朧言
　うたたねたしり――は　通[illegible]二九七
六つの色
　六道の巷に定め置いて――を見す　蟬三〇
六つの巷
　數は――の罍に　天二四五一

六つの山叢打たうよ　[illegible]六五五
六つの道
　浮世に歸る――　[illegible]二七八六
　移り行くなる――　[illegible]八八
睦しきは親子の契り　雷[illegible]三六
睦しと君は知らずや瑞籬の　[illegible]一八七二
〔六浦〕　[illegible]二七
六浦　六浦[illegible]三〇七
六浦の里　六浦三〇九
六浦のわたり懸倉山　[illegible]三九
胸衣
　胸の――押しつけ揭卷　[illegible]一六六二
宗像の明神
　みたとの大明神九州――と現れ　大[illegible]五九
無になる　[illegible]三四八
無人聲
　寂寞　清・八五・舟・九五
　人家を離れて――　高野六二
胸合はす
　陸奥の狹布の細布　植六四
胸あひ難き戀ともよみ　錦木三四七
胸がたくめいて　橋△三五三・夜△三[illegible]〇
宗任
　安倍の貞任――を御追討　烏四三〇
宗近　小鍛[illegible]一一
宗近

三條の小鍛冶——　小鍛一一一三
無熱池
　水は西天の——の池水　江島四九八
無熱地の池水を受けつぎ　鵜三三三三
宗徒の一門　通盛三九〇七
宗徒の郎等　正一三七〇
胸なる月は曇らじ　木曾三三〇七
胸に苦しき手を置けり　草子一一九一
胸の鏡よ心濁すな　歌三六六
胸の煙
　われには晴るる——　富士太三七〇八
胸の煙の焔にむせべば　清八三七
胸の煙もその名をも富士の嶺に　元一〇八三
胸の煙を富士颪に晴らし　小袖一一三八
胸の月
　心せよ——　鐵兜三三六四
　悟りは一つぞ——　輪三三七八
胸の火の煙に殘る面影も　小督一一〇六
胸の火は焦がれて袂の乾く隙も　初三五七五
宗茂　千ワキ一六九九
宗茂
　狩野の介——　千一七〇一
宗盛　熊野ワキ三三三七
宗盛
　平の——　熊野三三三九
宗盛公に申すやう　盛一三五九
宗盛御所參候へども　盛久三三〇五
胸を焦がす竹　安宅一一八
無念の勢ひあたりを拂ひ　鐵兜三三七一
むねは王のとるべ定めぬ　葉三七三九
無非中道
　一色一香の衆生は——の眼に照す　〇五〇八
無比の業に誇り　九三
無病息災
　醫王佛の化現——の方便の爲　宮三四〇二
無比樂
　現受——後生淨土　清三三七七
無佛世界
　松の山家と申すは——の所　松山鏡二八七六
無佛世界度衆生　四一七
無邊光
　至らぬ隈もなければ——とは名づけ　姨三四八三
謀叛人
　某が敵人——と申し上げ　鉢三五六七
無明さんげの敵を拂はば　鱗四五六
無明谷深き柚ひには下化衆生を表し　山三八一
無明の酒に醉ひ臥し　一角二八三
無明の酒の醉ひ心　百一〇九〇
無明の波荒くして　東岸二一七一
無明の眠りを覺ます　源氏一〇三七
無明も法性も　清八五四
無明王
　修羅の大將——とや　碇二六〇
無影の月
　肩上の笠には——を傾け　萬六九二
無益
　兎角の問答は——　鐵輪三七二
無益とさきへけり　羅三三五一
村上天皇
　絃上の主たりし——　絃一〇五六
村上天皇　絃シテ一〇四三
村鳥
　うつし心か——憂かれと人は　百三六七三
叢雲の劍
　尾にありし劍をとつて——と　大蛇三五一三
叢雲の劍と名づけしこそ八劍の宮　源太一〇六九
紫式部　源氏シテ一〇一五
紫式部が筆の跡に　々一〇一三
紫式部と申すはかの石山の觀世音　源氏一〇四〇
紫裾濃の御着背長　八島三二五一
紫深なる山草の　雲雀三六四三
紫匂ふ花蔓心にかけて　藤三七三七
紫野（京都）
　日も西さす——北野　松尾二八四七
紫の色ある花も一時の　源氏一〇三三

紫の薄衣のそばを取り　[illegible]
紫野雲林院に住居する者　[illegible]四九八
紫の雲の　[illegible]四三
紫野雲の林　雲林四六[illegible]
紫の袴
　紋草の花――を分け　[illegible]
紫の一本ゆゑの藤袴　雲林四六八
紫の藤咲く門　[illegible]一七八
紫のゆかりの色も縁ならめ　藤二七三一
紫野行き標野行き野守は見ずや　[illegible]四六
村雨　松風[illegible]八二一
村雨
　今一通り――の雲もかげろふ　賀七三五
　大絃は嘈々として――の如し　經二〇九〇
　俄かに――のして花の散り　熊野三三五二
　松風――とて二人の海士の舊跡　松風二六二四
　松風　二人の女の幽靈　松風[illegible]
村雨のふり捨てがたき名殘かた　[illegible]一六七八
連 むらじ
　御伯父何某の――に襲はれ給ひ　[illegible]八九四
村時雨
　一通り降る――　[illegible]六五[illegible]
群雀
　鳴子の――。　[illegible]二六九九
群竹
　[illegible]山も[illegible]の――の[illegible]にあたる　[illegible]
[illegible]千鳥
　おのが友呼ぶ――の　忠度一九一四
[illegible]千鳥友呼ぶ[illegible]に　藤二七三三
むら戸
　月の――を押し開けて　田一九九四
[illegible]鳥の[illegible]の雲に立ち去りぬ　鳥三三〇〇
村紅葉
　ほの見えそめる　[illegible]
村紅葉の錦の直垂　忠度一九一八
[illegible]山
　鹿の子斑や――の　[illegible]二一八
村[illegible]稻
　天の――種とりて　[illegible]九六〇
　富草の――　[illegible]一四六
無[illegible]
　誓ひは盡きぬ――の業し[illegible]　江島四九七
無量罪
　一念彌陀佛即滅――　當一八四三
利[illegible]　[illegible]一五五七
無量壽如來
　念佛衆生――　[illegible]
無量壽佛
　命は――。　[illegible]
　西王母と聞えしは――の化現　東方三一八三
無[illegible]の[illegible]相　[illegible]
無[illegible]不可思議の功徳　[illegible]
群れゐる田鶴の音を鳴き　[illegible]一四五[illegible]
群れ居る田鶴を御覽ぜよ　八島三一五〇
室(兵庫)　[illegible]三〇一九
室
　播磨潟――の樞の曙に　賀七三[illegible]
無漏
　實相――の大海に　[illegible]四八五
　眞如實相の――を出でて　源太一〇七一
　[illegible]定――の仙人は　江島四九八
〔室君〕　[illegible]二九
室君　水無月シテ二九三七・室ツレ三〇一九
室君達を舟に[illegible]せ　[illegible]
室君の[illegible]をわたた　[illegible]二九四七
室住の庄(山口)　江口[illegible]四八〇
室の海波ものどけき春の夜の　室三〇三一
室の神職　賀リキ七三一・室リキ三〇一九
室の津(兵庫)　江口[illegible]四八〇
室の津に逗留の間　水無月二九三八
室の明神
　[illegible]の賀茂と當社――とは御一[illegible]　[illegible]
室の明神に仕へ申す神職　[illegible]・[illegible]三〇[illegible]
室山(兵庫)
　播磨の――備中の水島二箇度の合戰　[illegible]五一一

播磨の— 備中の水島鵯越に　景六四四
峯山陰の神垣の賀茂の宮居は　宗三〇三
無爲
　身を捨てて—に入らば　高野六〇五
　妙覺—に至るべき　身一九五二

め

明闇二つを守護する　[illegible]一七三九
冥闇を助けよ　海一八五
命恩のその情をば知らざらん　合六八五
明皇榮花を極め世を保ち　白九九四
明君のすぐたる御代のしるし　江島四九六
明君の御代のしるし　鷺一三一七
明鏡に本文を思ふ心　元一〇八九
明月
　一樓の—に雨始めて晴れり　羽衣四八六
　靜かなる時は—を見す　放下二四四五
明月清風唯動靜の內　放下二四四五
明月に櫓をあげ　小督一一〇三
命期の路たえども　歌三五九
命期六爻の滅色　歌三五八
明才衆に越え明智世に勝れ　藍二四四
名將の古跡の花なれば　熊五一〇
明珠をこの沖にて龍宮に取られ　海一七五
明智世に勝れ
　明才衆に越え—　[illegible]一四四
明帝
　宋の—　[illegible]一六八七
冥途
　今生よりの—なり　佐[illegible]一四三一
冥途に通ふたるものを　熊野三三四八
冥途の鬼といふともかくやと　[illegible]一九九
冥途の鬼か恐ろしや　昭一五九〇
冥途の奇特　松山鏡六八一
冥途のせつ鬼阿防羅刹　[illegible]一九八
冥途の供に連れ〱　碇二五五
冥途の道　阿三三
命日
　—母の—　松山鏡六八七
命は義による
　身は恩のため—　円[illegible]三八四
明妃とその名を改め　昭一九八一
明々
　內裏俄かに晴れて—とあり　吉[illegible]三四
明々たる曉の空　生[illegible]三[illegible]
冥路杳々たり　海一八五
命を重んずる事も朝敵の虛名を　景清一六九四
妙音聲を高くあげ　[illegible]三三八
妙好華
　人中上々—　[illegible]一五九九
妙覺無爲に至るべき　身一九五[illegible]
妙經　[illegible]一八五

妙經信受の功力　現一〇三三
妙經の守護神の御厨子の扉　[illegible]
妙經を弘めつつ　現一〇一三
妙花
　世上萬德の――を開く事　山三七三
妙光の影　舍一三九〇
妙證
　佛は常住不滅法界の――たれば　白鬚一四六八
妙典
　一乘――の功力を得んと　鵜飼一三五六
妙典に洩るる草木のあらざれば　定三二一五
妙典の功力に引かれ　[illegible]一一五〇
妙典の理をとく唐錦の　現一〇一八
妙幢菩薩
　夢の精靈――　吳九八八
妙の一字はさて如何に　[illegible]二一〇
妙法緊那羅王　春日六七八
妙法しゆとう繁昌の日　身二九五〇
妙法蓮華經一部八卷四七品　身二九五四
妙法蓮華經の功德　身二九五三
妙法蓮華經藥王菩薩品　藏二五三一
妙法華經
　初成道の時悟り得給ひし――　現一〇一六
　昔は靈鷲山にして――を說き　采四〇〇
妙文

　御法に――を記し　[illegible]
　菊の葉にかの――を寫し　[illegible]
　草木國土悉皆成佛のこの――　[illegible]
　讀誦諸ふ――の　[illegible]
　中陰經の――　[illegible]
　法身說法の――　[illegible]
　和讚といつぱ法身說法の――　東北三一九九
妙聞ただしき御聲にて　[illegible]
［和布刈］　[illegible]
布和刈の御神事　和二一三九
目かれせず眺め給ひし　東北三一九二
目かれて興やなからまし　[illegible]八〇三
盲御前
　この宿にはやり候ものは――　望三〇四八
盲の杖を失ふに似たるべし　景六四〇
廻りあひける縁は深した　[illegible]一五四七
廻りあふべき月影を秋の賴みに　花筐二五八三
目くれ肝消え　檀二〇一五
廻れと廻らず　東九六六
目こそ闇けれども人の思はく、　景六四
めざし濡らすな沖に居れ波　和三〇三七
目覺し草の戯れ　草薙八八二・雲雀二六四四
囚人
　大事の――　檀二〇〇四
囚人數多候中に　春榮一三九八

囚人の道行　[illegible]
囚人を引かせ　正一三七〇
めだれ顏なる夜討はすまじきか　[illegible]
めだれ顏の振舞　[illegible]
目路もなき旅の　[illegible]
目附をつけてこれを見す　[illegible]
滅後の弘經も正像末に次第して　現一〇[illegible]
滅也
　命期六箇の――　[illegible]
滅色の秋
　五衰――たれや　[illegible]一四七
めづらか
　山住の――なりし有樣　[illegible]三一九
めづらし
　御下り――く候へども　[illegible]三三一
めづらし顏に淚ましや　小[illegible]一二三一
めづらしき人に誘はれ　[illegible]三三三
珍しながら恨めしや　砧八二九
めでたかりける時とかや　[illegible]△四一九
　正島△五〇一・[illegible]△七四二・[illegible]△九九八・[illegible]
　大△一〇七・白鬚△一四七・白[illegible]三四七九
　富士山△二六九三・和△三〇三六
めでたき御代の歌合　[illegible]一一八六
瑪瑙の橋
　硨磲の行桁――　鶴二〇九八

目には闇栗がなり　山△三一七五
目に見えぬ鬼とぞなり　鐵七一四
目に見えぬ鬼とや人のいふらん　山三一八二
目に見えぬ鬼の間に入り　大江五六五
目に見えぬ鬼神をも和らげ　蘆六〇
目に見えぬ鬼一口も恐ろしや　通小七七〇
目に見ぬ秋を風に聞き　放下二四四九
目に見ぬ鬼神の猛き心を和らぐる　箙三四四六
目のうち人に勝れ　熊坂九四二
めのと　土車二〇七三
めのと(乳母)
　同じ子に同じ乍のもり――　小袖一一三一
　小宰相の局――を近づけ　通盛二九〇一
傳御前をとりどりの　住一五四六
乳母子の家長　大原五四九
傳の小次郎　土車二〇七六
目もあてられぬ御風情　烏帽四二六
目もくれ心消え　滿八四六
目もくれ心月影に　萬二四一
目も昏れ心もはや上の空　石一三七七
目を驚かしたる有様　夜三三六一
目をくらめ
　見る人の――て　舍一三九二
目を引き袖を振り　望三〇五五
目を引き指をさし笑ひあへる　鉢一五六八
面向不背の珠　海一七六
眼藏に入ると見えつるが　熊坂九三七
面色變り鬼となり　舍一三九一
面色は更に變らず　狸一三五〇
面箱持　翁三五一
面目もなき御使　禪一六九二
面々　安宅二〇一
面々聲々にすかされて　箙一六六七
面廊
　ここの――かしこの詰りに　熊坂九四五

も

蒙求
　勸學院の雀は――を囀る　賴三三〇一
萌え出づるも枯るるも同じ　佛△二七九五
萌黄匂ひの鎧着て　箙三六五七
萌黄緋縅赤絲縅　鉢△三五六三
木向
　王藤に――といふ紋を現す　皇一五一二
木火土金水
　句を分つて五體とす――なり　雨三三六
　五行の神まします――これなり　淡一四七
木火土の精伊弉諾となり　淡一四七・逆△三二〇
木穗樹
　その軸より――の木生ひ出で　道明一八三九
木像
　今の尊を――に作り明暮呪咀す　松山鏡△八七三
目前の御誓ひ　淡一四六
目前の奇特あらたなり　石一三七九
目前の妙光の影　舍一三九〇
藻屑
　波の――の寄るべもなくて　舍三一四二〇

本願の寺　本賊三三〇八
日課にて御日にかけ　春栄一四一〇
門司赤間や[illegible]の草[illegible]　[illegible]五一
文字消えて薄くとも　夜三三六八
文字の[illegible]つき違ひたり　草子一一九二
もじの關守
　誰が玉章の――　和三〇三三
門司の關の戸あかせや　碇二五二
文字の違ひのややあれば　梅四二七
藻鹽草
　かき集めたる――夜の汀を　[illegible]四五四
　和歌の浦わの――かく喩へ置く　志一三九六
　和歌の浦わの――波よせかけ　草子一一九四
藻鹽草書くや言の葉の　關寺一六一九
藻鹽たれつつわぶと答へよ　忠度一九八　松風六八二
藻鹽焼く煙も今は絶えにけり　高[illegible]三
文字を立つれば宗體に背く　放下二四四六
裳着
　手弱女の袖も――もたなびき　西王一五七五
裳裾の穢れ給ひしを　第一七七二
鵙の草ぐきならぬ身の　雲雀三六四七
甕
　玉の――を取り出でて蘭の水を　[illegible]六八二〇
甕の竹葉は影や緑を重ぬらん　養上歌三二三五
持網　阿[illegible]八

持ちかぬる汐汲む桶の苦しきに　[illegible]三〇七
もち顔たらぬ身にしあれと　[illegible]七四
もち汐　藏三三三〇
もちずり
　陸奥の忍ぶ――　[illegible]四六八・[illegible]三三四[illegible]・[illegible]四六七
〔望月〕　三〇三九
望月
　類ひなき名を――の今宵とて　三井二九九三
　類ひなき名を――の見しだにも　[illegible]四八〇
望月の秋長にあへなく討たれ　[illegible]四
望月の駒
　今や引くらん――　蟬一六八一
望月の駒の頭も見えねば　俊七二八
もぢり羽になつて　大會一七八七
物故平の知章　知三三四〇
もつこん百官衢を突き　碇二六〇
勿體なき御働き　[illegible]六
以ての外に御入り候　熊野三三四二
以ての外に違例し　[illegible]一五二七
持つべきは兄弟たり　春栄一四〇九
もてあつかうて候よ　白一三二七
もどかしきとて　百△二六七〇
もどかしと太鼓打ちたるや　富士太鼓二七〇六
もと來し道に行き過ぐる　女[illegible]四九二
本巣の郡に不思議なる泉出で　養[illegible]二一七

本立ちて道成る　[illegible]七
もとの[illegible]　[illegible]
本のあらまし
　枯野の荻――　[illegible]五
もとの心
　白眞弓――を獻くたり　[illegible]六
本の撓りの古卑に　[illegible]三八
本の雫
　末の露――もとしやさし　[illegible]六
もとの雫の[illegible]語
　末葉の露の消え易き――　[illegible]二八
もとの水
　しかも――にはあらず　[illegible]二五
本の社
　うさにぞ返す――に　八四七
もと降る雪に道を忘れ今降る雪に　[illegible]
末なるに能にて
　朝に一鉢を得ざれども　[illegible]一三
〔求塚〕　三〇九
求塚[illegible]　[illegible]六五
髻
　香雲――をきり半ば棺に沈す　[illegible]二六七六
元結切りかやうの姿と觀りたり　[illegible]九八
元結切り暮に失せ　仲三一八
元結切り遁世せばや　松山鏡二八七二

元結更にたまらねばさねかづらにて [illegible]一五九一
もとより藥の水なれば 枕二八一九
もとより鼓は波の音 [illegible]二一六〇
もとよりも浮世の旅に又出でて [illegible]道行二五〇
もとよりも現り假なる一つ世の [illegible]一五三三
もとよりも塵に交はる神心 代上歌一四八〇
もぬけの衣
魂は冥途に——の 松山鏡二八〇
ものいひさがなき事のあるまじ [illegible]一三六三
物いひさがなき世の人の [illegible]三一八
物思ひ立ち舞ふ袖 [illegible]二五四二
物思ひに立ち舞ふべくもあらぬ心 小督二一〇九
物思ふ春の花盛り 夜三二七四
物狂 [illegible]一六・[illegible]六五八・櫻二三九。([illegible]二〇七一・百二六七四・水無月二九四)。三井三〇三
物狂の狂ひさむる心や 高野六〇八
物狂も思ふ心のあればこそ 花筐二五八五
物狂を待たうする [illegible]一五二一
物越に聞きしたり 仲三三一三
物越より御管候へ [illegible]二〇一三
物毎に遮る眼の前 [illegible]一三七五
物その物にあらざる氣色 [illegible]二五六四
物咎めし給ふ御神
蟻通の明神とて—— 蟻二八
物に狂ふは何事か [illegible]三三九二

物に狂ふも別れゆゑ [illegible]
物のあいろが知れぬ [illegible]
物のあはれ
武士も　は知るものを [illegible]一六五八
物のあはれを知らざるは唯木石に [illegible]
物のあやめも見ぬあたりの [illegible]三三二四
物の具一領長刀一えだ [illegible]二五六〇
物の具心靜かに脫ぎ置き [illegible]二三八七
物の具取つて肩にかけ [illegible]三三五三
物の具なれや鳥甲 富士太鼓二七〇六
物の氣
葵上の御—— 葵一五七
氣疎き——の人失ひし有樣 夕三三一八
山伏は——などこそ祈れ [illegible]二〇三五
物の氣の身に添ひて 浮三三〇
物の名も所によりて變りけり [illegible]
物の名も所によりて變る 蘆五一
物の隙より [illegible]一四〇五
武士
名を惜しむ——の 通盛二九〇一
身こそは沈め名をば沈めぬ—— 二人三七三二
武士の心慰むる [illegible]六〇
武士の猛き心をしるべにて 關原一六三九
武士の八島にいるや梓弓の 八島上歌三一五八
武士のやたけ心ぞ恐ろしき [illegible]

武士の矢橋の浦の渡守 [illegible]
武士も物のあはれを知るものを [illegible]一六五八
武士も和らぐ [illegible]
物見
車の——もつつましや [illegible]
これを——とこの寺の [illegible]
これを——に御隨身 [illegible]
物見車の樣々に [illegible]
物見せてくれん [illegible]
物見たりげに百萬が姿は [illegible]
もののあいし明暮に [illegible]
もののしおのれ等に [illegible]
物々しやおのれ等よ 夜三二七四・烏三四三六
もののしや手並は知りぬ [illegible]
物病み
人待つ女——[illegible]の [illegible]
物笑ひの種蒔く
友島の御——や [illegible]九五三
揉みあひ追つかけ [illegible]
紅葉(コウエフをも見よ)
龍田川——亂れて流るめり [illegible]
龍田川——を閉づる薄氷 [illegible]
龍田初瀨の—— [illegible]
紅葉襲
かづける衣は—— [illegible]

紅葉襲の薄氷　龍田一九三三
紅葉襲の袂を共に濡し　一角二八二
紅葉重ね花重ね(古法)　烏三四三七
紅葉川(富山)
　青葉に見ゆる――　藤二七三五
〔紅葉狩〕　三〇七九
紅葉狩
　秋は時雨の――　鶯一二一七
　時雨を急ぐ――　紅三〇八〇
紅葉衣
　片敷く袖も――の　紅三〇八六
　龍田山の――の　逆一二〇八
紅葉三寶院　高野六一三
紅葉と申すは當社の神體　龍田一九二五
もみぢに置けば紅なり　身三九五一
紅葉の秋
　花の春――誰か思出となりぬらん　千一七〇五
紅葉の雨と降る　賀七三九
紅葉の色も八葉の葉即ち不の叟先　龍田一九三一
紅葉の歌は帝の御製　龍田一九一五
紅葉の賀の秋の落葉もよしや　蕉比一〇三八
紅葉の賀の巻に正三位に叙せられ　須一四九七
紅葉の錦
　時雨に濡れて洗ひしは――　草子二一九五
紅葉の橋の鵲　善知三九二
紅葉の葉袖

　秋に時雨の――　鶯二〇九九
紅葉の八葉も即ち不の叟先とかり　逆一二〇八
紅葉の御幸早めん　花筐二五八四
もみぢ葉
　流れもやらぬ――を　紅三〇八一
　昨日は薄き――も　六浦三〇一六
　山にさき立つ庭の――　八嶋三〇一一
もみぢ葉を分けつつ行けば錦着て　舊一二六〇
紅葉も高き稲荷山　融三三八
紅葉も徒らにただ闇の夜の錦たり　逆二一六五
紅葉を神木と崇め　龍田一九一七
紅葉を幣の神慮　龍田一九二八
採之枝　翁八九
桃
　三千年になるてふ――の今年より　西王一五七三
　西王母の園の――　西王一五七一
　閬生に植うる――の三千年に　[illegible]
　窓の梅園の――　通小七六五
百枝
　影も――の松風の　御二九九九
百家仙洞の交はり　[illegible]一八
百囀り
　老の鶯の――の春は來れども　關寺一六一三
　花に戯れ――の蝶立て　雖三三四
百敷の舞には大宮人のかざす　放生二四六七

百敷や大内山の山守も　卒一七三二
百入千入に深き[illegible]錦の秋　飛雲二六一七
百度千度[illegible]るたれば　黒一二五七
百千鳥囀る春は物何に　西行二一七・東北三二七
百千鳥花に馴れ行くさえたし竹は　山姥四五・[illegible]三七
百年に一年足らぬつくも髪　卒一七三六
百年の姥と聞えしは小町が果の名　[illegible]一六三
百年の姥となり　[illegible]五・卒一七[illegible]
百年は花に宿りし胡蝶の舞　關寺一六二三
百に百矢を射るに外さず　花一[illegible]四
桃の花を鏡に映せば即ち仙女の姿　昭一五八六
百や萬の舞の袖　百三六七六
百夜
　暁の榻のはしがき――まで　卒一七九九
　車の榻に――通ひし所を　通小七六九
　錦木の千度――いたづらに　錦木三三四五
百夜草
　さきだたぬ悔の八千度――　是八三六
　百夜を同じまろ寝せんと詠み　錦木三三五七
　濁らさじの誓ひの船に法の人　礎二五三
盛綱　藤戸二七七七
盛綱
　佐々木の三郎――　藤戸二七七九
森の下風木の葉の露　千一七〇九
森の下草たほ寒し　東一〇六三

〔盛久〕 三〇九三
盛久 盛シテ三〇九三
盛久
　主馬の――一曲一奏の事 盛三一〇九
盛久は平家譜代の侍武略の達者 盛三一〇九
守乳母
　いつしか――まで心變りし 小袖一一三三
守山(滋賀) 望所三〇三九
守山の宿 望三〇四〇
もる山(滋賀)
　白露も時雨もいたく――は 飛雲三六一七
　露時雨――は下葉殘らぬ色とかや 六浦三〇一六
守山の下葉色照る日の影も 鳥三四一七
諸兄
　撰者は橘の―― 草子一一八九
唐土が原もこの所 盛三一〇九
唐土に陳氏とて賢女の聞えあり 松山鏡クセ三八七九
唐土の門出 紘一〇四六
唐土の空は雲居に隔て來て 富士山道行三六八六
唐土船の楫枕 唐一聲一八〇七
唐土舟の名殘 江口四八二
諸白髮
　老い重なりて―― 融三三三
師長 紘ツレ一〇四三
師長

　太政大臣―― 紘一〇四五
諸膝かけず流れてかつぱと倒れ 錦戸三三七三
諸膝かけて切り放し 忠信一九〇〇
諸膝薙ぎ給へば 烏三四三八
諸人の鑑となりてますらをの 楠ツカ九一七
門(カドをも見よ)
　僧は敲く月下の―― 東北三三〇〇・融三三三四
聞我名者斷惡修善 安達一三〇・飛雲三六三〇
文者
　土佐は聞うる――にて 正一三六六
文殊
　一萬――三世の覺母たり 卷三八一一
　三世覺母の大聖――をこの島に 九世九一五
　獅子には――や召さるらん 紘一〇五八
　天竺五臺山の――を勸請の地 九世九三〇
　槃特が愚癡も――の智慧 卒一七三四
　普賢――左右に居給へり 大會一七八五
文殊の淨土淸涼山 石一三七六
文殊の御顏を拜むなり 卷三八〇九
文殊の敎へにて龍女は須臾に法を 現一〇一七
文殊菩薩の從者 石狂言一三七三
門前の者(石山寺) 源氏狂言一〇三五
門前の者(雲居院) 自狂言一三三五
門前の者(北野) 鵺三三七三
門前の者(淸水) 花狂言九九九・田一九八五・東岸狂言三一六五

門前の者([illegible]) 百狂言三六六七
門前の者(東北院) 東北狂言三三八九
門前の者(初瀨) 玉葛一九七七
門前の者(支那) 三笑狂言一六八一
もんだはず
　兎角の是非を―― 安宅九七
問答は無益 安宅九〇
聞法
　見佛―― (その項を見よ)
　唱へ行ふ――の聲 高野六一三
聞法隨喜のその爲には一滴も 身三九五三
聞法値遇の結緣に 舎一三六八
聞法の便りのみ大井の波の 松尾六八四七
聞法祕密の法味に預かり 出三三四二

や

矢
愛染は方便の弓に――を矧け　熊坂九三七
愛染明王は慈悲の――にて　[illegible]一九九
桑の弓蓬の――にて世を治めし　弓三三六
智慧の――をはめて　田三〇〇〇
方便の――をつまよつて　放下二四四五
引かぬ弓放さぬ――にて射る時　放下二四四六
弓――　→その項を見よ
矢合は明日たるべし　木曾八一九
夜遊
旅人の――を慰め申すべし　[illegible]三四七七
月の――を見せ申さん　吉天三三九一
躑躅は――の人の折を得て　雲雀二六四五
名殘惜しの――やな　西行一一七八
更け行く月の――をなし　六浦三〇一七
夜もすがら――を慰め申さん　紫雲三六一七
夜遊の神祭　大社五八三
夜遊の曲　雲林四六九
夜遊の友に馴衣の　松蟲三八五六
夜遊の舞樂はありがたや　白鬚一四七三
夜遊の舞樂は面白や　大社五八三・松山天二八九一
夜遊の舞樂も時移れば　雲林四六九
夜遊の舞樂も時去りぬ　天二一四五
夜遊の舞樂も時過ぎ　竹生二〇四〇・寶[illegible]四〇二
夜遊の別れとどめよ　經二〇九〇
夜遊も時過ぎて　[illegible]四五六
夜遊を奏して舞ひ給ふ　[illegible]三五八一
奴の驗德を顯し　[illegible]三一八
奴は雲を亂したれば　小鍛一一三三
八色雲の立つを御覽じ　俊成一四四四
陽
天は――を以て德とし　松尾三八四六
樣ありげなる峽　松風三八三三
樣ある人　[illegible]七三五
やうか
股の――は父を討ち　春榮一四〇八
影向
あらたなる御――　弓三三三四
ありがたの――や返す心も住吉の　[illegible]三六八
ありがたの――や月住吉の　高砂一八七三
春日山本宮の峯に――　[illegible]三九九
この花に――なるものを　[illegible]二〇六
今月は神有月とて諸神――なり　大社五七五
諸天來去の――かた　[illegible]三一三九
富士淺間の唯今の――　富士山三六九四
[illegible]天――の地　[illegible]四九一
影向の時節も今幾程によも過ぎじ　[illegible]一四七九
楊家の深窓に養はれ　[illegible]一四
楊家の女たるによつて　[illegible]三二六
やうがまし　箙△一〇
陽感
あまねしや天滿つ――　[illegible]八三
〔楊貴妃〕　[illegible]
楊貴妃
楊貴妃の花の容誘ふ風を靜めん　[illegible]九八九・[illegible]三二三
陽花殿月花門　[illegible]一五三三
やうこくよりも立ち廻り
花の冠を傾けて――　[illegible]四六七
楊枝
吾今三點――淨水唯願薩埵　朝三三六八
陽春の德を具へて　高砂一八六五
楊子の市に出でて酒を賣るならば　[illegible]一三五〇
楊子の里(支那)　[illegible]二二五〇
陽成院　[illegible]一五
陽臺(支那)
雲となり雨となり――の時　松山鏡一八七一
巫山の雲は忽ちに――のもとに消え　[illegible]三一
樣體
關の――を見て眞に山伏を脩むか　[illegible]八六六
道の――をも御尋ね　由[illegible]二六八

[illegible]　殺△一六四二
煬帝がけいの翫周室の光を奪へり　[illegible]二一六
[illegible]
　[illegible]より　[illegible]を出だし　[illegible]八五三
[illegible]を迎へず　[illegible]
陽に向へる花木には又春に逢ふ[illegible]　[illegible]三四一
[illegible]の色香に染める　[illegible]三四一
[illegible]山（[illegible]）
　[illegible]の――[illegible]　[illegible]七六
やうやう
　[illegible]長刀――に潰たへ　[illegible]
[illegible]
　それは――これは花月　[illegible]三〇三
[illegible]に[illegible]の[illegible]をたれ　花一〇〇四
〔養老〕
養老山[illegible]　二三七
養老と名づけそめし謂れ　養シテ三三二七
養老[illegible]（[illegible]）　[illegible]三三
[illegible]　[illegible]三三七
[illegible]　春日六七四
　宮前の――寺前の花　選三三〇三
　[illegible]する　宗八七三
[illegible]
　[illegible]に――と[illegible]れ　[illegible]二〇三
　山[illegible]の宮居又は――菩薩　[illegible]三二三
[illegible]　[illegible]一〇六〇
[illegible]の[illegible]に[illegible]如し　[illegible]一三〇
やうりが謀にて敵を亡ぼし　[illegible]一七三
[illegible]に[illegible]　[illegible]一四三
[illegible]　[illegible]一一三
[illegible]の[illegible]なりし時　[illegible]三六
[illegible]の[illegible]きて　[illegible]三五
[illegible]
　[illegible]の[illegible]　[illegible]八〇八
[illegible]に[illegible]　[illegible]一六四五
[illegible]　[illegible]二一五・[illegible]三五三五
[illegible]
　[illegible]世界の主――忽然と出て　白[illegible]一四六九
[illegible]
　[illegible]宮――の浄瑠璃浄土は東にて　[illegible]三〇三六
　中の[illegible]は――　[illegible]二八一一
[illegible]の[illegible]千手の[illegible]　[illegible]三二六
役者を[illegible]　[illegible]二八五
八雲
　歌は――をさきとして　[illegible]三四四六
八雲立つ出雲の國　[illegible]
八雲立つ出雲八重垣妻ごめし　[illegible]
八雲立つ出雲八重垣妻ごめに　[illegible]一四四四
八雲立つ出雲八重垣[illegible]に　[illegible]二〇六
八雲[illegible]に八重垣[illegible]　大[illegible]三五〇九
[illegible]
　大太刀おつ取り――に上り　[illegible]三二七三
　[illegible]かいたてをあげ　[illegible]八六
[illegible]
　[illegible]――に似たり　[illegible]三一七
[illegible]　[illegible]
[illegible]を[illegible]し　[illegible]一二二五
夜月
　[illegible]を守る[illegible]――に[illegible]ぶ　[illegible]三六九〇
　[illegible]を守る[illegible]に――に[illegible]　[illegible]二六八
焼野の雉子夜の鶴　[illegible]一八二九
[illegible]にな[illegible]ば[illegible]　[illegible]一二三
八[illegible]
　鶏は――のほのぼのと　[illegible]
八聲の鳥鳴いて　[illegible]三〇三
八[illegible]の[illegible]に　[illegible]三一七
[illegible]をかけ[illegible]に　[illegible]一四五〇
[illegible]て[illegible]を[illegible]　[illegible]
矢先
　[illegible]は――主は[illegible]　[illegible]
　源平互に――を揃へ　[illegible]
矢先を揃へ切先を[illegible]　[illegible]二六一
矢叫びの音波にたぐへて　[illegible]三一〇
矢叫びの[illegible]動せり　八島三二六一

彌三郎
　宇都宮の——　調二一三
養ひ得ては花の父母たり　熊野三二四一
養ひ得ては花の父母なる雨露の　嵐三一三六
八入に見ゆる　三笑一三八四
八入の岡のもみぢ葉　雪三六一六
八しぼりの酒を取り合はせ　大蛇三五一〇
〔八島〕　三一四三
八島（香川）　八島所三一四三
八洲
　槻弓の——の波の　善界一六〇六
八島に立てる高松の苔の筵は　八島三一五〇
八島にて景清が御高名　景六四三
八洲に治まる時つ風　佐一二七三
八洲の海までも波靜かにて　御二九六一
八島の浦（香川）　八島三一四五
八島の合戰に討たれ　攝一六五二
八洲の國
　名も二柱の神ここに——を作り　金八七一
八洲の國を求め得し　淡一五一
八洲の雲をさまりて　弓三三三
八洲の波靜かに照らす　雉二三二八
八洲の波も音せぬ九重の　羅三三四八
八洲の外まで波もなく　雉二三三三
八島へ追ひ落し　碇△二五六

八洲も同じ大君の　[illegible]二六五二
夜叉
　外面は菩薩に似て内心は——　現一〇一七
　山神鬼魅——羅刹　江島四九四
夜叉鬼神島を作る　江島四九五
野心
　保昌に對し——はなけれども　羅三三五一
野人
　荒村の——　草薙八八一
やすかた
　うとうと呼ばれ子は——と答へ　善知三九二
やすかたの鳥の安からずや　善知三八九
易き間の御事　烏三四一六
易き間の事　歌三五七・保四〇一
安く生まるる蓮葉の臺の緣　鵜一五五七
安く樂しむ時とかや　代一四八三
安田の莊司友治の妻や子　望三〇四一
泰成
　安倍の——占つて　殺一六四〇
野洲の川（滋賀）
　幾瀬渡りの——　船橋二七五五
康秀
　文屋の——が三河の守になり　關寺一六一六
泰衡　錦戸ツレ二三六一
泰衡われ等同心し　錦戸二三六五

保昌（ハウシヤウとも見よ）
　賴光——に仰せつけらる　大江山五五
休む重荷に肩を貸し　山二八一
康賴　俊寛ツレ一四二
康賴
　平判官——　俊寛一四三
八瀬（京都）　通小町七六一
瘦馬
　柳の絲のよれによれたる——　鉢二五六五
瘦せたりともあの馬に乘り　鉢二五六〇
八瀬の山里に一夏を送る　通小町七六三
八十島
　天の原——かけて漕ぎ出づる　[illegible]六一
八十瀬
　鈴鹿川——の波にぬれぬれず　野宮[illegible]
やたけ心
　運も槻弓の——も　生二七一
やたけ心の花にひく弓筆の名こそ　百五一一
やたけの心あらはれて　成上歌七九四
〔矢立鴨〕　賀茂稱七三一
八咫の鏡は殊にたは御影を寫し　御二九六六
八玉垣の内外の宮居　御二九七〇
八千代をこめし玉椿變らぬ色を　三輪二九八五
八裂に裂き給ひ　咸八〇三
八つの國となつて大八洲の國と名づけ　逆一三一三

八つの苦しみ
　人間界に生まるれば――離れず　春栄一四一三
八つの谷
　法性隨緣の月の影は――に　高野六一三
奴はこれこの國の津神なり　大蛇三五〇八
八橋(愛知)　杜所六一七
八橋
　三河に渡す――の蜘蛛手に物を　賀茂物七五四
　三河に渡す――の雲居の都　景六三四
　三河の國――とて杜若の名所　杜六三〇
　水行く川の――や　千一七〇七
八橋の雲居の都いつかまた　千一七一〇
八橋の澤邊に匂ふ杜若　杜六二七
八橋や高師山　盛三〇九七
八撥
　簓――うち連れて　東岸二一七三
　さゝらも――をもうち捨てて　土車二〇七六
　花若殿は――を御打ち　望三〇四八
八撥を打つて聞かせう　藤栄二一五九
八撥を御打ち候ひて　花△一〇〇七
矢坪を指してひやうと放つ　摂一六六一
屋づま
　人ありとも見えぬ――より　胡一一四四
屋づまより女の歌を吟ずる聲　夕三二一
八目の藁鞋は八葉の蓮華を踏まへ　安宅九一

八劒の神徳　源太一〇六八
八劒の宮(愛知)
　叢雲の劒と名づけしこそ――　源太一〇六九
やつれ果てぬる旅姿　鵜飼上歌一九九
宿
　いづくとても住めば――　百二六七七
宿定めなく捨つる身の　碇二五〇
宿はと問はれてなしとはいかが　小督一一〇七
寄生木　木賊三三〇九
寄生木
　梅檀の蔭に――　源氏一〇五九
　花の蔭に――の行く方知らず　忠度一九一三
柳
　川岸の根じろの――あらはれ　藤栄二一五六
　胡國へ遷されし時この――を植ゑ　昭一五八四
　しるしに――を植ゑて　隅一五三八
　昭君の黛は――の色に異ならず　昭一五九三
　それは――これは櫻　花一〇〇四
　玉にも貫ける春の――の　遊三三〇四
　未央の――の絲も　楊三一一九
　未央の――も力なし　吳九九一
　養由は百歩に――の葉をたれ　花一〇〇四
　龍池の――の色は雨の中に深し　三井三〇〇一
　折る――落つる梅　藤二七三三
柳(福岡)

　豐前の國――といふ所に着く　清八五〇
柳色の狩衣も風折も　遊三三〇三
柳が浦(福岡)
　豐前の國――の沖にして　[illegible]八四[illegible]
柳蔭
　道のべに淸水流るる――　遊三一九七
柳櫻
　見渡せば――をこきまぜて　白[illegible]四[illegible]・西[illegible]一一七七
柳櫻をこきまぜて錦をかざる諸人の　盛三〇九六
柳櫻をこきまぜて錦をさらす　[illegible]三〇二
柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦たる　賀茂物七五五
柳さび　雲林四六[illegible]
　烏帽子も――たる有樣　[illegible]二〇〇
柳の絲のよれによれたる痩馬　[illegible]五六四
柳の髮
　亂るるは――か春雨の　籠三三九四
柳の髮をも風は梳るに　[illegible]一六八〇
柳の曲　[illegible]三〇四
柳の德
　工み出だせる船の道これも――　遊三三〇三
柳の一葉
　嵐に散る――水に浮かみしに　白一一四一
柳の一葉の上に蜘蛛の乘りて　遊三三〇三
柳の一葉水に浮かみしに　藤栄二一五八

柳の下に人の多く集まりて　閣一五六六
柳は風に吹かれ絲筋く垂れり　閣寺一六一三
柳は緑花は紅　東岸二六八・放下二四四八・芭二五六六・山三一八一
柳桜に梅花を亂す　狂七二四
柳條に梅花の枝をさし　狂五一七
やはか御承引候べき　[illegible]三八四
やはか退かぬ事は候まじ　烏三四二八
矢橋　狂所七一五
矢橋(近江)
山田――の渡舟　狂七一七・白一三三三・三井二九九七
矢橋の浦(滋賀)
近江路や――に　狂七一七
春立つや――の朝霞　内三七二
矢橋の渡守　狂狂言七一五
〔八幡〕　放生異稱二四五三
八幡(ハチマンをも見よ)　放生二四五五
八幡に祈り掛帶の　富士太二七〇一
八幡の御神事　放生二四五八
八幡の里(京都)　放生二四五六
八幡の神力　木賊八二四
八幡の宮　木賊八二三
〔八幡放生會〕　放生異稱二四五三
八幡山(京都)
照る視弓の――．　放生二四五七
八幡山に參詣　弓三二三

夜馬に鞭打つ人影の　張二〇四九
やはらやはら打たうよ　籠三三九六
夜半樂
頃は――眠りを覺ます折節　[illegible]二〇八九
夜半樂にもはやなりぬ　天二一四五
夜半樂を奏でん　梅枝四四六
破れ蓑破れ笠　卒一七二七
彌平兵衛
兵衛の佐をば――が手に渡り　朝[illegible]三七〇
八重垣
八雲立つ出雲――妻こめし　大社五七六
八雲の妻ともに――造る言の葉の　大蛇三五〇九
八重垣つくるその八重垣を　源太一〇六六・俊成一四四四
八重櫻
九重に咲けども花の――　西行一一七七
奈良の都の――咲きかへる　雲雀二六四九
八重櫻の都　春日六七五
八重疊
雲の――を敷き　玉井一九七九
八重の潮路の浦の波　清次第八四三
八重の潮路の旅の空　須次第一四九二
八重の潮路をはるばると　[illegible]五〇七・知三三三九
八重の潮路を行く舟の　絃次第一〇四五
八重旗雲をしるべにて　弓三三三九
八重一重

雲かと見えて――　熊野三三四七
花見車の――見えて櫻の　右三四三
見渡せば――げに九重の春の空　田一九八九
八重葎茂れる宿のさみしきに　紅三〇八一
八重山
雲の――いかばかり　飛雲三六一四
八重山吹も隔てぬ梅の　[illegible]一一五一
八百萬神も引きます　木賊一八一七
八百萬の神遊びこれぞ神樂のはじめ　三輪二九八七
八百萬の神達聞し召し給へ　円三七五
八百萬代に至るまで　弓三三三
八百萬代の末までも　賀茂三三七
八百萬代を治むなる　[illegible]第四五一
山
足引の――といひ　[illegible]一三二三
隠れ所の――といへども　西行一一七三
衣着ぬ――の帶をするかな　白鬚二四七六
黄金の――を築かせては銀の月輪　部七八三
白雲かかる――となるまで　正一三六五
銀の――を築かせては黄金の日輪　部七八三
翠黛の――．　大原五四一
時知らぬ――は都の富士なれや　竹生二〇三六
白雲帶に似て――の腰を圍る　白樂二四七五
山藍に摺れる衣の色添へて　賀茂物七五三
山藍の袖　賀茂二一〇九

山藍の羽袖　雲林四六九
山青く山白くして雲來去す　熊野三三四七
山海遥として霜侵せる紅樹　枕六八一七
〔山姥〕　三一六五
山姥　山シテ三一六五
山姥
　衆生あれば――もあり　山三一八一
山姥が山廻りするぞ苦しき　山三一七九
山姥とは山に住む鬼女　山三一七三
山姥の歌の一節謡ひて聞かさせ　山三一七一
山姥の事を山に住む木戸と申し　山△三一七六
山姥の山廻りするといふ事を　山三一六七
山姥は生所も知らず宿もなし　山三一八一
山隠す霞ぞ春は恨めしき　安宅八三
山隠す春の霞ぞ恨めしき　海一七三
山神樂　放生二四六二
山陰の賀茂川や末白河の　東北二二〇〇
山陰の賀茂の御手洗いさぎよき　代一四八三
山陰の賀茂の宮居を立ち出でて　生道行二六七
山風荒く吹き落ちて　角上歌二八三
山賤(やまがつ)
　心なき――の身にも應ぜぬ花好き　小鍛三四五九
　これなる――を見れば　志一三九五・雲雀二六一五
　その様賤しき――の　志一三九六
山賤なれどもこの花に　須一四九五
山賤の垣は荒るとも折々は　半二五〇三
山賤の樵路に通ふ花の蔭　山三一八一
山賤へきらといはれし　須一五〇三
山かづら　佐一三七七
山葛
　月落ちかかる――の　佛二七九七
山鹿の城(福岡)
　九州――へも敵寄せ來る　満八五〇
山雀
　瓢箪に宿る――　鞍△九五一
八卷の法の花の紐　現一〇一三
山草
　紫染むる――の　雲雀三六四三
山蜘蛛の巣にあたつて　大會△一七八三
山越近き志賀の里　竹生二〇三三
山越えて近江路なれや　熊坂道行九三三
山崎(大阪)
　津の國――とかや申し候　女三四八九
山崎(京都)
　急ぐ行くへは――や　生二六七
　面影隔つる――や　住一五四〇
　霞隔たる――や　梅四二五
　都を隔つる――や　忠度一九〇六・藤榮三一四九
　淀――をうち過ぎて　歌一二五
山崎も過ぐれば後にはやなりて　紘一〇四六
山櫻
　たぐひ嵐の――よその見る目も　鉢三〇八七
　三吉野の志賀の――　吉三〇六五
　昔ながらの――　志一六九四・竹生二〇二四
　昔ながらの――かな　俊成一四四三
　昔ながらの――は青葉にて　兼七二一
山里海川も皆修羅道の巷となりぬ　田五一八
山里の折りかけ垣の梅をだに　鉢一五五八
山里はものの寂しき事こそあれ　大原五三八
山下庵　檜二六二六
山下の者　小鍛三二二一・逆鉾三三〇一・志鉾三一九一
山下水
　泰山の　その巖石を切石　全八七三
山科(京都)
　夕陰の――の里人も咎むなよ　蟬一六八一
山科の里近き　蟬三三〇九
山科莊司　戀重一一五三
山科の莊司とて賤しき者　戀一一五五
山科結び　鞍△九五一
山住のめづらかたりし有樣　谷行三一九
山育ち
　童子もさすが――　大江五六三
山田の鹿の如くなる臥所荒れたつ　竹生一八八〇
山田の次郎　會△七六二
八岐大蛇　大蛇シテ三五〇三

山田守るそほづの身こそ悲しけれ　三輪二九七九
山田矢橋の渡舟　袋七一七・白一三三三・三井二九七九
山路の奥の水にては　春三一三五
山路の菊の酒　安宅一〇一
山路の菊の水汲めや掬へや　枕二八二〇
山蒼きず
　山外に山あつて――　熊野三三四七
耶摩天
　化天・――他化自在天　舎一三九五
　化天――にてもなく　春一七四〇
山寺の春の夕暮来て見れば　三井ク七三〇二
山寺のや春の夕暮来て見れば　貞成一七九五
山といつぱ塵土より起つて　山三一七九
大和歌
　大きに和らぐと書いて――と　白楽二四七五
大和歌の起りは　草子一一九八
大和詞
　詞は――なり　岩三六八
大和島根
　敷島の――まで動かぬ国ぞ　大仏五七八
日本武
　みことのりの御名を――と申し　小鍛二一一七
日本武尊　草薙シテ八七九
日本武の尊
　景行第三の皇子――と申すは　源大一〇六七
日本武の尊宝剣を守る神となる　草薙八八六
大和撫子の花だにも　一八一八
大和にも織る唐衣の営みを　畏九七九
大和にも織る唐錦　第一三〇三
倭姫の命
　垂仁天皇の皇女――　御二九六三
倭姫の命七百歳に至るまで　第一七七三
山蒼うしては雲行客の跡を埋み　一角一壁二七八　雪七九四
大和舞
　ふるき――拍子を揃へて　代一四八八
大和舞の歌　六九四
大和唐土吹く風の　富士山次第二六八五
山鳥
　思ひ隔てて――のおろかに　松山八七五
　谷を隔つる――の尾を横む峯の　竹生一八八五
山鳥の尾にてはいだりける尖矢　三八五
山中(山中)　関原所一六三五
山にさき立つ庭のもみぢ葉　六浦三〇一
山にも春はなくなりにけり　桜一三四〇
山の内(神奈川)　六五一
山の鹿
　思ひは――にて招くと更に　通小七六八
　招かれて――　一一三三
山の神
　吉野山に住む――　八五九四
山のかひより見えしままま　西行一一七三
山の神とも人や見るらん　志一三九九
山の主となつて　一四七〇
山の端出づる如くにて　竹生二〇四〇
山の端の心も知らで行く月は　三五三・一一二
山の端の月
　仄かに照らせ――　三三九三
山の端の笹葉
山のへの御井を見がへり神か頼の　通小七六五
山の井
　浅香山影さへ見ゆる――の　采四〇八
　浅香山の影見えし――の　三三八
　掬ぶ手の影さへ見ゆる――の　三一三六
山は浅きに隠れなの　卒次第一七一八
山は雨をかけまくも　三一八
山は雨も霊山となり　大会一七八五
山は小さき土くれを生ず　一六八四
山は岩城の蔭手なついて　満八五四
山鳴色をうつしつつ　畏九八三
山は動ずる影を現じて　春日六七〇
山は動ぜず
　風は吹けども――　淡一五三
山鳴鼓を鼓へつつ　八三四
山は上りて上求菩提の機を勧め　三四

山は松風すは雪よ　景六四一
山は水の心に任せ　江島四九七
山は雪麓は霰里は雨　葛八六九八
山彦
　形はさながら——の聲ばかりして　錦一四五四
　袖に響く——の　山三一八〇
山人
　翹傳ひを——の來り　鹿屯三三六二
　薪を重き春の　赤一三九五
　薪を負へる——の花の木蔭に　會雲三六一六
山人の笠も薪も埋もれて　葛六九三
山人の折る袖匂ふ菊の露　一角三八一
山姫
　なに——の布晒すらん　作一三七〇・宇三〇三三
　春を守る神といつぱこの——の　佐一三七二
山姫の衣ほす袖白妙の　作一三六九
山吹
　岸の——咲き亂れ　大原五四〇
　三吉野の岸の——風吹けば　松山鏡二八七七
山吹の襲の衣を懸け給ふ　同一一四八
山吹の瀨に影見えて　類三三〇二
山伏　鼓シテ九四七・車シテ九六三・大會シテ一七七七
山伏　安宅八〇・谷一九六九・[illegible]二〇〇六
山伏（[illegible]を見よ）
　熊野へ年詣でする——　道成一七九九
　卽身卽佛の——　安宅九一
　判官殿十二人の作り——となり　攝一六五三
　羽黑山より出でたる——　葛六九一・野守一四三三
　本山三熊野の——　飛雲二六一四
山伏攝待
　佐藤の館に於て——　攝一六五〇
山伏の打つ火かとこそ見れ　葛六九五
山伏の姿に出で立ち　大江五五五
山伏の兜巾篠懸苔の衣　谷一九四四
山伏の橋をば渡し給ふべし　船橋二七五八
山伏は貝吹いてこそ逃げにけれ　安宅八八六
山伏は物の怪をとこそ祈れ　葵二〇二五
山ふところの宮木に草を結び　雲林二六四九
病ふは苦しき習ひ　土蜘二〇五九
山時鳥語らへて　[illegible]六八
山時鳥誇り顔なるに　[illegible]四〇九
山郭公の一聲も君の御幸を待ち顔　大原五四〇
山また山いづれの工か青巖の形を　山三一七七
山又山の雲を經て　東北二一九一
山又山の行く來を　[illegible]第二七五四
山又山を越え過ぎて　大社五七五・[illegible]九九五
山又山を越え行けばそことしも　[illegible]七七八
山又山を遙々と越路の　藥次第二七二四
山又山を分け越えて　葛六九一
山までも浮世の嶮岨になるものを　西行一一七三
山廻り
　月見る方にと——　山二六八二
　花を尋ねて——　山二六八二
　山姥が——するぞ苦しき　山二一七九
　雪を誘ひて——　山三一八三
山も內外の神垣で　[illegible]次第二九五九
山も霞みて浦の春　[illegible]次第二一七
山も霞みて白雪の消えし跡こそ　二人二七一四
山も川もおぼろおぼろとして　類三三〇二
山も動ぜず　龍田一九三三
山本霞む水無瀨川　蘆四五
山本の里（群馬）
　十八町あなたに——とてよき泊り　鉢二五五一
山本の里までは程遠く　松風二八二五
山本の土中に籠め　女三五〇〇
山守
　百敷や大內山の——も　卒一七三一
山々谷々の者ども出で合ひ　國九〇二
山より出づる北時雨　定次第二一〇三
山より山の奧までも　菊次第八〇七・枕次第二八一六
山を遠く來て雲又雲を　[illegible]二九四
闇打　[illegible]一七七五
　親心の——に現なき　仲三三一六
　闇路に歸るこの身の　鵜飼三〇六
闇にも梅の木蔭かな　[illegible]四九九

闇にもしろき木蔭かた　梅四〇九
闇にも行く
　月にも行く──。　卒一七三九
闇の現に生まれ來て　天二一三四
闇のうつつの宇津の山　定二二一四
闇の錦のたとへても　眞八六一
闇の夜の錦なり　逆一三〇五・殺一六四〇
やみやみと生捕られ　春榮一四〇〇
やみやみと討たれ　朝三七一
やよかりおそよの　藤榮二一五六
やよ留まりて花の友　西行一一七〇
遣りかけて　車九七一
やる方たきこそ悲しけれ　葵一五八
やる方なさにかきくれ　船辨二七七五
やる方もなきこの身かな　小袖一一三三
やる方もなし　野宮二四一七
やるまいぞ　自△一三三〇
破れ車
　夕顔の宿の。　やる方なきここそ　葵一五八
八少女
　八人の──五人の神樂男　蟻三三・住一五四三
八少女の返す袂の色々に　白髭一四七三
八少女の袖もかざしの玉かづら　松尾二八五一

ゆ

庾公
　夜──か樓に登られねとも　竹雪一八八四
　夜──か樓に登りしも月に詠ぜし　三井二九九九
　夜──か樓に登れば月千里に明らか　雪二一八七
勇者は恐れず
　智者は惑はず──　八島三一六一
融通念佛を國土に弘め　三山九九三
雄略天皇に仕へ奉る臣下　善三一三七
瑜伽の法水をたたへ　葵一六四
ゆかり
　故も──もあるべからず　井二四〇四
ゆかりの色
　紫の──も緣ならめ　藤二七三一
ゆかりの名をとめて　求三〇六七
〔雪〕　三一八五
雪
　ああ降つたる──かな　鉢三五五〇
　天ぎる──のなべて降る　錦三四四六
　幾代積りし──ならん　二人三七一三
　今降る──もうと見し雪に　鉢三五五〇
　笠は重し呉山の──　烏六九二
　鹿子斑に──の降るらん　富士山一六八九
　二月の──は衣に落つ　富三三三〇
　花前に蝶舞ふ紛々たる──　東六六八・烏一一五一
　今日來ずは明日は──とぞ　小鍛一四六六
　標結ふ葛城山に降る──は　葛六九五・代一四八八
　空に知られぬ──ぞ降る　國一五八〇
　鳴けども──はふるき皷の　猩三三二七
　何と唯──や氷と隔つらん　東北三一七五
　白頭の──は積れども　養三一三一
　花と散り──と消え金谷の春　松山鏡三八七一
　窓の──夜學の人の燈火も　竹雪一八八五
　妄執の──消えたん　雪三一八七
　もと降る──に道を忘れ　鉢三五五三
行きあひ
　陰陽の二神天の逆に──の　歌三五五六
　神と君とは──のまのあたり　岩二九〇
　貴賤の人に──の轉び漂ひ　錦三三二六
行き合ひの間近くなり行く　鵜飼二七六五
行家　鸚リ＋一三
行家
　新大納言　鸚一五
雪落ちてげに豐年を見する御代の　氷二六五四
行きかふ袖の花の香に　第一七七一
往來の旅もゆたかにて　弓三三三三

往來の人にこれを代なし　雲雀二六三九
ゆききの舟も楫を絶え　和三〇三一
往來の利益の御爲ならば　水無瀨二九三〇
雪消ゆる白山風ものどかにて　藤道行二七二五
行き暮れて木の下蔭を宿とせば　俊成一四四一
忠度一九一〇
雪群山に滿ち　竹雪一八八四
雪群山に滿てり　雪三一八七
行桁
礓礫の——瑪瑙の橋　鶴二〇九八
雪乞はう　氷△二六六三
雪さし下す島小舟　賴三三〇二
行きては歸り歸りては行き　卒一七二九
雪とのみ積りぞ來ぬる年月の　融上歌三三三三
雪と降り雨となる　箙九五五
雪ならば幾度袖を拂はまし　志一三〇三・三井二九九五
雪には替し隱る
一千年の色とても——　春榮一四〇八
雪にも梅の冬籠り今は春べの　難三三六八
雪にも恨みなるらん　朝二二五九
雪のうちの芭蕉の僞れる姿　芭二五三九
雪の裡の芭蕉は摩詰が繪　芭へ二五三七
雪の内春は來にけり鶯の　朝上歌二二五九
雪の下（神奈川）　柏六五一
雪のしづりを搔き集め　氷二六五九
雪の白山尋ねん　佛二七八八
雪の精　雪シテ三一八五
雪の袖をかへし　蟻三三二
雪の竹淚や色を染むべき　竹雪一八八五
雪の袂を飜す　鶴二〇九九
雪の花
梢にかかるや——　雪三一八九
雪の古道跡深き　東九七二
雪の夕暮
佐野のわたりの——。　鉢二五五三
雪の女に言葉を交はす　雪三一八八
雪は奧の院　高野六一四
雪は鵝毛に似て飛んで散亂し　鉢二五五〇
雪はしぶき　氷二六六五
雪は豐年の御調物　難三三三三
行平の中納言關吹き越ゆると　松風二八一六
行平の中納言三年はここに須磨の浦　松風二八三五
雪間
春日野の——を分けて生ひ出で　班二六〇二
雪間あまたに野はなりぬ　求三〇六四
雪丸まかせ　氷△二六六三
雪まるめ　氷へ二六六一
雪三越路の白山は　歌次第三五四
雪見の行幸　鷺一二一七
雪も降りつゝ消えがてにする　雲林へ四六五
行きもやられぬ袖の別れ　藍三三三四
遊行十四代の流れ他阿彌上人　實へ一二四六
遊行上人　遊ワキ三一九一
〔遊行柳〕　遊三一九一
遊行の聖　遊三一九三
遊行の利益を六十餘州に弘め　遊三一九三
雪や氷と隔つらん　東岸二一七五
雪を聚めて春を惜しむ　班二六〇五
雪を受けたる童舞の袖　關寺一六二一
雪を誘ひて山廻り　山三一八三
雪を晴らさばや　雪三一八七
雪を廻らす
盃の——花の袖　松蟲二八六五
千重ふるや——雲の袖　融三三三三
花の袖——。　右三五〇
雪を廻らす木の花の　山三一七九
雪を廻らす袂かな　鸚四五五・玉井一九八三・紅三〇八八
雪を廻らす白雲の袖　羽二四九三
雪を廻らす花の袖　井三四一
雪を廻らす舞のかざし　小袖一一三八
雪を廻らす舞の袖　胡一五一・代一四八八
雪をも運ぶ山路かな　錦木二三五八・氷二六六四
行く川の流れは絶えずして　右一七五
行く事易き心かな　春二一一〇

行く事やすき春の水の　櫻一三三〇
行末かけし玉の緒の　葛五七
行末千代ぞと菊の盃　船辨二七七五
行末の心に懸かる事なし　内三七七
行く末も淺山伏の摺衣　飛雲道行二六一四
行くは慰む方もありとまるや涙　攝一六六八
行くは慰む方もあり留まるを　蟬一六八六
行方定めぬ道なれば　藤栄次第二二四八・鉢次第二五四八
行方も知らぬ御事　東二〇四七・野宮二四〇九
行方も知らぬ修行者に　藤栄二一六〇
行方も知らぬ旅人に　松山天上歌二六八七
行方も知らぬ人に誘はれ　木賊二三二一
行方も知らぬ身なりしを　雷三三三七
行方も知らぬ都人の　富士太二七〇三
行方もなき者　望三〇四三
行く水に數書くよりもはかなきは　水無月二九四〇
行く水に數ならぬ身は　竹雪一八八四
行けば深山も麻裳よい　巴次第二二七六
遊山に出うぞ　吉静△三三八一
遊止
この草庵に——す　三笑一二八三
ゆだちの袖
ちはや振るなり——　御二九七一
ゆたに吹くなる春風に　藤二七三三
湯津の桂の樹あり　玉井一九七四
湯津の爪櫛
稲田姫の——とりなして　大蛇三三〇九
ゆづり葉
君に譲を——や　[illegible]八七[illegible]
譲葉が嶽(兵庫)
武庫山颪——より吹きおろす　船辨二七八[illegible]
譲葉の權現(兵庫)　淡一四四
ゆのがう(石川)
當國——と申す所より　[illegible]四一六
弓箸
流れん武者には——を取らせ　賴三三一一
指
月を山に見て——を忘るる思ひ　放下二四四九
由比の汀に急ぎけり　盛三一〇三
結橋や堀の埋草　錦戸[illegible]七[illegible]
指をさし
目を引き——笑ひあへる　鉢二五六八
夕陰草の月の夜に　錦木二三五四
夕陰過ぐる月影の　姨待謡三四八〇
木綿鬘
雲こそかかれ——の　水無月二九四四
〔夕顔〕　三〇七
夕顔
たそがれにほのぼの見れば——　班二六一〇
ほのぼの見えて花の——　半二五〇五
夕顔上　[illegible]
夕顔の實の間　[illegible]
夕顔の客目して　藍二三四
夕顔の客目せし間に夢したり　[illegible]
夕顔のたそかれ時もはや過ぎぬ　續一一九
夕顔の露消え紛ひし性[illegible]　夕[illegible]
夕顔の露の命を嗣じ　源氏一〇三八
夕顔の露の身の　玉葛一九六三
夕顔の露の宿り　[illegible]七五七
夕顔の花　半二五〇〇
夕顔の花の色左作の橋の　塔三五一五
夕顔の花の狩衣烏帽子を着　爪八六三
夕顔の卷は殊に勝れておはれたる　夕[illegible]四
夕顔の宿
五條あたりにて——を　安達一一三
夕顔の宿の破れ車　葵一五八
夕顔の折過ごしとあだ人の　夕三二四
夕鳥
闇路の——のうかれ心は　蟬一六八六
夕霧　砧ツレ八二五・初狂言二五七三
夕暮は一方ならぬ思ひかな　通小七七一
夕されば野邊の秋風身にしみて　[illegible]八
夕時雨
錦を色とる——　紅[illegible]〇八[illegible]
木綿四手

何と──のかかる泣く音は　大蛇三五〇七
已の日の祓や──の神の助けも　松風二八三四
木綿四手かくる御祓川　水無月二九四〇
木綿四手に榊葉添へ　第一七七二
木綿四手に立ち紛れて　賀七四〇
木綿四手の神かけて變らじと　船辨二七七五
木綿四手の神にぞ靡く　玉井一九七八
木綿四手の神の示し　梅四二八
木綿四手の神の告　江島四九九・春日六七五・放生二四六三
木綿四手の神は上らせ給ひ　雨三三八
木綿四手を靡かし　逆二三〇八
夕潮の囊の内に召されよや　蘆五一
夕霜の翁　代一四八四
木綿だたみ幣とりとりの　代一四八〇
夕月早くかげろふの　忠度待謡一九一四
夕づく日
雲もかげろふ──　賀七三五
夕月夜おぼつかなしや　木賊二二一六
木綿附鳥
逢坂の──か別れの聲　蟬三三〇〇
木綿附鳥の羽風を立てて　初二五七八
木綿附鳥の御祓も幣も　龍田一九三四
木綿附の鳥が鳴く東路さして　熊野三三五四
木綿附の取りつき　藍二四一
木綿附の鳥の音鐘も頻りに告げ　半二五〇六

木綿附の鳥の音を鳴く逢坂のせき　蟬一六八四
木綿附の鳥も鳴き　逆三二〇五
夕露の光かかやく玉の輿　帶七八二
夕波千鳥聲添へて　室三〇二二
夕波千鳥友寢して　知待謡二三四六
夕波の氣色はそれか夜嵐の　啼一聲二五一五
木綿花の影房を動かす　西行二一七六
木綿花の白和幣　菊七〇一
木綿花の手向の袴　須一四九四
木綿花の手向の袖も一入に　小鹽三四五七
木綿花の雪を散らし　蟻二三三
木綿花は古にもこはやせしも　梅四三三
夕映匂ふ花の蔭　吉天上歌三三九四
夕日や花の時雨なるらん　吉田一九三三
夕
憂きを知らする──かな　砧八三三
夕には雨とそそぎ
朝には雲としぐれ──　雲二六一七
夕には白骨となつて郊原に朽ちぬ　朝二三七〇
檜二六三〇
夕には飛鳥に隨つて一時に歸る　西行二一七七
松蟲二八六四
夕の嵐朝の雲いづれか思ひのつま　葉二六〇六
夕の鐘の聲々に稱名の御法　誓一五五三
夕の雲も立ち騒ぎ　白鬚上歌一四七〇

夕の空もほのぼのと　芭上歌一五三一
夕の月の盃を　角上歌一六八一
夕の廣
草衣──を隱さざれども　關寺一六二三
夕ほどなく暮れ方の　橋上歌一五二一
夕も過ぐる月影に　定待謡二一二三
夕々の假枕　住道行六一九
夕を急ぐ人心　三井二九九三
夕を重ね朝待の　藏上歌三三二一
弓
愛染は方便の──に矢を矧げ　熊坂九一七
愛染明王は定の──にて　實二三九九
愛染明王も神通の──を張り　放下二四四五
一張の──の勢ひ月心にあり　雲四五一
雲上の飛鳥は──の影とも驚く　鵺三二一五
桑の──蓬の矢にて世を治めし　弓三三二六
重籐の──に取り添へ　箙三三八五
神農の作りし桑の　雲四五一
大悲の──には智慧の矢をはめ　田三〇〇〇
錦の袋に入れて持ちたるは──　弓三三二五
引かぬ──放さぬ矢にて射る時　放下二四四六
弓取つての名將　實一二五〇
弓と申すは本末に烏兎の姿を像り　放下二四四五
弓取
賢人無雙の──　鶴亀一二七一

弓取の手は陣内にてねきことを聞き　[illegible]
弓取の名は末代にあらずや　八島[illegible]
弓に隔てはよもあらじ　花一〇〇四
弓は三物とやらんを射そろへ　柏六六〇
弓張月のいるに任せて　國三九一
弓張月の西の空　七騎[illegible]
弓筈に残す心なり　賀七三七
弓筈の名こそ妙なれ　八島三一六一
弓筈の跡　熊五一
弓矢取つての恥辱　錦戸三三六八
弓矢取つての面目　忠信一八九六
弓矢とつて私なし　八島三一六〇
弓矢取る身の御身代りに立つ事　攝一六六四
弓矢取る身の習ひ
　主の命に代ること――　仲二三一四
弓矢に名を揚げ　俊成一四四一
弓矢のいはれ　望三〇五六
弓矢の家ぞ久しき　鱗四五一
弓矢の大將と申すとも　烏[illegible]
弓矢の恥辱となるべき　大佛一七五四
弓矢の道
　かごの名の――：　木曾八一七
〔弓八幡〕　三三二一
弓矢八幡氏の神も御照覽あれ　壇[illegible]
弓矢八幡箱根權現も照覽あれ　[illegible]

弓矢は天地陰陽を象り七曜五行の　[illegible]
弓を取り落し
　判官――　八島三一五九
弓をはづし劍を納め　金八七七
弓を袋に入れ劍を箱に納むる　弓三三二七
夢
　胡蝶の――の戯れ　俊成一四四三
　寝られねば――も見ず　鉢二五五五
　萬事は皆――の如し　道明一八三三
　昔を返す衣手に――待ちそへて　非三四一〇
夢現とは世人定めよ　錦木二三五四
夢現とも分かざるに　俊成一四四二・須一五〇二
夢現たき道のべの便りと　[illegible]
夢現にも知らぬものを　[illegible]
夢卜者　三井寺二九八九
夢か現か
　こはそも――と　望三〇四四
夢か現か覺束な　源氏一〇[illegible]・[illegible]三四八〇
夢か現かこは如何に　七騎一三三一
夢か現か寢てか覺めてか　錦木二三四五
夢か現か幻か　百二六八〇
夢か現かよひと定めよ　小鹽三四六八
夢かとよ闇のうつつの宇津の山　定二二一四
夢かやあらあさましや　藍[illegible]
夢路も添ひて古里に　柏次第六六〇

夢路をいつと定めん　[illegible]
夢路を出づる曙　[illegible]
夢てふものは賴みそめてき　[illegible]
夢ならば覺めよ。　[illegible]
夢なりがたき
　月[illegible]を穿ちて――　[illegible]
夢になりともたらちねの　[illegible]
夢になりとも父を見ん　[illegible]
夢に寢て現に出づる旅枕　[illegible]
夢にもあらず現にもなき世の中　[illegible]
夢に夢見る心地して　草子一一九二
夢の浮橋
　何事も見殘す――．　[illegible]二七五六
夢の浮橋も夢の間の言葉なり　[illegible]
夢の浮橋をうち渡り　源氏[illegible]
夢の浮世の中宿の　[illegible]三三〇四
夢のうちなる舞の袖　[illegible]
夢のうちのあだし身　[illegible]
夢の現
　今日の日も――ぞと　賀七四〇
夢の占
　思ひ合はせし――　[illegible]
夢の覺めたる心地　[illegible]九八
夢の姿を映しはしんせうが　昭一五八七
夢の精靈妙幢菩薩　[illegible]九八八

夢の直路に歸らん　白五〇九
夢の手枕
　戀路のそら情逢ふさへ——。　綸三四四八
夢の中間に生まれきて何を現と　卒一七一九
夢の中間はこの世の內ぞや　佛二七九八
夢の契りを現に返す　生二六九
夢の契りを待たうよ　賴三三〇七
夢の巷に迷ふらん　貴五〇九
夢の告
　あらたなりける——と　曾三六一八・紅三〇九〇
　ありがたき——さむるや　三輪二九八八
夢の黃楊櫛彈く琴琵琶の　項五九七
夢の昔天の與ふる事たるべし　邯七八〇
夢の告をも待ち給へ　忠度一九一三
夢の間に散じ易く　鐘一四五三
夢の間惜しき春なれや　熊野次第三三四〇
夢の世
　鳥も驚く——に　鳥三三九六
　渡りかねたる——に住むとや　松風三八二六
夢の世ぞと悟り得て　邯七八九
夢の世なれば驚きて　哀次第一三五・土車次第二〇七〇
夢の世にながらへて　元上歌一〇八三
夢の世のあだに契りし　知三八六六
夢の世の何か喩へにたらざらん　鳥二三九七
夢の世の迷ひも　三井三〇〇一

夢ばし覺まし給ふなよ　六浦三〇一五・紅三〇八八
夢は六十の花に過ぎ　卒三一三〇
夢人
　覺めぬさきこそ——なるもの　錦木三三五八
　夜こそ契れ——の　海一八二二
夢人を現と見るぞはかなき　遊三三〇四
夢待つ春のうたた寢に　副一一五〇
夢幻の假の世　朝三三六八
夢幻の戲れやあはれ胡蝶の舞　楊三一三三
夢見惡しく　鐵七〇八・放下三四四一
夢も數添ふ假枕　砧八三七・熊野三三四〇
夢物語ぞあはれたる　項五九八
夢物語申すたり　八島三一五八
夢物語申すに須磨の浦風も　忠度一九一五
夢も一夜の旅寢かな　綸三四四三
ゆめゆめさやうの事をも存ぜず　谷一九三九
ゆめゆめなき事にて　竹雪一八八七
夢より霜や結ぶらん　鐵三五五四
湯も茶も嫌か　花△三三八七
〔熊野〕　三三一七
〔湯谷〕　熊野異稱三三一七
熊野　熊野シテ三三一七
熊野
　池田の宿の長をば——と申し　熊野三三一九
熊野權現〔クマノゴンゲン〕をも見よ　檀シテ二〇二三

熊野權現に賴みをかけば　檀二〇二五
熊野權現の移ります　熊野三三五一
熊野權現の御罰　安宅九一
熊野三所　正一三六四
熊野の順禮廻國　安達一〇七
ゆゆしき御大事　安宅八四
愉樂
　衆生の——も今ここに　身二九五〇
由良の戶渡る早舟も　絃一〇四八
由良の湊田の早苗　飛鳥七三
ゆらりゆらりと出でたる有樣　高二五一五
ゆり直せ　舍△一三九二
ゆりを吹かう　蟹八三五
ゆるし色の綺羅なるに　須一五〇三
唯一金剛
　唯有一實相——。　叅二八〇九
唯有一實相唯一金剛　叅二八〇九
遺敎流布の地いづれの所　白鬚一四六八
唯稱彌陀得生極樂　大原五四三・月六五八・土車二〇七九
唯心の淨土
　己身の彌陀如來。　自六六三
　涼しき道ならば——なるべし　春榮一四一四
唯心の淨土經　當一八五三
唯心の淨土と聞く時は　自六五九
唯心の淨土とはこの誓願寺を拜む　誓一五六四

遺跡を輝かせ申したき　春榮一四一〇
故ある心言葉の奥ゆかしきを　小鹽三四九九
故ある木の實を集めつつ　雲雀二六四一
故もゆかりもあるべからず　井三〇四
弓手の肩を射させ　春榮一四〇〇

よ

與市
關原——が美濃の國中川の莊を　關原一六三七
よい天氣で鳶が啼く　鳶へ二二五
用(ユウと謠ふ)
　地は陰を以て——となす　松尾六八四六
用意をなして義仲は　木曾上數八一八
容顏人に勝れ　昭一五八一
擁護(オウゴを見よ)
夜討がけにかの者を討たう　夜三六一
夜討すべき事　忠信一八九三
〔夜討曾我〕　三三五七
夜討に討たう　烏三四二八
夜神樂
　月の——を待ち給へ　右三四七
　光さやけき——の　代一四八七
　更け過ぐる——の　鶴祭四二一
　更け行く月の——を　弓三三三〇
夜神樂の聲も昔き數々に　松尾六八四八
夜神樂の月に聞えて　淡一五一
夜神樂の時移り　龍田一九三二

世語
聞えに行き——な　井三四〇五
末葉の露の消え易きためしの中の　夕三一八
夕顔の露消え給ひし——　夕三一三
横川(叡智)
大比叡や——の杉の前より　百三六四・東界一六二
川の——の流れなれ　花一〇九
月の——も見えたり　雲七二一
比良や——の遲櫻　大九九五
邊土に於ては比良——　東九九九
横川小聖　巻の一五五
横川の僧都に見つけられ　百二四
横川の水のすむ方を　浮三三〇
世變り時來り　馬四一一
世が世にてましまさば　烏三四二三
善きかなや釋尊　白鬚一四六九
善き哉善き哉とかの一卷を　東三五二
善き光ぞと影頼む　山次第三一六七
よき光ぞと名を聞くや　道明次第一八二五
よきやうに申し　熊野三三四四
餘經の後の世も彌陀一教　賢一五五七
餘經の法はよもあらじ　當一八四四
善きを助くる
　惡しきを平らげ——　調二二二八
善きを勸むる教へ　敦一三五

欲界色界無色界　舍一三九五・秦一七四〇
欲界の内に生まるる輩　善界一六〇五
抑止在懐し給ひて　現一〇一六
横雲
明け渡る——の迷ひもなしや　夕三一一九
邪
わが——をなさざれば　蟻三二一
横縫のちぎれたる古腹巻　鉄二五六八
横佩の右大臣豊成　當一八四六・雲雀二六三八
夜辟の讀誦　田一九九七
夜櫻
小倉の山陰に殘る——の　西行一一七九
與謝の海(京都)
天の橋立——　大江五六四
與謝の海の天の橋立はるばると　九世九三三
夜寒の砧うつとかや　鳥二三〇一
夜寒の寢覺を思ひやり　砧八三〇
夜寒を風や知らすらん　砧八三三
よしあし
難波のことの——もげに隔てなき　松蟲二八六四
よし足引の山姥が山めぐりする　山三一七三
山次第三一七九
由ありげに見え候程に　隅一五二七
義家
八幡太郎——安倍の貞任宗任を　鳥三四二〇

良門の五代の孫女　源氏△一〇三三
義貞に力を合はせよ　楠九一一
義實(岡崎)　七騎ツレ一三〇五
良實
出羽の國小野の——　鸚一五
出羽の郡司小野の——　卒一七二五
よしさらば思ひ出でじと　天上歌二二三四
義忠
佐那田の餘一——は副將軍な　七騎一三一二
吉田少將　班ワキ二五九七
吉田の何某　隅一五二七
義經(牛若・遮那王・判官・九郎参照)　安宅子方七七・正ツレ一三五五・攝ツレ一六四七・忠信ツレ一八九一・船辨子方二七六七・八島シテ三一四三
義經
岩木を結ばぬ——なれば　攝一六五九
九郎大夫の判官——　大原五三七
檢非違使五位の尉源の——　八島三一五一
源九郎——に矢一筋参らせん　攝一六六一
範頼——の大手搦手の　竹五一二
範頼——のその勢　生二七一
頼朝——御中不和にならせ　安宅八〇・錦戸二三六三
頼朝——不會の由　船辨二七六九
義經が謀いみじきによつてなり　景六四四
義經兇徒に準せられ　二人二七一九

義經源平に弓矢を取つて私なし　八島クセ三一六〇
義經この浦まで來り　俊△二五六
よしつねの浮世の夢ばし　八島三一五四
義經は小兵なりといはれんは　八島三一六〇
義經はすぐに修めし三吉野の　吉野三二八五
義經を鎌倉へも入れられず　正一三六三
葦と蘆とは同じ草　蘆五〇
よしといふもあしといふも同じ草　歌三五六
義朝
父——江州へ落ち給ひしも　七騎一三〇九
義朝の御子か　橋二五一九
義朝の御子沙那王殿　鞍△九五六
義朝の末の子牛若　關原一六三六
義朝の御内にありし　俊二五二三
義朝都を御開き　舟二三五七
義仲　木曾ツレ八一五
義仲
木曾——　木曾八一八・正一三五八
木曾——の御在所同じく神と　巴三三七九
義仲に都を落され　敦△二三一
義仲の佛と現じ神となり　巴三三八〇
よしたかりける對面かな　蟬一五九一
よしなき戀路に使されて　梅枝四四五
由なき長物語　隅一五二八
吉野(奈良)　國栖八九一

吉野
五臺山の峯みあらば——筑波を　春日六七三
よしや——の花も雪も雲も波も　江口四八二
吉野川岩切り通し行く水の　戀一一六四
吉野川水のまにまに醍ぎ來て　忠信一帖一八九八
吉野川よしや暫しこそ　國八九四
〔吉野葛〕　三三七九
吉野龍田の花紅葉　藤榮二一五七
〔吉野天人〕　三三八九
吉野の奧を尋ねん　吉天二三九〇
吉野の川のよしや世と　弱三三一八
吉野の國栖　國八九八
吉野の千本の櫻　嵐二一三
吉野の花の種とりし　嵐次第二〇三
吉野の山(奈良)　吉天三三九一
吉野の山
妹背の中の川と聞く——は　錦木二三四五
吉野の山櫻ここも千本の花　夅一七三七
吉野の山櫻千本の花の種とりて　嵐二〇五
吉野の山ならねどこれも妹背の　船橋二七六四
吉野初瀬の名所　鞍九五五
吉野山　忠信所一八九一・吉靜所三三七九・吉天所三三八九
吉野山
御はからひぞ——　吉靜三三八三
見渡せば松の葉白き——　二人二七一三
吉野を頼み御座候處に　忠信一八九三

義平
嫡子惡源太——は石山寺に籠り　朝三三七〇
良峯も御別れを悲しみ　畢一五〇六
義盛(和田)　七騎リキ一三〇五
義盛(伊勢)　忠信リキ一八九一
義盛
伊勢の三郎　忠信一八九三
和田の小太郎——　七騎一三一八
餘情の花と作られ　鸚三
よしや君むかしの玉の床とても　松山天二八八八
よしやよし親子をも　箙上歌二五三四
よしや吉野の花も雪も雲も波も　江口四八二
よすがに寄りし中宿に　夕三三一四
夜すがらくどき給ひしに　賀二六〇
寄せかけて打つ白波の音高く　夜一帖三三七三　烏一帖三四三三
寄せては歸るかたをなみ　松風上歌二八六八
よせ拍子　綾一九八
餘所がましげにおはします　小鍛冶二九三三
よそながらもや聽聞せん　寶一三四七
よそにては正しく見えし帚木の　木賊上歌三三一〇
よそにのみ見てや止みなん同じ子に　小袖一一三一
よそにのみ見てや止みなん及びなき　花筐二五八六
よそにのみ見てや止みなん葛城や　谷一九四三
よそにのみ見てや止みなんと　花一〇〇九

餘所のあはれにいひなして　水無瀬二九三一
よその聞えは大方の　定二一一〇
よその調めの中の緒の　住一五四六
よその契りはかれがれなり　井一四〇六
餘所の歎きは一旦の思ひ　竹雪一八八七
餘所の歎きを思ひ合はせ　攝一六六三
よその歎きをふり捨てて　俊寬一四三一
よその見る目も如何ならん　紅[illegible]八七
よその見る目も恥かしや　住一五四五
よそは梢の秋深き　佛次第二七八八
よそまでもあるまじ　賀九五九
餘所までも名は葛城の賀茂の神　代上歌一四八二
よそめ思はぬ氣色　蘆二四一
よそ目に餘る花心理過ぐる氣色　三山二九二三
よそ目にはひたふる狂人と人や　清八五一
よそ目は舞の手変るは袖の上露　仲二三三三
よそめも肝を消し　龍虎三三六九
よそめも時によるもの　三井三〇五
よそ目も花やかに　三山二九一九
餘寧
その利益——に越え　昇一六〇一
夜盜
山賊——の盜人等　熊坂九三六
四つの海(シカイをも見よ)
波も音なき——　岩二八七・岩五二四

四つの海波靜かなる時なれや　弓道行三三三
四つの鬼を使ひ　土車二〇七五
四つの辻(京都)
　誰をか松坂や四の宮河原ー　鸚一六・盛三〇九七
四つの鼓は世の中に　籠三三九六
四つのを
　調めも——りから　蟬一六八二
四の緒の音を留めし潯陽の江　岩二九二
よつぴきひようと射ばや　花一〇〇四
夜鶴
　子を思ふ闇の——の　木賊三三一五
　闇の——の老の身に　綾一九二
淀(京都)
　木幡山伏見野竹田——鳥羽も　融三三三九
　漲る水の——ならば　鵜飼三〇六
　小車の——山崎をうち過ぎ　敦一二五
淀川の水上に　田△一九九五
淀鯉
　逃れかねたる——の生捕られ　千一七〇九
四所の神の代よりの　春日六七〇
淀の川舟行く末は　江口四七四
淀の繼橋かけまくも　放生二四五六
淀舟
　夜深く出でて——や立つ旅衣　逆一二〇三
淀舟や美豆野の原の　蘆道行四五
淀より御船に召され　船辨二七六九
淀より舟に乘せ申し　盧四四
世にある樣　蘆五七
世に嬉しげに　雷三三三五
世に隱れなき大伽藍　大佛一聲一七五一
世になき事に悅び　松山鏡二八七六
餘人
　おことの姿——の見る事なし　實一二四八
夜念佛
　來迎の——　春榮一四一四
夜念佛の時節なれば　隅一五三一
夜念佛申せ人々よ　柏六五九
夜念佛をいざや急がん　誓一五五六
世の味ひの辛きを知る　紋一〇五二
世の憂きよりはなかなかに　大原五三八
世の常の行人　石一三七七
世の中
　夢にもあらず現にもなき——　天二一三四
世の中にさらぬ別れのなかりせば　楊三一二四
世の中のうさには神もなきものを　滿八五一
世の中の人の心の花ならぬ　西王一五七三
世の中の人は何とも石淸水　船辨上歌二七七〇
世の中の夢現　祇ク七八六五
世の中は電光朝露石の火の　葛六九五・元一〇八九
世の中はとにもかくにもありぬべし　蟬一六八二
世の中は何か常なる飛鳥川　嘯月七一
世の中は夢か現かとも　菩界一六〇二
世の中を厭ふまでこそかたからめ　江口四七六
世の中を憂しと思はば捨つべきに　鵜飼一聲三〇一
世の習ひ
　老いたるも殘る——　夜三三六八
　思ひ子の別れを慕ふ——　大蛇三五〇六
　定めなき——　菖伽三八六・隅一六三一
　賤の女の目に觸れなる——　小督一一〇一
　生死無常の——　土車二〇七三
　生者必滅の——　熊野三三五一
　時に從ふ——　三山二九一八
　芭蕉泡沫の——　葵一五九
　報いは常の——　戀一一六三
　よしなき——　熊野三三五〇
世の憚りなり　俊成一四〇二
世の人口もあるべけれ　錦戸二三六五
世の外いづくならまし　江口四七四
世の業の憂きを身に積む　筐一聲七一七
夜半にや君がひとり行くらん　井三四〇六
呼ばはる聲もかすかに聞ゆる　羅三五六
齡は老いぬ
　年ふれば——しかはあれど　小鹽三四五八
齡を授くるこの君の　老五三二
齡を延ぶる仙女となる　菊童八八四

世は末世に及ぶといへど日月は　花筐二五八九
世は末世に及ぶといへども日月は　安宅九八
世は末世に及ぶとても日月は地に　蟬クセ一六八五
世は昔靜へり
竹葉の——　松貴二八六五
世人(よひと)
夢現とは——定めよ　錦木二三五四
夢か現か——定めよ　小鹽三四六八
宵の雨
つれづれと降り暮らしたる——　羅三三四九
宵の人目も悲しくて　浮三一一九
宵々毎にうちも寢よ　卒一七三六
宵々にぬぎてわが寢る狩衣　松風二八三五
夜深く鳴きていづち行くらん　飛鳥七一
呼子鳥　高野六〇七
呼子鳥
おぼつかなくも——の　雲雀二六四七・山三一八〇
陸奧の外の濱なる——　善知三三八
呼子鳥たづきも知らぬ山中に　當一八四八
夜舟
誰が——とは白波に　通盛二八九七
更け行く月の——より　清八四三
夜船に月を待たうよ　從二五八
夜ませ
月の——に行き通ふ　三山二九一七

夜祭に參る者　[illegible]一二〇六
蘇る命の路と書きたれば　歌三五九
冥路
四手の田長の一聲も誰が——を　鐘一四五三
よみぢの黒の繪馬を掛け　[illegible]
讀人知らず
動物の身の悲しさは——と書かれ　忠度一九一五
讀人知らずと書かれしこと　俊成一四四二
讀人知らすと書きたれば　草子一一八九
蓬が島　草薙八八四
蓬が島つ鳥　楊三一三五
蓬が島の遠き世に　[illegible]三一二四
蓬がもとの心の　芭三五四二
蓬の矢
桑の弓——にて世を治めしも　弓三三二六
蓬生
葎——刈萱も亂れあひ　[illegible]一一九五
蓬生のもとあらざりし身　葵一六三
蓬生の宿ながら菩提の道を願ふ　源氏一〇三九
夜もすがら散るや櫻の蔭にゐて　田村[illegible]一九九六
夜もすがら軒端の梅の蔭にゐて　東北待謠二一九七
よも盡きじ藥の水も泉なれば　邯七八五
よも盡きじ萬代までの竹の葉の酒　猩一三五二
四本の木蔭枝垂れて　遊三二〇三
四方に道ある關の戸の　[illegible]三一二九

四方に治まる八洲の波　[illegible]
四方の門邊に人騒ぐ　嵩二九〇
四方の門邊に人騒ぐと詠みしも　松貴二八五六
四方の門邊の玉の戸を　邯七八二
四方の國治まる雲の果までも　[illegible]
四方の山風靜かにて　松尾次第二六八四二
四方の山風のどかなる　右次第三四一
世々毎の假の親子に生まれ來て　[illegible]
世々にふりにし山藍の袖　定三一〇九
代々の集めの歌人の　鸚三三
代々以て父母の數々なり　春榮一四一三
代々を重ねてうち治まりたる御代　放下[illegible]
夜ら
この——は空もいとよう晴れ　[illegible]
〔賴風〕　女郎花三四八七
賴風　女シテ三四八七
賴風
小野の——　女三四九五
賴風その時に　女クセ三五〇〇
賴風の妻　女ツレ三四八七
賴賢
監物太郎——もあの汀にて　知三三五〇
與力の人數　熊坂九四一
賴澄
中務——宰府の神主　藍二四〇

寄竹
　好ける心に——の　敦一三九
　より竹の笛をおつ取り　皇九九六
頼朝　七騎ツレ一三〇五・大佛子方一七四三・調ツレ二一一九
頼朝（鎌倉殿をも見よ）
　源家の官軍右大將——　大佛一七五一
　兵衞の佐——　七騎一三〇八・調二一三〇
頼朝痛はしく思し召され　千一七〇一
頼朝これを聞し召し　盛三一〇八
頼朝に召し出だされ　二人二七二一
頼朝の御代官として　船辨二七六九
頼朝富士の御狩に御出で　小袖一一二八
頼朝も聞し召し　吉靜三三八五
頼朝義經御中不和にならせ給ふ　安宅八〇
　錦戸二三六三
頼朝よりの仰せに從ひ　忠信一八九八
頼朝を狙ひ申すと　大佛一七四八
より羽の橋か鵲の行合の　船橋二七六五
より引く絲竹の　天二一四四
寄り人は今ぞ寄りくる長濱の　葵一五八
〔頼政〕　三三九七
頼政　頼シテ三三九七
頼政
　源三位——合戰にうち負け給ひ　頼三三〇三
頼政か矢先にかかり　鵺二三八四
頼政その時は兵庫の頭とぞ申し　鵺クセ二三八五
頼光　大江ツキ五五三
頼光
　源の——　大江五五五
寄藻
　磯邊に——かく海士の捨草　松風二八二七
よりより彼蒼を期す　道明一八三二
夜かと思へば晝になり　邯七八六
夜造る岩橋ならば　船橋二七五八
夜の雨
　瀟湘の——頻りに降つで　蟻二一一六
　苫よりくぐる——の　通盛二八九九
夜の歩みぞ心せよ　小督一一〇一
夜の色
　煙葉蒙籠として——を使す　龍虎三三六九
夜の御殿
　晝の間——を行き違ひ　雷三三四二
　晝は——に入り給ひ　小督一〇九八
夜のおとども徒らに　花筐二五九一
夜の琴の聲
　楚王の臺の上には——　班二六〇五
夜の車に月を載せて　松風二八二九
夜の衣
　うば玉の——を返しつつ　砧五一六
夜の衣をうちかへし夢にも見るや　鳥三二九九
夜の滝をえぞ知らぬ　弱三三一八
夜の闕戸の明暮に　蟬二一一五
夜の契りの夢のうちにと　定二一一七
夜の鼓の拍子を揃へて　高砂一八七一
夜の鶴
　燒野の雉子——　唐一八一九
夜の鶴の子を思うて籠のうちに鳴く　經二〇九〇
夜の錦
　闇からぬ——の直垂に　實一三五七
夜の寢覺もさみしからで　養三一三三
夜の念佛を急がん　誓一五五六
夜は來れども晝見えず　三輪二九八五
夜は夜を專らとし　皇九九一
夜晝となき樂しみ　邯七八六
寄るべ定めぬ浮舟の　浮三二三
よるべの水
　ここに——の淺からざりし契り　蟬一六八四
　この神に——を汲まうよ　賀七三五
　科は——にこそ濁る心の　藤戸七四九
　花に——せきとめて　櫻一三三七
夜庾公か樓に登らねども　竹雪一八八四
夜庾公が樓に登りしも月に詠せし　三井一九九九
夜庾公が樓に登れば月千里に明らか　雪三二八七
悅びの盃
　千秋萬歳の猶——の　春榮一四一七

悦びの眉を開き　鉢二五七〇
喜びを延へし君が代　蟬二二〇
萬の女人を生々の母と思へ　朝二三七一
萬の政の道すぐに　志一二九八

萬代
　葦原の國も動かじ——までに　白樂二四七八
　天つ空音の——までに　柒四〇九
　幾——と舞ひをさむ　内三七九
　春日野に若菜摘みつつ——を　當二三二九
　すめらぎの——いつと限らまし　金八七五
　よも盡きじ——までの竹の葉の酒　狸一三五二
萬代と限らじものを天衣　柒四〇九
萬代と囃せ　嵐二一〇
萬代に住める龜井の水までも　弱三三三三
萬代の始めと今日を祈り置き　江島上歌四九七
萬代の春
　花も松も諸共に——とかや　老五二九
萬代の春の花　雜二三三四
萬代の惠みも久し富草の　花筐上歌二五八四
よろづ代を治めし君がためしには　祇一殿八六四

鎧
　つま匂ひの——着て　知二二四八
　忍辱の——　禪一六九六
　萌黃匂ひの——着て　實一三五七
よろひ
　甲冑を——つつ　通盛二九〇七
鎧にあらぬ袈裟や　大江山五五六
鎧二領に兜二はね　當三六一
鎧の袖枕　安宅九九一
鎧の袖を解き　夜三三七五
鎧の胸板押しつけ揚卷　攝一六六三
鎧は黒革の緘しに緘せる大鎧　盛二五一五
鎧直垂取り出だし　柏六六〇
よろぼひさぞろひ　小鍛三四六三
〔弱法師〕　三三一五
弱法師　弱三三一九
弱き馬をば下手に立て　賴三三二一
弱氣を見えじ　七騎一三一五
弱り果てぬる秋の暮かな　満八五一
世を秋風の音更けて　佛二七六三
世を厭ふ人とし聞けば假の宿に　江口四七七
世を鶯の聲立て　竹雪一八八五
世を宇治山と人はいふなり　賴三〇一
世を捨人　松風二八三一
世を捨人の旅の空　關次第二三七九
世を背けたる影
　耿々たる燈火も——かと　柒三九八
世をも人をも恨むまじ　班二六〇七
世を渡る習ひ　忠度一九〇七

ら

禮
　花を捧げ——をたし結構をなす　當二五二
來迎
　聖衆——　（その項を見よ）
　菩薩もここに——す　葵一六七・通盛二九〇九
來迎引攝
　釋迦牟尼法號——　水無瀬二九三三
來迎引攝の誓ひを現し　隅二五六三
來迎の夜念佛　春榮一四一四
來迎を願ふべし　源氏一〇三九
賴光　土蜘ツレ二〇五五・羅ワキツレ三三四五
賴光
　源の——　望二二四七
賴光例ならず惱ませ給ふ　土蜘二〇五七
來現
　藏王權現の——かや　嵐二一〇
禮紙にやあるらんと　俊寛一四三一
雷神　雷シテ三三三一
來世猶來世更に世々の終りを　江口四八四
來世の便りこそ聞かまほしけれ　千一七〇八

来世は阿鼻に堕罪せられん　正一三六四
〔雷電〕　・　・　雷異称三三三一
〔来殿〕　三、三一
禮奠隙なく崇め給ふ　鵜祭四一七
禮の磬
　天に色めき地に響く——　撃七八三
禮盤の上より落ちける　（罩）一六九七
禮をばなさで敷きたるぞ　卒一七二三
朗詠
　今様——聲々に拍手を揃へ　敦一二七
　今様——す　住一五四三
　今様を謡ひ——し　清八五三
朗詠してぞ奏でける　千一七〇八
老葉
　秋に後るる——は風なきに散り　雪三三三六
老眼と申し文字もさだかに　鸚一九
老眼の通路猶以て明らかならず　實一三四八
老後の思出これに過ぎじ　實一三六〇
老後の愚かなりとも　木賊三三一四
老悴衰へ形もなく露命窮まつて　檜二六二五
老衰の眠り深き夢に　雨三三五
老生
　鳥聲とこしなへにして——と靜か　三輪二九七九
老生を慰む志　木賊三三一三
老少といつぱ分別なし　檜二六三一
老少不定と聞く時は　夜三三六八
老少不定とて世のなかなかに　三輪二九七八
老少不定の境歎きの中の歎き　陽三一三
老少不定の道なれば　藤戸二七四五
老少もつて前後不同　籠七三六
狼藉か落花か　竹雪一八八五
老僧　（鷹）三一〇七
老足なりとも　遊三一九四
郞黨
　兄弟成に　もなし　小袖一一三五
　命を捨てし　の一人は母　（攝）一六五五
老女　婕シテ三四七一
老女
　山は——が住み所の　婕三四八一
老尼
　一人の——の忽然と来り　當一八四七
老耳には益もなし　岡寺一六一九
老若男女貴賤都鄙　熊野三三四七
老母のいたはりとて　熊野三三三九
老武者
　鬢鬚白き——　實一三五六
　唯一筋に——の　賴三三一三
老龍
　姿は——の雲に蟠り　玉井一九八三
羅漢に仕へ奉る（虎）　龍虎三三六七
羅綺の重衣たる情なきことを機婦に　祇八六七
落葉
　秋後に霜なうして——遅し　千一七一八
落雁　熊野三三四七
　平沙に子を生みて——の　（籠）三九二
落居し力なく　安宅九五
落居の間　（船弁）二七六九
落居のあらん程　（龍）三八九
落花
　朝に——を踏んで相伴つて出づ　西行二一七七
　ただ殘鶯と——とに別る　松蟲二八六四
　狼藉か——か　藤二七三一
落花一陽の春を知らず　竹雪一八八五
落花枝に歸らず破鏡二度照らさず　放下一寧二四四二
落花心あり人心なし　八島三一五七
落花空しきを知る流水心無うして　鳥三三九七
落花狼藉の小鳥　円三三八三
落花狼藉の人　花一〇〇四
落日　雲林四六一
　聖衆來迎す——の前　實一二四七・（鷺）一五六三
落日の紅は蘇命路の山をうつし　羽二四九三
らく天下天の天人が手折りつるな　（拳）一七四〇
洛陽
　所は名に負ふ——の花の衣の　（誓）一五五二

洛陽一見　俊五〇七
洛陽の寺社殘りなく　采三九七
洛陽の西南はこれ分國となるべし　吉備三六八五
洛陽の佛閣　舍一三八五
洛陽の邊より出でたる僧　六浦三〇〇八
洛陽の名花　右三四一
洛陽の名所舊跡　胡一一四
樂々
　颯々といふ聲は――と響く　代一四八九
落々磊々と地に倒れ　鵺二三九一
蘿月
　松風――に言葉をかはす　江口四八五
羅睺阿修羅王　春日六七八
羅縠の袂をも引かばなどか　盛八〇二
羅睺羅長子
　致主釋尊も――と説き　木賊三二一四
　大聖釋尊も――と説き　竹雪一八八三
　佛も――と説き　百二六七六
〔羅生門〕　三三四五
羅生門(京都)　羅所三三四五
羅生門
　九條の――に鬼神の住んで　羅三三五〇
羅生門は都の南門　羅三三五〇
羅刹
　山神鬼魅夜叉――　江島四九四

羅紋
　流水――海燕回る　養三三〇〇
羅綾の衣
　桂の黛――　一角二八〇
羅綾の衣多うして　卒一七二六
羅綾の袂
　玉の釵――　定三〇二四
羅綾の袂を飜し　嵐二一〇
欄干に立ちつくしてそなたの空よと　求二六〇六
欄干を走る心地　盛八〇三
蘭菊
　狐――の花に隱れ住む　殺一六八
蘭菊の狐川より引き返し　忠度一九一六
蘭菊の花に臥るなる狐　錦木二三五〇
蘭省の花の時錦帳の下とは　芭二五三四
欄井
　井桁を切るなるは――の釣瓶繩　金八七二
髑髏霧深し古松下の蔭　項五九七
亂拍子　道成一七九五
亂舞堪能の由　盛三一〇九
亂舞まうて見せん　柏六六〇
鸞輿鳳車に召されし御身の　土車二〇七三
鸞輿鳳車の玉衣の色を飾り　關寺一六一八

り

理淺きに似たりといへとも　夕三二四
龍宮
　獅子は――へ取られしを　絃一〇五七
　大蛇の形は――に飛んで　竹生二〇四三
　豐玉姫は――に入り給ふ　和三〇三四
　波の底に――と申して　碇二五九
　秀郷とやらんの――より取りて歸りし鐘　三井二九九八
　明珠をこの沖にて――に取られ　海一七五
龍宮に入り給ひ法を弘めて　九世九二
龍宮の捧げ物　和三〇三五
龍宮の内裏　九世九二九
龍宮の習ひに死人を忌めば　海一八一
龍宮より黄金の箱に小龍を入れ　大社五八四
龍宮わたづみの宮　玉井一九七七
柳花苑とぞ思ほえにける　[illegible]一二〇四
柳花苑の鶯は同じ曲の囀り　盛八〇二
柳上に鶯飛ぶ片々たる金　杜六二八・熊野三三五一
流沙川を渡り　代ヘ一四八六
降車に向ふ如し

蟷螂が斧を取つて―― 木曾八三三・夜△三三七〇
龍車の雲居 咸七九三
龍神 一角子方二七五・岩シテ二八五・大社ツレ五七三・春日シテ六六七・九世シテ九一九・絃ツレ一〇四三・白鬚ツレ一四六一・竹生シテ二〇三一・張ツレ二〇四三・寝ツレ二三九三・和シテ三〇三七
龍神
沖より――現れたり 和三〇三七
神を敬ひ君を守る秋津島根の―― 岩二九三
下界の――現れたり 竹生二〇四〇
下界の――たしかに聞け 絃一〇五七
下界の――の參會か 春日六七七
下は下界の――まで 和三〇三四
上界の天人下界の―― 江島四九五
天衆――水火雷電 江島四九四
龍神潮を守護し波四方に退いて 和三〇二九
龍神咸恭敬 海一八六
龍神と威を爭ひ 一角二七七
龍神の御燈
天の燈火―― 九世九二四
隆準の鼻胡髯の腮 江島四九八
龍神は潮水の上に翔つて 白鬚一四七五
龍神八部おのおの拜し 大會一七八五
龍神御箱の蓋を忽ち開き 大社五八五
龍神も東西に飛行の翔り 寝二四〇四
龍神もめでけるにや 絃一〇五〇
流水
菓は浮雲あれなる者は―― 放下二四四三
花は――に隨つて香の來ること 熊野三三五一
流水心無うしておのづから澄める 巴三八三
流水山上の秋にして 放下二四四二
流水の盃は手まづ遮れる心なり 松蟲二八六四
龍頭に手をかけ 道成一七九六
龍頭をくはへ七まとひ纏ひ 道成一八〇〇
柳條恨みを牽いて荆臺に到る 遊三三〇〇
柳條を綰ぬ
別れの曲には―― 遊三三〇五
流に牽かるる曲水の 安宅一〇三
流にひかれてとく過ぐれば手まづ 錦七八五
龍女 海シテ一六九・現シテ一〇一一・和ツレ三〇三七
龍女
人與非人皆遙見彼――成佛 海一八六
八歳の――は南方無垢世界に 海一八六
文殊の敎へにて――は須臾に法を 現一〇一七
龍女が如くわれもはや變成男子 采四〇七
龍女が成佛の緣にまかせて 三井二九九八
龍女が立ち舞ふ波瀾の袖 春日六七八
龍女が寶珠とも思し召され 岩二八九
龍女にいかで劣らん 身二九五三
龍女は波をもかざしの袖を 和三〇三六
龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ 合六八七
龍女變成と聞く時は 通盛上歌一九〇〇
劉伯倫
晉の七賢が樂しみ――が翫び 寝三一二五
柳髪風にたをやかなり 鸚三三
柳髪風にたをやかに 昭一五八六
龍王
恒河の――哀愍納受 道成一八〇三
龍王立ち來る波を拂ひ 玉井一九八四
龍王は川波に浮かみ 寝二四〇三
龍王は黄金の甲冑を帶し 一角二八四
龍王もこれに應じ 江島四九九
驪宮
城南の――に赴き 忠度一九〇六・藤榮二一四九
鯉魚(人名)
孔子は――に別れて思ひの火を 天二一一四
鯉魚が躍る惡蛇となつて 綾一九九
六爻
命期――の滅色 歌三五八
六合
日月は――を照らせども 内三七六
六義
歌には――ありこれ六道の巷に 蟻二二〇 俊成一四四三

和讃の――を尋ねしにも　鷺三三
六宮の玉階に走り上る　皇九九八
六宮の粉黛の顔色のなきも　鵜三一一九
六義の始めのそへ歌にも難波の梅　善三三〇
陸修静　三笑ツレ一三八一
六窓未た明けざるに　盛クセ三〇七
陸道士　三笑一三八七
六道の辻とかや　熊野三三四八
離外娟々として潤水流る　芭△三五三八
梨花一枝雨を帶びたる粧ひの　楊上歌三一一九
梨花は名のみなり　鷺三三
利劍
降魔の――を待つ　千界一六〇三
大悲の――　海一八〇
一つの――を拔き持つて　海一七九
彌陀の――や愛染は方便の弓に　熊坂九三七
利劍を存ひ　禪一六九七
利劍をおつとり　一角二八四
驪山宮の秋の夜の月　熊野三三四三
驪山宮の私語も誰か聞き傳へて　班二六〇六
驪山宮の私語漏れし始めを　小督一一〇七
驪山ちよの春の風　江島四九三
驪山の春の園にともに眺めし　楊三一一八
驪山の宮の內月の夜遊の羽衣の曲　楊三一一三
利生
觀音の御――　熊野三三五三
この攝待の――にて　攝一六五五
ししつうわうの古より――更に　竹生二〇三八
衆生――の道　杜六三四
當社の御――　鵜祭△四一九・放生二四五七
三島の宮の御――　春榮一四一九
利生あらたなる　盛三三〇三
利生方便の社の前には　松尾二八四三
利生はさまざま多けれども　道明一八三七
李少と申す太子の　花筐二五九三
臨川堰の川波　放下二四五〇
立花供養の事　半二四九九
律師僧正
法性坊の――　雷三三三
立春の題なれば花も盡きぬと　草子二一九一
律呂の聲々　善二〇九〇
理非によつてその沙汰致す　鉢二五六九
李夫人
漢の武帝の后――なくならせ　松山鏡二八七四
漢王は――の御別れを歎き給ひ　花筐二五九一
李夫人は本はこれ上界の殊妾　花筐二五九三
利物
八相成道は――のはてしなき　什一五四一
八相成道は――の終り　蟻三三・龍田一九二七　松尾二八四六
和光――の御姿　嵐二二一
利物の風あらたなり　鵜祭四一七
兩眼月日の如く　[illegible]
靈鷲山（靈山・靈の御山をも見よ）
今は春日の御山こそ卽ち――　春日六七三
釋尊――にての御說法の有樣　大會一七八一
八駿の駒に召され天竺――に　西王△一五六九
昔は――にして妙法華經を說き　采四〇〇
令心不亂　雷一八五三
兩介は狩裝束にて　屋一六四五
兩舌
妄語綺語惡口――は口にて作る罪　東岸二一七三
靈山（靈鷲山をも見よ）
常在――の秋の空　舍一三九〇
昔在――の御名は法華一佛　身一五六三・身三二〇一
昔在――名法華　高野六〇三・道明一八三〇・朝三二六八
山は卽ち――となり　大會一七八五
靈山の淨土　采四〇一
靈山の釋迦の御許に契りて　卷二八〇九
靈山會場の法の場　西王一五七一
良忍
大原の――聖　三山二九一三
良忍上人　三山ツレ二九一二
兩臂
頭に玉釵膺は金色――をかがみ　松山鏡二八八一

兩鬢
　嬋娟たりし——も膚にかしけて　卒一七二六
涼風暮れ行く空に　紅三〇八八
良藥口に苦く忠言耳に逆ふ　楠九一五
梁王の園
・曉——に入らざれども　竹生一八八四
曉——に入れば雪群山に滿てり　雪三一八七
利益
　行道の——なさん　輪三三八〇
　貫き上人の——．　誓一五六四
　無緣の——をなす　知二三四一
利益諸衆生の御誓ひ　放生二四六二
利益無量罪　誓一五五七
龍　龍虎ツレ三三五九
龍惡いよいよ盛んなれば　江島四九九九
龍駕
　御乘物を——とも又名づけ　龍虎三三六七
龍舸
　天子の御舸を——と名づけ奉り　藤榮二一五八
龍顏
　天子の御顏を——と名づけ奉り　白一三四二
　天子の御顏を——と申し　龍虎三三六七
　二度——に逢ひ奉り　大原五五〇
龍顏に御涙を浮かめ　碇二五九
龍顏にさし上げ　草子一一九六
龍吟ずれば雲起り雨となり　和三〇三六
龍吟ずれば雲起り虎嘯けば風生ず　龍虎三三六七
龍花越（京都）　朝△二二六六
〔龍虎〕　三三五九
龍虎の紋　龍虎三三六七
龍虎の戰ひ　龍虎三三六五
龍池の柳の色は雨の中に深し　三井三〇〇一
龍燈
　天燈——神前に來現の時節　白鬚一四七〇
龍頭鷁首
　君の御座船を——と申す　白一三四二・藤榮二一五八
龍燈を捧げ松の枝に移し　九世△九二七
龍の吟ずる聲
　鼓は波の音笛は——．　白樂二四七八
龍門原上の土に屍をば曝すとも　七騎一三一〇
龍門原上の土にはなるとも　元クセ一〇八九
綾羅錦繡
　重荷を作つて上を——を以て　戀一一六二
旅行の道
　思はざる外の——　盛三〇九七
旅行の道の慰めに絃管の數を奏し　昭一五八一
旅雁
　聲も——の横たはる　熊野三三四八
　蘇武が——玉章をつけし　花筐二五八六
　蘇武は——に文をつけ　砧八三八
綠樹影沈んで魚木に上る氣色あり　竹生二〇三六
綠野
　風——に收まつて煙條直し　梅二六三〇
綠袍を死骸にはうむる舊恩　皇九九二
綠蘿の垣翠黛の山　大原五四一
旅宿の題をするゑ　忠度一九一九
旅宿の花といふ題にて　俊成一四四一
旅人
　踏み迷ひたる——．　一角二七七
旅人の夢
　風——を破る　咸七九四
　松寒うしては風——をも破る　一角二七八
呂馬童　項五九四
りよよう
　草花——として見えつる中に　半二四九九
呂律
　絲竹——の色々に　關寺一六一三
驪龍の蟠る所を知らざるなり　天二一三七
驪龍の蟠る所を知らず　咸七九九
理亂
　百王の——は心の中に懸けたり　誓三三四七
理王
　天仙——の來臨　西王一五七四
林葉の秋
　籬の荻花は——を渡む　峯三一三五
林間に酒を煖めて紅葉を燒く　紅三〇八六

臨幸の意趣を語り給ふ　千井一九七九
綸言出でてかへらねば　蟬一六七四
〔輪藏〕　三三七三
輪藏に納め結縁の手に觸れ　輪三三七六
臨時の節會を執り行ひ　國七九九
臨時の舞の妙なる姿を　賀茂物七五二
臨時の幣帛を捧げ　藍二四二
臨時の祭にはかざしの花を賜はる　水無月二九四五
林鐘半ばかの會式　九世九二〇
林梢に向つて夏雪をなし　三笑一二八六
輪塔
　左に火焰の——あり　老五二七
隣碪緩く急にして月西に流る　砧八三三
輪廻の苦
　生死に任せば——　放下二四四七
輪廻の心の出で來て　土車二〇七七
輪廻の業と目をふさぎ　水無瀨二九三二
輪廻の姿見え給ふ　檜二六三
輪廻の姿も歌舞をなす　佛二七九七
輪廻の波に漂ふ　天二一三八
輪廻の古里隔たりぬ　實一二五五
輪廻の迷ひ多し　元一〇八八
輪廻の道を去りやらで　善界一六〇一
輪廻は車の輪の如く　葵一五九
輪廻妄執の閻浮の名　實一二四九
輪廻を遁れ歸性の善所に至らざらん　山三一七一
輪廻を離れぬ妄執の　山三一八三
りんりん
　松蟲の聲——りんりんとして　松蟲二八六六

る

盧遮那佛を建立す　嘗二九三
流轉
　十二因縁の——は車の　江口四八三
　未來永々の——　楊三二三
流轉生死の習ひ　楊三三二
流轉に廻ること生々の親子皆以て　春榮一四一
流轉無窮にして　土車二〇七八
流人
　鬼界が島の——の中　俊寛二四二三
　資朝の卿は——の身となり　檀二〇〇六
瑠璃壇
　氷を敷きて——にたる　東二六六一
瑠璃の砂　國七九三
瑠璃の瓦を敷けるから門　千井一九七四
瑠璃の座
　七寶莊嚴の——の上に　脩三八四
瑠璃の樞
　五百重の錦や——　鶴一〇九八
累葉枝を連ね　賀一二五・知三三五一
縲紲の責を受くる　千一七〇三
累々たる古墳のほとり　藍二四二

れ

蠡
　嬰兒の――を以て巨海を測り　木曾八二一
靈巖寺の僧玄弉三藏　代△一四八六
靈鬼
　山姥が――　山三一七三
靈鬼泣く泣く前生の業を恨む　山三一七七
靈香四方に薫ず　羽二四八七
靈驗殊勝の御事なれば　檜二六一四
靈驗の神所　佐一二七二
靈驗の山　鸚一七
靈魂
　橘姬の――　草薙八八六
靈像
　衆生濟度の爲に――を勸請し　九世九二五
醴酒
　藥の水なれば――にて　俊寛一四二六
醴酒を酌みてもてなし給へ　松蟲二八五六
嶺松巍々として風常樂の夢を破る　山三一八〇
伶人
　淺間といひし――　梅枝四三九
　富士と申す――　梅枝四四〇
伶人の舞なれば　富士太二七〇七
藜藋の草となる　鸚一六
藜藋深く閉せり　大原五四一・半二五〇三
靈夢
　あらたに――を蒙り　生二六六・道明一八二五
　ある夜の――に　老五三三
靈文
　天竺の――を唐士の詩賦とし　白樂一四七五
冷々
　第三第四の絃は――として　蟬二〇九〇
　瀧の水――として夜の月鮮かに　翁八
了簡
　何とも――なく　藤榮二一五三
了簡なく候か　鵜飼△三〇〇
料紙
　小硯――取り出だし　木曾八二一
聊爾
　何とて――なる事をば承り候ぞ　項五九二
　山伏達に――を申して　安宅一〇〇
聊爾なる御事　國二二六
聊爾なる事を申すもの　柏一〇一一
聊爾なる物語　海△一八四
聊爾にお側を拔けられぬ　安達△一一六
聊爾には下りまじ　自一三三八
聊爾にはなき事　元一〇八七
了達
　三世――の智慧を以て　松尾二八四七
療治によりて癒る事の　土蜘二〇五九
寮のお馬を給はる　小督二一〇〇
寥々とある折節に　合三八八・當一八四七
遼遠東南の雲を起し　安宅九九
酈縣山（支那）
酈縣山の麓より藥の水涌き出で　菊所八〇五・枕所二八一五
酈縣の山　菊八〇七
　南陽の――より藥の水流れ出づ　枕二八一六
獵師　善知三八四
獵師
　鹿を追ふ――は山を見ず　善知三九一
漁師の身にては舟を捜されたるも　國九〇二
連歌
　歌――の道も達者なり　柏六六〇
連枝の名のりして　玉井一九七八
蓮生
　熊谷の次郎直實出家し――と申す　敦一一五
蓮生法師　敦一一三
連錢葦毛鬼葦毛　鉢△三五六
蓮臺寺（靈岡）
　宇佐の――の麓に八幡宮と現れ　弓三三八
戀慕の涙舊里を思ふ魂を消す　楊三二〇

戀慕の涙に沈む　梅枝四四〇
戀慕の習ひ　錦木二三四五
戀慕の道の色に染む　錦木二三四七
連理
　地に在らば願はくは――の枝　楊三一二一
比翼――の語らひ　班二六〇六
比翼――の言の葉　楊三一二四
比翼――のその契り　祇八六五
連理も枝朽ちて忽ち色を變ず　楊三一二三

ろ

爐
　後夜の――には南嶺の柴を焚く　檜二六三三
ろう月
　窓東に向ふ――は琴榻にあたり　半二五〇三
朧月の薄曇り　百二六七三
朧月松閣の中に映じ　老五二七
籠者させ　籠三三八七
樓臺
　水に近き――はまづ月を得る　芭二五四一
〔籠太鼓〕　三三八五
籠中の鳥
　魂は――の開くを待ちて去るに同じ　歌三六四
籠鳥
　悲しきかなや身は――　鵜二三八一
籠鳥の雲を戀ひ歸雁列を亂るなる　敦一三五
籠鳥は雲を戀ひ歸雁は友を忍ぶ　櫻二〇一〇・檜二六二五
牢より籠の輿に乘せ　盛三一〇三
籠より拔けたると申すか　籠三三八七
艣櫂をふり上げ打たんとす　俊寛一四三三
艣櫂をもつてさんざんに打つ　自一三三五

鱸魚
　蓴菜の羹――とても　國八九九
六歌仙
　二聖――を始めとし　草二九七
六根
　六塵の境に迷ひ――の罪を作る　江口四八五
六根清淨
　内外清淨――　誓一五八
六字の名號
　上人の御手跡にて――になして　誓一五五八
六時不斷の御勸めの　當一二九七
六十に餘つて軍をせば　實一三五八
六十萬人決定往生の御札　誓一五五六・當一二九三
六十餘州
　遊行の利益を――に弘め　當一二九三
六十餘州に御經を納むる聖　忠田一九三三
六字名號一遍法　誓一五五五
六趣四生　葵一五九
六種の震動夥しや　第一七七四
六字を禮して　三笑一二八
六道
　五道――に廻る事　安達一一三
女院は――の有樣正に御覽じける　大原五四七
六義ありこれ――の巷に詠じ　俊成一四四三
六義ありこれ――の巷に定め置いて　蟻三三〇

六道の巷には迷はぬ所もなく　東岸二一七一
六道の辻とかや　熊野三三四八
六塵の境に迷ひ六根の罪を作る　江口四八五
六通三明の劒を提げ　鱗四五六
六條河原の院（京都）　融二三二一
六帖の歌　阿三一
六條御息所　葵シテ一五五・野宮シテ二四〇五
六條の御息所に通ひ給ふ　夕三二一四
六條の御息所の怨靈　葵一六一
六天（第六天參照）
　さしもに猛き——なれども　第一七七五
六度
　方便の殺生は菩薩の——に優れり　熊坂九三七
六度まで御落馬
　宮は——にて　賴三一〇
六波羅（京都）
　車大路や——の　熊野三三四七
六波羅の早打　烏△三四一八
六波羅の人やもし聞くらん　笛二五三五
六萬遍の念佛父河津殿に回向する　小袖一二三六
六彌太
　岡部の——忠澄　俊成一四三八・忠度一九一七
鹿野苑に迷はせ給ふ　竹雪一八八三
鹿野苑もここなれや　春日六七四
六欲

　五塵——の風は吹かねども　江口四八五
廬山（支那）　三笑所一三八一
廬山
　慧遠——のもとに居して　三笑一三八三
廬山の雨の夜草庵の中ぞ思はる　芭二五三四
廬山の古虎溪を去らぬ室の戸の　松蟲二八六四
廬山の虎溪　三笑一三八七
廬山のさかしき石橋を　三笑上歌一三八四
廬山の雪の曙　半二五〇三
廬山の慧遠禪師虎溪を去らぬ　木賊三二一三
路次
　この——に居所を立て　木賊三二一一
　そのまま——に捨てて　隅一五三七
路次にて追つくべき者　忠信一八九四
路次にて髮をはやして給はり候へ　元一〇八七
路次にて捨てられ　朝三六三
路次より逆例仕り　正一三六〇
呂水（支那）　天二一三一
呂水
　天鼓をば——の江に沈め　天二一三三
呂水の堤に御幸なつて　天二一四二
盧生　邯シテ七七五
路生
　片岡山の製を——に弘め給ふ　草子一一八三
盧生が見し榮華の夢は五十年　鉢二六五五

露地の白牛を打つて見せん　東九七一
路中に路多うして道窮まりなし　熊野三三四七
路頭山林の賤となつて　蝉一六八五
露命窮まつて霜葉に似たり　檜二六二五
呂律
　絲竹——の色々に　關寺一六一三
　絲竹——の聲々に　西王一五七四・天二一四二
呂律の調め琴の音に　國九〇五
論せず貴賤と親疎とを辨へぬ　鞍九五三

わ

王威を背く天罰にて　田二〇〇〇
横花半ば照らして夕陽收まる　芭△二五三八
黄金の甲冑
　龍王は——を帯し　角八四
黄金の膚
　砂を塔と重ねて——こまやかに　卒一七三〇
王子
　九十九所の——まで　修竜一四三四
皇子なれども庶人に下り　蝉一六八〇
往事渺茫としてすべて夢に似たり　善知二九〇
往事渺茫として何事も　松山鏡二八七八・船二七五六
黄鐘
　琵琶の御調子は——　絃一〇五三
往生
　榊葉のさして——を願ふべし　源氏一〇三八
王城の鬼門
　わが山は——を守り　策七一九
王城の鬼門を守り　東北二一九九
横障の雲の隔てか　善知上歌三九〇
往生の素懐を遂げ　田へ二三三・東北へ二二九六
王城の鎮守稲荷賀茂貴船　正一三六四
王城の鎮守として　代一四八三
王城より艮に當つて　策七一九
王城を守り御代を崇め　代一四八七
王城を守る神徳の　松尾二八四七
往昔の因ありて　楊三二二四
往事を思へば舊遊皆亡す　歌三六四
〔王昭君〕　昭巽稀一五七七
王昭君（昭君を見よ）　昭子方一五七七
王昭君の幽魂　昭一五八九
王地
　いづく——にあらざるや　田一九九八
　いつくか——ならねば　天二一三三
　山海萬物の出生即ち——の恩徳　氷二六八八
王地に住みながら君を惱ます　土蜘二〇六五
王地に住んで人を取り　大江五六九
王地を犯すその天罰は遁るまじ　羅三三五五
王土に住む習ひ貴命は誰も遁れぬ　仲三一八
王土に住めるこの身なれば　雷三三三八
王土の命重荷をかくる南の國　巻二八〇三
王難
　或遭——苦臨刑欲壽終　盛三一〇〇
王難の災に逢ふといふとも　春三一〇一
王仁　鍋三三三二
　百濟國の——　籠二三三四
王仁といつし相人　鼓二三三七
王伯　天二二一一
王伯王母とて夫婦の者　大江二二一
王法
　佛法——（その項を見よ）
　佛法の仇——の敵　木曾八二
王法を傾けんと化生して來り　殺六四〇
王法を尊む　金八七二
往復ならねば申すなり　熊坂九三四
王母　昭ツレ一五七七
王母
　富嵩山に住居なす——　東八一九
　白桃——と申す夫婦　昭一五七九
　王伯——とて夫婦の者　天二二一一
王母は斑龍にゆらりとうち乗り　東方二八六六
王母も伴ひ舞ひ上る　西王一五七六
王母を伴ひ重ねて參内申さん　東方一八一
王摩詰といへる畫かき　西へ三一五七
往來の僧　鵜飼三〇三
往來の僧を供養し給ふ　水無瀬二九三〇
往來の人　鵜飼三〇三
往來の巻物一巻取り出だし　安宅九二
往來の者に宿貸す事は禁制　御へ三一八〇

往来の利益こそ他を助くべき力　[illegible]
黄體
謹請中央黄體——　[illegible]一八〇三
横領
一族どもに——せられて　[illegible]二五九
藩祭殿に錦を——されし　[illegible]二五一
王威の恩徳
[illegible]も——のがれ致す　[illegible]二三三
和歌（ウタをも見よ）
蓬萊[illegible]の——を詠じ　[illegible]二八五六
神代も——を上げ舞を舞ひける　[illegible]四六六
四季の——を上げ　[illegible]三四六六
旅の船路の門出の——　[illegible]二七七六
巷に謡ふ聲までもこれ——の詠　志一三九八
[illegible]までも——を詠ずる　[illegible]二四七六
昔戀しき時の——賤や賤　二八二七二
若
[illegible]年の時の——　安宅一〇三
わが庵は都の辰巳しかぞ住む　[illegible]三〇一
わが庵は三輪の山もと戀しくは　三輪[illegible]九八〇
わが思ひ重きか上の小夜衣　[illegible]七七七
わが思ひ子は東路にありやなしや　[illegible]
わが思ふ人はありやなしやと　[illegible]一五三三
わが方の越の山風吹くたびに　[illegible]八六二
若木

[illegible]の山櫻——[illegible]　[illegible]三三一
若き命も[illegible]されず　[illegible]三一八
若木の櫻
須磨の——は海少しだにも　忠度一九一〇
[illegible]の——もまだ咲きかねる　[illegible]五二
須磨の海士人は若木にも——を折り　[illegible]
若木の櫻をも一見せばや　[illegible]
若木の風に[illegible]れたき　[illegible]
若木の花の白[illegible]　[illegible]
若木の花を[illegible]立てて　[illegible]
若木の[illegible]小松　[illegible]
若きを[illegible]立ててつれなく[illegible]る　[illegible]
若草
あらたまの春の心を——の　[illegible]三四四
武藏野は今日はな焼きそ——の　[illegible]
若草山（奈良）
緑も同じ——は　佐一二六八
若草邊に母を一人　大佛一七四五
わが子返させ給へや　藤戸二七四六
わが心[illegible]　[illegible]
わが子に[illegible]　[illegible]
わが子の[illegible]　[illegible]
わが戀は細谷川の丸木橋　[illegible]二九〇四
わが[illegible]又何[illegible]　[illegible]
わが子[illegible]　[illegible]

わが[illegible]来べき[illegible]　[illegible]
若駒
[illegible]の子——にも[illegible]　[illegible]
若竹
立つや——の親子の[illegible]　春榮一四一八
わが立つ杣
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
わが立つ杣と詠じ給ひし　安宅二〇
わが立つ杣に冥加あらせ給へ　[illegible]
わが立つ杣に[illegible]あらせてと　[illegible]
わが道ならば鳥もよし啼け　通小七七一
わかれ[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
「若菜」　[illegible]
若菜
今[illegible]——摘む　[illegible]
老が身も心——を摘へ　[illegible]八九七
春日野に——摘みつつ萬代を　[illegible]二二九
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
野澤の——今日摘まん　[illegible]二〇六四
[illegible]　[illegible]

若菜摘むいく里人の跡ならん　衣三〇六四
若菜摘む生田の小野の朝風に　東一藏三〇六三
わか名やよそに高雄山　[illegible]一六〇二
わが名を何と夕映の　雲林上歌四六四
和歌の家に生まれ　忠度一九一六
和歌の浦に潮滿ち來ればかたをなみの　[illegible]二四
和歌の浦わに跡を垂れ給ひ　草子一一八九
和歌の浦わの藻鹽草　草子次第一二九四・志一二九六
和歌の御値遇　俊成一四三九
和歌の心を道として　蟻下第二一五
和歌のことわざは神代よりも始まり　蟻三三〇
和歌の聲
　巷にうたふ──　[illegible]八六四
　悅びの──　[illegible]八六二
和歌の德
　高位に交はるといふ事唯──とかや　[illegible]二一
　神佛を顯すも──　卷二八一〇
和歌の友
　後世に知らるる者はただ──　東北二一九九
　心を述ぶる──　雨三三七
　何かは──ならん　草子一一九六
和歌の人稀なる處に　雨三三七
和歌の道
　鬼も神も納受する──　放生二四六七
和歌の道こそめでたけれ　草子一一九八
和歌の道區々にして　志一二九七
和歌の道たらば神も許し　[illegible]二一
和歌の道に交はる　[illegible]二一五
和歌の六義　[illegible]三
和歌吹上（和歌山）　[illegible]三
わがまた知らぬ東雲の　[illegible]二一五
わが身ぞもとの身も知らじ　小[illegible]一四六五
若水
　老の姿も──と見る　[illegible]二三六
若綠
　老木も──　春榮一四一八
　千代の影添ふ──かな　春榮一四一八
わが身にあたらぬ歌人さへ　草子一一九一
わが身一つはもとの身にして　雲林四六七・杜六二七
若宮別當の申しにより　春榮一四一五
若武者
　なまめきたる──の　知二三四七
若紫
　春日野の──のすり衣　小鹽三六七
若紫の雲の迎へ　源氏一〇三八
若紫の名にし負ふ　佐一二七七
若紫の菜や摘みし　求三〇六七
わが本山を立ち出でて　安達上歌一〇八
若者
　いかに──ども　烏三四三三
わが宿の梅の立枝や見えつらん　江口四七九
わが宿の菊の白露今日毎に　[illegible]七八五
わが宿は雪賣る市にあらねども　[illegible]四六九六
わが邪をなさざれば　[illegible]二二
和歌よりもよろしきはなし　[illegible]二
別れ留まるものならば　[illegible]
別れの鐘
　常の契りには──と頼みしに　[illegible]三〇六
別れの曲には柳條を縮ぬ　[illegible]二二五
別れの聲
　逢坂の木綿附鳥か──　[illegible]三〇
別れの鳥
　他かぬ──はものかは　[illegible]三二
　綱路にはあらねども──とたり　[illegible]二九七五
別れの鳥の聲鐘も聞ゆる東雲に　[illegible]一四
別れよりまさりて惜しき命かた　[illegible]二七五
別れを恨みては鳥も心を動かさり　[illegible]一四〇
和歌をあげて袂をかへし　獻八六七
和歌を守りて住の江や　[illegible]三三七
和漢の才
　經論聖教──　[illegible]一六三九
脇輿に參り　[illegible]二三三
わきになして　大江[illegible]九六六
脇の廊
　中門の──　大江五五九

我妹子
　床冴えぬれば――が　合六八四
吾妹子が寢ぐたれ髮を猿澤の　采四〇三・采上歌四〇三
枠桛輪　安達二一一
或遭王難苦臨刑欲壽終　盛三一〇〇
わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に　忠度一九〇八
わくらはに問ふ人あらば侘ぶと　松風二八三一
和光　紘一〇四九
　神力も佛說も同じ――の影　道明一八三一
　本覺の――に交じる塵の世を　御二九六七
和光守護神の扶桑の御國　淡一五三
和光垂跡
　出雲と御一體――の御事　源太一〇六六
和光同塵
　神は本覺眞如の都を出でて――の　逆一二一三
和光同塵結緣の姿ありがたの　賀七四三
和光同塵結緣の姿を現し　現一〇二三
和光同塵の忌垣の內には　松尾二八四三
和光同塵の御垂跡　源太一〇六八
和光同塵の本願は結緣の始め　第一七七一
和光同塵は結緣の御始め　住一五四一・松尾ク七二八四六
和光同塵は結緣の始め　蟻二二三・代△一四八六
　　龍田一九二七
和光に餘る影ならん　內三七三
和光の影
　塵に交はる――は　賀茂物七五一
　汀の千鳥鳴く田鶴も――　鵜四五四
和光の影に現れ　葛七〇〇
和光の影に業平の花に映じて　小鹽三四六四
和光の影の色添へて　龍田一九二七
和光の影はいやましに　代一四八〇
和光の影はよも暗からじ　蟻二一七
和光の影廣く　誓一五六三
和光の影も曇りなき　右三四九
和光の神德　鵜祭四二三
和光の垂跡葦提希夫人の姿を現し　室三〇二四
和光の塵も濁江の　女三四九三
和光の光あらたなり　春日六七〇
和光の光玉津島　鸚二四
和光利物の御姿　嵐二一一
和光利物は御裳濯川の　綸三四五一
別雷神　賀シテ七三一
わけ切り　熊坂九四一
分け行く露も深見草　大原次第五四〇
輪越えさせ給へ　水無月二九四〇
和國の風俗　白樂二四七七
和國の物語　龍虎三三六七
わごせ
　この鏡を――に取らすなり　松山鏡二八七三
わごりよ言はしめ　通小町七九七
和琴
　篳篥笙の笛――　土車二〇七六
　琵琶琴――笙篳篥　吉天三三九五
　琵琶琴――笛竹の　道明一八三五
禍
　萬里の――を拂ふ　江島四九七
鷲のお山（靈鷲山をも見よ）
　上見ぬ――とやらんを　三井二九九五
　上見ぬ――の名を殘す　熊野三三五一
鷲のお山の雲や霞も　草紙一六〇二
鷲の高嶺とも三笠の山を　采四〇一
鷲の御山　舍一三九〇
鷲の御山とも春日のお山を拜む　春日六七四
鷲の御山の花の色　西行一一七八
鷲の御山も餘所ならず　現一〇一三
鷲の御山をうつすなる　大會上歌一七八〇
鷲の御山を象れり　舍七一九
鷲の山いかに澄みける月なれば　現ワカ一〇二
鷲尾
　片岡增尾――さては忠信は　吉野靜三八六
鷲尾十郎　攝ツレ一六四七
鷲の尾の寺（京都）
　上見ぬ――　田一九九一
和上﨟　鵜九九四

和修吉龍王　春日六七七
忘るる隙もあらましものを　鉢六六〇・鵜二六〇九
忘るる隙もありなん　松風二八三五
忘れ形見
　別れての後の——　尊知三八六
忘れ形見に姫を一人持ち　松山鏡二八七一
忘れ形見の撫子の　生二七〇
忘れ形見の綠子　櫻一三二二
忘れ形見のみどり子に生きて離れ　百二六七五
忘れ形見までおなつかしや　花筐二五九〇
忘れ形見もよしなしと　松風二八三五
忘れ草
　悲しさも——の　尊知三九一
　戀——も住吉の岸に生ふ　梅枝四四五
　忍ぶ草も亂るる——も亂るる　草子一一九五
　昔忍ぶの——　胡一一四二
忘れ草生ふとただに聞くものならば　住一五四六
忘れ忍ぶの軒の草　三山二九一八
忘れて年を經しものを　梅枝四四一・開寺一六一六　融二三三三・松蟲二八六四・三山二九二三
忘れぬよりは思ひなれ　天二一三四
忘れは草の名にあれど　藍染第二二六
忘れは草の名に聞きて　大佛次第一七四五
忘れ水
　老をも——の　養三一三三

　さながら夏を——の　富一八四七
　花の下に歸らん事を——の　櫻一三三六
忘れめや葵を草に引き結び　賀茂物七五一
忘れめや山路をわけて淸見潟　羽三四八七
忘れんと思ふ心こそ忘れぬよりは　綾一九[illegible]　天二一三四・藤戸二七四八
和僧に於ては　正一三六二
わだかみ摑んで　昌一六六一・夜三七六
私
　君子に——の言葉なし　蝉一五八六
私にあらず　千一七〇四
私に思ひ寄りけるか　弓二三六
私に名づけたる異名　熊五一〇
私の意趣を以て身を捨つる事なかれ　内三七七
私の家
　言書に——にてと書かれ　定二一〇六
私の功名にあらず　小鍛一一三一
私の心更になし　吉野三三八五
私の力にあらず　小鍛一一三一
私を以て春榮を助け　春榮一四一一
渡舟
　山田矢橋の——にてもなき　白一二三
　山田矢橋の——の通ふ人たく　三井二九九七
渡舟にてもなし　竹生二〇三五
渡守　項羽言五八七・隅田川一五一七

渡守
　隅田川の——　隅一五一九
　矢橋の浦の——　[illegible]
渡瀬　飛鳥六九
渡せる橋に置く霜の白きを見れば　張二〇四九
わたづみ
　世界——隔てなくて　和三〇三一
わたづみの挿頭に挿せる白玉の　淡一五一
わたづみのそこともいさや　合一帯六八三
わたづみのそことも知らぬ波間　大[illegible]一七六〇
わたづみの深き心はあるものを　正一三六八
わたづみの宮
　龍宮——　玉井一九七七
わたづみの都と知れば水もたく　玉井一九七四
わたづみの宮主伴ひて　玉井一九八〇
渡邊神崎より押し渡らんと　二人一七一九
渡邊にて景時が申しし　八島三一六〇
渡邊にて梶原が逆櫓の意見　正一三五八
渡邊福島を出でし時は　敦[illegible]一七八〇
渡邊や大江の岸に寄る波も　住一五四〇
渡邊や流るる水に滿潮の　[illegible]四五
輪田の笠松(兵庫)　吉野三三八五
綿の轡　尊知三九〇
　身には縄口には——をはめ　白一一一五

和田の小太郎義盛　七騎一三一八
和田の左衞門　調二一二三
渡らばそれも中や絶えたん　龍田一九二六
渡らば錦中絶えんと　紅三〇八一
渡らば錦中や絶えなん　龍田一九二四
度會何某　歌シテ三五三
渡會の何某
二見の太夫――　歌三六一
度會の宮(三重)　第一七六九
渡川
泣く涙雨と降らなん――　船橋二七六三
渡に船を得たり　碇二五三
渡りの船
闇夜の燈火―待ち得たる心地　高野六〇四
渡りの舟とも申さばこそ　自一三三三
わづかなる人界　春榮一四一四
鰐
五丈の　に乘せ來り　玉井一九八四
鰐口
堂宮に掛けてある――がなる　山△三一七五
鰐の口
悪魚――逃れ難しや　海一八〇
輪のうちにありとこそ見れ　車九六五
わびしき業を柴取りて　龍虎三三六三
わびぬれば身を浮草の根を絶えて　閻寺一六一六
わび人の習ひほど　安達一〇九
わび人の隙も波間に　竹生二〇三四
童隨身　仲子方一五三七
童隨身
內裏より賜はれる――　住一五四二
蕨
爪木――を折り供御に供へ　大原五三九
藁屋
逢坂山の關の戸ざしの　の　蟬一六七八
蟬丸は逢坂や――にて琵琶を　絃一〇五一
月にも疎く雨をだに聞かぬ――　蟬一六八六
宮も――もはてしなければ　蟬一六八二
藁屋の床に藁の蓆敷く物とても　蟬一六八五
藁屋の床の古　烏上歌三四一七
わらんべ(童)
あれなる――どもは何を笑ふぞ　蟬一六八〇
これなる――どもは何を笑ふぞ　柏六五六
わりなき思ひの玉章を贈る　求三〇六八
悪の念佛の拍子や　百二六七一
わるびれたる氣色もなし　鉢二五六八
われ落ちにきと人に語るな　女三四九一
われかと行きていざとむらはん　松蟲二八六〇
われかの氣色もあさましや　浮三二三
われから
海士の刈る藻に棲む蟲の――と　同三七
われからと藻にすむ蟲の音に泣きこて　賀古三七四一
われから濡らす袂かな　錦木三三四五
われだに憂しと思ふ身を　海一七二
われに憂かりし賓客を鏖殺すべし　狭六三五
われに等しき人しなければ　雷霆三三七
われにも友のあるべきに　小鍛三四六六
われは人間にあらずとて　卯一三七
われ人の僞つらければ必ず身にも　竹生三〇六八
われ人を失へばかれ又われを害す　翁上歌一六一
われ一人醒めもせで　春榮一四一三
われ見ても久しくなりぬ住吉の　松蟲一八六五
住一五四三
高砂一八七一
われも憂き世のさがの身ぞ　小督一一〇一
破帽額
秋の山草桔梗刈萱――　大江五六四
われも火宅を出でにけるかた　東北二一九八
われもそのかみは　楊クセ三一二四
われもその幣に淚ぞかかりにき　賀茂物クセ七四
われも千年を經る心地する　伎宮一四一七
われも一人
花も一木――と見るものを　西行一一七二
われも又いざ言問はん都鳥　隅上歌一五二五
われも行き人も行く阿倍野の原は　松蟲二八五四
われ世の中にあらん限りは　藍二四四

われらも千秋さむらはう　田一九九三・船辨二七七八　會六
われを知れ釋迦牟尼佛　春日ヶセ六七四
われをば待たじ客言や　通小七七一
琵琶
　金銀——に瓊を供へ　玉井一九八二
わんりきの秋の光朝に増し　鐘一四五三

ゐ

猪
　馴れて臥す——の床の上　砧八三一
爲一切世間說此難信之法　當一八五三
威儀未練
　内恩外忠の——なり　雷三三四一
井桁を切るなるは簡井の釣瓶縄　金八七二
威光を顯し衣の　右三五〇
井堰
　花は大井河——に雪やかかる　西行一一七八
遺蹟を開いて腸を斷つ　舍一三九〇
韋提希夫人　寧[illegible]三〇一九
　和光の垂跡——の姿を現し　寧三〇二四
韋駄天　舍ツレ一三八三
韋駄天と申すは毘沙門の弟にて　舍△一三九[illegible]
韋駄天取り返し　舍一三八七
〔井筒〕　三三九九
井筒によりてうなゐ子の　井三四〇六
井出の里(京都)
　宇治の中宿——。　榮二九九七・三山二九一三

井手の里玉水は名のみして　[illegible]一六七八
井手の下紐束かけし　[illegible]
井手の蔭へ忍ご入り　[illegible]一六九一
猪名の笹原分け過ぎて　[illegible]一五四[illegible]
猪名の小篠を分け過ぎて　[illegible]一九三六・[illegible]三一四九
井上(長野)
　桐の花咲く——の　[illegible]六九八
井上黒とて開竜の名馬　[illegible]
猪の早太唯一人召し具し　[illegible]三三八五
違變
　その儀——なく候處に　[illegible]
居るも居られぬ
　立つも立たれず——。　[illegible]一四四六
違例
　以ての外に——し　[illegible]一五一七
　路次より——仕り　正一三六〇
違例する者をば谷行とて　谷一九四七
院主のいはるゝは　鞍△九五六

ゑ

會下　放下二四三七
回向は草木國土まで漏らさじ　熊坂九三五
回向發願
　至誠心深心——の鐘の聲　葉一五五六
廻向發願心　實一二五七
衞護
　これを——し給ふ　江島四九五
會座
　佛の——に出來して　春日六七八
繪像木像の形もなく　熊坂九三五
衞士
　御垣守——の焚く火はおためなり　鉢二五五八
會式
　林鐘半ばかの——．　七世九二〇
繪島(兵庫)
　淡路——須磨明石　弱三三三六
　淡路潟——が磯はななめにて　岩二九一
　淡路の——國なれや　草子一一八七
　うつす——の島隠れ　知三三四八
　名には——といひながら　絃一〇四八
會者定離
　逎れ得ぬ——ぞと聞く時は　場三一二四
　會者定離の習ひもとよりも　野宮二四一二
廻心
　懺悔の——　寶一三四九
慧心僧都　草薙ワキ八七九・仲ワキ二三〇七
慧心の僧都
　比叡山——　仲二三一八
　比叡山に住む——　草薙八八〇
慧心の僧都の御法を說きし　賴三三〇二
越後の國府に着きしかば　柏上歌六五七
越前の三位通盛　通盛二九〇六
會場
　靈山——の法の場　西王一五七一
越鳥南枝に巣をかけ　蟻三一・知二三四三
越を辭せし范蠡が扁舟に棹を移す　白樂二四七三
越天樂　梅枝四四六
越天樂の唱歌の聲　絃一〇五五
繪に描ける遊女の姿にめでて　錦三四四八
繪にかける形なれば物言はず　松山鏡二八七四
慧日
　衆罪如霜露——の光に消え　身二九五三
　衆罪如霜露——の日に照らし　善知三八八九
　眞如の——まとかなり　大會一七八〇
　法の——の光を賴むなり　雪三一八七
慧日の光かと思へば　現一〇一四
慧の矢
　愛染明王は定の弓——にて　寢三三九九
醉泣も子を思ふ涙と　木賊三三一五
醉に引かるる戯れの舞　住一五四六
醉に臥したる枕の夢の　賀一三五三
醉ひにも侵されず　菊八一三
醉を勸めばいとどなほ眠りも來る　望三〇五九
烏帽子　白一三一九
烏帽子
　髮を切り——を着　烏三四一八
　古りたる——引きかづき　百三六七三
　宮人の——を暫し假に着て　道成一七九四
　われ等も——をうち着つつ　水無月一九四五
烏帽子狩衣裳裾の上に掛け　三輪三九八四
烏帽子狩衣を着しつつ　遊三三〇一
烏帽子櫻の花咲かん　烏[illegible]四二一
烏帽子櫻の花を見ん　[illegible]一〇九二
烏帽子の候召され候へ　[illegible]三七七六
烏帽子は何番に折り候べき　[illegible]四一九
烏帽子直垂　廣五八・内六六〇・鵜[illegible]七七八
烏帽子も柳さびたる有様　[illegible]三〇
烏帽子屋亭主　烏[illegible]四二[illegible]
〔烏帽子折〕
烏帽子折　[illegible]四三

祝言申し――　烏三四二一
〔繪馬〕　三四四一
繪馬　曾三四四三
　よみぢの黒の――を掛け　繪三四四六
笑の眉
　白き花のおのれひとり――を開け　牛二四九九
　開くる花の――　藤二七三〇
　夕顔の――　夕三二一九
衛門
　三條の――　熊坂九四一
慧遠　三笑シテ一三八一
慧遠
　晉の――廬山のもとに居して　三笑一三八三
慧遠禪師
　廬山の――虎溪を去らぬ　木賊三三一三
鴛鴦(ヲシドリをも見よ)
　鳧雁――に翅をならべ　初二五七八
　鴛鴦の衾の下には立ち去る思ひを　砧八二八
　弱三三一八
　鴛鴦の衾の下に眼をば慈悲の涙に　東岸二一七三
圓覺
　皆令佛道――の　高野六一一三
圓月
　坐禪――の窓の内　當一八四七
　本覺眞如の――に坐せり　當一八五三
猿猴が月
　蜻蛉が斧とかや――に相同じ　[illegible]早一六〇〇
　猿猴の名を以てわが名をよそに　草子一一九〇
遠國(ヲンゴクを見よ)
　遠寺の鐘の聲も聞えず　[illegible]二一六
　遠寺の鐘も幽かに響き　傳二七九七
圓成の道
　箇々――すぐに　東岸二一七〇
遠村に煙滿ち　鐘一四五〇
圓鎮　田△一九九五
宛轉たりし雙蛾も遠山の色を失ふ　卒一七二六
婉轉たる黛は消え失せ　藏二四二
怨別の聲
　衣擣つ砧の上に――　吳九八七
ゐんまん十里の外　嵐二〇三・岩二八七
轅門
　たとひ――は高くとも　咸七九四
圓融の法も妄りなき　[illegible]七二一

を

緒合はせ
　玉琴の――に合はせて　千七二
烏江(ウゴウを見よ)
岡崎(義實)　七騎一三二一
小笠の内へ見參申さでは叶ふまじ　藤榮二一六〇
小笠原
　鞍皮は――　[illegible]
緒方の三郎心變りせし程に　大原五四九
をかたま
　神籬の――の木の枝に　弓三三九
岡部の宿(同)
　心――とかや　賀茂物七五五
岡部の六彌太忠澄　俊成一四三八・忠度一九一七・通盛一九〇八
拜みうち
　向ふ者をば――　箙五一九
荻の葉そよぐ古里の　屋下二四四九
荻の葉のそよとの便りも聞かで　班二六〇八
荻の穂かくる露の玉　[illegible]五九〇
荻の燒原の跡までも　[illegible]三六二
荻原まづそよぎ

秋來る風の音づれは庭の！——　芭二五四一
小倉(京都)
嵯峨——大井嵐の　車九七二
松の尾——の里の夕霞　百二六七八
小倉の峯の雪　車九六五
小倉の山陰に殘る夜櫻の　西行一一七九
小倉山(京都)　嵐二一〇
小倉山しぐるる頃の朝な朝な　松尾二八四五
小車
因果の廻る——の　藤戸二七四一
小車の轅も續く都路の　住一聲一五四〇
小車のやる方もなし　野宮二四一七
補
月こそ——にあれ　松風二八二九
三瀨河に熱鐵の——を擔ひ　檜二六三三
尾越の矢に當つて死なれたを　夜△三三七〇
尾越の矢にあたりて　[illegible]二三二四
小笹の上の玉霰　昭一五八三
小篠の竹の音も八撥も　藤榮二二六一
小笹の竹の篠を擦り　自一三四四
小笹原
起風茂き　芭二五四二
長田はいひかひなくて主君をば討ち　朝二三七一
治まり靡く時たれや　[illegible]三一〇九
治まる風ものどかなる　右三四九

治まる國の始めもや　淡次第一四一
治まる花の都とて　羅次第三三四七
治まる都の花盛り　右三五〇
治まる御代の習ひとて　泰一七三五・養三一三九
治まるや國富み民も豐かにて　養道行三一二七
治まる折を江の島や　江島次第四九〇
治まれる國の始め　大蛇三五〇五
治まれる御代の光に數ならぬ　東方一聲二一七九
治まれる御代の惠み　内一聲三七三
をさむる手には壽福を抱き　高砂一八七二
をさむる手には壽福を招き　道明一八三七
治めざるに平らかなり　雑二三三二
治めしままに世を守る　綸次第三四四三
治めぬ國もおのづから靡き從ふ　岩二九〇
牡鹿
神も敎への——鳴く春日の里に　大佛一七四六
紅葉聲乾いて——鳴く　項五九〇
啼くや——の津の國の　千一七〇九
一夜臥す——の角の束の間も　熊坂九三九
牡鹿鳴くこの山里と詠めける　小督一一〇一
牡鹿鳴く野の行方まで　木賊二三〇六
牡鹿の角の塚の草蔭より　求三〇七一・女三四九八
牡鹿の角の束の間も　一角二八〇・錦木待宵二三五二
牡鹿と鳴く音は聞きながら　芭二五四二
牡鹿伏すなる春日山　國上歌八九四

鴛鴦の番去りにしあはれさよ　求二〇六九
鴛鴦の鐵鳥となつて　求三〇七四
鴛鴦の友なき水に浮き沈み　仲ツカ二三三
鴛鴦を殺し科　[illegible]三九二
小稻
天の——の天が下　御二九六五
敎へうれしき法の門　[illegible]次第一八四一
敎へ嬉しき法の道　[illegible]三二〇四
敎への鎚　小鍛一一三
敎への外なる法までも　[illegible]二七三
敎へのままになす業の　[illegible]一三五〇
敎への道も秋津國　[illegible]田次第一九一二
敎への道も一聲の　[illegible]次第一五五一
〔小鹽〕　三四五五
小鹽の神代の古跡　小鹽三四六四
小鹽の山(京都)
大原や——の小松が原より　小鹽三四六〇
大原や——も今日こそは　融三三三九・小鹽三四六〇
小島が崎　[illegible]
苧環に針をつけ裳裾にこれをとめ　[illegible]二九八六
小田守も秋過ぎぬ　[illegible]
遠方人
うち渡す——に問ふとても　半二五〇五
うち渡す——にもの申す　賴三三〇四
遠近のたづきも知らぬ山中に　田一九九四　[illegible]二六四七・[illegible]二〇九・[illegible]一一八〇

遠近の主となる　實七三九
遠近人に面を晒すも　百二六七五
遠近人の神寂く　錦二五四八
遠近人の見やは咎めぬ　[illegible]六二六
遠の里(京都)　[illegible]三三〇〇
をちの夕煙
　河より――立つ河風に　浮[illegible]一七
夫の寄れば靡き退き　女三五〇〇
夫の別れ籠者の思ひ　籠三三九二
夫は錦木を運べば女は内に　錦木クセ三三五六
夫遠行の子細あり　松山鏡二八七九
夫を想ひて戀ふる名の想夫戀　小督一〇二
男うつろふ花心　三山二九一七
男塚女塚について女郎花の謂れも　女三四九五
男になし
　箱王を――　元一〇七八
男舞　盛六一・木曾八二三・橋九一七・元一〇九二・小督一二〇八・小袖一二三八・七騎一三三三・春榮一四一八・藤榮二一五七・仲二三三三・盛三一〇九
男神子　歌三五五
男山(京都)　放生所二四五三・弓所三三三一・女所三四八七
男山
　現に逢ふや――　富士太二七〇一
　榮ゆくや――にし松立てる　放生二四六二
　貫之も――の昔を思つて　女三五〇〇
　久方の月の桂の――　放生二四六六・弓三三二五
　南に――　善界一六〇六
　御代も榮ゆく――　弓三三三三
男山榮ゆく道のありがたさよ　女三四九三
男山にし立てりと思へば　女三四九二
男山に誓ひを示し給ひ　巴三三七八
男山に參らん　夕三三一〇
男山の昔を思ひ出でて　蘆六〇
男山の女郎花は古歌にも詠まれ　女三四九三
男山鳩の杖にすがりて　放生二四六二
男山麓の野邊に來て見れば　女三四八九
男女の媒にはこの錦木を作り　錦木三三四八
少女子がかざしと思へば榊葉の　野宮△二四一五
少女子がその唐玉の琴の絲　國九〇五
少女子が裳裾をはへて袖かざし　龍田一九二八
〔處女塚〕　求塚二〇五九
少女の姿暫しただに留めかねたる　[illegible]一七三六
少女の姿暫し留まりて　羽二四九二
少女の姿留まる春の　吉天三三九六
少女の姿とどめ得ぬ　定三二一〇
少女の卷に太政大臣　須一四九七
踊念佛　實△一二五三
小野(京都)　浮所三一一三
小野
　所の名さへ――なれば　浮三三二三
　わらは[illegible]住家は――の者　[illegible]
小野とはいはじ薄生ひけり　[illegible]
小野の[illegible]　[illegible]
小野の小町　[illegible]
小野の大尼　[illegible]
小野の良實が女に小野の小町　[illegible]二五
小野の良實が女小野の小町　卒一七一五
小野の賴風
　八幡山に――と申し人　[illegible]四九五
尾上
　嶺も――も花にて候　[illegible]九一
尾上の風の音までも　現上歌一〇一三
尾上の鐘
　高砂の――曉かけて　三井三〇〇一
　高砂の――の音すなり　高砂一八六六
尾上の鐘おほほろおほろと聞き馴れ　[illegible]三三九六
尾上の鐘のよそにのみ　玉葛一九六三
尾上の鐘も響くなり　高砂一八六三
尾上の花に吹き添へて　繪三四四八
尾上の松
　所は高砂の――も年ふりて　高砂一八六一
尾上の松の梢まで神風誘ふ　大社五七六
〔姨捨〕　三四七一
姨捨の在所　[illegible]三四七五
姨捨山(長野)　[illegible]三四七一

姨捨山に照る月を見て　姨三四七五
尾花
　草衣――が袖の露分け　佛二七九四
　穗に出でぬれば――ともいへる　［illegible］五一
　招く――のほのかに見えし　松蟲二八六六
尾花がもとの思ひ草の　錦木二三五三
尾花招かば留まれかし　通小七六八
〔小原御幸〕　大原御幸五三五
小舟
　霞の――こがれ來て　八島三一四七
苧生の浦梨
　櫻鯛の――　通小七六五
をほどり歩みにゆらりゆらりと　烏三四三七
小忌衣　龍田一九三四
小忌衣
　大宮人の――櫻をかざす朝より　［illegible］四〇八
　葛葛のはひまとはる――　葛七〇一
　光も散るなり――　松尾二八五三
　舞姫の――　［illegible］三二一六
小忌衣頃しも今は　八島三一五四
小忌衣の袖白妙の　代一四八〇
小忌衣の袂に添へて　氷二六六六
小忌衣の手風神風に吹き戻され　白樂二四八一
〔女郎花〕　三四八七
女郎花
　名にめでて折れるばかりぞ――　女三四九一
　何をかくねる――　小督一一〇一
　なまめきたてる――　［illegible］八六四・女三四九二
　花は主ある――　女三四九二
女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる　女三四九二
女郎花うしろめたくや思ふらん　女三四九三
女郎花刈萱　芭三五四三
女郎花の今を盛りと　女三四八九
女郎花の多かる花にとりわきて　女三四九〇
女郎花の一時をくねる　［illegible］六〇・女三五〇〇
小忌の衣
　五節の舞――の羽袖を返し　吉天三三九三
小忌の衣の色はへて　志一三〇四
小忌の衣の袖を連ね　放生二四六五
小忌の袖
　立ちこそつづけ――　百二六七八
　とりどりの――返す返すも　大社五八四
小忌の人達
　年の端の大嘗に從ふ――　［illegible］四三
小山田の苗代水は絶えずとも　［illegible］一九七
小山の判官
　右巴は――　調二一二三
折らで手向けよ
　菅原の神木にも――と　女三四九［illegible］
折りかけ垣
　山里の――の梅をだに　鉢二五五八
折句　鸚二［illegible］
折しも秋なかば　雨上［illegible］
折知る春のかざしとかや　西王一五七〇
折過ぎじ
　夕顔の――とおた人の　夕三二一四
折妻戸を小簾に取つて　［illegible］九四四
折りてこそそれかとも見め　半蔀一五〇五
折りとらば手ぶさに穢る立てながら　女三四九一
折を得て春の暮にさす花の　［illegible］
折々の日前　［illegible］六九
折る柳落つる梅　［illegible］七三三
〔大蛇〕　三五一［illegible］
大蛇の爲に失はんずの　大蛇三五一六
尾を履む峯の竹には虎や住むらん　竹生一八八五
溫顏舞曲花めきて　傳一七九二
遠國に獨りありとても行末の　［illegible］一七七
園城寺の住僧　三井一九九［illegible］
怨敵の難を遁れ　代一四八八
怨敵の來なば出家の身をも許されば　［illegible］三三六［illegible］
怨敵破戒を亡ぼして　［illegible］四五一
女車
　向ひに立てる――の　［illegible］
女車寄せては歸る　［illegible］一八一八
女車を詠みし歌　右三四四

女心のはかなさは　女三四九九
女姿と三輪の神　三輪上歌二九八四
女姿に立烏帽子　[illegible]八六四
女塚
　男塚——について女郎花の謂れ　女三四九五
女の歌
　強からぬは　なれば　関寺一六一九
女の歌は稀なるに　関寺一六一五
女の杜若になりし謂れ　杜六二四
女の夫を戀ふる想夫戀の　梅枝四四七
女は足手纏ひぢや　大江八五六六
女は内に細布の機織る　錦木三三五六
女は思ひ深し　梅枝四四〇
女ばからひ　元一〇八一
女は五障の罪深きに　葛六九六・夕三三一七
女武者
　巴といひし——　巴三三八三
女物狂　櫻一三三九・隅一五三一
怨念がつき添ひ　卒一七三〇
怨霊
　六條御息所の——　葵一六一
遠流の身となれば　俊寛一四二四
遠々
　過去——の間　善界一六〇一
　過去——の昔を思へば　楊三一三三

謠曲大觀總目錄及略符號

謠曲語句總覽假名遣一覽表

謠曲大觀總目錄

（曲名の左に括弧のあるものは括弧内の曲を見よ。ゴチック活字はその曲の略符號）

首卷

能樂畫譜
能舞臺全景　能面　能裝束　能小道具　能作物　狂言面　狂言裝束　能樂器　現行謠本　古謠本

能樂總說
能樂の生成　能樂の源流　新役散樂　猿樂藝の展開　猿樂の歌舞的發達　猿樂の戲曲的展開　猿樂座と田樂　大和申樂四座　能樂の大成　時代の風尚　觀阿彌の集成　世阿彌の大成

第一卷　一頁—七三一頁

○翁
あ　鸚鵡小町　阿漕　蘆刈　飛鳥川　安宅　安達原　敦盛　淡路　葵上　海士　綾鼓　嵐山　蟻通　藍染川
い　碇潜　生田敦盛　一角仙人　岩船
う　鵜飼　浮舟

第二卷　七三二頁—一四二〇頁

か　賀茂　賀茂物狂　通小町　邯鄲　咸陽宮
き　鬼界島（俊寛）　菊慈童　木曾　碪　清經　祇王　金札
く　草薙　國栖　楠露　九世戸　熊坂　鞍馬天狗　車僧　呉服　黒塚（安達原）　皇帝

第三卷　一四二一頁—二一三二頁

し　俊寛　俊成忠度　鐘馗　白鬚　代主　神歌（翁）
す　須磨源氏　墨染櫻　隅田川　住吉詣　誓願寺　西王母
せ　昭君　善界　關寺小町　關原與市　殺生石　攝待　蟬丸　禪師曾我　千手
そ　卒都婆小町　泰山府君
た　大佛供養

第四卷　二一三三頁—二八二〇頁

て　天鼓
と　藤　東岸居士　東方朔　東北　木賊　融　知章　朝長　巴　鳥追舟　仲光　難波
な　奈良詣（大佛供養）
に　錦木　錦戸
ぬ　鵺
ね　寢覺
の　野宮　野守
は　放下僧　放生川

第五卷　二八二一頁—三五一四頁

ま　松風　松尾　松蟲　松山鏡　松山天狗　滿仲（仲光）
み　通盛　三山　水無瀬　水無月祓　身延　御裳濯　三輪　三井寺　六浦
む　室君
め　和布刈
も　望月　求塚　紅葉狩　盛久

別卷

闌曲曲舞集
雜說　阿古屋松　飛鳥川　淡路　近江八景　隱岐院　笠取　香椎　[illegible]　賀茂物狂　起請文　信山寺　俱利伽羅落　願書　勸進帳　現在經政　五輪碎　西國下　實方　更科　四季　島廻　上宮太子　卒都婆流

音阿彌の守成
その後の申樂
元曲との關係

能樂の詞章

謠曲の題材
謠曲の出典
謠曲の脚色
謠曲の構造
謠曲の章節
謠曲の修辭
謠曲の作者

能樂の演出

能樂の種類
能舞臺
演奏者
能面
能裝束
能作物・能小道具
能樂の演奏

能樂の價値

複式夢幻能の意義
能樂の藝術美
謠曲の思想
狂言との對比
謠曲の影響
謠本・參考書
術語略解
現行曲一覽表

謠曲細說

謠曲文構成要素の研究
謠曲引歌考

雨月　右近　歌占　内外詣　善知鳥　采女　鵜祭　梅　梅枝　鱗形

え　雲林院　江口　江島　箙

お　老松　大原御幸　大江山　大社

か　項羽　高野物狂　杜若　景清　柏崎　春日龍神　合浦　葛城　鐵輪　兼平

花月

け　月宮殿（鶴龜）　現在七面　源氏供養　絃上　源太夫　元服曾我

こ　小督　小鍛冶　小袖曾我　胡蝶　戀重荷

さ　西行櫻　草子洗小町　逆矛　鷺　櫻川　實盛　佐保山　三笑

し　志賀　七騎落　自然居士　猩々　正尊　石橋　舎利　春榮

大瓶猩々　第六天　大會　道成寺　唐船　道明寺　當麻　高砂　竹雪　忠信　忠度　龍田　谷行　玉葛　玉井　田村　壇風

ち　竹生島　張良

つ　土蜘蛛　土車　綱（羅生門）　經政　妻戸（雷電）　鶴龜

て　定家　調伏曾我

白樂天　羽衣　半蔀　橋辨慶　附笛之卷　芭蕉　鉢木　初雪　花筐　班女

ひ　飛雲　檜垣　雲雀山　氷室　百萬

ふ　笛之卷（[illegible]）　富士山　富士太鼓　二人靜　藤　藤戸　船橋　船辨慶

ほ　佛原

ま　卷絹　枕慈童（觀世以外菊慈童）

や　楊貴妃　養老　八島　山姥　雪

ゆ　遊行柳　夕顔　弓八幡　熊野

よ　夜討曾我　吉野靜　吉野天人　頼政　弱法師

ら　雷電　羅生門

り　龍虎　輪藏

ろ　籠太鼓

ゐ　井筒

ゑ　烏帽子折　繪馬

を　小鹽　姨捨　女郎花　大蛇

謠曲語句總覽

當願暮當　玉島　玉取　土車　鼓の瀧　妻戸　鶴龜　徒然　定家一字題　東國下　內府　西濱八景　博多物狂　初瀬六代　花信　反魂香　美人揚　母衣　松浦物狂　弓矢立合　由良物狂　横山　和園

假名遣一覽表

（名曲名句總覽所收の字音や、和語で、發音と假名遣と距りがあつて、檢索に不便な文字を拔き出した、表中、片假名は正しい假名遣を示す）

い

ヰ（猪、爲、威、井、遺、
韋、違、居、畏、位、圍）
ヰき（域）
ヰん（院、員）
あヰ（藍）
あヒ（相）
いちヒ（櫟）
うぐヒす（鶯）
うヒ（初）
おヒ（笈）
くヒな（水鷄）
くらヰ（位）
くれなヰ（紅）
こヒ（戀、鯉）
さかヒ（境）
しヒ（椎）
すヰ（水、醉、垂、翠、衰、
睡、雖、悴）
ずヰ（蘂、瑞、隨、髓）
たヒら（平）
よヒ（宵）
るヰ（累、類、淚）

ヲけ（桶）
ヲく（屋）
ヲさ（長）
ヲさむ（治）
ヲしへ（敎）
ヲち（遠）
ヲつと（夫）
ヲとこ（男）
ヲとめ（少女、處女）
ヲどり（躍、踊）
ヲば（姨）
ヲみなめし（女郎花）
ヲる（折）
ヲろち（大蛇）
ヲん（園、遠、怨、穩）
ヲんな（女）
あヲ（靑）
あフヒ（葵）
うヲ（魚）
おホ（大）
かホ（顏）
しホ（汐、潮、鹽）
とヲ（十）

キフ（急、及）

きよう、ぎよう

キヤウ（經、狂、向、兄、
境、京、卿、鄕）
ぎヤウ（行）
ケウ（敎、叫、僑、孝）
ゲウ（僥、曉、堯）
ケフ（脇、怯、今日）

こう、ごう

カウ（香、孝、項、行、向、
幸、郊、耕、高、好、降、
鮫、耿、講、更、頭、衡、
爻、交）
ガウ（拷、剛、强）
カフ（甲）
ガフ（合）
クワウ（光、黄、皇、荒、
廣、曠）
こフ（劫）
ごフ（業）
カウべ（頭）

じ

ヂ（持、治、路、道）

蕭、少、憔、肖、鈔、焦、
照、蕉）
ヂヤウ（定、場）
デウ（蓧、條）

ず

ヅ（頭、厨、豆）
あヅさ（梓）
あヅま（東）
いヅみ（泉）
うヅら（鶉）
かヅら（葛、鬘）
しヅ（賤）
しヅか（靜）
しヅく（雫）
はヅかし（恥）
みヅ（水、瑞）

そう、ぞう

サウ（草、霜、雙、相、嘈、
莊、蒼、窓、滄、想、早、
藻、燥）
ザウ（藏、造、像）
ザフ（雜）

ちゆう

バウ（望、亡、傍、茫、坊、
茅、紡）
ハフ（法）
ハハキ（帚、箒）

みよう

ミヤウ（明、名、冥、[illegible]、
命）
メウ（妙）

もう

マウ（盲、妄、猛、孟、[illegible]、
網、亡）

ゆう

イウ（悠、遊、猶、[illegible]、郵、
優、誘）
ゆフ（夕、木綿）

よう

エウ（瑤、遙、要）
エフ（葉）
ヤウ（陽、樣、揚、楊、煬、
横、羊、養、瓔）

りゆう

リウ（龍、柳、隆、流、劉）
リフ（立）

ゆヰ(唯、遺)

え

ヱ(會、囘、衞、繪、慧、
烏、壞、穢)
ヱち(越)
ヱひ(醉)
ヱん(鴛、圓、猿、遠、宛、
婉、怨、轅、園、苑)
いへ(家)
うへ(筌、上)
かなへ(鼎)
かへで(楓)
こずヱ(梢)
こヱ(聲)
すヱ(末、季)
たへ(妙)
つヱ(杖)
ともヱ(巴)
にへ(贄)
ゆヱ(故)

お

ヲ(緒、小、尾、牡、苧)
ヲか(岡)
ヲがむ(拜)
ヲぎ(荻)

なホ(直)
にホ(鳰)
にホふ(匂)

おう

アウ(奧、鶯、鸚、央、鴦)
ワウ(王、横、黄、皇、往、
凰)
アフぎ(扇)
アフ(逢)

か、が

クワ(花、蝸、過、火、華、
貨、果、和、禍)
グワ(畫、臥)
クワい(會、廻、囘)
グワい(外)
クワん(管、冠、還、勸、
歡、看、官、觀、菅、緩、
關、桓、喚)
グワん(願、元)
クワつ(活)
グワつ(月)

きゆう、ぎゆう

きウ(舊、九、朽、宮、弓、
臼)
ぎウ(牛)

ヂキ(直)
あヂ(味)
うヂ(氏)
かヂ(楫、梶)
しヂ(榻)
ひヂ(肘、臂)
ふヂ(藤)
みヂか(短)

しゆう、じゆう

しウ(蹴、祝、秋、周、舟、
愁、臭、州、繡)
しフ(執)
じフ(十、汁)
ヂウ(住)
ヂゆう(重)

じよ

ヂよ(女、如、徐)
ヂよく(濁)

しよう、じよう

しヤウ(笙、生、正、上、
聖、鉦、相、湘、莊、猩、
清、昌、性、青、將、晶、
章、請、嶂)
じヤウ(淨、常、成、城、
情)
セウ(燒、小、樵、昭、笑、

チウ(中、忠)

ちよう

ちヤウ(長、聽、張、頂、
帳)
テウ(朝、鳥、釣、超、調)
テフ(蝶)

とう、どう

タウ(桃、陶、當、盜、刀、
唐、滔、蟷、濤)
ダウ(導、道、堂)
タフ(塔、任)

にゆう

にウ(柔)
にフ(入)

のう

ナウ(惱、瑙)
ナフ(納)

ひよう、びよう

ひヤウ(兵、拍)
びヤウ(病、平、屏)
ヘウ(瓢、標、漂)
ベウ(渺、廟)

ほう、ぼう

ハウ(放、判、寶、保、褒、
方、報、彭、芳、泡、抱、
褓)

りよう

りヤウ(兩、靈、令、良、
涼、量)
レウ(了、料、聊、療、寮、
遼)
レフ(獵、漁)

ろう

ラウ(朗、老、狼、郎)
ラフ(蝋、臘)

わ

あハ(粟、淡)
いつハり(僞)
いハ(岩、石)
いハホ(巖)
うちハ(團扇)
かハ(河、川)
かハヅ(蛙)
かハら(瓦)
かハらけ(土器)
かハり(代)
かハる(變)
きハ(際)
くハ(桑)
たハむれ(戲)
たハら(俵)
ときハ(常磐)

昭和六年十月一日印刷
昭和六年十月五日發行

謠曲大觀別卷奥附（非賣品）

著者　佐成謙太郎

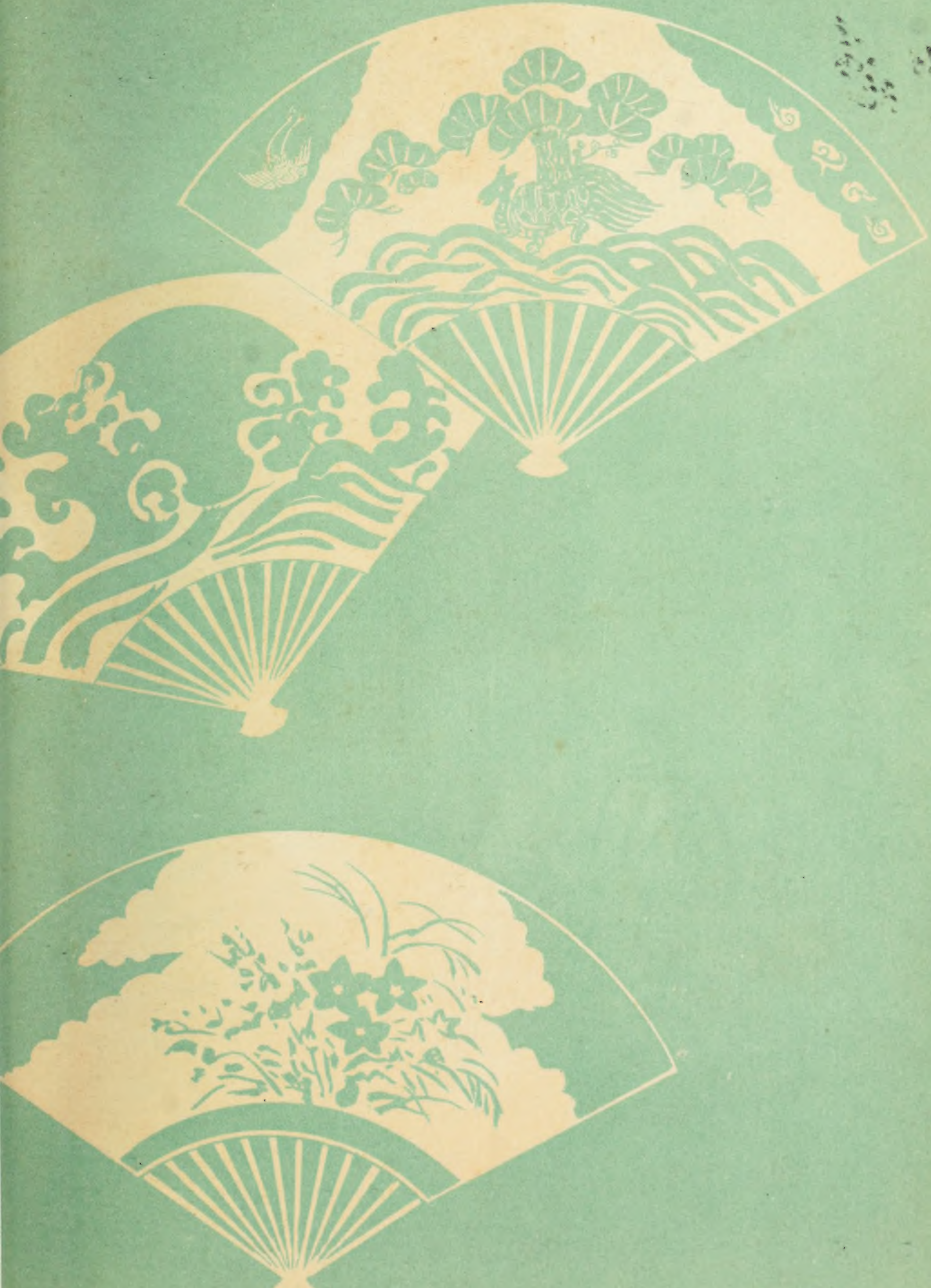
發行者　三樹退三
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者　守岡功
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ一

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ一

不許複製

發行所　東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
株式會社　明治書院
電話神田(25)　一四一四番　二六九五番　二六七八番



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 2404